現代日本文學全集



小栗風葉集
柳川春葉集
佐藤紅緑集

杉浦非水裝幀

改造社版



風葉（上右）春葉（上左）二家の遺影筆跡と佐藤氏の近影

「風葉・春葉・紅綠集」目次

小栗風葉集

柳川春葉集

佐藤紅綠集

小栗風葉集

序

小栗風葉氏は、硯友社の全盛時代に、作家として立ち、その名聲は、自然主義の末期にまで及んで維持せられた。わが國の文藝界に於いては、こんな事實は、珍らしい方だと思ふ。一時代に榮えれば、次ぎの時代まで殘ることは、困難である。時代の變遷が烈しく、讀書界の嗜好が偏るところから、作家の生命が短いのである。

殊に風葉氏は、年少にして名を成した作家である。硯友社の盟主たる尾崎紅葉の門に學び、有名な『龜甲鶴』や、『寢おしろい』や、『戀慕流し』などを書いたのは、作者の年齢としては、二十代である。二十代にして、既に巍然たる大家であり、當時の花形作家であつたのである。

硯友社時代の文學が沒落して、自然主義文學が勃興した當時、硯友社時代に於いて全盛を極めた大多數の作家は、時代の波に取り殘されてしまつたのであるが、小栗風葉氏は、依然として自然主義文學のチャムピオンであつた。『青春』『戀ざめ』『耽溺』など、この時代の作者の代表作である。

作家としての風葉氏は、その資質極めて敏感で、時代の潮流に對して、無關心であることが出來なかつた。外の流れに向つて心の窓を開き、能くそれを受け容れることに努めた。即ち、一事に固執せず、一物に停滯しないのである。時代の動向を敏感に感じて、時代と共に動いた。—そこに風葉氏が、比較的長く生命を維持することが出來た原因があると思ふ。

作風は、若しこれを前期と、中期と、後期とに分つことが出來れば、前期の作品は、豐麗濃艷な文章と、豐富な才藻とを以てすぐれてゐるし、中期の作品は、精彩に滿ちた描寫と、緻密な觀察とを以て勝つてゐると思ふ。後期の作品は、所謂、自然主義末期以後に現はれたもので、多くは新聞、若しくは婦人雜誌などに連載された長篇小説である。その特色は、構想の雄大、性格の多彩、筋の起伏波瀾の妙、それに加へるに描寫の精刻な點であると思ふ。即ち、現在の通俗小説の祖をなすと言つてもいい作品である。『人の罪』『思ひ妻』など、この時代の代表作とすべきであらうか。

『綠の路』は、晩年の作で、完成された形の作品としては、最後のものである。圓熟した文章や、取扱はれてゐる題材や、描かれてゐる人物の上に、風葉氏の晩年の心境——思想も、人生觀も、藝術的境地も、鮮やかに現はれてゐると思ふ。人として作家としての晩年の風葉氏を知るには、見遁すことの出來ない重要な位置を占めるべき作品である。

思ふに風葉氏は、早熟の人であつたのだらう。四十餘年で、その生涯を終つたにしては——そして、僅かに二十餘年の短い作家生活にしては、作風傾向から言つて、甚だ多方面の仕事を殘してゐる。普通の人々なら、三十年五十年かかつて、やうやく殘すことが出來るか、どうか分らないほどの仕事を殘してゐる。その量を言ふのではない、質に於いてである。とに角、比較的短い生涯に、多岐な道を歩いて、しかも、それを豐かな才能に依つて、作品として十分に生かしてゐるところに、風葉氏の非凡なところがあるのだと思ふ。

昭和六年七月

中村武羅夫

縁の路

有職婦人と無職婦人

宮廷歌人の藤原翁の社中の秋季大會が帝國ホテルで催された。會員にも來賓にも、名家の令孃だとか、貴族の若夫人だとかいつたやうな美しい人たちが多いので、ちよつと外では見られない華やかな集まりであつた。主翁の挨拶、それから思想家、評論家として、當時專ら若い人たちの間に人氣を博してゐる清藤宏造氏の、「婦人と文藝」といふおあつらへの短い講演。それから餘興と立食との間に、婦人記者の清藤欽子と、辻村といふ實業家の夫人の辻村ちえ子とは、そつと席をはづして會場を出た。

　ホテルの門を出る時、婦人記者の欽子は、ふと氣が付いてちえ子夫人に聞いた。

「あなた、お供がおありなんでせう？」

「いゝえ、いゝんです。」

「自動車？」

「宅の近所のですから、迎ひに來させたんですが、さつきもう歸るやうに申しましたの。」

「つまらないわね。」

　輕い毛織の洋服をしつくりと着こなした欽子は、縮緬物のコートの下から、澁い褄模様の覗いたちえ子の足もとを見やつた。あがきの惡いフェルト草履は、一歩ごとにぱた／＼砂埃を立てて、眞白な絹足袋の爪先からつすりと汚れてゐる。

「社へ寄つたら、俥を呼ばせませう。」と欽子が云つた。

「あなたは？」

「わたしは電車ですわ。」

「おや、わたしも……途中までご一しよに。」

ご迷惑でもと云ふやうに、ちえ子は羞かみ笑ひをした。

　欽子もたゞ微笑んで見せた。その裝で、人目の煩い電車に乘らうといふのも物好きだし、それにわざ／＼迎ひに來させた乘物を歸して、途中までゞも自分と一しよに行かうといふのも、何だか人見知りしたい子供が、誰の後でも追ふやうで可笑しかつたのである。しかし憎くはなかつた。二人とも女學校時代には同級生であつたが、しかしそれほど親しい級友でもなかつた。顏を見れば挨拶をするくらゐで、打僻けて話をし合つたことも殆どなかつた。それが何年ぶりかに、今日藤原翁の社中の大會で偶然逢つたのである。

　欽子は翁の社中でも何でもない、たゞ婦人雜誌の記者として招待されたのに過ぎなかつた。ちえ子の方はまた、古い社中ではあるが、久しく顏出しをしなかつた爲めに、すつかり勝手が違つてしまつて、これも社外の人と同樣に親しい話相手もなかつた。歡聲や笑語でまはりが噪ぎ立つてゐる中に、自分だけ笑ひたくも喋りたくも相手がないといふのは、いゝ加減氣のひけるものである。欽子は職業から慣れてもゐるが、ちえ子はさうは行かなかつた。何だか除け者にでもされてゐるやうで、隅つこの方に肩身狹くぽつねんとしてゐると、ちやうど其處に自分と同じやうな一人ぼつちの欽子を見付けたのであつた。同窓とはいつても、お互ひにちよつと逢つては氣付かないくらゐ變つてゐたが、場合が場合だけに、ちえ子の方から學校時代よりも却つて親しげに聲をかけたのであつた。

　學校時代にはちえ子は純下町風の娘で、欽

子のやうな地方出の女學生は、田舍者あつかひにして輕蔑してゐるやうな風であつた。本人はさうでなかつたかも知れない。けれど、洒れた服装をして、氣の利いた口を利いて、こつちとは一段高く澄ましてゐるやうに相手の田舍者には見えた。それが昔とはまるきり反對に、向うから人懐つこくされて、欽子もその變り方にちよつと驚かされてゐた。

ちえ子は昔のまゝ、欽子の元の苗字を呼んだ。欽子は現在の姓の、清藤欽子といふ名刺を出すと、それに婦人雑誌の記者と肩書の刷つてあるのを見て、ちえ子は目を圓くして云つた。

「まあ、さうですか、あの雑誌ならわたしも愛讀してゐますわ。さう云へば、あなたのお書きになつたものも始終拜見してゐるのよ。ご苗字が變つてゐるものだから、ちつとも氣付かずにゐましたわ。」

その雑誌社ならば、ホテルからつい七八町先きのビルヂング内にあることをちえ子も知つてゐた。欽子が社へ寄るといふので、自分も雑誌の編輯部といふものが一度見たいと云つて、一しよについて來たのである。不斷なら迷惑かも知れないが、今日はちやうど日曜日で、編輯は休みであるから、欽子も云ふまゝに連れ立つた。

雑誌社はビルヂングの三階にあつた。

「あなたは雑誌の記事から想像して、編輯室といふと、何か大變文化的のやうに想像していらつしやるか知れないが」とにかく、ご覧なさいと欽子は編輯室のドアを開けて中を見せた。

いつもならば、大勢男女の記者がごたごた入り交つて、こゝには性の別もなければ、階級の差もない、自由な、そして外の分業的、機械的な退屈な事務とは違つて、多少とも皆な自分自分が創造の滿足を以て、頭腦的勞作に、全部が全部さうでもないけれど、いそしんでゐる愉快な光景が、東京の古い町家に生れたちえ子には、少くとも新奇の感激を與へたかも知れない。けれど、今日は誰も出勤してゐなかつた。窓々はすつかりカーテンがおろされて、薄暗い編輯室の中は机も椅子もきちんと片付いてゐた。しかし、ブックケースの横にピンか何かで留め忘れられた、見覺えのある雑誌の繪表紙の見本刷一枚見ても、床の隅につい落ち殘つてゐる校正刷の、赤インキでべたべた直つた料へらを見ても、月々のあの豐富な知識と趣味との源泉を初めて覗いたやうな氣がして、ちえ子の胸を躍らせるのに十分であつた。

次の間の事務室はまた、日曜に關係なしに大勢社の者などであつた。ちやうど雑誌が出來上つて、[illegible]ゐた。[illegible]分けたり[illegible]行李に[illegible]誌の[illegible]部屋一杯に積まれた[illegible]ちえ子は珍らしくそちらも覗いて見た。新しい紙とインキの匂ひがぷんと鼻へ來る。それさへちえ子には、さも何だか文化的の匂ひでもあるやうな氣がした。

欽子は雑誌の山を廻つて、そこの明るい窓際に近い、綺麗に櫛目を入れた頭にちらちら白いものゝ見える肥つた紳士のそばに行つて、業務翁の大會の景況を話してゐるらしかつた。男のバスの聲は、まはりの騒々しい人聲や物音に紛れて、何を云つてゐるのかちえ子には聞えないが、切れ切れに耳に這入つて來る欽子の言葉づかひで、それが社長とか主幹とかいふ人だらうと察した。ちえ子が熱心に覗いてゐるのも氣が付かないらしく、欽子と一しよに靜かにこちらへ歩いて來ながら、

「活版部でもついでに案内して上げたらいゝでせう、ちやうどモノタイプもやつてゐるから……ぢや、今のお話の、初めのそのご腹案の方

ですね、それを一つ梗概に書いて頂きたいものですな。何なら口述をあなたが筆記して下すつてもいゝ。すればお二人の署名を並べるですね。」としまひは笑ひ聲で云つた。
「あら、まつぴらですわ。」と欽子も笑つた。
ちえ子は慌ててドアの蔭へ體を引込めた。主幹は初めて氣が付いてこちらを見ると、輕く目禮した。ちえ子は赧くなつて會釋をした。
欽子の案内で最後に活版部を見てから、エレベーターで一階へ降りると、ちえ子はほつとしながら云つた。
「事務の方でも活版の方でも、やつぱり女の方が大勢見えますわね。婦人の雑誌社なので、それでですか？」
「家の社には限りませんわ。このビルヂング内にも、何百人といふ有職婦人が居るさうですから」
「まあ、ねえ。やつぱり時代ですわね。」とちえ子は感心したやうに頷いた。
二人はビルヂングを出ると、省線の電車に乗る爲めに、直き目と鼻の間の東京驛へ行つた。
欽子は細い打紐をつけた小型の時計を出して、驛の時計と合せると、
「わたし、待ち合せる人がありますの、十五分か二十分‥‥お氣の毒ですわね。」と云つた。
「いゝえ、かまひませんことよ。」
「飛んだお付合ひをおさせしまして。」と欽子は癖のある微笑を見せて、「ぢや、中へ這入つて待ちませう。」
欽子は大久保までの回數券を持つてゐたが、なぜか別に一枚乗車券を買つて、ついでにちえ子のも買つてやつた。ちえ子は市ケ谷までであつた。
二人は中央省線のプラットホームの待合所へ這入つて、欽子の待ち合す人を待つた。その間にも電車は幾臺も着いては發した。洋行歸りの云ひ草ではないが、煩い天候の一年ぢう、わづかに惠まれた日本の秋晴れの日曜日だけに、來る電車も、出る電車も皆滿員であつた。
今ごろはちやうど關西ならば茸狩といふところを、武藏野の平野では芋でも掘るより仕方がない。五六人の若い男裝し、女連れが、掘りたての土のついた薩摩芋の籠を、てんでに重さうに提げて電車から降りた。そしてどや／＼と待合室へ這入つて來て休んだ。
「今日のやうな會も結構ですが、こんな日には、どこか郊外へでも出かけたら宜しいでせうねえ。」とちえ子は小さい聲で欽子に云つた。
「さうねえ。あゝいふ會でも、ホテルなぞへ持ち出さずに、郊外でピクニックのやうにしたら面白いでせう。それではあんまり平民的かしら？」と欽子は片方の口尻だけで笑つて、「あなたも、ぢやこれからまた、藤原さんの例會へご出席なさるの？」
「さうも思ひましたけれど、今日の樣子ですと、まるでお顔馴染みもありませんし、どうしませうかしら？　もう和歌のお稽古つて年でもありませんから。」
「何も年とは關係ないでせう。わたしたちの仲間でも歌の會をやつてますのよ。藤原さんたちのご意見は知りませんけれど、わたしたちはたゞ、自分の感情を率直に表現すればいゝといふ主義で、初めつから稽古も何もありやしません。みんな素人の横好きの集まりで、極めて自由なの。もつとも素人とは云つても、職業的歌人でないといふだけで、會員の中には萬葉學者もありますし、女の詩人もあります。さうかと思ふと、畫家だの、禪宗の坊さんだの‥‥」
「まあ、面白いお集まりですわね。外に女の方は？」
「わたしのやうな有職婦人が一人、醫學博士の未亡人、政治家の奥さん‥‥だありましたけ

れど、皆がみんな揃ふことはめつたにありませんの。でも、會員は二十人餘りあるのよ。」

「どこでお集まりになるの？」

「きまりませんわ。大抵順ぐりに會員の宅で。」

「ぢや、お宅でも？」

「宅なぞは暢氣な家庭ですから、毎々會場に指定されるのよ。」

「お樂しみですわねえ。わたしも寄せて頂けませんでせうか？」とちえ子はつい云つた。

「えゝ……今度ご通知しますから、まあ様子を見にいらつしやい。藤原さんのご社中なぞとは違つて、そりやデモクラチックな集まりよ。あなたご覽になつたら驚くわ。」

やつと欽子の待ち合す人が來た。脊の高い痩せた體に、質素な間服を着て、源氏紐でからげた小さな紙包みを小脇に抱へた。丸善のマークを刷つたその包紙の小口から、書物の天金がちらちら覗いてゐる。ちえ子は見たやうな紳士だと思つた。

欽子は簡單にちえ子を紹介した。それは欽子の夫の宏造であつた。そしてそれは今日の大會で講演をしたその人であつた。

「わたしとしたら、何てぼんやりだらう。欽子さんも人が惡いわ。」とちえ子はさう思ひながら、夫婦から少し離れた。

「欽子、今日の講演はどうだつたね？」と宏造は人事の様に聞いた。

「さうね……お話とは大ぶ違ひましたのね。」

「どう？」

「昨晩伺つたとは、何だか通俗ではありませんか？」

「わざとあゝしたんだよ。」

「なぜ？」

「會場の色彩を見ると、腹案どほり喋つちやまづいと思つてね。もう少し文藝的の會合かと思つたら……要するにありや家元藤原翁のお浚ひだね。喜いちやん、美いちやんが、何子孃、何々夫人となつただけで……」

「まあ、お差合ひがあるわ。」と欽子は笑つてこちらを見た。「ねえ、ちえ子さん。」

「あゝ、さう。」と宏造はちよつと振向いただけで、てれ隱しに直ぐポケットから新聞を出して見た。

「いゝえ。」とちえ子も愛想笑ひをしたが、相手の目はもう自分の方にはなかつた。「ひと！ 輕蔑してるんだわ。」と心で思つた。

「さあ、來ましたわ、乘りませう。」と欽子が云つた。

電車はやつぱり込んだ。宏造は女二人を腰掛けさせて、自分は立つてゐた。買物の包みとステッキとを欽子の膝に預けて、片手は吊皮にとまりながら、片手で難儀さうに、さつきの新聞をそのまゝ拾ひ讀みしてゐる。人込みに揉まれて、新聞紙はべつにがさ／＼云つた。欽子はそれには一向無頓着で、窓の外にばかり目をやつてゐたが、ちえ子は氣になつてならなかつた。何もこんな中で讀まなくてもとさう思ひながら、神經質らしい上目使ひをしてぢつと見てゐた。男の鼻の穴が眞ともに見えた。長い鼻毛の端が穴の外まで覗いてゐる。

「欽子さんも、もう少し氣の利いたご亭主がなかつたのかしら？」とちえ子はそんな事まで思つた。

「ちえ子さん、わたしたち水道橋で失禮してよ。」と欽子が突然云つた。

「あら、大久保までいらつしやるんぢやない？」

「今日は子供にせがまれましてね、あれから市内電車で小石川の植物園まで……子供が水道橋まで出かけて來て、待つてますから。」

欽子はさう云つて、窓の横棒の間からハンケチを振つた。見ると、もうそこの停車場の向ふ

側のプラットホームで、ちやうど幼稚園へ行くぐらゐの、石竹色のスェーターを着た可愛らしい女の子が、一生懸命に帽子を振つてゐる。後ろに附き添つた洋服姿の家鴨のやうな娘も、笑ひながらハンケチを振つてゐる。電車は留つた。

清藤夫妻はそこで降りた。

後に取殘されたちえ子は、今日會場で一人除け者のやうになつてゐた時よりも、一そう心が沈んだ。それでも切符どほり市ケ谷まで行つて降りた。

ちえ子の家は、市ケ谷もずつと奥の河田町の方であつた。女の足で歩いて歸るには少し遠い。それにこの好い天氣の下に、親子連れで植物園へ遊びに行つた人たちの事を思ふと、これから一人で家へ歸るのも寂しかつた。ちえ子はふと思ひ立つて、停車場前の俥に乘ると、青山の墓地へやらせた

辻村家の墓地には、まだ新しい白木の墓標が立つてゐた。それはこの秋の初め、疫痢で急死したちえ子夫婦の一粒種で、今年五つの男の子のであつた。ついこなひだ忌明けに參詣したばかりで、その時に供へた花もまだすがれずにゐたが、ちえ子は墓地の入口で求めて來た見事な菊の花と插しかへた。そして土饅頭に生えた苔のやうな細かい草の芽を、丹念に一つ〳〵指で拔いた。濕つぽい土の匂ひがひや〳〵と顔へ觸れた。邊りはひつそりとして徒らに明るい。

「坊や、坊や、お前はなぜ死んだのよ！　よそのお子さんたちは、みんなあんなに丈夫なのに。」とちえ子は小聲で掻口說いた。「お前もお辨當持つて幼稚園へ行くんだつて、よく云ひ〳〵したわねえ　その時はおかあさんも一しよに附いて く筈だつたのに……それだのに、お前は……どこへ一人で行つちまつたの？」

二月前には、寢た間もしつかり自分の腕の中にゐた子が、今はもう自分と同じこの世界のどこにも居ないのだと思ふと、ちえ子は自分も一しよに消えてしまひたいほど儚かつた。せめて亡骸を埋めた處へ行つて見たら、幾らか心ゆかしにもなるかと、いつもさう思つては墓參に來るのであるが、さて來て見ると、新しい悲みを誘はれるばかりであつた。この冷たい土の下に、その亡骸すらも淺ましく分解しつゝある事がまざ〳〵と考へられて、却つて情無かつた。

しかしちえ子は、强ひてもさうは考へたくなかつた。まだしもその暗い穴の底に、あのまま冷たく横はつてゐるやうに思つてゐたかつた。

「坊や、寂しいだらうねえ。」ちえ子は俥が待たせてある事に氣が付いて、そろ〳〵立上りながら、「おかあさんはもう歸りますよ。」と生きてゐる者に云ふやうに云つた。

そして墓標の雨ににじんだ面を、自分の涙に濡れたハンケチで、どういふつもりともなくそつと拭つた。

夜の家庭

辻村は深川の古い材木問屋であつた。大正十二年の天災に舊宅が全滅してから、跡へは事務所と倉庫だけ建てて、住宅は山の手の市ケ谷に移してしまつた。ちえ子は家附きの一人娘で、老母だけは今でも達者に生存してゐる　當主の健作は婿養子で、亡くなつた先代が子飼ひから見込んで、札幌の大學までやらせた農學士である。深川の方には店員たちを寢泊りさせて、健作は市ケ谷の本宅から毎日事務所へ通つた。

どこをどう道草をくつてゐたのか、ちえ子が夕方青山から歸つたのは、健作がいつもの時間に事務所を退けて來たのと、一あし違ひであつた。ちえ子もやつと着物を着更へたばかりのと

ところを、健作は茶の間へ坐るか坐らないのに、腹がへつた、飯にしてくれと、氣忙しなく催促した。

　ちえ子と血續きの薫といふ娘が、自分で稽古に拵へた西洋菓子を持つて來た。

「小父さま、これでも上つてて頂戴。お手製ですから、そのつもりでね。」

　健作は一つ摘んで口へ入れると、

「なるほどお手製らしいな。飯はどうしたんだい？」とにこりともせずに云つた。

「あら、それで一とき凌いでて下さるのよ。今日は俊次さんがいらつしやる日だから、ご一しよに晩餐を上げますからつて、小母さまは今、兼やとご馳走のお支度さいちうよ。」

「俊次なんか、いつ來るか當てになるものか。」と云つたが、健作はむくりと立上つた。「ぢや風呂へ這入らう。あいてるだらう？」

「お風呂はまだ？　わたし、直ぐご飯だつて仰しやるから、事務所の方で這入つていらしつた事とばかり思つたわ。可笑しな小父さまね。」

　健作はふゝんと云つたきり、さつさと湯殿の方へ行つた。

　それと殆ど入り違ひに、今の噂の俊次は來た。健作の弟で、今年帝大の法科を出たばかりの青年である。默つて茶の間へ這入つて來て、黒のソフト帽をそこへはふり出した。次の間へリウナン木の大机を出して、クロースをかけたり、座蒲團を並べたりしてゐた薫は、その音で振返つた。

「いらつしやい。」と娘の顏はぱつと輝いて笑つた。

「早かつたかね？」

「いゝえ、ちやうど可いのよ。今小父さまがお風呂へ這入つていらつしやるから、あなたも直ぐ後でお這入りになるといゝわ。」

　俊次は頷いて長火鉢のそばへ坐ると、卷煙草を出してぷかり〳〵吹かした。

「今日は本當に好いお天氣だつたわね。何處へもいらつしやらなかつた？」

「相變らず馬鹿勉強さ。厭になつてしまふね。薫さんは？」

「わたしも今日はお留守番よ。小母さまがお出かけだつたものだから。」

「またお墓參りかね。」

「いゝえ、今日は藤原さんのご社中の會よ。」

「あのお歌所の？」俊次はちよつと意外さうに、「姉さんが？　珍らしいな。」

「帝國ホテルよ。わたしもお供したかつたわ。」

「歌の會なんて君にはつまらないだらう。ダンスの會でもなくつちや、飛び跳ねるわけに行かないから。」

「よくつてよ、わたしはおてんばだから。」

「それがいゝんだよ、若い女性は。僕は男でも女でも若い歌人は大嫌ひさ。そりや歌にもよりけりだが、藤原一派のやうなあんなアーチフィシアルな、そしてセンチメンタルな歌なんか……もしあれが本當にあの人たちの僞らない生活だとしたら、ます〳〵僕は取らない。しかし、姉さんが出かけるといふ事はいゝね、青山以外なら、どこでも氣晴らしになつて。」

「わたしも、さう思つてよ。……あ、小父さまおあがりなすつたわ、さあどうぞ。」と薫は手近にあつたタオルを次の間から持つて來た。

　湯殿の硝子戸の開け閉てする音が聞えた。

　俊次は卷煙草の吸殻を火鉢の灰へ突插すと、何か獨りでにや〳〵笑ひながら立つた。

「薫さん、僕が藤原さんの社中をけなしたのはね、實はね、あの楠本がやつぱりあそこの社中なんだからだよ。」

「あら。」

　薫は持つてゐたタオルでぶつ眞似をした。

　俊次は默つてその手を握つて、處女らしいむつ

おりした手の甲へ強く接吻すると、落ちたタオルを拾つてついと廊下へ出て行つた。楠本といふのは、薫へ結婚を申込んだ戀の競爭者である。

八疊の明るい電燈の下に、眞白なクロースのかゝつた茶ぶ臺代りの大机を挾んで、湯あがりの健作と俊次とは差向ひに坐つた。健作は自分の商賣の、樺太や沿海州の木材の話をしてゐる。ちえ子は茶の間の長火鉢の銅壺で、酒の燗を見ながら硝子越しに二人を眺めた。そして今さら事ではないが、同じ背から生れた兄弟でも、どこに兄弟らしい似たところがあるだらうと不思議がつた。健作は中肉中背で、がつしりと[illegible]體と、血色の好い[illegible]明るい顏の持主である。そのくせ、どつちかといふと無愛想な方であつた。俊次は體も痩せて、色つや[illegible]、[illegible]氣むつかしさうな顏をしてゐるが、案外人に對すると快活によく喋つた。これから氣質となると、もつと相違してゐた。たゞ似てゐるのは二人の酒癖だけである。

二人とも酒には大して嗜好はなかつた。けれど、一寸飲むのは樂しいといふので、いつも日曜日の晩餐に限つて用ゐられた。ちえ子の母の女隱居も一つ二つは飲める口で、一しよに坐つてゐた。酌は薫がしてゐた。

健作は空腹だといふので、飲むそばから飯を食べた。

「まるでお燒石に水だわね。」と薫は給仕をしながら笑つた。

「お燒石だつて、お酒とご飯とちやんぽんぢやないわ。」とちえ子は茶の間から云つた。「あなた、それぢやあなたばかり何も彼も濟んでしまつて、後の人がつまらないわ。」

「お前たちはゆつくりやれば可いぢやないか。」

「だつて、男の相手がなくなつて、俊次さんが淋しいわ。」

「俊次だつていつまで飲んでゐるものか。」

「どうもさう云はれちや、僕も早く切り上げなきやならないな。」と俊次は笑つた。

健作にいはれて自分の盃をあけて俊次にやつた。そして自分で銚子を取つて不器用に酌をすると、ついでに女隱居の盃へもなみ〳〵と注いだ。健作が盃をさしたのも始めてである。酌をしたのは仍さらである。

「あれ、わしはもうおつもりだがの。ご飯を頂いてるのに、勿體ない。」と老母は眉をつぶして云つた。

俊次も薫も思はず吹き出した。

隱居が飯を濟まして先きへ立つと、代つてちえ子が坐つた。女中がちえ子と薫との膳を運んで來た。可なり大きな机の上も、酒の道具はあるし、[illegible]四人前と並ぶと狹くなつたが、直き健作の膳が[illegible]ので、女中[illegible]た。

腹はくちいし、酒氣はあるし、健作はもう坐つてゐるのも堪へられなくなつて、ころりとそこへ横になつた。八疊の間は机と人とで可なり窮屈で、體を十分には踏み伸ばせなかつた。といつて、外へ移るには面倒な、大儀であつた。一つや二つぶたれても動きたくなかつた。いつもの癖で、微醉の後できうして轉寢をするのか、健作に取つては何にも更へられない好い氣持であつた。

「お休み。」とちえ子は箸を取上げながら、夫の寢姿を[illegible]に見やつて、「あれで、[illegible]寢るころに目が覺めるんだから、[illegible]だわね。」と呟いた

そして健作の顏を[illegible]。

「今日は姉さん、藤原さんの會へいらしつたさうですね。」と俊次が[illegible]いた。

「ええ、[illegible]に行つて見たくなつて。」とちえ子は自分で氣を引立てるやうにわざ

と喋いだ調子で云つた。「わたし、これから何處へでもちよく／＼出かけて見るつもりよ」
「贊成ですね、氣が紛れていゝですよ。さういつちや同情がないやうだけれど、あんまり坊やの事ばかり思ひつめてゐて、姉さんの體でも惡くしちやつまりませんからね。」
「ところが、意地の惡いものね。氣が紛れるつもりで出かけたら、生憎な人たちに逢つてしまつて……」
　それからちえ子は、今日清藤夫妻に逢つた事を話した。ところが、夫妻には子供が途中で待ち合してゐて、そこから親子連れで植物園へとか行つて、自分はまるですつぽかされたやうな工合だつたと話した。
「そのお子さんがまた可愛いの。女の子だけれど、ちやうど家の坊やと一つ上ぐらゐで……坊やも生きてゐたら、來年はもうあゝして……」
「いけないわ、小母さま。」薫が食べてゐた箸を振つて、「またわたし泣きたくなるわよ。」
「困るな、姉さんは直ぐ坊やが出るんだから……」と俊次も云つた。
　それよりも俊次が聞きたいのは、清藤宏造の講演であつた。けれどそれは、ちえ子もろくに身を入れて聽かなかつたので、問はれても十分に答へられなかつた。
「惜しい事をしましたね、清藤氏なら聽いておく價値があつたですよ。あの人は私學出で、學問だつて思想だつて、あのくらゐの人は珍らしくないけれど、ところが喋らせたり書かせたりすると、帝大の博士連でもちよつと敵ふ人はありませんからね。」
「さう、そんなに偉い人？　わたし、何だか變な人だと思つて、挨拶もろく／＼しなかつたけれど、ぢや、今度お目にかゝつたら、もつと尊敬するわ。」
「また會ふ機會があるんですか？」
「えゝ、そのうちに寄せて頂くやうに、奧さまとお約束しておいたから。」
「僕も連れて行つてくれませんか。とうから一度會つて見たいと思つてたんだから……それに清藤さんは、新聞や雜誌に廣く關係してゐるから、その方面の話も聞いて見たいし。」
「あなたは、まだ新聞記者に未練があるんだわね。」と薫がそばから云つた。
「官吏になるのも、これからは考へものだからな。政變の度ごとにびく／＼しなくつちやならないから。」
「文官試驗は止めかい？」と寢てゐた健作が不意に云つた。
「まあ、びつくりした。今鼾がしていらしつたに……」と薫が笑ひ出した。
「起きてゐたんですか。高文も無論受けますよ。」
「お前はさう云ふがね、官吏だつてなか／＼……政變が心配になるくらゐな地位になれりや結構ぢやないか。」と健作は起き直つて、「おい、茶を一杯くれ。」とちえ子に云つた。
「僕にもどうぞ。」と俊次も云つた　そして獨りごとのやうに、「どうもあんまりご馳走になつたものだから、何だか大儀になつた。今夜はもう歸つて直ぐ寢るんだな。」と生欠びをした。
　俊次は高等文官試驗の準備の爲に、こゝから餘り遠くない戸塚寄りの靜かな素人屋に、賄ひ附きの二階借をして、そこで勉強してゐるのであつた。ちえ子と話してゐる間は、適度の酒が好い色に顏へ出て、はたで見ても愉快さうに發揚してゐたが、歸る時にはすつかり沈み込んでしまつた。妙に白けた顏をして、言葉少なに出て行つた。
「小父さまの云つたことを氣にかけたのだわ。あれぢや、さもそんな地位になれるかつて、見縊らないばかりなんだもの。俊次さんでなく

つたつて、むつとするわ。」と薫は小さい胸を脹らかして愛人の爲めに同情した。

夕方這入りそびれて、ちえ子だけはまだ風呂が濟まなかつた。後片付けは薫と女中たちに任せておいて、夫を寢床へ入れておいてから、自分はおそい湯にゆつくりと漬かつた。湯の中で十時の時計を聞いた。長い湯の後で、今度はまた湯冷めのするまで化粧室で手間を取つた。

ちえ子が湯あがりの化粧の匂ひをさせて這入つて來た時には、健作はぽち／＼目を開いてゐた。

「おや、まだおよらなかつたんですか？」

「うん、すつかり目が冴えてしまつて……ちえ子……」

「えゝ……わたし、今日も青山へ廻りましたの。坊やはどうなつてゐるんでせうね？」

「いゝ加減に諦めるもんだよ。おれはもう諦めてる。四十九日の間は魂が屋の棟に居るなんて、お婆さんの云ふやうなことを云つてゐたが、もう忌明けも濟んだし、お前も大抵にして諦めるがいゝ」

「女親の心持は違ひますわ。だつて、今でも何だか懷に抱いてゐるやうな氣がして……」

「馬鹿な。いつまで死んだ者を思つてゐたつて仕方がない。お互ひにまだ後が出來るさ。」

「あの子の懸替へなら、わたし欲しくありませんわ。」

「懸替へぢやない、あいつが生れ變つて來るよ。」

——……………——

男は妻に對して我儘なものである。健作は直き鼾をかき出した。しかしちえ子はいつまでも眠らなかつた　溜息をついては寢返りをしてゐた。

歌會

清藤欽子から約束の歌會の通知がちえ子へ來た。ちやうど晩秋の祭日の午後から、清藤の家で開かれるので、ちえ子は夫の健作が事務所から歸るのを待つて、入り違ひに出かけた。欽子から知らせてくれた時間とは、一時間あまりももうおくれてゐた。健作はそれでも早退けだつたのである。あいにく今日は薫も家に居ないし、こんな時に來ればいゝと思ふ弟の俊次も來ず、その晩の食卓は、健作と女隱居と二人きりで、祭日らしくもない寂しい晩餐であつた。

俊次は欽子からの手紙をちえ子に見せられた時、是非自分も同行したいと云つて、ちえ子にもそのやうに返事を出させたくらゐであつた。しかも若い者は移り氣である。今朝になつて、薫が、友達から二枚送つて來た音樂會の入場券を持つて行つて誘ふと、俊次も急にその氣になつて、歌會の方はすつぽかしてしまつたのである。

ちえ子が清藤の家へ行つた時には　歌會はもう兼題の披講も濟んで、當座が始まつてゐた。

そこには師といふ者もなければ、無論點者もない、總て互選である。床の間の附いた座敷と、不斷は納戸にでも使つてゐるらしい次の間との唐紙を拂つて、集まつた會員は主人の宏造と共にちやうど十人。欽子の話の通りいろ／＼な人の集まりで、長髮をオールバックにした畫家らしい男もゐれば、鐵無地の被風のやうな物を着た僧侶もゐる。女も三人ゐたが、なぜか欽子の姿は見えなかつた。三人が三人とも相當の年輩で、中で一番若作りの斷髮の女にしてからが、もう二十五六にはなつてゐた。それが欽子の話の女詩人であつた。

師の翁と、若い大勢の弟子とで出來た藤原社中の歌會を、頭においてゐたちえ子は、何も彼も珍らしかつた。互選も、それから相互の遠慮

ない批評も。第一に皆の歌からして珍らしかつた。自由な、奔放なその詠み口には寧ろ驚かされてゐた。宏造から仲間入りを勸められても、ちえ子にはとても口眞似すら出來さうにも思はれなかつた。しかしそこには、自由な空氣と、眞實な感情の流露とで、ちえ子が今まで知らなかつた不思議な世界がひろげられた。片隅に小さくなつて、たゞ見たり聞いたりしてゐるだけでも、何だか目の前が明るくなるやうな藝術的の歡びを感じた。

電燈のついたのを一切りに、お八つとも夕飯とも附かない手輕な食物が出た。近所の仕出し屋へ會費であつらへたもので、一人前づつたゞ配るだけであるが、それでも茶を入れ更へたり、食後の水菓子ぐらゐは清藤の家で出し　それには欽子が居ないので、宏造が自分で茶の間へ立つて行つては、書生に指圖をしてゐた。あいにくな時にはあいにくなもので、家政婦代りをしてゐる娘は、子供が發熱の氣味で、いぢ〳〵云つて放さなかつた。

會の途中から顏を出したちえ子は、初めて來たのに、まだ主人にもろくに挨拶をしてゐなかつた。宏造が座を立つのを見はからつて、自分もそつと後から立つて行つて、茶の間で初めて挨拶らしい挨拶をした。

「奥樣はお留守でいらつしやいますか？」とちえ子はついでに聞いて見た。

「どうもあいにくでして。午ごろ突然社の諸將から電話で、例のやかましい優生學の宣傳夫人が、今日急に歸國するから、横濱まで追つかけて行つて話を取つてくれと云ふので……」

「まあそれは、欽子さんもお大抵ぢやございませんわね。」

「なあに、こんな時でなくつちや、あれのブロークンな英語も役立たせる時はないのですから、會話の稽古にいゝですよ。」と宏造は、幾らか細君自慢らしく愉快さうに笑つて、「あゝさうでした。あなたによく申し上げてくれつてことで……初めていらしつて下すつたのに甚だ失禮しますけれど、そんなに遲くはならないつもりだから、どうぞご緩くりなさるやうにつて。」

「わたくしも欽子さんにお會ひしたくつて、實はそれを樂しみに伺つたのですけれど……」

「欽子も樂しみにしてゐました。是非歸るまで待つてやつて下さい。知つた者がなくつてあなたも變でせうが、その代り氣の置けるやうな者も居ませんから、あちらでまあ箸でもお取り下すつて……」

と話してゐるところへ、この前ちえ子が水道橋の停車場で、家鴨のやうな洋服姿を見たその娘が、近所の醫者に子供を見せに行つて歸つて來た。子供もその時の女の子で、輕微な風邪氣だから、心配には及びませんさうですと、至極手輕に復命した娘は、それよりも餘つほどこれこそ心配さうな顏をして、

「あの、變でございますよ、先生。」急に聲をひそめて告げた。「さつきから赤ん坊を負んぶした女の人が、家のまはりをうろ〳〵して……わたくし、行きにも歸りにも、ご門を覗いてゐるのを見かけたんでございますよ。」

「いゝやれ、中へ這入つてさへ來なけりや。みんながまた、馬鹿にはずんで詠み上げるものだから、人立ちもするよ。松枝は果物ナイフを知らないか。二挺つきりか見えないが、まだあつたらう？」と宏造は聞いた。

「え、こなひだ一ダースお買ひになつたばかりでございますから……何處へおしまひあそばしたか……」

松枝と呼ばれたその娘は、いぢ〳〵云ふ背中の子供を片手ですかし〳〵、あつちの抽出しやら、こつちの引違ひやら、氣忙しなくナイフを捜しした。ちえ子は見かねて、子供を自分の手へ預

かつてやつた。子供は人見知りもせずに——それとも熱で意識の溷濁してゐるせゐか、充血した目で懶さうにちえ子の顏を眺めたまゝ、素直に抱き取られた。

「濟みませんなあ。有職婦人の家庭はこれだから困りますよ。」と宏造も氣持ち顏を暗くさせた。

座敷では一同が食物を食べてしまふと、今度は餘興に探題が始まつた。松枝と書生とで食物のあいた器を下げた。宏造はちえ子の分だけ箸も付けずにあつたのを、自分で持つて茶の間へ薦めに來た。

その時ちえ子は、そこの片隅の二枚折の屏風の前に立つて、電燈の光を胸で蔽ふやうにしながら、靜かに子供を搖ぶつてゐた。葡萄色の羽織の襟が少し脱げかゝつて、ほつそりした小作りの體が子供の重みで、柔かに撓められた若枝のやうにくねつた。それが靜かな風に搖らぐやうに、調子を取つてゆらり／＼上半身が動いた。そして白い襟首が反對の方へ伸びて、日本人の目には不思議な魅力をもつた若い髮の澤々しい丸髷を、重さうにかしがせたその後姿が、宏造の目に一瞬間嬌めかしく映つた。ちえ子の目は屏風の貼交ぜを見ながらも、口では小聲に子守唄を唄つてゐる。宏造は不意に胸の迫つて來るやうな感激を覺えた。聲をかけるのも遲らはれて、食器を持つたまゝ、ちよつとの間立ち竦んだ。

「どうも濟みません。今代らせますから、あなたも召上つて下さい。こんな處で失禮ですが、」と宏造は持つて來た食器を長火鉢のそばへ置いた。

ちえ子は振返つて、

「わたしなら、もうどうぞ。」と小聲に辭退して、「今おやすみになるところですの。」

「どうも有難うございました。今代らせますから。」

直ぐ寢させるばかりにして來た松枝に、子供を渡しておいて、ちえ子はやう／＼座敷へ歸つた。

探題の披講が濟むと、この次の兼題が出て、歌會は終つた。ちえ子も詠めるか詠めぬか分らないが、兼題だけは紙ぎれに寫し留めておいた。人々は主人に挨拶をしてばた／＼歸つた。座蒲團や硯箱や反古紙の散らばつた後に、三人ばかりまだ話し込んで殘つてゐた。宏造が欽子ももう歸るからと云つて、しきつて留めるので、ちえ子も立ちそびれて殘つた。欽子には會つても行きたかつたのである。

殘つた三人は、例の僧と畫家と、女詩人とであつた。三人は主人とも格別に懇意と見えて、先きへ歸つた連中とは言葉づかひなども親しかつた。宏造はあちらで紅茶でも入れさせるからと云つて、ちえ子も一しよに、皆を書齋の方へ移らせた。

書齋は宏造自身の設計で建て增した質素な西洋館であつた。ファイヤプレースの瓦斯がとろとろ燃えて、テーブルスタンドの電氣の低い圓い照明が、人々をそのテーブルへ圍まらせた。人數も頃合であるし、それには若い婦人も一人交つてゐる。秋の夜を語り深すにはあつらへ向きであつた。禪僧の宗晃坊が一番に噪いだ。

「清藤さん、あなたはさつき僕の追懷の歌を分らないと云つてましたね。あれについちや前書きがいるんですよ。實は、ついこなひだの事だが、この繪描きのいたづら者にウイスキイで盛りつぶされて、暴句に如何はしいところへ連れ込まれて、大いに面食つたものですよ。今も僕を卑怯だとか何とか云つてからかふのですが……」

「卑怯でいけなければ不徹底だよ、禪宗坊主にも似合はない。」と畫家がすかさず云つた。「清

藤さんもご承知のとほり、宗晃君はすでに飲酒戒を平氣で破つてゐるんだ。それでゐながら、一方に女色を……ご婦人の前で恐縮だが、女色を恐れ、肉食を憚るのは卑怯ぢやありませんか。

―者些の尾巴子、直に是甚だ奇怪なりか。いや、僕もとにかく三十年精進を守つて來たのだ、今になつてそれをぺろりと破つてしまふのは……我慢がしきれないものなら仕方もないが、我慢すれば我慢の出來るものを……つまり過去の三十年が自分で惜しいんだよ。なあ、それで可いんだよ。這箇の心理は君にも分るだらう――食慾然り、色慾また然り。そこであゝいふ一首が浮んだものです。どうです？　それならご主人も頂いてくれませう。」

「なるほど、それなら頂きますね。」

「女史は？」

「わたしは、さつきもう頂いたわ。」と斷髮の女詩人は横を向いてにやりと笑つた。

　それはしかし、ちえ子だけにしか見えなかつた。

「だが宗晃君、これは君を問題にして云ふのぢやないが、わたしは禁慾主義は反對ですね。禁慾は却つて人間を墮落せしめる。男性にしても、また女性にしても……女性についてはすでにエレン・ケイが……」

「おや、エレン・ケイですか、あなたも？」

「まあお聞きなさい。」

　宏造の禁慾反對論は、婦人たちの前を憚つて、あまり突込んだところまで行かずにしまつた。その代りエレン・ケイが出た爲めに、話はしぜん戀愛だとか、結婚だとかいふ方へ花が咲いた。ちえ子も初めのうちは、聞いてゐても顔が赧くなるやうな氣がしたが、斷髮の女詩人までが平氣で自由離婚なぞ主張するので、しまひには自分も釣り込まれて、男性の無理解や、女の不滿をちよい／＼匂はせた。

「あなたでも、さういふ事を考へますか？」と宏造は何の氣なしに云つた。

「あら、隨分なことを。わたしだつて……」とちえ子は本當に赧くなつた。

「いや、さうぢやありません、さういふ意味ぢや……あなたは家附きのお孃さんで、今の話のやうな親の手から夫の手へ渡されたとは違つて、恐らく幸福なご境遇のやうに、欽子からも聞いてゐたものですから……」

「同じ事ですわ。」とちえ子は皆の視線から羞かしさうに俛れた。

　ちやうどその時、書生が女の名前を云つて宗晃を呼びに來た。宗晃は慌てゝ出て行つたが、いつまで經つてもそれきり書齋へ歸つて來なかつた。宏造は書生を呼んで聞いたら、さつき訪ねて來た女の人と一しよに、お歸りになりましたと云つた。それから書生の話では、子を負ぶつたその女は、玄關で何か暫く押問答をした擧句、しやにむに宗晃の胸ぐらを取つて連れて行つたとの事である

「おや／＼、それぢやご主人へ挨拶にも來れなかつた筈ですね。宗晃坊主め、精進どころか、早速大生臭を暴露しやがつた。」と畫家は痛快さうに笑つた。「僕はそれを知つてるから、わざとあゝ云つてやつたんです。清藤さんは正直に禁慾反對論なぞなさるから、僕は可笑しかつた。」

「いや、わたしもあゝいふ出世間的がつた宗教家のあの僞善面が憎かつたから、あれでも多少アイロニカルに云つたつもりですがね。もともと禁慾といふ事は不自然なんだから、何も強ひてあんな純潔顔をしないといゝ。」

「あれがあの人の卑劣な手なんですよ。あんな純潔らしいことを云つて、つまり童貞で異性の好奇心を釣るのよ。」と女詩人は際どいことを

云つた。
「あなたも釣られた覺えがあるんだらう。」と畫家がからかつた。
「まさか、あんな陳坊主の童貞なんか、たとひ本當だつて有難くないわ。」
畫家も宏造も、ちえ子までがそれで吹き出してしまつた。
女詩人と畫家とはそれを切つかけに暇を告げた。二人がたゞの仲でない事は歌會の席でもう、ちえ子も氣が付いたほど、あの大勢の前ですら可なり露骨に振るまつてゐた。今も何か宏造にからかはれながらも、平氣で一しよに歸つて行つた
ちえ子も初めての訪問に、ついうか／＼と話に氣を取られて長座をしてしまつた。曾つて行きたいと思つた欽子も、いつ歸るとも分らないし、女一人後へ殘つてゐるのも氣がさすので、續いて暇乞ひをした。宏造ももう留めなかつた。
書生が近くの帳場まで俥を呼びに行つたが、あいにく出拂つてゐて駄目だつた。停車場へはさほど遠くもないのだが、たゞ町通りへ出るまでの途中が寂しいので、女一人では歸せなかつた。宏造が送つてくれると云ふので、書生でも一しよに來てくれるのだらうとちえ子が思つてゐると、宏造が自分でぶら提灯をさげて先きに立つた。この邊も麁末な安普請で空地はよく塞がつたが、人が住まないのか、それとも一たいに早寢なのか、明りの射してゐる家はめつたになかつた。門燈などは殆ど見られない。ちえ子は初めての土地ではあるし、それこそ提灯でもなかつたら歩けないのであるが、しかし宏造自身で送つてくれたのには、ひどく恐縮してしまつた。
「なあに、僕も散歩がてらです。」と宏造は氣輕に云つて、「道がでこぼこですから、足もとに氣を付けて下さい。提灯の明りで歩くなんて、あなたには珍らしいでせう。」
「郊外のご生活らしくつて、お羨ましうございますわ。」
「しかし、とにかく非文化的ですね。今夜はまた曇つてるからなほ眞暗で……何だか雨でも落して來さうですね。こりや傘を持つて來なくつてしまつたかな。」
云ふうちに、はら／＼と忍び寄るやうなさゝやかな音がし出したと思ふと、さつと小雨が來た。二人は直きそばの寄席らしい軒下へ急いで這入つた。振仰ぐと、空の上は眞黒だが、遠くの空には星が見えた。
「ほんの通り雨ですから直きにやみます……あなたそれはコートぢやありませんか。」と宏造は初めて氣が付いて提灯をかざした。「お召しになつたらいゝでせう。」
「わたしばかり失禮だと思ひまして……おや、ご免蒙りますわ。」
「あ、裾がずりますよ。お待ちなさい。」
「あら、濟みません……」
宏造は片手に提灯を持つたまゝ、片手で女のコートの襟を摘んで、後ろからかけてやつた。その途端に、指がそゝつかしく髷へ障る、と、髮を苦勞にする女の衝動から、ちえ子ははつと首を曲げて無意識に髷へ手をやつた。そして直ぐ氣が付いて、きまりが惡かつた。宏造は宏造で照れた。暗くて顏が分らないからまだしも、明るかつたら、お互ひにばつの惡いところであつた。
ちえ子はさうしてゐるのが氣詰りで、まだ少し雨は落ちてゐたが、ハンケチで顏の先きを拂ひながら軒下を出た。
「大した事もないやうですわ。ぼつ／＼參りませうか。」
「一時雨ですね。もうそんな時候ですかね。」と

安心してゐられませんでした。」

雨は直き通つてしまつて、頭の上にも星が見え出した。

「元祿ごろの文章に、冬の夜道に小提灯の灯は、帽子程たのもしいといつたやうな文句を記憶してますが……これから夜分は、淋しも落着いていゝですよ。お閑があつたらまたお出かけを。」

「有難うございます」是非とも」とちえ子は熱心に云つたが、「さう〳〵、わたし忘れてゐましたが、今年帝大を出ました從弟が、是非一度先生にお目にかゝりたいから、お願ひしてくれと申しまして……」

「あなたの義理の?」といふと、ご主人の弟さんですね。さうですか。いつでもどうぞ。あなたもご一しよに。今日はあいにく欽子が居ませんで、初めていらしつたあなたに子供の守りまでして頂いて、誠に濟みませんでした。これに御懲りなく。」

宏造は宵のその光景をはつきりと思ひ出した。そしてこの時はどうしてあんな不思議な心持になつたのかと考へた。要するにこの小さい可憐な、どこかといへば非母性型に見える下町式婦人の艶冶な中に、あゝしたやさしい母性愛の姿を見たのが、少し意外だつただけ、それだけ感動させられたのだらうと、自分で解釋した。

ちえ子はちえ子で清藤の子供から、自分の死んだ子の事を思ひ出してゐた。青山の墓地のあの小さな土饅頭の上にも、時雨は冷たく降りそゝいだらうと思つたりして、涙ぐましい氣持になりながら、薄暗い提灯の後からとぼ〳〵とついて行つた。

間もなく明るい通りへ出た。

「有難うございました。もうこゝで澤山でございますから……」とちえ子は後ろから云つた。

「なに、此處まで來たんですから……ステーションは直きもう其處です。」

「でも、あんまりそれぢや恐れ入りますから。」

「わたしもなに、次手ですから」と宏造は振向きもせずにさつさと行く。

大久保の停車場では、ちえ子の乘る東京行きの電車は今出たところであつた。ちえ子は市ケ谷までの切符を買つてから、改めて今日の禮を云つて、それでもう歸つてもらふつもりであつたが、宏造は一しよに改札口の横までついて來た。

「失禮して向うへ渡りますから、あなたもどうぞもう……」とちえ子は改札してもらひながら、もう一度宏造に云つた。

「え、どうせ來た次手ですから……もうそれでも、欽子も歸りさうなものですから……」

「まあ……それだもの。」と喉まで出かゝつたのをちえ子は呑み殺して、「おや、奧樣によろしく。」

そのまゝ彼女は急いで向うのプラットホームへ渡つた。宏造はちよつと驛の時計を見てから、提灯を吹き消した。

東京行きの電車の來る前に、國分寺行きが來たが、それには欽子らしい者も降りなかつた。宏造はちえ子の乘るまで改札口の横に立ちかかつてゐたが、その電車が出ると、土間の腰掛へもどつた。

それから二電車めに、やう〳〵欽子が降りて來た。夫が迎ひに來てゐるのを見ると、流石に嬉しさうには見えたが、如何にも疲れきつた風で、口を利くさへ億劫さうであつた。

「わたし、俥で歸るわ。あるかしら?」

あつても夜分は一臺か二臺で、乘りはぐれたら容易にもう俥は見付からないので、欽子は迎ひに來てくれた夫よりも、その方へ急いで見に行つた。宏造はぼんやりその後姿を見送り

なまこ、[illegible]は[illegible]れるものだと思つた。[illegible]は見えも何もなかつた。まい[illegible]くと、つい自然に小刻みになつて、不断は[illegible]ない[illegible]の[illegible]的な歩き方が出るやうになつてゐた。

「あれは[illegible]、[illegible]くらゐで見守い。だが、俊子[illegible]まだ見た[illegible]もない。丸[illegible]」と思ひながら、安[illegible]に火を入れた。

[illegible]にこれまでつひぞ気を留めた[illegible]、今夜は[illegible]つて家へ帰る途々も、[illegible]んな事を思ひ続けた。

カフェー

夜に[illegible]、[illegible]から市内へ乗る客は[illegible]つて、[illegible]た電車も[illegible]にすいてゐた。ちえ子は[illegible]の方の座席へ腰を下しながら、[illegible]に[illegible]た自分の顔を見ると、さ[illegible]のたつたのを気にして[illegible]で[illegible]けた。それからショールの[illegible]へ手をやつて見たが、[illegible]なつた。窓から覗いて[illegible]れて、一面の[illegible]であつた。

ちえ子は[illegible]を[illegible]て、[illegible]かけ直すと、何だか気疲れがしたやうにぐつたりとした。思へば今日の半日は、ちえ子に取つて色々な新しい経験になつた。しかし何といつても、他人の家庭に一番多く心を引かれた。殊に最後の、今別れて来る時に、初めて知つたその細君思ひが好ましいやうにすら感じられた。同時に自分の夫の健作のそつ気ない事を考へると、同じ男でも、同じ夫でも、あゝも違ふものかと思はれた。そして俊子夫婦の間の幸福を、可なり立入つてまで想像して見た。それは単に羨ましいのでも、好ましいのでもなく、妙にちえ子の心をいら／＼させたのであつた。

「だけど……鼻毛が長いといふことをいふけれど、あの人は本当にさうよ。今日もやつぱり鼻の穴から覗いてゐたわ。宅はまさか、あんなしみつたれた風ぢやない。」とちえ子はさう思つて独りで苦笑ひをした。

彼女は自分の夫の風采を胸に浮べて、それだけに満足した。しかしそれだけの満足で満足してゐられるには、あまりに多く夫といふものを知つてゐた。ちえ子は処女でも新婚でもない。そして今まで夫の健作ばかりを見てゐて、男はかういふものだと大抵に諦めてゐたのか、急に諦めてゐられなくなつたのである。彼女のいら／＼した気持は、ずつと市ケ谷へ着くまで続いた。

電車を降りてからも落着きなくせか／＼と、俥のある処まで急ぐと、ふと聞き慣れた義弟の高調子な話声がちえ子の耳に這入つた。街燈の光で見ると、つい向うの停留所の電柱の根もとに、俊次と薫と、今一人薫の友達の令嬢と、三人固まつて立つてゐた。電車を待合せてゐるらしい。ちえ子が声をかけると、俊次が真先きに見付けて、

「や、姉さん、姉さんも今お帰りですか。」と直ぐ駆け寄つて来た。

「どうでした？　面白かつたですか？」

「面白かつたわ。あなたたちも今お帰り？」

「え。これからあの人を送りながら、（令嬢の方を顎で示して）神楽坂まで行つて、夕飯を食べようといふのです。薫さんも付合つてもいゝでせう？」

「いゝですとも。わたしもお供しませうか。」とちえ子はつい衝動的に云つた。

「そいつは愉快だな、是非いらつしやい。」

「小母さま、本当？」薫は目を円くして聞いた。「カフェーよ。」

何処でもいゝわ、わたしもまだ晩ご飯前だか

ら。」

薫の友達の令嬢といふのは、辻村の家へもちよい〳〵薫を訪ねて遊びに來て、ちえ子もよく知つてゐた。おとなしい、内氣な、居ても居なくても同じやうな娘である。四人は來合せた電車に乘つた。省線のやうにすいてはゐないので、互ひに話も出來なかつた。神樂坂で降りて、坂の上の小綺麗な洒落たカフェーの椅子に着くのを待ちかねて、俊次は食物の註文もそつちのけに、たゞ清藤の方の話をのみ聞きたがつた。薫がウェーターとはからつて誂へを濟した。

「俊次さん、あなた飲物は？」

「僕はビールでも貰はう。」と俊次は云つたが、「さうだ、何かコクテルを貰はう。君たちも何かやり給へ。姉さんも甘いのなら一杯ぐらゐいゝでせう。」

「さうね、わたし、ぢやベルモットでも一つ頂かう。」とちえ子もまはりの空氣に躁がされて云つた。

獸は外のものの居る前では慍つて食ふ、人間は人前ほど幸福さうにして飲み食ひする。實際また、大勢と飲み食ひするのは愉快なものである。どのテーブルを見ても、赤く火照つた顏、輝いた目、潤々した脣。そして男も女もほしいまゝに喋つたり笑つたりしてゐる。ちえ子も自分ばかり愼しくしてゐるのは、人を醉はせる酒へ冷たい水が交つたやうに不調和でもあり、興醒ましでもあり、却つてはたから顏を見られるやうな氣がした。まはりの人々と同じやうに、飲んだり笑つたりしようと努めた。

もつとも、この三人の美しい女性には、期せずして人々の視線が集まらずにはゐなかつた。そして容色なり作りなり、ちえ子がやつぱり際立つて見られた。割に合はないのは俊次で、三人との話しぶりを聞かなければ、お供の書生ぐらゐにしか見られなかつた。

「俊次さんはわたしにばかり話させないで、音樂會はどうでしたの？」とちえ子はベルモットで脣をしめしながら聞いた。

「僕にはよく分らないけれど、評判ほどでもないやうです。僕も清藤さんへ行くんだつたに、今日は詰まらないことをした。」

するとおとなしい薫の友達の令嬢は、びつくりしたやうな顏をして俊次を見た。薫はすばしこくそのまた横顏を目で追つた。そして薫と令嬢との目がぶつかると、令嬢はぱつと赧くなりながら、つらさうに[illegible]の上へ顏を伏せた、薫はにつこりと二人に微笑んでゐた。

「おや、この人たちは[illegible]」とちえ子は[illegible]だグラス越しに二人を見やりながら、心にさう思つた。

令嬢は薫へ結婚を申込んだ樹本といふ青年の妹である。俊次が昨日までちえ子と一しよに清藤へ行く筈にしてゐて、今日になつて急に入場券があるからといつて、珍しく好きでもない音樂會へ出かけたのも、たゞに入場券を無駄にしたくなかつたからではない。俊次のつもりでは、無口な令嬢の兄も一しよだらうと思つたからで、そこへ薫一人をやるのは不安だつたからである。それはちえ子もほゞ察してゐた。それから令嬢の方ではまた、俊次を誘ひ出したいばかりに、兄には内證で、薫へ入場券を二枚寄こしたのであつた。そこまでのあやはちえ子も知らなかつたが、内氣な令嬢のしよげかたが氣の毒になつて、

「和歌子さん、今日はお兄さまはご一しよぢやないんですの？」と話しかけた。

「ええ、兄さまは今日は、お友達の脚本を活動に撮るので、自分もキャストに這入つてロケーションに參りましたの。」

「へえい、活動にお出になるんですか……」

とちえ子には令孃の云ふことがよく分らなかつた。
「倫本君は才人だから何でもやります。活動役者にもなれば、ドンジャンにもなるし……」と俊次は薫の方をじろりと見て、コクテルのグラスを干した。「姉さん、ぢや、奥さんは居なくつても、やつぱり行つただけの興味はあつたですね？」
「あつたわ。興味以上に……本當にわたし、學問になつたわ。」
「どういふ事が？」
「何も彼も。新しい世界を覗いたやうな氣がしたわ。」
「それで、主人公の清藤さんについては、どう感じました？」
「さうね。あなたに聞いたやうに、そんなにあれで偉い人なのか知らないけれど……そりや家庭で見たらどんな人でも同じでせうけれど……わたしとにかく、溫かい人とは感じました。」とちえ子はひどく眞面目な顏をした。
「僕は清藤さんを偉い人なんて云やしませんよ。姉さんがさう取つたんでせう。」
「でも、わざ〳〵會つて見たいつて、あなたも云つてるくらゐですもの。あゝさう、あなたの事も賴んでおいたわ。是非いらしつて下さいつて。」
「さうですか、それは有難う。是非出かけて見よう。」
「行つてご覽なさい、深切さうな人よ。わたし、初めて會つた時には、女なぞ馬鹿にしてるやうに思つたけれど、まるで反對だわ。女でも男と同等に尊重して……尊重し過ぎるくらゐだわ。あそこはやつぱり新時代の紳士ね。」
「一體が新時代に媚びる傾きのある人ですからね。」
　ちえ子の言葉は、褒めたとも、くさしたとも分らなかつたが、俊次の方では幾らかくさし氣味の合槌を打つた。二人が清藤の話ばかりしてゐるので、令孃たち二人の方は、詰まらなさうにぽかんとしてゐた。戀の小暗闘にも飽き、滿腹はするし、ぼつ〳〵歸りたくなつた。和嘉子がわざと自分の時計を出して見ると、薫は薫で、勘定場の方の掛時計を見やつて、
「あら、もう、十時ね。」と聞えよがしに云つた。
　そこへちやうど、赤い顏をした一人の紳士が、土地の藝者らしい女を四五人も引連れて、ぞろぞろと這入つて來た。そしてちえ子たちのテーブルを見ると、紳士は醉つてゐてもはつとした樣子で、顏をそむけるやうにしてこそ〳〵と二階へ上つて行つた。
「今の人、小母さま氣が付いて？」と薫がちえ子の袖をそつと引張つた。
「いゝえ、誰？」
「小父さまのお友達の、ほら、あの小石川の辯護士よ。」
「まあ、さう。ぢや、早く出ませう。」
　それで、急にみ輿があがつた。

歳末奉仕

　欽子の雜誌社では每年暮になると、歳末奉仕といふ事をやつた。單に慈善團體へ金品の義捐をした年もあつた。或年は特殊小學校へ文房具や、新年の玩具を寄贈した。また或年には、讀者から意見を募つた事もあつたが、それは全國的になつて却つて效果が見えなかつた。
　要するに雜誌の事業ではなく、雜誌社の奉仕でなければならなかつた。そしてそれには營業上の宣傳も自然手傳はないではないが、しかし、商品の廣告では決してなかつた。だい一、婦人雜誌といふものが純營利事業として經營されてはならない、多少とも敎化的文化事業とし

て、社會に貢獻する事を主幹は忘れなかつた。そして雜誌が廣く人間――殊に婦人を間接に益してゐる傍ら、社もせめて世間の一部――せめて第四階級中の一小局部にのみでも、直接に盡すところがありたいといふのが、歳末奉仕の主意であつた。

今年は清藤宏造の主宰する社會科學研究團體の、若い會員たちの研究的應援があつて、可なり大規模に行はれる事になつた。それはなるべくだけ廣く貧民街の越年を賑はさうといふので、社でも一般讀者の同情義捐と、そしてある條件のもとに、婦人讀者の中から當日の慰問班員の篤志參加を、前月號の雜誌で募つたくらゐである。

ちえ子も篤志讀者の一人に加はつた。俊次が宏造を訪問した時、欽子から言傳かり、俊次もまた切つて勸めたからである。俊次自身も宏造から勸められて、その研究團體の連中と一しよに參加するはずであつた。彼には無論青年の物好きが手傳つてゐる。しかし、これまで一度もさういふ社會的の晴れがましい行動に立交つた事のないちえ子に取つては、よく／＼の奮發であつた。[illegible]欽子と一しよに雜誌社の内幕を見せてもらつたあの時の總ての感銘が（殊に有職婦人に對する）少くとも彼女を奮發させた動機の一つにはなつてゐる。その證據には當日、本部の雜誌社へ參集する途々も、俊次にこんなことを云つた。

「だけど、ひとのお手傳ひに働くんぢやね。これが自分で職業的に働くのなら眞劍にもなれるけれど。」

「そりやまるきり性質が違ふぢやありませんか。これは慈善行爲ですよ。要するに自己滿足の……と云つてしまつちやぶち毀しだけれど、姉さんもまあ坊やの事を忘れるのには、追善といふ意味もあつて、氣を紛らすにいゝですよ。欽子さんもさう云つてゐました、せめて茶の間から甚へつて。」

「ぢや、欽子さんは茶の間からビルヂングへですか？」

「えゝ、茶の間からビルヂングへ、臺所から事務所へ。」と俊次は姉の氣持には氣も付かずに笑つて、「あの人は、さあ……家庭から社會へ、社會から家庭へですか。つまり家庭婦人と職業婦人と、それから社交婦人とを調和よく兼ねてゐますよ。僕は清藤氏よりも寧ろ欽子さんの方に、會つて見て感服してしまひましたよ。あの人、もう幾つくらゐでせう？」

「あなた幾つと見て？」

「まだ若いやうですね。」

「だから男の目は駄目よ。あなたなんかよりずつと年上よ。」

「そりや分つてまさ。幾つ上です？」

「三つよ。」

「ぢや、まだ若いぢやありませんか。」

「有難う、わたしもそれぢや若いのね？」

「若いですとも。欽子さんより一つでもまだ若いんですもの。こなひだも何かの話から、清藤氏もさう云つてました、女の二十代はまだ未成品で、三十前後になつて、初めて精神的にも肉體的にも完成するんだつて。さうかも知れませんね。すると、姉さんや欽子さんなんかは、まさに完成せんとする……人生の四季で云ふと、これから夏に這入らうといふ春の峠なんでせう。」

「俊次さんも修辭家ね。」

「しうじか？」

「春の終りと云はずに春の峠はいゝわね。ぢや、薫さんや、楠本さんのお孃さんは？」

「春の麓くらゐでせう。完成までには前途遼遠でさ。」

「あら、あんなことを云つて。」とちえ子は胡散

さうに目で笑つた。

丸の内のビルヂングの前まで來ると、雜誌社のマークを付けた十幾臺の自動車と貨物自動車とが、慰問袋を山と積んでずらりと並んでゐる。俊次もちえ子も先づその晴れがましさに驚いた。自動車はすつかりもう準備が出來て、いつでもスタートをかけるばかりになつてゐる。二人は急いでエレベーターに乘つて四階の雜誌社へ行つた。今日の本部にあてられた代理部の廣い陳列室は、社員と應接者とで廊下の外までごつたかへしてゐた。

ちえ子は社の若い婦人記者と、もう一人の或る慈善病院の看護婦長だといふ三十からみの篤志婦人讀者と三人で、場末の或る貧民窟の慰問班に向けられた。幌を撥ねた剝き出しの自動車は、十二月の寒風を衝いて、歳末の町を走つた。三人は慰問袋の山に埋まるやうになつて寒い風をよけながら、目的地へ着いてからの行動を相談し合つた。ちえ子は無經驗の事でもあるし、婦人記者と看護婦長との意見に任せておいて、自分は[illegible]ばかり苦勞にしてゐた。俊次の注意で、今日は頭も飾り氣のない束髪にし、雨合羽代用のセルのコートで全身を包んでゐたが、それでも袖口や裾から艶めかしい色がちら／＼こぼれた。ちやうどまた記者は黒繻子の事務服、婦長は白の看護服なので、ちえ子の縞物が一そう目立つた。

自動車は一先づ貧民街のそばの託兒所へ着けて、其處で地理なぞ聞いた。後からもう一臺慰問袋を滿載したトラックが附いて來たのを、ちえ子は自動車を降りてから初めて知つた。それには社會科學研究團の青年たちと、年輩の記者が一人、宰領然と上乘りをしてゐた。ちえ子はその學生風の若い連中のなかに、俊次も交つてゐるやうな氣がしたが、さうではなかつた。

婦人だけが直接の慰問係といふので、三人は三方へ手別けをして、其處の貧民長家を一軒一軒に慰問した。青年たちは配品の大包みを自動車から運んでは、慰問係へ渡した。

貧民街特有の臭氣と濕氣とで、むつと息詰まるやうな狹い路地の間を、汚い子供たちにうようよ取圍まれながら、それを掻分けて行くだけでも女には一仕事であつた。この寒天にどの家も障子といふものの殆どない、その代り襖も破れ戸を閉めた薄暗い軒から軒へと、一々言葉をかけて配品をして行くうちに、短い冬の日は暮れかゝつた。

──社ですが、お歳暮のおしるしを、とちえ子は努めて愛想よく、さう云つては配つた。

「早くおいらのとこへも來てくんなよ。」と汚れた手で袖を引張る子供もある。

「もつと何か好い物はないかね？」と無遠慮に包みの中へ手を突込む女房もある。

けれどちえ子は、厭な顔一つ見せないやうにしてゐた。たゞ／＼反感を抱かれまいと、それのみ氣にして、折角そこに見せられたどん底の生活と、想像も及ばないやうな人生の諸相とに學ばせられてゐる心の餘裕も、その時にはまるで無かつた。

足もともだん／＼暗くなつて來た路地を、奧へ奧へと配つて行くうちに、手もとの包みは虚になつても、どうしたのか、配品を運んで來る青年たちがはつたり續かなくなつた。ちえ子は茫然と立竦んでしまつた。後何軒くらゐ殘つてゐるのか、まだ貰はない連中がぞろ／＼集まつて來て、口々に催促した。ちえ子は自分で配品を取りに引返すより外にない。しかし、路地一ぱいに集まつて來た女や子供たちは、道を開けて通しさうにもなかつた。彼等はちえ子よりも貧民相應に敏感であつた。慰問袋は元方の自動車にもう無くなつたのだ、品物の代りにこの人から生で貰へ、なぞと、不穏なことを云ひ出す者

さへあつた。

ちやうどその時であつた、思ひかけない清藤宏造が、託兒所の留守居番に案内して貰つて、自分の乘つて來た自動車の運轉手と二人で、配品の大袋を背負つて其處へ來てくれたのであつた。ちえ子はこの時くらゐ嬉しかつた事はなかつた。地獄で佛といふが、それ以上にも有難かつた。

配品の不足は此處ばかりではなかつた。ちえ子の乘つて來た幌自動車も、一しよに來た貨物自動車も、まはりの不穩な空氣を見て取つた宏造が、いちはやく皆を載せて歸してしまつた。託兒所前には宏造の乘つて來たトラックが一臺だけ、近所の派出所の警官に保護されてゐた。託兒所の薄暗い庇間や、長屋の路地口には、黒い人影がまだ固まつてこつちを見てゐた。何處からか小石が飛んで來てトラックの車輪にあたつた。

「こら！」と巡査は呶鳴つて、「暗くならないうちに、早く〳〵」と運轉手を促した。

「いろ〳〵お手數かけました。失禮します。」と宏造はトラックに飛び乘つた。

ちえ子も續いて乘らうとしたが、乘用の自動車とは勝手が違つてまご〳〵してゐると、宏造はきうとも氣付かずに急きたてた。

「さ、早く。どうしました？」

「だつて……」

そばには巡査がじろ〳〵見てゐる、宏造は宏造で手をかさうともしない。ちえ子は眞赤になりながら、耐りかねて、

「あなた！」と白い腕をさし出した。

宏造は初めて氣が付いてその手を取ると、片手を添へて女の體を抱へ上げてやつた。黒い人影は何か云つて囃した。トラックは走り出した。二人は腰掛ける物もないので、配品を包んだ大風呂敷を擴げて、その上に蹲まつた。日が暮れると急に温度が下つて、吹き曝しのトラックの上は耐らなく寒かつた。ちえ子のかた〳〵顫へてゐるのが、闇にもよく分つた。宏造も見かねて、自分のオーヴアを脱いで背中へはおらせた。ちえ子はそれを斷らうにも、あまりに顫へが烈しかつた。

「どうも濟みません……」

「風邪でも引込まなければいゝですがね。それにしても、あなたは今日は一番お骨が折れましたね。どういふ行き違ひだつたか……あなたこそ飛んだ貧乏籤で……」

宏造は さつき自分が駈け着けて來るまでのいきさつを手短に話した。彼は[illegible]と一しよに各班の動靜を觀察して廻つたが、あまりに自動車に搖られたせゐか、途中から頭痛がし出したので、自分だけ一應本部へ歸つた。歸つて見ると、たゞ一人殘つてゐた電話交換手の娘が、これ〳〵の方面の班員から、配品が不足だから直ぐ屆けてくれといふ電話で、さつきから二度も三度も火のつくやうな催促だといふ。戸數の調べ上げと、配品の受渡し表とを引合せて見ると、どういふ間違ひか、その方面へ積み渡した數が百からの不足と分つた。そこで本部と社とにあつた殘品を搔き集めて、やつと數だけ滿たして、宏造自身トラックへ積載して駈け着けたのであつた。

「貧民窟の中でも、あそこは一番人氣が惡いと聞いてゐたから、餘計心配しましたので……あなたの事はもつとも、あの方面へおいでとは知らずに行つたのですが、あそこへ行つてから、辻村さんといふ方がまだ出て見えないと聞いて、びつくりしました。しかし、ぐづ〳〵してゐるとみんなが危險だから、あなたの事はわたしが引受けて、とにかく自動車を出さしてしまつたのです。わたしも實は、あの薄暗い路地の奥で、あなたの姿を見付けるまでは氣が氣ぢやなかつ

たです。
―わたしもあの時は……本當に嬉しうございました……とちえ子の聲は、齒の根も合はないやうに顫へて掠れた。
―何だかお苦しさうですね。もう直きです。―
二人を乘せたトラックが丸の内のビルヂングへ着いた時には、雜誌社のマークを附けた自動車も大抵もう歸つてゐた。今度は宏造も氣を利かして、冷たい革の手袋を脫ぐと、自分の方から手を貸してちえ子を助け下した。絹手袋をはめた女の手先きは氷のやうに冷えてゐたが、熱つぽい體の溫かみは、腋あけへ廻した男の片手へもぼつと感じられた。

「どうかしてる」

ちえ子は其晩家へ歸ると、そのまゝずつと寢ついてしまつた。四十度近い高熱が續いて、醫者は肺炎にならねばいゝがと心配したが、それでも一週間ばかりで快方に向いた。前に一度肋膜にかゝつた事があるので、病後の恢復が捗々しくなかつた。押詰まつた暮の數へ日になつてから、醫者の勸めで湘南の鵠沼へ轉地をした。老母も一しよだつた。
年が明けて、三ケ日を濟ますと、淸葉夫妻も川一つ向うの片瀨へ來たと云つて、欽子が訪ねて來た。ちえ子からもこちらへ來てゐる事は、端書でちよつと知らせてあつたのである。欽子は歲末奉仕に出てもらつた禮に來たのであつたが、その時に引込んだ風邪がもとで、ちえ子が暫く寢込んだ事も、そばにゐた女隱居の口ぶりで初めて知つて、氣の毒な思ひをした。あの時貧民窟に一人殘つたちえ子を、トラックで連れて歸つた話は、宏造もその際するにはしたが、詳しい事は欽子も聞いてゐなかつた。トラックの上で顫へてゐた事や、降りる時に體の熱つぽかつた事などは、なぜか宏造も默つてゐたのである。
―あの時弟さんと直ぐお歸りになつたつて事は、後で聞きましたけれど、何しろ混雜してゐましたし、氣分がお惡かつた事なんかちつとも存じませんでしたの。おや、トラックでお風邪をお召しなすつたんだわね。宏造もご一しよだつたさうですが、あの人のことですから氣も付かなかつたでせうし……實はわたし、慰勞會の時にもどうしてご出席下さらないだらうと思ひましてね、主幹ともお噂してゐたのよ。―
欽子のその口ぶりで、宏造から何も話してない事をちえ子も知つた。そして宏造に世話になつた禮も云はずにしまつた。それはしかし、自分でも妙に氣が咎めた。眞暗なトラックの上で、男のオーヴァを借りてはおつた事など、今までは氣にもしてゐなかつたのを、自分から氣にして故意に云はないで見ると、急に何だか欽子に濟まない事でもしたやうに思へて來て、ちえ子は獨りで顏の赧くなるやうな氣がした。
欽子は子供が待たしてあるからと云つて、直き暇を告げた。ちえ子も散步がてら、一しよに送つて宿を出た。
ちえ子母子の滯在してゐるのは、毎年避暑や避寒に來なじみの旅館で、この冬は客が少いからでもあるが、座敷も二人で塞ぐのは勿體ないやうな三間取りの別館であつた。海を前にした見晴らしの緣側を下りて、そこの木戸を開けると、直ぐ海岸へ出られた。外は好い凪ぎであつた。海は紺青色にとろりと盛りあがつて、白い砂濱にはちろ／＼、絲遊がもつれた。二人は暖かい砂の上をぶら／＼歩いて行くうちに、欽子はふと何か聞きつけて振返つた。
「マヽ！　マヽ！」と女の子が息せき驅けて來る。
「あら、愛子ちやん。」と欽子は意外さうに立ち留つた。「どうしたの？　どうしてこんな方へ來

たの？
「パヽと來たの。
「ちや、江の島へ行くのはやめて？」
「やめたの、江の島つまんないつて。」
「パヽは？」と欽子は廣い砂濱を見やつた。
「あつち。」と愛子は汀の方を指ざすと、「パヽ！パヽ！」とまた駈け出して行つた。
汀には廢船が一艘引き上げてあつて、小さい足跡がその蔭からこちらまで、ちやうど砂地へ點線を引いたやうに續いてゐる。子供は正直にまたその跡どほり踏み返して行く。風は無いやうでも、海へ向いて走ると、紫紺色のケープがぱつと脹らんで、何の事はない、武者繪の母衣に白い脚が生えて飛ぶやうだ。
「あの恰好。まあ、お可愛い！」とちえ子は目を細くして見やりながら、「お樂しみですわねえ。」
「あなたも、お後のあるまではお寂しいのね。」と欽子は氣の毒さうに云つた。「初めつから無いのならとにかく、一度子供を持つて無くしたのは、耐らないでせう。」
「耐りませんわ。何につけても思ひ出しましてね。」
「さうでせうとも。お後の出來るまでは、諦められませんわ。」
ちえ子はもう目を潤ませて、暫く言葉もなかつた。
「わたし、死んだ子供は忘れられないけれど、その代りに後が欲しいといふ氣にはなれませんの。」
「でも、出來て見ればやつぱり可愛いでしよう。」
「女のそれが、弱味ね。」
「弱味？　どうして？」
「どうしてつて……あら轉んだわ！」とちえ子は小走りにはら〳〵駈け出した。
彼女が駈け着けると殆ど出會ひがしらに、宏造が廢船の蔭からひよつこり出て來て子供を抱き起した。ちえ子はぱつと赧くなつて、へどもどしながら挨拶した。
「その節はまた、いろ〳〵お世話さまになりまして……」
「いや……」
「あなた、ちえ子さんはね、あの時お風邪を召したのが因で、ずつとお惡かつたんださうですよ。」と欽子も後から來て云つた。
「さういへば、お前の方の主幹もやすんでゐるんだね、はやるのかな……さあ愛子、さつきの續きだよ、今度はパヽが逃げる番だ。」
宏造は持つてゐたゴム毬を子供に手渡しておいて、急いで後びつさりに二三間行くと、くるりと羽織の襟をまくつて帆のやうに擴げながら駈けた。子供はげら〳〵笑ひながら追つかけた。そしてゴム毬を投げた。毬はちやうどその羽織にあたつた。
「萬歳！」と愛子は嬉しさうに叫んだ。
今度は子供が逃げて、親父が追つかけた。毬は子供を逸れて、潮の中へぼちや〳〵と轉がつて行つた。父子は浪に弄ばれる毬を追つたり追はれたりしながら、きやつきやと騒いでゐる。
「何を燥いでるんでせう、子供と夢中になつて。」と欽子は馬鹿らしさうに口尻を曲げて苦笑ひをしながら、ちえ子に云つた。「失禮ね、ご免なさいよ。」
「いゝえ。ご愉快さうですわ。」
「今日はどうかしてるんですよ。うつちやつておいて參りませう。」
二人はぶら〳〵とまた歩き出した。それを見て取つた宏造は、直ぐ子供に云つた。
「愛子、マヽと一しよにお歸り。」
「もうパヽやめ？」
「パヽはくたぶれた。さ、マヽは行つちまふよ、

早くおいで」

　そこで、子供はまた母を追つかけて行つた。

　宏造は撥かつた着物の前を掻き合せて、帯を締め直すと、氣むづかしい顔をして静かに歩き出した。子供を相手にふざけてゐた彼とは、急に年の十も取つたやうに眞面目にかへつたが、それがしかし不斷の青木宏造であつた。腰掛のそばへ歸つて、其處に脱いであつた外套へ手を通すと、小椽にもたれて女たちの後姿を見送つた。

　俊子も片瀬へ遊びに來るには洋服ではなかつた。質素なビジネスドレスに毛織のシユースでも引つかけた姿は、すつきりと引締まつて、それに黒いヘルトか何かの飾り氣無しの帽子を少し深めに冠つた様子なぞ、意氣でもあり、若くも見える。それが和服になると妙に締まりがなかつた。此の流行とは云へ、衣服の地質としてもとより贅澤な縮緬の着物が、豐滿な體に負けて、美しい肢の肉もたゞ太ぼつたく見えた。

　ちえ子はこの前の歳末奉仕の時と同じやうな束髪で、宏造の目に映つてゐる鬱色の手柄の丸髷にはならなかつた。ちえ子の方はまた體も痩せて[illegible]作用にゐるので、若やいだ[illegible]時代的な風去[illegible]た顔に、髪も[illegible]ゐた。しかし、すれだ納戸色の羽織は無暗にしつとりと落着いて、澁まさりのする造り野暮が、齢の割に彼女をすんなりと見せた。

　赤い帽子と、紫のケープと、白い脚の小さい姿が、二人の間を彈んだ毬のやうに飛び廻つた。

「ナイスネッス？　エレガンス？　いや、グレイス！」とさう呟きながら、宏造は船の小椽から放れた。

　暖かい日光にはつと躍つてゐるやうな印象の豐かな姿と、それと並んで影も薄いやうな華奢な姿と、そして小さい丸まつちい姿とが、明るい白砂の海岸を踏んで行つた。

砂丘の蔭

　ちえ子の夫の健作は、去年から計畫してゐた仕事の交渉が纏まつて、急に北海道まで行く事になつた。ちえ子にも出發前にちよつと歸つてくれるか、それとも體に無理ならば、こつちから出かけて行かうかと、電話で聞いて來た。老母はまた出直すにしても、一度歸つた方がよささうに云つたけれど、ちえ子は夫に來てもらふやうに返事をしておいた。するとまた電話で、ちやうど明日か明後日、尾三方面の山もとへ店員を出張させる用向きがあるから、健作も藤澤まで一しよに、豊橋行きの汽車で行かうといふ前觸れであつた。

　その明日といふ日の午後、藤澤着の汽車の時間は分つてゐるので、あれから鵠沼までの電車の時間を見はからつて、ちえ子は停留所まで迎ひに出て見た。吹き曝らしの寒い待合所で三十分ばかりも待つて、電車も二臺まで來たが、健作らしい人も降りなかつた。今日はもう來ないのだらうと思つて、三臺めの電車が動き出すと一しよに、冷たい腰掛を立つて歸らうとすると、その動き出した電車からおくれがけに飛び降りた一人の紳士があつた。おやと思つて、ちえ子はショールを深く掻き合せた。それは宏造であつた。

　宏造の方ではまだ氣も付かなかつた。待合所の方へは見向きもせずに、正面のだらだら坂を眞直に、しかしのんきさうにステッキを振りながら、ぶらぶらと散歩でもするやうに歩いた。ちえ子は黙つて後からついて行つたが、坂を上りきつてしまふと、笑ひながら聲をかけた。

「どちらへ？」とついでに聞いて見た。

「藤澤まで。明日から子供の幼稚園が始まるので、この三時の汽車で次子が連れて歸りました

から……」
「おや、さうですか、それはお寂しくなりましたわね。これからどちらへ？」とちえ子は重ねて聞いた。
「えゝ、たゞそこいらを……また鵠沼の町を歩いた事がありませんから……あなたはしかし、どちらへ？」
「東京から誰か参るかと思ひまして、つい退屈なものですから、停留所まで出て見ましたんですけれど……何ならあなた、これから手前の宿までお越し下さいませんか？　お茶でも差上げますから。」
「有難う。おかあさんもご一しよださうで？」
「はあ。」
「實はわたし、ご老人の相手は甚だ不調法ですから……」と宏造は子供のやうな羞かみ笑ひをしながら、ステッキでぽいと足もとの石を撥ねた。
ちえ子も綺麗な齒並を見せて清しく笑つた。この前海岸で會つた時には變な工合だつたが、今日はすつかり親しみを感じられた。
「さう云つちや失禮ですが、正直のことか、ご老人とお茶を頂くよりは、ぶら〱歩きながらあなたのお話でも伺つた方か、窮屈でないだけでも助かりますよ。」
「ぢや、海岸の方でも少しお供いたしませうか。町なんか御覽になつても詰まりませんわ。」
ちえ子は歳末奉仕の時、宏造に世話になつた禮もしみ〴〵まだ云つてなかつた。この前は欽子の手前、云つて可いか惡いか分らなくてやめたが、かうして二人だけで顏を合せて見れば、まさかそれを默つて別れるわけにも行かなかつた。それで自分から先きに立つて、海岸への近道も案内したくらゐであるのにも拘らず、なぜかそれを云ひ出さうとすると固くなつた。どうも素直に禮の言葉が出なかつた。
宏造の方でも、其時の事は一言も口に出さなかつた。二人は自分たちの氣分とずつと離れた歌會の話や、俊次の噂なぞしてゐた。
「田澤君ですか、田澤俊次君？　さうでしたね。實際俊才ですね。まだ二三度しか會はないが、わたしは内々感心してゐますよ、お世事でなく。それに政治科出身にしては、珍らしく感情の洗練された青年だ。欽子もその點を褒めてゐました。」
「弟も、奥さまの事を褒めてゐましたわ。」
宏造の細君思ひは前から承知してゐても、かうしてまた二言めには欽子が〱を聞かされると、ちえ子も何か皮肉の一つも云つて見たいやうな、東京の兒の悪戯な氣がつい出た。
「田澤君なぞのやうな若い人たちの目には、まあいふ中年の有職婦人なぞどう映りますかしら」と宏造は生眞面目だ。
「いろ〱それは……何にしても充實していらつしやるつて。」
「充實と云ふと？」
「お頭の事は申すまでもないでせうし、お體だつても。」
「これはどうも……」と宏造は苦笑ひをして、「なるほど、太つてゐますからなあ。」
「お立派ですわ。やつぱりあなたのご愛護が滿足に行屆くからですわ、女は不足があつたら太れませんもの。」
「それにしては、あなたは餘りお太りではないですね。」
「わたしなんか、不足ばかしで太れないんでしよ。」とちえ子は寂しく微笑んだ。
宏造はぢつとその顏を眺めた。そして何か云ひたさうに見えたが、思ひ返して輕くステッキを振つた。
海岸は少し風があつた。海もところ〲白い浪頭が立つてゐた。二人は云ひ合したやうに風

蔭のある方へ、ある方へと足を向けた。そして暖かい砂丘の蔭へ行つて休んだ。宏造は袂から卷煙草を出したが、マッチが思ふやうにつかないので、大して好きでもないらしく、そのまま吸はずにやめた。二人はぽか／＼する砂の上に蹲んで、默つて自分々々の考へ事に耽りながら、目はぼんやりと相模灣の風光を眺めた。近くは江の島、遠くは箱根、天城の連山、そして雪を冠つた眞白な富士が中天に冴え返つた。

「今日は富士の好いこと！　どうでせう。」

「全く！　いつ見ても飽きませんね。あなたは當分まだこちらですか？」

「え〵、少しお暖かになるまで居たいと思ひまして。あなたは？」

「わたしもまだ暫く。やはりあの社から頼まれたんですが、婦人問題について少し長い物を書いて見たいと思ひましてね。今まだ材料を調べてゐるんですが、それを書きあげてから歸りたいと思ひます。ちとどうぞお話にいらしつて下さい。外國の婦人運動など調べて見ると、これからの日本の婦人にも、なか／＼參考になる事がありますよ。」

「本當にわたし、少しさういふ方の目を開けて頂きたいと思ひますの。是非伺ひますわ。」とちえ子は本氣に云つた。

「あなたは……」と宏造は火のつかない卷煙草を口へ持つて行つて、吸口をぎちや／＼噛みながら、「何か不足がおありになるやうですが……婦人の地位とか、夫妻の關係とかいふやうな事にでも、何か……」

「あら、どうしてさうお取りになりますの？」

「そんなやうなお口ぶりが、お話の間にちよいちよい出ますから。」と宏造は氣持ち赧くなつて云つた。

「自分では氣も付かないのですが、さうですかねえ。」とちえ子は溜息するやうにしんみりと云つて直ぐきまり惡さうにぽつとなつたが、「お恥かしうございますわ。女はやつぱり愚癡つぽいんですわね、今更らどうしやうもありやしませんのに。」と早口に云つて、膝の砂埃をはたくと、すつと立つた。

「みんなさう云つて諦めて來たんですね。」

「諦めるより仕方がありませんもの。」

「今ぢやもう諦めおほせなくなつて、婦人の開放運動も起つたんでせう。」

「それは新しい人たちの事ですわ。これからの若い方たちは、そりや今よりずつと明るい將來を開いていらつしやるでせうよ。けれど、わたしたちはもう……」

「と云ふと、ひどく老い込んだやうに聞えますね。あなたたちはもう、婦人として若い方ぢやないんですか？」

「え〵、お婆さんですわ。」とちえ子は聲だけ笑つた。

宏造は噛みしだいた卷煙草をふつとほき出すと、ステッキを拾つて自分も立上つた。

「わたしが今度調べてゐる中にも、或る著者は心理學者の説を引いて、からいふことを云つてゐます。一般に婦人といふものは、三十前後になるまでは、十分な精神的成熟に達しない。容貌から云つても、その頃まではたゞ若々しいばかりで、完全な表現といふものが出ない。要するに婦人は三十前後になつて、初めて個性や智力や情熱が本當に目覺めるもので、またそれ等の目覺めた諸特質のみが、本當の深い戀愛……」と云ひかけて、はつと氣が付いたやうに宏造は口を噤んだ。

それきり默つてしまつては不自然であるし、といつて、取つてくつつけたやうなことも云へないし、宏造はてれ隱しにまた一本卷煙草を摘み出した。今度は是非ものにして、煙を吹かさない事には相手の手前もばつが惡い。風蔭に

[illegible]と、

ちゑ子は思ひ出したやうに言つた。

「ねえ、手相、わたし占つて見ませう。」

闇と闇とで顔を見るやうに、二人の顔は探れ探れに合つて、女の柔かい細い掌が男の[illegible]に[illegible]つた。仰向けになつた宏造の眼瞼は、足袋を隔ててぼんやりとそれが感じられた。ぼーと息を凝らして充血した男の顔と、ちらちら[illegible]を美しい女の白い顔と、その[illegible]と同時に、ぱつとマッチの火が燃えて消え、消えてはまた燃えて、二度めに香の好い煙がぽつかりと散つた。

「おい、ちゑ子！」

その時不意に聲をかけて、小高い砂丘の上から二人を見下した男があつた。宿屋の[illegible]をはおつて、帽子無しで、[illegible]に草履を引つかけてゐる。それは辻村健作であつた。

北海道へ

健作はちゑ子に聲をかけておいて、直ぐまた砂丘を下りて行つてしまつた。

ちゑ子は手もとへ燃えて來たマッチの軸を、捨てて立つた。

「ご主人ですか。」と宏造は眠い顔をしながら、吸ひつけたばかりの煙草をぽいと投げて、帽子を取つた。「ちやうどいい、ご紹介願へませんか？」

「えゝ、どうぞ……」

ちゑ子が急いで砂丘の表を出て見ると、健作はさつさともう歸つて行く。あなた！と呼びかけて見たが、風上で聞えないのか、褞袍の後姿は振返りもしなかつた。

「また折もございませう。今日は失禮いたしますわ。」

「ぢや。」と宏造はステッキを拾つた。

「ご免あそばせ。」

ちゑ子は小走りに夫の後を追つ駈けた。

「あなた、わたし停留所までお迎ひに行つたのよ。」

健作は初めて振返つたが、それには何とも問ひ返さなかつた。

「鵠沼でも、海つぱたの風は寒いぢやないか。」と彼は妻の服裝を見た。

「さつきから見ると、風が少し募つたやうだわね。」とちゑ子はショールを掻き合せた。「わたし、せつかくお迎ひに行つたのに……あなたは藤澤で直ぐ電車にお乗りになつたの？」

「何だか江の島行きの團體があつて、暫く待たされたよ。」

「途中で、わたし電車を三臺も待つて見たのよ。それでもいらつしやらないから、今日はもういらつしやらないんだらうと思つて、……今の方も藤澤から乗つていらしつたんだわ。もつとも汽車は違ふけれど……東京へ歸る方を送つておいていらしつたんだから」

健作は女の小さい足に合せて、ぼく〳〵と默つて歩いた。

「ねえ、あなた、今の方ご存じ？」

「いや。」

「あれが清藤さんよ。」

「さうか。」

健作は初めて興味を引かれたやうに後ろを振返つて見た。砂丘の邊にはもう宏造らしい姿も見えなかつた。

「思つたより若いな。こちらへやつぱり來てるのかい？」

「えゝ、片瀬のお知合ひの別莊とかへ。」

「一人で？」

「奥さまも孃ちやんもご一しよでしたけれど、今日東京へお歸りなすつたの。あの方藤澤まで送つていらしつて、今その歸り途だつたのよ。わたしあなたをお迎ひに出てゐて、ちやうど停

海道へ行[illegible]たもんだから……あなた
にこにこ笑つて[illegible]さう仰しやつてたわ」
健作はふゝんと云ひながら、首[illegible]吹いて
來る風を斜めにかはして、大きさうに帽を[illegible]は
せると、もう女の足にはかまはずさつさと歩き
出した。

ちえ子は少し遅れて宿へ歸ると、健作は背
廣を上へ[illegible]褞袍を着いて、老母と差
向ひで火鉢をはさんで、二人がお客さまのやう
にきちんと坐つてゐた。老母はちえ子の顔を見
ると、待ちかねたやうに云つた。
「健さんはお前を[illegible]だくさうだ
よ。出立まへで忙しいところを、[illegible]
をしたねえ」
「ちえ子、お前さへ歸つてくれゝば、おれは明
日にも北海道へ行きたいと思ふんださ。」と健作
は云つた。
「あら、さうなんですか」
ちえ子は[illegible]な顔をした。
「わたし[illegible]だから、今度
[illegible]
[illegible]
今度は、お前[illegible]
[illegible]

「わたしの都合なんか……それで、おつかさん
はどうなさるの？」
「健さんはもう少し居ろと云つておくれだけ
ど、お前たちが歸つてしまふのに、まめな者が
一人殘つたつて始まらないからね。わたしも一
しよに歸りませうよ。」
「そりやさうね。」
ちえ子はたゞさう云つたきりであつた。昨日
の健作の電話では、ちえ子に歸れるやうなら歸
つてくれ、それとも體に無理ならば、自分の方か
ら出かけて行つてもいゝ。それも明日か明後日
といふので、北海道の出發はまだ幾日ともきま
つてゐないらしかつた。それが昨日の今日、急
に風向きが變つたものだとは、老母ばかりでな
く、ちえ子も内心[illegible]思つたが、
しかし口にも顏色にもそれは出さる義理ではな
かつた。健作は家業の爲めに遠い寒い北地へ行
く事を思へば、母子が家をあけて避寒でもなか
つた。
二人は宿の夕飯を早めに濟ますと、鵠沼を引
拂つて東京へ歸つた。そして健作は一日おいた
翌々日の夜汽車で北海道へ立つた。
その立ちぎはに、氣まづい一幕が夫婦の間に
あつた。

「北海道はお寒いでせうねえ。どうぞお氣をお
付けなすつて。」とちえ子がオーヴアを着せかけ
ながら云ふと、
「そりや鵠沼よりは寒いさ。」と健作は苦い口を
利いたものである。「ちえ子、お前に云つておく
が、おれの留守中だけでも、なるべく家をあけ
ないやうに氣をつけてくれ、いゝか。」
ちえ子もむつとして、
「なぜそんな念をお押しなさいますの？」
「だつて、おれが北海道へ行くと分つたら、默
つてゐても歸るべきぢやないか。」
「あなたが體が本當でなければ、無理に歸らな
くてもいゝと仰しやつたものですから。」
「さうさ、體が惡ければ仕方がない。何だ、あ
の風の吹くのに、物好きにあんな方までほつつ
き歩いてたんぢやないか。それくらゐなら、お
れが歸るなと云つても歸るべきぢやないか。家
が虚つぽになるのを承知で、一家の主婦たるも
のが……」
「ですが、これまでいつも、兼やに留守をさせつ
けてゐるものですから……兼やの方がわたしよ
りも、家の事は明るいくらゐですから……」
「よせ！　それが主婦たるものゝ云ひぐさか」
と健作は怖い目をして、そして聲だけは靜かに

云つた。「ちえ子、おれはこの寒いのに物好きで北海道へ行くんぢやないよ。おれはお前のおとつさんに委託された辻村の家と、お前たち家族とを、よりよく安全にしたい爲めに……殊に震災以來血眼になつて活動してゐるんだよ。だか、お前は家附きの娘だ、そんなお蔭なんか蒙りたくないと思へば、おつかさんと二人でどうとも自由にするがいゝ、おれはいつでも體一つで出て行く。」

さう云ひずてに、健作は折鞄を掴んでつかつかと玄關へ出て行くと、默つて靴を穿いて、默つて俥に乘つてしまつた。ちえ子が何を云ふ暇もなかつた。

不健康な一日

ちえ子は鵠沼の夢を見て目を覺ました。それは海岸の砂濱を、自分が男のやうなオーヴアを着て、男と追つかけくらをしてゐる夢であつた。その男が夫の健作のやうでもあり、また清藤宏造のやうでもあり、覺めてから考へて見てもはつきりしなかつた。臺所の方で雨戸を繰る音は聞いたが、有明の電氣は點つてゐる、欄間障子もまだ白くはならない、世間もひつそりしてゐる。朝の早い夫は留守だし、ちえ子もまだ起きる氣にはなれなかつた。いつも二つの寢床で一杯になつた八疊の寢室も廣々として、四五日このかた神經過敏になつた彼女の寢起きの嗅覺を刺戟するやうな、男臭い匂ひも籠つてゐない。暖かい寢床の中でぼちぼち目をあきながら、夢の中の相手が健作だつたか、宏造だつたか、そんな掴まへどころのない事を飽きもせずに考へてゐた。

健作が北海道へ立つ一日二日前から、ちえ子は輕い障りが體にあつた。それで仕方なくちよつと起きて、顫へながらまた寢床へ這入つた。いつまでも朝か前かだと思つたら、外は雪であつた。東京がこれなら、寒い北海道はどんなだらうと、ちえ子は旅行先きの夫を思ひやつた。すると出發の際の、あの憎い口が直ぐ思ひ出された。ちえ子は顔をしかめて目を塞いだ。今度はもう夢ではなく、鵠沼の海岸で現實にあつたその事が、強い色調でまざまざと頭に浮んだ。

「健作はわたしを疑つてるんだわ。さうだわ！」

ちえ子は初めてそこに氣が付いて、自分ではつとした。急に體ぢうが火照るやうな氣がして、もうぢつと寢てゐられなかつた。洗面をして、身じまひをして、食事を濟ませると、何となくそはそはと落着かない氣持で立つたまゝ、その後はすつかり沈鬱になつてしまつた。悩ましい顔をして、一日自分の部屋に引籠つてゐた。もつとも雪景色で寒くもあつた。それに生理的の倦怠もあつた。その夜は寢苦しかつた。

翌日はからりと晴れて好い天氣になつた。冬らしくない暖かい日光がちかちかと眩しくあたつて、雪解けの汚い水が地上のあらゆる物を濡れくさらせた。屋根から、樋から、下見から垣から、下水から往來から、いろいろな物の裏ひと一しよに、もやもやと水蒸氣が濛々しく立つた。ちえ子は今朝起きるとから、ぼーと顔を上氣させて、妙に興奮してゐた。外には明るい蒼空が仰がれながら、家の中はひつそりと雨垂れに圍まれてゐるのか明らなかつた。久しぶりに坊やのお宮參りでもして來ませうと、見送りに出た女中にはさう云つて、家を出た。外はまた東京名物のぬかるみで大變だつた

何處をどうして來たのか、泥沼のやうな市内から、泥田のやうな郊外をよくも無難に越えて、ちえ子は大久保の清藤の玄關先きに立つた。日曜日の外は、大てい社のやうに聞いてゐるので、欽子夫人も留守だらうと思つたか、

玄關番の書生はちえ子の顔を見ると直ぐ奥へ取次いで來て、どうぞと主人の書齋の方へ案内した。

「いつ先生はお歸りになりまして？」ちえ子は書生の出してくれたスリッパに、濡れた爪先をつゝかけながら聞いた。

「先生は片瀬の方で。先生にご用ですか？」

「あら、ぢや、奥さま今日はお宅ですの……それはよかつた。」

ちえ子は自分が鵠沼を引きあげた後から、宏造も東京へ歸つたやうな氣がして、何の理由もなしに、今もさう獨りぎめに決めてゐたのであつた。

宏造の事はとにかく、欽子は無論留守だらうと思つてゐた。で、もし宏造が歸つてゐなければ、玄關でたゞ樣子を聞いて、そのまゝ青山の墓地へ廻るつもりで、ちえ子も無駄足は覺悟であつた。ところが、欽子の在宅で無駄足にはならなかつた代り、ちよつと意外で面くらつた。それなら手土産の一つも買つてくるのだつたと、心にしよげた。

書齋へ通されて見ると、また一つちえ子は意外な事にぶつかつた。そこには一人の先客があつた。それは義弟の俊次であつた。

欽子はちえ子の姿を見ると、今まで編んでゐた編物を下に置いて、まあよく／＼、とストーブの横の肱掛椅子を立つて來た。俊次は低い安樂椅子に體を埋めたまゝ、にや／＼とちえ子の方を見た。片手に假表裝の洋書を開いたまゝ、椅子の肱掛に載せて、片手で卷煙草を袂から出した。女の子はすつかりもう俊次に懷いて、そばから覺束ない手附きでマッチを擦つてやる。

ちえ子はおや／＼と思つた。そして鵠沼の砂丘の蔭で、自分が宏造の卷煙草に火をつけてやつたあの時の事が、直ぐ頭に浮んで、變な氣がした。

「僕は今日は、清藤さんにやらして頂いてる飜譯の事で、少し伺ひたい事があつて、もうお歸りになつたかと思つて、こちらへ上つて見たんですが……」と俊次はいひわけがましく云つた。「姉さんは、よくこの道の惡いのにお出かけでしたね。」

「暫く坊やにご無沙汰したものですから、急にお墓參りを思ひついて……そのついでと云つては失禮ですけれど、何だかお訪ねして見たくなつて……でも、大ていお留守だらうと思ひましたわ。」

「今日は社を怠けましたの。あんまり道が惡いものですから、子供に幼稚園を休ませたら、今度はわたしまでも子供にせがまれて休んでしまひましたの。わたしが毎日出てゐるものですから、たまに家に居てもらふのが、子供には何より嬉しいんですね。有職婦人の悲哀ね。」と欽子は癖のある口つきをして寂しく笑つた。

「愛子ちやんも、ぢや、おつかさんの時間を横領するわけなんだね。」と俊次は子供の方へ笑ひかけながら、「おとなにしないと、あなたも高級文明の與ふる快樂生活の邪魔者にされますよ。」

「冗談でせう！ そんなハラドックスはないわ。」と欽子が横から云つた。いくらかむつとしたやうに赧くなつて、「わたしは母性愛の爲めに、悲しんでるぢやありませんか。」

「いや……たゞちよつとウォルスの口眞似をしたばかりですよ。あなたの母性愛は僕だつてよく分つてゐますから……」と俊次は恐縮して頭を掻いた。

「子供に分らないからいゝけれど、分つたら随分厭なことよ。」

「取消します。ご免なさい。」と俊次はしよげて、持つてゐた書物をそつと閉ぢた。

それはウォルスといふアメリカ人の著書で、

「クライマックス・オヴ・シヴィリゼーション」といふのであつた。俊次が宏造に飜譯をやらせてもらつてゐると云ふのも、その本である。

「ねえちえ子さん、日本の女はまだそれほど墮落しませんわねえ。自分の快樂の爲めに、子供を邪魔にするなんて。」

「そりやね、持つて見りや可愛いんですものね。」

「持つて見りや可愛いけれど、ぢや、持つて見なけりや？」と俊次が懲りずにまた交ぜかへした。

「まあ分らないと云ふのが正直でしよ。わたしさう思ふの。こんなことを云ふと欽子さんに笑はれるか知らないけれど、今度もし子供を持つなら、夫の種だの、男の血を分けたのだと、そんな人に授けてもらつたやうな子ならいらない。何とか、かう……自分の意志だけで生れた、それこそ體も魂も本當に自分のものだと思ふやうな子が欲しいわ。マリヤでもお祈りしたら、さういふ奇蹟は來ないかしら？」

「そりや單細胞動物に退化すりやいゝ。姉さんも妙なことを考へてゐるな。」と俊次はもう興味もなささうに煙草を吹かし出した。

欽子は二人に喋らせて、自分は默つてちえ子の顏を眺めてゐた。そしていつものちえ子とは違つてゐるやうに思つた。そのいふことばかりでなく、昔からおしやれと云はれたほど身だしなみの好い人が、あまり恰好もよくない束髮がそゝけて、顏の生地なぞも荒れてゐる。時々下瞼から頰へぽつと間歇的に充血するのも、決して健康な血色とは見えなかつた。

「ちえ子さん、あなた當分鵠沼の方にいらつしやるやうなお口ぶりだつたのに、どうしてこのお寒いのに歸つていらしつたの？ お體はもういゝんですの？」

欽子はしかし、ちえ子の健康を誤解してゐた。ちえ子は體の上でも、また心の上でも殊に、さう聞かれた欽子の前に面伏せでならないわけがあつた。彼女はわざと外の話にそらして、そろそろ歸り支度をした。

「まだ、およろしいぢやありませんか。」と欽子はお世事でなく留めた。「せつかくこの道の惡いのにいらしつて下すつたんだから、もつとごゆつくりして下さいな、ご一しよにお午でも食べませう。ねえ田澤さん、まづい洋食でも取るわ。」

「え、そりや……僕は結構ですけれど……」と俊次は變にまごまごしながら、「姉さんはどうです？」

「わたし、まだ青山へ廻らなければならないから、せつかくですけれど……」

「これから廻るんですか。それなら僕も一しよに失禮しませう。」

「お後がお寂しくなるわ、あなたはまだいゝでせう。」

「僕こそもう失禮してもいゝんですよ、今朝からもう長尻してるんですから……こんな日には電車に乘るんだつて、姉さん一人ぢや大變でせう。坊やには僕もご無沙汰してるから、一しよにお供しませう。」

ちえ子も内心實は、あんまり道が惡いから、青山へ廻るのはどうしようかと迷つてゐたのであつたが、さう云つてくれる俊次の手前、もう見合せるわけにも行かなくなつた。二人は一しよに清藤の家を辭した。

「どうぞあの、ご主人にもよろしく。」とちえ子は、玄關へ見送つて出た欽子に輕くさう云つて「時々は、こちらへもお歸りになりますの？」と俯いてコートの前を合せた。

「いえ、仕事が一段落つくまでは、なるべく行つたり來たりしたくないと云つてますから……歸れば、一日つぶれてしまひますからね、

「お仕事つて、よつぽど日にちがおかゝりになるんでしよ？」

「さあ……三月一ぱいもかゝりませうか、たしかな事は分りませんけれど。」

「まあ、それはお寂しうございますね。ちとお暖かな日にでも、お嬢ちやんとどうぞ手前どもへも……愛子さん、小母さんと毬投げしませうね。」

俊次は一人先きへ出て、門の外で待つてゐたが、ちえ子が出て來ると聞いた。

「何を話してたんです？」

「別に。たゞご挨拶よ。」

「あの人、何か姉さんに話さなかつたですか？」

「いゝえ。なあぜ？」

「實はね、今日午から銀行だか金貸だか、あの家の評價をするんで、見に來るんださうですよ。」

「え、どう？」

「つまりあの家を擔保に、金を借りようといふんでせう。あの人はそんな話を平氣で僕に話すんですからね。」

「そりや、あなただから話すんぢやないの。」とちえ子はさう〳〵笑つた。

「ところが、姉さんにも一しよに午飯を食べてくれ、と云つてたぢやありませんか。あの人のありやお世事ぢやないんですからね。午からさういふ手合ひが來るつてのに、そんな事は平氣らしいんですね。もつとも、人に話して恥かしいやうな意味の借金ぢやないんだけれど。」

「ぢや、どういふ借金？」

「清藤さんの洋行費ですつて。」

「まあ、さうお。」とちえ子は思はずぬかるみの中に立留つた。

「姉さん、そら、自轉車にはねをかけられますよ。こつちへお寄んなさい……僕も今日初めて聞いたんですが、清藤さんも今隨分窮境にゐるんですよ。」

文明批評家として世間に賣り込んで來た清藤宏造が、近ごろ社會問題や政治問題について、筆にも口にも（箇人間ではさらでもないけれど）一から議論らしい議論を出さなくなつたのを、俊次も不思議に思つてゐた。そして婦人問題ぐらゐでお茶を濁してゐるのを、飽きたらなくも思つた。今日欽子夫人の話で初めて知つたのであるが、去年の夏ごろ、宏造がある雜誌と、二三の講演とで、ユートピア論とかいふものを發表した事があつたさうだ。それが官憲の神經を意外に尖らせてしまつた。それまでも輕い注意人物ぐらゐにはなつてゐたらしかつたが、それ以來すつかり危險思想の持主と睨まれてしまつたのである。そして著述にも講演にも、その筋の嚴しい壓迫が加はつて、今のところ、せいぜい婦人問題か、畠毛ちがひの文藝論ぐらゐでお茶を濁してゐるより外に、仕方がないのであつた。

去年の暮、例の欽子の雜誌社の歳末奉仕の後で、宏造が主宰する社會科學の研究團體を急に解散したのも、やつぱりその筋からの關渉からであつた。同時に宏造は、從來關係のあつた集會や結社、新聞や雜誌など、さういふ機關から一さい手をひいて、新年早々片瀬へ引込んでしまつた。そして婦人問題の研究と著述とに沒頭してゐる。それも實は洋行費の調達の爲めである。

「僕はそのユートピア論といふものは知らないのですが……一から噂も聞かなかつたくらゐだから、大した反響もなかつたんでせう。けれど、さう睨まれてしまつちや手も足も出ないから、息抜きに二三年外國へ行つて來るんださうです。ちやうどあの人の箔附けにいゝでせう。日本にゐちや困るばかりですからね。」と俊次はあまり同情もしてゐないらしい調子で、最後にさう云ひ足した。

二人は省線の電車に乘つてゐた。新宿から市線に乘り替へて、青山の墓地へ廻るのであつた。省電はまだよかつたが、市電の混雜はなかつた。みんな泥沼の町を捏ねて來て乘るので、それでなくても排他的の乘客が、一そう露骨に排他し合つた。

「俊次さん、一たい洋行するには、どのくらゐいるものですの？」

青山で電車をおりてから、ちえ子はふと思ひ出したやうに聞いた。

「何？ 金ですか。さあ……僕もよく知らないが、當節の事だから一萬や、それ以上の用意がなくつちや踏み出せないでせうよ。」

「さう。」

「清藤さんの俄仕込みの婦人問題の著述が、果してどのくらゐな金になるものでせうかな。あの家だつて、大した融通は出來ないでせう。でも、無いよりはね、まんざらの無産でもないんだから……それに奧さんがあのとほり經濟的獨立をしてゐるから、後の心配はありませんね。」

「さうね、欽子さんのそれは強味ね。」

そのまゝちえ子は、獨りで考へ込んでしまつた。せつかく墓參をしても、何だか外に心を取られてゐるらしかつた。

歸りはずつと市內電車で、二人が牛込まで歸つた時には午もよほど過ぎてゐた。俊次は姉と一しよに行つて、午飯の馳走にならうかとも思つたが、ちえ子が何とも云はないので、諦めて自分の下宿へ歸つた。ちえ子は自分が一から空腹も感じてゐなかつたので、氣も付かなかつたし、それに口を利くのも懶いほど沈鬱になつてゐた。家へ歸つても、直ぐ自分の居間へ這入つてしまつて、茶の間に老母が出てゐたのを、覗いても見なかつた。老母は娘の歸るのを待つてゐて、まだ午飯も濟まさずにゐたのである。

「ちえさん、お前おひるは止めなんかえ？」と老母が障子の外から聲をかけて這入つて來た。

「おなかが空かないのよ。」

「せつかく一しよにと思つて待つてゐたけど、一人で濟しましたよ。お前はまた、時分どきも忘れて、この寒いのに何處を歩いてゐたのさ。」

「坊やのお墓參りをして來たのよ。」

「命日でもないのに、よりによつてこんな日に。」と老母は胡散さうに云つたが、それでも年寄りらしく頷いて、「お墓參りもいゝが、お前が出てしまふと、薫までがいゝ事にして家をあけるからね。若い者を獨りで出歩かせると、外でどんな眞似をし散らすか……こつちの目が屆かないから案じられますよ。」

「大丈夫よ、今の若い人は利口ですもの、おつかさんが案じるやうな、そんな自分の爲めにならないやうな事は、させたくてもしやしないわ。」

「だつて今日は、男の連れがあるんだよ。それならわたしも出しはしなかつたんだけど、後で鐘やに聞いて呆れたのさ。男の連れといふのが誰だとお思ひだえ？ そら、いつかの話のそのまゝぐづ／＼になつてる、あの楠本とかいふ家の息子さ。」

「まあ。」ちえ子も初めて氣を留めて聞いた。

「流石にそれでもね、自分ぢやきまりが惡いかして、妹を誘ひによこしてね、自分は向うのコーヒー屋とかで待ち合せてゐたんださうだよ。ちやうどまた鐘やが通りかゝつて、三人がそこから繋がつて出るのを見たんだよ。男も男なら、兄のそんな使ひをする妹も妹……いえね、わたしはそれよりも、あゝいふ話のあつた男と、平氣の平ざで遊び歩く薫の氣が知れないよ。」

「さうね……おつかさんには分らないわね。」

「何だとえ？」

「まあ出かけた後ぢやしやうがないわ。これから氣を付けるやうに、歸つたら云ひませう。」

「云はなければ困りますよ」みつちりいつてあの子にも氣を付けさせる、云ふお前はなほ氣を付ける、それでないと、わたしもこの年になつて、一人で心配しなけりやならないからね。」

「何だか、變に聞えるわね。」とちえ子は厭な顏をした。

「わたし、薫から聞いたんだけど、健作が立つ時に、氣まづいことをお前に云つたさうぢやないかえ。いくら先代の目がかゝつてゐても、あれは餘所から來た人間だからね。お前も家を大事と思つたら、あれにそんな氣を起させないやうに氣を付けなければね。何にしても夫婦の間の鎹がなくなつたんで、後でも出來るまでは安心がなりませんよ。家附きの娘は我儘でもいゝどころか、それこそ女の身に餘るやうな苦勞を一人でしなけりやならないから、お前も可哀さうだよ」と老母はしみ〴〵云つた

それはちえ子をして、却つて取留めもない反抗心をいだたせたのであつた。頭がむしやくしやして、[illegible]する。老母が離れの隱居所へ引込んだ後で、女中に安火を入れさせて橫になつて見た。そしていら〳〵する自分を、おつと自分で抱き締めるやうにしてゐた。そのうちに安火がほか〳〵して來て、つい、うと〳〵した。

ふと何かの氣はひに目を開いて見ると、薫が安火の向うにこ〳〵と立つてゐた。いつの間にか電氣も來てゐた。目を開けたばかりのちえ子には、少し目ぶしい照明の下に、その思ひ切つて派手好みの外出姿が浮き出して見えた。

「たゞいま。」と薫はべつたり坐つて、小母さま、今日は本當に面白かつたのよ。」

「お歸んなさい。楠本さんの兄さんがご一しよだつたつてね。」

「あら、どうしてご存じ？ えゝ、さうなの。わたし、思ひ切つてコケッチッシュに見せてやつたのよ。そりや面白かつたわ。」と薫は着崩れた體をくねらせて笑つた。

「いゝわねえ。あなたなんか自由で、したい事が出來て……」

ちえ子は澁い目をこすりながら、小さい溜息をついた。

有識無産階級

三月の聲を聞くと、氣の早い世間は花より先きにもう春めいて來る。上野は恆例の繪の展覽會から、先づ物見高い都會人の行樂をそゝつた。殊に去年あたりから展覽會ばやりで、何々記念だとか、何々の宣傳だとか、いろ〳〵な主意の、いろ〳〵な展覽會が、この月へ這入つてからも相前後して開催される中に、勤儉週間をあてこんだ婦人副職業展覽會といふのが、お茶の水に開かれた。會の性質上、[illegible]子の雜誌社でも幾らか關係があるらしかつた。雜誌でも前もつて吹聽してゐた。

ちえ子は雜誌でその吹聽を讀んだ時、是非行つて見ようと思つた。開會の三日め、明方の風が落ちて、朝から春らしい暖かな日になつたので、薫を誘つて二人で出かけた。薫は出歩く事なら何でもよかつた。

しかし、展覽會としては恐らくこれほど地味な展覽會はあるまい。そこに陳列されたものは、電話の交換器や、タイプライタアや、ミシン臺や、それからこま〳〵したものになると、封筒貼りの道具だとか、南部表の編みかけだとか、いづれにしても若い女の興味を引くやうなものではなかつた。薫は半分も見ないうちにうんざりした。それでもちえ子に引張られながら、一順見て廻つて會場を出ると、いきなり目についたベンチへぶつかり腰をおろした。

「あゝあ、くたぶれちやつた。」

「お氣の毒さま、とんだお付合ひで。」とちえ子

も並んで腰かけて、「つまらなかつて?」と聞いた。

「だつて……小母さまはあれが面白くつて?」

「だから、面白い目をしに來たんぢやないわ。薫さんも今は何だけれど、わたしに引張られて、あゝいふものを見せられたつけと、いつか思ひ出す時もあるわ。」

「どうして?」

「分らなければいゝわ。」とちえ子は帶の間から、おとなしい女持ちの時計を出して見て、「ぢや、今日は夕方までお暇が出たんだから、これからあなたのその、閨秀畫家とかの展覽會へ廻つて、お午はあそこの食堂で頂きませう。」

「本當? まあ、有難い! ぢや急ぎませう。」

「現金ねえ。」とちえ子も仕方なく笑つて見せて、「……そのはずだけれど、氣樂だわねえ。」

二人がベンチを放れて、そろ〱出かけようとすると、ちやうどそこへ清藤宏造が會場からひよつこり出て來た。ちえ子はスカーフごとお時儀をして、慌てて取つて、そばで見てゐても可笑しいほどどぎまぎした。それに相手の宏造はまた、いゝ年輩の男のくせに、妙にてれたり羞かんだりする風があるので、それも薫の目にはをかしかつた。二人は鵠沼の砂丘の蔭のあれ以來である。

「今日はまた變つた處でお目にかゝりましたね。こんな好い日に、副職業の展覽會とはご殊勝ですな。」と宏造は笑つた。

「あなたこそ……片瀬からわざ〱出ていらしつたのですか?」

「わざ〱出て來たには來たんですが、わたしは例の雜誌社の主幹がこちらへ來てゐると聞いて、實は主幹に會ひに來たので、展覽會は素通りです。何かお目に留つたものがありましたか。」

と宏造は片手のステッキをそばのベンチへ置いて、抱へてゐたオーヴァのポケットなぞ探り出した。

「小母さま、わたし失禮ですけれど、一あし先きへ行つて、向うで待つてゐるわ。」と薫は耐らなくなつてちえ子をつゝいた。

「さう。」ちえ子はちよつと思案してゐたが、「ぢや、食堂で落ち合ふことにしませう。」と小聲に云つた。

薫は面白くなささうな顏をして一人去つた。去りぎはにそれでも宏造のはうへも會釋をしたが、宏造はその時ポケットから捜し出した煙草に火を移してゐて、氣が付かなかつた。

「わたしは素通りしただけだけれど、あゝして見ると、婦人の職業といふものも限られてゐますね。何だか……ぢやありませんか。」

「さうですわね。わたしも何だか心細いやうな氣がしましたわ。」とちえ子も頷いたが、スカーフを掛けて、「あの、お歸りになりましたら、どうぞ奥さまによろしく。」と云つた。

「は、わたしは實は昨日出て來ましたんで、これからまた片瀬へ……」

「おや、さうでいらつしやいますか。ぢや東京驛へ? ちやうどそれでは、わたしも日本橋まで參りますから。」

「さう云へば、お連れは?」

「失禮して、一あし先きへ參りました。」

「や、それは。ぢや、どうぞいらしつて。わたしも途中までお供しませう。」と宏造はオーヴァへ手を通した。

地味な展覽會ではあるが、それでも天氣が好いので相當に人出があつた。その人目の中で、いつまでも男と立話をしてゐるのはちえ子も氣がさした。二人はそこの構内を出て、ちえ子は市電に、そして宏造は東京驛まで省線で行つて、十二時發かの汽車に乘りたいやうなことを云つてゐたが、それには時間もないのに、一から急ぐでもなく、ぐづ〱と一しよに市電へ

乗つてしまつた。そして、ちえ子の行く、日本橋のそのデパートメントへも一しよについて行つた。

それはちえ子も少々迷惑でないこともなかつた。自分一人ならとにかく、先きへやつて待たせてある薫と、そこで食事もする約束であるだけに――けれどお愛想にもせよ、自分のはうからお急ぎでなければ、ちよつと御覽になつていらつしやいませんかと勸めたのが、もしいけなければいけないのだ。宏造はたゞそれを正直に取つたまでである。薫さんには後でわたしが慍られませうと、ちえ子はさう腹をきめて、宏造と一しよに閨秀畫家の展覽會場を一順見て廻り、それから食堂を覗いて見たが、どうしたのか、薫の姿は見付からなかつた。

「どうです？　食事をなさるなら、どこかそこらのレストーランへご案内しませう。こんな雜沓の中で婦人が……あんまり見つともいゝものぢやありません」と宏造は苦りきつてゐつた。

婦人畫家の揃ひも揃つた模倣細工に、いゝ加減退屈させられた上に、あたりのもの皆すべてが中にも物欲しさうに百貨店をぶら／＼見て廻る女客と來たら、内容も個性もない模倣づくめの輕浮さに、宏造はすつかり心持惡くさせられてしまつた。彼は氣むづかしい顏をして、ずん／＼先きへ行くので、ちえ子も何だかついて行かなければならないやうな氣持で、ふらふらと一しよにそこを出てしまつた。

「あなたは今日は日本髮ですね。」と宏造は店を出ると云つた。「あなたにはそれがいゝです。今もさう思つたんだが、あそこへ這入つてる女なぞの好みなり、スタイルなりはどうでせう。たゞ新しくさへあれば、猫も杓子も流行流行で、自分に似合ふも似合はないも、そんな事は考へてる餘裕もないほど上つ調子なものですね。わたしのやうな男が見てもさう思ふんだから、あなたなぞの目には隨分苦々しいでせう。」

「さうばかりでもありませんわ。この節は一たいが派手好みですから、とのがたの目にはたゞぱつとして、おんなじやうに映るのかも知れませんが、あれでよくご覽になると、どうして、一人一人に違つた好みがあつて、わたしなぞどれもみんな感心させられますわ。今の若いお孃さんたちは、ご自分の美を表現するのに、そりや自由で大膽ですから。」

「さうですかね。その新しい傾向が、われ／＼男の目には無理解の反感をそゝるんですかね。さうかも知れません。一たい男性は女性に對して、妙に保守的のものですからね。」

「あなたはそれでも、女といふものに新しい理解も同情もお持ちですわ。よつぽど進歩的ですわ。」と云つて、ちえ子はふとその事を思ひ浮べながら、「奧樣にだつてあなたは……」

「わたしが、欽子に？」

「いえ、洋裝あそばしてるくらゐですしさ。」

「あれはわたしがさせてゐるんぢやありません、便利と經濟から自分でやつてゐるんです。あなたもしかし、鵠沼ではずつと束髮でしたね。わたしは第一印象がさうだつたからか、日本髮でない時のあなたは、何だかあなたでないやうな氣がしますね。」

「やつぱり保守的の女だからなんでせう。」とちえ子は笑つて、「鵠沼では本當に失禮しましたわ。あれから宿へ歸ると、急に東京へ歸ることになつたものですから……」

「さうのやうで……」と宏造は默つてしまつた。そして物思はしさうに沈み込んだ。

二人は暫く、口も利かずに步いてゐたが、しかしちえ子はぽつと顏を充血させて、男と反對に興奮してゐた。鵠沼の事を思ひ出すと、あ

の時の動作の爲うちが今更のやうに腹立たしかつた。

「疑るにも程がある、あんな事ぐらゐ何だらう？　わたしだつて自由意志があるわ。」

ちえ子は獨りで激して、いら〳〵と夢中で歩いてゐた。

「こゝで失禮しませうか」と宏造は曲り角へ來ると云つた。

「あら、レストーランはどうなりましたの？」

「あなたはお友達へありませんか？」

「ありませんとも！」とちえ子は誰にともなく反抗的に云つて、「もう、かれこれ一時ですもの、わたし、今朝早く宅を出ましたものですから……」と云ひわけらしく附け足した。

そのくせ宏造に案内されて、そこもやつぱりカフェー式の洋食店のかど口まで來ると、ちえ子は意氣地なく心怯れがした。しかし空腹は全く空腹だつた。時分どきで階下は相當に賑はつてゐたが、宏造は直ぐ二階へ上つた。二階はがらんとして靜かだつた。そしてテーブルとテーブルの間にはスクリーンが仕切つてあつた。

ちえ子も氣が付いてゐたのであるが、今日の宏造はどこか屈託さうに元氣がなかつた。それはしかし、一つは胃の加減もあつたと見えて、飲み食ひしてゐるうちに、だん〳〵さういふ樣子もなくなつて來た。

「第一印象と云つても、初めて東京驛でお目にかゝつた時の事はよく記憶しないから……わたしのはつきり記憶してゐるのは、歌會の日に宅へいらしつたあの時です。あの時は同じ日本髪でも、さういふ色のきれではなかつたですね」

宏造は一本のビールに目の縁を紅くしながら、好い機嫌になつて、また髪の事を云ひ出した。

「あら、よつぽど日本髪が氣におなりになると見えますわね。ようございます、これからお目にかゝるには、こんな髷なぞに結はない時にしませうよ。」と云ひながら、ちえ子はつい頭へ手をやつて見て、「あの時はどんな手がらを掛けてましたかしら？」

「今日のは赤いですね。」

「これ、とき色ですの。」

「あの時は紫のうすいやうな……髪の毛が非常に黑くつや〳〵して見えましたよ。」

「まあ……それなら藤色ですわ……あなたはなか〳〵お目が利きますわね、驚いたわ。」

宏造は少しきまり惡さうに笑つた。

「あなたが日本髪をそんなに仰しやるのは、わたし分りましたわ。あなたは近いうちに外國へいらつしやるんですつてね、それで日本の事が急に心を引かれ出していらしたんでせう。」

「さうかも知れません。」と云つて、宏造はまじ〳〵と相手の顔を眺めてゐたが、一つ頭を振つて、「わたしの外國行きも、しかしどうなりますかな。」

「でも、奥さまから弟が伺つた樣子では、何ですか差迫つて……」

「迫つてはゐるんですが、動けないんです。」

「動けないと仰しやると？　立入つた事を伺つていゝか惡いか存じませんけれど……でも、何だか氣になりますわね。」

「有難う。欽子はどういふ風にお話したか知らないが、要するに先立つものは金ですからね……からなるとたゞのプロレタリアよりも近代の知識階級の無産者は一そう見じめですよ。」と宏造は急に暗い顔をした。

そしてぽつり〳〵話すところによると、宏造が外遊の費用は、正月から片瀨で書いてゐる婦人問題の著作の原稿料の外に、今住んでゐる大久保の家を擔保に借金をするはずで、貸主

とも略ぼ下調べも出來てゐた。ところが近ごろの一般的不景氣から、家作の景氣も一時の三分の一にも下つて、貸主も二の足を踏み出した。こちらの借りたいといふ半額でも氣乘りのしない風なので、宏造も一先づそのはうは諦めたのであつた。そして婦人雜誌社のはうで、現在のその著作以外に、更に或る條件のもとに金策を試みて見た。主幹もいろ〳〵心配はしてくれてゐるが、出版界もやつぱり不景氣は同樣であるから、先づむづかしさうな今日も口ぶりだつたと云ふので。さつきから宏造のとかく元氣がないのも、その屈託からであつた。

「それぢや、あなたもご心配ですわねえ。」とちえ子も心から同情して云つた。「奧さまには何か、いゝお考へもありませんの？」

「あれも子供といふものを抱へてゐますからね、ただ自分ばかり考へるわけにも行かんのですね。あの家も實は欽子の名義になつてゐるので、擔保に入れようといふことは自分から云ひ出してくれたのですが、今お話するとほり、擔保では駄目なんで……ところが賣るのなら、今直ぐ行かれる人へ賣れるんだけれど、それはまた反對なんです。あそこの地主の息子の住居に、ちやうど屋敷續きでもあるし、相當の値なら買ひたいと、とうから云つてるんだが、賣るには欽子が絶對に反對で……どうも仕方がありません。」

ちえ子は口を出す事でもないので、默つてゐた。

「もつとも、わたしが日本を去るさへあるに、その爲めに住んでる家までも人手に渡してしまつては、せつかく夫婦してこれまでに築きあげて來た家庭が、根こそげ解體されるわけですからね。後には父親にはなれた子供もある、自分も活きて行かなければならない、母子が生活の根城まで失つてしまふといふ事は、欽子の身に取つては……」

「ですが、それは一時のご辛抱ぢやありませんか。あなたが歸つていらつしやれば、またどうにでもなる事ですもの。」

「そりやさうです。けれど、欽子にはまた欽子の考へもあるから……わたしもあれの意志を蹂躙するわけにも行かないから……」

「だつて、場合が場合ですもの、奧さまも讓歩なすつてもいゝと思ひますわ。そりやご自分の身もお考へにならなきやならないけれど、あなたのはうは今差迫つてるお體なんぢやありませんか。」とちえ子はつい熱して云つた。

「あなたならさうお思ひになるはずです。けれど、欽子にはまた女が違つてゐるんですからなあ。」と宏造は溜息をついた。

ちえ子は云ひ過ぎたと氣が付いて、獨りで赧くなつた。しかし彼女は、男の態度が齒痒くて耐らなかつた。深い事情も知らないけれど、宏造の口ぶりから想像して、たゞ欽子が頑固らしいやうな氣がした。

「あなたは結局それで、どうあそばすの？」とちえ子は改めて聞いた。

「どうすればいゝんですかねえ、自分で自分の身の處置が分らないので……」

宏造は飲んだビールもすつかり醒めてしまつた。一たい神經質といふのか、それとも人間が正直で、そして惡ずれをしないせゐなのか、壯年の人のやうでもない羞かみ家の彼は、つまり感情を僞はる事が出來ないのであらう。今も氣の毒なほど悄げ込んでしまつた。

羞かみ家であるだけに、最初は人好きも惡い、公衆相手に講演などする時は、場慣れてゐるからさうでもないが、初對面の人には妙に固くなる。それが相手には澄ましたやうに見えたり、氣取つたやうに見えたり、横柄にすら見えたりする。ちえ子にもさうであつた。しかし二度三

度と會つて見ると、その生々しい、といふ年でもないかつ離かみに微笑させられるやうな可愛げがある。とにかく憎めない宏造であつた。今もさうして人前もなく悄げ込んだのを見ると、氣の毒も氣の毒であるが、寧ろちえ子はいぢらしいやうな氣持が先きに立つた。

こゝからはちえ子も省電で歸るはうが近いので、宏造と一しよにまた東京驛まで行つた。驛で別れる時には、宏造ももう不斷の快濶にかへつて云つた。

「ぢや、こゝで失禮しませう。一日どうぞ片瀬へもお出かけ下さい、今日のやうな愚癡はもうお聞かせしませんから。海岸でも地びきが引けたりして、あの頃とはすつかり賑やかですよ。—」

「え、事によつたら、伺ふかも知れませんわ。」

とちえ子は何か考へながら云つた。

「是非お待ちします。本當に今日は失禮しました、面白くもない愚癡話をしまして……」

「いゝえ決して……そのお話ですが、失禮ですけれど、わたしにも少し考へさせて下さいましな、ぢや、ご免あそばせ。」

ちえ子はちよつと會釋をするなり、急に逃げるやうにして、電車の改札口の方へばた／＼駈け出した。

どう行き違つたのか、デパートメントストアの食堂で落ち合はずにしまつた薫の事が、ちえ子は氣になつてゐた。袷の展覽會場では見あたらなかつたから、吳服の陳列場でもひやかしてゐたのかも知れない。自分のはうから約束した事でもあるから、もう少し待ち合せて見ればよかつた。ちえ子は宏造についてそこの店を出てからさう思つた。宏造とレストーランにゐる間も、自分たちとは後になつた薫が、百貨店の食堂で待ちぼけてゐるやうな氣がした。そしてどこか外へ遊びに廻つてくれゝばいいが、もし惱つて一人で家へ歸つてしまふやうなことがあると、ちえ子は早く自分が先きへ歸つてゐなければまづいと思つた。さう氣が付くと急に氣がせき出して、改札口で誰か後ろから體にさはつたやうな氣がしたが、振向いても見なかつた。

一あし違ひで電車は出てしまつた。その代りがらんとした後の車へ、仕方なくちえ子はゆつくりと腰かけると、續いてぽつ／＼這入つて來た乘客の中から、一人の紳士がにや／＼笑ひながら直ぐ隣りへ腰をおろした。

「やつぱり辻村さんの奥さんで。さつき通りでお見かけした時から、どうもさうのやうだと思ひましたが……只今ご主人はお留守ですか?—」

さう話しかけられて、ちえ子はびつくりして顏を見ると、それは片瀬とおなじく、辻村の家では小石川の辯護士でとほつてゐる健作の知人であつた。

「おや、あなたでいらつしやいましたか。主人はついこのごろまで北海道でしたが、只今はこちらで……近いうちにまた出かけるやうに申してをります。」

「馬鹿にご活動ですな。どうです、だいぶ春らしくなつたぢやありませんか。今日はどちらへ?」

「えゝ、ちよつと用足しに下町まで……」

「われ／＼も山の手の住人ですが、下町へ來ると、ちよつと午飯を食ひに這入つても、まはりの空氣からして山の手とは違ふからかなひませんな。」

ちやうど發車したので、ちえ子は横を向いてしまつた。自分たちが洋食店から出るところでも見たのかも知れない、あれからずつと後をつけて來たのかも知れない。遊び好きの道樂者で、如何はしい人物のやうに健作からも聞いて

ゐたが、厭な男だと思つた。

辯護士は飯田町の停車場で降りた。降りる時に、

「奥さん、ちと小石川のはうへもお出かけ下さい。僕のところでは、始終奥さん連の會があつて、なかなか賑やかですよ。一度お招きしませうかな。や、ご主人によろしく。」と變なことを云つて行つた。

ちえ子はいつものやうに市ケ谷で降りて、そこから俥で家へ歸つた。薫もつい今歸つたばかりで、おそい午飯を食べてゐたが、別に憤つてゐるやうな樣子もなかつた。ちえ子は自分が食事を濟まして來ただけに、一そう氣が咎めた。

薫は約束どほり、デパートメントストアでちえ子を待つてゐたが、宏造が一しよに來たのを見て、わざと二人の目から避けたのであつた。ちえ子たちが歸つたあとで、一人でゆつくりと繪も見、ついでに呉服なぞひやかして、それから銀座へ廻つて歸つた。

「だつて、わたしは初めてお目にかゝつたんですし、それに高名の方がおやあるし、何だか窮屈で厭でしたもの。小母さまが食堂を覗いていらしつたのも知つてゐたけれど、わざと遠くのはうから見てゐたわ。」と薫は正直に云つた。

「まあ、人が惡いわね。」

「ご免なさい。だけど、話に聞いたより優しさうな方ね。」

ちえ子は思はず微笑まされた。

「それなら、何も窮屈がることはないぢやないの？」

「わたし、清藤さんて、もつと怖い方かと思つた。」

「どうしてさう思つて？」

「俊次さんの話では、何だか過激思想で警察から睨まれて、日本にも居られないんだつてぢやありませんか。そんな人にも見えないわね。」

「思想と行動とは別ですもの。わたしが知つてるんだつて、そんな危險な人ぢやないわ。警察が無理解だから……本當にお氣の毒よ。」とちえ子はしんみり云つた。

「それで、外國へ逃げていらつしやるんですか、お獨りで？　後に殘つた奥さまやお子さまも、お可哀さうね。」

「ところが、あんまりお可哀さうでもないことよ。どれ、着更へませうか。」とちえ子は茶の間を立つた。「宅はまだ歸らないでせうね　電話でもかゝつて來なくつて？」

「來ないでせう。わたしも歸つたばかりで知らないけれど、誰も何とも話がないから。」

「母は？」

「いつもの隱居所よ。」

「母はあなたが一人先きへ歸つた事を、どう思つてゐて？」

「わたし、小母さまはちよつと買物に廻つたから、一あし先きに歸つたと、たゞさう云つておいたわ。」

ちえ子は着更へを後にして、老母のところへ先きに顏を出した。老母は四五日たまつた新聞紙を揃へて、好きな講談物を讀み耽つてゐた。薫とちえ子と二人が一しよに歸らなかつた事などは、別に問ひだてもしなかつた。

薫は自分の食べた食器を臺所へさげて、それから二階へあがつて、自分の居間に脱ぎ捨てておいた外出着を、疊んだりさ干したり、可なり手間を取つて片付けた。さうしてゐる間に、ふと百貨店で目に付いた今年の春の新流行を思ひ出すと、急いで二階を降りた。とても氣の利いた裕柄を、小母にも話さずにはゐられなかつた。しかし、ちえ子はいつもの居間には見えなかつた。障子も唐紙も閉めきつた納戸の押入の前に、さつきのまゝの裝でぼんやり坐つてゐた。

「あら、またお着更へなさらないの？」

障子の開いたのも氣付かなかつたらしいちえ子は、驚いてその聲にはつと振返つた。その目は險しく光つて、いつにない怖い顏に見えた。

薫は見ては惡いものでも見たやうな氣がして、そのまゝ默つてそつと障子を閉めると、こそこそとまた二階へ上つた。

ちえ子の前には押入の唐紙が開いて、中に据ゑられた六號型の金庫の扉も開けてある。抽出が一つ膝の前に拔き出されて、國庫債券が十枚ばかり散らばつてゐる。ちえ子は溜息をついて、それを掻き集めて、もとの抽出へしまつた。ついでに外の抽出も開けて見たが、何かの株券や證書のやうな物ばかりで、債券らしいものは見えなかつた。それからまた暫く金庫の前でぼんやり考へてゐたが、やがて重い扉をがちやりとやけに閉めると、ハンドルを一つ廻し、唐紙を引いて立つた。

ちえ子がそろ／＼着物を着更へて、女中に夕飯の支度の指圖をしてゐるところへ、俊次がその緣先きへぶらりとやつて來た。

「姉さん、今日は晩飯をご馳走して下さい。臨時だから支度の都合もあるだらうと思つて、早く來たんです。今日は天氣が好いものだから、宿の夫婦とも成田とかへお詣りに出かけてしまつて、雇ひ婆さん一人ですから。」

「わたしもさつき歸つたばかりだけれど、何だか氣分が惡くつて……晩は爺やに任せてありますから、お望みのものを爺やに註文して頂戴。」

「註文は別にないから、何でもご馳走を頼むよ、」と俊次は立つて行く女中にさう云つておいて、「今日は清藤さんとご一しよだつたさうですね。」と姉の顏を見た。

「薫さんが話して？」とちえ子は心持ち瞼を染めて、「けれど、宅はあの人嫌ひだから、あなたも話さないでね。」

「えゝ。兄さんはなぜですか、僕が清藤さんへ行くのでも善くは云ひませんよ。」

「ですから……薫さんにもあなたから口留めしておいて頂戴な。」

「今ちよつと注意はしておきました。清藤さん何か變つた話がありましたか？」

「別に……」とちえ子は外の事を考へながら、「俊次さん、あなた國庫債券の事をご存じ？」と聞いた。

「國庫債券？ 經濟學で少しは讀んだけれど……」

「いえね、利札が多く附いてるのと、少く附いてるのと、値が餘程違ひますかね。」

「そりや違ひませう。利札が附けば、償還期限が近づいてゐるのだから、それだけ値が高いでせう。なぜですか？」

「さう、債券の期限がね。」とちえ子はまた考へるやうな目をした。

さう話してゐるところへ、健作が事務所から歸つて來て、そのまゝ二人は立つてしまつた。健作は急に敦賀の露國領事館まで出向かなければならない用事が出來て、明朝の出發が早いから、事務所のはうも今日はいつもより早く切上げてしまつた。俊次は少し飽氣なかつた。

「兄さんも、あつちこつちと自分で飛び廻らなけりやならないから、忙しいですね。」

「お前のやうにのん氣ぢやないさ。勉強は出來るかい？」

「僕だつてのん氣ぢやありませんよ、いろ／＼考へてゐますよ。」と俊次は厭な顏をしたが、「僕も兄さんに使つてもらはうかしら？ 高文を受けて、官吏になつたところが……」

「また始めやがつた。官吏は間違ひがなくつていゝぢやないか。」

「そりやおとなしく勤めてゐれば、最後は恩給

にありつゝけれど……だつて、老後の恩給を目あてに活きて行くなんて、隨分卑屈ぢやありませんか。」

「ぢや、おれの仕事でも手傳つてもらふか。」と健作は笑つて、いつものやうに眞面目にも取上げなかつた。

「それぢやつまらないわ。」と薫はちやぶ臺の上を片付けてゐたのをやめて云つた。「俊次さんもせつかく今まで勉強したのが、まるきり無駄になつてしまふぢやありませんか。ねえ、小母さま。」

ちえ子はそばで茶を入れながら頷いた。相變はらず氣分がすぐれないと云つて、浮かない顏をしてゐる。健作は明朝起きられなくては困るから、先きへ寢るやうに勸めてゐた。

「薫、何か果物があつたかい……まあ俊次なんかには、體格からしておれの眞似が出來つこあるもんか。今度の仕事だつて……まあおれの計畫はかうだ。」

健作は明日敦賀の露國領事館へ行つて見た樣子で、直いふわけにウラヂオストックへ行くか、また北海道から直ぐソヴイエツトスカヤへ渡るかして、その都合で、沿海州の森林伐採の現場まで這入つて見るつもりだと話した。つまり沿海州の木材を輸入するのが目的で、すでに露國の官憲とも交渉が濟んでゐる。先月北海道へ行つた時に、小樽で木材運搬の船も一艘契約しておいたし、積取りの人夫も募集して來たのであつた。

そこまでの詳しい話は、ちえ子も今夜初めて知つたのであつた。俊次が歸つた後で、

「あなた、大丈夫ですか。」と不快さうに聞いた。

「何が？」

「今のお話。何だかわたし……心配だわ。」

「だからお前たちには話さなかつたんだ。分りもしないのに直きけちを付けたがるから……」

「けちを付けるぢやありませんわ。何事だつて話して下さらなければ、分らないのは當りまへぢやありませんか。」とちえ子は突然蒼くなつて云つた。「一たい債券の若いのばかり殘してお置きなすつて、どういふおつもり？」

健作はさつと顏色を變へた。

「これ／＼でお入用ならお入用だと、お話して下されば……」

「話したら、やつぱりけちを付けようと思つて……それこそ年寄りと二人で、何の彼の面倒が分つてるからさ。」

「いゝえ、一おう話して下さらないといふ事はないわ。」

「煩いな、債還期限の來るのを女が何にするんだ。利札さへ長く樂しめりや、お前は文句はないぢやないか……さあ、明朝は早いんだ、寢ろ／＼。」

「妻の財産」

辻村夫妻の間に問題となつた國庫債券といふのは、辻村家の先代、亡くなつたちえ子の父が隱居をする際、相續財産の中からそれだけを特に娘の分にとつて留保しておいたものである。そして父の死後、ちえ子へ遺贈されて、民法上にも私生活の上にも、彼女のそれは完く女子の特有財産であつた。

娘の身に付くやうにと、先代が心にかけて、せつかくお前に遺されたお形見であるから、それだけは自分の簞笥の奥へでも別に藏つておいたらと、老母は始終ちえ子にさう云つてゐた。けれど用心からいへば、金庫のはうがたしかな事は云ふまでもない。錠前の文字合せは健作とちえ子と二人より外に知つてゐる者もない。それをわざ／＼無用心な簞笥へ入れかへるといふ事は、まるで健作を警戒するやうなものであ

る。夫婦の間でそんな氣まづい事はない。老母はどういふ肚で云ふのか知らないが、ちえ子にしてはわざ／＼夫の氣を惡くさせるやうな、そんな事は出來なかつた。

それは國庫債券ばかりで一萬圓足らずのものであつた。一年に二回づつ利札を切つて金に換へて、それだけはちえ子も誰に遠慮なく自分の好きな使ひ道に使つた。券面は約一萬圓でも、利子にすればわづかな金額だが、それこそ本當の自分の財産から生れるのだと思へば樂しみだつた。そして半期々々に利札の減つて行くのが寂しかつたくらゐで、實際の事は、償還期限の事なぞこれまでてんで頭にはなかつたのである。

「利札さへ樂しめれば文句はないつて、馬鹿にしてるわ。斷りもなしにひとのものに手をつけておいて、何て云ひ草だらう。」とちえ子は腹が立つてならなかつた。「あの人は本當にさう思つてるんだわ、纏まつたお金なんか女に用はないと思つてるのよ。私だつて家庭の寄生蟲ぢやない！」

健作は翌朝五時にちやんと目を覺まして、さつさと支度をして、機嫌よく出かけた。今日はちえ子のはうが不機嫌だつた。

「おい、何か註文はないかい？ 領事館のはうがうまく行つたら、お前たちにも土産を買つて來るよ。敦賀は何が名物かしら？」と健作は出かけに云つた。

「敦賀なら、わたし知つてるわ。名物はね、敦賀祭に北風。」と薫が帽子を差出しながら云つた。

「そいつあ困つたな。安直に祭の繪端書でも買つて來るか。ぢやちえ子、留守を頼むよ。」

知らない！ とちえ子は餘つ程さう云つてもやりたかつた。債券の事なぞ、今朝はもう念頭には置いてゐないやうに健作は洒あ／＼してゐる。こつちはこれほど問題にして、そしてこれほど感情を害されてゐるのに、健作は・・から氣にも留めない風で、わざとそ知らない顏をしてゐるやうなのが憎かつた。二日でも三日でも旅へ出る夫ではあるが、女中すら云ふ見送りの言葉一つが、今朝のちえ子にはおだやかに云へさうもなかつた。それで默りこくつてゐた。健作はしかし、それだからといつて敢て困らなかつた。いくらでも快濶に口を利く薫を相手に、胸のうちでは旅先きの好結果を豫想しながら上機嫌で喋つてゐた。ちえ子はくやしかつた。

健作が出立した後で、ちえ子はもう一度簞笥の中を調べて見た。亡くなつた父の筆蹟で、「ちえ分」と大きく書いた美濃紙の手擦れた紙袋の中に殘つてゐる債券は、皆で二千圓にも足りなかつた。外に辻村家の財産として、株券のやうなものも可なりあつた筈だが、それも値打らしいものは大てい持ち出されてゐた。しかしそれは資本の融通に始終出し入れされてゐるので、希らしい事ではない。けれどちえ子は、今日に限つてそれさへ何だか自分が無視されてゐるやうな氣がして、夫のあんまり勝手はうだいな獨裁が腹立たしかつた。

ちえ子は急に思ひ立つて、早ひるを濟ますと、外出の支度をした。昨日はすつかり春支度で出かけたものだつたが、今日はコートをはおつたり、厚ぼつたいショールを引つかけたりしてゐるので、

「まあ、冬支度だわね。どこへいらつしやるの？」と薫は訝つた。

「えゝ、北海道へちよいと。」とちえ子はもう一度鏡を覗きながら云つた。

薫は直ぐ何か冗談口を利き返したが、ちえ子は鏡の中に氣を取られてゐて聞えなかつた。

薫が立つて行つた後で、ちえ子は頭へ手をやる

と、綺麗に梳きつけたばかりの丸髷を手ばしこく解き崩した。そして束髪に結び直した。出かける時に、玄關へ見送りに出た薫は、意外さうに聞いた。

「あら、髷は？　小母さま。」

「旅行をするのには、このはうが輕くつていゝわ。」

「ぢや、やつぱし北海道？」

「噓よ、夕方には歸るわ。」

北海道は冗談でも、旅行は噓でもなかつた。ちえ子は途中で辻俥に乘つて市ケ谷まで行き、省電で東京驛へ着くと、ちやうど發車前の小田原行きの汽車に乘り込んだ。

すると、昨日電車で逢つた小石川の間瀬辯護士が、同じその客車に二人の女連れと乘つてゐた。ちえ子は厭な奴とまた乘り合したと思つたが、いつそ車室を變らうかとも思つて入口に立ち迷つてゐると、辯護士はわざ／＼自分の座席を立つて來て、あちらが掛けられるからと深切さうに云つてくれた。しかし、ちえ子のそばにも空席はある。諦めてそこへ腰掛けると、辯護士も隣席の客の手荷物を尻でおしやりながら、さしむかひに腰を掛けた。そして日本人の惡習慣で、どちらへ？　と先づ聞いた。それは誰もやる一般的の挨拶ではあるが、今の場合、ちえ子に取つては迷惑な問ひであつた。

「鎌倉へ……ちよつとある病院まで見舞に。」と彼女もつい出まかせを云つてごまかしたが、「あなたは？」とやつぱり聞いた。

「僕は箱根まで。」と辯護士は自分の座席のはうを目で示して、「あゝいふ意氣な婦人連れと箱根行きなんて云ふと、ちよいと誤解されさうですな。實は職業上の用件で、あの婦人たちは事務所のお客さまなんだから……」

その二人の意氣な婦人は母子であつた。澁い作りの年増のはうは、箱根でも一流どこに數へられる旅館の女將で、娘はその養女であつた。そして同じ箱根で、ぶら／＼と若隱居のやうな別莊暮しをしてゐる富豪の息子と、曖昧な夫婦關係を結んでゐた娘は、何か後ろ暗い事でもあつたらしく、突然養母のもとへ歸されて來た。それから揉んだのごた／＼があつて、結局娘のはうから逆ねぢに貞操蹂躙の訴へを起した。すると息子のはうでは、その意趣返しに、娘の持つて行つた荷物をそつくり抑へてしまつた。

「どちらが蹂躙されたんだか。男の馬鹿面こそ見もので、何の事はない、泥を塗られた上へ砂をぶつかけられたやうなものでさ。だからつて、女の荷物を抑へるのはへまだ。正當に婚姻した夫婦間でさへ、ちやんと夫婦財産制といふものが民法に規定されてるくらゐなんだから、況んや内縁の間ぢや……早く素直に返してやればいいものを、野郎め、また馬鹿を見るんで。かうして僕らに出向かれた日にや、もう品物を返しただけぢや濟まんですからな。」と辯護士は自分の職業自慢を鼻の先きにぶらさげて云つた。

「男もそれで懲りるがようございますわ。」とちえ子もつい話に釣り込まれて云つた。「一たい民法では、女の財産をどう規定してゐますの？」

「女の財産？　つまり妻の財産ですか。それは夫婦財産制の第二款の法定財産制に、これだけの條文があるんで……」と辯護士はその條文を擧げて、「如何で？　お役に立つたら、僕いつでも奥さんの代理人になりますぜ。辯護士としての間瀬には女人も健作君もないから、その點はご信頼を。」

ちえ子はびつくりして相手の顔を見詰めた。職業から油斷のならない男だ、うつかりしたことは云へないと、すつかり恐れをなして縮みあがつた。

「いや、それは冗談だが……今日は何ですか、鎌倉から直ぐお歸りで？」

「えゝ。」

「片瀬のはうへは？」と辯護士はにや／＼笑つて、「地びき網で賑はふつてえぢやないですか。僕も用事がなければお供をしたいものだが……や、お邪魔さま。」と云ふと、やつと自分の座席へ引きあげた。

けれど、同じ車室のうちで、自分はやつぱりあの男の好奇心の目で見守られてゐると思ふと、ちえ子は身顫ひがされた。それに今こゝで連れの婦人たちの噂をしたやうに、今度は連れの婦人たちと、あの口汚い言葉で自分の噂をしてゐるに違ひないと思ふと、もうどこの驛でもかまはないから、早くこの列車を降りてしまひたかつた。

ちえ子はさつき出まかせに鎌倉へ行くのだと云つた。鎌倉へ行くのには、大船で横須賀線に乘り替へねばならない。それもあるし、かたがた辯護士の猜疑の目から遁れるためにもちやうどいゝので、大船驛で途中下車をした。そして直ぐ次ぎの列車で藤澤驛まで行き、藤澤から電車に乘つて片瀬で降りた。ちえ子は清藤宏造を訪ねて行つたのである。

田舍の夜の電車

大船で途中下車をして、一列車おくらせたのと、それから宏造の滯在してゐる別莊は直ぐ分つたが、肝心の宏造があいにくの散歩から歸つて來るのを待つてゐたあとで、ちえ子は豫定してゐた時間がすつかり狂つてしまつた。さつさと話す事だけ話して、そつ氣ないほど切り上げよく暇を告げて出たが、それでも片瀬の停留所で藤澤行きの電車の出るのを待つてゐるうちに、日が暮れてしまつた。宏造は停留所までのはずで送つて來たが、薄暗いがらんとした田舍の夜の電車に、ちえ子が一人きり寂しさうにしよんぼりと乘つてゐるのを見ると、それまで努めて遠慮してゐたのを思ひ切つて、一しよに藤澤まで送る事にした。この停留所では夜になるとまるで客のない事すらある。電車は二人を載せて時間どほりに發車した。

二人は乘降口に近い座席の端のはうに、差向ひに腰掛けた。春とはいつても夜になると冷々した。ちえ子は冬のコートとショールにくるまつたが、小がらな細い體はうそ寒さうに着痩せして、古い形容をそのまゝ、霜に傷んだ早春の花のやうに俛れてゐる。宏造は宏造で、外套も引つかけずについ出て來たので、これも寒さうに薄着の肩を窄めてゐる。二人とも默然として話もなかつた。二人ともひどく感傷的な氣分になつてゐた。

間もなく、電車は、轟音を立てて片瀬川の鐵橋へさしかゝつた、と思ふと、不意に急停車をした。二人はクッションから跳ね飛ばされさうになつて、わづかに支へた。同時に車内の電氣が一時に消えた。車掌は運轉手臺のはうへ急いで行つた。そして運轉手と何か話してゐたが、ひらりと橋の上の枕木へ降りて、ぱた／＼前方へ駈けて行つた。

「停電ですか？」と宏造も座席を立つて行つて運轉手に聞いた。

「いや、前の車が……」と運轉手は顎で示して、「何か故障でも出來しやがつたんで。」とおこつたやうに云つた。

見ると、鵠沼の停留所の直き手前と思はれる邊に、紅い尾燈が見えて、電車が一臺留つてゐる。こちらと同じ藤澤行きの線路である。宏造は寒い川風に胴顫ひしながら、ぴつしやりドアを閉めてもとの座席へ歸つた。

「故障つて、どうしたんでせうね。」とちえ子は初めて口を利いて、「汽車が無くなりやしないで

せうか？―

―汽車は大丈夫ですよ。藤澤發は十時まであるから、それまでかうしてもゐないでせうから……しかし、こんな川の上で留めるつて氣が利かない。お寒いでせう？―

―あら、川の上ですか。―

ちえ子はそれまで氣が付かずにゐたらしく、さう聞いて窓硝子を透かして見た。外は月のない眞暗な夜で、間近はたゞ黑い濃淡ばかりで何にも分らないが、ずつと川下のはうは水の色が白々と光つて、星空が美しく擴がつた。ところどころ人家らしい火の影も懷かしく見えた。

―あの火は江の島ですか？―

―いや、片瀨です。川面にはいくらか靄があるので、それで遠く見えるんでせう。」

「わたし、すつかり方角を取違へてゐますわ、夜なのと、それにこの橋からは初めてですから。すると鵠沼の海岸はかう廻つてゐますのね。」

―さうです。この前あなたとお別れした砂丘がちやうどこの見當です。」

ちえ子は默つてしまつた。宏造は思ひ出して袂を探ると、卷煙草を取り出した。こんな場合に喫煙くらゐは時間つぶしに仕方がない。外には乘客もないし、運轉手もいつの間にか降りて行つて、運轉手臺には姿も見えなかつた。

今や明りの消えた眞暗な車室の中には、宏造とちえ子と本當の二人きりになつた。足の下で川の瀨音が急に耳立つて寂しく聞えた。

―ちえ子さん、一度あなたにお聞きしたいと思つてゐたんですが……しかし、こんな事をお聞きするのもどうかと思つて躊躇してゐたのだが、わたしは始終氣にかゝつてゐるんで……」と宏造は火をつけたばかりの煙草を足もとへ捨てて履物で躪つた。

―何ですの、え？」ちえ子は男の顏を透かすやうにした。

「あの時、ご主人は……何か誤解なさりやしなかつたですか？―

―誤解つて……どう？」

「でなけりやいゝんですが、あの時、何だかご主人の樣子が……―

「あゝいふ風なんですわ。無愛想で、口の利き方がつつけんどんですから、知らない方はおこつてでもゐるやうにお取りになるんですわ。あなたもお驚きなすつたんでせうねえ、さうでせうとも。あなたとはまるで性格が違ふんですものねえ。」とちえ子は溜息をついて、「わたし、つくづくさう思ひますわ。あなたは今度の洋行費の事でも、どこまでもさうして奧さまの意志を尊重なさるのに……これがもし宅の主人であつてご覽なさいまし、わたしがいくら反對すればつて、女の云ふことなんか取り上げつこはありませんから。いえ、取り上げないより、てんで相談なんかしませんわ。それこそ家でも財産でも默つてどうかしてしまひますわ。さつきお話しました債券だつてさうなんですもの。」

―わたしどもの事はとにかく……しかしその債券のお話は、少しご主人が亂暴でしたな。

―わたし、本當に腹が立ちまして……それにこの前東京驛でお別れする時に、あんな何だか思はせぶりのやうなことを申しあげておきながら、家へ歸つて調べて見るとそれなんですもの、本當にあなたにお申譯がなくつて……―

―わたしは晝間も申しあげたとほり、あなたがあの時、少し考へさせてくれと仰しやつたのは、まさかそんな深いご厚意とは想像もしなかつたのですよ。ですから、さつき初めて伺つた時には、實に何とも云へないほど感激してしまつたのです。」

―いゝえ、これが滿足に出來ましたのなら、感激して頂いても嬉しいんですけれど……」

―出來る出來ないは措いて、あなたのそのお心

ざしお有難いのです。それにあの時だつて、別にあなたは、はつきりと口に出して仰しやつた事でもないのに、それを今日わざ〳〵斷りにいらしつて下すつた、それがわたしには實に嬉しい！　それだけでもあなたの眞實のご好意が分ります。」

「ご好意だけは、本當に今でも何ですけれど……女なんてやつぱり意氣地がありませんのねえ。」とちえ子は弱々しく云つたが、直ぐ早口に、「意氣地のある方は氣がお強いし……ね。さう云つては何ですけれど、わたし、奥さまはあんまりお氣強過ぎると思ひますわ。あなたはあんなにお優しくなさるのに……ほんとに欽子さん、宅の主人をご覽なさるといゝわ。」と獨りで憤激した。

「わたしはまた、あなたのやうな優しい奥さんを、お宅のご主人はなぜもつと優しくなさらないかと思ふので……だが、ご主人はご主人、わたしは無關心でありたい。あなたもどうぞ欽子の事は仰しやらないで下さい、欽子は欽子です。あなたの前では……ちやうど美しい藝術に思想は邪魔なやうなもので、あれの事はわたしも思ひ出したくない。」

「ぢやわたしも、あなたの前では思ひ出さない事にしませうよ。」

それは欽子の事とも夫の事とも付かずに、ちえ子は云つた。女はどんな時にも技巧を忘れない。またどんな時にもそれだけの餘裕がある。

「ちえ子さん、」と宏造は不意に自分の座席を立つて來て、「わたしはね、あなたとかうしてゐる間だけでも、せめて自由に愛し愛されて、お別れしたいのですよ。」と囁いた。

ちえ子の小さい手は、男の骨つぽい手にそつと握られてゐた。

「かうしてゐる間だけね。」

ちえ子の手の温みが絹の手袋を通して、冷たい男の手を柔かに握り締めた。

宏造はそのまゝぴつたりと寄り添つて腰を掛けると、片手を女の背中へ廻して、

「これきり後はお互ひに忘れなきやならないんですねえ。」

「仕方がないわ。」とちえ子は片肱を脇あけへつけて、男の冷たい手先きを避けた。

「ちえ子さん……」

ちえ子は窮屈な體をぢつと固くして俛れてゐた。と、男の暖かい息が直ぐ頰へ觸れて來た。

はつと思つて胸を反らすと、無意識に男の腕を振り拂つた。そして思はず立ちかけた體を、そのまゝクッションへきちんと腰掛け直すと、兩手を袖口へ入れて胸を抱いた。暗いから未だしも、宏造もその時の様子は想像しても氣の毒だつた。

「どうしたんでせう、隨分待たせますわね。」とちえ子は氣が付いて窓硝子を透かして見たが、男は默りこんでしまつたので、「あなた、氣まづくお思ひになつたんでせう。だつてわたし、なまじつか思ひの殘るやうな事は……後々までも心の障りですもの。どうせもうお目にはかゝられないんなら、やつぱり清くお別れしたいと思ひまして……」

「それは本當なんですか？　晝間も仰しやつたが。」

「えゝ、本當にわたし、當分お目にかゝらないつもりですの。」と彼女は靜かに云つた。「今日はそのお暇乞ひも兼ねて、それでわざ〳〵伺つたのですわ。主人はそりやわたしなんか無視してゐますけれど、でも、家の爲めには一生懸命なんですから。この一月は、あの寒いのに北海道へ參りますし、今度敦賀から歸ると、直ぐまたロシアまで行つて來たいとか申してゐますし、あゝして席の暖まる暇もなしに駈け廻つてゐる

のを見ますと、わたしも家をあけて出歩いてゐちや濟まないと思ひましたの。」

それをどう言葉の返しやうがあらう。宏造はたゞやるせない太息をついてゐた。そして未練らしく云つた。

「あなたは野の鳥ではない、結局安住の巣に歸る方なのだ。その人に自由に飛べ、高く揚れと望んだつてそれは無理だ。お蔭でわたしも、なまじひあなたに悔を殘させないで、潔くお別れする事が出來るのを喜びます。その代りお別れしてしまへば何にも殘らない……考へると寂しいですねえ。」

「堪忍して頂戴。」といふと、ちえ子も急に何だかはかない氣がしてついほろりとした。「でも……あなたも何れ日本にはいらつしやらないんでせう。どうせ外國へいらつしやるんでせう？」

「さあ……外國へ行くか、刑務所へ行くか、どつちが早いか分りません。」

「厭！ そんな氣味の惡いことを仰しやつちや……どうぞご出發の日取りがきまりましたらお知らせ下さいな。わたしもその時は、どんな都合をしてでも、是非お見送りしたいと思ひますから。」

「有難う。もうそれでは、わたしも日本を去る時でなければ、あなたにもお目にはかゝれないんですね。」

許して下さいと云ふやうに、ちえ子は宏造の手をそつと自分の掌へ載せたが、男のその手は顫へてゐた。ちえ子は急に男がいぢらしくなつた。そして自分でも思ひがけないほど一時に胸が迫つて來て、はら〳〵と獨りで涙を流した。眞暗の中に顏の輪郭だけ白くぼんやりと分るくらゐで、泣いても聲に出さないので宏造も氣が付かずに濟んだが、もしそれが一寸でも見た事なら、どんなに心を掻き亂されたか知れない。とてもこの場はこれきりでは濟まないところであつた。

やつと運轉手だけ歸つて來た。そしてはつと電氣がつく、と、電車はぐわらと一揺ぎして橋を渡りきつた。と思ふと、直きまた留つた。どういふせゐか、速力がやむと同時に消えて、車内はまた眞暗になつた。

「そこが鵠沼の停留所でせう。ねえ、あなたはこゝからどうぞお歸り下さいましな。時間もおそくなつたし、こゝまで送つて頂けば滿足ですから。」とちえ子は云つた。

「お一人でいゝですか？」

「だい丈夫よ。」

宏造も強ひてもう藤澤まで送らうとは云はなかつた。彼は深い哀愁に沈んでゐた。さつきから獨りで昂奮したのが氣恥かしくも思へて來た。につ〳〵、倦怠を感じ出したのである。

その時、車室の外の窓の下から車掌の聲で呼んだ。

「皆さん、前の電車へお乘換りを願ひます。お早く！」

「あら」とちえ子は座席を立つた。

「お早く！ 前のが直ぐ出ますから。」と運轉手も云つて、線路へ降りると、ばた〳〵と駈けて行つた。

ちえ子も急いで運轉手臺のはうへ行きかけながら、振返つて見ると、宏造は暗い座席にそのまゝぼんやりと腰掛けてゐる。ちえ子はつかつかと引返した。

「もうお目にはかゝらないんだから……神さまだつて大目に見て下さるわ……」

宏造は不意に烈しい唇を自分の唇の上に感じた。女の腕は蛇のやうに頸を卷いた。

「送つて來ちや厭よ、恥かしいから。」とちえ子は囁いた。

[illegible]に警笛がした。二人は慌てゝ一[illegible]から來

び退いた。ちえ子は運轉手臺のドアをがらりと開けて出る時、もう一度ほの白い顏を振向けて、
「さやうなら。」と云つた。
今の靴音は、何かちえ子と話しながら一しよに行つてしまつた。宏造は放心したやうになつて、いつまでも眞暗な電車の中に一人で腰掛けてゐた。やがてベルの音が聞えた。それで初めて氣が付いたやうに立上つて、運轉手臺へ出ると、ちやうど前の電車が動き出したところであつた。後部の窓一杯に電氣の光の射した明るい車體は、見る〳〵遠ざかつて、直きカーブへかゝつて見えなくなつた。
「あゝ、行つてしまつた！」と宏造は悲しさうに頭を振つた。
足もとの惡い暗い線路の横を拾ひながら、鵠沼の停留所のそばまで來ると、宏造は思はず立留つた。路の片方から眞黒な大木がおほひかぶさつた下に、カンテラが一つ點つて、レールとレールの眞中に藁席が小高く盛り上つてゐる。藁席の兩端から女の長い髪の毛と白い足袋とが覗いて、まはりは一面に血の痕がカンテラの明りでどす黒く見えた。宏造はぞつとして目をそむけた。
鵠沼の停留所には、運轉手の徽章をつけた男が眞蒼な顏をして、がや〳〵と皆に取卷かれてゐた。中に警官の姿も見えた。轢死人の檢屍をする警察醫が外へ出てゐて容易に來ないので、屍體を取片付ける事が出來ないのであつた。
「轢死人は何です？」と宏造はそばの役場員らしい人に聞いて見た。
「中年增の好い女で……これです。」とその男は腹の大きいといふ事を兩手でして見せた。
「自分で轢かれたんですかね？」
「無論覺悟の自殺です。一度何でも水へ這入つて、それで死ねなくて、線路へ死場所を變へたもんですね。その證據にや全身づぶ濡れなんで……おゝ、オートバイが來た、醫者だ。」
宏造は何だかその轢死人が人妻であるやうな氣がして、慄然とした。

征服と獻身

ちえ子もその轢死女がいつまでも頭にこびりついてゐて忘られなかつた。電車の中でも、乘客の間にはその噂が藤澤まで持ちきつた。中には物好きに屍體を見て來た者もあつて、年頃も身裝も、死にざまも遺憾なく分つた。そして人妻といふ想像は、乘客の間にも一致してゐた。するとその腹の子は、不義の塊でなければならないやうに思へて、ちえ子も好い氣持はしなかつた。
三日めの夕刊新聞には、その變死者の詳しい報道が載つてゐた。女はちやうどちえ子と同年であつた。横濱に住む、或る高級船員の細君であるが、夫が外國航路の海上勤務で留守勝ちなところから、同じ船會社の陸上勤務員とつい間違ひが出來てしまつた。そして不義の種を宿した。女の腹はだん〳〵目立つて來るし、二人の噂は高まる。それが會社の人事課の方へも分つて、男は解職される。女の夫の歸着は迫る。二人は到頭情死と決して一しよに家出をした。そして鎌倉、江の島と死場所を捜し歩いた擧句、鵠沼で女のはうだけ死んだのであつた。鵠沼で二人が三日間滯在してゐた旅館が、やつはりちえ子の行きつけのその旅館であつた。
ちえ子も見たとほり、鵠沼の電車線路で轢死したのは女だけで、相手の男は生き殘つたのである。初め二人は鵠沼の海で投身した。けれど男も女もあいにくの水心が邪魔をして思ふやうに體が沈まず、もがき合つてゐるうちに、二人は放れ〳〵になつた。そして女のはうは陸へ打ち上げられたのか、それとも自分で這ひ上つ

たのか、とにかく死場所を變へて情死をした。

ところが男のはうである。彼は浪に持つて行かれた溺死體を、沖釣りの漁船に助けられて、運よく假死から蘇ると、もう死ぬ氣がなくなつた。助けてくれた漁師にもいゝ加減な出任せを云つて、鵠沼の線路に相手の屍體の横はつてゐたその夜は、腰越の漁師の家でぬく／＼と泊めてもらつた。そして翌日藤澤方面へ逃走する途中、どうも變だと後で氣が付いた漁師の密告から、直ぐ警官に追跡されて捕まつたのであつた。新聞の記事は、警察署の取調べによる男の自白であつた。

「可哀さうにねえ、女は浮ばれないわ。」とちえ子は厭な／＼顏をして、新聞をちやぶ臺の外へ撥ね落した。

「なあに？」薫はその新聞を拾ひ上げた。

「その二面の心中の記事よ。あゝ、こはい……」

とちえ子は線路の上の生々しい屍體を思ひ出して身顫ひした。

二人は晩餐の後片付けを濟ませて、やがて座敷に夕刊新聞を擴げてゐた。薫は自分の讀んでゐたのをちえ子のはうへやつて、その心中の記事を讀んで見た。そして云つた。

「馬鹿ねえ。」

「男が？」

「男も男だけれど、女も。」

「夫のある身で、そんな戀をするから？」

「いゝえ、戀をするのはいゝけれど、そんな自分を戀愛の犧牲にしてしまふなんて……つまり戀愛に醉つて、戀愛の滓まで飮んだんだわ。」

「あなたはさう云ふけれど、どんな事だつて、多少とも犧牲なしには得られないでしよ。殊に戀愛なんて精神上の幸福は尙さら。」

「おゝ厭だ。わたし、そんな自分を犧牲にしたり……でないまでも、自分自身の自由を束縛されたりするやうなら、戀愛なんかご免だわ。それぢや苦痛ぢやないの？　快樂の爲めの戀愛よ。」

「わたしは古い考へか知らないけれど、自分自身を全部與へてしまつて、自然にその中から本當の自由を得られたらと、さう思ふのよ。自分の主張と、自分の犧牲との調和、つまり薫さんのよく云ふ征服ね、その征服と獻身だわ。」

「小母さまは理想家ね。」と薫はにや／＼笑つて、「小父さまはどう？」

「知らないわ。」とちえ子は氣持ちむつとした顏を見せて、「あなたはさういふ考へだから、わたし云ひたくはないけれど……何？　爺や。」

二人の間の空氣がこぢれかゝつたところへ、ちやうど折よく、女中が電報を取次いで來たのであつた。ちえ子は直ぐ開いて見ると、コンヤ九ジカヘル。無論それは健作からであつた。

「小母さま、東京驛までお迎ひに行きませうか？」と薫は早速機嫌取りに云つた。

「只今からぢやもう遲うございませう。」と女中はそばから云つた。

「さうね。」と薫は掛時計を見やつて、「もう八時過ぎだわ。これから出かけるんぢや間に合はないわね。」

「ぢや、自動車呼びませう。」とちえ子が突然云つた。「夜だから支度も何も……薫さんもそのまゝ上へコートをはおればいゝわ。爺や、直ぐ自動車會社へ電話をかけて頂戴。」

薫は機嫌取りにたゞ云つて見ただけの事も、伯母の氣持も、ちよつと意外であつた。健作は仕事の爲めに始終旅行をしてゐる。それを歸るたびに、一々ステーションまで迎ひに出てゐては際限もないし、またこれまで一度も迎ひに行つた事のないちえ子であるから。

利殖の興味

牛込の辻[illegible]の[illegible]でも[illegible]が咲いて、[illegible]ほど

り店員慰勞の意味で内わの花見が催されると、ちえ子は板前にもなり、[illegible]人にもなり、藝者のやうに三味線も彈かされたりして、揚句に醉つぱらひの介抱までした。新綠が煙るやうに萌えて、時候の刺戟や過勞の疲れやで、健作が不眠を訴へると、ちえ子は四五日泊りで一しよに箱根へ保養について行つた。歸りには東京驛からわざ／＼銀座へ廻つて、夫婦でカフェーへ這入つたりして來た。かうして主婦としてもよく努め、妻としてもよく務めて、ともかくも平和な日が續いてゐた。

すると、ある朝健作を事務所へ送り出して間もなくであつた、小石川の間瀬辯護士から、奥さんに電話口まで出てくれと云つて電話がかゝつて來た。ちえ子は取次いで來た女中によつぽど留守をつかはせようかと思つたが、やつぱり氣になるので、澁々電話口へ出て見た。辯護士は、實は清藤宏造氏の事で、至急あなたにお目にかゝらねばならない用向きがあるのだが、こちらからお伺ひしようか、それともおいでが願へれば、お遊びかた／＼今からでもおいでが願ひたいと云ふのであつた。何だか呼び立てするのが當然のやうな口振りにも聞えて、ちえ子もむつとせずにはゐられなかつたが、しかし用向きが用向きだけに、家へ來られても困るので、咄嗟にお伺ひしますと返事をしてしまつた。では小石川の私宅のはうでお待ちする、家のやつも是非一度お目にかゝりたいと申してゐるから、と、愛想だか何だかさう云ひ添へて、辯護士は電話を切つた。

辯護士が自分と宏造との間を猜疑の目で見てゐる事は、ちえ子も前から氣が付いてゐた。けれど、自分はその後宏造とは綺麗に遠ざかつてゐる。今になつてかれこれ問題にされるのは心外であるが、しかし相手が相手だけに不安でもある、また不快でもある。けれど不快だなどと云つてはゐられないので、ちえ子は氣の進まないのを努めて出かけて見ると、何の事だ、あなたから清藤氏に紹介をしてもらひたいといふのが、辯護士のその用向きの主なのであつた。

それは外でもない、最近檢擧された或る富豪の倅で、社會主義者の手先きに使はれてゐた不良少年が、豫審の調べに、自分の左傾思想は清藤氏のユートピア論から芽ぐまれたやうに申し立ててゐるので、少年の親から特別に辯護を依頼された間瀬は、辯論の參考にその學說を一讀したいのであるが、それの發表された雜誌は發賣禁止になつてゐて、ちよつと手には這入らない。それで當の清藤氏に會つて見たら、たとひユートピア論そのものは聞かれないまでも、何か參考になるやうなヒントくらゐは得られるかも知れない。ちえ子の紹介があつたら、會ひに行つて見たいと云ふのであるが、本當に會ひに行く氣があるのかどうだか、それさへ怪しい口振りであつた。

それだけの事で、わざ／＼呼び立てしたりして、と、ちえ子は腹が立つた。

「わたくし、清藤さまの奥さまとはそりや、學校がご一しよでよく／＼存じてもゐますけれど……ですが、あの方なら何もそんな紹介とか何とか、形式ばつた事をなさらなくても、あなたが直かにご訪問なすつたら……」

「會つてくれませうか？」

「會ふのが當然だと思ひますわ。」

「今やつぱり片瀬のはうださうですな。」

「さやうでございますか。わたくしも暫くご無沙汰してゐますから……」

間瀬は胡散さうな目をして、うそ／＼笑つた。

「あれはもう先々月でしたか、東京驛で清藤氏とご一しよだつたのは。あの時も僕は何だか見たやうなお連れだとは思つたが……やつぱり新聞か雜誌で寫眞でも見たのが、ぼんやり記憶

にあつたんだな。それに辻村さんの奥さんが、あゝいふ方面の男とお知り合ひだとは思ひも寄らないものだから、どう考へても思ひ出せんだつたが、今度の事からずつと清藤氏が片瀬のはうだと知つて、ぢやあの時のお連れもさうだつたと初めて氣が付いたのですよ。さう仰しやれば、なるほど直かに行つても會ひませう。紹介なんて形式ばつた事は、あの男のデモクラシイに反するからな――と間瀨は片手で呼鈴を鳴らしながら、――今日はまあゆつくりして下さい。いま家のやつも呼ぶから……おい、艶にちよつと階下へ來いといつてくれ――と書生に命じた。

宏造の話はやつぱりそれだけらしかつた。

ちえ子は氣をもんで飛んで來たのが馬鹿々々しくもあつたが、しかしまたそれだけの事で安心もした。そして早く歸りたいのでもぢ／＼してゐたが、わざ／＼細君を呼びにやつたのを見てゐながら、會はずに立つわけにも行かないので、しかたなく待つてゐた。

女の本能には同性の反感といふものが多少とも潜在してゐる。それが好奇心となつて、ちえ子もどんな夫人が現はれるだらうと思つてゐると、辯護士のおつかさんのやうな女が、蒼白い腫れぼつたい顔をして出て來た。少くとも夫よりは五つ六つ年上らしく見えた。それもそのはず、もとは下宿屋のおかみで、間瀨が法學生時代に出來合つて、學資なぞも貢いでもらつたその腐れ緣で、今は内緣の妻といふ事になつてゐる。これがまた辯護士に輪をかけたしたゝか者であつた。

「ようこそ。本當にお待ち申してゐましたんでございますよ。ちやうど奥さまのご存じの方が、あちらにお見えになつていらつしやいましてね……なに、お會ひになればお分りになりますよ。今ちよいとお身じまひしていらつしやいましたから……ぢや、こちらへお連れ申しますわ」とお艶は獨りで喋つて、獨りで心得て立つて行つた。

「どなたでいらつしやいませう？」とちえ子は不審さうに辯護士に聞いた。

「そら、近ごろ婦人參政運動で賣り出した、あの野々村代議士の夫人ですよ。家へはついまだ二三度見えただけだが、あなたとは歌の會とかで以前からお知り合ひだとか……僕はちよつと失禮しますぜ。」

辯護士が席をはづして立つた後へ、お艶に案内されて這入つて來た野々村代議士夫人を見ると、ちえ子は初めて思ひ出したのであつた。それは去年の秋、大久保の清藤の家の歌會で一度きり會つて、挨拶ぐらゐはしたが、その時はたゞ政治家の夫人とだけ聞いてゐたその夫人であつた。若づくりの派手な三十がらみの人で、綺麗に化粧をしたばかりであるが、近くで見ると顔の生目が荒れて、何だか寢不足ででもあるやうに、これまた腫れぼつたい目をしてゐる。

彼女らは昨夜から徹夜で花牌を弄んでゐたのであつた。こゝでは始終身分のある夫人連が集まつて、賭博を常習にしてゐる事を、後になつてちえ子は知つた。そして辯護士夫婦が恐ろしい高利で資金を融通してゐる事も、後になつて分つた。

結局その場は、野々村夫人の爲めに、三百圓の約束手形へ裏書するべくちえ子は餘儀なくされたのであつた。約束手形がどんな性質のものだか、裏書人にどんな責任があるのか、ちえ子は一から無知識だつたが、もし間違つたところで、自分がどうかすればいゝと、氣前よく署名してしまつた。この身分のある美しい夫人がよく／＼困つた樣子を見ては、三百圓ぐらゐの事で恥をかゝせるのが氣の毒だつたのである。

その時は氣前よくさう[illegible]してゐたものの、さて手形の期日の前日、間瀨辯護士から電話

で自分のはうへ支拂の注意があつた時には、ちえ子も猶豫せずにはゐられなかつた。辯護士は振出人の野々村夫人へも電話をかけたが、夫人は大阪の實家へ歸つてゐて留守だといふ事であるから、ご迷惑でもあなたに明日來てもらひたいと云ふのであつた。ちえ子も約手の效力の借用證書よりも恐ろしい事だけは聞いてゐる。翌日小石川へ出かける時に、たうとう金庫に殘つてゐた自分の國庫債券を持ち出したのであつた。

持ち出したのは百圓券四枚で、それで辯護士に手形の處置を相談してゐるところへ、ちやうど野々村夫人が東京驛からタクシイを飛ばせて來合せたので、ちえ子の債券は手付かずに濟んだ。しかしそれだけで濟ませばよかつたのである。ちえ子は辯護士夫婦からこの融通の手堅い事、期日の短い事、日の出るやうな高歩の事なぞ聞かされて、ふとその債券をそれへ廻す氣になつた。

辯護士はちえ子が自分の財産を持つてゐる事を、いつからか推察してゐた。それがどのくらゐの高か、とにかく相當のものはあるだらうと想像してゐた。だから、手もとの薄い彼に取つては、ちようはうな金主だと思つてゐるから、永く引き出すやうにせい〳〵几帳面な取引きをしてゐた。それは利得を折半しても、銀行日歩の何倍にもなつた。ちえ子は堅實な利殖に強い興味を覺えて來た。後には自分の債券の全部を、辯護士のはうへ廻してしまつたほどである。

待つ身

健作が沿海州の消費組合と契約した木材の、第一回の積取船が近々小樽へ這入るはずであつた。それは賣込先きも決まつてゐて、直ぐ新潟へ廻す事になつてゐる。健作は都合によつたら自分で新潟まで上乘りをして行くつもりで、それには船の着くまでに北海道へ出向いてゐなければならなかつた

實はその第一回船でも新潟へ廻航させて、問屋と受渡しを濟ますと、それで健作も初めて一息つく事が出來るのである。今までは資金をつぎ込むばかりで、それももう融通をし盡した。昨今の辻村商店は文字どほり枯渇の極度にある。今度北海道へ行くについても、船や人に直ぐ小樽で後金を渡さなければならないが、それだけのものすら、健作の手もとで無理算段をしなければならなかつた。

「ちえ子、お前の債券はまだ幾らばかり殘つてゐたらう？」と健作は[illegible]聞いた。

「なあぜ？」

「なぜ？　いるからよ。」と夫は直ぐ、硬い頬の肉をぴり〳〵させながら、それでも穩やかに云つた。「北海道へ行くのにいるんだが。まだ二千圓ぐらゐあつたね」

「そんなにあるもんですか。あの、お伴を云ひませうか、銀行へお廻りになるなら。」

「とにかく借りるよ。いづれ前のと一しよに正金で返してやるから。」

さう云つて、健作は金庫の置いてある納戸へ這入つて行つた。

ちえ子は案外落着いてゐた。債券を持ち出す時から、どうせ一度は夫に知られずには濟まない事は分つてゐた。早かれおそかれ知られるものと覺悟してゐた。しかしどういふ覺悟をしてゐたかといふと、別にこれと決まつた考へもなかつた。たゞ知れたら知れた時と高をくゝつてゐた。つまりちえ子にしては、自分の物を自分が持ち出したのだ、夫はひとの物を默つて持ち出したぢやないかといふ肚がある。

「ちえ子、おい、ちえ子！」と健作の呼ぶ聲がした。

ちえ子はしぶ〳〵立つて行つた。

「債券はどうした？　入れ場所を變へたのか？」と健作は不快な顔をしてじろりと振返つた。

「いゝえ、本當はお金に換へてしまひましたの。」とちえ子はばつの惡さうな苦笑ひをしながら、「債券なんて利子が安くつてつまらないから、お金に換へて、或る手堅い人たちに貸してあります。」

「本當か？」と健作は不思議さうに妻の顔を眺めた。

「わたし、自分の力で自分に儲けたものでなくつては、本當に自分のものではないといふ事を、つく〴〵感じたものですから……それであの二千圓足らずの殘りを、少しでも有利に殖やして行かうと考へましたの。あなたにご相談しなかつたのはいけなかつたけれど……かうなれば一通りお話しますけれど、しかし前以てお斷りしておきますわ、これだけはわたしの自由にさせておいて下さい、この後もあなたが關渉なさらないやうに……ね、ようございますか。」とちえ子は思ひ入つた氣色で念を押した。

「そりや、お前のものをお前が自由にするんだから、餘計な關渉はしたくないが……まあ話を聞かう。どんな事をしてゐるんだ？」

それが身分ある婦人たちの手慰みのもとでである事だけは隱しておいて、ちえ子は貸借の關係を一通り話した。間瀬辯護士の事も夫に聞かせたくはなかつたけれど、さうも行かなかつた。それまで隱しては話の筋が通らない。初めは或る人とも云つて見たが、結局その名を明かさなければならなかつた。

「なるほど、間瀬の入れ智慧か。」と健作は初めて合點が行つたやうに頷いた。「だが、お前は間瀬なんかをどうしてそんなに信用したんだ？」

「だつて、あなたのご友人ですもの。」

「一たいそりやいつ頃からだ？」

「つい、二月ばかし前。あの人からちよつとお話がありまして、それから……」

「ぢや、おれの留守に、お前を訪ねてでも來たのか？」

「いゝえ、最初は電車の中で、お目にかゝつたのがもとで……」

「お前のはうから出かけて行つたのか？」と健作は際立つて苦い顔をした。

ちえ子は默つてしまつた。

「お前は間瀬をどんな男と思つてゐるね？」と健作は改めて聞いた。

「別に惡い人とも思ひませんわ。身持はあまり善くないやうに、あなたからも聞いてゐますけれど。」

「そりや惡い人間ぢやない。自分ではあれでも一かどの惡黨がつてゐるけれど、なあに、惡黨ならもう少し締めくゝりがある。あの男は要するにだらしのない人間だ。不道德ぢやなくつて、無道德なんだ。今のそのお前との取引きにしても、初めつから欺かうとか、引つかけようとかいふやうなそんな惡い意志は恐らく無いだらう。けれど、時と場合でそれをしかねない男なんだ。今はさうして堅くやつてゐても、いつかきつと無責任な事をし出來すに決まつてる。だい一そんな不法な高利を貪つて……幾ら相手が女だつて……女がまた何にそんな金がいるのか知らないけれど、とにかく正道の使ひ道ではないに違ひない……お前もそんな不法な利得を平氣で取込んでゐて、もしこれがおもて沙汰にでもなつて見ろ、それこそどんな迷惑がかゝつて來ないとも限らないぞ。何しろ仲に這入つてる間瀬が間瀬だからな。どこに隱してあるんだ？　その約手をそつくりこゝへ出しなさい。」

「出してどうなさるの？」

「どうしてもいゝ。」

「いゝえ、よくはありません。だからお斷りし

ておいたぢやありませんか。これだけはわたしの自由にさせておいて下さい、關渉なさらないやうにつて。」

―いけない！ 夫は妻の財産を管理する義務がある。」

―そんなことを仰しやるなら、わたしも申しますわ。あなたは承諾なしに妻の財産を融通なすつたけれど、そんな權利がありますか。」とちえ子は眞赤になつて云つた。

―生意氣云ふな！」と健作は體を顫はせて呶鳴つた。「おれの苦心も知らないで……勝手にしろ！ よし、おれにも考へがある。」

彼はいきなり立つて納戸を出て行つた。その足で電話室へ飛び込んで、小石川の間瀬辯護士を呼び出すと、これから直ぐ行くから、在宅してくれと云つてやつた。それは金庫の前にぼんやり殘つてゐたちえ子のところへも、よく聞えたくらゐ高調子であつた。

健作が出かけた後で、ちえ子も急に外出の支度をし始めた。かうなると流石に彼女も落着いてはゐられなくなつた。夫があの險まくで押かけた以上、不斷の氣性からしても中途半端では濟ますまい。それには相手が中學時代からの心安い仲ではあるし、根こそぎ洗ひ立てて、底の底までも突き留めずには措くまい。相手はまたあの辯護士の事だから、何を喋るか知れたものではない。

「清藤さんの事だつて、をかやき半分、面白半分で、さぞ健作を焚きつける事だらう。」

さう思ふと腹も立つたが、しかしそれにはちえ子自身も、獨りで顏を赧くするやうな弱みもないではないだけに狼狽した。さぞ焚きつけられて歸つて來る夫を、かうしてぢつと待つてはゐられないやうな氣がした。

―だい一それに、夫の義務だとか權利だとか、法律なんか楯に取つて云ひ爭ふやうになつちや、もう夫婦の仲もおしまひだわ。」

そしてちえ子は默つて家を飛び出してしまつた。しかし後で捜索だの何だのと騷がれても困るので、臺所にゐた仲働にだけ、ちよつと俊次さんのところまで行つて來るからと云ひおいて、こつそり勝手口から出た。今日に限つた事ではないが、健作が朝が早いので、老母や薫はまだ寢てゐた。

俊次は脚氣の氣味で、先月の初めから房州のはうへ轉地をしてゐる。老婢はまだそれを知らなかつた。俊次のところといへば、つい戸塚のそばの素人下宿の事だと思つて、こつそり出てゆくちえ子を別に怪しみもしなかつた。たゞそれにしては、この朝つぱなかられい〳〵しいお支度だと思つただけである。

學校こそ出て、法學士といふ肩書はあつても、まだ職も定まらない、云はゞ學生同樣な俊次の轉地先きへ行つて見たところで、どう治まりのつくものでもない事は、ちえ子にも分つてゐる。けれど、それだからと云つて、外にどこへ行く當が彼女にあらう。俊次は健作の弟でも、寧ろちえ子贔屓である。不斷から兄よりも姉思ひである。それに宏造に對しても、一時は崇拜に近いまで親炙したほど、好感と理解とを持つてゐる。この際ちえ子に取つては、一番同情を寄せてくれさうな相談相手であつた。

兩國から房總本線の江見直行に乘つて、北條でちえ子が汽車を降りたのは、午前の十一時であつた。房州へは前にも一度來た事があるので、ほゞ勝手は知つてゐる。ステーションから俥で、俊次の泊つてゐる八幡の旅館へ行つて見ると、宿の亭主が店先きに出てゐて、田澤さんは昨日船で横須賀へおいでになりましたとの事であつた。ちえ子は意外であつた。同時に途方にくれた。どうしていゝか、ちよつと思案もつきかねてぼんやり土間に立つてゐたが、どう

ぞまあお上りくださいと云ふ亭主の愛想に促されて、ともかくも二階へ通つた。おつつけ午でもあるし、晝食をあつらへておいて、そして亭主に座敷へ來てもらつた。

　俊次が何の用でわざ〳〵海を越えて、相州の横須賀くんだりへ行つたのか、亭主もそれだけはつい聞かなかつた。しかし、横須賀はたゞ寄り道で、直ぐ東京へ歸つて、入用の參考書を搜したり、體を診てもらつたりして、その模樣でまた來るやうに云ひおいたさうであるが、亭主は當にもしてゐないらしい口振りであつた。それは醫者に見せるまでもなく、もう轉地の必要もないまでに俊次の脚氣が快くなつたからである。

「田澤さんなんか若い面白ざかりでさ、體が快くなつちや房州なんかに一日も居られませんや。横須賀から、一帳場か二帳場行きや鎌倉だかんね、昨夜は何とかホテルで、あひの子の娘でも相手にダンスだかキッスだか……まあそこいらの寸法だつぺ。」

　ちえ子が俊次を訪ねて來たのを、變に勘ぐつたらしい亭主は、房州者の地金を出して、けらけらと無作法に笑つた。

「横須賀から鎌倉は近いんですね？」とちえ子はにつこりともせずに聞いた。

「直ぐでさ、汽車で三十分とはかゝりませんや。」

「ぢや、横須賀からも、こちらへ船が出るんですね？」

「出ますとも。午前に靈岸島を出たのが、二艘とも横須賀へ寄るだかんね。どつちも日の暮れ前にはこちらへ着きまさ。」

　ちえ子は直ぐ俥を呼んでもらつて、食事前に北條の郵便局まで行つた。そして片瀬の宏造へ長文の至急電報を打つた。呼び出しの電報である。特に横須賀からの乘船と、乘船の時間までも注意してやつた。

　もし宏造が横須賀から便船によらず、またその時間に間に合はず、陸路を大廻りして來るのであつたら、たとひ來てくれても明日の事である。明日まで獨りで宿屋に待つてゐる事は、ちえ子には堪へられなかつた。その間の自分の心の烈しい動搖と爭鬪とが、豫想しても恐ろしかつた。何にも考へる暇なしに、目をつむつて、一思ひに行きつくところまで行つてしまひたかつた。

　船は横須賀から直航の午後五時と、金谷廻りの五時半と、相前後して北條へ着くのであつた。それまでどうして時間を過したらいゝだらう。ちえ子は焦躁と無聊とで自分の體を持ちあぐねて、三時ごろからもう北條の船着場へ出かけて見た。八幡から半みちとはなかつた。松のむら立ちの間から、鏡ケ浦の風光が手に取るやうなその道筋の美しい眺めも、ちえ子の目には這入らなかつた。初夏の午後の眩しい日の光と、海の色とが、それでなくても昂奮した感情をいら〳〵させるばかりで、彼女はパラソルを深く、わき目もしないやうにしてせか〳〵急いだ。しかし、急いで行つて見たところで、五時まではやつぱり船着場で待たなければならなかつた。

　船は時間どほり五時に北條へ這入つて來た。東京灣内だけを航路にしてゐる小型のその汽船が、しかも夏ばと違つて客の時化どきといふのであるから、ほんの十人ばかりもぽつり〳〵降りて上つた。けれど、宏造の姿は見えなかつた。ちえ子に不安になつて來た。それでもまだ次の船が頼みで、今度はどうぞ乘つてゐてくれるやうにと、心のうちで祈りながらまた三十分待つた。五時半のにも宏造はやつぱり來なかつた。

　ちえ子はがつかりして宿へ歸つた。可なりく

たぶれた體を自分の部屋へ投げ出すと、砂塵の足袋を横坐りに覗かせたまゝ、泣くにも泣けないやうな氣持でぼんやり考へてゐた。東京へ歸るにも、今からではもう汽車がない。よしあつても、このまゝ歸る氣にはなれなかつた。自分の打つた電報が間に合はなかつたのかも知れない。宏造があの電報を見て、片瀨から電車で鎌倉まで行き、鎌倉から汽車で横須賀へ出て、横須賀から午後二時出帆の汽船に乗る。よつぽど手はずよく運ばねば無理な事が、今になつてちえ子も氣が付いた。今まではたゞ待つ身の切なさに、來ぬ人を怨んで、呼んだこつちの、無理な時間など繰つて見る心の餘裕もなかつたのである。

「さう、間に合はなかつたのだわ、來ないわけはないんだもの。明日はきつと來るわ。」

ちえ子はこのまゝもう何も考へずに、たゞ明日の日を待つ事にした。

しかしこの日の夕暮ほど、ちえ子に取つて感傷的な夕暮はなかつた。わづか一泊の旅愁が、それも夕暮の一時が、生涯忘れられなかつたほど、それほど遣る瀨なかつた。

日は海の向うに落ちて、鏡ケ浦は蒼茫と暮れて行く。芝居や物語にあるやうな氣分で入相の鐘が聞える。ちえ子は縁側の欄の椅子に倚りながら、思はず涙ぐんだ。ちやうど風呂を知らせに來た女中が、「お獨りでお淋しうございませう」と、ほんの愛想ばかりに云つたその一言にさへ、胸が迫つて答へられなかつた。

「早く田澤さんがお歸りなさいますとね。何なら電報でもお打ちになりましたら……」女中も亭主も同じやうに思つてゐるらしく、そんな愛想も云つた。「横須賀はどちらですか、お分りになりませんか？」

「こゝから横須賀は、どつちの方角に當りますの？」とちえ子は聞いた。

「こゝからは、ちやうどこの邊に當りませう。」

すると、「片瀨や江の島は？」

「さあ……江の島は何でもこの見當で、横須賀とはずつとあちらへ込り込んでゐますさうで。」と女中は暗い沖を指さした。

「まあ、あんなに遠いんですかねえ」とちえ子は伸びあがるやうにしてはる〴〵と眺めた。

風呂からあがつて來ると、外はもうとつぷりと暮れてゐた。ちえ子は思ひもよらないやうな方角に、豆のやうな遠い火がちら〳〵瞬くのが目についた。浪の間から見え隱れするせゐか、眞暗な海の向うに二つ四つ、三つ二つと減つたり消えたりする。膳を持つて來た女中に聞いて見ると、

「あれが東京の明りでございますよ。」と教へてくれた。

ちえ子はもう飯が喉へ通らなかつた。

とは云へ、人間を支配するものは結局肉體である。またそれなればこそ、肉體の滅びるまでは無事に活きて行かれるのである。その夜はちえ子自身が心配したほど、悩ましい一夜ではなかつた。宵のうちこそ頭が亂れて寝苦しかつたが、そのうちに晝間の疲れでぐつすり眠つてしまつた。皮肉にも夢一つ見ずに朝まで熟睡したのであつた。

「今日は來る！」ちえ子は目を覺ますとさう思つた。

今日になれば船よりも陸を來るはうが、大廻りでも早い。宏造が昨日横須賀まで出かける間があつたにしろ、無かつたにしろ、あの電報を見て東京まで出てみれば、今朝兩國發の一番汽車に乗られる。そして九時にはこちらへ着く。けれど、それはちえ子も當にはしなかつた。次ぎは昨日自分が乗つたので、北條着が十一時、それにはステーションへ迎ひに行くつもりで、それまではゆつくりと身じまひなぞした。あいにく

宏造の好きな丸髷に結つて來なかつたのが、髮をいぢるのに少し張合ひがなかつた。

必ず來るとちえ子が決めきつてゐたその汽車でも、宏造は終に來なかつたのである。改札口のそばに固くなつて立つてゐたちえ子は、もしかしたら降りるのを忘れてゐるのではあるまいかと、列車の窓から窓へ忙しく目を走らせてゐると、遅れて一人二人と降りて來る中に、思ひがけない俊次の姿を見つけた。ちえ子ははつと思つたが、向うの視線と合ふと、何氣なささうににつこりして見せた。

「よくこの汽車で來ることが分りましたね。」と俊次は改札口を出ると云つた。

ちえ子はたゞ曖昧な微笑をした。

「行き違ひになつてお氣の毒しました。獨りで淋しかつたでせう」

「あなたは横須賀へいらしつたんですつてね。」

「清藤さんに借りてゐた書物があつたものだから、片瀬へ廻つたんですよ。」

「一昨日?」ちえ子は咄嗟に訊いた。

「えゝ。一昨日はまた意地惡く船が搖れましてね、片瀬へ行つてからも氣持が惡くて閉口しました。」

「それで、清藤さんにお會ひなすつて?」

「ところが、清藤さんはもう片瀬を引拂つて、東京へ歸つたんですよ。わざ〳〵横須賀へ反吐をつきに行つたやうなもので、馬鹿を見ました。」と俊次は笑つた。「とにかく宿へ行きませう。」

ちえ子は初めて宏造の來ない事に得心がいつた。さう分ると昨日から張りつめてゐた氣が一度にげんなりとした。次いで襲つた空虚と寂寞との感が、その時以來ずつと習癖になつて、始終彼女の心を毒するやうになつたのである。

「姉さん、兄は今朝北海道へ立ちましたよ」と俊次は歩きながら云つた。

「あら、さう。」

「小樽へ船の着くのはまだ四五日あるけれど、札幌へ寄れば舊友も居るし、早く行く分には向うで足したい用事もあるからつて、わざと今朝立ちました。だから、姉さんもおとなしく歸つて下さい。兄さんから今度の話を聞いて、僕はお迎ひに來たのです。」

「健作はあなたにどうお話しました?」

「どうと云つて、兄の事ですから、事實を事實として話しただけで」

「ぢや、あなたはその事實をどう思つて? わたし、昨日實はあなたにご相談に來たわけなのよ。」

「さう思つたから、僕も自分の考へでお迎ひに來たのです。夫婦間の問題を、局外者がどうのかうのと批判すべき限りではないでせう。お迎ひに來たのが僕の結論です。」と俊次は靜かに云つた。

何だか奧齒に物のはさまつたやうな云ひかたである。また自分を非難するやうにも取れば取られて、ちえ子は心が穩かでなかつた。あれから小石川へ行つて來たのか、俊次との話にも、何か宏造の事が出はしなかつたか、何よりもそれがちえ子は知りたかつた。けれど、俊次のはうからも云はないし、自分のはうからは猶さら氣がとがめて聞けなかつた。とにかく俊次は、いつものやうに氣さくではなかつた。

二人は八幡の旅館で午飯を濟まして、午後の汽車で東京へ歸つた。そして牛込の家へ着いたのは、夜ももう十時近くであつた。

ちえ子は自分ながらも淺ましいと思つたが、家へ歸ると直ぐ氣になつて、自分の居間の簞笥の、大事な物ばかりしまつてある小抽出を調べて見た。やつぱり直覺だつた。例の[illegible]の四枚を當座預金に入れておいたその銀行の通帳がなくなつてゐる。印章も見えない。それにし

ても昨日出がけにおろしておいた抽出の錠前を、どうして開けたのか分らなかつた。

通帳を一時拜借します。窮急の際、ご寛恕を乞ふ、と健作の筆蹟で走り書きにした紙ぎれが、同じ抽出に入れてあつた。ちえ子は美しい歯をきり〳〵と噛んだ。

生の歡喜

ご無沙汰いたしました。例のお歌會は引續きお催しでいらつしやいますか。少々お伺ひ申したい事がございますので、明日午後ちよつとお邪魔いたしたいと存じます。もしあなたがお差支へでいらつしやいましたら、ご主人さまでも、お玄關でお目にかゝつて頂ければ結構でございます。清藤欽子さま御許へとして、辻村ちえ子から來た端書を、一しよに配達されたいろいろな郵便物の中から宏造が見付けたのは、その明日とある當日の午近くであつた。日曜日でも祭日でもないので、欽子は無論社へ出てゐて留守であつた。

宏造も午飯を濟ますと出かけるつもりであつた。今度彼は欽子の社から頼まれて、明日から靜岡を振出しに、名古屋、京都、大阪、神戸と、婦人問題の講演に出張する。それは雜誌の宣傳も兼ねて、主幹や活動寫眞部も一しよである。一行は今日午後三時何分かの汽車で東京驛を立つて、今夜の十時ごろ靜岡に着き、明日の午後零時から同地の講演に臨むのであつた。それで今日三時前に、丸の内の雜誌社で皆が一しよになる約束なのである。

鵠沼の夜の電車で別れたあのまゝの宏造は、思ひがけなくもちえ子が訪ねて來るといふ端書を見ると、小娘のやうに胸が躍つた。端書にはたゞ今日の午後とのみあつて、何時ともない。一時、二時と空しく待つた後で、今朝欽子夫人が出しておいてくれた縞のモーニングと着更へたが、どうにもぢつとして居られない。兩手をズボンのポケットに突込んで、狹い書齋の中をぐる〳〵廻つてゐた。せつかく今日訪ねて來るのが分つてゐながら、會はずに出てしまふのは如何にも殘念である。たとひ話をする時間はなくとも、せめて玄關先きで顏を見るだけでもいい、さう思つて宏造は二時半まで待つた。ちえ子は來た。

書生の取次ぎも待たずに、自分でつか〳〵と玄關へ出て行つた宏造は、面はゆさうに土間に立つたちえ子を一目見た時、もう雜誌社の義理も、講演の約束もなかつた。欽子夫人をすら忘れてしまつた。ちえ子は紫から鼠へ移らうとする中間色のくすんだ羽織に、同じ紫系統の色の帶だけぱつとさせて、頭にもやつぱり紫系統の手がら、それは宏造に取つて忘られない印象の藤色であつた。

「あの、どちらへかお出ましで？」とちえ子はそのつや〳〵した丸髷を重さうにかしげて、ぽつと羞を含んだ目もとで男の姿を見上げた。

「え、なに：：とにかくそこいらまで、ご一しよに參りませう。」

さう云ひながら宏造の頭は敏速に働いた。同時にこれから自分の取らうとする一さいのプログラムが、まるで定められた運命のやうに獨りでに頭の中で出來てしまつた。そして運命に爭ふ事が愚であるやうに、彼は少しもそれを遲疑しなかつた。ちえ子もまた豫期した運命に服從するやうに、默つて男の云ふとほりになつた。

「今日はお急ぎぢやないんですか？」

「別に：：もし奥さまもあなたもお留守でしたら、青山へお墓參りにでも廻るつもりで出ましたから。」

「ぢや、ご迷惑でも東京驛までお付合ひ下さい。三時までに丸ビルの雜誌社へ、ちよつと顏を出しておかなきやならないから。」

それから大久保驛で東京驛行きの電車を待ち合せてゐる時、ちえ子は思ひ出したやうに聞いた。

「今日は奥さまは？」

「やつぱり社です。」

「ぢや、わたしの端書、奥さまはご覧なさらなかつたでせうね。」

「着いたのが十一時ごろでしたからね。」

「わたしもさう思ひましたの。昨晩おそく出しましたのですから。」

「さう〳〵、すつかり忘れてゐました。お端書の用向きは何です？　實はあの歌の會も、わたしはその筋の誤解が煩いから、遠慮して出ませんけれど、欽子は相變らず顏を出してゐますから。」

「それなら、いづれまた欽子さんにお目にかゝりまして……」

「何です？　また出席して見ようとでもいふのですか？」

「いゝえ、わたしなんかとてもあゝいふ文藝に親しむやうな、暇も何もありませんから……前にもご通知を頂きましたけれど……あれは、たしか政治家の奥さまで、野々村夫人といふ方がいらつしやいましたわね。あのお方、今でも會へお見えになりますかしら？」

「さあ……どうですか。もう止したかも知れませんよ。あゝいふ人は半ばヴァニチーで會員になつて見るんですからね、自分の歌が雜誌にでも出なければ……だが、こんなことを云つてよかつたかな。あなたは野々村夫人を？」

「何でもありませんの。それだけ伺へばいゝんですの――

ちえ子が端書でわざ〳〵聞きたい事があると云つてよこしたのはそれだけの事だつたのか、それきりもうその話も二人の口には上らなかつた。もつとも電車の中では、醉つぱらひか女學生ででもなければ、べら〳〵と喋らないものだが、二人も東京驛へ着くまで話らしい話もしなかつた。宏造が洋行する時ででもなければ、二人はもう會はないはずで別れたのが、今日かうして圖らずも一しよになつたのであるから、話せば話は幾らでもある。けれどもまた、鵠沼の電車であゝして別れてゐるだけに、二人ともこれまでのやうに蟠りなく話が出來なかつた。蟠りも蟠り、めい〳〵胸には息詰まるやうな意圖がある。しかもお互ひにそれを讀み合つてゐる事を承知し合つてゐるので、何さら氣が射して空々しい話も出來なかつた。

東京驛へ降りると、宏造はちよつとステーションホテルの受附へ寄つた。それからちえ子に、ついそばの日比谷公園へ行つて、そこの噴水の邊で二三十分待ち合せてもらふことにして、自分はステーション前のビルヂングへ行つた。

雜誌社では宏造さへ來れば、揃つて直ぐステーションへ出向くばかりに、一行の切符までもう買はせてあつた。宏造は急に用事が出來て、今夜の終列車か、あすの朝の一番汽車でなければ立てないからと云つて、皆に豫定どほり出かけてもらふ事にした。一行の中の社員たちは、明日午前中に會場の準備や、何や彼やと用事もあるが、宏造はたゞ講演に出ればいゝ。あすの朝八時の特急列車に乘れば、正午の十二時何分かには靜岡へ着く。すれば、午後零時からの開會にもかつ〳〵間に合ふのであつた。

「欽子、お前にはまだ話さなかつたけれど、こないだ實は金策を頼んでやつた國の者がね、二三日前に上京して、大森のはうに泊つてゐるんださうでね、ちやうど今東京驛で逢つて、これから一しよに宿へ來てくれと云ふから……」

と宏造は編輯室のデスクのそばへ行つて欽子夫人に小聲で話した。「話が早く濟めば今夜立つし、おそくなれば泊めてもらつてあすの朝立

つから、どつちみちもう家へ歸つてる暇もないから……留守を頼むよ。」
「留守の事はご心配なくどうぞ。ですが、お國の方なぞに……田舍の人つて理解がないから、お金の話なんか何さらですから、あなたも大ていにしてそこは、ご自分を卑しくなさらない程度にね。」とさう云ひながら、欽子夫人は夫のネクタイを直してやつた。

宏造は急いで雜誌社を出た。四階でエレベーターを待つてゐるちよつとの間、硝子戸に映つた自分の姿を見て、
「何て厭な顔をしてるんだ。こんな矢先きに……一たい欽子に會ふのは避くべきだつた。」とさう思つて、唇を嚙んだ。

しかし、それも日比谷公園へ行くまでであつた。約束の池のそばで、若葉の濃い蔭を背負つて人待ち顔に佇んだちえ子は、暗鬱な紫がかつた容姿が、純白のパラソルと銀白色のバッグと、眞白な足袋とですが／＼しく引立つた。大勢盛裝の女もあたりに群れ動いてゐる中に、その小さい體が一人くつきりと浮き出すやうに遠くから見えた時には、宏造はもう妻も子もなかつた。そして水の垂るやうなといふ詞そのまゝの近勝りする丸髷姿が、そは／＼と自分のはうへはすばに急いで來るのを見ると、宏造の顔は歡樂にはじけた

「お待たせしましたね。」
「いえ、お早かつたわ。ご用は済みまして？」
「済みました。もうあすの朝までは自由です。」
そこで宏造は初めて靜岡行きの事を話した。
「まあ、さうでしたか。済みません。」とちえ子は眞面目に頭を下げたが、ちよつと媚を見せて、「わたしも靜岡までお送りしたいわね。」と云つた。
「有難う。あなたは今日は何時ごろまでお差支へないんです？」
「家では十時にはもう寢みますから……でも、お芝居へ誘はれたりしますと、いつももつと遲くなりますけれど……」
「では、芝居へ誘はれたつもりで、今日はわたしにお付合ひ下さい。いゝですか。」と宏造は念を押した。
ちえ子は默つて頷いた。
それから一時間ばかりすると、二人はステーションホテルの客室で晩餐を取つてゐた。食堂は二人に取つて晴れがましかつた。ボーイすら邪魔だつた。食事のあとでバスを済ますと、宏造はまた輕い飲みものを持つて來させた。
そして窓際へ椅子を寄せて、浴後の體を外氣に乾かせてゐた。ちえ子も女として早めに、ちやんと身じまひもしてバスルームから出て來た。
「失禮しました。」と彼女は化粧道具をバッグへしまひながら、「暖かい晩ね、お湯へ這入つたらほか／＼するわ。」
「こゝへ來てお涼みなさい、いゝ風がありますよ。」と宏造が窓際で云つた。
「えゝ……少しこゝで失禮させて頂きますわ。」とちえ子はワードローブの蔭から云つた。
「どうしたんです？ 同じ事ぢやありませんか。冷たい飲料もありますよ。」
「×××、×××××××……×××××××××。」
「××。」×××××××××××××××××
×××××、×××××××××××××××
××××、「××、××××××。」××××。
　××××××××××××××××××××
××××、××××××××××××××××
×××××××××××××、×××××××
××××××××××××、××××××××
×、初夏の涼しい夜風が寛げた襟から、脇明けから、水のやうに流れ込んだ。

「まあ、いゝ氣持。」

×××××××、××××××××××。

「……×××。」

「アゼニットですよ。あなたも如何？」

「頂戴。」とちえ子はグラスに一口つけて、「あら、お酒ね。」

「消化にいゝさうです。」

「でも、おいしいわ。」

そこは三階の宮城に側した側で、大都の眞中とも思へないほど照明の貧しい丸の内の暗い空に、細い夕月が寂しく懸つてゐた。東京驛前の雜沓も夜もやに低く霞んで、恐らく日本の街路の獨特らしいヒステリカルな騒音も、こゝではさほど苦にもならなかつた。ちえ子は茴香の匂ひのする透明なグラスを脣にあてて、暗い空を眺めながら、こなひだの房州の宿の夕暮を思ひ出してゐた。

「何を考へてるんです？」と宏造は相手のその空いてゐる方の手を取つて、「ねえ、こんなところへ一しよに來たのを、後悔してゐるんぢやないんですか？」

ちえ子はたゞ首を振つた。

「この前お別れする時に、あなたはあゝ仰しやつたけれど……あのまゝお目にかゝらなければとにかく、今日またあなたの顔を見ては、どうしても玄關からお歸しする氣にはなれなかつたんです。あなたももうからなる運命だと諦めて、どうぞ堪忍して下さい。」

「わたしこそ……自分のはうから伺つたんですもの。この前あんな立派な口を利いておきながら……恥かしいわ。」

「あれからわたしは、隨分煩悶しましたよ。とてももう片瀨なんかに一人でゐるのは耐らなくなつて、せめてあなたと同じ東京のうちに居たいと思つて……實は白狀しますが、こなひだ田澤君が本を返しに來た時に……お聞きか知らないが、わたしは田澤君の下宿まで一しよについて來たんですよ。どうかしてあなたを見かけないとも限らないと思つて……歸りにはまた、お宅の前を野良犬のやうにうろ／＼して、何だか近所の人から變な目で見られたりして、結局日の暮れ方にすご／＼歸つたきりなんです。」

「それはいつ？」

「この月曜日。」

「まあ。わたしはちやうどその日に、あなたを房州の宿屋でお待ちしてゐたのよ。」

「房州？」

「え、北條のそばの八幡の宿屋の二階で……」と云ふと、ちえ子は急に聲が詰まつた。

今考へても、その時の自分のいぢらしさに、つい泣けて來たのである。彼女はそれまで話す機會もなかつた房州行きの話を、初めて宏造に話した。

「さうでしたか。」と宏造はひどく感動したがら、しかし不審さうに云つた。「だが、田澤君からは何にも聞きませんでしたよ。こつちから聞くやうにしても、一からあなたの話も出なかつたし、無論そんな、辯護士なんかの話はありませんでした。」

「ですから、わたしの取越し苦勞だつたかも知れませんのよ。辯護士だつて直にあなたの名譽を思つて、餘計なお喋りもしなかつたんでせう。辯護士の口から、あなたのお噂なんか出たやうな樣子もありませんから……もう止しませう、そんな話。」とちえ子は飲みさしのグラスをきゆつと一口に空けた。

「それよりも、せつかく電報を下すつたのに、本當に濟まない事をしました。赦して下さいよ、あなた一人そんな思ひをさせて……ね。」

××××××××××××、×××

××××。××××××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××・××××××、××××××××××××××××××。×××・××××××××××××××、×××××××××、×××××××××、××××、×××××××。×××××××××。××××××××××、××××××××××××××××。

夫が妻の肉體を自分のものと決めきつてゐるやうな、さういふ利己的な我儘はまだ男になかつた。それがちえ子には何よりも嬉しかつた。人間の、女性の、あらゆる羞恥もきれいに忘れしめられたほど嬉しかつた。彼女は性の對象としては、云はゞ自主も自由も知らない慘めな奴隷女から、初めて性愛の女王へといつがれたのであつた。いつもは感覺の懶い服從か、今や感覺から魂へと自分を融合させる能動的の熱情に。そしてそれが××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××、×××××××××××。

そこにはいつもの欺かれたやうな鼾を聞かなかつた。彼女が與へた幸福の爲めに、××××××××××××、××××××××××

××。・××××××××××××××××××。

十時少し過ぎ、二人は默つてホテルを出た。そして東京驛前からタクシイを傭つて、牛込までやらせた。宏造は辻村の邸のそばまでちえ子を送つて行つた。

自動車の中では話もなかつた。手と手を握り合つたまゝ、何にも云ふことはなかつた。二人は淡い弛緩的悒鬱をすら感じてゐた。それでも自動車が牛込ノ濠端へかゝると、×××××××××××××××××××。

「×××××××××××××?」

「いつでも。」とちえ子も囁くやうに云つた。

「手紙を上げてもいゝですか?」

「いゝわ、お名前さへ變へて下されば。」

「女名前にね。何としませう?」

「何とでも。家では親書の祕密は大丈夫ですから。」

「わたしのところでも、それは大丈夫ですよ。だから、用があつたら封書で下さい。」

「えゝ。」

ちえ子は自分の家の直きそばの曲り角で、自動車を降りた。

「×××、××××××××××。」×××××××××××××××××××。

××××××××××××××××、××××××。

「では、ご機嫌よう。どうぞお早くお歸りあそばして。」

「有難う。おやすみなさい……運轉手君、ぢや、眞直に歸つてもらはう。」

自動車は宏造一人を乘せて、また東京驛前へ歸つた。宏造はその足でステーションの時間表を見に寄つて、そしてホテルへ歸ると、直ぐボーイを呼んだ。

「明日午前六時二十五分の下りで靜岡まで行くんだからね、今夜拂ひを濟ましておから。ビルを拵へて來てくれたまへ……」

「は、奥さまも?」

「あれは今夜十時ので先きへ立たせた。明日は朝早いし、それに僕一人だから、何かトーストに紅茶でも貰へばいゝ。それから……今夜は何だか睡られさうもないから、あすの朝寢ばうをしたら起してくれたまへ。いゝかい君、頼むよ。」と宏造は上機嫌で云つた。

苦惱

その當座二三日といふもの、ちえ子はよそ目にも落着きなくそは〳〵してゐた。さうかと思

ふと、ぼんやり何か考へ込んだり、獨りで溜息をついたりする。ちやうどこの節の天氣が、つゆ時といふのに西が吹いて、いつ降りさうにもない輝かしい空を見ながら、時折り風も變らずに曇る、それと同じやうであつた。しかし季節は季節で、直き入梅らしい霖雨がじと〳〵とやつて來た。同時にちえ子の顏にも晴やかな色は隱れてしまつた。そして包むにあまる心の苦惱が彼女を病人のやうに見せた。事實また女の週期的障害も其にあつた。年の若い頃や、あまりに年を取り過ぎた老母は、ちえ子の苦しんでゐるのを朝晩見てゐても、體の事より以上には想像しても見なかつた。只いつもよりは重いくらゐに見てゐた。

アサツテカヘルといふ健作の電報が新潟から來た時、ちえ子は蒼くなつた。それから健作が歸ると直ぐ、三千圓だけ現金でちえ子に渡した時には、彼女はいろ〳〵な感情がごつちやになつてほろ〳〵泣けた。

—あとはおひ〳〵返してやるよ。少しばかり利子のいゝくらゐに釣られて、怪しげな銀行へ預けたりしちや駄目だよ。やつぱり債券でも買つておいたはうが確實でいゝだらう。」

—わたし、今返して頂かなくてもいゝのよ、あなたの都合のいゝ時で。」

「まあいゝさ、ちやうど三千圓だけ現金で受取つたものだから、それだけは銀行へ振込まずにわざ〳〵持つて來たんだ。まあ取つておくさ、お前も幾らか氣休めにもなるだらう。間瀨なんかと一しよになつて、あんな思ひ切つた高利貸のやうな眞似をする氣になつたのには、おれも驚かされたよ。あとも直き返してやるから、もうあんな氣を出すのは止してくれ。」と健作は日燒けのした顏をにこ〳〵させて云つた。

「誤解してるよ。あれだつてわたしは、やつぱり經濟的獨立を欲したからなんだけれど……」

とちえ子は心に思つた

—おれの留守に、間瀨から何か云つて來たか。來ないだらう。」

「えゝ。」

—だが、あの男はあれでも感心なところがあるんだ。自分でも友情といふ事を頻く云つてゐたが、それがまんざら口先きばかりでもなささうなんだから…お前の事でも法律上の見解だけでなしに、もつと理解のある辯護をしてゐたつけ。新しい夫婦道といふやうな事を柄になく云ひ出して、あべこべにこつちが忠告されさうだつた。やつぱり年を取つてあれたけ眞面目になつたんだな。」と健作は獨りで感心してゐた。

健作を焚きつけもせず、却つて自分の事を間瀨が辯護してゐたといふのは、ちえ子も意外であつた。あの男がどう自分を理解してゐたといふのか、それが知りたかつたけれど、聞くのも何だか氣味が惡いやうで止めた。

—それはさうと、おれの沿海州行きだね、あんまり先きになると寒くつて難儀だから、來月早々に行けたら行く事に、北海道のはうはほゞ決めて來たよ。」と健作はさも手輕に云つた。

「まあ、沿海州なんて……本當にいらつしやるんですか？」

—本當だとも。—

その爲めに健作は、今度も自分で北海道へ行き、ついでに新潟まで受け渡しに行つて、歸りにわざ〳〵敦賀へ廻り、ロシアの領事ともまた會つて來た。日本政府の旅券はすでに下附されてゐる。健作はこの前領事に會つた時に或る諒解を得てゐるので、今度も領事からウラジオの旅券局へ、事前の交渉をしてもらふ事に頼んで來たのである。

「それでないと、いつまでも入國手續きをぐづぐづと引張られて……そのうちに向うは雪でも降り出すと、もう行かれなくなつてしまふから

ね。」

「ぢや、どうしてもいらつしやるんですか？」

「是非行つて、今度はもつと有利な契約を取つて來るつもりなんだ。それには偵探の現場を見ておかなければね。おれはロングコートはなかつたな、出かけるまでに一着新調するか。」

ちえ子は溜息をついた。

雨は毎日しと〱と降り續いた。ちえ子も體のはうは平常に復したが、心の苦しみはだんだん深く内攻するばかりであつた。その間に宏造からは約束の女名前で、旅行先きから二度手紙が來た。ちえ子はしかし封も切らずに、二通とも内證で焼いてしまつた。

運命のいたつら

まだ梅雨明けには早いが、久し振りに蒼空が見えて、天氣豫報にも今日一日は晴とある。しかも日曜日ではあり、中元の賣出しも始まつてゐる。毎日鬱陶しい雨に寂びれてゐた市中も、朝から羽蟻の吹き出したやうに眞黒な人出であつた。たゞ羽蟻のやうに飛べない悲しさには、相變らず泥田のやうな道路と、缺點だらけの交通機關とに惱まされながら、それはもう東京市民の持つて生れた因果だと諦めてゐる。

健作夫婦たちもその諦めた仲間で、靴の泥まみれや、袖附けのほころびくらゐは覺悟で、山の手からやつと銀座まで買物に出た。今度健作がロシアへ行くについて、少しは旅行の支度もいる。北海道から行けば、海一つ隔てた直ぐ向ひ地であるが、それでも風土が異つてゐるだけに、肌着のシャツからして新しく調へなければならなかつた。健作自身は身のまはりの事など一から無頓着でもあり、無知識でもあるので、さういふ買物にはどうでも女がついて行かなければならない。ちえ子も氣の重いのを努めて、薫と三人で出かけたのである。

薫は昨夜、夕刊新聞に、明日の日曜は晴とあるのを見、そして同じ紙上の明日の記事に、帝大の各分科チームの庭球戰の豫評めいたものが出てゐるのを讀んだ。スポーツには大した趣味も有たないけれど、庭球ぐらゐは分るし、それに帝大のコートで開催されるのであるから、明日天氣ならば、無理にも俊次を誘つて連れて行つてもらふつもりであつた。それが小父の買物のお供を付合はされたので、内心不平であつた。

誂へるものは誂へ、買ふ物は買つてしまふと、健作は直ぐ歸らうとした。ちえ子は無理に誘つて來た薫に氣の毒だつたので、彼女の好きな裝身具店などへついでにひやかした。そしてせつかくこゝまで連れ出したのであるからと、夫に耳打ちすると、また食事時でもないといふので、健作は手輕くフルーツパアラーへ這入つた。

ちえ子はその後からパアラーへ一と足踏み入れた瞬間、一種異樣な、恐怖に似て恐怖とも違ふ不思議な戰慄が背筋を走つた。彼女にとつては運命の神のいたづらとも云へよう。外に空席もないやうに、そこのテーブルに運んで陣取つた健作と、スクリーン一重隔てて、背中合せに腰かけた向うの女客、後姿を一目見ただけで、ちえ子には直ぐそれが欽子夫人と知つたのである。何にも知らない夫と、何にも知らない宏造の妻とを、自分がこゝで何食はない顏をして紹介しなければならないやうな場合を思ふと、ちえ子はそら恐ろしかつた。欽子さへこちらに氣が付かなければ濟む。ちえ子はなるべく口も利かないやうにして、テーブルへこゞみ込んでゐた。

「あら、俊次さん！」薫が不意に大きな聲をした。

それで忽ちその場はちえ子の恐れたとほりに展開した。ちえ子は最初欽子だけ見て、連れには氣も付かなかつたが、俊次の外にも女の子

が一しよであつた。俊次は初めから氣が付いてゐたらしく、一から動じない風でにや〳〵とこちらを見てゐた。

「ちえ子さん、暫く。」と欽子がスクリーンの蔭から會釋をした。

と、ちえ子は窮餘の勇氣を出して、自分のはうからつか〳〵と立つて行つた。

「あなた、どこかお惡い？」と欽子はいきなり聞いた。

「いゝえ。どうして？」

「だつて……」と彼女はじろ〳〵ちえ子の顏を眺めたが、「今日は思ひがけないお天氣ね。ちやうどこの十二時の汽車で、清藤が關西の講演から歸るものですから、子供にせがまれて、銀ぶらがてら迎ひに來ましたの。ですが、道のお惡いのには閉口ね。田澤さんが濕くつたのも無理はないわ。でも、清藤がもう歸つたころだらうと云つて、せつかく訪ねて下すつたんですから、わたし、無理にごいつしよに引張つて來たのよ。」と云ひわけがましく云つた。

「でも、この道のお惡いのに、お孃ちやん、おえらいわね。もう小學校へいらつしやるんでせう？」とちえ子はそんなはうへ話を持つて行つた。

「えゝ、この四月から。愛子さん、マヽへいらつしやい。田澤さん、その椅子をちえ子さんに上げて頂戴。」

「俊次さん、いゝんですよ。わたし直ぐ失禮するから。」

「お連れの方、ご主人？」欽子はちよつと振向いて見て、「ちえ子さん、お差支へなかつたらご紹介を、ね。あなたや田澤さんともご懇意にして頂いてるんですから、ご挨拶だけでも。」ともう立ちかけた。

そしてちえ子の恐れたとほりに展開して行つた。

「あなた、いつかお話したわたしの女學校時代からのお友達で、清藤欽子さん。」とちえ子はおづおづした聲で夫に云つた。

「あゝさうか。」

さつきから默つて、グレープフルーツか何かをスプンですくつてゐた健作は、ちよつと口端を拭いて椅子を立つた。そして家の者が思つてゐるほど無愛想でもなく、一通りな辭令的の言葉を他意なく欽子と交した。

「ご主人のご名聲はかねて承知してゐますが……弟がまた始終ご厄介になりますさうで、どうかよろしく。こないだ大阪の新聞でちよつと見ましたが、先生は關西方面をご旅行のやうで？」

「あなた、もうよろしいわ。」とちえ子は耐りかねたやうに云つた。「お孃ちやんがお待ちですから……欽子さん、どうぞ。」

「おや、失禮いたします。」

欽子はもとの席へ歸ると、勘定はもう濟ましてゐたと見えて、直きそこを出た。出る時に、俊次もちよつと兄たちのテーブルへ顏を出して行つた。

「姉さん、晩には伺ひますよ。薫さん、ご馳走を頼むよ」

俊次がさう云つた時、ちえ子は何とか調子を合せてゐたが、薫のはうは聞えない振りをして、そつ方を向いてゐた。

薫は今日はさんざんであつた。せつかくの日曜日を、小父の買物のお供をさせられ、それでお駄賃は果物くらゐで、あまつさへその果物屋では、小母も欽子も自分の存在を無視してゐるやうな侮辱をすら感じさせられた。それから最後に口を利いてくれた俊次にも、薫は腹の立つわけがあつた。今日は自分のはうから誘へなくなつたにもせよ、昨夜から是非自分が誘ひ出すつもりでゐたのが、その俊次はよその奧さ

んと遊び歩いてゐた。もし誘へば、馬鹿を見るところだつたと思ふと、馬鹿を見たと同じ程度に腹が立つた。

その日の夕方、俊次がいつものやうに日曜日の晩餐を當にやつて來た時、薫は一日ぢうの鬱憤を晴らしてやるつもりだつたが、さて面と向ふと何も云へなかつた。胸一ぱいにむしやくしやしてゐても、それを口へ出して云ふだけの言葉を知らないのである。何をいふにも年が若い、戀の口説にはまだ慣れない。

しかし、思ひ切つて一言、

「俊次さんは、今日は馬鹿に澄ましてゐたわね。何だかあの孃さんのお父さんか、兄さん見たいで變だつたわ。」と云つた時に、

「變に見る奴は見るさ。」

さう答へた俊次の、冷々としたその態度のうちに、戀には若い彼女とても、やつぱり戀する女の敏感から、明かに男の心を悲しく讀み取つたのである。

疑惧と不安と惑亂

健作がロシアへ出發するつい二三日前であつた、小石川の間瀨辯護士が突然辻村へ訪ねて來た。ご主人でなくていゝ、奥さんにでもご隱居にでも、ちよつとお目にかゝりたいと云ふのであつたが、ちやうど健作も午まで事務所を切り上げて來て家に居合せたので、直ぐ自分で會つた。

ちえ子は間瀨が訪ねて來たと聞くと、思はずどきりとして顔色を變へた。自分との貸借の關係は、いつか健作が出かけて行つた時に、後へ面倒の殘らぬやうにきれいに決算をつけてしまつたはずであるから、今さらその用事で來たのではない。とすれば何だらう？ 主人でなくてもいゝ、自分か母に會ひたいと云つたといふのが氣になつて、ちえ子は胸をわくわくさせてゐた。何だか間瀨といふ男は、ひとの秘密ばかりを嗅ぎ廻つてゐるやうに思はれ、同時にまた何を嗅ぎつけてゐるか分らないやうに思へて、氣味の惡い男であつた。健作が會つて暫く話して、直きにちえ子を呼びによこした時には、彼女は眞蒼になつた。

この節ちえ子は、ちよつとした事にも直ぐ動悸がして、顔が蒼くなる。甚だしいのは、ついこなひだ健作が途中から乘つて來たタクシーの運轉手に、賃錢を拂つてやる時、相手の顔を見るなり、卒倒しかけた事もある。老母が心配して、自分のかゝりつけの醫者に見せさせると、醫者は神經性の心悸亢進だと云つて、在り來りの神經衰弱の處方劑をくれた。しかしその時の運轉手の顔が、ステーションホテルのボーイに見えたのだとは、ちえ子以外に誰が知らう。それもはた神經衰弱のせゐかも知れないけれど、彼女自身の苦惱は、まるで幽靈にでも憑かれてゐる精神病者のやうで、その時とは限らず、始終心がおびえてゐた。

しかし、間瀨が今日訪ねて來た用向きも、分つて見れば何でもなかつた。寧ろちえ子からもお禮を云はなければならないやうな、それは薫の縁談で來たので、ざつとかういふ話である。前に一度出入りの者から話のあつた、先きは楠本といふこの界隈での地所持で、郷も辻村と同町内なれば、本人の息子も、その妹が薫と同窓の關係から、辻村の家でもほゞその人がらは知つてゐる。當の薫はより以上に、寧ろ知り過ぎるほど知つてゐる。

ところで、楠本にはもう一人庶子がある。これは別に一戸を立てさせて、女親と一しよにゐるが、それが手におへない不良青年で、しかも社會主義かぶれをして、或る事件の一味と一しよに、だいぶ前から未決に繋がれてゐる。間瀨は豫て昵懇なその女親から辯護を賴まれた

のが緣になつて、楠本の主人とも知合ひになつた。そして間瀬が辻村とも懇意なところから、今度の媒酌も賴まれたのであつた。

「仲人がこんな事まで喋つちや、楠本では迷惑かも知れんが、どうせ後になりや分る事なんだから……それでよければ結構、いけなければいけないまでさ。ねえ、奥さん、さうぢやありませんか。何しろ僕にこんな使ひをさせるなんて、させる奴が間違つてるんで……しかし、庶子がそんな風にぐれたものだから、嫡男のはうも心配になつて、何でも早く身を固めさせようと躁り出したんだな。」

「それにしたつて、賴む相手もあらうに……だが、冗談は冗談、あれももう年ごろだから、ちえ子、お前よく話を聞いて……」と健作は腕時計を見て、「からと……三時までにちよつと顔出しするところがあるから、僕はこれで失禮するよ。その話は僕よりも、家内によく話してやつてくれ。但し、ついでに利殖の入智慧なんかは、女にご免蒙るぜ。」と釘を一つ刺しておいて、さつさと立つて行つた。

健作はちやんと洋服にも着更へてゐて、今思ひ付いた外出ではなかつたが、それでもちえ子は客の手前ちよつと惡かつた。間瀬はしかし氣にも留めなかつた。却つて主人の中座したのをいゝ事にして、變な事を云ひ出した。

「ご主人、今度は沿海州へお出かけださうで……お留守がお寂しいですな。また房州へでもお出かけになりますか？」

ちえ子はうつかりしてゐて、何を云ふのか分らなかつた。

「だが、あそこも夏は混雜して妙でないでせう、學生向きだからな。」

「何ですの？」

「北條の字八幡、何とか館。」と云つておいて、間瀬は澄ました顔附で、「嫡男のはうの緣談も緣談だが、楠本の不良青年の話は、いつかあなたにもしましたな。楠本とは云はなかつたが、或る富豪から辯護を依賴された話は……あれから僕、所用で箱根まで出向いた歸りに濤藤氏を訪ねて見たが、あいにく東京へ歸つた後でしてな。それから大久保の家へも一度訪ねて行つたけれど今度は關西のはうへ旅行中だとかで……その代り細君にちよいと會ひましたよ。どうもすてきな女で……あなたの話も出たつけ。」

ちえ子は赧くなり、また蒼くなりして、

「わたしの……話つて？」と辛うじて聞いた。

「別になに……あゝいふ女は自分を信ずることが厚いから、却つておめでたいもので……や、これはご隱居さん。」と間瀬は居ずまひを直した。

健作が出がけに話して行つたので、老母も自分が一番血の濃い薫の緣談に引込んでもゐられず、わざ〳〵隱居所から顔を出しに來たのであつた。間瀬も年寄りを相手には油も賣れなかつた。健作やちえ子に話したとはずつと眞面目に、それには仲人らしい口も少しは利いて、是非一つお考へおきをと云ひおいて歸つた。

間瀬が歸つた後で、老母は可なり乘り氣になつて云つた。

「今度はそれでも、やるならやる、斷るなら斷る、どつちとも早く返事をしなけりやなるまいよねえ。ちえさん、お前はどうだね？わたしやはなから可いと思つてるんだけれど。」

「おつかさんやわたしが、どう思つたつて仕方がないわ。當人次第だわ。」

「駄目だよ、當人は百まで新造でをるやうな了簡でゐるんだからさ。それに若い者の擇り好みを聞いてゐちやきりがないからね、せつかく貰ひ手のあるうちに、大ていなところで、はたの者が決めてしまつてやらないことには、あの子の爲めにも……」

「いゝえ、そんな罪なことはわたしにや出來ません。」とちえ子は急に語氣を交へて云つた。「百まで娘のつもりでゐたつて、かまはないぢやありませんか。」

「何だとえ？ あれ、眞蒼な顏して……」と老母は呆れて、「變な人だねえ。お前、藥は服んでおいでかえ？」

「おつかさん、あなたはね、わたしにもよくお前の爲めだとか、家の爲めだとか、ため、ためつてよく仰しやるけれど……皆んなそれが功利的の意味なんだから……今もまたあの子の爲めが出たけれど、それがどう薫さんの爲めだか……先きが地主さんで手固いから、そこへ緣づかせれば、おつかさんは安心が出來るから、その爲めぢやないの。さういふ事は誰にもよくあるものよ。ひとの爲めにしてやつてると思つてる事が、案外自分の爲めにしてゐたりする事が……だからわたしは、ひとの事をはたからうつかり圖らつたりするのは恐ろしいのよ。そりやはたの者が仕合せだと云へば、わたしもおつかさんにさう云はれて覺えがあるけれど、薫さんだつてやつぱりさうだと思つて行く氣にもなるでせうよ。けれど後になつて、いつか自分の本心に聞いて見る時が來るわ。その時初めて自分は仕合せか仕合せでないか本當に分つて見て、それでもやつぱり心から仕合せなら云ふことはないけれど、もしさうでなくつて、外にもつと、女の本當の……」と云ひかけて、ちえ子は不意に顏を顰はして、「あゝもう……厭なことばかり云つて、おつかさん、ご免なさい。わたし、氣になる事があるものだから、何だか頭がこんぐらかつてしまつて……その話は後でゆつくりしませう。」と云ふと、ぷいとその場を立つた。

薫の緣談も緣談だが、それよりもさつき間瀬に房州の事を一こと云はれてから、ちえ子の頭は可なり惑亂されてゐた。自分の居間へ歸つて獨りで考へると、考へるほど疑惧と不安とで心が亂れた。間瀬のさつきの口振りでは、まだもつと自分の秘密を知つてゐるらしく思へた。あの樣子では、自分が房州から片瀬へ呼び出しの電報を打つた事も知つてゐるかも知れない。この春東京驛であの男に聲をかけられた時からこつち、始終何だか自分の後を尾け廻してゐるのではないかとも疑へた。何よりもちえ子の氣がかりなのは、ステーションホテルの事であつた。それは間瀬に知られなくても、あれ以來ずつと自分で心を責められぬいて、その烈しい悔恨と恐怖とが、肉體的にまで彼女を苦しめてもゐるくらゐであるから。

それに間瀬がわざ／＼宏造を訪ねて行つたといふ事も、ちえ子にはやつぱり疑惑の一つであつた。いつか間瀬自身で云つてゐたやうに、たゞ墓詣りに參つただけで、わざ／＼片瀬へも行き、また大久保の家へも出かけたのだらうか。それなら宏造が留守だからといつて、何の爲めに欽子に會つたのだらう。間瀬がもし自分と宏造との間の秘密を知つてゐるとすれば、どの程度まで知つてゐるのか。とにかくあのお喋りが欽子夫人に接近したといふ事は、ちえ子に取つて可なり不安であつた。

「あゝ、こんな思ひをするくらゐなら、いつそ自分で欽子さんに……」とちえ子はさうも考へた。

七たび罪を犯しても、七たび悔ゆれば許せといふ訓へさへある。許す許されないは別にして、たゞちえ子は一思ひに懺悔をしてしまつたら、どんなに心が輕くなるだらうと思ふと、それだけでも欽子の前に自白したいやうな氣がした。そのくせ肝心な夫の健作に對しては、全然そんな勇氣のない事を自分で知つてゐた。何にも知らない夫に、聞かせずともの事を聞かせて、厭な思ひをさせるだけ却つて罪深いやうな氣がし

た。

懺悔といふ事は一種の自己催眠である。それには不思議な誘惑と、無意識の誇張とがある。ちえ子は直ぐ自分の輕卒に氣が付いて、飛んでもない！　と獨りで身顫ひした。

「それこそ事が面倒になるわ。さうだ、あんまり面倒にならないうちに、早く二人つきりの間で……」

宏造と二人きりの間で、しかしどうしようと云ふのか、そこまでの思案はまだちえ子に出來てゐない。彼女はまだ〳〵獨りで苦しまなければならなかつた。

「小母さま、お邪魔ぢやなくつて？」

薫がこの座敷へ來てぺたりと坐つた。むく〳〵と敷居へ乘りかけるやうにしたその丸い膝頭を、ちえ子は眩しさうな目で見るともなく見やりながら、

「この人も太つたよ。」と思つた。「なあに？　薫さん。」

「お邪魔ぢやなくつて？」

いつになく遠慮さうに、うじ〳〵してゐると思ふと、薫は急に赧くなつて切り出した。

「今お婆さまからお話がありましたけれど……

小母さま、わたし、楠本さんへ行つて見るわ。

「え、行つて見るつて？」

「さうすれば、お婆さまも安心しますもの。」

「行つて見るなんて云ふから。わたし何の事かと思つた。だつてあなた、よく〳〵考へたの？」

「えゝ、考へたわ。」

「あなたは戀愛の無い結婚は、反對ぢやなかつたの？」

「だつて、お婆さんを安心させる爲めなんですもの。」

「をかしいわね。お婆さんを安心させる爲めだけに、犠牲的の結婚をするんですか。それぢやまるきりいつもの主張を裏切るんぢやないの。わたし、さつきもおつかさんによく云つておいたんだけれど……薫さん、これはあなたの一生の問題よ。年寄りが何と云つたつて、決してそんなことを取上げるには及びませんよ。あなたはあなた自身でお決めなさいよ。」

「えゝ、自分でさう決めたのよ。」と云ふと、薫は不意に袂で顔を抑へた。おろ〳〵と泣聲になつて、「小母さま、わたし、もう俊次さんは……」

「俊次さんは？」

「思ひ切つたのよ、あんな人……」

「まあ、どうして？」

「だつて、あの人、面と向つてわたしにさう云ふのよ、處女なんて淺薄で、十分も向ひ合つてると退屈するつて。そのはずよ、あんな子持ちの奥さんなんかにすつかりもう……わたし、呆れつちまつたわ。」

「あなたの云ふのは、淸藤さんの欽子さん？」

「えゝ。」

「まあ！」ちえ子は蒼くなつて、「そんな馬鹿な事があるもんですか。」と叱るやうに云つた。

そのまゝ彼女は、何とも云へない厭な〳〵顔をして默つてしまつた。それが事實とすれば、怪しい因果のもつれとも云ふべきである。けれどもちえ子は半信半疑であつた。俊次が欽子夫人に引きつけられてゐる事は前から知つてゐるが、それが薫の邪推するやうなそれほどの深い意味合ひには取れなかつた。それよりも俊次の心が薫から離れて行つたのは、半ば女の方の罪だと思つた。薫のやうにふは〳〵した風では、男が氣まづくなるのも無理はないと思つた。

「それにしても今度の縁談は考へものよ。薫さんはだい、、楠本さんのあの人に愛は無いんでせう。おつかさんは向うの家から財産ばかり見て、打算的に纒らなければ、それで仕

合せだと思つてるんだけれど、女の本當の幸福は、やつぱり愛の生活。それに良人さんは一つは、俊次さんへ面あてで行く氣になつたんでせう。そんな動機で、うつかり愛もない結婚をしてしまつて、後になつてきつと苦しむわ。」

「愛のない結婚でも、結婚すれば愛が芽ぐむ例もあるでせう。」

「けれど、結婚せずにはゐられないやうになつた戀愛と、結婚してから芽ぐんだ夫婦愛とは、違ふでしよ。」

「ぢや、小母さまも、小父さまの愛だけぢや不滿足だつたんでせうね。」と實は大眞面目である。

「知らないわ。」とちえ子は苦笑ひをして、「わたしの事なんか、どうだつていゝのよ。」

「女の本當の幸福は愛の生活……さうだわ。」と實は獨りで溜息をついて、「それが得られなくつちや女は詰まんないわね。その時はわたし、かまはないから外に求めるわ。」

「夫婦の外に？」とちえ子は息を吞むやうにしてぢつと見詰めた。

「だつて、仕方がないわ。幸福を求めるのは人間の權利よ。」

「ぢや、夫と離別して？」

「離別しても、しなくつても。その代り求めるなら大つぴらに求めるわ。わたし、因襲的の道德なんかに囚はれない。」と實は力んだ

ちえ子はたゞ寂しさうに笑つてゐた。

三千圓

上野ステーションの待合室の時計は、午後八時二十分前であつた。健作は仙臺行きの乘車券と急行券と寢臺券と、そして別に入場券も一枚買つて來て、それをちえ子に渡した。

「自動車は歸したのかい？」

「えゝ。」

「待たせておくとよかつたのに。ぢや驛の前にタクシイがゐるから、歸りはあれでお歸り。」

「タクシイなんか無駄よ。わたし一人なら電車で澤山だわ。」

「電車は混むよ。無駄をいへば、わざ／＼送つて來たのから無駄ぢやないか。たまの旅行か何かぢやなし。」

「でも、今度はロシアまでいらつしやるんですもの。」

「それだつて、小樽から一晩しかかゝらないんだからね。しかし、今度はちよつと長いから留守を頼むよ。」と云つて、健作はふと思ひ出して、「さう／＼、平山金融を回したんで、こなひだの三千圓がそのまゝ這入つてゐるが、あれもあゝしておいては詰まらないぢやないか。」

「どうしませう？　やつぱり銀行へ預けませうか？」

「どうともお前のいゝやうに。いつそ定期で預けたらどうだ。さうすればもうおれが融通したくても出せないから。……あゝ、欲心を斷れたね。……お前もそれなら安心だぜ。」と彼は笑ひながらベンチを立つた。

「あなたのはうには當分お入用もない？」とちえ子も續いて立つた。「ですか——」

この時突如として或る一つの意識が、彼女の頭に閃いたのであつた

ちやうどそれは、永い間暗闇に閉されてゐた頭の中へ、きらりと一道の光が射したやうに。そしてその光は、よし漸くもなり弱くもなりして、躊躇と逡巡はあつたにもせよ、だん／＼決定的にちえ子の全精神へ燒けついて行つたのである。夫を見送つておいて、驛前の廣場をさつさと山下へ拔け出て來た時には、血色の悪い顏も興奮して輝き、氣分も通ごゝろになく緊張してゐた。電車の混雜ぐらゐにめげてはゐなかつた。

宿へ歸ると、ゆえ子は[illegible]、あてて[illegible]手紙を書いた。それは近日お目にかゝりたいが、ご都合を知らせてくれといふので、至極早く[illegible]便で[illegible]した。すると、[illegible]し[illegible]つた。[illegible]日[illegible]といふ[illegible]、[illegible]でたければ、[illegible]土曜日にして頂きたい。[illegible]一人[illegible]からゆつくり涼みがてらおいでを願ひたい。さういふ[illegible]であつた。

その土曜日は、東京市で開催した日比谷公園の[illegible]、[illegible]く な[illegible]でも[illegible]や、[illegible]下[illegible]こまれてゐた。[illegible]に[illegible]せてもらつて、そこの[illegible]走になり、それから一しよに日比谷へ廻るはずであ[illegible]に、自分では繰り行きたいとは思はないし、[illegible]めから[illegible]て[illegible]一しよに[illegible]

ゆえ子[illegible]には、[illegible]の開け放した窓際へ、[illegible]マンドリンを持ち出して、うろ覚えのセレナードか何かを爪びきしてゐた。電燈の光に深いシェードで包まれ、[illegible]の上へ[illegible]し[illegible]。しかしゆえ子は、その[illegible]た氣分で、薄暗い中に固くなつて立つてゐた。宏[illegible]は自分で[illegible]、[illegible]闘は格子戸のまゝ中からちよつと締まりだけしておいて、[illegible]に[illegible]

ゆえ子は[illegible]、それでも男の手のかゝつた壁をぎごちなく眺めてしまつて、[illegible]冷たい[illegible]でも浴せられたやうな氣がした。何かしら女の心が[illegible]

[illegible]寄[illegible]、[illegible]しそれ[illegible][illegible]の舞台以來、激しい思慕と、惱ましい戀[illegible]、それだけまた内攻的に深く[illegible]あつた情熱が、今や燃えるばかりになつて、[illegible]せられたやうに冷却させられたのであつた。何といふあつけない事か。[illegible]はきよときよと突立つてゐた。

「わたし、今日お伺ひしましたのは……」とゆえ子は[illegible]上りましたので、何から申上げてよいか……[illegible]を、わたしの一時の心得違ひから……本當に惡い[illegible]いたしました。それ[illegible]、[illegible]子[illegible]、何も彼もこゝでお詫びをいたします。どうぞ今まで[illegible]、これ[illegible]えばて頂きたうございます。」

[illegible]

「それ[illegible]ど、思はぬ[illegible]から、そのまゝになつてをりましたので……どうぞご洋行費の足しに」とゆえ子は部屋の眞中のテーブルの端へ、小さな[illegible]とまた頭をさげた。

「何ですか、それは。」と宏造は初めて口を開いた。

「これだけはどうぞ、何にも仰しやらずにお納め下さいまして。」

[illegible]

り去つた。そしてテーブルの上の包みを抓み上げると、縮緬の袱紗がするりと擶けて、五百圓束が六つ。三千圓といへばおろそかな金ではないけれど、さうして明るいテーブルの上にころげ出た手垢だらけの紙幣の薄つぺらな堆積は、決して愉快なものでも見いゝものでもなかつた。ちえ子はつい目をそらして、ぱつと獨りで赧くなつた。一つは電氣が急に明るくなつて、極りも惡かつたので。

宏造はテーブルの上の紙幣と、ちえ子の顔とを默つて見比べてゐた。そして女の束髪に初めて氣が付いた。紙幣はもとの袱紗に包んで、しつかりとこま結びにして、少し顫へる手でテーブルの向うへすつと押しやると、

「まあお掛け下さい。」と云つた。

二人はテーブルに向ひ合つて腰掛けた。見ると、宏造の顔は紙のやうにぱさ〳〵と白けてゐた。そして蟀谷の蒼い靜脈がびく〳〵と不隨意に蠕動した。ちえ子はつらさうに目を伏せた。

「ちえ子さん、せつかくですが、それはお藏ひ下さい。」

「……お納め願へませんの？」

「これきり忘れてしまへと仰しやるのに、それは拜借出來ないぢやありませんか。それともこれで今までの事も忘れ、これからも因緣をつけられないやうに、手切金とかいふ意味で、宏造にくれてやらうといふ思召しなんですか。もしさうなら、わたしは云はなければならん、あなたはわたしを侮辱するものだ。宏造はヷンハイアぢやない。」

「まあ……そんな風にお取り下すつては……」とちえ子は明らかに狼狽の色を見せたが、「何もこれは今初めての事でもございませんのに。この前にも一度お耳に入れた事ですもの。その時にはあんな手違ひになりましたけれど、それでもわたしの心ざしだけは分つて下すつたのですから……今だつてわたしはあの時とおんなじ意味で、たゞせめてこんな事でもお役に立たせて頂きたいと、正直それだけの考へなんですから、あなたもどうぞお心持よくお納め下さいましたら……ねえ、如何でせう。」とだん〳〵眞劍になつた。

しかし宏造は頑固に首を振つた。

「いや、わたしは手に觸れたのも恥ぢるんです。あなたが持つて來たのでなかつたら、本當に蹴飛ばしてしまひたいんです。見るのも厭だ！早くお藏ひ下さい。」と云ふと、彼は突と椅子を立つて窓際へ行つた。

ちえ子は袱紗包みを前へ置いたまゝ、ぢつと考へ込んだ。

「ちえ子さん、わたしは旅行先きから二度手紙を上げましたね、二通とも屆いたでせうね？」と宏造は突然訊いた。

「えゝ。」

その實ちえ子は、二通とも封のまゝ燒いてしまつたのであつた。

「しかし二度ともご返事はなかつた。けれど、もしご都合が出來ないものなら、電報でちよつとさう云つて下さるやうに手紙にも書いておいたから、無論承知して下すつた事と思つて……わたしもおめでたい、歸りにわざ〳〵國府津へ降りて、手紙でやつぱりお知らせしておいたあの宿屋で、まる一日と二晩、あなたを待ち呆けしたものですよ。ね、いづくんぞ知らん、その時はもうあなたの心には、恐らく今日のやうな考へがあつて、それでご返事もなかつたのだ。わたしは不思議でならない、何があなたをさう急に心變りさせたのか、それとも初めから、わたしを遊ぶつもりであつたのか……わたしはしかし……口にするのも不快な言葉だが、男地獄ではない、あなたもまさかそれほどの妖婦で

はないはずだ　わたしは自分が國府津で同じやうな思ひをしたから、尚さら痛切に同感する事も出來るのだが、いつか房州で待つて下すつた時のお心持、それはお話を聞いただけでも、あなたの美しい純情に泣かされたのです。わたしはそれを聞いた時、自分は一生をかけても、あなたのその一夜の思ひに酬いて惜しくはないと決心したのですよ　あなたの房州の一夜と、わたしの國府津の一晩と、その間にどれだけの日が經つんです？　しかもその間にあなたの心に……どうもあんまり意外で、わたしは何だか本當とは思へない、夢のやうな氣がする。夢だ、あつけない夢だつた。それにしても思ひの殘るつらい夢でした。」

ちえ子は房州の一夜を云ひ出されると、自分でもその時のやるせなかつた心持がしみ／″＼思ひ出されて、つい涙ぐんでしまつた　そして一度涙がこぼれ出すと、もう後から後からとせぐり上げて來て、留め度なく泣けた。宏造のいふことが悲しいのか、くやしいのか、それよりも自分が何だかいぢらしくてならないやうな氣がして、暫くはハンカチーフを顏から放せなかつた。

「わたしも、つらい。」とちえ子は思ひ餘つたやうに溜息と一しよに、やつとそれで涙も紛れると、力なく云つた。「あなたの仰しやることもご尤もです　わたしにも申し上げたいことはありますけれど……いつか聞いて頂く時もございませう。今日はもうそれでは……」

彼女はテーブルの上の袱紗包みを手提へ藏つて、しよんぼりと椅子から立つた。

「それでは、どうもお邪魔をいたしました。」

しかし宏造は、窓際のソファに體を沈めたまゝ、氣強く目を閉ぢて返事はなかつた　ちえ子はしを／＼とテーブルを廻つて、入口のドアに手をかけた。ドアを出てしまへば、二人の間ももうそれきりである。宏造もたうとう耐りかねて、むくりと立つて來て後ろから引留めた。

ちえ子は素直に振返ると、行きなり男の胸にすがりついて、烈しく泣き出した。

そのまゝ意地も張りも拔けてしまつたやうにくつたりとなつた女の小さい體を、宏造は抱くやうにして窓際のソファへ連れて來た。ちえ子はさめ／″＼と泣いた　その目に、その頰に、そして唇に、男は自分の唇の觸れるのも厭はなかつた。

電燈のスヰッチを捻つたので、窓一ぱいに射し込む青い月の光は、二人の無言の姿を水中のニンフのやうに淡く照らした。

やがて欽子夫人を中心に、家族五人がぞろ／″＼と賑やかに歸つて來たのと、宏造がちえ子を明るい通りまで送つて行つたのと、殆ど一あし違ひであつた。宏造が大事を取つて裏道から行かなかつたら、途中でぶつかつたかも分らない。

欽子は直ぐ夫の書齋へ行つて見た。電氣は消してあつて、テレスへ出るフレンチケースメントが半分開いたまゝになつてゐる。

「月がいゝから、大かたまた裏の空地よ。でも、不用心ね。」

さう呟きながら、欽子はケースメントを閉ぢておいて後へさがると、何やら足の爪先にさはつた。拾ひ上げて見ると、女のヘーアピンであつた。月の光で見ても、どうやら安物の女中や松枝の頭にする品ではないらしい。彼女は直ぐ電氣のスヰッチを捻つて見た。それは臺も本甲で、飾りには天然眞珠が鏤められた。どこかで見たやうな覺えがある

それから、部屋の中をずつと一順見て廻つた。しかし外には別に目に留まるやうなものもなかつた。最後に宏造のデスクの上を見た。新しい原稿紙が一帖、桃色の吸取紙を挾んだま

ま、もうこの一週間ばかりも、さうして一字も書かずに載せられてある。欽子は何氣なく吸取紙を取つて目障りな折れ目を伸ばし、そして原稿紙の上へ重ねた時、ふとその桃色の面の點々としたインキの痕の中に、いつ書いた痕か、夫が書くはずはないと思ふ字を夫の筆蹟で見た。掠れ掠れではあるが、辻・・ちえ・・様・・・・と左文字に讀めた。

脅威

海拔四千二百尺、日光山は中禪寺まで登る、事實夏を知らない。それに神經性障害には騒々しい海濱よりも、靜かな、そして涼しい山地のはうがいゝといふ醫者の指圖から、ちえ子は避暑を兼ねて中禪寺へ來た。醫者ぐらゐいゝ加減なものはない。ちえ子自身ではもう轉地をしたりして、療養しなければならないやうな違和も全然感じなかつた。自分の事は自分が一番よく分る。何の障害どころか、寧ろ今までにないくらゐ生の力が體にも心にも漲つてゐるやうな近ごろの彼女であつた。けれど、醫者の云ふことなら一も二もなく盲信する老母が、やかましく轉地を勸めてきかないので。その代りちえ子が中禪寺から歸ると、老母と薫とは入れかはりに例年の鵠沼へ行くはずであつた。

では、ちえ子が自分で擇んで、この人目を離れた山上の寂しい湖畔へ一人で登つたのは、どういふ眞意かといふと、それには或る祕密の打合せが出來てゐたからである。

しかし來て見ると、中禪寺も思つたより人目が多かつた。わざと一日おくらして來た宏造と途中で落合ふと、どう話し合つたのか、ちえ子は直ぐそこの宿を引拂つて、二人は更に奥の湯元まで自動車で登つた。

湯元は逈に靜かだつた。旅館も質素で、滯在客の多くは、本當に體の靜養をしてゐるやうな連中ばかりだつた。こゝは中禪寺よりも更らに海拔千尺以上の高さで、宿屋の二階から仰ぐと、白根山にはところ〴〵雪の殘つてゐるのが見えた。二人は溫泉に溫まつて、なほ肌寒い嵐氣に火鉢を懷かしみながら、日本酒の熱いのを取つたりして、秋の夜のやうなしめやかな宵を語り深した。こゝには憚る人目もなければ、恐れる世間もない。二人きりの世界が初めて彼らの上に惠まれた。

いくら愛し合つた仲でも、一日鼻突合せてゐたら、飽きもし退屈にもなる。幸ひ宏造は仕事を持つて來た。翌朝早く自分だけ中禪寺まで下つて、一昨日ちえ子が泊つたとは別の宿へ宿を取つた。しかし仕事なぞ手につくものではなかつた。直きちえ子から電話がかゝつて來て、晝飯を濟ますと、また湯元のはうへ出かけてしまつた。

中禪寺と湯元と三里の間には、自動車もあり人力車もあり乘合馬車もあり、途中の菖蒲が濱までは舟もある。電話で打合せておいて、宏造が舟で行くと、ちえ子は俥で菖蒲が濱まで來てゐる。二人はそこから乘物を捨てて、地獄川から龍頭の瀧、ぶら〳〵と戰場が原を歩いて行つた。お花畠の高山植物は大半もうすがれて、桔梗や、女郎花や、吾木香のやうな秋草がわづかに咲き殘つてゐた。蟲も啼かず、鳥も飛ばない蕭條たる高原の一筋道は、二人の體と體をぴつたり寄り添はせて、手から手に、脈打つ心臟の鼓動を聞き合つた。古賀谷の一口水を男は口移しにしてやつて、いつか讀んだモーパッサンの小說の「女の一生」の或るシーンが惱ましく思ひ出された。湯瀧の凄まじい水勢と鳴動の前には、互ひの言葉も通ぜず、たゞ默つて顫へながら、女のはうから力強い抱擁を求めた。

歸りが夜になると、宏造は自動車を呼んで中禪寺まで下つた。泊る事もある。晝間歸る時

には、ちえ子も湯の湖に沿つた寂しい木の下道を吉賀谷近くまで送つて來る。どうかすると戰場が原まで一しよに來てしまつて、そこの落葉松の三本松あたりから、わざ〳〵また逆川の先きまで宏造が送り返す事もある。

　さうした人の世の約束から背いた快樂と、社會を忘れた幸福とが、いつまで脅威なしに續かう。それは昨夜からの深い霧が糠のやうな小雨になつて、寢床離れのちよつとためらはれるくらゐ山冷えのする朝であつた。八時ごろやつと起き出たちえ子が、階下の洗面所で後れ毛を梳きつけてゐる時、がらりと後ろの湯殿の硝子戸が開いて、前の姿見へぬつと映つた男がある。

おや！と思つて慌てて自分の顏をそらすと、姿見の中の顏はにやりと笑つて、

「お早う、奥さん。」と馴々しく聲をかけたものだ。

　ちえ子は體が強直したやうになつて、口が利けなかつた。男は間瀬辯護士であつた。朝から内湯の温泉に漬かつて、色の白い小肥りに太つた體が赤く熱つたやうになつて、帶ひろはだけの胸に濡れて貼りついた黑い胸毛が、ちえ子の目には厭らしかつた。

「ちつとも存じませんでした。」と彼女は辛うじて云つた。「いつ？」

「昨晩。實は直ぐ伺はうかと思つたんだが、お客さまのやうだつたからご遠慮しました。實は楠本のはうからやかましく急ついて來るんで、例の縁談のご相談ですがな。」

「まあ、わざ〳〵それで？」

「もつとも、宇都宮に少し職業上の用件もあつたんで。それならついでに廻つてくれつて云ふご隱居のお言傳で……僕も湯元は初めてだが、こりや房州なんかより靜かでおつですな。」

　さう云つて間瀬は、じろ〳〵ちえ子を眺めた。寢まきの浴衣の上へ單羽織を引つかけたまゝ、伊達卷一筋で、しどけない肌寒さうな姿であつた。

「それにしても、大そうごゆつくりで。」と彼はまたにやりと笑つた。

　ちえ子は初めて氣が付いたやうにはつと赧くなつて、羽織の襟を引き合せた。

「では、お後でわたくしお伺ひしますわ。」

「あゝちよつと。僕は今日午前にこゝを立ちたいと思ふから、來て下さるならそのおつもりで。」

「さう。あなたのお座敷は？」

「直ぐそこの突當り……ぢや、直き後ほど。」

　二階の座敷では、宏造がまだ寢足らないやうな顏をして、目覺ましの煙草をぽか〳〵と吹かしてゐた。ちえ子はいきなり枕もとへ來て云つた。

「あなた、大變な奴に逢つちやつたのよ。」

「またステーションホテルのボーイぢやないか。」と宏造は笑ひながら、綺麗に撫でつけられた丸髷の頭へそろ〳〵目をやつて、「さうして手を入れゝば結構ですよ、まだ壞すのは惜しい。」

「何ですの？」

「日本髮が。」

「あら、そこどころぢやないのよ。そら、いつかもお話した辯護士ね、あいつに今階下で逢つたのよ。昨夜こゝの家へ泊つたんですつて。」

と聞くと、流石に宏造も顏色が變つた。吸ひさしの卷煙草を煙草盆の火入へ突插すと、むく〳〵と起き上つた。ちえ子が間瀬の云つたことをそのまゝ話すと、彼は未練らしく聞いた。

「……だが、わたしといふ事を知つてるんだらうか？」

「そりや知つてますとも。とにかく後で、こちらから伺ふつて云つておいたから、わたしが階下で話し込んでる間に、あなたそつとこゝを出

て頂戴。俥が目立たなくていゝわ。」
「後はいゝんですか？」
「いゝわ。どち道あなたがいらしつちやまづいから……」とさう云つて、ちえ子はぢつと考へるやうな目をした。
それから彼女は次の間へ立つて行つて、鏡臺の前で身じまひを始めた。宏造はぐづ／＼と寢まきを着かへた。そして煙草盆から吸ひかけの卷煙草を拾つて、器械的に火をつけて、まづさうに燻らした。
「間瀬といふ男は變ですね。いつか家へも訪れて來たさうだし……何だか我々を探偵してるやうぢやないかね。」
「本當だわ。」
「どういふつもりで、そんな餘計な眞似をするんだらう？」
ちえ子の返事はなかつた。宏造は次ぎの間を覗くやうにして、
「ねえ　内々お宅の何に、頼まれてでもゐるんぢやないか？」と小聲に云つた。
「宅の？　主人に？　そんな事はないわ。」
宏造は暗い顔をして黙つてしまつた。
ちえ子はざつと身じまひを濟ますと、着物を着更へて、階下の間瀬の座敷へ行つた。間瀬は今ちやうど朝飯を濟ましたところで、茶を飲みながら給仕の女と何か話してゐたが、ちえ子の姿を見ると、ふつと黙つてしまつた。女中は赤い顔をしながら急いで膳をさげて行つた。
間瀬が宇都宮からわざ／＼こんな奥まで相談に來た縁談といふのも、聞いて見れば、たゞ楠本のはうが急いでゐるから、早く辻村のはうの返事が聞きたいといふだけの事であつた。
「どうです？　まだ當分ご滯在ですか。何なら一度歸つてもらつて……ご隱居ともよくご相談して下さらんか。僕もいつまでこんな事に引つかゝつてゐるのはかなはん。」と間瀬は云つた。
「わたしも一度歸らうと思つてゐたところですから、ちやうどようございますわ。」とちえ子も云つた。
「ぢや、明日にでもお宅へ伺ひますぜ、いゝですか？」
「えゝ。」
「何なら今日ご一しよに歸らうぢやありませんか？」
「有難う。まあどうぞお先きへ。」とちえ子は笑つてゐた。
「都合で僕も二三日遊んで、ゆつくりあなたにお話する事があつたんだが、まあそれはこの次ぎまでお預りしよう。ぢや僕は、一あしお先きへ失禮するかな。」
間瀬は亂れ籠の中の時計を見て、直ぐ女中を呼ぶと、宿泊の勘定書と、ついでに俥を一臺馬返しまで命じた。雨空も幾らか明るくなつて、そよ／＼と風が出た。
ちえ子が自分の座敷へ歸つた時には、宏造はもう居なかつた。女中の話では、ちやうど乘合馬車が間に合つて、それで歸つたらしかつた。
ちえ子はおそい朝飯を食べたり、宏造の宿へ電話をかけて見たりしてゐるうちに、雲が切れて薄日が射し始めた。さつきから空を見てはどうしようかと迷つてゐたが、それで急に歸る事に決心した。持物といつては着替への這入つた小型のスーツケースが一つと、バッグにパラソルくらゐで、支度は直き出來た。その間に宿の拂ひも濟まして、自動車を呼んでもらつた。
今朝の雨は戰場が原までで、歌が濱の湖沿ひの道は眞白に乾いてゐた。ちえ子は中禪寺の宏造の宿へ自動車を着けさせた。宏造は一時間ばかり前に歸つてゐた。彼はちえ子の顔を見るなり聞いた。
「さつきは電話でよく分らなかつたが、急に歸

るんですつて？
「えゝ、一度歸つて見ますわ。間瀨も今日ぢうに東京へ歸るんだつて、今朝立ちましたから、わたしも留守へでも行つて、何か喋られちや困りますもの。」
「今朝あなたが會ひに行つた時には、どんなことを云つてゐました？」
「やつぱり縁談の事が主で、あなたの事は別にもう云ひませんでした。でもあの男の事だから、いづれ女中にでもいろ／＼聞いてゐませうよ。とにかく厭な奴に見込まれたものね。」とちえ子は溜息をついた。
「全くわたしもさつきから氣にかゝつてならんので。どうでせう、片瀨と家と、二度もわたしを訪ねて來たと云ふんだから、一度こつちから會ひに行つて見ようか。さうしたら向うの意向も分るだらう。このまゝぢや不安でならない。」と宏造は思ひ入つた顏色で云つた。
「いえ、あなたはよして。あの男の肚は、薄々わたしにも讀めてゐますわ。そんな事をしたらなれもありますから、向うが何か云ひ出すまで待つて見ませう。恐らく金ですわ。」
「金だとは？」
「お金にしたいんですよ。」とちえ子は何か?しさうなんだから。」
「さうかしら？」
「わたしが自分の財産でも、よつぽど持つてると思つてゐるんでせうよ。」
　宏造は不興らしく、ちえ子の顏を眺めてゐた。そして何か云はうとしたが、獨りで賴くなつてやめた。ちえ子も今日ぢうに東京へ歸るつもりで急いでゐるので、宏造もいろ／＼思つてゐる事を話す暇がなかつた。そのうちに命じておいた俥が來たので、甚だ本意なく、わづかに階下まで見送つて別れた。
　中禪寺からは二人挽きの俥で馬返しまで下り、馬返しからは自動車にしたが、それでもちえ子が日光のステーションへ着いたのは、もう午後四時近くであつた。
「や、お早かつたですな。あなたもこの汽車で？」
　彼女が乘車券を買つてゐる後ろから覗き込むやうにして、さう聲をかけたのは間瀨辯護士であつた。
「あら。」と振返つたちえ子は、思はず迷惑さうな色を顏へ出してしまつた。
「どうもお氣の毒さま。すつかりご一しよになつちまひましたな。」と間瀨はにや／＼笑つた。
　宇都宮留りのこの汽車には二等室が一車しかなかつて、二人はどうでも同じ客車へ一しよに乘らねばならなかつた。同じ車室で座席もあいてゐる以上、ちえ子もさうわざとらしく間瀨から離れても腰掛けられなかつた。宇都宮までは當り障りのない窓外の山水を話してゐたが、宇都宮で汽車を乘りかへると、間瀨は鞄の中から皺だらけの電報送達紙を取出しながら云つた。
「僕も湯元でゆつくり出來たら、あなたに見せようと思つて持つて來たんだが、まあ聞きなさい、讀みますよ。」
　一字々々小聲に讀み出したその電文の文句こそは、ちえ子に取つては意外とも何とも、自分がいつか房州から、片瀨の宏造へ打つた呼出しの、それではないか。どうしてそれが間瀨の手にあるのか。間瀨自身では、彼が箱根の歸りに片瀨へ廻つて、宏造の留守へ初めて訪問した時、ちやうどその電報が來てゐて、留守居の別莊番から宏造に渡してくれるやうに委託されたと云つてゐるが、委託されたのだか、それとも詐取したのか、間瀨の事だから分らない。
「清藤氏に會つたら手渡ししようと思つてゐるんだが……」と彼はその送達紙を大事さうにまた

鞄の中へ藏ひながら、「それとも、あなたに買つてもらはうかな。」と冗談でもないらしく云つた。

「買ひませうよ。」とちえ子は咄嗟に肚を据ゑて應じた。

間瀬はそろ／＼と探るやうな目をして、暫くその顏を見守つてゐたが、一つ頷くと、上半身を乘り出して云つた。

「但し、註文がありますぜ。」

「ご註文を伺ひませう。」

「さうですか？」と彼はもう一度ちえ子の顏を見直すやうにして、「思つたよりあなたは分りが早さうだ。ぢや上野へ着いたら、僕と一しよに來てもらつて、今夜一つ、話を決めてしまはう。」と云つた。

惡性男

汽車は八時に上野驛へ着いた。間瀬はステーション前の自動車を呼んで、牛込までやらせた。ちえ子も云はれるまゝに乘つたが、牛込はどこまで行くのか聞かうともしなかつた。彼女はもう肚をすゑてゐた。二人は神樂坂の上で自動車を降りた。そこから明るい横町を二つばかり曲つて、蟋蟀籠を積み上げたやうな三階建ての、忍び返しや目隱しをうるさく取附けた門口へ來ると、間瀬はちよつとちえ子を振返つて見た。ちえ子は看板の門燈を讀むまでもなく、どういふ家かも直ぐ知つたが、別に騷ぐ氣色も見せなかつた。

二人か通されたのは、廣間の次の間のやうな、三方葦簾戸になつた風情のない小座敷だつたが、その代り三階の角で風通しはよかつた。不景氣だと見えてどの座敷も人氣はなく、しんとしてゐる。ちよつとした通しもので冷しビールが出て、女中は一つだけ酌をすると、氣を利かしてその場をはづした。

「こゝのお上は僕の古い馴染でね、ご覽のとほり氣のおけない家だから、これからちよとご贔屓に……どうです？ 房州や日光とはまた趣が變つて、たまにはかういふところも……」と間瀬は自分でビールを注ぎながら、「あなたはお腹がすいたでせう、今何か命じますから。」

「いいえ、わたしたら澤山です。それよりもどうぞご用談を……わたしも急ぎますから」とちえ子は催促した。

「まあさう云はずに、ゆつくりなさいよ。おそくなつたら泊るさ……いや、それは冗談だが……」と間瀬は笑ひながら、手を鳴らして女中を呼んだ

彼は新しく日本酒を持つて來させたりして、ビールとちやんぽんに飲んだ。可なり酒は強いやうであるが、すき腹のせゐか直ぐ色に出た。顏から、頸筋から、皮膚の白い胸元まで紅いやうに染まつて、濃い黑い胸毛が電氣扇の風でむづむづ戰いだ。一度座をはづした女中も酌をしながら腰をすゑてゐるし、肝心の話も出來さうにないので、ちえ子もこんな事ならついて來るではなかつたと思つた。それにだん／＼男が醉つて來るのを見ると、何だか不安にもなつて、今さら自分が輕卒だつたやうに後悔もされた。彼女はもぞ／＼と腰を浮かせてゐた。

するうちに、間瀬は女中を連れて便所へ立つた。ちえ子はこの暇に默つて歸らうと思つて、片隅に置いてあつた手提を取りに立つたところへ、もう間瀬が歸つて來て、いきなり後ろから羽がひ締めにした。

「何だ、歸るんですか。肝心の話はこれからぢやないか。」

ちえ子はびつくりして力任せに振拂つた。それでも男の力で無理やりもとの座に坐らせられると、顫へる兩手をきちんと膝の上に置いて、

「早く仰しやつて下さい。」と腹立たしさうに云つた。

「實は素面ぢやちよと云ひ出し難いんでね。」と間瀬は殘つてゐたビールをぐい／＼あふつて、虚のコップをとんと茶湯臺へ置くと、もう一度伺ふが、あなたはあの電報を買ひますか？」

「買つてもようございます。」

「ようございますぢやいけねえ。」と彼は醉つぱらしい呂律で、急にそんな言葉づかひをした。

本當に醉つてゐるのか、それとも醉つた振りをしてゐるのか、さつぱりちえ子には分らなかつた。

「是非買ひたいと云ふんでなけりや……僕のはうには是非買はせる心當りが外に二人もあるんだからな。たい一にあの名宛の清藤公造、次ぎには友人の健作君……だが、そこまで行つちや打毀しだからね。」

ちえ子はさつと顏色を變へた。そして脣を噛んだ。

「それよりもあなたがそつと買つておいて、默つて濟ましてゐたら、一番無事だらうて。」

「ぢや、是非わたしにお讓り下さい。」と彼女はくやしさうに云つた。

「よろしい。ところであなたにお讓りするには、註文がある。」

「どういふご註文です？」

「つまり賣買契約でなく、有償契約といふやつに願ひたいんで。」

「と申しますと？」

「有償すなはち償ひさ。身を以て償ふ……ぢやちと意味が違ふかな。とにかく賣買なんて色消しだから、ぐつと人情づくに……ね、分つたでせう――」

ちえ子は彈かれたやうに横へのいた。それは彼女に取つて全く豫想外であつた。健作とは古い友達でもあり、自分とも永年の知合ひで、今までそんな氣振りもなかつた間瀬から、思ひもよらないことを突然云ひ出されたのには、たゞ呆れるより外はなかつた。

自分もいま夫の事は考へまい。けれど、現に公造といふものの事は、知り過ぎるほど知つてゐる間瀬ではないか。彼から見れば、自分といふものはもうひとつ爲めに心も體も濁された女だ。知らないまへなら是非もないといふ事もあるが、知つては興ざめて厭になるのが當りまへであるのに。ちえ子は男の氣が知れなかつた。

それは彼女が、男といふものの惡性である事を知らないのである。惡性男といふものは、好んで汚物に寄る蠅のやうなものだ。彼女が尋常な細君である間は、間瀬にもそんな不埓な野心は決してなかつたのだ。たゞ美しい夫人として、友人の艶福を羨んでゐたくらゐに過ぎない。しかし、一たん彼女の祕密を嗅ぎ知ると、彼はその汚濁された不貞の肉に、貪婪な好奇心と、惡魔的な慾情を燃やしたのであつた。

「僕の註文は分つたね。」と間瀬は暫くしてから念を押すやうに云つた。「分つたら……今日は金曜日だな……ぢやこの次ぎの金曜までに考へておいて下さい。金曜日の午後七時に、僕はこゝでいゝ返事を待つてゐるから……だが、それには是非必要條件として附帶しておくが、いゝ返事にしろ、惡い返事にしろ、返事はあなたの口から直接に聞く事。ね、いゝですか。ぢや、今夜はもう歸して上げよう。十一時かつきりに自動車が來るはずだから、そろ／＼お支度なさい。」

不結果

ちえ子はあのむつ／＼動く胸毛を思つただけでも身顫ひされて、間瀬の卑劣な強迫が腹が立

ばならなかつた。しかし、腹を立つてゐるだけでは済まなかつた。彼はその卑劣な慾望の通らなかつた時の、陰険な報復も匂はしてゐた。さうなると自分ばかりの問題ではない。こんな事を宏造に聞かせるのは、何だか自分で自分を辱かしめるやうで厭だつたが、さうは云つてゐられないので、早速ありのまゝを手紙で中禪寺のはうへ知らせてやつた。

宏造からも早速返事が來た。明日早朝にこちらを立つて、上野驛から直ぐ大森のかういふ旅館（屋號を書いた下に括弧をして、曾て自分の友人が滯在してゐて、自分も一二度遊びに行つた事があるが、靜かで、比較的人目のうるさくない家、と斷つてあつた）へ行つて待つてゐるから、委細はお目にかゝつた上でといふのであつた。日附を見ると、その明日とあるのは昨日の事であつた。郵便が延着したのである。そして間瀨と約束の金曜日は明日に迫つてゐる。ちえ子は直ぐ大森へ出かけて行つた。

「一たい間瀨といふ男は、幾つぐらゐです？」

と宏造はのつけにその年ごろを聞いた。

「さあ・・・あなたより三つ四つ上でせうか。でも若く見えるわ。」とちえ子は正直に云つた。

「あなたは悪だつて云つてゐたが、わたしはどうもさうは思へなかつた。」ただ宏造はちよつと痛ましさうな色を見せて、「あなたはそれで、明日約束の家へ行くんですか？」

「行くくらゐなら、わざ／＼あなたにご相談しやしませんわ。」

「わたしはいろ／＼考へて見たんだが、もうかうなつた以上は、卑怯に避けてる必要もないから、わたしが間瀨に會つて見よう。もつとも、會つてどうといふ成算は今ないけれど、しかし直接に打つかつて見たら、そこは男と男とで、案外また話の片附きがいゝかも知れない。何にしてもあなたが行くのは不安だ。明日の晩はわたしが代りに行きませう。だい一、わたし宛てに來た電報を默つて横取りしてるのは怪しからん。それから取返してやります。」

宏造のその意氣込みは分るが、相手が何しろ法律仕込みの惡であるだけに、ちえ子も心もとなく思はないでもなかつた。けれど、外にいゝ考へも自分にはないし、ともかくも明日の晩、間瀨が待つてるはずの、例の待合へ、宏造に行つてもらふ事にした。

「さう決まれば、お互ひにもうその話は明日まで口にしない事にして・・・」と、少しまだ早いけれど、何かあなたの好きな物を註文しておいて、こなひだうちの日光で[illegible]だつた[illegible]でもしながら、一しよに御飯を食べませう。」

中年者の戀は、その快樂の[illegible]時間、[illegible]たに過すのが惜まれるのであつた。何となく、時が迫つてゐるやうな焦燥感が絶えずある。殊に彼らのやうな不自然な戀仲にあつては、明日の日も知れないといふやうな不安すら手傳つて。それはちえ子にしても同じ心持であつたが、しかし今日はさうしてもゐられない家のはうの都合があつた。それは老母と薫とを約束の鵠沼へ立たせてやるはずで、午前にどうしても自分が歸つてゐなければならなかつた。

その代り翌日は、髪も新しく男の喜ぶ髷に上げて、夕方明るいうちからちえ子は來た。そして約束の七時に間に合ふやうに宏造に出かけてもらつた。昨日初めて泊まつたばかりで、[illegible]から様子も分らない宿屋に、一人ほつねんと殘されて見ると、ちえ子も心寂しかつた。どこか連込宿といつたやうな家で、どの座敷も客が居るか居ないか分らないくらゐ靜かであつた。階下の帳場のはうで、まんざらの素人でもないらしい男の澁い中音で、端唄か何かを爪彈きで語つてゐるのが、うるさく耳についてならなかつた。

それは昨日老母たちを立たせてやつたその連想からでもあらうか、ちえ子はこの春、鵠沼の電車線路で見た心中の片われ女のむごい死にざまが、ふと胸に浮んで來た。これまでつひぞ思ひ出しもしなかつたのであるが、一つは感傷を弄んだ江戸俗曲の情死讃美の文句が、忘れてゐた記憶を搖すり覺ましたのでもあらう。それだけならまだいゝ。彼女はいつの間にか自分たちの戀を、さうした恐ろしい悲劇へ結びつけて考へてゐた。それがずつと後までも癖になつて、ともするとその不吉な考へが、彼女を脅かし脅かしするやうになつた。

さういふ暗い氣分からも、今夜の宏造と間瀬との會合に明るい期待は、どうしても持てなかつたので、思つたより早く歸つて來た宏造の樣子を一目見ても、案のぢやう、その不結果がちえ子には直ぐ分つた。

しかし宏造は、ちえ子から催促されるまでは、その話を避けてゐた。めづらしくもない電車の混雑をこぼしたり、大ぎやうに空腹を訴へたりしながら、女中を呼んで、早く膳を持つて來させた。二人ともたつた今家へ歸つてゐた。歸つてからはつけたやうにそれで、彼に食べずに出かけたことであつた。

「どうでしたの？」とちえ子は宿の浴衣と着更へさせながら、こは〴〵訊ねた。

「まあ、おひ〳〵と話すがね。あなたもどうも大變な奴に見込まれたものだ。」宏造はどたりと茶湯臺の前へ坐つた。惱ましい目附をしながら、わざと相手の顏を見ないやうにして、「わたしは、初めからさうぢやないかと思つてゐたが、どうもあの樣子では、よつぽど根づよくあなたに執着を持つてますね。そのくせ慾ばつたことを云つてる。つまり世間で云ふ、色と慾と二道かけてるんだ。」

といふのは、宏造が例の電報の返還を迫つた時の、間瀬の云ひ草である。自分は今あなたをこの電報の名宛人と信ずる證憑がないから、こゝでは渡されない、折りがあつたらお宅へ屆けよう。但し賣るのなら、相手と場所とを擇まない、一萬圓でいつでも手放す。——

「一萬圓ですつて？　まあ！」とちえ子も二の句がつげなかつた。

「わたしも初めは冗談かと思つたら、どうして眞劍なんです。あの電報以外にも、まだ有力な脅喝の材料を用意してゐるので……あなたには云はなかつたか知らないが、あの湯元の宿屋で、我々の行動をすつかり調べて來てゐますよ。幾日と幾日にわたしが泊つたとか、幾日のいつといつに、わたしの食膳が出て、ビールを何本飲んだとか、そんな事まで一々手帳に覺えて來てるので……それには宿屋の帳簿といふ原本がある……宿泊人の名簿なぞは、その日その日に警察の認めは受けてあるし、さういふ確實なものがちやんと現存してゐるのだから、これだけでも刑法の八十何條とかの立派な證據になる、一萬圓は安いものだつて、さう云やがる！」

「忌々しい奴ねえ！」と彼女は齒噛みをして、「それであなた、何と云つておやりになりましたの？」

「わたしは刑法の何條かそんな事は知らない、けれど、我々の愛は我々二人の信仰だ、法がどう裁かうが、誰か何と迫害しようが、我々はただ殉教者の心持で微笑してゐるばかりだ。金で信仰を冒瀆したくはないつて……」

「全くだわ！　わたしもさつき獨りで、その通りな事を考へてゐましたのよ」とちえ子は目を情的に輝かして云つた。

「しかし、あの男が幾ら法律に暗いにしても、これだけは自分で勝手に法律問題に出來る性質のものぢやないし、また假りにさうしたところで、あの男に一文の利益があるわけでもないのだか

ら、まあ默つて樣子を見てゐるんですね。そのうちにはきつとまた、あなたのはうへ何とか云つて來るから……さあ一つ上げませう。あなたも今夜はちと醉つて、お互ひにそんな厭な事なんか忘れてゐようぢやありませんか。」

ちえ子は自分の家へ電話をかけて、留守居の仲働に何とか口實をこしらへておいて、その夜は宏造の宿に泊つた。

妻子も家も

色と慾、間瀬辯護士の肚は、宏造が云つたとほりであつた。彼はちえ子自身の財產を實際以上に想像してゐる。初めはちえ子といふものを自由にすれば、隨つてその財產も自由にする事が出來ようといふ慾から出た色氣であつたが、今では反對に慾よりも色氣であつた。彼はどうでもちえ子を宏造の手から奪はねば措かない、それが出來ないくらゐなら、よく／＼男冥利のない自分ではある、一生もう女に振向くまいぞ、とまで熱してゐるのであつた。

その後ちえ子のはうへも、間瀬からは何とも云つて來なかつた。來なければ來ないで歸つて薄氣味惡かつた。あれきり泣寢入りにしてしまふやうな間瀬でもあるまい。何か云ひに來るなら、今ちやうど老母も甥も避暑に行つて留守だし、自分が一人でゐるうちに來れば、と、ちえ子は待つ氣もなく待つてゐた。電話がかゝるたびに間瀬からぢやないかと、急いで自分で電話口へ出るやうにしてゐた。すると、間瀬からはかゝらなかつたが、それよりももつと心待ちに待つてゐた宏造から、大森のこなひだの家に居るから、是非都合して來てくれと云つて來た。ちえ子は直ぐ承知をすると、宏造はくどく念を押して電話を切つた。

ちえ子は急いで髪結ひに都合させて來させていつもの丸髷に上げると、それで時間を取つた埋合せに、自動車を呼んで大森まで走らせた。髷は氣持よく結へたし、自動車は輕快に走るし、×××××××××××××。ちえ子の目には眩しい炎天の街上が幸福に輝いて見えた。兩側の家や、往來のもの皆が自分のはうへ笑ひかけるやうに思へた。このごろうち胸につかへてゐた間瀬の事なぞすつかり忘れてしまつて、スプリングの快適なクッションにうつとりと身を任せてゐた。涼しい向ひ風がはら／＼と結ひたての髪にあたるのを、時々氣にしては手をやつて見た。どの邊からか蟬の聲を耳にしたと思ふと、自動車はもう見覺えのある栃杜の門を這入つてゐた。

××××××、××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××、×××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××、××。××××××××××××××××××××××、×××××××××××××××××。

「××××、××××××××××××……」

「××××、×××××××××？」

―いや、あなたに見せる物がある。」

さう云つて宏造が取出したのは、眞珠入りの飾ピンであつた

―これ、覺えがありますか」

―あら、ここに在つて？」とちえ子は意外さうに取上げた。「わたし、どこで無くしたのか、どうしても思ひ出せなかつたのよ。有難う。」

「有難うぢやありませんよ。いつかの晩、家の書齋で落したんですよ。それを欽子が拾つて、今日まで默つて持つてゐたのを、今日わたしが家を出る時に初めて出して來て、あなたにと、たゞさう云つて渡したので……」

「まあ、さう……」とちえ子は何がなし悵くなつた。
「でも、それを渡す時に、よく〳〵腹にすゑかねたんだらうが、あなたはちえ子さんに對して、眞珠以上の自信があるかつて。それから、あなたもちえ子さんにおつことされないやうに氣をお付けなさい、わたしはもう拾ひませんよ……」
「まあ、そんなことを？」
「隨分思ひ上つた云ひ草ですね。だが、なぜ自分を捨てるつて怨まれるよりは、わたしも家を出るのに思ひ切りがよかつた。」
「そんな事になつたんですか！」とちえ子は本當に顏色が變つてしまつた。
さう聞いて見ると、部屋のうちには鞄だの、スーツケースだの、それから大きな柳行李だのが持込んである。座敷もこの前より狹く、そこらに出てゐる調度もずつと品が落ちて粗末だつた。それは下宿だからである。
宏造もさば〳〵したやうに口では云つてゐるが、心に決して平靜ではなかつた。
「間瀬のやつ、あれから何とか、あなたのはうへ云つて行きましたか？」と彼は忌々しさうに聞いた。
「いゝえ、何とも。わたしも不思議に思つてるのよ。」
「あれきりわたしのはうへも沙汰なしで……ところがちえ子さん、あいつはね、欽子に我々の事をぶちまけたものなんですよ。」
「まあ！」
「昨日の午、欽子の雜誌社へ電話がかゝつて來て、京橋の間瀬の事務所とかで會つたんださうです。もつとも……ピンの事だつてさうだが、前から薄々疑つてゐたところへ、間瀬から例の電報だの、湯元の覺書など見せつけられたものだから、それで欽子もすつかり決心してしまつたのです。」
「ですが……欽子さんどんなお心持でせうねえ。」とちえ子は身を顫はせた。
「欽子よりも、わたしはあなたの心持が知りたい……といふのは、間瀬のやつ、たしかにあなたに野心を持つてゐるから。だから、邪魔になるわたしを、どうかしてあなたから引放さうと企んでゐるんだ。現にかういふ事を欽子に云つてゐる……」
自分は辻村の顧問辯護士といふ事になつてゐるが、これまでの事件から見ても、要するにそれは商事上の法律顧問に留まつてゐるのだ。しかし今度のやうな問題が起つて見ると、自分は友人として默視してゐられない。一應辻村の主人の旅行先きへ報告すべき義務がある。その返事によつて、自分がもし主人の代理を委任されゝば、その時は法律家の立場として、厭でも法の解決へ持つて行かなければならない。そこで時にあなたに相談といふのは、どうかさうしないで濟むやうに、つまりあなたのご主人が、これ以上に深入りをしないやうに、あなたから強制的に干渉して欲しい。それにはご主人に一年なり、二年なり、日本の地から離れてもらひたい。それを條件に、自分も辻村の主人へ報告する事を一先づ差ひかへる……
……と、から云つて欽子に焚きつけたものらしいんです。しかし、間瀬の考へてゐるよりも、少し欽子は自尊心が高い。もと〳〵精神的の問題ですからね、一たん愛が外へ移つたものを、いくら干渉したからつて、もとどほりに戻るものではないし、また干渉されたからつて、
×××××××××××××、×××××××
×××××××××××××。××××××
×××××××、×××××××××××××
×××××××××。××××××××××
×××！××××××××××。「×××
×、×××××××？×××××××××

××××。」
「×××××、××××××××××。」とちえ子は目を伏せたまゝ云つた。
「本當のことを云つて下さい。お互ひに一つ間違ふと……」と云ひかけて、宏造は自分で厭な顏をして、「とにかく間瀬のやうなやつが現はれて見ると、こつちもそれに應ずるだけの覺悟が必要だから……それにはあなたの最後の決心を聞きたい。あなたの決心次第で、わたしも覺悟をする」と迫るやうに云つた。
口ばかりではなく、男のその時のけんまくは、凄みを帶んでゐるやうにちえ子には見えた。
「最後の決心と云つて……わたしこそあなた次第だわ。」とちえ子はおづ／＼云つた。「あなたは？」
「わたしはさつきから云つてゐるとほりだ。妻も捨て、子も捨て、家も捨てゝ來てゐる……」
「ぢや、本當にもう捨てておしまひなすつたんですか？
「本當も噓もないぢやありませんか。」
「もうお家へは、これきりお歸りにならない？」
「歸れるものですか！」
「まあ！」と今さらしくちえ子は相手の顏を眺めて、「それで、これからどうなさるおつもり？」
「だから、あなたの決心次第だと云つてるんだ。」と宏造はじり／＼して、「ちえ子さん、あなたも確かりして下さい。」
「わたし、何だかぼつとしてしまつて……いゝわ、あなたがさうなら、わたしだつてその通りにするわ。」
「本當ですか？」と今度は男のはうから念を押さずにはゐられなかつた。
「えゝ、本當だわ。わたし、あなたに任せてよ。」
とちえ子は弱々しく云つた。
宏造は如何にも頼りない顏をしてゐたが、それきり默つてしまつて、思ひ出したやうに卷煙草を吹かした。ちえ子は丸髷の頭を重さうに俛れて、ぼんやり膝の上を見詰めてゐる。その無表情な暗い顏が、さうしてゐるうちにだんだん引き締つて行つて、やがてぽつと横顏が紅潮して來た。
彼女はやつと混亂した頭を整理する事が出來た。そして何か云はうとして靜かに目をあげた。と、ちやうどそこへ宿の女中が來客の名刺をちえ子へ取次いで來た。ちえ子はこの前こゝで一泊してゐるので、苗字も名も帳場では知つてゐた　名刺の主は間瀬辯護士であつた。
間瀬は今日辻村の家へ訪ねて行つて、牛込からまたこちらへ廻つたのであつた。ちえ子がこちらへ來てゐる事は、彼女の乘つて來た自動車屋で聞き出したのである。さうまでして突き留めて來た以上、逃げ隠れも出來ないので、ちえ子も別の座敷でしぶ／＼會つた。
「奥さん、あなたは僕の顏をつぶしたね。」と間瀬は顏を見るなり云つた。「僕も冗いことは云はない。これから僕と一しよに、牛込のこなひだの家へもう一度來てくれませんか？
「行つてどうしますの？」とちえ子は腹立たしさうに云つた。
「分つてるぢやないか。」
わたしは分りません。」
「×××××××××××××××××××××、そのくらゐの事が分らない？」
「分りません。」
「まあそんなやぼは云はずに、今日は一つ僕につきあひなさい。あなたによく云つて聞かせる事がある。」
「こゝで伺ひませう。」
「こゝぢやこつちがご免だ。だが、これだけ云つて上げよう。あなたたちはもう尻尾に火がついてるんだ。わるく見縊つて、高を括つてると

取返しのつかん事になりますぜ。」

「なりますぜもないわ、あなたがするんでせう。」とちえ子はくやしさうな目をして睨んだ。

「させたくなかつたら、これから一しよにつきあふさ。」

「まつぴら！」

さう彈き返すやうに云つた彼女の、その憎惡に滿ちた顏を露骨に向けられて、馬鹿でない間瀬は、こりや駄目だわいと決定的に覺つた。しかし、それだけで思ひ切るほど人が好くはなかつた。

「まつぴらだやどうも取付く端がねえ。まあよろしい、やがて醫者の云ひ草めくが、もちつと熱の冷めるやうに藥を利かせるかな。」

何だか意味ありげな捨ぜりふを殘しておいてぷん／＼しながら間瀬は歸つて行つた。

ちえ子はもとの座敷へ歸つて、宏造にそのとほり話すと、宏造も口を極めて間瀬のその惡德と卑劣とを罵つた。しかし惡德といふ事を云ひ立てたら、自分らとても餘り立派な口の利けない立場にあるので。それよりも内心もつとも不快に感じたのは、ちえ子に對する間瀬の執念深い野心であつた。それは罪のないちえ子にまでも、事の責任があるかのやうに、その場のない不快の感情は目のまへの彼女へしぜんあたつて行つた。二人の戀にも、そろ／＼嫉妬が頭をもちやげ出したのである。

××××××××××××××××××

×、×××××××××××××××××××

×××××××、次ぎ／＼と面白くない事ばかりで、すつかり氣を腐らせて歸らねばならないちえ子であつた。しかもその歸りぎはに、さうい不快な目を宏造から見せられさへして、氣持わるく別れたのであるから、歸る道々も氣の晴れやうはなかつた。

歸りは大森の停車場へ出た。この際人目を警戒しなければならないといふので、宏造はわざと送つて來なかつた。ちえ子は暗い寂しい心を抱いて、一人でぶら／＼と停車場のはうへ歩いた。立秋前後が日本の夏の最高温度だといふが、それでも日中なかの暑さとはどこか違つて、じり／＼と炒りつけるやうな日射しの色までも、思ひなしか寂しく黄いろつぽかつた。西日のかつとあたつた氷屋の店には、新粉が一山づつに盛られて出てゐた。

踏幅の狹いごみ／＼した町から、停車場の吹き曝しのプラットホームへ出ると、甦るやうに涼しかつた。ちえ子は上屋の日蔭へ這入つて、見るともなくまへの線路を見てゐた。鐵のレールは長く／＼目の屆く限り續いて、車輪に摩擦された痕がぎら／＼と日に光つた。ちえ子はふと鵠沼の軌道で見た轢死女の事を思ひ出した。不思議にそれは、恐ろしいといふ感情よりも、何だか自分も足もとの線路へ飛び込みたいやうな誘惑を感じた。それほど彼女の頭は亂れ、且つ漠然たる哀愁に捉はれてゐた。

母も夫も

老母がこの二三日持病の偏頭痛を訴へるから、いつもの鎭痛劑を送つてくれと云つてよこしたついでに、老母の希望で今月一ぱいは鵠沼にゐるやうな薫の手紙であつた。その手紙が一昨日着いて、ちえ子から返事を出したばかりの今日、午前の十時ごろに突然薫が一人で歸つて來たのであつた。

「あら、どうしたの？」とちえ子は驚いて聞いた。「藥なら今朝小包で送つたのよ。」

「いゝえ、小母さま、大變たわよ。」

「え、おつかさんが？」

「さうぢやないわ。小母さま、昨日小石川の看護士が來てよ。」と云つて、今日自分から早くなつた

「鵠沼へ？」

「えゝ、お婆さまのとこへ。だもんだから、わたし今朝起きぬけに、逗子のお別莊へお友だちかいらしつてるからつて、さう云つて大急ぎで知らせに來たのよ。小母さま　おなたは小石川の辯護士の家へ預けられる事になつたのよ。昨夜お婆さまと辯護士と相談の結果。」

ちえ子はさつと顏色を變へた。

「小父さまが歸つていらつしやるまでの間、とにかく、辯護士が小母さまを監視するんですつて。」

「そりや間瀨から云ひ出したんでせうね。」

「お婆さまも初めは考へてゐたけれど、結局さう願ひませうつて事になつたのよ。自分の娘だから甘くすると思はれては、義理のある小父さまに濟まないからつて。」

ちえ子はぢつと考へ込んでしまつた。

「それで、間瀨は今日まだ鵠沼なんですね。おつかさん一しよに歸るんでせうか？」

「さうぢやないでせう。小父さまもうそのうちにお歸りになるはずだから、爺やに留守をさせておいて、それまでは鵠沼にいらつしやるやうなお口振りよ。」

「ぢや、もうわたしに逢はないつもりね。」と、ちえ子は情なささうに云つて、また考へ込んだ。

薰は海水浴で燒けた顏へ、思切つて厚化粧をして、額際や鼻の頭へつぶ／＼と眞珠のやうな汗を滲ませたか、白粉の剝げないやうにハンカチーフで抑へ／＼しながら、ちら／＼と偸むやうにちえ子を見てゐた。どうやら血色も惡く、皮膚も荒れて、日光から歸つた時とは變つた。それはちやうど月々に來る生理的障碍の爲めでもあつた。彼女が溜息をつくと、薰も一しよになつて溜息をついて、やがて泣き出しさうな顏をして云つた。

「小母さま、わたし、お察しするわ。」

ちえ子は涙に曇つた目をそつと上げると、眩しさうに瞬きして、

「あなた、何も彼も聞いて？」

「あんな辯護士の云ふことなんか隨分癪つぱちに違ひないけれど……でも、わたし小母さまに同情したわ。小母さまの心持、わたしにもよく分るやうな氣がするわ。小父さまはそりや立派な紳士だけれど、だつて愛が足りないんですもの。」と薰は眞赤になつて云つた。「……だから、わたしも考へたわ。楠本さんのはうの返事、少し待つてもらふやうに辯護士に云つておいたわ。」

「おつかさん驚いたでせう。」

「さうでもなかつたわ。若い人たちの了簡は、年寄りには分らないから、もう何にも云はないつて。」

「さう。」とちえ子は悲しさうに微笑んだが、ふと思ひ出して、「俊次さんもどうしたか、近ごろさつぱり顏を見せないわね。あなたのはうへ便りでもあつて？」

「いゝえ、わたしのはうへもさつぱり！」と薰は心もち寂しい顏をして、「もう高等文官の試驗が始まるころですから、一生懸命なんでせう。」

と云つた。

話が切れると、ちえ子はまた／＼考へ込んでしまつた。

「もう何時かしら？　わたし、直ぐまた鵠沼へ引返すのよ。謊をついて出て來たから

まあお午でもあがつて……

「ね、小母さまはそれで、どうなさるの？」

「どうつて、なあに？」

「今日にでも辯護士が連れに來たら？」

「……わたし、考へがあるわ。」

「考へつて？」

「誰があんな奴に連れられてなんか……大丈

夫だから、わたしの事は安心してゐて頂戴。」とちえ子は蒼い顏を神經的に覺めて云つた。

さうまできつぱり云ひ切つたものを、その上押しても問ひ返せないので、薫もそれきりその話は控へてゐた。自分がこんなに氣を揉んで知らせに來たのに、相手が思つたほど騷がないのが寧ろ物足りなくすら感じた。

午飯を濟ますと、薫はまた鵠沼へ引返して行つた。直き後からちえ子も、一二枚の着替へを小さなスーツケースに入れて、ふらりと家を出てしまつた。

わたしも二三日鵠沼へ行つて遊んで來るからと、さも無造作に思ひ付いたやうに云つて、仲働の兼に留守を賴んで出かけたちえ子は、何と思つたか、門からまた引返して、都合で外へ廻るかも知れないが、眞直に鵠沼へ行かなくても心配しないやうに云ひおいて行つた。しかし、わざ／＼廻り途をするやうな彼女にどこがあらう。行く先きは無論、宏造の下宿してゐる大森であつた。

宏造はあいにく外出してゐたが、女中はちえ子の顏を見ると、宏造からさう云ひおいてでもあつたやうに、直ぐ彼の書齋へ通して待たせた。いつも、宿商賣とは思へないほど靜かな家で、相變らずひつそりとしてゐる。日除けの藤棚の日射しが緣先きへ這ひ上るやうになつて、そこらで啼いてゐる蟬も、このまへ來た時とはもう違つた啼聲であつた。ずん／＼と風物の移り變つて行くのが今さらのやうに驚かれる。人から、世間から、何だか追つかけられるやうな不安を感じてゐるちえ子は、さうした自然にまでもあわたゞしい焦躁を感じさせられて、たゞもう、じつとしてはゐられないやうな氣がした。

間もなく宏造は歸つて來た。

「おいでなさい。お待たせして濟みませんでしたね。今日あたり何だかあなたが見えるやうな氣がしたんですがね、例の雜誌社の主幹が今日は私宅にゐる日で、今日會つて置かないと都合が惡いと思つたから……」宏造はチヨツキの胸を開けて風を入れながら、「ちえ子さん、わたしはもう山奥へでも這入りたくなつた。」と苦笑ひをした。

「さうお、わたしもよ。」

「本當に面倒な世の中だ。欽子がまさか自分で喋つたわけでもあるまいが、主幹も薄々我々の事を知つてるらしいんでね。無論その爲めだと思ふんだが、あんなに心配してゐてくれた出版のはうの事も、急に何だか氣乘りのしない口振りで……まだはつきりとは斷らないが、わたしにはまあ駄目だと諦めた。これで春以來の計畫も徒勞さ。」

「まあ！　あ、まで捗取つたものを、殘念ぢやありませんか。」

「殘念だが仕方がない。それよりも何新聞だか知らないが、社會部の記者が、しきりとわたしの居どころを突留めにかかつて、雜誌社へも度々やつて來たさうです。原稿も捨て、家も捨てたが、今度はまた東京を捨てなければならなくなつた。ちえ子さん、あなたにもお別れの時が來たやうです。」

「あなた、わたしも家を捨てて來たのよ！」

「いや、あなたはさうしなくても、わたしさへここに身を隱せば……あなたは家附きの娘の事でもあるから、ご主人だつてさう／＼追窮もなさらないでせう。ご主人さへ許せば、間瀬だつてどうする事も出來ないんだから……」

「××××××××、××××、××××××、××××。あなた、水くさいわ。東京を捨てていらつしやるなら、なぜちえにも一しよにと仰しやつて下さらないの！」と云ふと、ちえ子は自分でも思ひがけない涙が、はら／＼とこぼれて來た。

「だが、この前いらしつた時、わたしには何だかあなたの様子が……」と云ひかけたが、宏造もその涙に心を打たれたので、「ぢや、今こそ云ひますが……もつともわたしのこの計畫も今日殆ど破れてしまつたけれど……それにこの考へも、こなひだのあなたの様子で諦めてゐたんだが、實は家を出る時のわたしの覺悟は、何とかしてあなたと二人で外國へ行くつもりでしたよ。」と初めて明かした。

流浪の旅

宏造とちえ子は、東海道線を當もなく西へ下つた。關西で一先づ落着くか、そこで面白くなければ、九州まで行くか、それとも下の關から直ぐ朝鮮へ渡つて見るつもりである。

汽車が箱根を越すと、二人も完全に東京から逃れ出たやうな氣がして、何となくほつとした。沼津、靜岡、濱松を通過したのがちやうど電氣のつくころで、夕暮の濱名湖に浮んだ辨天島を車窓に迎へ望んだ時、二人は松の葉越しに見える小島の中の明るい火影に耐らない懷かしさを覺えた。そしていゝ加減乘り疲れた汽車をそこの驛で降りた。

避暑の客も大かた引擧げてしまつた後で、旅館は靜かだつた。翌朝おそく目を覺ますと、宏造は女中に頼んで、東京の新聞を幾種も持つて來させた。そして社會欄にざつと目を通した。するうちに直き午になつた。二人はそのまゝぐづぐづと日を暮して、もう一晩泊る事にした。

昨日から持ち越した夕立氣も、午から一しきりばらばらとしただけで、夕方からからりとあがつた。しかも今宵は舊暦の十三夜、月の出は午後五時であつた。湖畔の一夜泊りに思ひよらぬ拾ひものの明月を、たゞ宿屋の二階から覗いて濟ますのも勿體ないと、さういふ宏造にもそれほどの風流氣があるわけでもなく、またちえ子とても、それほどのん氣な場合ではなかつたけれど、宿にゐても所在がないので、二人は船頭つきの小舟で湖水へ出て見た。舟は月の出汐を迎へて海のはらへ漕がせた。

今切の洲岬へ舟を着けさせた時には、月も可なり高く昇つた。二人は晝のやうに明るい砂山を横ぎつて、浪の音の寄せる表濱のはらへ行つて見た。直きに浪打際へ出られた。そこには皎々とした月の光と、太平洋から打寄せる銀灰色の浪と、そして見渡す限り白々と月光に煙る薄濕りの砂地と、外には自分たちの寂しい足跡と、影法師と、そして生きものといつては彼らきりの天地に、二人はうそ寒い肩を並べて煢然と立つた。浪の音は永遠の響きを湛んで、二人の魂を悠久の世界へと誘つて行つた。彼らは云合したやうに死を思つた。

「かうしてゐると、何だかもう人生がはかなくなるばかりですね。」と宏造が寂しさうに云つた。

「わたしはまた死んだ子供のことが思ひ出されて……死んで行つた先きが考へられてならないのよ。」とちえ子の聲は涙に潤んだ。「それにつけても、お宅のお嬢つちやん、どんなにかおとうさまを戀しがつていらつしやるんでせうねえ。」

「人間生きるにも死ぬにも、子供といふものは絆ですね。」

「でもまだ、欽子さんがしつかりしていらつしやるから……」

「さうです。その點は子供の爲めにも安心です。欽子といひ、お宅のご主人といひ……わたしは直接には知らないけれど、間瀨の話を聞いても立派な方らしいが……それだのに、あなたもわたしもかういふ事になるといふものは……これも運命のいたづらかなあ！」

一運命も運命ですが、人間の心ぐらゐ、自分でも分らないものはありませんのねえ。」

「分らないと云へば、わたしたちもこの先きどうなつて行くのだか、お互ひにどうして行つたらいゝのか……」

「本當に、明日の日も分らない身の上のやうな氣がして、心細いわ……」

二人の體はいつの間にか夜露で絞るやうになつてゐた。宿の浴衣をとほして、じめ／＼と肌まで氣味わるく濕つて來たのに氣がついて、やう／＼もとの裏濱へ引返した。待ちくたぶれた船頭は、舟の中で物をかぶつて、胴の間に丸くなつて轉寝をしてゐた。

宿へ歸つてその時の事を考へて見ると、不思議な氣持がした。あの時どうかするとふいと出したなら、二人は無造作に死んだかも知れないやうな氣がされた。また繰返しさうな、神秘的な心理に引入れられる危險を恐れて、それきりどちらからもその時の事に云ひ出さないやうにしてゐた。そして翌朝早くそこを立つた。

それから二人は京都で三日ばかり過した。宏造はこれまで幾度も來てゐるし、たえ子も前に二度ばかり遊びに來て、大ていの所は知つてゐるので、今さら見物に歩くでもなかつた。宏造はこゝでも毎朝、東京の新聞を幾種も買はせては見た。宿は木屋町も下のはうで、鴨川へ架出しの床もすつかりもう取込まれて、朝晩は初秋らしい風が身に沁むやうに感ぜられた。夜は夜で川原に蟲が啼きしきつた。二人は追つたてられるやうなあわたゞしい氣持で、四日めの午後、京阪電車で大阪へ行つた。

大阪では、こゝの水平社の本部の直き近くへ宿を取つた。水平社の幹部の一人に、宏造と思想上の久しい知友があるので、しかもその人は義俠に富んだ人格者と聞いてゐるので、都合で身の振り方を相談して見ようとも思つたのである。本部へ訪ねて見ると、あいにく北陸のはうへ出張してゐて留守であつた。しかし、直き歸るやうに聞いたので、二日ばかりおいてまた訪ねて見たが、まだ歸つてゐなかつた。

その歸りに、宏造が本部の門を出た時、向側のショウウヰンドウを覗いてゐた白リンネルの背廣の男が、くるりと振返つてこちらを見て、そして何か用ありさうにつか／＼と二三歩宏造の方へ寄つて來たが、急にまた立留つて、そのまゝ反對のはうへのろ／＼と歩いて行つた。

宏造は人違ひでもしたのだらうと思つて、深くは氣にもかけずに宿へ歸つた。そしてそんな男の事はすつかり忘れてしまつて、何かの用事でおもての階子段を降りて行くと、帳場のそばの框際で、宿の番頭と何かぼそ／＼話し込んでゐるのが、見覺えある背廣の、同じその男であつた。

宏造はそれでもまだ深くは氣に留めようともしなかつたが、向うで彼の顔を見ると、などてた樣子で、ひよいと框から立つと、殆ど反射的のやうにへこりとお時儀をした。そして何か一こと二こと番頭に囁いておいて、そゝくさと外へ出て行つた。宏造は初めてをかしな奴だなと思つた。

「何だね、今の男は。」と彼は番頭に聞いて見た。

「あんたはんにお時儀をしてゐやはりましたが……」

「いや、僕はまるきり知らない男だ。[illegible]の人かね？」

「めつさうな。」と番頭は目を圓くして、「へ、へ、ご冗談を。」

宏造はしかし氣になつた。さう思つて見るせゐか、宿の者までがそれ以來、自分たち二人をそれとなく注意してゐるやうに思へて來た。わざとたえ子には話さずに、宏造は[illegible]て用心

地わるくいら〳〵してゐた。こゝも長く居るところではないと思つた。水平社の男が歸つて來たら、話のよしあしに拘らず、どこへかまた移らなければなるまいと思つてゐた。

ちえ子と俊次

宏造が警察のものかと疑つたその男は、實は欽子夫人の勤めてゐる例の雜誌社の大阪支社の社員で、先きでは餘所ながら宏造の顏も見知つてゐるのであつた。今度宏造とちえ子が突然姿を隱したについては、清藤でも辻村でも可なり恐慌させられた。何よりも二人が死にはしまいかといふ事が恐れられた。しかし、おもてだてた日には騷ぎが大きくなるので、心當りといふ心當りへ祕密に搜索の手を廻してゐたが、欽子には特別に引立てられてゐた大阪支社のその男へも、彼女から特別に依賴があつたのである。

さうとは知るはずもない宏造は、あれ以來警察と宿屋とで自分たちを監視でもしてゐるやうな氣がして、不愉快でならなかつた。水平社の男が旅行から歸つて來たら、だい一に二人が落着く隱れ家を世話してもらはうと思つた。さう思つてゐるところへ、ひよつこり田澤俊次が東京から訪ねて來たのであつた。

宏造もちえ子も、こゝで俊次に會ふのは遉に面目なかつたが、まだしも外の者に見付かつたよりはよかつた。それにしても自分たちの居どころがどうして知れたのか、不思議に思つて聞いて見ると、例の大阪支社の男がこゝの宿まで突留めて、欽子夫人へ電報で知らせた事が初めて分つた。それは直ぐ欽子から辻村へも傳へられ、辻村からは俊次が差向けられて、欽子と二人が今朝大阪へ急行して來たのであつた。そして欽子は支社に待たせておいて、俊次が一人先づこちらへ出向いて見たのである。

「で、お差支へがなかつたら、僕から欽子さんに電話をかけるはずになつてるんですが、如何でせう？」と俊次は宏造に聞いた。

「欽子さんいらつしやるの？　わたし……困るわねえ。」とちえ子がそばから云つた。

「姉さんは僕とそこいらまで出ませう。こちらの話の濟むまで、近所のカフェーか何かで待つて上げたらいゝでせう。」

「わたしにしても今さら欽子に會ふ必要はないんだが……」と宏造も困惑さうに見えたが、「とにかく、田澤君にお任せしよう。」と云ひ切つた。

そこで、俊次は宿の番頭を呼んで、直ぐ欽子に來るやうに云つてやつて、自分はちえ子を誘つて外へ出た。今朝急行列車で大阪へ着いたまま、昨夜からまだ滿足な食事も取つてゐない俊次は、大阪名物の鋤燒といふ看板を見ると、急にそこへ這入る氣になつた。ちえ子がもう少しどうかいふ家へと二の足を踏んだくらゐで、二階へ通されて見ると、座敷も入れ込みだつたが、ちやうど半端な時刻で、合客は一組もなかつた。それにちえ子たちの泊つてゐる旅館とは半町もないので、二階から覗いてゐると、向うの出這入りが[illegible]つてゐて分つた。

「東京とは何だかすつかり勝手が違つて……遉に大阪まで來ると、旅らしい氣がしますね」と俊次はそこらを見廻しながら、「姉さんは、よく東京が戀しくなりませんね。」

「戀しいわ。」

歸りたくはありませんかと、俊次は追つかけさう云はうとしたか、直ぐ氣が付いてやめた。今さら東京へ歸れる姉ではなかつた。歸りたくても歸られる身ではないのである。ちえ子も東京と聞くと、文字どほり萬感胸に迫つて息だはしくすらあつた。それでも泣くだけは我慢して、ぢつと俛れてゐた。

見ると、暫く剃刀もあてないらしい襟頸に後れ毛がもつれて、手づくねの束髪の流行おくれの型が、年よりもすつと彼女を深けさせた。途中で間に合せに調へたらしいセルの單衣に、縞銘仙の袷羽織を重ねたぎごちない姿が、東京で見慣れた姉とは氣の毒なほど地味に、しかもやつ〳〵しくさへ俊次には見えた。身なりのせゐもあり、それに旅では思ふやうに身だしなみも届かないからでもあるが、しかし旅窶れもたしかにあつた。

「俊次さん、あなた、まさか、わたしを東京へ連れて歸るんぢやないでせうね？」とちえ子は溜息をついて云つた。「わたし、それを聞かないうちは心配だわ。」

「心配には及びません、大丈夫です。僕もそんな使ひなら、ご免蒙つて來やしません。姉さんはもう自由なんですよ、その點はご安心なさい。」

「さう……」

ちえ子は安心するよりも、さう聞くと、妙に何だか物足りないやうな拍子拔けを感じた。

「今度は何も彼も欽子さんの働きです。」と俊次は静かに云つた。「僕なんか面目ありません。くだらない試驗なんかに追はれてゐたものだから、何にも知らずにゐて、欽子さんに呼ばれて初めて知つたやうなわけで……實はね、姉さんたちの行くへが分らなくなると、小石川のあの辯護士の間瀬が、欽子さんのはうへいろ〳〵やかましい事を持込んだんですつて。つまり兄の代理人といふ名義で、刑事沙汰にも及ぼしさうな險まくなんで……もつとも新刑法ではさう簡單には行かないのだが、そこは素人だから欽子さんも心配してしまつて、とにかくこれは肝心の兄に歸つてもらはない事にはといふので、僕を呼びによこしたのもその時なんです。電信やら無線電信やらで、やつと兄の居どころを突留めて、それから沿海州を乘船した通知と一しよに、欽子さんは自分で北海道まで會ひに行つたんですよ。そこがあの人の利口なところですね。兄を間瀬に會はせないうちに、北海道から一しよに上野驛まで來る間に、汽車の中ですつかり話をきめてしまつたんです。どうもあの人のてきぱきした遣り前には、だい一兄きからして敬服してしまつて……間瀬なんか惡黨がつたつて、見事に鼻をあかされつちやつたんですからね。」

「さうお。」とちえ子も初めて寂しいけれども笑顔を見せた。「あなたお腹が空いてるんでせう、さあ……話は食べながら出來るわ。」

「姉さんは？」

「わたしはまた朝ご飯を濟ましたばかりだから……お給仕しましよ。」

「有難う。姉さんのお給仕で食べるのも、もう……」

「どう？」

「いや、久し振りですね。だが姉さん、僕の口からこんなことを云ふのは變だけれど、今度はしかし兄きも感心ですよ。無論そりや欽子さんの出やうが立派だつたから、それに動かされたんでもありませうが……」

「俊次さん、……後生だからもう……」とちえ子はつらさうに目をつむつて見せたが、また思ひかへして、「いいえ、どうぞ話して頂戴、聞くわ。」

「さうですとも、是非聞いておいてもらはなけりや……姉さん、欽子さんは今度の事で、社から非常に無理な借金をしたのですよ。だい一金高が金高だから、社でも一たんは拒絶したんださうだが、主幹があの人の立場に同情して、特別の便宜を圖つてくれたんださうです。欽子さんはそれを持つて兄に會ひに行つたもので、そして云ふには……姉さん、氣を惡くしてはいけ

ませんよ……あのまゝおけば二人は死ぬより外にない、あなたもどうか人間二人の命を助けると思つて、日本の制裁の屆かない自由な國外へ落してやつてくれ。それから、わたしは女の微力で、心で思ふ半分も屆かないからと、持つて行つた金をそつくり兄の前へ出したのださうです。」

ちえ子はいつか涙ぐんだ目で俊次の顔を見詰めたまゝ、思はずそこで固唾を呑んだ。

「すると兄きは、恐れ入りました、あなたほどの方を裏切つた清藤さんの心が分らないと、さう云つたさうです。それから自分は清藤さんその人は知らない、たゞ雜誌などで拜見する思想には、實は共鳴出來ないはうであるが、しかし新時代の一面を代表する思想家として敬意は持つてゐる。それにこれからまだ／＼成長の可能性を持つたあゝいふ新人を、今不自然に失ふといふことは、日本の新しい思想界の爲めにも遺憾だから、さういふ意味で自分も私の恩怨は忘れませう。さう云つて兄は、直ぐ小切手を書いて、欽子さんの出した金と一しよにしてあの人に渡したんださうです。その時姉さんの事も……」

「わたしの事も？」

「つまり辻村の家を出てしまへば、外にもう行きどころのない體だ。自分は先代から委託された辻村の家を出るわけには行かないから、家附きの者が出たら、せめて出て行つた先きで困らないだけの心配はするつもりだからと、欽子さんに兄は明言したさうです。僕もそれを聞いて、何だか今まで兄きといふものを誤解してゐたやうで、濟まないやうな氣がしました、」

ちえ子は頷いた。そして袖口でそつと目を拭つた。

「欽子さんも感心してゐたが、とにかく今度の兄の態度は紳士的だと思ひます。姉さんもその點は認めてやつて下さい。あゝいふ無愛想な人間だから、姉さんもこれまで隨分感情を害された事でせう。それは僕も察してゐます。だから、今度の事だつて僕は何にも云ひません。けれど、兄だつて決して清藤さんと比べて卑しい人間ではないといふことだけは、僕も弟として、是非姉さんに認めておいてもらひたいのですよ。」

「そりやもう、わたしだつて……些にもそんな卑しいなんて思つた事はないわ。」とちえ子は正直に云つた。「こんなことを云ふと、何か云ひわけがましく取れるか知らないけれど……ねえ俊次さん、[illegible]ひといふものに、[illegible]には ず[illegible]ない間違ひになるものよ。そんな……あの人を卑しいの、比べて見てどうのと、そんな深い考へなんかわたしにあつたわけぢやあない。」

「……でせうか。僕は姉さんを理解してるつもりなんだが。」と俊次はまじ／＼見やつて、姉さんもつまり、家庭の人形ぢや堪へられなくなつたんでせう。自由とか、獨立とかいふやうな婦人解放の憧憬か、姉さんには行きなり今度のやうなさういふ實現を取らせた、それには兄にも一半の責任はある。いつか清藤さんから翻譯を頼まれた或る婦人問題の著書の中にも、一部の中年の男子をさしてかういふことを云つてゐる、彼らは自分が誤解しつゝある妻なり情人なりが、自分から逃げ去つてしまはないまでは、自分が幸福にしてやつてをると己惚れてゐるところの相手の女性が、その實肉感の上だけでも敢て滿足してをらないといふ事を氣付かない……ちと露骨ですが、つまり女性は心靈と肉感との調和にまで精練されてゐるにも拘らず、さういふ男性との關係においては、肉感から何ものをも心靈に與へられないと云ふので。」

「さうかも知れないわね。」とちえ子は氣もち報

くなつて、「それに男はどうしても事務的で、殊に仕事を生命としてゐる人はなほさらだけれど……ところが、女はまた善かれ悪しかれ藝術的ですからね、どうしても男のやうには生活を事務化してしまへないの、幾つになつても技巧を喜ぶの。ちやうど女は樂器のやうなものだわ。今俊次さんが云つたやうな、何ものかを心靈に與へるとか與へないとかいふのは、そりや音樂なら天才か名人の事でしよ。それほどでなくつても、せめて樂器が持つてゐるだけの美しい音色を出させて見るくらゐな技巧は、わたし、男に望むのよ。」と昂奮して云つた

「なるほど、兄きにはその技巧は無からうてな。」と俊次は心に思ふと、ひとりでに頬笑まれた。

さつき欽子が乘つて來たらしい自動車が、向うの旅館の門口へ横着けされたのを、俊次は食事をしながらも見遁さなかつた。彼はわざとゆつくり〳〵食事を濟ましてから、夫人ももう引き擧げたころだらうと思つて、重い硝子戸を開けて旅館のはうを覗いて見た。すると旅館の向ひのちよつとした空地に、さつきの自動車がそのまゝ待つてゐた。

「こりやまだうつかり歸れないぞ。」と俊次はさう思ひながら、時間つぶしに、飲みたくもない飲みものなぞ取つた。

「あゝあ、僕も外國へでも行つちまひたいな。こんな狹つくるしい日本の内地で就職難に苦しめられてるよりか、アメリカへでも渡つて活動の仕出しにでもなつたはうが、よつぽど氣が利いてる。」俊次は藪から棒に、そんな事を云つた。

「ぢや、わたしと一しよに行きましよ。」とちえ子は笑ひながら、「わたしも少し若けりや、向うでワンサガールにでも傭はれるんだけれど……」

「いや、冗談ではなしに、姉さんは、ぢや本當に外國へ行く決心ですか?」

「だつて、本當にも、誰にも、それより仕方がないぢやないの。」とちえ子は案外平氣らしく云つた。

「さうですか、それなら結構です。僕はまた女らしい未練から、一人日本に殘つたが爲めに、慘めな姉さんを見なけりやならないかと心配したが、それを聞いて安心しました。清藤さんといふ指導者も附いてゐるし、いゝ機會ですから、この際姉さんも歐米の文明に接觸する以上、そこに生れた近代精神の洗禮を受けて、本當の新しい女に更生して歸つて來て下さい。」と俊次の目は若々しく輝いた。

「わたしなんか、そんな大きな期待をされちや痛み入るわ。たゞね、わたし向うへ行つたら、何よりも先づ、どういふ女が男に頼らずに、完全に獨立してやつてゐるか、それから研究して見たいと思ふわ。それに自分でも獨りで活きて行かれるだけの事を、何でもいゝから覺えて來たいと思ふの。」とちえ子も目を輝かして云つた。

宏造と欽子

宏造は徹頭徹尾欽子夫人の前に頭があがらなかつた。もと〳〵彼は欽子に何一つ不足があつてかうなつたわけではないのであるが、しかし今日の結果から見れば、正しくちえ子の爲めに彼女を捨てたのだ。その捨てた妻に、今さらちえ子と二人が助けられるといふ事は、あかの他人に助けられるよりも恥かしかつた。

それに欽子夫人は、初めから終ひまで冷たい生眞面目な態度で、ひどく事務的に話を運んだ。それは他人行儀に過ぎるかと云つても、この際禁物な夫婦らしい素振りや口振りを、決して出さないやうに自分で努めてゐたのである。そ

れも宏造には煙たかつた。けれど、欽子の今度の行屆いた圖らひには、彼も心から感謝せずにはゐられなかつた。殊に彼女自身で工面したのと、彼女が健作から委託されたのとを合せて、萬と纏まつた洋行費をそこへ出された時には、思はず頭が下つた。

「お前の前で、今さら意地や痩我慢を張つたところで仕方がない。せつかくの志だから、これは有難く頂戴するが、しかし、かうなると欽子……呼び捨てにしては惡いけれど……僕はね欽子、お前にこの前云つたことが今ぢや申譯がないんだよ。僕が家を出る事になつたあの時の僕の云ひ草、お前も忘れはしないだらう。この際眞身になつて、僕の外遊を心配してくれる人こそ、差當つて僕を活かしてくれる人だ、僕がその人に心を引かれるのをどうする事も出來ないと、さう云つたつけね。ところがどうだ？　その心配してくれるはずだつた者も一しよに、結局お前の世話にならなければならない事になつてしまつた、誠に面目ない。全く僕は、からしてお前と顏を合せてゐるのもつらいのだよ。」と宏造は不斷の癖とは一そう赤い顏をした。

その樣子を默つて見やつた欽子の顏も、この時ひとりでに和んで行つた。そして今までの事務的な話し振りとは碎けて、いくらか感傷的に云つた。

「わたしもかうするについては、隨分考へ迷つて苦しみました。初めはあなたを怨みもし、輕蔑もしましたけれど、しかし、一人以上の異性を愛する事が出來るのは、云はゞ男性の本能で仕方がないとさう思ひ返して……つまりわたしたちのやうな平凡な夫婦仲には、お互ひの身も心も永遠にそれ一つで繋いで行くやうな、そんな大きな愛は惠まれてゐないのだと諦めました。えゝ、それだけは諦めましたけれど、どうしても諦められないのは子供の事でして……」

「子供の？」

「愛子を父無し子にするのが、如何にもふびんでして……」

「さう、僕も……ふびんでならない。」と宏造も思はず目をしばだたいた。

「ですから、わたしもいろ〳〵考へた擧句、たとひ夫婦の愛は無くなつても、親子の愛には變りはないから、どうか愛子の爲めに、この後もお互ひにお付合ひだけは、他人行儀でなくありたいと思ひましてね。あなたもどうか外國へいらしつても、時々は愛子に父親らしい手紙も書いてやつて下さいまし。これだけは特にお願ひ申しておきますわ。」

「お前さへ許してくれゝば、毎日でも書いてやるよ。手紙ばかりぢやない、いづれ外國から歸つて來たら、やつぱり父親として愛子を見舞はせてくれるやうに、今から僕もお願ひしておくよ。」

「えゝどうぞ。やつとまあこれで、子供の事も解決がつきました。わたし實は、あなたが素直に承知して下さるかどうか、不安でしたの。」

「愛子の事を？　なぜ？」

「だつて、ちえ子さんの思はくもありませうから。」と云つて、欽子はちよつと皮肉な微笑を見せた。

宏造はまた眞赤になつた。

「あの女はあの女……親子の感情はまた別なものだ。それは愛子といふものがある以上、やつぱり愛子の母親は將來とも僕には忘られないだらう。」

「有難う。そのくらゐなら過去の事だつて……愛子の生れたころの事も忘れないでゐて下すつたらね。あの子の生れたのは、ちやうど結婚して三年目でしたわ。あなたは新聞の訪問記者をしていらつしやる、わたしは今の社へ傭はれた

ばかしで、月三十圓か三十五圓で、仕事といつても校正のやうな事をさせられてゐまして、二人の收入を合せても百圓に足りないくらゐでした。忘れもしないが、大學病院で愛子のお產をした時には、入院料が出來ないので、わたしは假病をつかつて退院を遲らせたものです。本當にあのころの生活を思ひ出すと……」

「僕だつてあのころの貧乏は忘れはしない。お前が社から歸ると、夜の十一時十二時まで內職をした事も覺えてゐる。僕は僕で、一枚十錢といふ飜譯の下譯を始終徹夜でやつたものだ。お互ひにさういふ苦しい思ひをして、やつと今日の生活にまで漕ぎ着けたのだ。こゝ十年間といふもの、夫婦共稼ぎで、お互ひに勞苦を分ち合つて來た。今にしてそのお前を裏切るといふ事は……全く自分で自分の氣が知れない。」

「つまり生活の餘裕がついたから、生活の共同者が鼻について來たんでせう。生產的の妻よりも、消費的の相手に興味を感じ出したんでせう。わたしも實はかうならない前から、それを案じないでもなかつたのよ。フランス人には四十の病氣といふ言葉があるさうですが、日本にも『中年の戀』といふ事を說いてゐた文學者もあります。あなたはまだ四十には間がありますけれど、とにかく中年ですから、わたしも內々は警戒してゐました。それで自分でも、或る時は職業婦人から足を洗はうかとも思ひました。有職婦人として立つて行く以上、どうしても妻とし母としての愛が十分に屆きませんから。どうかすると、職業の方にかまけてしまつて、忙しいのと疲れるのとで、女のたしなみも、異性の魅力もまるで無くしてしまつてる人もよくあります。わたしはしかし有職婦人としても、そんなセックスを失つた蟻のやうにはなるまいと、これでも隨分氣をつけて來ましたのよ。けれど、初めから男が要求する通りの女に出來てゐるちえ子さんには、やつぱり敵ひませんでした。」と欽子は努めて快濶らしく云つた。

「さうか！」と宏造は、押出すやうに云つて、重々しく頷いた。「濟まない。お前のそれほどの心づかひも、これまで一から僕は氣づかずにゐた。何といふ迂濶だらう。今お前に云はれて、初めてさうだつたかと思ひあたるやうな始末だ。しかし、要するに僕は頭でだけ新しがつてゐて、心臟はやつぱり古いのだ。例のエレン・ケイが云つてるやうな、人格的の愛は僕の情がまだ解しないのだ。どこまでも愛を所有しなければ滿足しない、暴慢な、利己的な、從來の男性のつまり所有感が、お前の云ふその、男子の要求通りに出來てる相手を求めさしたのだ。」

「わたしもそりや、男子の要求通りな女にはなりきれなかつたかも知れません。しかしあなたの爲めには、今も申すとほり、隨分氣をつけて、あなたの愛を滿足させるやうに努めて來たつもりですわ。これまでのわたしは、あなたの所有感に、どう不從順な妻だつたでせう？」

「さう云はれると、僕は一言もない。お前は愛情においても決して缺けるところはなかつたし、妻としてもよく盡してくれた。不足も不滿もあるわけがない。けれど……」と宏造は口籠つて、そのまゝ何か暫く考へ迷つてゐたが、やがて險しさうな顏をしながらも改まつて云つた。「欽子、どうかこの機會に僕の正直な告白を聞いてくれ。さつきからいろ／＼と云ひわけがましいことも云つたが、要するに僕は……なるほどあの女の爲めにお前を裏切つた。だから、お前といふものをあの女に見かへたのだと思つたら、そりやお前も腹が立つだらう。けれど正直な事が、僕はあの女の何一つお前より勝れてゐるとは思はない。僕は今でもお前を心から敬愛してゐるのだよ。どうかこれだけは信じ

てくれ。」
「ぢや、わたしも正直に云ひますわ。わたしにしたつて、ちえ子さんのやうなあゝいふ無思想の人たちに、自分が劣るとは思ひたくありません。それに美人は美人でも、知識的の表現のない、人格も個性も曖昧な美は……ちえ子さんがそつくりさうだと云ふのではありませんけれど、とにかくあゝいふ下町式の美人は、今のもう新しい男性間には魅力を失つてるものと、わたしは思つてゐました。だつて、今の新しい女性は審美的教養の上にも目覺めてゐます。男性だつて美人の標準が、しぜん違つて來てゐなければならないはずぢやありませんか。」
「それは慥にさうだ。けれど、必ずしも美人だから男性を魅するとは限らない。また新しい美人の標準にかなつてゐるからつて、それで直ちに新しい男性の愛を引くものではあるまい。美と愛とは別だよ。」
「では、ちえ子さんのどういふ點が、あなたの愛を引きました？」と欽子も遉に厭な顏をして聞いた。
「僕は前にも斷つた通り、情においては決して新しい人間ではないから……」
「ないから、それで、どういふ點があなたの古い感情でも動かしたのでせう？　わたし、是非それが伺つておきたいわ。」
「どういふ點が？　さあ……一口に云つたら、あの女の小さい體と、それからあの、日本髪とに心を引かれたのだ。たゞそれだけさ。」
「まあ……」と云つたきり、欽子は默つてしまつた。
しかし宏造のその自白は、決して噓でも冗談でもなかつた。
それは奇妙な會見であり、そして變な訣別であつた。しかも二人の間は完全にそれで解決されたものである。けれど、その解決が理知的の諒解だけで、二人の感情はその爲めにちつとも動かされる事なしに濟んでしまつた。二人はあまりに喋り過ぎた、涙も溜息も出る間がないほど喋り過ぎたのである。東京を出る時から、心ひそかに感傷的なシーンを豫期して來た欽子夫人も、甚だ物足りない白けた心持で歸つて行つた。
それでいゝのだ、今さら何の感傷ぞ。
それからちえ子と俊次とは、欽子夫人の自動車が見えなくなると同時に歸つて來た。もつとも俊次のはうは、宿の門口まで一しよに來ただけで、そこでちえ子に暇を告げると、もう宏造にも會はずに、そのまゝ自分も欽子の後から堂島の支社へ行つた。そして二人は午後の汽車で東京へ歸つた。

獨立

十一月の半ば、第二日曜日の午後、大久保の清藤では家ぢう總出で花壇の手入れをしてゐた。家ぢうといつても、玄關番の書生は先月限り居なくなつたし、主婦の欽子に、松枝といふ家政婦代りの娘と、近ごろ女中と出代りになつた小女と、女ばかりの三人。それに今日は小學校も休みで、愛子も手傳ひやら邪魔やらに交つた。莖の流れた球根を掘り出したり、實蒔物へ切藁をやつたり、移植するものは移植する。よく晴れた菊日和の暖かい日光の下に、皆が手を土まみれにして愉快さうに働いた。狹い花壇は直き手入れが濟むと、今度は西洋館の前の露地植ゑの菊へ最後の施肥をした。それはこの春からずつと宏造が自分で栽培して來たもので、宏造は居なくなつても花は見事に咲いた。
女たちが臺所のはうへ引擧げた後で、欽子は獨りそこのテレスに腰をおろして、少し汗ばんだ體へ風を入れてゐた。こんな暖かな日も恐らくはもう今年の終ひだらう。冬の來る知ら

せのやうに、白いおほわた蟲がふは〳〵と目の前を掠めて、澄みきつた大氣の中へ消えて行つた。
「直きもう冬だ。」
さう思ふと、夫に別れた新しい孤獨の身が、今年は人よりも寒さうな氣がした。しかし冬には限りがある。この先き限りとてもない永い寂寞を考へると耐らなかつた。それでも愛子の聲を聞くと、いくらか慰められて、寂しい顏にも目だけが輝いた。それから自分の幼立ちにそつくりな女の子の可憐な姿が目の前に現はれると、もう孤獨も寂寞もない。油然と湧き上る母性愛に顫ふ輝かしさから、いきなり小さい體を抱き寄せると、接吻と頰擦とで欽子は夢中であつた。
「厭あよ、苦しいわよ……おかあさま、お客さまよ。田澤さんがいらしつたわよ。」
俊次は案内も乞はずに、庭から直ぐにテレスへ廻つて來た。
「おそくなりました。今朝早く歸つたんですが、辻村で話し込んでしまつて……」
「お歸んなさい。」と欽子は急いで子供を放して、少し極り惡さうに立上つた。
「一昨日午後二時に神戸を乘船しました。清藤さんも姉さんもよろしく……いろ〳〵なことは、いづれマルセーユへ着いてから申上げますつて……」
「ご苦勞さまでした。さあどうぞ、こゝから上つて下さい。」
その西洋館は、宏造が書齋に使つてゐた時のまゝで、デスク一つ動かさずに、そのまゝ欽子は客間に使つてゐた。俊次は明るい窓際のデスクの前の廻轉椅子に腰掛けて見て、やつぱり主人の居たころの裝置を變へるのに忍びないのだなと思つた。そこは遉に女心の優しさを、獨りで頰笑ましく見廻しながら、別に吸ふ氣もなしに、デスクの上の虛の卷煙草入を開けて見た。そしてテーブルの上のマッチを取ると、今度は自分の朝日を袂から出した。
欽子は臺所へ行つて土の手を洗ふと、上つ張を羽織と着更へ、自分で茶道具を持つて西洋館へ來た。入口のドアを開けて一目中を見た時、
「あら。」と思はず喉で叫んで、一瞬間立ち竦んだ。「厭あね、そこにさうしていらつしやると、後姿が主人にそつくりだわ。」
俊次は吸つてゐた卷煙草の殼を、テーブルの灰皿へ捨てて、
「なに、まはりがご主人のいらしつた時とそつくりだからですよ。やつぱり記念にかうしてあるんですか？」と聞いた。
「いゝえ。」と欽子は寂しい顏をして、「たゞ子供にね、やつぱり父はこゝの家の人だと思はせておく爲めですの。」と云つた。
茶がいれられて、二人は山家のご馳走めいた茹栗を剝きながら、俊次の話はしぜんと宏造やちえ子の噂へ落ちて行つた。欽子もなるべくそれには觸れまいと努めながらも、つい引入れられて一しよに話してゐたが、不快な思ひ出のみ浮んで來るので、わざと呼鈴を鳴らすと、もうその話は切上げるつもりでかう云つた。
「どうかまあ、あの人たちもあゝなつたものですから、末永く圓滿に行くやうに、わたしも蔭ながら祈るわ。」
「僕もそれは祈るんですが、しかし、どうなるものですかな。」と俊次は考へながら云つた。「姉も可なり今度は目覺めて來たやうですからね。何かあれで、經濟上の獨立が出來るやうになつたら……」
「そりや獨身のはうがフリイですからね。それに男つてものは、實に愛の動機が女には想像もつかないほど淺薄なんですもの、夫だとか愛人

だとか思つて頼りにしてゐたら、飛んでもない馬鹿を見るわ。獨立々々、フリイな獨立に限る事よ。もうその話は止め。神戸まで行つて頂いたお禮に、今日はお鮨でもご馳走しませう。向うの大通りに、ちよつと食べさせる店が近ごろ出來たのよ。」

鈴で呼んだ小女に、欽子は鮨を誂へにやらせておいて、それから思ひ出したやうににつこりしながら云つた。

「それはさうと、あなたも早く結婚したらどう？　何とか云つたわね…さう／＼薫さんわたし一度銀座のフルーツパーラアでお目にかかつたつけ、いゝお嬢さんだわ。」

「僕も當分まだフリイな獨立ときめましたよ。高文試驗をしくじつちやつたから…新聞記者の見習ひなんかと結婚は、向うでご免蒙るでせう…よう、愛子ちやん、いらつしやい。」と俊次は大きな聲で窓越しに呼んだ。

さつきの土まみれになつた着物も着更へさせてもらつて、眞白なエプロンを掛け、テレスから飛び込んで來た女の子は、いきなり俊次の膝にかじりついて、

「田澤さん、いけなくつてよ。これ、おとうさまのお椅子よ。」

「なに、小父さんのお椅子さ。どれ、學校へ行つて重くなつたかな、抱つこして見よう。」

「厭だ、厭あよ…小父さんのお椅子ぢやない、ねえおかあさま…おとうさまに云つつけてよ。」

そばで默つて見てゐた欽子の顏は、不意にさつと紅くなつた。すうつと立つて行つて、俊次の膝の上に抱き竦められてゐる女の子を、無理に自分の手へ抱き取ると、デスクの上のシガーセットを片手でちよつと直しながら、

「田澤さん、あなた、こゝは遠慮して頂戴。」と靜かに云つた。

年譜

（附）著作年表

明治八年（亥年）
二月三日、愛知縣知多郡半田町に生れ磯夫と命名。

明治十四年
四月、半田村小學校に入る。

明治十六年
此の頃より稗史小說の類を好んで讀む。近隣に橋畔堂といふ貸本屋あり。同店の小僧と知己になり學校より歸るや直ちに赴き、遂に蔵書の全部を讀破す。十三四歳の頃迄に既に春水、種彦の人情本の如きものまでを讀み盡せり。「都の花」に依りて嵯峨の屋主人の「初戀」を讀み、感動して漸く文藝に興味を感じ「少年園」「生徒」などに投書す。

明治二十三年
三月、半田村尋常高等小學校を卒業す。
十月、兩親の希望に依り藥劑師たるべく、藥學校入學のため上京せるも、之を嫌ひ、九段中坂の商業素修學校に入學す。幾くもなくして退學す。

明治二十四年
高等學校入學志望の目的を以て、錦城中學に入り、高等學校受驗準備科に席を置く。森田思軒、坪内逍遙の講義を聞く。

明治二十五年
高等學校文科入學試驗を受けしも、落第し、本郷の下宿にごろ〳〵する中、不良少年團に投ず。當時「讀賣新聞」に「むき玉子」連載中の尾崎紅葉を崇敬の餘り、面會希望の書を送る。直ちに許諾の返書を受けしも、氣遲れのため面會の機會を失す。其の後、紅葉の經營せる「千紫萬紅」に『水の流れ』を投じ、續いて「色是魔」を投ず。之が緣となりて紅葉に面會、其の結果愈々小說家たる決心を固む。

明治二十六年
一先づ故鄉に歸り、兩親に志望の存するところを打明け、其の許諾を得て上京。松本道別と共に英漢數の教授所を開き、以て生活の資となさんとせしも、來るもの僅か五人、直ちに閉づ。

明治二十七年
九州に放浪す。後に當時の事實を材料として「世間師」を書く。
「讀賣新聞」に『片腕』を發表す。

明治二十八年
徵兵檢査を受くるために歸鄉。東都に於ける放縱なる生活を兩親の知るところとなり、再び出京を許されず、鄉里に於いて失意の中に空しく日を過す。

明治二十九年
『寢おしろい』を發表、反道德的題材のため、世評紛々たり。

明治三十年
紅葉の勸めに依りて、鄉里を材料とせる『絲甲鶴』を脫稿し、之を携へて上京し、紅葉の門に入る。露伴の推擧に依りて「新小說」に發表、文名頓に揚る。
此の頃、田山花袋と識る。
八月、虎列剌病に罹る。
十月、退院。入院中の見聞を材料として『世話女房』を書く。
紅葉の門下たる鏡花、春葉と共に詩星堂を

建つ。此間第一の出世作「戀慕ながし」成る。

明治三十一年

牛込區袋町に初めて一戸を構へ、二弟及老婢と家庭生活に入る。此の年「十七八」を發表、鷗外漁史の激賞を受く。續いて「涼炎」『下士官』を出す。

明治三十二年

牛込區納戸町へ轉居。

九月、『鬘下地』を發表す。

明治三十三年

十一月、豐橋に於いて加藤家の養子となり、夫人籌子と結婚す。

明治三十五年

納戸町高臺の家に移る。田山花袋の舊寓居なり。

此の年、ツルゲネエフの『ルーヂン』を讀み、異常なる感動に打たれ、爲めに思想上に一轉化を來せり。其の轉化後、第一試作を新小說に掲げたる『沼の女』となす。

明治三十六年

六月、一子丈夫を擧ぐ。

秋十月、恩師紅葉に永別す。

明治三十七年

秋より翌夏へかけ、養家との折合ひ上、妻子と別れて獨居す。

明治三十八年

房州に旅行す。

夏、牛込區矢來町に轉居。

明治三十九年

春、長篇小說『青春』を「讀賣新聞」に連載。評壇の視聽たゞ此の一作に鍾り、聲價愈々擧る。

明治四十年

府下戸塚村に移り、所謂戸塚の頽廢時代に入る。

爾來、全二年外觀の華やかにして活氣ありしに似ず、文藝上に生活上に最も惱み多かりし苦悶と懷疑の痛ましき日なりき。

明治四十一年

『天才』を「萬朝報」に掲げしも、稿を終らずして中止す。

四月、長篇『戀ざめ』を新潮社より出版、風俗壞亂のため發賣禁止となる。

六月、『風葉集』を新潮社より出版、自然主義運動の影響を受けて成れる短篇を集めたるものなり。

明治四十三年

戸塚生活の崩壞と共に、一時大久保百人町に假寓せしも、飄然郷里に歸り、郷里の安居を求む。

秋十月、尾張師崎なる禪寺に寓し、半歳餘を默想と宗教書との間に送る。

明治四十四年

豐橋の養家に歸り、南新地の住宅新築。

秋、轉居と共に東京より書齋を移す。

冬より翌春へかけ、異常の興味を以て自ら築庭の工事を督す。木石を愛し、自然に親しむ事によりて、僅かに藝術上の悶を遣りたりしものの如し。

大正二年

三月、一子丈夫を喪ふ。愛する者の死に直面して、死生觀上の思想に大なる影響を受く。

大正四年

三月、東京毎日新聞社社員となる。

九月、先に發賣を禁止されたる『戀ざめ』を訂正し、名作選集中の一篇として新潮社より出版。

十一月、養父の死に會ひ、後を襲ぐ。

大正八年

豐橋市花田西郷の地をトし、十一月家屋の工事に着手す。

大正九年
一月より建築と造園とに全一年を費す。凡てを一擲して自ら工事を見る。
五月、半田の實父病歿す。

大正十年
早春よりノオトを改めて、豫て晩年の業として志したりし市民小說著述の計畫にいそしむ。實父の死によりて俄かに發奮されたるものと覺し。

大正十三年
夏、健康診斷の結果、心臟及腎臟に異常あるを認め、俄かに藥餌に親しむ一方、多年の飲酒を廢す。

大正十四年
九月、初めて心臟性喘息の發作を見る。爾來注射又は頓服藥によりて纔かに苦痛を免る。十月、稍々輕快を覺えて慣例の秋季上京をなせり。

大正十五年
年改まると共に病頓に重く、臥床幾ばくもなく、遂に心囊炎を發して永眠す。時に一月十五日、享年五十二歲。

著作年表

明治二十七年
十二月—末の露(女鑑)、片醫(單行)。

明治二十九年
一月—世話女房(讀賣新聞)。二月—看護婦(文藝倶樂部)。八月—片男波(同)。九月—寢白粉(同)。十二月—失戀詩人(同)、龜甲鶴(新小說)。

明治三十年
四月—化粧鏡(東京新聞)。六月—潮の花(文學評論)。七月—半元服(新作文庫)。八月—惡性女(太陽)、十七八(新著月刊)。十月—色餓鬼(世界之日本)。十一月—五分時間(新著月刊)。十二月—五色縈螺(太陽)。

明治三十一年
一月—今春(世界之日本)。三月—さぶるこ(新著月刊)。四月—名物男(都新聞)。七月—鐵道工夫(國民之友)。八月—行く春(中學新誌)。九月—戀慕ながし(讀賣新聞)。十月—前後不覺(文藝倶樂部)。十二月—流螢小話(太陽)。

明治三十二年
九月—政黨(新小說)、疊下地(單行)。十月—黑裝束(大阪新日)。十一月—酒保小話(活文壇)。

明治三十三年
七月—五反歩(新小說)、下士官(同)。八月—晚江([illegible])。九月—春江(同)、花あやめ(太陽)。十一月—心中くらべ(二六新報)。

明治三十四年
一月—英吉利銀杏(新評)。四月—黑裝束(單行)。五月—さめたる女(新小說)。六月—續さめたる女(同)。七月—河岸の夕暮(新文藝)、願の絲(小天地)、一腹一生(太陽)。九月—おくり火(新聲)。

明治三十五年
一月—覺醒(新小說)、白無垢鐵花(大阪毎日)、赭の花(單行)。二月—背中あはせ(小天地)、文金島田(單行)。三月—戀の殘忍(小柴舟)、戀無常(單行)、旗すゝき(不詳)。四月—涼炎(新小說)。五月—教へ子(教育界)。七月—戀女房(單行)。八月—沼の女(新小說)、不痛性(太平洋)。十一月—髑髏物語(太陽)。

明治三十六年
一月—有緣無緣(新小說)。三月—愛憎(婦女文藝界)。四月—忘れがたみ(文藝倶樂部)。五月—へそ日記(新小說)、瀨戸がよひ(同)。六月—手枯足枷(二六新報)。七月—無限恨(新著文藝)。八月—地底の宮殿(東洋畫報)。九月—ストライキ(文藝倶樂部)。十一月—宇宙の目的([illegible]篇)。

明治三十七年
一月—親と子(文藝界)。三月—豫備兵(文藝倶樂部)、忘れ箱(女學世界)。四月—うしろ姿(文藝倶樂部)、決死隊(軍國文學)、田舍道(明星)、男波女波(時好)。五月—公共心

(文藝界)。七月—海軍大尉(單行)。十一月—未成年(新小說)。十二月—隣あはせ(太陽)。

明治三十八年

一月—化性者(戰爭文學)、一萬圓(女學世界)、春興(明星)。二月—新夫婦(文藝俱樂部)。三月—深川女房(新小說)、青春(讀賣新聞)、うき寐(單行)。四月—年くひ女房(太陽)。五月—堀田親子(新古文林)、愛憎(新潮)。六月—俘虜(同)、金色夜叉(單行)。七月—鬼士官(同)。八月—一本杉(新小說)、人妻(新潮)、阿鼻焦熱(不詳)。九月—自殺と自殺(單行)。十月—愛と戀(文藝俱樂部)。十一月—卯の花縅(單行)。

明治三十九年

一月—はきちがへ(新小說)、一人心中(新古文林)、伏蛇(新聲)、美人のあたひ(小品文學)、麗子夫人(大阪毎日)、唐撫子(單行)。三月—老青年(早稻田文學)、十三夜(婦人世界)。四月—名越川(新小說)、陋劣(文藝界)、旅情(新潮)、戀だより(手紙雜誌)。五月—孤影(太陽)。七月—臆病者(文藝俱樂部)、父おもひ(女學世界)。八月—女塑像家(新小說)、歸國(新潮)。九月—蝿(文藝界)、水の流れ(新聲)、女學生(單行)。十月—鬼子(太陽)、心の影(手紙雜誌)、白波女(單行)。十一月—血統(新潮)、朝(サムラキ)。

明治四十年

一月—わかれ際(新小說)、一人心中(新古文林)、不眞面目(手紙雜誌)、怠け者(青年)。三月—天才(萬朝報)。四月—女髪結(中央公論)。六月—好奇心(文章世界)。七月—知らぬ戀(手紙雜誌)。八月—生みの母(早稻田文學)。十月—おと娶(趣味)、未亡人(中央公論)、强き戀(日本新聞)。十一月—一雄(新潮)、解脫(趣味)、一人一話(新思潮)、霜見る日(太陽)、戀ざめ(禁止)(日本新聞)。

明治四十一年

一月—聟えらみ(新小說)、七人女(新思潮)、歪力(中央公論)、死後までも(女子文壇)。二月—妹の子(新潮)。三月—わき道(太陽)、草分けの家(早稻田文學)、忿怒(單行)。四月—ぐうたら女(中央公論)、春怨(單行)。五月—傳染(秀才文壇)。八月—伯母の子(文章世界)、脚本獨(文藝俱樂部)、情力(早稻田文學)。九月—となり(新小說)、變死(新潮)、後進(中央公論)、そら脊(新聲)。十月—世間師(中央公論)、下男(太陽)、幸不幸(秀才文壇)。十一月—轢死人(趣味)、後篇金色夜叉(活動の友)、春潮(大阪毎日)。

明治四十二年

一月—前半生(新小說)、好意(趣味)、長男(早稻田文學)、耽溺(中央公論)、カルチイラタンの一夜(太陽)、博士夫人(活動の友)、濱(新文林)、食ひ物(讀賣新聞)。二月—轉々(太陽)、南北(眞山青果との合著)(單行)。三月—老妻(活動)。四月—同宿の女(趣味)。五月—誘惑(活動)。六月—姉の妹(禁止)(中央公論)、訓導(新潮)。八月—養子(太陽)。

明治四十三年

一月—無爲(中央公論)。四月—鄕愁(趣味)。九月—子一人(中央公論)。十一月—極光(東京朝日)。

明治四十四年

三月—悲曲(單行)。七月—憤死(太陽)。八月—半途(中央公論)。十月—一夜(新小說)。十一月—風葉小說集(單行)。

大正元年

一月—老後(中央公論)、荒尾讓介(大阪日報)。四月—落日(演藝畫報)。五月—青葉の頃(スバル)。

大正二年

一月—默從(東京日日)。

大正三年

二月—夜逃(中央公論)、人の思ひ(東京日日)。

大正五年

九月—愛の勝利(淑女畫報)。

大正七年

一月—光の門(淑女畫報)。四月—年增女(文藝俱樂部)。

大正十一年

九月—地上の星(婦女界)。

大正十二年

六月—惡魔の囁き(講談と小說)。

大正十四年

一月—綠の道(婦女界)。

柳川春葉集

序

春葉先生ほどに義理といふものに從順であつた人はないだらうと思ふ。先生は、實に、潔き、義理の實行者であつた。義理といふものの前には總てを抛つて、耐へ忍ばれたことは、先生の作品を通しても窺ひ知ることのできるところであるが、これは、先生が、さういふ道德的忍苦をせられなければならない境遇の家庭に生立たれたからである。

先生には繼母があつた。この繼母は先生の家庭的不幸であつたが、同時に、創作の上では、却つて大なる功績があつたと思ふ。それは繼母對先生の生さぬ仲の義理合が、いかにも力強く先生の人生觀の上に影響を與へたからである。繼母と繼子の感情は、いはるゝ如く、反感や憎惡で充されてゐるものであらうが、繼母を現實に持つてゐられた春葉先生は、逆に行つて、義理といふものを極度に誇張し、反感や憎惡を解消して愛情に取替へて、繼母と繼子を描かれたのは「生さぬ仲」や「母の心」等の諸傑作で、これは正しく、先生の體驗を倒錯せられたものと考へてよからう。繼母の總てが必らずしも繼子に愛情 注ぐことができぬものばかりでない、といふこともよく聞かされはしたが、併し姑對嫁の交渉は、先生の作品のどこに描かれてあつても、先生自身が繼母から得られた直接經驗を眞面に現はされたものである。

かやうに家庭的に不幸であつた先生は、十八歳の時に尾崎紅葉の玄關番となられたが、これも先生の希望からとはいへ、正規の教育を受けるわけに行かなかつた家庭の事情のあつたことが察せられる。

春葉先生の祖父は、播州龍野の藩主立花氏の家老職であつたが、親父の代に至つて事業に失敗を招き、ために物質的に境遇は反落し、家庭的に多種多樣の紛議や事情が生じたことは、春葉先生の人生觀を築き上げる上に甚しく力強いものであつた。

さういふ練營を經られたためか、先生は實に早熟で、人間が洗練されてゐた。義理人情の前には、總てを犧牲にするだけの鍛錬があつて、決して、敵をつくられなかつた。いつでも寬大で、又いつでも穩當な處置をとられた。薩子夫人を迎へられたのも、恩師尾崎紅葉に對する義理合からであつた。それは先生二十八歳の時であつた。當時先生は紅葉の不興を蒙り、遠ざけられてゐたので、師の病床も見舞ひ得なかつたため、その看護に最もよく努めた看護婦であつた薩子夫人を、恩師紅葉に對する報恩として迎へられたのであつた。

從つて、先生の純藝術的創作の短篇物にしても、大衆的讀物の長篇にしても、その殆ど總ては、家庭が中心となつた作である。そして「生さぬ仲」の女主人公のやうに、自分といふものの悉くを犧牲にして、相手の爲に生命を賭してつくすといふ行き方も、春葉先生の人格の一面の現はれである。

先生は、頭腦がづぬけて明晰で、記憶力は强大ではあつたが、體格はあまり良くなかつた。併し、母方に似て微細いことを自認してゐられたにもかゝはらず運動競技が嗜好に叶ひ、殊に、常陸全盛時代には、相撲新聞を出されたばかりか、自ら素人相撲の土俵にも上られたことがあり、野球も天狗クラブの一員であつた。併し、時々リュウマチスに惱まされ、又、創作はいつも夜明けまで筆を執られるので、風邪に冒され易かつた。大正七年一月九日四十三歳の若さで歿しられたのも流行性感冒からであつた。

昭和六年七月

佐々政德

五人姉妹

来客・

「いや、お見送りでは恐れ入ります。奧樣！ 何うぞ其儘に……」と、室の出口で立ちながら二三度頭を下げた客が、黒光のする緣側傳ひに玄關の方へ出て行つた。歩く度に仙臺平の袴がシウ〳〵と、其音さへ暑苦しさうに。

續いて室を出たのは五十恰好の夫人で、木綿飛白の單衣に、黒繻子の平常帶も大分古びたのを締めてゐるが、其れでも何處か淑然に凛しい程の品位が備はつてゐた。

客は廊下の曲角まで來ると、手に持つ扇を腰に差しながら、

「恐縮でございますなあ、何うぞお構ひ下さらんやうに。」と、繰返して言つた。

「此方こそ……お暑いのに再々御足勞を懸けまして、お氣の毒に存じます。」

「否、奧樣。手前の方は勝手に上りますので、いかに足を運びましても、更に厭ふ處はございません。否、何有……是が當然で——」

客は少し禿げた頭を撫でながら、其時玄關の式臺に下りた。

夏も七月に入つたばかりだが、梅雨霽の天氣が赫々と照りつけて、戸外は草も木も縮れあがるやうな温氣。

「まあ、今日は別けても凌ぎ兼ねるやうでございますね。」

夫人は門内の日當りに眩しい目を細めた。

「併し、徐々片蔭も出來ましたので。」と、下駄を穿き「では奧樣、御主人がお歸宅でございましたら、唯今申上げました儀を……何分一つ宜敷きやうにお話しを願ひまするで。委しくは近い中罷出でまして直々お話しも申上げますが、大體は先、唯今お耳へ入れました通りの譯、ですから、はい、是非其處は御承引が願はしうございます。」

「歸りましたら、能く申傳へます。」

「で其……」と、低聲になつて「何も御緣ではございまするが、先方は彼樣も申しまするし、是は其、何うかして纏まるやうに致したいとな、はい、元來一了簡ではありまするが、手前も熱心に希望致して居る次第で……」

「種々と御親切樣に……貴方のお骨折は篤くお禮を申します。」と、夫人は恭しく頭を下げる。

「否。手前なぞは、骨折と申す程の事もございませんが、先方でも彼れだけに望んで居ります爲に、つい其熱心に動かされて、煩くお邪魔に出ますので、此方樣では嘸お煩いだらうと推察しては居りますがな。」

「其れどころではございません。」

「然う申せば、又此處へ根が生えさうで。」と、頓狂に笑つて「失禮を致しましたな。其處で諄いやうではありますが、明後日出ました節、御主人樣にお目に懸つて、御返辭を伺ふ事が願ひますれば幸ひ、これに過ぎません。其由を奧樣から何分よろしく……はい、折入つてお賴み申します。」

爪さきへ手の届くまで深々と辭儀をして、扇子を持つたまゝ小走りに門の方へ出て行つた。

斯樣忙しい間にも、彼の目はチラ〳〵と左右へ配られてゐた。而して此前來た時心積をしたよりも庭が廣かつた事や、住居は近い中に根繼をした方が可ささうだといふ事や、垣處に見

える俵の宙乘りがそれは大弓の卷藁であつた事や、其傍の柿の木に未だ青い花落實がミッシリ附いてゐるまで、凡そ通りがかりの物は隈無く見極めて置いたのだ。

古い冠木門の、立つけの惡い潛戸を出ると、大久保の停車場から乘つて來た俥が、門の前に待つてゐた。

「やあ、お待遠。」と、彼は口に馴れた世辭を振撒きながら、絽の紋附の羽織を捲つて幌の中へ潛込む。

* * * *

其客を見送つた夫人は、直に座敷に引返して、

「誰でも可いから來て下さい!」

奧の方へ呼びかける。

「はい。」と、若い聲がして、やがて其前へ來たのは四番目の娘の文子であつた。

姉妹の中でも容色まさりと言はれるだけあつて、細面の、其切れの長い目許が表情に富んだ、物言ひにも、擧止にも、自ら才氣の充ちて見える女で、殊に頭髪の豐なのが、其額立を一層引立たせてゐた。

夫人は目で近づけて、

「お前さん手が空いてゐるならお座敷を片づけておくれな。」

「畏まりました。」

「それから、次手に阿父様のお部屋も掃除して置いておくれ。仍且お歸宅前にして置く方が可いからね。」

「はい。」と、文子は麻の座蒲團を押入へ藏ひながら言つた。

「芳は何うしました?」

「姉さんは井戸端で洗濯をしていらしつてよ。御用ですか?」

「では、出がけに言つて行くから可しいよ。」

「何處かへいらつしやるの? 母様。」

「四谷まで。晩のお菜を見に行かうと思ふのです。」と、夫人は帶の間を探りながら奧の茶の間へ入らうとする。

「此暑いのに。」と、文子は軒端を見上げ「もう少し後刻になされば可いのに。未だ四時にはなりませんよ。」

「何有、暑いと言つても未だ〳〵、今から那樣事を言つては居られません。遠い處を他の用事で來て下さる仁さへあるものを、自分の爲に暑い寒いを言つては勿體ない。」

夫人の姿は茶の間へ入つたが、少時すると背戸口を出る跫音がした。

文子は其間に一通取片附けて了つたが、何の拍子か、偶と心の中で想像の緖を捉へると、室の隅に茫然立淀んで、其美しい目に庭の方を眺めた。植込や、苔蒸した石燈籠や、それは小十年も見馴れた景色であるが、凝乎と視線を注いでゐると、然ういふ在物が、寫眞のやうに、繪のやうに、果は幕に映る影のやうに、次第に薄く遠くなつて、今まで知らなかつた別の世界が其空間に擴がつて行く。

其處には有りとも見えぬ姿の、息に通ひ、風に搖ぎ、瞬きに隱れて、而して彼女の胸に響いた。樂しいと思へば恐ろしくもあり、悲しいと思へば却つて嬉しくもある……其れは我心の影であつた。

「妾は何うなるだらう?」と、考へると、文子は其體から心が離れる如く感じて、膝を突き、手を突き、終には疊の上にジワ〳〵と坐つた。

「何うしたの? 文子さん。」

不意に呼ばれたので驚きさま見返ると、二番目の姉の芳子が、何時の間にか緣傳ひに入つて來たのだ。芳子は妹と七歲程違つてゐるが、子供を持つて所帶窶もした上に、一昨年良人に死別れ、今では生家へ引取られてゐるだけあつて、一つ腹の姉妹ながら、艷々しい文子に較べるとずつと見劣りがしてゐた。たゞ何處となく品の

ある顔立と、すらりとした脊丈は親の譲りを爭はれぬ證據である。

「何を那樣に考へてゐるの？」

「いゝえ、別に……」と、文子は慌てて立たうとする。

「まあ可いぢやありませんか。」芳子は傍へ坐つて「心配事でもありさうに見えるわ。」

「妾に？」と、其方へ向けた目を直に外して「違ひます。」

「然うですか。」

「あ、今ね、母樣が貴女の事を訊いていらしつたのですよ。」

「其事は濟んだのよ。出がけに外で伺つたから。」と、同じやうに庭先を見やつたが「文さん、今日のお客樣は、仍且彼の事だつたでせう？」

「知りませんわ。妾……」

「然うですよ。」と、訊いた方からすぐに斷定して「妾は丁と知つてゐるの。」

「おや、然うかも知れませんわね。」と、文子も手輕に同意した。

「續けて二度も見えるのですもの。母樣はそれに就いて、何か貴女に仰有りはしませんか。」

「否。」

「未だ言ふ時ぢやないと思つていらつしやるのかしら。」

「伺はなくつても可いのですよ。何うせ阿父樣の思召次第なんですもの。」

芳子は頷いた。

「然うね。妾達は阿父樣の命令に隨ふのが掟なのですから……姉さんも、妾も、德子さんも、姉妹三人がみんな其通りだつたわね。それで今度はお前さんの番になつたのです。」

「姉さん。」と、文子は俄に言ひかけたが、思返して極惡氣に口を閉ぢた。

「だけどね。今度の話は大層好い處からですつてね。」

「へえ。」と、冷淡に受けたが、文子は少し顔を赧らめつゝ、清らかな目を瞬いた。

「委しい事は知らないけれど、昨日母樣が一寸那樣事を仰有つたの。何でも下谷の方で、餘程財産家なのださうですよ。」

「へえ。」と、文子は益す照れて、遣場に困つた目を膝の上に落した。

「幸福だわね。もしか此話が極つたら、姉妹の中で貴女が一當德を取るかも知れないのね。何しろ結構な事だと思つてゐます。」と、芳子は其淋しい顔に笑を湛へて「だから、妾蔭ながら成功を祈つてゐるのですよ。」

「姉樣！ 未だ少とも解りやしないんですよ。牧村つて何んな家だか！」

「おや。牧村といふのですか？」

文子はハッとしたが、其れは最早追付かなかつた。

「牧村さんと仰有るのですか。まあ、妾は初めて伺ひました。其れぢや下谷の、あの牧村さんでしたね。」

「知らないわ。」

と、背ける顔を、芳子は面白がつて覗込み、

「何の！ 其程御存知の癖に……」

「最早、澤山よ。」

衝と立つて走出る時、遠く門の啓く音がしたので、二人は顔を見合せた。

「阿父樣かしら。」

「然うらしいのね。」と、文子は低聲で言つた。

手紙

此姉妹の父は眞壁俊彦といつて、後備陸軍中佐である。

俊彦は明治二十七八年の戰爭にも、次の三十七八年の役にも、立派に其本分を盡した後、惜からぬ命までも無事に長らへたのであるが、一生榮達の運に乏しく、昔、同僚の或者は疾うに

將官に到り、或者は男爵の尊きにさへ上つたのに、彼は鬼少佐の名を一時の花と謳はれたばかり、漸く中佐になると同時に豫備に入り、やがて幾年かして其名を後備に葬られて了つた。

當時の所謂其閥族に緣が無かつたのは、無論第一の不運であつたが、いま一つは彼の人物が餘りに剛直で、清廉潔白も過ぎたるは狷介の譏を受けるにいたつた事も、其一生を狹めた原因であると言ふものがあつた。けれど、本人の眞壁は第一の理由を寧ろ軍人として誇るべき事だと言つてゐる。人物評に就いては、それを耳にしても笑つて答へなかつたが、彼の部下が後々までも父の如く懷いてゐたのを見ると、必ずしも評者の言をのみ信ずる譯には行かぬだらう。

但し、眞壁俊彥は他人が考へた程自己の運命を悲しんでは居なかつた。君に捧げた命を、いまだに斯く全うしてゐるのも彼に取つては望外の仕合せである。況んや餘生を送るべく賜はる功五級の年金は、分に過ぎたる國恩だと思つてゐる。

俊彥は今年六十二。夫人の名は禮子と呼ぶ。子供は壽子を頭に芳子、德子、文子、勝子の五人の娘。末だけが六一郎と呼ぶ男子である。長から三人の娘達は順々に他家へ嫁して、今年二十一になる四番目の文子が、恰度是から其時代を造らうとする際であつた。

＊　　＊　　＊　　＊

右の袂が片絎に縮れて、肩の邊りに膨らんだまゝの生平の單衣に、細い鼠縮緬の兵兒帶を締めた俊彥は、正座した膝に兩手を置いたまゝ、少しく仰向き加減に半眼で、夫人禮子が約しやかに物語るのを聽澄ましてゐた。

瘦せてはゐるが骨太に、直な脊、聳えた肩、半白の頭髮を短く刈つて、疎いチリ〳〵した髭髯が尖つた頤を包んでゐる。

「ふむ、其れで口上は盡して居るのかい。」

「然樣でございます。」と、禮子は俯いたまゝ答へた。

「明後日、又來ると言うたのだな。午前か午後か。」

「ならう事なら午前中が都合が宜敷いさうですが、若しお差支があるやうなら時間のお指圖が願ひたいとの申置きでございました。」

「ふむ。」と頷いて「可からう。日中來て貰ふのも氣の毒であるから、無論午前と極めて返事を出すとしよう。而てみると、先方は大分答を急いて居るのだな。」

「はい、頻に其事を申して居りました。妾にまで呉々も賴んで歸られましたが……」

俊彥は苦笑して、

「賴むも可いが、又過日のやうに音物なぞを持つて來は爲なかつたか？」

「否、あの時にお懲りなすつたとみえて、今日は然ういふ心配は爲さいませんでした。」と、禮子も微笑んだ。

「其れで誠に氣安い。何時も言ふ事ではあるが、當世の紳士なるものは、彼樣した事を虛飾に思つて居るから困る。彼の點は大嫌ひだ」

禮子は口の中で返辭をしたが、そつと良人の顏色を見上げて、

「明後日お會ひの節は、何とかお取極になりますのですか？」

「さあ……」と、徐に短い頤鬚を摑んで「實は未だ決しずに居る。だから今日彼の男に面會したら、飛んだ不覺な答を與へたかも知れんよ。今日明日には是非決定して置かねばなるまい。何方にしろ、優柔不斷は宜敷くないテ。」

「併し、他のお話とは違ひますから。」

「勿論の事だ、先方が軍人であるか、又は官吏でゞもあるならば、別に身許を穿鑿するにも及ばんが、彼樣いふ部類については俺も今日まで

全然不案內であつたからな。」

　ボツリ〳〵と話す間は長かつたけれど、二人は坐り直しも爲ず、手荒い團扇使さへ爲なかつた。禮子は父恐る〳〵顏を揚げて、

「で？　今日は幾何かお調べがつきましたのですか？」

「大分明瞭して來た。彼の分なら別に難は無いと思ふが」と、目を瞑いて「家系も、本人の性行も、其他總てが、今迄聞いた事と略違はんとしたら、又此方の條件を先方で承知するとしたら、此相談は何うしたものかな？　話したが可いか、其れとも斷るべきか。お前の意見は？」

「然樣でございますね……妾は如何やうとも、貴方の思召通りで。」

　俊彦は少時默つてゐたが、

「今度はお前がたの考慮も十分に問うた上で極めたいと思ふ。是で四人目だからな。」

　珍しく心弱い事を言ふ良人を、禮子は不思議さうに眺めた。是までの三人の身の上に關しては、それの母たる自分にも、本人達にも、相談といふは名ばかり、殆ど宣告同樣な一應の話があつただけで、良人の思ふがまゝにドシ〳〵捗つて了つた。元來こゝの家庭は……親の心と、子の心と、夢にも背いた例の無い眞權の家庭では……如您獨裁は愛情によつて常に正しく行はれてゐたのだし、殆ど盲目的に其命に隨つた子供達とて、今以て毫も不滿を感じては居らぬ。

　今度廻つた文子の縁談についても、良人は仍且其深い愛情と、權威とをもつて自身の意のまゝに取極め、而して意のまゝに家族を率ゐるのだと思つてゐたのに、突然斯樣事を言出されたから、禮子は少からず驚いたのであつた。

「俺の心は先づ斯うと決して居るが、お前に意見もあらば、今度は遠慮無く申出て貰ひたい。お前のみならず、壽も芳も居る事だ、彼等にもお前から話して、思ふ處があらば言はせてみるが可からう、其衆議に問うた上、俺と同說であつたら仔細はないが、萬一異論でも出た時は、十分に利害を研究して、其よろしきに隨はう」

「併し、誰も別に意見がましい事は……」

「否、然うでない、各自も其經驗によつて、多少議論があらうも知れんよ。左に右話すだけは話したが可い。妹の爲に心配するのは姉たる者の義務だ。」

「はい。其れでは左に右妾から一應申してみませう。」

「四日中に極めて置けば可い。但し、先日からお前の耳に入つて居る先方の身柄や、家の樣子は、總て其通りと心得て差支無いからな。」

「はい。」

「何しろ今度で四人目だ。何うか末長く幸運であらせたいと、俺も切に願つてゐるよ。」

　一種の迫つた氣分が此處にも漲つて、年寄つた父母は無言に顏を見合した。

　其時、外から歸つて來た一人息子の六一郎が、中學の制服のまゝ縁側へ來て、

「唯今歸りました。」

　兩親は其方を見て等しく頷いた。

「郵便が來てゐました。」と、六一郎は少し膝行して父の前に書狀を差置き、又縁傳ひに立去つた。

　俊彦は其手紙を取上げたが、

「おゝ內田の處からだ。」

「然樣でございますか。」

「何を言つて來たかな。」

と、準備しながら封を切つて、達筆に書いた女文字の文を讀行くのを、禮子は眤と打目戍つた。

眼鏡

　內田といふのは三番目の徳子が嫁した先で、

督の内田金吾は陸軍歩兵中尉、現在では弘前の第八師團に屬してゐる。

　五人ある娘のうち、三人は既に他家の姓を名乘つてゐる。長女の壽子は村越といふ軍人に、次女の芳子は黑川といふ收稅吏へ、何れも年齢の順に嫁いだのだが、其三人のうちで、今に無事で暮してゐるのは德子だけである。

　村越は大尉になつたばかりで世を去り、壽子は形見の一人子と共につい近くの戶塚村で淋しい暮しをしてゐる。芳子の良人の黑川は會津の稅務署に勤務中、不慮の事で職に殪れた。而して芳子は姑と折合が惡い爲に、生家へ出戾りの身となつてゐる。

　揃ひも揃つて斯樣悲慘な境涯の中に、夫婦首尾好く添遂げてゐるのは是一人。それも賴もしい、不運の爲とは言ひながら、何の娘も膝許近く居る中に遠い弘前で心細い新所帶の、それも可愛し、親の身になれば何によらず氣にかゝる事ばかりであつた。

　其氣にかゝる德子の音便を、俊彦は繰擴げる手も打顫ふばかり、轉に二三行讀むかとすれば、又周章と膝の上に置いて、

「德が、斯樣長い手紙を書いて寄越したよ。」

「然樣でございますか。」と、禮子も怡々して「何と申して參りました?」

「未だ其處までは讀まん。」と、煙草盆の隅に立てかけた眼鏡を取出し「何うも、極めて細字だよ。」

「彼の娘は元から根の能い方でしたから……」

「ふむ〳〵。」と、言ひながら、俊彦は少し反身になつて默讀したが「はゝあ、弘前も仍且酷暑ださうな。朝夕は七十度內外であるが、日中は八十三四度に至るとしてある。」

「それで、別に暑氣中も致しませんでしたか?」

「未だ〳〵、其處までは讀まん。」

　眉を顰めて、口を結んで、其癖何處か樂しさうに、俊彦は一句々々嚙んで飮込むやうに讀んでゐたが、偶と其眉がピリ〳〵と動いて、捻切るやうに鬚髯を拔く、と見た禮子はハッとばかり吐胸を突いた。良人が斯ういふ擧動を爲る時に限つて必ず不快な事のあるに極つてゐるから。

　俊彦の眼はキラリとした。傍見にも何うやら息が迫つた。而して一氣に終まで讀了へ、一寸目を閉ぢた後、再び要所を繰返した。が、其時はもう心が鎭まつて泰然たる事山の如くであつた。

　禮子は氣遣はしさが胸一杯だけれど、迂濶に差出て此上機嫌を損ねてはと、兢々しながら良人の一擧一動を打目戍つた。

「ふうむ。」と、俊彦は太い嘆息。

「何ぞ……あの、心配な事でも?」

「内田が病氣に罹つたさうな。」

「え、病氣に? まあ。」と、禮子は初めて思ひのまゝの聲を立てた。併し其れは開放されたる驚駭の聲であつた。

　俊彦は術無げな一瞥を與へたのみ。

「而して、何ういふ容態なのでございませう?」

「餘り好くはないさうな。」

「急に那樣事になりましたのですか?」

「手紙によると、一月程前からとしてある。今日まで通知を爲なんだのは、成るべく心配を懸けたくなし、又斯ういふ性の病氣であるから、意外に回復せんとも限らんので、暫時樣子をうかゞつて居つたのだ、と辯解してある。」と、思出したやうに手紙を妻の前に差置き「一先づそれを讀むが可い。」

「はい。」と、禮子は取りあげたが、最初は飛ばして中頃から探り〳〵讀行くうち、我知らず聲高に、「精神に異狀……あの、異狀としてございます。」

「其通り。」と、俊彦は頷く。

「まあ、飛んでもない事になつて……」と、禮子

は呆れて涙も出ぬ。

「噫徳は困つて居るだらう。外の病氣と違つて看病に手がかゝる。」

「手紙で見ますと、大層手荒い事も致すやうですね。」

「それが病氣だ。何にせよ看病が大切だよ。」

禮子は其看病よりも、もつと先の事を考へずには居られなかつた。

「斯ういふ性の病氣は癒るものでございませうか？」

「専門家でない俺が、直接容態も見ずして、何とも斷言することは能きぬ。」

「ですが、若し癒らなかつたら何うなるでございませう？」

「精神病者に軍人は勤まらん。其時は退職するより外はあるまい。」

斯ういふ答を得る度に、禮子は鐵槌で打下される程苦しかつた。

「萬一然うなりましたら、德子は、何ういふ事に…………あゝ、彼女は甚麼日を見るのでせう？」

俊彦は最早答へなかつた。

「喜といひ芳といひ、今度は又彼女までが、揃ひも揃つて何といふ情無い目に遭ふのでせう。」

「…………」

「宛然、呪はれて居るやうですね。然うでなければ、妾共が前世に罪を犯して其報いが落ちて來たとでも言ふのでせうか。」

「馬鹿な！」と、俊彦は一喝した「呪ひとは何か。前世の報？那樣もののあらう筈はない。」

「でも、餘りぢやございませんか。」と、禮子はつい激した。

「氣をつけなさい。然ういふ愚癡、怨言は如何なる場合といへども聞苦しいものだ。俺の妻としては決して然ういふ事を口にして貰ひたくない！」

「はい。」

「縱んば不幸は是にとゞまらず、一家一類死絶ゆるやうな事があらうとも、其れは所謂天命である。死するも生るゝも、窮るも通ずるも、人の力の及ぶところではないと思へば濟む。第一、內田の病は必ずしも不治と極つては居らんのだ。心配するのは當然だが、其爲に取亂すやうではならん。子供達の手前もあるでな。」

「はい。」

「其れで、萬一內田の家に何ういふ變が生じようとも、德は內田金吾の妻として生前死後貞節を全うしてくれゝば可い。我々が親として望むところは、其一事より外に無いのだからな。」

「然樣でございますとも！」と、禮子は顏も上げられぬ。

「うむ。其れで十分だ。」

俊彦は心着いて眼鏡を外したが、其目は赤くなつてゐた。

ダリヤ

翌日も判で捺したやうな朝靄の中に、カナカナ蟬が透徹る音で啼き立てる曉であつた。

五時に一分も違はず起出でた俊彦は、例の通り自身で門の內外を掃除して、心涼しく家へ入ると、恰度朝飯の支度の出來たところ。家內五人揃つて膳に坐つた。

今度の緣談の本人たる文子は元より、其樣子を知つてゐる芳子も、それについて兩親の口から何とか話が出るだらうと內々期してゐたが、父は何時よりも無口に、母は何時よりも愼み深く、食事を終るまで、終に那樣事は話題に上らなかつた。

俊彦は箸を置くと直ぐ居間に入り、禮子を呼んで一つ二つ留守中の用事を言ひ付けたが、旋て衣服を更へて、古風なヘルメットに握太の洋杖を突鳴らしつゝ飄然と外へ出て行つた。其あとで禮子は茶の間の片隅に籠り、大事さうに

長い手紙を書きはじめた。六一郎は玄關傍の六疊で休暇中の復習をやり出す。

芳子と文子は臺所で跡片附にかゝりながら、是は又拍子脱のした顏を見合せた。

「文さん、何をぼんやりしてゐるの？」

「妾？ いゝえ、何も……」と、文子は我に返つて「姉さんこそ默つていらつしやるわね。何だか變よ。」

「然う言へば今日は皆變ですよ。阿父樣は別として、阿母樣の樣子と云つたら、貴女氣が着かなくつて？」

「蒼い顏をしてだつたわね。」

「昨夜はまんじりとも爲さらなかつたらしく、」と、芳子は洗物を笊に揚げ「而して、頭痛の爲るのを無理に我慢してでもいらつしやるやうに！」

「何處か體でも惡いのぢやありますまいか？」

「さあ、然うかも知れないけれど。」

文子はヒヤリとした。

「然もなけりや、心配なことでも出來たのでせう。」と、彼女は自分の身の上を考へて、實際氣が氣でないらしい。

「解りませんねえ。」と、芳子は小首を傾ける。

其樣子を、文子は大事さうに打目成つてゐたが、側と冷やかな笑を浮べて、

「何うなつても構やしない。」

「え、眞實に？」と、直に頷いて「全く、然う騷ぐ程の事もないわね。」

「然うですとも。」

訊く方も、答へる方も、譃といふ字があり〳〵と額に現れてゐた。

「だけど、彼程懇望して來たのだから、先で變更したのではないに極つてゐる。家の方だつて、阿母樣は内々氣乘がしていらつしやるらしいのだけれど……」

「阿父樣のお氣に召さないのでせうよ。家ではそれが絶對のものだから。」と、文子は落膽した聲。

芳子は默つて布巾を濯ぎながら、

「左に右樣子が知りたいものですね。然うすれば餘計な心配も爲ずに濟む。」

「明日になれば解りますよ。」

「然う〳〵。又彼の人が返事を訊きに來る筈ですね。」

「それだつて何うですか。阿父樣はきつと斷りにいらつしやつたのかも知れないんですもの。」

最初は自分でも戲談らしく思つてゐたのだが、其戲談が次第々々に身に沁みて來ると、文子の心は一息毎に鋭くなつた。

「まあ、何が僥倖になるか知れないこと、又[illegible]お姉さんや妾のやうに、何ういふ羽目に不幸な身の上に落ちないとも限らない。幸も不幸も、皆其人の有つて生れた運なのでせう。此縁談は何う極るか知れないけれど、お前さんも餘り氣にかけないで、自然の成行に任せた方が可いよ。」と、芳子は溜息を吐いて「お嫁に行つた先で、幾許苦しんでも又貧しくつても爲方がないけれど、たゞ妾のやうな、斯樣……二度と兩親のお世話にならなけりや澤山よ。」

文子は反對した。

「だけど姉さん、妾は然う思ひませんね。」と、

「何うして？」

「那樣可厭な苦しい思ひをしにゆくくらゐなら妾、お嫁になんぞ適きたくないわ。」

「それは好い處に越した事はないけれどさ。」と、芳子はやゝ驚き氣味に言足した。「だけど、先方の身代なんぞは……」

文子はそれを打消すやうに颯と鬢の毛を拂つて、

「妾は富を……姉さんは二の次だと仰有るのでせうが……妾は富を望みますわ。お嫁にゆく事は女の一生の運定めです。だから無論良人か

ら愛されなければなりますまい。けれどね、其愛は強ひて求めなくとも、良人となり妻となつた以上は何時でも與へられるものよ。ところが富ばかりは然うゆきませんもの。」

「其れがお前さんの希望なの？　まあ、驚いて了つた。では、金持なら、何處へでも適く意ですか？」

「程度は有りますわ。其處には！　妾、誰でも可いとは言ひません。たゞ、富を第一の條件に爲てゐるのです。」

芳子は多少調戯の心持を交へつゝ、

「ぢやあ、念の爲に訊きますが、假に貴女が牧村さんへ行くとして……」

實際の問題に觸れると、文子は忽ち恥しさが面に現れる。

「而して……是は假定の話ですが……牧村といふ人がお前さんを愛して呉れないとしたら何うします？」

「それこそ不運とも、不幸とも言ふのでせう。けれど、那樣事はありますまい。愛さない位なら、妾に爲る譯もないのですもの！」

「おやおや。然うなるとお前さんの考へはお手輕ね。」

「何故？」

「まあ、其邊でせうさ。お前さんは姉妹中でも一番利巧者だが、未だ世の中を知らないから……」

文子は意地にかゝつて、

「何でも可ござんす。妾は財産の澤山ある家へ適つて、自分の思ふ通りに贅澤がしてみたい。父母の家を離れゝば、今度は自分の世界ですもの。何うせ一生のうちに一度しか咲かない花なら、」と、背戸の花畑に咲誇つたダリヤの花を眺めつゝ「彼のダリヤ……のやうに、思ふさま華やかな世を送りたいのです。畑の隅に生えた螢草の、是も花かと見られるやうな、はかない生活をしたくはない。」

「えらい御權式ね。何うせ妾なんぞは螢草かあかのまんま（犬蓼）位なものでせうよ。」と、芳子は餘り快い氣持もしずに立上つた。

「あら姉さん、妾、貴女に當てつけて言つたのぢやないんですよ。」

「然うでせうとも、妾は當てつけられるだけの價値もない人間ですもの。」

二人は臺所を切りあげて、バタバタと茶の間の方へ來ると、恰度禮子が書き終つた手紙を持ち、誰に投函させようかと考へてゐたところ。

「姦しいぢやありませんか。何だか知らないけれど――」

二人は默つて顏を見合せた。

「何時まで經つても子供見たやうに……最早姉妹喧嘩も大概になさいな。」と、禮子は笑ひながら言つたが、其目には慈愛が溢れてゐた。「而して自分から子供扱ひに――姉妹は仲よくするものですよ。此先々も好い事につけ、惡いにつけ、お互に力になり合つて貰はなければならないから。」

「母樣、其お手紙を出して來ませう。」と、文子が照れ隱しに言出す。

三人の目は内田徳子樣としてある手紙の上に落ちた。と共に、一人遠くへ懸離れて、文にのみ心を通はす其徳子は今頃何うしてゐるだらうと思つて、禮子がフッと涙含んだのを、譯を知らぬ姉妹は訝しさうに見た。

「母樣、出して來ませう。」

「いゝよ。妾が入れに行きます。」

芳子も文子も又顏を見合せ、何かは知らず不安な思ひを抱いた。

禮子は慌てて涙をかくしつゝ、急足に玄關の方へ出たが、其時門を啓けて入つて來た者の姿を見つけ、

「おや……」と、其處へ立止る。

其姿は長女の壽子であつた。

壽子は今年二十八で、六歳になる女の子まであるのだが、同胞のうちでは柄が小さい方だから、次の妹の芳子より若く見えた。

けれど、子供の時分から至つて無口の方で、大抵の事は胸一つに疊込んで置く性。親切で涙脆くて、しかも父に似て意志は強く、時には隨分思切つた事も爲る。其れと、年の順に一番多く苦勞して來たので、自然總ての點から他の者とはかけ離れた立場に居るのだ。

彼女は茶の間に入つて、母の口から今度の縁談を説明された。

「其れは結構なお話ね。而して思つたよりも大層捗く進んだぢやありませんか。」

禮子は一寸口許を拭いて、

「先方から困る程ヤイ〳〵急立てるのでね。」

「善は急げと言ひますから、其方が可いのでせう。」

「だが、此方にして見れば、然う右から左へ返辭をする事も能きないので、阿父樣も今お考へ中なのです、」

壽子は深く頷いた。

「それで、阿父樣はお前さんの考へも聞きたいと仰有るのですよ。」

「妾の？　何故です。」

「お前さんばかりぢやない。皆の意見を知りたいと仰有るのです。」と、禮子は靜かに言つた。

「意見……」と、壽子は益す訝しさうに「妾なんぞ別に意見がましい事はありません。本人を初め、誰も阿父樣の思召に背く者はない筈ぢやありませんか？」

「然う。妾も其事を申上げたのだけれどね、今度に限つてはお前さん方の考慮も問うた上にしたいと……尤も御自身のお心は極つてゐるのだらうけれど、何しろ今度は四人目でもあるし。」

四人目といふ言が、壽子の胸には強く響いた。自分以下揃ひも揃つて、何れも初吉、後凶で、今も母の話によれば、德子も仍且同じ運命に落ちて行きさうである。其れを思ふと、壽子は不吉な想像とは知りながら、此四人目も何うやら末が案じられる。

此處へ適け、彼處へ嫁げと、父は部下の一兵卒を配る流儀で、其娘達を他家に嫁入らした。而して其處に投込まれた自分達は、果物の種子が自然と根を下し、芽を吹き、やがて一本の木になるやうな順序で、各自其位置に安んじて來た。日當りの好い場所も惡い場所もあつたけれど、左に右何れも成長した。が、それが世間並になると、或者は根を掘起され、或者は幹を切られ、一つとして滿足に行つたものはなかつた。

其れは元より誰の罪でもない。是こそ抗ふべからざる運命の力であるとはいふ條、再々斯樣事を繰返した擧句には、有繫の父も其事について知らず〳〵怖氣ついて來られたのかと思へば、壽子は自分の不運を悲しむより先に、寧ろ心に同情した。

「文子に何う申すのでせう？」

「本人は、何うとも兩親の心次第といふのだよ。」

「然うですか。」

「併し、芳の話では、文も内々望んでゐるらしいのでね。」

「望んでゐるのですつて？」

「惡く取つては可けませんよ。先方は誠に熱心なのだから、つい乘氣にもなるのですよ。」と、禮子は眞面目に言つた。

「先方は財産家なのですつて？」

「然ういふ話です。仲人口は當にならないが、阿父樣が査べていらしつた處でも吹聽と條り

違ひがないやうです。其上、氏も良し、其人の性質も難はないと仰有るがね。」

「では毫も缺けた處はないぢやありませんか。」

「お前さんも同意ですね。」

「はい。」と答へたが、壽子は少し聲を祕めて「けれど、妾一つ心配なのは、先方の身代が好過ぎるのは何うかと思ひますの……」

「其れは最初から誰しも考へたのですよ。身分では劣は取らない意だが、何に爲よ、知つての通りの生活で、大した餘裕の有るぢやなし、支度だつて思ふやうには出來ないのでね。釣合が取れぬのは雙方の不爲だからとは再々斷つたのだけれど、先方では……決して其心配に及ばない、體一つを貰ふのだから……と達て賴むのですよ。何れ極めるとしてからが、其事は十分に念を押さなけりやなりますまい。」

常に口數をきかぬ母が、斯うまで熱心に語るところを以ても、其所思は察しられる。

壽子は思切つて、

「妾はたゞ其れだけです。外に意見がましい事はございません

「能く解りました」と、壽子は珍しく活々したが、偶と溜息を吐いて「お前さん初め一人々々に、何れを何うと優劣をつけたくはないが、是も其時の運でね、自然と斯樣事にもなるのです。」

文子一人が……と僻まれまい爲に、禮子は辯解がましい事まで言つた。

「何を仰有るのです。」と、壽子は氣の毒さについ笑つた「解つてゐるぢやございませんか。」

「然うだらうが、妾は愚癡だからね、皆に濟まないやうな氣もします。」

「まあ、勿體ない事を！ 誰も那樣考へを持つては居りません。それよりも、姊妹のうちで誰か一人が幸福な身になつてくれたら、其れが互人の誇です

「然う言へば然うだけれど……」

「甚麽に出世しようと、落目にならうと、妾共は矢張眞實の姊妹なのですもの。而して阿父樣や阿母樣が、何時までも壯健でゐて下されば、それに越した幸福は無いと思ひます。」

禮子は無言で頷いた。

晴着

文子の縁談はバタ〳〵と取極つた。

結納は翌月の初旬に濟んで、式は九月に入つてからと豫定された。

支度には構はぬといふ約束であるが、其れでも相應の支度はある。一個の物を調へるにも十の心配が其れに伴ふ。一人前の娘を持つた以上は、眞逆に着のみ着のまゝでは置かなかつたが、いざとなれば夏冬の衣類やら、髮飾やら、是までのは一切役に立たぬ物ばかり。壽子の物から、芳子の分まで、今は不用の品を徵發して、當日の調度は何うか斯うか揃つたけれど、其れにしても支離滅裂なものであつた。

「斯樣物なら無い方が可いわ。」と、文子は或時泌々溢した、

禮子は聞えぬ風で裁縫の手を動かす。

「あゝ、妾滿らない。」

文子は目の前に重ねた夏の紋附を見詰めてゐたが、

「眞實に是だけなのですか？」

「然うですよ。」

「其れぢや簞笥の中は全部不常の物ばかりですね？」

「曠着は稀に用ゐるもの。不常着の少いのこそ却つて見苦しいものですよ。」

文子は何も言はずに嘆息した。

「是がもう二月も先へ寄つてたと、壽や芳の紋附も間に合つて誠に都合が好いのだけれど、九月では未た夏支度たからね。」

「間に合つたところで、六年も八年も前に拵へた物では、却つて恥を掻きますわ。」
「其れも然うだね。」と、母親は何事にも逆はなかつた。
「村越の姉さんの時は、妾未だ稚くつて能くは知らなかつたのですが、黒川の姉さんだつて、徳子さんだつて、もつと支度は有りましたね。」
「然う……でもなかつたよ。」
「いゝえ、妾知つてます。徳子さんの色變りの裾模樣は菊に水だつたわ。黒の方は何にしようかつて散々相談して、とう〳〵雪持笹に硃砂根の……あれに極めたぢやありませんか。」
「あれは芳の時だよ。」
「違ひますよ。黒川の姉さんの時は、小松に福壽草で、もう一つが百合の花でしたよ。借りて來ませうか？」
「何有、それには及びません。」と、禮子は明るい方へ身動きをした。
「帶だつて好かつたわ。」
「だから、其物が有つたら今度の役に立つのだけれど、合津に居た時分、他に讓つて了つたといふから詮方がない……」
「困つたからなんですね。」と、文子は口惜しさうに言つたが「けれど皆は全然新調でしたのに、妾ばかりは新しいのが少許で、大概はお下りの寄せ集めなのですもの。」
禮子も其れが可哀さうだと思つてはゐるが、さて是ばかりは自分の考へ通りにならぬ。と、心の悶に手も戰いて、針の針眼さへ分かぬまで、彼女は幾度か絲の先を嚙んだ。
「滿らないわねえ。妾だけは何にも無いのですもの……」と、文子は涙ぐんだ。
「それはお前の言ふまでもなく、妾も是だけではと思つてゐるから、機を見て阿父樣にお話をしてみます。」
「阿父樣は斯ういふことには冷淡過ぎるのですね。」
「それは男だもの、細しい事までお解りにはならない筈さ。可いよ。妾から能く御相談もしてみようから。」
文子は漸く納得した。
其れから二日程經つたが、一向何の沙汰も無い。無い位なら先づ望が有ると、文子は内心樂觀してゐたものの、未だ氣になつて堪らぬので、
「母樣、彼の事は何うなつたのです？」
禮子も切なさうに、
「其れはね、阿父樣にお話をしたら、考へて置くと仰有つたぎり、未だ何とも御返事が無い……」
「其うちに、間に合はなくなつちやありませんか。」と、文子は怫然として、其後は又泣顏をする。
泣いても、慍くつても、可厭味を並べても、母親は困つた樣子を見せるのみ、更に要領を得ないので、文子も終には根負けして引退つた。

＊　＊　＊　＊

偶と客間の方で自分を呼ぶ父の聲がするので、文子は何の氣もなく用を聞きに行くと、鰹節や眞綿の祝物を並べた床の間を背後に、俊彥は例の如く端坐してゐたが、
「文か、此方へ來なさい。」
「はい。」
「此處へ……」
と、煙管を措いて指す方へ、文子は少しばかり躙寄つた。
「些と用談が有るのだ、今度の事に就いてな。」
箸の轉んだも氣にかゝる此頃、別けても文子は直に色を失つた。
「いや、別に心配する事ではない。たゞ追々結婚の日取も近いたについて、忘れぬうちに今後の心得を話して置きたいと思ふ。」
「はい。」と、文子は初めて心を安んじた。

「今日は八月二十日、最早剩すところは半月程だな。」

俊彦は其れが樂しいやうな、氣遣はしいやうな樣子で、

「半月といへばもう直だ。」

文子は何となく息が詰つた

「此處まで來るも容易でないが、是から先も忙しいぞ。」と、珍しく笑つて「併しお前よりも氣忙しないのは禮子だ。其れは知つて居るだらうな」

「はい。」

「お前は、彼の心配、奔走、夜を日に繼いで働いて居なさる處を見て、何と思ふか？」

「有難い事だと思つて居ります。」

「其れだけか？」

「……勿體ないと存じます。」

「最も然うあるべきだ、が、單に感謝するばかりでは濟まんぞ。私は然う思ふ。餘人に對しては言へぬ事だが、俺は彼の樣を見ると、内心實に氣の毒だと感ずる」

文子は俯いたまゝ、首を傾けた。

「親として子の爲に、如何な事をするかは當然の義務である。鳥獸すら子を育む術は知つて居るから、何も取立てゝ言ふ程の事も無い……と言へば其れまでだ。併し、子としては其れでは濟まん。唯口で有難い、勿體ないといふばかりでは濟まんぞ。其れだけの事を心に容れて、何時までも忘れんやうに爲なけりやならん。お前もやがて人の母となり、娘を持つ身になつて、又其娘を他所へやる時が來たら、初めて母たるものゝ、彼の苦しい心の中が解るだらう。富めるにつけ、貧しきにつけ、子を思ふ心に變りはない。」

言葉は低く和しかつたが、其儼然たる態度を仰ぐと、文子は自づと身が竦んだ。

「俺としても亦、お前の爲に自分の妻たる者に對して、實に氣の毒に堪へんのだ。十分の餘財があつたら、綺羅を飾るまでの事は爲ずとも、せめて今の三倍五倍の支度もしてやりたいのだが、其力の無いが爲に、女親に是程の憂目を見せる。其れは俺の罪だ」

「……………」

「併し、是でも俺は出來るだけの事をして居るので、決して是以上を盡さぬのぢやない、盡せぬのだ。又是は負惜みでも、自慢でもないが……お前を牧村氏へやるについては、是でも俺は自分としての面目を傷けて居らぬ積だ。破れたりとも鎧一領、痩せたりといへども馬一匹、女として其れだけの支度は爲してある。又不束ながら萬一の場合に、主人の代筆の手紙位は書き得るだけの教育もしてある。是が私の誇だと言うては甚だ口廣いが、實は其れだけの役に立つものと信じて、お前を牧村へ差出すのだ。因でなあ、お前も其覺悟をもつて、形の貧しきを償ふに心の富をもつてしてくれ。」

「はい。」と、文子は膝に置く手を疊へ突いた。

「解つたか？」

「能く、解りました。」

「然うか、其れで可い。お前を手許から他になすに就いて、言ふべき事は是だけだ。あとはお前を信じて居るから、今更何も申附けぬ。其れで可いから退んなさい。」

「はい。」と、立たうとすると、

「夢にも母の志を忘れるなよ。」

新婚旅行

殘る暑さの人には辛い頃ではあるが、今年はいつもより暑氣が涼やかに、九月中旬の朝夕はそろ〳〵袷も欲しい位であつた。

大阪からの夜汽車で、奈良の「武藏野」といふ旅館へ着いた一組の夫婦客は、眼差も物言ひも、東の人と見えて、男は三十そこ〳〵の、丈の高い、何處となくおつとりとした人柄、女の方

は漸く二十一二で、容貌は目の覺める程美しい中に屹とした氣品を保ち、惡く言へば多少思ひあがつた擧止の無いではないが、又何處やらに初々しい様子も見えるのを、物馴れた旅館の女中共は、新婚旅行の人達だと直に感づいた。

それは牧村欣一と其新妻の文子であつた。此月の六日に東京を立つて、京都に五日餘り、大阪には三日、それから須磨明石といふ豫定もしてゐたのだが、雨の爲に思ひの外日數を費したので、一先切揚げて歸る事に取極め、其次手に此處へ寄道したのである。

朝の食事が濟むと、欣一は跡片附を爲る女中を呼留めて、

「私達は今の中に、一寸春日様まで行つて來るからね。」

「それでは、彼の御案内を……」

「否々、案内は能く知つてゐるよ。構はんでも可い。」

「然樣でござりますか。」

「二人限の方が勝手だからね。」と、欣一は自分から冗談を言つて、其癖赤くなつた。

「大きに。」と、女中は輕く笑つて「隨分仲善うお越しやす。」

文子は極り惡さうに俯いたまゝ、良人の後に附いて庭口から外へ出たが、其れと見て口々に送出す女中達の聲も、嬲られるやうに耳に響いた。

狹い道へ出ると、欣一は直に立止つて、

「おい、見ないか。是が三笠山だよ。」

目の前に然のみは高からず、素直に堆い山の姿を、文子は珍しさうに見上げた。

「まるで腰高饅頭のやうぢやないか。」

「然うですわね。」と、微笑んで「是なら譯無く登れさうですのね。」

「登れるとも! だが、僕はやつても見ないおね。」と、背後を指さし「彼方へ行くと名高い二月堂、三月堂があるのだよ。まあ其方は後にして、是から春日神社へ參詣しよう。」

右手へ迂廻してだら〳〵降りの逕を行くと、杉の古木に蟬の聲が遠く、しつとりした其邊りに、未だ朝霧も殘つてゐる。

「昨夜來た時は暗いので少しも解りませんでしたが、隨分山の中ですことね。」

「いや、是でも大昔の都なのだから、日光や箱根とは違ふさ。」

「あら! 貴方、鹿が……」

「有名な春日の神鹿だよ。それ其處にも立つてゐる」

文子は驚きの目を睜つた。

「貴方、何うもしませんかしら?」

「人に馴れて餌を欲しがる位だもの、決して害は加へないよ。可愛いぢやないか、彼の眼を御覽。東京の中でもこんな美しい眼を有つてゐるのは少いね。野獸らしいけれど、古代の素朴な、優美な、善い性質を遺憾なく現してゐる。」

「然うですわね。」と、文子は嬉しげに頷いて「彼處に居るのは子なのでせうか?」

「然うだ。」

此神苑の鹿の數が誰にも解らぬ事や、昔何某といふ者が偶とした過失で鹿を殺した爲に石子詰の刑に處せられた事や、毎年一度角切の行事がある事を欣一は細かに話して聞かせた。如斯人氣の少い清淨な場所で、唯二人打解けて語るといふ事は、欣一に取つて限無い愉快であつた。

文子は最初の中唯恐ろしいやうな、うら悲しいやうな氣分から何うしても離れる事が能きなかつたが、其れも次第に薄らぐと、今度は周圍の者に對しての恥しさが主となつて、時には其爲に一切の事を食盡されるやうな感じがした。京都の五日も、大阪の三日も、常に其重苦しさに惱まされて、或時は樂しかるべき物見遊山

が屠所の羊の歩であつた。又或時は偶とした拍から、父母や姉妹の事を思出して、得も言はれぬ淋しい思ひに閉ぢられると、場所も嫌はず涙が湧出てて、自分ながら制し切れぬ事さへあつた

是から先、自分の便るべき、一生の苦樂を俱にすべきは、此人ひとりと思ふにつけ、一種の果敢なさが、いつも心の底に沈む。それは良人たる欧一について不足を見出した譯ではないので、彼女は生れて二十一年の後、初めて父母の手から離れた心細さと、新に一身を託すべき良人の性質が未だ十分に會得されなかつたが爲である。

東京へ歸つたら、今迄は全然知らなんだ他の家――自分とは何の關係が無かつた人々が、綿々から子、子から孫へと、代々の家風に培うた――に入つて、而して重い荷を負はねばならぬ、と考へると、其れも苦勞の一つであつた。

生れた家に、父母の膝下に居た頃は、行末の事に就いて種々の希望も有つてゐたし、將來自分のつくるべき新しい世界に對して、彼女は相應の抱負もあつた 況して良人へ嫁ぐ事は何よりも樂しみにしてゐたのだが、それも是も今は粉微塵に碎けて、唯取とまりのない夢を見てゐるやうな氣がする。

婚禮の支度が出來た時、母は前から、二人の姉は背後から、見上げ見下す其樣子には、賴もしさうな心配さうな、其上にく名殘惜しさうな色が歷然と浮んでゐた。其れまでは煩い程彼の是のと指圖をした人々が言合せた如く無口になつて、其癖自分の一舉一動にばかり注意してゐるらしい。何かの折に悲しい事を言ひ出すと、皆は待構へてでもゐたやうに涙を流した。平常沈着な父さへ何か室を出つ入りつ、幾度となく樣子を見に來たが、午餐の時にも怱々に箸を置いて、

「何うした事かな。時刻の來るのが非常に遲いやうな氣が爲る」

「お年をめしたので、氣短かになりなすつたのでせう」と、一番上の姉が言つた。

「然うだらう。併し、今度家に出るといふ際でも、他に是程嬉しい事がなかつた。但し年齢の所爲だらう」

珍しい大聲で笑つた、其光景を、食慾も無い文子は熱と眺めてゐた時の氣持……

然ういふ斷々の思出が、常に文子に附纏ふて、それが堪へ難い感情をなした

欧一は良人としての威嚴も其方退けで、能く面倒を見てくれたが、文子は人馴れぬ小鳥の、影にも驚いて飛騷ぐのと同じに、話しかけられてさへ直に顔色を變へたのだ。

其れが今といふ今、此奈日の境内で、静かな初秋の氣と、四邊の光景と、話の興味と、何時も彼も一つ穏かさに溶け合ふと、文子の心には唯悲しい情のみ、悲哀に満ち吹掃はれるやうに、種々の思ひは自づと消失せた。

途中で澤山買込んだ糠煎餅を半分々々にして、寄來る鹿に與へながら、二人は仲よく〳〵路を歩んだ。

「貴方、最早無くなつて了ひましたわ。又買ひませうか？」

「最早お廢しよ、限りがないから。」と、欧一は手布で手を拭き「然う〳〵、此にばかり氣が取られて忘れて了つた、今迄そこに來た彼方から先お茶日、東北とか京などと云つて、和歌にも盛んに詠まれた鹿さ、東京か……鹿も聞れり夜も聞れりと言つたのは、此のあたりの事ぢやなかつたかしら？」

「然うでせうか」と、文子は何時頃新に傾いた。

苔蒸した石段を登ると、欧一は作意、態を明いて、

「此處がお宮だ

見上ぐれば、數々の石燈籠の隙間から、丹塗の玉垣や社殿がクッキリ現れて、其れが鬱蒼たる老杉の中に、言ふ方もなく寂びた感じを起させる。
「まあ、何といふ神々しい處でせう！」と、文子は洋傘を疊んで四邊を見廻した。
「外には無いね。僕は此廻廊の金燈籠も石の燈籠も、見る度毎に欲しいと思ふ。神前で那樣考慮を起したら罰が中るか知れんけれど……」と、欣一は笑つた。
旋て二人は社殿の裏手に出たが、欣一は思出したやうに、
「文さん、お前は今何を祈念してゐたのだい？」
「別に……」
「だつて、何か願つて居たのだらう？」
「えゝ、其れは然うですけれど。」
「何だか話したら可いぢやないか。神樣に願ふ位だもの、別に隱すには及ばん筈だ。」
文子は唯微笑んだ。
「當ててみようかね？」
「えゝ。」
「自分の事か。」
「其れも……ですけれど、未だ他にも大切の事がありますわ。」
「他にも……」と、首を捻つて「はて、何だらう？」
「中らなくつて？　其れぢや貴方は何をお願ひなすつたのです？」
「僕かい。僕は大して慾張りもしなかつたね。うまい物が食べられますやうにと……其位なものだ。」
「まあ……」
夫婦は笑顔を見合した。最早歸ると極めた爲か、其れとも漸く馴れた爲か、二人限といふ可懷しさの身に沁みた爲か、一歩づつに心が近いて、極りの惡い感じの底から、美しい互の眞心が流露する。
「だが、季節も徐々好くなつたし……何時までも斯うして二人で旅行してゐたいね。お前は然う思はないかい？」
「其れも可うございますけれど、妾は一日も疾く家へ參りたうございますわ。」
「家へ行くと、旅行してゐる程呑氣では居られんよ。」
「でも、妾には家が一番樂しいのですもの。貴方の爲に、是から一生働く處だと思ひますと、一日でも明けてゐるのが惜しくつてなりませんわ！」
欣一は其言葉を世にも嬉しく聞いた。今迄は左[illegible]に、唯一事に[illegible]へとつてゐたが、後に[illegible]思つてゐた欣一[illegible]、明けてくれたのが[illegible]でもしたやうに[illegible]もしかつた。
「それで僕も安心した。手紙でも出して置けば何時まで遊んでゐても構はんとは言ふものゝ、然う〳〵留守にしても置けないから。」
「まつたくですわ。」
「ぢや斯うしよう、是から一度宿へ歸つて、ちよつと俥で一わたり見物して、午後の汽車に乘るとしよう。而して、名古屋から急行に乘換へると、明日の朝には東京へ着くのだ。」
「えゝ、妾最早他は見ないでも可うございますわ。」
「那樣に急くには及ばんよ。後の記念にもなるから、成るべく方々見て置くが可い。」
「此處は何時までも忘れられない處ですわねえ。」
と、文子は振返つて社殿を眺めた。杉の梢を漏れ來る朝日が、淡く其横顏を照して、ほんのりと赤らむ目もとの活々したのを、欣一は又可懷しく打目戍つた。
古い社の門の上には、雪の如く潔な白鳩が二三羽睦しい聲で鳴交してゐた

牧村家

牧村は下谷練塀町に古い居つき地主で、家作も大小合せて三十餘り、其爲に差配人を置く程の身上である。

戸主の欣一は今年三十一、私立大學の理財科を三年まで修めたが、卒業間際に頭を惡くしたので、其れぎり學校を退き、其後はたゞ自分の好むところを氣樂に研究する事にした。尤も牧村の戸主としては其れで少しも差支ふる事はないので、却つて此まゝで居てくれた方が家の爲になるのであつた。

家族は母の庸子に妹の今子ぎり、先代の主人は二十年前に世を去つたので、兄妹は母の手一つに人と成つたも同様である。

女の手で二十年來、家の柱と立つて居ただけの事はあつて、姑は昔氣質の氣丈な性だが、それで居て慈悲深く、誠に萬事に行屆いた人。

又小姑の今子は今年二十六だが、氣の毒な事には七歳の年から跛になつて、今に及ぶも良緣が無い。尤も兄親の情で一生食へるだけの事は身につけてあるのだけれど、母親にしてみれば、たつた一人の……殊に不具な……娘を、持參金の光で强ひて他處へやりたくもない、本人も兄の嫁でも極るまでは何處へも適きたくないといふので、自然此年まで一緒に暮してゐる。

但し是は早晩嫁にやらぬまでも、年を取るなり或は獨身で濟すなり、何れ別居する事に相談がついてゐる。といふのが、抑も文子の緣の纒まる前媒酌人が眞壁へ來ての話であつた。

其今子が、今しも壁から襖へと蝙蝠のやうに傳うて、母の居間へ入つて來た。

「お母様、未だお寢みにならないのですか？」

「おや！」と、庸子は其方を見上げて「寢ようと思つたのだけれど、何だか目が冴えて來たから……」

「でも、頭痛が爲さるといふのに、無理をしては可けませんよ。」

「何有、心配する程の事はないのさ。」と、庸子は徐に長煙管を取りあげた。

五十七八の痩せた婦人で、少し縮れた毛を小さな丸髷に結つてゐる。物言は落着いて、一句一句キッパリと耳立つ程。娘の今子も顏立は母に生寫しであるが、體格は小さい方で、色光澤の惡い所爲か、一寸人を見る目にも、何うやら氣味の惡い光がある。

「それは然うと、兄様は何う なすつたのでせう？」

「さあ、其事も氣に懸るのだよ。途中で病氣にでもなられると、附いてゐる者は樣子も知らないし、嘸困る事だらうと思つてね。」

「まさか、そんな事もありますまい……若し然うだつたら電報でもかゝるわ。」

「其電報でも來たら何うしようと思つてさ。」

今子は嘲るやうに笑つて、

「まあ、お母様は何時も然ういふ取越苦勞ばかり爲さるのね。妾は其れよりも、兄様が餘り呑氣過ぎると思つてゐる位だわ。」

庸子は何も言はなかつたが、旋て火の消えた煙管をコチ／＼叩きながら、

「好いにつけ、惡いにつけ、親の身になると心配の絶えた例は無いよ。」

「然うですわね。」

「お前達も今に思當るに違無い。」

「妾は何うせ親になりはしない。求めて苦勞をするなんて、那樣事は眞平です。」

餘り眞面目に言ふので、今度は庸子が微笑んだ。

「其代り又、樂しみも其中にあるのさ。」

「左にも右にも、妾は自分一人で澤山よ。」

「若い中は其氣で居ても、年を取ると心細くなります。まあ、此次はお前の番だが、妾には大

抵考へもついてるのさ。」
「否、お母樣！　妾の事なんか捨てて置いて下さい。」と、今子は忌々して「妾は一生お母樣の傍に居れば可いのです。」
「それは妾だつて置きたいけれど、然うも亦行きませんわね。家の爲にだつて……」
「家の爲?!」と、今子の眼は怪しく輝いたが「家の爲に邪魔になるんですか？」
「又！　お前は直に那樣事を言ふよ。然うではないが……」
「邪魔になるなら追出したが可いわ。妾杖さへあれば一人歩行も能きるんですから。」
庸子は人知れず眉を顰めた。
其時女中が入つて來て、
「電報でございます。」
「え？」
庸子は驚いて直樣封を切つたが、聽てやれやれと言はぬばかり。心靜かに讀直すのを、今子は冷然と眺めてゐたが、
「お母樣。兄樣は何時歸るんです？」
「明日の朝八時に着くとさ。」

花壇

十一月に入つた。
四人の家族に女中二人置いて、牧村の家は萬事富貴に暮してゐる。文子は其一人とて一日一日と居馴染むにつけ、今迄に覺えぬ暢りとした氣持を續けた。
一定の職務とてはもたぬ主人の欣一は、朝も遲く起出でて、湯に入るやら頭髮を搔きつけるやら、女のやうにしいいなくなしに半日を潰し、午後からは茶の間に來て無駄話に短い日を暮す事もあれば、用の無いのに出歩き、遊草臥れて歸る事もある。以前は晝も夜も大方は家に居なかつたものだが、此頃は外出が稀になつたと母親は其れをしも嫁の手柄のやうに言ふが、と言つて、家に居なければならぬ程の用事をもたぬ身の上であるから、何方にしても同じ事だと、文子は心私に可笑しく思ふのである。
實際欣一は珍しい位仕事の無い主人で、生活向は母任せ、外の事は差配人任せ、其れでゐて好きな物を食べて、好きな程小遣を使つて、好勝手に寢たり起きたりして、唯月日の移り行くのを見て暮すのだ。
「實際、貴方は氣樂ですね。」と、文子は或時偶と感じたまゝを言つた。
其れは欣一と二人限で、庭の菊を眺めてゐる時であつた。薄い霜は疾く消えて午近い日ざしのほか〳〵と、不老門と名付けた大輪の花が、目覺しく咲誇つてゐる其前で。
「うむ、氣樂だよ。」と、欣一は例の如く苦笑しながら答へた「だから人間が此通り呑氣なのさ。」
「然うではないのですよ。妾那樣事を言つたんぢやありませんの。」
「併し、境遇が氣樂だと、人は其れだけ呑氣に見えるものだ。見えるのぢやない、たしかに馬鹿になるのだ。僕だつて自分が働いて食はねばならん境遇に置かれたら、もつと鋭い引締つた人間になるのだが、力も智慧も當分は必要が無いのだからね。」
「必要がなくつても、有るものなら何日何處かに藏はれてあるのですわ。」と、文子は横目で其方を見た。宛も頼もしいと言はぬばかりに。
「まさか有つて生れただけの物は減らしはしまい。だが財產の殖える割には智慧は增さんものだと見えるね。」
「其代り年齡と共に殖えますわ。」
「而して結局は又老けて了ふんだ。」と、欣一は莨を捨てたが—だから、餘り老けん中に僕も自分としての仕事を爲たいと考へてゐる。何にしろ人間一度は自分の時代を造らなければならん

のだ、恰度文さんが花嫁となつたやうに……」
「其れが妾の時代なら、貴方だつて時代をおつくりになつたぢやありませんか？」
「何の時代さ？」
「貴方だつて、花聟でせう。」と、文子は美しく含羞んだ。
「成程其れも然うかな けれど……其れぢや僕二人の時代だ それは文さんだつて望むものだらう？」
「……………」
「何うだい。」と、覗き込む。
「妾は何うでも可いのですけれど。」
「心細い事を言ふね。」
文子は長閑に手巾を弄りながら、
「妾の望はね、何時までも何時までも此まゝで居たいのです。何時までも貴方が愛して下されば、其れより外に望む事はありません。」
「はゝあ。」と言つて、欣一は何だか擽痒いやうな顔をした。
「貴方其れを受合つて下すつて？」
「お易い御用だ。えゝ受合ひますとも。」
「眞實ですか？」と、俄に眞面目になる。
「其りや指切りでも、誓文でも、何でもするよ。あゝ。」
「誓文は疾に済んでゐますから、今更那様蒔直しなんかして頂かないでも可うございます。」
「ぢやあ、今更念を押すにも及ばない譯だ。」と、欣一は笑つて、菊の香に嗅寄つた。
「でも、何だか氣になりますから。」
「信用がないんだね。おや／＼、今から其鹽梅ぢや情無い次第だ。まあ可いさ、其うちには追々解つて來ます。だが、僕はたゞ一つ心配な事があるね。」
「何です。」と、文子は喫驚する。
「お前は徐々飽いて來やしないか？」
「まあ……」
「いや、僕に……おやないよ。其處は多少の自惚があるから、僕は未だ飽かれたとは思はないが、此生活が……文さんは今氣樂だと言つたが、其氣樂程人を飽きさせるものはない。僕は長い間、此中で生長したんだから、今では左程にも思はんが、不意に此溜水の中へ飛込んだ文さんは、きつと飽きて來やしないかと思ふ。」
「大丈夫ですわ。」
「それぢや、飽きないまでも淋しくなりは為ないかしら？」
文子は頭を掉つた。
「眞實かい？」
「えゝ、指切りでも為ますわ。」
「口眞似か。」と、欣一は高く笑つたが、其拍子に枝折戸の方を見て「あゝ阿母さんが來た。」
文子はハッとして振向いたが、直に小走りに其方へ行つた。
「おや、此處に居たの？」と、姑の常子は遠くから聲を掛け「可ござんすよ。今何うせ其處へ行くのですから。」
何かといふ中に文子は其傍に近いた。
「御用でもございましたのですか？」
「然うではないの。たゞ欣一にね……別に急ぐ事でもありませんよ。」と、四邊を見廻し「あゝ、好いお天氣ぢやありませんか。小春日和といふのですね。」
「日向に居りますと、逆上せる位でございますよ。」
「然うとも、年寄でさへ内に引込んでは居られない。」
小高い徑を越えると、竹の腰かけを並べた茶の前に出た。
欣一は二三歩出迎へて、
「阿母樣、能く咲いたぢやありませんか。」
「左樣さ。」と、しげ／＼眺めて「今年は格別花の出來が好いやうだね。」

「植木屋も然う言つてゐました。」
「他所様の事は知らないが、家のは去年よりも一段の出來榮ですよ。其家に慶事があると、花や實物は皆盛ると言ひますが、全く其通りだね　是は皆文さんの來たお慶びですよ。無心の草木も祝心を見せたのです。」
文子は恥しさに堪へぬらしく俯いた。
「阿母さんは直に附會けるんだから。」
「え？」と、聊か驚いて「何を言ふんだね。附會けるなぞと……」
「惡い事ではないが、併し然う極つたものでもない」
「否、たしかに然うだよ。」
欣一も極りの惡さに雜返して見たが、餘り立入るべき問題でもないので、其まゝ口を噤んで了つた。
「其れは然うと、折角是程に出來たものだから、少しは他にお見せ申すのも好いぢやないか？」
「賛成ですね。」
「先づ第一に文さん、お生家の御兩親や、同胞衆に、度來て御覽下さるやうに、お前さんから手紙でも差上げたら可いでせう。」
「はゝ、有難う存じます。」
「却つて御迷惑かは知れないが、恰度好い機でもあるし。」
「はい。」
「其れが可からうぢやないか。ねえ欣一、お前からもお勸めなさい。」
「無論賛成です。が、手紙で言うてやるよりも、屑我々が出かけませう。」
「然う／＼。其れなら猶可い。遠い處ではなしね。」と、頷いて「今日は幸ひ天氣も可いから、文さん、お前さんも連立つて行つたが可いでせう。」
「妾は、參りませんでも宜敷うございます。」
「おや、體でも惡いのかね？」
「然うではないのですけれど……、先日も參つたばかりですし、餘り再々では父が叱言を申しますので。」
「成程ね。阿父樣はお固いから、女が餘り出歩くのをお叱りなさる。其りや御尤もですよ。まつたくね、昔者の目から見ると、近頃の若い人のやうに、お湯に行くのでも夫婦連立つて、それでお前さん、八百屋で一山若干の蜜柑を買ふのでも、店の前で麗々しく御夫婦で相談が始まる。お歸途には奥樣が日傘をさしてシャナラシャナラとお歩きなさる後から、旦那樣はお魚の切身を竹の皮へ包んだのをぶら下げて、ヨチヨチ跟いてござる。何程お仲の好い宜敷いと言つても、彼れでは何うも體裁の惡い事で、昔者の目から見ると、眞實に苦々しい限りですよ。何……其れが必ず然うしなければならない譯でもなからうが、平常の行狀が癖になつて、終には極りが惡いといふ考へも無くなる。夫婦が睦じいのは結構だが、何も其れを人前に見せびらかさないでも好い譯さね。戸外の用は男が足すもの、女は内を護るもの、其區別が肝心ですよ。お生家の阿父さまなども然ういふ事は喧しく仰有ると見える。至極御同意ですよ。」
「併し生家へ行くのと緣日を散歩するのは違ふ。」と、欣一は可厭な顏をした。
「違ふにしても、其れが今云つた習慣性となる理でね。何にしても文さんは彼樣いふのだから、今日はお前一人で伺つたが可い。何も文さんの後へついて行かなければお生家の敷居が跨げんといふ程の意氣地無しではあるまい」
欣一は苦笑ひをして、少時は花の方を見詰めてゐたが、
「では御說に隨ひませう。」
「惡い事は言ひません。ねえ文さん！」
文子は唯會釋したばかり。
「明日でも、皆樣が揃つてお客に來て下されば、

其時甚麼お話でも能きるのです。是から衣服を着更へるの、やれ髮を撫でつけるのと騷いでゐる中には、短い日は暮れて了ひます。」

「ぢやあ其日の暮れない中に行つて來る。」

欣一は自棄に立つて母屋の方へ行かうとするので、文子は何とはなしに二歩三歩追ひかけた。

「あゝ、何か傳言でも……」

夫婦は目を見合せると、文子は又氣を兼ねて、

「否、別に……」

「然うか。」と、欣一は物足らぬらしく歩去つた。

陰口

姑は氣作な人、小姑の今子は内氣な哀深い人とのみ信じてゐる文子は、時々起る親子同胞の間の小競合も、それは無邪氣な遊事のやうに思つた。自分の生れた家では、如何些細の事で口答へする者もなければ、又輕々しく惡口を言合つたり、揚足の取りつくらを爲るものもない。

一つ事が間違つたら容易に納まりがつかぬ代り、誰も常住人の氣を損ねまいとして、馬車馬のやうに唯自己の行くべき路を一筋に見詰めてゐる。家内揃つて三度の膳に向ふ時でも、素の間に寄集うて雜談する時でも、さては夜長のつれづれを世間話に興ずる時でも、皆此心懸で、律儀に自分を守つてゐる。何時も父親が話題を出して、母や姉が其れに應じる。最後には父が話の締括りをして、其れで如何なる難しい事も綺麗に片がついて了ふのだ。

然ういふ中に育つて來た文子は、牧村の人々が互に遠慮會釋も無く、勝手に思ふ事を喋つたり、時には好い惡いの區別無く其感情を明々地に色や形に出して、其れで後はケロリ忘れたやうに過行くのを見聞するにつけ、最初は此處の家庭の空氣が餘りに荒々しくも思はれたが、馴れて來るにつけ、其間に一種の強い愛情の力……を見出して、極めて可懷しいやうな、賴もしいやうな氣がした。

伸々してゐるのは、敢て生活向ばかりではない、人々の心持も、其行爲も、自由に快活で、長所も弱點も打明け、而して互に信じ合つて一家を營んでゆく。是が眞の幸福といふのではなからうか、と、文子は熟々考へた。

兵隊のやうに嚴しく訓練されて、後生大事に築きあげる生活は、何時まで經つても崩れないが、其處には何の興味もなければ、又一點の温味も有たぬ。然ういふ家庭に育つた自分は餘りに世の中を狹く過したのである。眞壁の家の美しさは霜に染め出された紅葉の色で、其あたりには常に淋しい風が吹くのだが、牧村の家庭には雨が降つても風が吹いても、其奧には春の暖さが通うてゐる。

彼女は其暖氣を感じると共に、何うかして自身も其家風に同化しようとした。其れは彼女として當然踏むべき道であつたし、自身の爲にも幸福であると信じたからだ。けれど生家に居ては一人毛色が變つてゐるとまで言はれた文子も、此中では我ながら呆れる程野暮で、意氣地無しで、而して頑固であつた。詰らぬ事を氣にかけて、直に用心深く構へるのを、良人の欣一は何時も可笑しがる。姑は却つて其れが可いとは言ふが、何處となく氣を置いてゐるらしくもある。而して文子自身は又其頑な心を我ながら悶しがつてゐる。

「妾は何うして斯うも打明けられないだらう。」

と、時々考へ出しては眉を顰めた。生家では其れが眞面目であつた事も、此處へ來ては詰らしくなつて了ふ。早い話が、今日良人が大久保へ行くと極めた時、文子も實は共に行きたかつた。飛立つ程其れを願つてゐた。が、口へ出し

ては全然反對の事を言つて、其爲に本意無く留守居を爲ねばならなくなつたのだ。

いよ〳〵良人の出て行つた後では、彼女は別に悔みも爲なかつたが、たゞ偏に自分が不正直のやうに思はれて、少時は不快を忍ぶ事が能きなかつた。目慧い姑に其氣振を悟られはしまいか、若し然うと知られたら、嘸淺はかな女だと思はれるだらう。と、那樣事まで心に咎めてゐたが、軈て氣を紛らすべく、階下座敷の明取の可い處へ針箱を持出して久しぶりで裁縫に手をつけ始めた。

家の内は火の消えたやうに靜かになつて、一間隔てた茶の間には何の物音もしなかつた。先刻しがた今子が撞木杖に縋つて庭へ出たが、母親と共に未だ花壇の方に行つてゐるので。

文子も最初はなか〳〵氣が乘らず、手と心とは別々に働いてゐたけれど、其うちに次第に周圍を忘れ、自分からも離れて、無心に針が運ぶやうになつた。

偶と氣が注けば、隣室で人の聲がする。姑と今子は何時の間にか戻つて來たのだ。文子は其處へ出て行かうかと立ちかけたが、其れもおくれが來て少時躊躇ふ間に、自分の噂が口に上つてゐるのを聽きつけたので、つい其まゝに出そびれて了つた。

「二階なんでせう？」と、今子が思ひの外荒つぽい語調で言つた。

「然うに極つてゐるさ。」と、姑も疎略に應ける。

「屹度だわね。兄樣が居ないと、二階の室を出た例が無い。一體何をしてゐるんでせう？」

「手紙でも書くか、書物でもしてゐるのだらうよ。」

「手紙つて、何處へやるの？」

「生家へやるのさ。過日も妾が何の氣もなく入つて行くと、慌てて書きかけた文を匿すだらうぢやないか。妾は別に氣にもしなかつたが、然う爲れたのでつい目を注けると、何だか知らないが細々と書いてあつたよ。やれ淋しいとか、所在が無くつて困るとか、誰が何う言つたとか、斯う話したとか……」

「那樣委しい事まで讀めたの？」

「讀みはしないが、一目で大抵察しがつくぢやないか。其中には妾やお前の惡口だつて有つたらうさ。」

文子は誰も見ない處で眞赤になつた。此處に居合すのが辛くもあつたし、他の爲には氣の毒でもあつた。が、其れよりも日頃彼までに碎けた二人が、斯樣陰口をきくかと思ふと、彼女は先づ膽が潰れた。

「妾は何も惡口を書かれる覺はないわ。」

「各自に然う思つてゐるのさ。書かうと思へば何でも書ける。」

「それも然うね。」

「我々と違つて、落着き拂つた人だもの、表面は何も知らない顏をしてゐるが、あれで何事も心得てゐるのだよ。お前なんぞは根が迂濶だから直に腹を見られて了ふ。能く氣を附けないと可けませんよ。」

「妾よりか兄樣の方が用心ものですよ。母樣、貴女には彼の樣子が何とも思はれなくつて？」

「兄樣のかい？」

「妾、隨分だと思ふわ。」

「そりやお話の外さ。」と、コツリと煙管を叩く音がしたが「けれど、然う惡く言つたものでもないよ。騷ぐのは珍しい中の事、何有彼の調子で何時まで續くものかね。」

文子は冷りとしたが、あとは我手に耳を塞いで、颯と臺所の方へ逃出した。

去年

初めて其陰口を聽いた時には、文子は驚きも

し、腹も立つた。自分の心に引較べて、今迄は散々欺されてゐたやうな氣も爲る。賴みにならぬ人を、眞の親よりも妹よりも深く信じてゐた事が口惜しくも思はれる。今一つは然ういふ氣の知れぬ人達に取卷かれて、縱からも横からも睨詰められる自分の將來の、極めて不安な立場が心配になる。

文子は其當座失望と憤懣と悲觀とで病みつく程にまで苦しんだ。而して姑や小姑に顏を合せるのが、此上もなく恐ろしかつた。それは相手を憎むといふ積極的の考へよりも、寧ろ斯ういふ心を以て人に接するを一種の罪惡と感ずる消極的の了簡からであつた。

觀菊の招待には生家の父母も喜んでやつて來た。終日機嫌好く遊んで、父は珍しく深醉をしたのか、歸途を急がぬ玄關で、足許の蹌踉するのを、見送りに立つた文子は皆の手前に極りを惡がつた位である。其日は姑の庸子は元來、體の不自由な義妹の今子までが、チヤホヤと下にも置かぬ饗應ぶりで、肝腎の主人夫婦は却つて茫然してゐた程。

文子が一人で引締め〳〵する傍から、良人の欣一は無暗に周章する。庸子や今子は何でもかでも浮し立てて、然う爲なければ家の名折にもなるやうな意氣組。其熱心を見るにつけ、文子は昨日の事が夢ではないかとまで不思議に感じた。疑ひの眼を以て見れば、一から十まで惡く取れるものだが、實際庸子や今子の爲向けに那樣疑ひの餘地はない。禮儀を盡し、心を傾けて、心から父母を喜ばせようとしてくれた其誠意に對しては、文子も唯感謝する外は無かつたのだ。

陰口……陰口……其れは好ましからぬ事ではあるが、要するに文子自身の事に限つてゐる。親しい程缺點も目につくのは當然で、不滿ともつかぬ不滿、不快とも無い時々の晴曇りは、親子の仲にも、夫婦の間にも常に起る事である。兄弟なればこそ喧嘩もすれ、家族と極れば互に遠慮も爲ぬ譯だ。彼女は今の失望や悲觀が一向愚にもつかぬ事のやうに思ひなされて、如然小さな事にクヨ〳〵した自分の心が恥しくもあつた。

一時日影を隱した時雨の雲が、直に吹散される此頃の空模樣と同一で、文子は其日の出來事の爲に、姑や義妹に對する不快を一掃して了つた。

而して其當分は何事も無かつた。

十日程過ぎた或宵の口。文子は良人と共に二階の居間に居たが、下座敷へ忘れ物が有るので、其物を取りに降りた次手、姑の居間へ顏を出すと、其處には何時も按摩を仰せつかる下女のお辰が、唯一人雜巾を刺しながら居睡をしてゐた。

文子の跫音に目を覺した彼女は、慌てて前垂を膝の下へ布込みながら、

「はい、何でございます。」と、呼ばれた意で勢ひよく言つた。

文子の方が戸惑ひの形で、

「あの、別に何だけれど……阿母樣は？」

「はい、御隱居樣はお孃樣のお室へおいでになりました。」

「然う？」

「御用なら申上げませうか？」

「何有、それには及ばないよ。」

文子は其まゝ二階へ引返さうとしたが、尋ねた手前一寸間が惡くなつて、用もないのに今子の室へ足を向けた。

二間三間、此寒いのに襖を締忘れてあるが、間毎の電燈は消して置くので、足許も危く摺足に一番奥の室へ近づくと、偶と過日の可厭な事が頭に浮び、文子は俄に耳鳴がして來た。

疑ふのではない、疑ひたくはない、と打消し

たが、何うも心が承知せずに、彼女の神經は益す冴えて來た。
　夜の沈んだ一室から、物を削るやうな囁きが燈火と共に鋭く漏れて來る。
―あゝ可厭な……―
　と思ふと、文子はいつそ逃出さうとしたが、最初の時程驚きはしないで、寧ろ其の一言一句を詳しく聽いて置きたくなつた。好奇か、反抗か、それは明瞭別らぬけれど、左にも右にも我身の上に關する噂を聞流すだけの度量は失せ、惡いと知りつゝも猶二三歩斜に室の隅に近寄つて、雨戸を袖に徐と膝を突いた。
　案の如く其事である。加之今宵の庸子と今子は、文子の噂ばかりで無く、其惡口は父母の事にまで及んでゐる。
　それも、面と向つて喋々しく褒めた事を、陰で貶すだけなら未だしも、過日見たまゝ聽いたまゝの一切から、一つ〳〵缺點を探出して、今子は斯樣事まで言つた。
―だけど、何うでせう彼の服裝は……田舍の村長さんだつて、今はもう少し氣の利いた裝をしてゐるわ。」
「ふゝ、然うともね。」と、庸子は笑つた。
「彼のまあ老爺さんの羽織と言つたら、今時流行らない魚子の、能く羊羹色といふけれど、彼樣は宛然芋羊羹に黴のかゝつたやうだわね」
―妾は又、茄子の鹽押しの腐つたのに似てゐると思つたよ。男は未だそれでも可いが、彼の阿母さん殿の風と來たら、お話にはならないぢやないか。」
「衣服？　帶？―
―何れも是も、明治三年に日蔭町へ行つて買つて來たといふ代物だアね。」
―あら！　那樣時分にも古着屋があつて？―
―當然さ。古い物を着る人は今に始まつた事ぢやない。」と、咳をして「お前は知らないかえ昔の話でね、或田舍のお嫁入に、其親達が振袖を買はうと思つて、若干かのお金を拵つて來たのだとさ。」
「何處へ？」
「東京……ではない、其頃は江戸ですよ。江戸の日蔭町へさ。」
―まあ、嫁入支度に古着を買つたの？」と、今子は大きに驚いた聲。
―それはお前、お金の都合で、然うしなけりや調はないのだもの。其頃は物が廉かつたとはいふけれど、其れでも振袖を上下揃へて新しく拵へた日には、一寸生和しい事ぢやなかつたらうさ。」
―然うねえ。―
―でまあ、田舍の人の事だから、彼是と野暮な見立をして、値もコキつけて、何うか斯うか一揃買込んで行つたとお思ひ！　何しろ江戸仕入だといふので、當日は彼のそれ……彼は……能くあるね、彼の乘……乘掛さ、其れで嫁さんを馬に乘せて近郷近在へ見せびらかしながら首尾よくお輿入になつたのださうだ。
―まあ、お母樣は委しいのね。自分の事ぢやなくつて？―
―馬鹿におしでないよ。處がね、其お嫁さんが平素強飯にお茶をかけて食べるのが好物だつたのでもあつたか、途中で雨に降られたとさ、けれどまあ、無事に聟の家へ着いて……それから婚禮のお席となつた時、何うかして其お嫁さんがフイと起たうとする拍子に、誰かお前さん、其處にあつた物に引つかゝつたものだからね、機勢さ、お振袖の腰から下がビリ〳〵と剝がれて了つたのだとさ。」
「え？　何程何でも、」と、今子は笑つて「紙雛樣の衣裳ぢやあるまいし、其れも餘り譃らしいわ。」
―處がね、其れも其筈で、古着屋では糊づけの

衣服を賣つたのださ。」
「羽子板屋の間違ひぢやなくつて？」と、今子は何處までも本氣に爲なかつた。
　庸子は少時默つてゐたが、
「實際細工をしたものか、それとも、年數物で然うなつたのか、蟲土藏にでも在つた品か、其處までは判らないけれど、左も右、昔は那樣名高い話が有つたものさ。彼の阿母さん殿の召物だつて、うつかり踏へたらピリ、だよ。」
「然う／＼。彼物を見ると、仍且其話も眞實らしいわね。だけど、彼の阿母さんの事ばかりぢやなくつてよ、嫂さんのお嫁入の支度だつて隨分其日ですもの。」
　文子は血の廻りが直と止つて、息が忙しくなつて、鋭い刃物で胸先を抉られたよりも一層苦しい思ひをした。
「まつたくだよ。俺達と間違ひがなかつたけれど、隨分酷かつたね。第一彼の黒の紋附は何うだい。」
「あれも其明治三年の日だわね」
「家の文さんは四番目だといふが、眞壁の家では何の娘も代々同じ衣裳で嫁にやると見えるよ。」
「然うすると今度で四代目ねえ。」
　庸子は嘲笑ひをして、
「未だ此後に一人妹があるが、其分も彼で濟ませる意だらう。昔の芝居には澁澤といふ重代の鎧があつて、其物の質受が能きない爲に大騷ぎを爲る筋もあつたがね。」
「眞壁さんのは江戸褄の鎧ぢやなくつて？」
「お前ね。あれが其……黒絲縅とかいふのさ。」

＊　　＊　　＊　　＊

　文子は襦袢の袖口を噛んで、耐へられるだけは耐へてゐたけれど、最早其思慮もなくなつて、一時に嗽と取逆せ、あはや隔の襖に手をかけようとしたが、其途端に、廊下の方を人の走來る跫音がしたので、彼女は屏風の陰へ身を退いた。
　お民といふ小間使が、今子の居間の障子際へ來て、
「あの、奧樣は……」
目には見えぬが、室の内では庸子と今子がガサと身動きでもしたらしく、
「奧樣とは……文さんの事かい？」
「はい、旦那樣が召しますので。此方に被在る事と存じまして……」
「居ませんよ。」と、庸子は不機嫌らしく答へた。
「では、彼方……何方でございませう？」
「文子さんの番人ぢやあるまいし。」と、今子までが怫然として「那樣事を知るものかね。」
「はい。」と、お民は障子を締めて行かうとする氣勢。
　庸子が大聲で、
「能く探して御覽、自分の室かも知れないよ。」
　此出來事に氣が挫け、文子はそつと暗い室を引返したが、旋てお民が縁傳に走り來るのを遣過して、何氣なく階段の方へ出た。
　而して一段二段昇りかけると、今迄の怒りが悲しみに變じて、彼女は其處に倒れたまゝ、聲を忍んで泣出した。
「おや、奧樣ではございませんか。」と、探し倦ねて下へ來かゝつたお民が聲を掛け「何う遊ばしましたのです？」
「何有、一寸躓いたの。」
「まあ、お危うございます。」

今年

一日々々と年の刻み際立つて、人の心も凄じくなる師走の中頃から、文子は其れとも異つた浮世の味を沁々辛く思知つた。
　夢のやうな新婚當時の心持が次第に樂しい形になつて、何時となく自分の立場や、責任

や、更にもつと大きな人生の意義ともいふべきものを、朧氣ながら考へる程になり、是から女の身として、最も大切な、最も樂しい境に踏入らうとする其途端に、一陣の寒風の吹來つて、其心の曖昧も、勇氣も、樂しみも、將又將來の望をも、忽ち奪去つて了つたのだ。湯で絞つた手拭の、水より疾く氷るやうに、文子の心は其一夜…其十分足らずの立聽の爲に、全然冷やかなものと化したのである。

家の爲にも良人の爲にも斯樣事ではならぬと幾度となく我から其愁結を暖め解かうと試みたけれど、氷は自ら其量を增して、寄りつく物も、少しの熱に溶けかゝつた其表面も、一寸した間に何時か舊の冷たい一塊の氷となるのだ。

而して、其まゝに年は暮れた。

翌る正月の七種、文子は良人の勸めにしたがつて、午過から大久保の生家へ年始に出かけた。年内は互に心忙しいから、何事も正月の事…と霜月頃から約束して、今日の訪問は二年越の樂しみにも爲てゐたのだが、例の快からぬ氣持になつた後は、其喜びさへ消去り、斯樣張合もない身で何の年始が面白からう、と、彼女は少しも勇まなかつたのだが、理由を知らぬ欣一に訝られるのも心苦しく、久しぶりで外出の支度をして、今日の晴れにと良人の指圖で新調した衣服を身につけると、有繫に心も新しく、急に世の中が晴々として來た。

唯姑や小姑に其服裝で挨拶に行く時、留守の噂も目に見るやうで、又しても曝物になるのかと思へば、其ればかりは口惜しかつた。

俥に幌をかけたので、途々の春の景色も目には入らなんだが、それでも行違ふ電車の音の快く、獅子舞の太鼓や萬歳の鼓も賑しく、狹い裏通りでは羽子突く群や醉漢の爲に屢々俥の足を緩めさせられた。

生家の門前へ着いたのは一時過。文子は車夫に土產を持たせて、其れから徐に降立つた時、偶と落合つた人と顏を見合せ、

「おや、阿父樣。」

「文か…」と、父の俊彥も喫驚したらしく「うむ、お前だつたか。」

俊彥は古い茶褐色の外套を着て、山高帽子を冠つてゐた。

「可い處へ來た。」

「今お歸りでございますの？」

「あゝ、一寸見舞に行かねばならん事が有つてな。」と、言ふ中にも嬉しげに娘の姿を打目戍り「併し、可い處で逢つた。」

連立つて門へ入ると、日當の惡い玄關は一面の霜柱。それが汚く踏荒されてゐる爲か、舊は何とも思はなかつた垣根の古びや、玄關の式臺の自然と傾いた上に、麗々と小さな名刺受の盆を出してあるのが耐らない程見窄らしく、文子は車夫の手前恥しいやうな氣がした。

俊彥は東々奧へ通りながら、

「これ！　誰も居らんか？」

其聲を聽いて先つ走出た芳子の後から、夫人も續いて廊下で行逢つた。俊彥は喜色滿面で、

「おい、文が來たぞ。」

「え？」

と二人は同時に言つたが、

「何處へ參りました。」

其聲を聽きながら、文子は忙しくコートの紐を解き、土產物を取るなり氣も轉に奧へ入つた。

「まあ…」と、禮子は茫然其顏を眺めて、何とも言ふ事が能きぬらしい。

「文子さん。」と、芳子も行詰つたやうな語調で言つた。

座敷へ行つて外套を脫捨てた俊彥は、其間

すら待兼ねて廊下に現れ、

「こら、何を那樣處に立つてゐるか。文子は客だ。客を‥‥疾く此方へ連れて來なさい。」

三人は心着いたが、其れでも何かと讓合つてゐるので、

「えい、何故然うだ。其處は寒い。」

父親としては珍しい慌てやうだが、誰も可笑しいとは思はなかつた。

庭の楪葉に未だ新しい風が騷いで、四十雀の小さな姿が、梅や小松に飛廻つてゐる。

文子は母に添うて座敷へ入つたが、其敷居際に手を突いて、先づ父の前に首を下げた。而して各自年禮が濟むと、彼女は少し上氣しながら、鬢の形を觸つてみる。

「さあ、此方へ來なさい。」と、俊彦は火鉢を押して「俥では猶更寒かつたらうに。まあ、當れ。」

「有難うございます。途中は思つた程寒くもございませんでしたの。」

「否、然うでない。」

「阿父樣も彼樣仰有るからね、構はずに手をお翳しなさいよ。」

「早速屠蘇といふ處ではあるが、女はそれも迷惑であらう。其代りに餅でも振舞つたら何うか。」

「澤山ですの！　今出がけに御飯をいたゞいて來たばかりですもの。」

「然うか、それでは後刻にするか。但し、今日は未だ廻禮する處があるのかな。」

「何處へも參りは致しません。」

「其れでは緩りして行くが可い。夕方までは許可を得て來たらう。」

「はい。」

俊彦は頻に頷いた。禮子は此時芳子の運ぶ茶を取次いで、

「時に、二日の日には阿父樣がお宅へ出て、大層お世話になりなすつたとか。」

「其節は誠に行屆きませんで‥‥」

我子の口から斯樣事を言はれるのを、父も母も樂しさうに、目覺しさうに顏を見合せた。

「いや、是は飛んだ疎相をした。未だ其禮も言はなんだな。一つでも年を取ると此通り耄けて來る。」と、俊彦は高聲で笑つた。

禮子も莞爾しながら、

「お歸りになつてからも、誠に喜んでいらしつたよ。欣一さんもお前さんも大層好くして吳れたと仰有つて‥‥」

文子は良人の名を言はれるにつけ、淡い恥しさを擧動に現した。

「それに又、お母さまや、彼の今子さんが、何時も親切にして下さるから。」

「はい。」と、文子は慌てて俯く。

俊彦は髯を撫でつゝ、

「然う〳〵。二人とも結構なお人だ。何時も快活で、懇切で、俺は彼の人達に深く敬服して居るよ。」

「はい。」と、今度は口の裡。

「うむ、然うだ。彼の分では私も安心した。」

「まつたくですよ。」と、禮子も膝を前めて「妾は一二度しかお目にかゝつた事も有りませんが、其れでも大概解つてゐます。同じ緣有つて嫁くにしても、芳子のやうに、お姑さんの氣に入らないやうでは‥‥誠に本意無く思ひますが、牧村の阿母樣のやうだと那樣心配は毫も有りますまい。姑小姑の善いのは、お前ばかりの仕合せではない、妾達も何の位嬉しいか知れませんよ。」

「‥‥‥‥」

「けれど、其れも一つはお前さんの仕向けにもある。先方が善い仁だからと言つて、餘り其れに狎れ過ぎると、詰らない事でお氣を損じないものでもないからね。其處は此後とも能く注意

して下さいよ。」

文子は是非なく低頭れてゐたが、偶と見上げる目が父と出會ふと、

「俺も同感だ」と、俊彦は力の籠つた聲で念を押した。

文子は可怖い刃物を避けようとして石の壁に支へられたやうに、唯遣瀬ない目を伏せた。

「是も祝の心だ。徒らに聽いてはならんよ。」と、物和しく告げて「さて、俺も初めて家に春を迎へた心持がする。これ！ 何ぞ文子に馳走してやれ。何、腹が好ければ見るだけでも可い。俺も相伴するからな。とは言ふものの、それは口實で、俺は未だ午食を食はんのでな。」

「おや！ 然うとは心着きませんでした。」と、禮子は喫驚する。

「薦められたが、何やら食ふ氣になれなんだ。然るに家へ歸つて文子の顏を見ると、落着いたのか、急に腹が空いて來たよ。」と、俊彦は又聲高に笑つた。

紀元節

取止りなく正月が過ぎて、今年の寒に暖く明けると、梅の便りの一輪づつ日毎の新聞を彩るやうになつた。

十一日の午下り、門の國旗に餘寒の風の音を聞きながら、牧村の内玄關へ訪れた壽子は、直に此方へといふので奥へ通されたのである。女中の案内について行くと、長い廊下を奥深く、やがて書院と覺しき室の前を通る時、チラと文子の聲を聽きつけたので其處へ入るのかと思へば、然もなく過ぎて階子を昇り、二階の眞新しい一室に通された。

忠實しく火鉢や座蒲團を持出した女中は、緣の方へ退つて、

「何うぞ、少時お待ち遊ばして下さいまし。唯今奥樣がお越しになりますから。」

「えゝ、御悠りで可しいのですよ。少しもお構ひなく……と仰有つて下さいまし。」

「畏まりました。」

女中の降りて去つた後、壽子は見るともなしにそつと室の模樣に目を配つた。八疊の明るい室で、南を緣に他の一方は肱懸窓になつてゐる。凝つた造りの一間の床には古短册の懸物、籠花活に室咲の菜の花を投込みにして、わざと置物の無いのも風雅に、長押にかけた油繪は何處の海岸の景だか、其光線とりも程好く見えた。

少時すると前の女中が又上つて來て、次の間でゴトゴトしてゐた擧句、茶やら菓子やら、今日の新聞を二三種も持つて來て、

「嘸御退屈でいらつしやいませうね。」

「いゝえ。」と、壽子は輕く會釋した。

「あの、誠に失禮ではございますが、唯今一寸手離せない御用中で……あの、もう少々お待ち下さいますやうにと仰有つてでございます。」

「妾の方は可いのですよ。何うせ閑ですから。」

「恐れ入ります。其に何でございますよ、今日は旦那樣もお留守ですし、御隱居樣も、何方もお出ましになりましたものですから。」

「おや、然うでしたか。其れでは定めしお忙しい事でせうね」

「はい。ですが、此御用さへ片附きましたら、最うお可しいのでございます。」

女中は繋ぎに相手を爲て、ものの三十分も座を持つてゐると階下から慌しい跫音がして、文子は怱忙入つて來た。

「まあ、お待遠樣！」

「あゝ、氣が氣ではなかつたのですよ。姉さん、

元氣好く其處へ坐り、

能うこそ來て下さいました。」

一通りの口上を取交すと、文子は宛も可懷しさうに、

「眞實に能く來て下すつたのね。」

「だが、御用の邪魔をしたやうですね。今もお女中さんに言つたのですが、妾には構はず悠り片附けて下さい。然らでないと却つて氣兼ねだから……」

「最早全然濟んだのですよ。何有。」と、少し考へてゐたが「實は出入の吳服屋が來てゐましたの。那樣事の爲に長くお待たせをして。氣を惡く爲すつちや可けませんよ。時間を切つて呼寄せたものですから疾く歸してやらないと可けなかつたので……」

「何の氣を惡くするどころですか。」と、壽子は快く言つて「それは然うと、今聞けば今日は何方もお留守なのですつてね。」

「はあ、主人は謠の會があつて麹町へ行きましたし、阿母さんや今子さんは向島の親戚へ遊びに行つたのです。」

「折角來て何方にもお目にかゝれないなんて、今日は眞實に運が惡かつたのですね。」

「處が好いのですよ。姉さん！」と、文子はや荒つぽく「恰度好い日に來てくだすつたのよ。妾、今朝から……誰か來てくれゝば可いが……と心待にしてゐた位。俥を迎ひに出さうか、それとも速達便でも出さうかと思つたんですが、少し仰山だと考へて……控へてゐましたのよ。」

「淋しいからですか？」と、壽子は先方の勢ひを抑へるやうに言つた。

「淋しくもあるし。第一鬼の留守に洗濯といふ事も有るのですもの。斯ういふ時は、思ひ切り氣樂にお話でも爲たいぢやありませんか。」

壽子は苦々しげに微笑んだ。

「仍且、妾の心が通じたので、姉さんは訪ねて下さる氣になつたのですわね。」と文子は一人で勇み立ち「早速ですが、何を御馳走しませう？」

「いゝえ、構つて貰つては困ります。然ういふ意で來たのではないから」

「あら、姉さんも固い事ばかり仰有るわね。段々阿母さんに感化れて來てよ。貴女は何ういふ意でも、妾が御馳走する意なら可いでせう？」と、火箸の頭を輕く掌で叩きながら「ねえ妾だつて、今では一家の主婦ですよ。其位な自由は有つてゐますわ。」

「大層難しくなつたのね。」と、壽子は喞つた。

「まつたくですよ。實は……何でも喋つて了ふやうですが、貴女にお話するのに喜んでいただきたいからですの。あの私、今月から會計の方も預る事になつたのです。今までは妾が馴れなかつたし、一つは長い間の爲來りで、阿母さんが財布尻を握つてゐたのですけれど、何時までそれでも可けないからといふのでね、今月から妾の方へ讓り渡されたのですよ。」

文子は甚く得意らしかつたが、壽子は何となく心配であつた。

「では、畢竟お前さんの責任が段々重くなつた譯ですね。」

「けれど、其位の事は最初から覺悟の前ですもの。何の彼のと氣骨も折れますが、其代り面白味もあれば、多少其間に遣繰……」

「えゝ？」と、壽子は鋭く聞咎めた。

「否、遣繰でもする所帶なら、隨分苦しい事でせうが、家見たやうな身上は、總てが判で捺したやうなもので、誰にだつて能きる仕事なんですよ」

「然うかしら。」

「えゝ。それは然うよ。」と、文子は鳥渡上眼づかひをして「何しろ、昔から極つた地所家作の收入で、大概な贅澤をして行つても月々お金が剩つて行くといふ生活でせう？　所帶としては樂なものだと思ひますわね

文子は一端世馴れた事を言つた。

生家の父母の手許に居る頃から、文子は外の同胞と違つて氣の勝つた女であつた。善く言へば男まさり、惡く言へば出過者だと子供のうちから父は陰に陽に評してもゐた。が、それとても眞の内輪での擧動で、父母の嚴しい監督もあつたし、且又文子自身も其氣質を善い方へ撓めようとのみ心懸けてゐた爲、年を取るに從つて次第に内氣にもなり、後には同胞に共通した落着いた點のみが目に立つやうになり、此家へ嫁いで來る頃には普通一般の娘よりも含羞の多い女になつた。稀には不遇な芳子なぞに對してこそ、好きな事を言つても見るが、歳から言つて大分違ふ一番上の壽子に向つては、忘れても其鋒鋩を露すやうなことを爲なかつた。

牧村の妻になつた後は、初めて獨立した其心許無さも消えぬうち、姑や小姑の例の仕向けに氣を腐らして、然しもの元氣も何處へやら、他目には人が違つた程沈んでゐた……其頃の文子を見て、壽子は私に其變化に驚いてゐた矢先、僅一月ばかり經つた今の此勢ひに接して、彼女は二度吃驚したのである。

無論、家中留守の間の一人天下で、氣に緩みもあらうし、馴れるにつけて多少の我儘も出て來たのだとは思ふけれど、餘りに圖に乘つてゐはしまいか。と、壽子は内心心苦しく感じながら、

「ねえ、文子さん、それにしても油斷をしては可けませんよ。何事も最初が大切です。假にも一家の經濟を預るとすれば、妾のやうな親子二人ぎりの小所帶だつて、なか／＼容易なものではありません。況して此家なぞは……それに斯う言つては如何なものだけれど、夫婦かけ向ひの身上とは違ひますものね。」

「えゝ、それは然うかも知れませんけれど……」と、文子は生返事をして「まあ何にしても喜んで下さいまし。ねえ、喜んで下さるでせう？」

「那樣事は言ふ迄もありませんわ。」と、壽子は無理に微笑んで「多い同胞のうちで、お前さんが一番仕合せな身の上なのですもの。阿父さんも阿母さんも、それは甚麼に喜んでおいでなさるか知れやしません。」

「然う？」と、文子は得意らしく言つたが「だけど、母さんは妾の事について何か言つていらつしやりはしなくつて？」

「何を。」

「過日、御年始に行つた時、妾……少し愚癡を溢したのですよ。其事で取越苦勞でも爲ておいでなさりはしないかと思ひますのよ。」

「別に……そんな樣子もありませんでしたが」

「然うですかしら。」と、少し考へて「妾、今考へると、彼樣餘計な事は言はないでも可かつたと思つて……眞實に後悔してゐるのです。」

壽子は何とつかずに頷き、

「誰にしろ、各自に苦勞は有るもの。それを言出したら際限はないわねえ。」

「まつたく氣の持ちやうですよ。」と、文子は銀瓶の湯を急須に注しながら「姉さんなんぞはいろいろ經驗もお有りなさるでせうが、何しろ初めて違つた家庭に來て、新しい生活に入ると、それは思ひ懸けない事ばかりで、つい悲觀に陷りたくなります。」

「まあ、那樣ものかも知れません。」と、壽子は出された茶碗を取れば、品の好い輪形の伊萬里の薄手の茶碗に、玉露の香も高かつた。

「けれど、那樣事で自分の心を苦しめたり、皆さんに御心配をかけたりするのは、詰らない話ですわね。然うしたところで、今更何うなるものでは無し……」

「其通りですよ。」と、壽子は熱心に同意した「何事も持つて生れた運ですもの。」

「然う思へば苦勞もありませんね。又同じ苦勞

するなら、自分の幸福の爲に苦勞する方が餘程增しでせうよ。」

壽子は一寸其意味を解しかねたので、何も言はず相手を見詰めた。文子は氣が着いて、

「おや〳〵、お目に懸ると直に大層お話が沈みましたわね。折角遊びに來て下すつたのに、こんなお話ばかりぢや興にもなりません。」

「ですが、餘りお客取扱ひを爲れても却つて困るわ。仍且家に居た時のやうにお互に遠慮なく話しませうよ。」

「えゝ。」と、言つたが、文子は始終外にばかり氣が散つてゐるやうで、何うしてもしみ〴〵した心になり切れぬらしい。

「それは然うと、姉さんは未だ此二階を御存知無かつたわね？」

「はじめて通つたのですよ。」と、晴れて四邊を身廻し「大層好い御普請ねえ。」

「妾が來る少し前に建增しを爲たのださうです。」

「廣いのですか？」

「いゝえ、此處を入れて四間ですが、間取は誠に都合よくしてありますの。」と、手を伸して隔の襖を開けた。

次の八疊は主人の居間で、和洋折衷といふ飾付けも、餘りあくどくなく整然と片附いてゐた。午過の日が机の前の丸窓へ斜に射して、其方から鶯の笹鳴も聞える。

「まあ、陽氣なお座敷ね。」

「えゝ。」と、文子は立上つて、一方の肱掛窓を啓け「此處の見晴しは好うございますよ。」

東の方から折曲げに、廣い庭園を下瞰すと、松は未だ冬の裝束であるが、古木の梅も、築山の芝生も、今日の日影は何處となく春めいてゐた。

「あゝ、斯ういふ處に暮してゐたら、甚麼にか樂しいでせう。」と、壽子は感心して「まつたく羨ましい事。」

文子は口を結んだまゝ、何とも言はずに微笑んだが、

「それから、次手に妾の居間へ御案内しませう。」

廊下へ出て主人の室を廻ると、六疊の小綺りした室に、見覺えのある簞笥が二棹、それに鏡臺針箱と文子の嫁入道具は並べてあつたが、他の道具に較べると宛然育ちの違ふやうで、壽子でさへ肩身が狹く感じた。

睇見ると、其簞笥の前に、出來上つたばかりと見える呉服の疊紙が三重、未だ其まゝに置いてあるので、

「おや、御新調なの？」

「えゝ。」と、文子は少しく顏を赧らめたが「今度拵へて貰ひましたのよ。いらしつた次手に一寸見て下さいな。」

「はあ。」

壽子は其場に膝を突いた。

取出したのは無地お召に江戸褄の織出しで、水仙に觀世水の模樣。

「好い事ねえ。」

「妾に似合ふでせうか？」

「恰度好いわ。」と、壽子は目も離さず言つた。

「それから、此方は今流行るお召の唐棧縞よ。少し粹過ぎると思ふのですけれど……」

「でも、變つてゐて可いわ。其方のは？」

「帶ですの！」と、文子が膝に押開くと、春の錦が一流、窓の日影に輝いた。

蝸牛

春は去り、夏は過ぎて、文子が結婚の一週年、九月の秋はめぐり來た。

其間に新夫婦の間には理想通り男の子が出來て、兩家は花に實に重ね〴〵の喜びを見た。父の俊彦が名をつけた武夫といふに相應しく、子

供は至極健かに育ち、美しい母親も産後の障りがなく肥立つた。極暑の中を交る〴〵電車で見に行く俊彦と勝子は、歸つて來ると行水も其方のけに、今日は五度泣いたとやら、今日は風車を見て笑初めたとやら、他の子供の其日數に較べて、重量が何の位多いとやら、目つきは母に似て、鼻つきは爺に似たとやら、似ぬとやら、毎日那樣事で夢中になつてゐたが……。

それも程なく百日目と數へる頃、文子は乳母を連れて偶と實家を訪れた。

折から俊彦は不在で、母親も三番目の娘が嫁いだ先へ行つたとか、主たる人々の留守は森閑として、折角來た文子は甚く失望したのであるが、姉の芳子と、此春横濱の學校を卒業して以來、築地の西洋人の許に行つてゐた末の妹の勝子が久しぶりで二三日泊りがけに來合せてゐたので、それでも話相手に不足は無かつた。

家へ入るや否や、勝子は乳母の手から武夫を受取つて、宛も大切さうに膝に載せ、

「まあ、少し見ないうちに大きくなつたのね。此子は妾の顔を覺えてゐるかしら？」

「未だ那樣智慧なんかありはしないわ。」と、文子は遠くから見遣り「それに、此子は少し智慧が遲いやうよ。大きくなつたら馬鹿になりはしないかと思ふの。」

「何を言ふんだね。」と、姉の芳子は笑つた「何處の子だつて、一般に男は智慧のつき方が少し遲いのです。ねえ乳母さん。」

「それは仰有る通りでございますよ。」と、緣側に坐つてゐる乳母が熱心に贊同した。

「何だつて可いわねえ。」と、勝子は子供の額を覗込んで「ねえ武ちやん、今に偉くなつて驚かしてやるから。」

庭の千日草は面白味もない花をつけて、四邊は昔のまゝの眺めであつたが、文子は今日に限つてそれが何となく氣樂で、可懐しいやうな氣持であつた。

何年にも繕ひつゞけて、未だに面目を一新した事のない垣根には、つまらない構絶が無暗に引絡んでゐるが、其れも半ばは黄んだ葉になつた處へ、午過の日が斜と當つて、其傍の松の幹と、裏の柿の木のあたりで、つく〳〵法師が淋しく鳴き交してゐた。

「相變らず古ぼけた家だわね。」と、文子は無遠慮な事を言つて、低く目の前に舞ふ蝿を團扇で拂つた。

「當然ですよ。段々に古くなるばかりさ。」と、芳子は笑ひながら言ふ。

「最早新築しても可い頃ね。阿父樣も思切つて、此秋あたり然う爲されば可いのに……」

「何うして！　那樣事が。」と、芳子は目を丸くして「それどころの沙汰ではないのです。」

連れて來た乳母の手前、少しは虚飾もあるべきところを、餘り眞劍に本音を吹かれたので、文子は藪を突いて蛇に出られた態であつた。

「阿父樣は吝嗇だから……」

と、言ふと、今度は勝子が呼應したやうに睨めた。

「斯樣家を造直したつて、何程もかゝりは爲ないぢやありませんか。」

「さあ、何う、いふものかねえ。」と、芳子は身にも沁まぬ語調で「だけど、阿父樣を初め家の者は、誰だつて那樣呑氣な事を考へてゐやしませんよ。」

其時、勝子の膝に抱かれてゐた武夫が泣出したので、乳母は慌てて引取つたが、乳も飲まずに憤るのを和むべく、立上つて緣側をうろ〳〵し出した。

「乳母さん、裏へ行くと可いわ。妾が案内しませう。」

勝子は先に立つて緣傳ひに其方へ連去つた。

後は一時涼しくなり、北を啓放した窓の古

簾を越して來る風も、やゝ初秋の音を立てた。

芳子も勝子も家に居る事とて、洗晒した浴衣に、髮もそゝけたまゝであつたが、お召縮緬の單衣に絽縮緬の薄色の羽織を着て、帶は鹽瀬のクリーム色へ、墨繪で竹を描いたのを締めた文子と較べると、是が姉妹かと驚かれる程の相違であつた。

「まあ、可いわねえ」と、芳子は突然首を傾けて「其帶止は何といふ配合が可いでせう！」

「是ですか。」と、文子は微笑み「自慢なのですよ。帶を拵へたので偶と欲しくなつたものですからね。わざ〳〵誂へて、昨日やつと出來たのです。」

「全く配合が可いわ。其模様は畫いたのですね？」

「えゝ、品質は大したものぢやないけれど、畫の方が價値よ。」

「へえ……」と云つたが、芳子には其方は能くも解らず「一寸、其帶止を見せて下さいな。」

文子は直に外して出した。竹に絡んだ蝸牛は、貝を白金に、體を金に、眞珠の目玉は露かとばかり。

「眞個に生きてるやうね。細工が上手に出來てゐるわねえ。」

「是でも二つとはない品ですよ。」

「然うでせうね。而して此重量！　定めし高いお金を出したのでせう。」

「何有、それ程でもないんですが……」と、文子は得意らしく言つた。

芳子は恭しく其物を戻しながら、

「あゝ、妾なんか生變つたつて斯樣物は身に附けられやしない。」

「那樣事もないでせう。」

「否、然うよ」と、冠を掉つて「まあ、見るだけが精々ですね。」

「然う卑下なさる事は有りません。いまに妾も數が出來たら、其うちでお裾分けをしても可ござんす。」

「然うして貰つても、何日身につける機が無いのですもの。まあ〳〵、妾なんぞは眞田紐位が相當でせうよ。だが、同じ姉妹でありながら、文さんは眞個に好い月日に生れたのねえ。」

文子は何となく面映く、俯いて帶止の金具を掛けてゐた。

「村越の姉さんも然う言つてゐましたよ。彼の人は彼の通り律儀な方だから、夢にも羨む風は見せないけれど……」

「姉さんは、何か言つてゐやしなくつて？　餘り贅澤過ぎるとか、何とか。」

「まあ、那樣意味の事も言はないぢやありません。けれど、惡く取つては可けませんよ。姉さんはお前さんの身を思つて言ふのだから。」

「えゝ、其れは解つてゐます。他の人とは違つて、妾の幸福を嫉む譯はありませんものね。」

「然うとも！　たゞお月樣さへ滿つれば虧くる世の中だから、餘り勢ひに乘り過ぎると……」

鳥渡氣を兼ねて「だけど、那樣事も取越苦勞だわね。」

文子は何とも答へなかつた。

「それも、お前さんが子供のうちから勝氣の性質だから、自然と然ういふ事も言はれるのだらうが。何も……其れと是とは違ひますわね。妾なんぞは然う思ふの。文子さんが甚麼贅澤をしようと、出る度に違つた衣服を着ようと……それは自分の好みばかりぢやない、牧村さんが氣をお注けなさるからだと……畢竟は牧村さんのやうな家へ適つたのがお前さんの運の好かつたので、其運はつまり廻合せなのだものね。」

文子は其話が能くも耳に入らぬやうに、

「滿つれば虧くる事があると！　姉さんは那樣事を仰有るの？」

「それは唯、眞の……」

「だけど、妾は氣になりますわ。」
芳子は餘計な事を言出したのを私に後悔するらしく、
「眞の噂ですよ。お前さんも深く氣に懸けるには及ばないよ。」
思有り氣な目が出會ふと、文子は急に疾口で、
「何と言つたつて、妾には子供が有りますから！」
芳子には其意味が解らなかつたが、左も右も話頭を轉じて、
「それは然うと、内田の方も困つた事になりました。」
「あゝ、然う言へば頓とお見舞にも行きませんが、兄樣の御病氣は何うなのです？」
「面白くないのですとさ。今日も阿母さんは其爲にいらつしたのだけれど、何時も家を出る時は零していらつしやるのです。牧村へ行くのと内田へ行くのとでは、極樂と地獄程の違ひがあるつて！」
「眞逆那樣事も有りますまいが……」
「否、然うなんですよ。何しろ義兄樣が全然正氣ぢやないのだから、それも去年頃までは然程でもなかつたのだが、此春から段々募るばかりでね、子供よりか始末が惡いのですとさ。」
「困るわねえ。彼の義兄樣は面白い仁だつたけれど……」
「何しろ發狂者になつては爲やうがない。」と、嘆息して「でも、村越の姉さんや妾のやうに、死なれるよりは未だ増しかも知れない。」
「然うね。」と、文子は上眼で見た。
「其處へもつて來て、お姑さんがね、それはそれはお話にならない人ですとさ。」
「何處のお姑さんだつて、大抵似たやうなものですわ。」と、文子は苦笑ひをしたが「然し、徳子さんはお氣の毒ねえ。」
「えゝ、お前さんはしばらく會はないから知るまいが、此頃はすつかり痩せて了つて、それは見る影も無いのですよ。」
と、言ふ處へ、武夫を抱いて勝子を先に、乳母も後からドヤ／＼と戻つて來た。

相談（一）

殘る暑さの彼岸を過ぎて、朝夕の風もそろそろ身に沁みる秋の、十月も最早三日になつた。
運動がてらの庭掃除をしてゐた俊彦は、泥を洗つた手を拭きながら、縁の端に腰をおろし、
「誰ぞ、煙草を持つて來てくれぬか。」
折から居合せた勝子が、蒲團と煙草盆を持つて出た。
俊彦は鐵の延の煙管を取つて、徐に一服燻らしながら、
「大分好い時候になつた喃。日向へ出て居つても然程暑さを感ぜぬ。」
「左樣でございますか。」
「時に、お前は何時築地へ行くか？」
「是から直に參らうと存じます。」
「是から？」と、打目戍つて「成程。さう言へば衣服を替へて。支度中なら此處は構はずと可い。」
「否、最早すつかり濟みましたのです。」
といふ處へ、母親が大きな湯呑へ番茶を汲んで來た。
「貴方、勝は今から彼方へ參りますさうで。」
「さういふ事だな。而して直に行くか？」
「はい。」と、勝子はハキ／＼した物言ひで「六さんが荷物を持つて今しがた停車場へ行つて吳れましたから……」
「さうか。それでは餘り待たせぬうちに、お前も出かけたが可からう。」
「はい……では阿父樣、お暇を致します。」
「あゝ。」と、俊彦は頷き「彼方へ行つたら、夫

人に可しく申上げてくれ。父も御無沙汰を致して居ります。お禮に罷出ねばならぬのですが、何分お國の話に通じませんので、却つて御迷惑と存じて差控へて居ります。とな！」

「能く申します。」

「それから、毎度いふ事ではあるが、假令先方の御都合上とは言へ、然うして御厄介になつて居るからには、主人を大切に爲ねば濟まんぞ。殊に異國から遙々渡つて來られて、道の爲に盡して居らるゝ仁だ。假初にも疎に思うてはならん。職務の爲、又自己の學問の爲、誠を以て仕へるやうに、俺は呉々も望んで置くぞ。」

「はい。」と、勝子は首を下げたが、やがて母の方に向つて「母樣、行つてまゐります。」

「では、體を大事にしてね。」と、禮子は忙しく娘の姿風を見ながら「今度のお休みには又來ておくれよ待つてゐますから。」

「姉さんがたに可しく仰有つて下さいまし。」

「あゝ、それ〴〵傳へて置きますよ。」

勝子の立つて行くのを、禮子は玄關まで見送つたが、やがて門を出て了ふと、淋しさうに良人の傍へ戻つて來た。

これも手持無沙汰に煙草に親しんでゐた俊彦は、

「最早行つたか？」

「機嫌好く出てまゐりました。」

俊彦は默つて吹殼をはたき、

「今日は芳も居らん所爲か、家の内が急に淋しくなつた。若い者が居らんと、何うやら活氣に乏しいものだな。」

「然樣でございます。」

「それは然うと、今度は勝を他家へやらねばならん順序だが、又其うちに一心配爲る事かな。」と、頭を撫でて「併し、是も親の義務と思へば、少しも早く果して了ひたいやうな氣も爲るて。」

禮子は少時躊躇つてゐたが、

「ですが、彼女は何ういふ考へか、自分では嫁に適かぬと申して居ります。」

「勝が？　本人が那樣事を言ふか？」

「眞面目に申して居りました。」

「それは可かん。那樣不自然な……尤も事と場合によつて、自ら然ういふ境遇に入るものは、是は已を得ん。生涯獨身で暮して居つても、其處に爲すべき正しい仕事は有るであらうが、今日、十九や二十歳の未だ〳〵世の中を知らん者が、然ういふ主義を立てるのは飛んでもない話だ。それは主義ではない、無分別である。那樣者に限つて後日に及び非常な間違ひを仕出來すものだ。」

「仰有る通りでございます。」

「無論、お前も俺と同感であらうが、併し然う思うたら、何故其不心得を叱つてやりなさらんか？」

「叱つても見ましたのですが、彼女も姉達の續く不幸を見て居りますので。」と、胸が迫つたやうに「自分は彼樣苦勞を爲たくないと申します。」

俊彦の面にも聊か憂の色が浮んだが、直に頭を掉つて、

「それが可かん。羹に懲りて齏を吹く。那樣取越苦勞は愚な話だ。勝子に限らずお前にも其心が有るらしいから言うて置くが、我々軍人が戰に出て、前に進んだ者が戰死したからとて、それで逃ぐる事が能きるか。其爲に、自己の職分を捨てられるか。死を恐れて戰爭の能きぬと同じく、苦勞を厭うては一家の主婦とはなれぬ。而して又、總てが其人の運だ。俺のやうに二度も戰場を踏んで、斯うして生きて居る者もあれば、家の内で卒然斃れる者もあらう。現に姉は何れも不幸だといふが、文……彼女は何うか？彼女は何處が不幸か？」

「唯今の處は…………」と、禮子は無意識に言つた。「元來、一寸先は闇、或は…………此先甚麼事が有つて、彼女も良人に死別るゝやうな事もないとは…………」

「あゝ、良人！」

禮子は珍しく慌てた樣で、

「何うぞ、然ういふ事は仰有いませんやうに。惡い事は言當てるとか申しますから。」

「馬鹿な！　俺は易者ではない。」と笑つて「人間の運命が、人間に言當てらるゝものか。」

と、言ふ時、門の啓く音がして、やがて玄關に案内を乞ふ聲。禮子は急ぎ立つて行つたが、間もなく人を迎へるらしい物言ひも聞えて、小走に取つて返し、

「良人、吳林さんがお見えになりました。」

「吳林？」と、俊彦は意外な面色をしたが、禮子の何となく氣遣はしい樣子を見ると、忽ち氣を取直して「おゝ、然うか。それはお珍しい。」

自分が先に立つて廊下を進むと、吳林は今しも徐に入つて來た處。

「やあ！　能くおいで下すつた。」

「是は…………」と、客は間誤ついて「何うも、態々お出迎へでは恐れ入ります。」

「さあ、此方へ…………」と、客間へ導きつゝ「能うこそ來て下すつた。」

座が定まると、俊彦は極めて快氣に、

「思懸けない事です。俺も其後ゆる〱出たいとは存じて居つたが、牧村の話では、貴方も御多忙であるとかで。」

「はい、それが爲に、手前もつい御無沙汰を致しました。唯今のお言を伺ふにつけ、私の方が御訪問のお借りになつてゐる勘定です。」

「那樣借りは何うでも可しい。」と、俊彦は高笑ひをしたが「時に、早速ながら、牧村でも子供が出來てな。」

「誠に！」と、吳林は膝を打つて「實にお慶度い儀で、牧村一家は申す迄もなく、此方樣でも定めし御滿足で被在いませう。はい。」

其時禮子が挨拶に出たので、彼は物馴れた口上を濟ますと、

「奥樣！　此度は牧村の奥樣も非常なお手柄を遊ばしましたな。いや、斯樣結構な事はございません。」

「有難う存じます。」

「まつたくでございますよ。其爲に、お仲人を致した私までが、大きに肩身の廣いやうな譯です。」

禮子は何となしに萠した不安の、忽ち晴れた心持で、自ら言も滑々と、

「其節は又見事なお祝ひ物を戴きましたさうで、彼家でも大層…………」

「否々！」と、手を振り「お言では恐れ入ります。」

やがて禮子が饗應の用意に立つと、俊彦は努めて口輕に、

「近頃は大分凌ぎ好うなりましたな。」

「然樣…………」と、吳林は一口つけた茶碗を恭しく下に置き「すつかり秋でございます。此方などはお住居が閑靜であられるし、是から先は定めしお樂みな事でございませうな。」

「處が、住んで見ると、唯不自由を感ずるばかりです。」

「酒屋へ三里の口ですかな。あはゝゝゝ。」と、笑つたが「時に…………御用のお邪魔ではございませんか？」

「俺は爲たいにも用の無い體だ。其遠慮は御無用です。」

「いや、其御用の無い、功名り名遂げた處がお羨しい。」と、一寸口の周圍を拭いて「えゝ、時に…………」

喫みかけの莨が火入の中で燻るので、慌て

て灰吹へ摘捨て、
「時に、私の今日出ましたのは……」
俊彦は何の考量も持たず其方を見遣つた。
「えゝ。」と、支へたが又疾口に「御無沙汰のお詫……もありまするのですが、實は其……少々、えゝ何でございます、貴方に御相談申上げたい。つまり、其何でございます……事がございましてな。」
「俺に、御相談？」
「然様！」と、弦を放れた箭の如く「つまり、内々の……其御相談ですが。」
「はゝあ。」と、俊彦は熟と目をつけた。
「いえ、何有！ ちよつとした事ですが、少しお耳へ入れたい事が有りますので……」
「何ひませう。うむ、何ういふ筋か。」
俊彦は徐ろに一膝搖出した。

相談（二）

寒蟬の聲も澁つて、涼しい風が庭の八ツ手の廣葉を動した。
「何うぞお寛ぎ下さい。」と、俊彦は氣忙しく「秋とは言ひますが、未だ斯うして居ると暑い。俺も御免蒙るから……さあ、お平らに。」
「いや、決して御遠慮は致しません。はい、此邊り。」と、吳林は袴の襠へ手を入れながら「全くお暑いですなあ。」
「それで、御用とは？ 何ですか？」
「いや、極滿らん些細な事ではございますが、手前から申上げてくれといふ、其依頼なので、誠に迷惑千萬……と思ひながら、是も媒妁人の役目で、可厭とも言はれませず、是非なくまあ、伺つたやうな次第で。」
「すると、牧村の事ででも？」
「然様！ はい、お察しの通りでございます。」
と、吳林は慌てて頭を下げた。
「成程。」心許無く頷いて「其御用件といひますは。」
「實は斯うでございます。えゝ、昨日彼の牧村の隱居……が、手前共へ見えて、内々の話がございましたです。それは畢竟文子さんのお身の上に關した事で。」
「其身の上とは？」と、俊彦は悶かしげに肩を動かしたが「吳林さん、老人は氣が短くてなりません。何うぞ要領をお話しが願ひたい。善惡に拘らず、彼女の身の上は何うで俺の身にもかゝる事です。」
「はい、御尤もで。それが、貴方の前では申上げ難いのですが、仰せの如く、何れお耳に入らずには濟まんのですから。」と瞬をして「可し、左も右も搔摘んで述べます。要するに牧村の隱居が手前への話には、文子さんの近頃の行狀が誠に可しくない。」
「何、行狀？」と、今更喫驚して「彼女がどういふ不埒を働きましたか？」
「いや、それがです。俗にいふ姑と嫁で、何處にも左右有勝な事、隱居の申すのも強ち信ずる譯には參りませんが、其言ふ處を聞きますと、何うも少と……尤も。」
「吳林さん！」
俊彦は眉を顰めて、
「どうかお話が岐路へ入らんやうに、一直線に説明して頂きたい。然もないと明瞭を缺くから、お互の意見は其後にした方が可からうと思ふ。」
吳林は苦しい額の汗を拭いて、
「承知しました。ところで隱居の申すには、近頃文子さんが非常に贅澤を爲さる……といふのです。」
「それが要領かな？」と、俊彦は寧ろ意外な面色をした。
「然様、先づ原因は……」
「で、結果は？」

呉林は又言淀んだ。
「俺に意見でも爲いと言はるゝのか？」
「はい、御意見も御意見ですが、それについて、牧村では非常な迷惑を來しまして、何とも始末がつきかねますので、是非とも貴方の御盡力を煩はしたいといふのです。」
「心得ました。無論其樣な事に關して、俺も默つては居られん。が、單にそれ式の事であるならば、お話は左に右、敢て俺に口を出させるまでも無いと思ひます。此方の娘とはいふ條、當時は牧村の家族の一人であるから、行屆かぬ點は、良人なり、父姑御なりの手で、如何やうとも御折檻がなる事と信ずる。善かれ惡しかれ本人の身について一々實家へ御相談になるのは、御家の權威に障りは爲ぬだらうか？」
俊彥は徐に煙管を取つて、
「俺に對する御斟酌は誠に有難く感ずるが、それでは後々のお爲になるまい。元來納得づくで其方へ差上げたものであるから、本人の生死ともお計らひに任せて居ります。不埒とお認めの上は、十分お叱り下すつて、何の仔細も無いのである。但し、俺も伺つたからには此まゝ捨てては置きません。何時でも其方へ出向いてお腹の癒ゆるやうにも爲るが。」
「はい、是非とも然う願はなければなりませんのです。」と、呉林は其尾に附いた。
「併しなあ呉林さん、然ういふ事は、第一牧村の爲に面白くないと思ひますが。」と、俊彥は苦々しく、「惡い事は成るべく內輪で納めるが得策だ。又親類とは言へ表立つて他家の內幕に入る事は誰しも好まんのでなあ。或は本人が剛腹で手に卒へんとでもいふなら格別。那樣事は有りますまい？」
「ではないですが、聊かそれにも類した。」
「何？」
「些と可しからん事情も有りますので、否、何……贅澤と申しても、單にそれだけの事なら態々お耳へ入れるにも及ばんですが、其爲に、不義理な借財、其買ひがかりなどが。」
俊彥は愕然とした。
「大分生じましたさうで、實は近頃に及びそれが露顯……と言つても、牧村だけに知れたのでしたら、未だ何とか揉消す事も能きたでせうが、運惡く、隱居の耳に入る。所謂針も棒になりたがる所へ、其棒が又八方から出て參つて、殆んど處分に窮するといふ次第。」
「彼女が借財……存で。」
「然樣です。」
「怪しからん事だ。」
俊彥は呻吟いた。
其時、血相を變へて其の場へ走入つた禮子は、呉林の方へ膝を向けて、
「誠に、失禮でございますが、父が何ういふ事を……」
俊彥は振向いて、
「お前の出る處ではない。」
「どうぞお免しを願ひます。」と、會釋も怱々に「呉林さん、何ういふ？」
「默らぬか。」と、俊彥は鋭く遮り「言ふべき事が有れば後刻で俺が言ふ。引込んで居なさい。」
「けれども、然うしては居られませんので。」
「女といふものは、それだから可かぬのだ。お前の知つた事ではない。」
「否、眞壁さん。」と、呉林は謹んで「奥樣の御心痛は御尤もです。私も實は奥樣の御同席を希望しますので……」
「お望みとあれば同席は差支ないが、但し氣ままな差出口はならん。」と、又客に向つて「呉林さん、俺は其お話を信じられんがなあ。」
「はゝあ。」と呉林は不滿らしい顏をした。
「いや貴方を信じないのではありませんぞ。」
「すると、文子さんに唯今申したやうな事は無

いと仰有るですな」

「親の慾目とお取り下すつては困る。俺は常識の上から言ひますのぢや。彼女が如何なる惡企を致したか知らんが、高が一家の妻女、況んや姑の監督を受けて居る、未だ世事に無經驗な妻女だ。良人にも親にも知らせず、那樣不埒を働く餘地が有りますか？」

「けれども、現に爲すつたのだから致方が無いのです。其證據も擧りました以上は、是を爭ふ餘地はありません。此半年餘りの間に於て、總額千五百餘圓の借財は、たしかに文子さんが單獨でつくられたのです」

「えッ？　那樣……」と、禮子は仰天する。

「お前は默つてゐなさい。」と、俊彦は徐に制して「はゝあ、意外な大金ですが、それにつけても猶々疑はしい。然程の金を私するのを、今日まで誰も氣が着かなんだのが第一、而して又、本人がそれを何に使用しましたか？」

「即ち衣類や身の周圍の贅澤にお使ひなすつたのださうです」

俊彦は呆れた

「俺にはまつたく解しかねる」

「けれども、事實ですから致方が無いのです」

「其事實が疑はしいのです。如何さま、彼女の近頃の衣服其他を見るに、隨分目に餘る驕奢をして居るやうでした。それは俺のやうな武骨者さへ心着いては居りました。併し、牧村で許して下さる事ならば、強ひて意見を爲べき事ではないと思うて、實は默過して居つたのです。彼女の驕奢は成程事實です。だからそれを達てお請求したのが不埒とでも言はるゝなら、何とでも訓戒の致しやうが有る。それですら仰の如く不埒極る行爲と認めます。が……借財をして自己が身を飾る……其お話は餘り高大ではないか、想像に過ぎは爲んか。」

「是は又意外な事を。」

「貴方をさして言ふのぢやない。其お話の原因がですぞ。抑も牧村の御家風は、未だ委しくも知らぬか、家人の身の周圍の入費について、然程著しい出來事を長らくの間放任してお置きになるのか　或は又家人が出所の知れぬ金錢を以て身の周圍を調へるのを、知らぬ顏で見て居らるゝのか？」

「眞壁さん」と、貝林はムッとして「私は貴方から然樣な理窟を伺ふ爲に參つたのではございません。私は貴方にも文子さんにも御同情は致して居りますのですけれど、是ばかりは是非が無いので、仰有る如く、今日まで心着かずに居つた段は、牧村にも全然責任が無いとは申されませんか、文子さんは一切お實家……即ち此方からのお仕送りであると稱して居られたのださうですよ。」

「私共で?!」

俊彦は手を擧げて禮子の言を制したが、其手は少し顫へてゐた。

「無論牧村でも不審に思はぬではなかつたさうですが、然ういふ事に立入つて此方へ直接にお尋ねするのもと、差控へて居つたとか、今思へば大きな手落であつたと、隱居も酷く悔いて居られましたやうな譯で……」

老夫婦は顏を見合せて、何とも言ふべき言が無かつた。今迄激してゐた俊彦の面にも、嗔氣を挾んでゐた禮子の面にも、不安の影が次第に濃くなつた。

俊彦は旋て太い息を吐いて、

「お話の趣は了解しました。餘儀無い仕合せで、貴方を勞した事は深くお詑を申します。猶更、意外な出來事の爲に、言が過激にわたりました段は平にお赦しが願度い」

「然う仰有ると、私も恐縮致します。何に致しても飛んだ間違ひで……實に御察し申します。」

茫然としてゐる老夫婦を見るにつけ、吳林は他事とは思はれなかつた。

「此上は貴方を通して唯一つお願が有る　決してお話を信じないでは有りませんが、俺として……親として、一應本人に會うて、其自白を聽きたいと思ひますが？」

「至極御尤もです。實は先づ第一に其事をお願に參りましたのです。善後策につきましては其上の事として、左に右歸り次第人を添へて文子さんを此方へお送り致しますから、篤と御本人からお聽取を願ひます。」

「承知しました。」と、聲も沈んで「何れにしても、諸方へ御迷惑をかけて、あゝ面目次第も無い事です。」

白けわたつた座敷の内には三時過の日ざしがジリ〳〵さし込んで、馬蘭の戰ぐ鉢前に、秋の蟲が心細く啼き出した。

吳林は徐々立支度をしながら、

「斯樣な事は申すまでも有りませんが、是も一時の間違ひで、何有……一通りの處分さへつきましたら、格別御心配の事でもございますまい。私も好い時ばかりのお媒酌人ではありません。此後とも必ずお力になつて、惡いやうには致さん意ですから。」

「御芳志はお禮の申しやうもありません」と、俊彦は初めて禮子を顧み「お前からも能くお禮を申して置け　いかい御苦勞を懸けた。」

禮子は其言を聞くと共に、耐へてゐた涙が一時に溢れて、疊に兩手を突いたまゝ、最早一言も言へなかつた。

「奧樣、御安心なさいまし。」と、吳林もおろおろして「何有、大丈夫でございますよ。眞の一時の話です。唯、御主人の御氣象が御氣象でいらつしやるから私は特に貴女に願つて置きます。假令如何やうな事が有りましても、餘り酷しくお責めになりませんやうに……」

「はい、種々御親切樣に。」と、禮子は漸く聲を絞つた。

「それでは眞壁さん、右樣の譯ですから、今日は是でお暇を致します。」

「最早お歸りか。」

俊彦は目を睜いて、

「久濶だから、無理にもお引留申さうと思うたが、是では然うもなりますまいな。」

「近日改めて……」と、吳林はそれを機會に立上り「今度に慶度く頂戴に出ます。それから猶御用の節は何時でもお手紙を下さいまし、決して御遠慮には及ばんですから。」

彼は忙しく言了ると、眞壁の見送りも入用で辭退して、小走りに玄關の方へ行つたが、猶少時は禮子に何か囁き慰めた上、コソ〳〵立去つた。

其跡にはいとゞ氣の挫けた禮子が、爲す事無しに引返す座敷の緣先に、俊彦は一人憮然として佇んでゐた。

「貴方！」

禮子は其傍に崩折れて、

「眞實でございませうか、今の事は！」

「あゝ、人の親には成りたくない。」

俊彦は庭に降りて、蚊柱の立つ軒端を仰いだ。

遣繰

文子の仕出來した事は、吳林が語つた通りであつた。出入の商人に操されて、私に品物を買入れたのが皮切りで、それを自分の預つた物のうちから經濟して行く事も次第に巧みになるにつれ、一つの物から三つの物を產み、それから六つ七つと擴がり行く狀態が苦しいやうな樂しいやうな、一種の冒險的趣味を有つ程になつたのである。

制限された範圍に於て、何時も極りきつた生活を爲てゐるよりも、斯うした際どい、面白い、

而して華やかな仕事をする方が、活效のあるらしく思はれて、不安な凄じい其時々の瀨を切拔けた時には、彼女は自己の手際に驚する人知れぬ滿足と物質上の滿足とを併得て、其處に何とも言はれぬ愉快を感じたのである。

遣繰をして金を儲け、遣繰をして樂みをつゞける。上は一國を治める宰相から、下は露店の小商人にいたるまで、要するに同じ仕事を爲てゐるのだ。藝術といひ、工作といひ、將たまた鍬を手にして野に耕すといひ、大きな自然の目から見れば上品下品の別こそあれ、それは各自の遣繰に過ぎぬのである。

各自の眞面目な遣繰……其處に天分がある、智慧がある、而して生活の意義がある……といふのは、其時々の感想を一つにした文子の固い信念であつた。

斯くして立つた文子に、無論自分の爲てゐる事が罪惡とは考へなかつた。時には已むを得す其方に心を攫まるゝ事もあつたし、或は功過の境目に立つて、我ながら危いと思ふ事もあつたが、それも／＼切拔けられる限り、彼女は自分が未だ、正當だと考へてゐた。けれども、唯一つ文子の困つたのは、然うい ふ道に入るに隨つて、次第に手が擴がつて行く事であつた。一つの穴を埋める爲には二つの穴を掘らねばならぬ。算盤の桁は一より二と縱には進まず、十百千と横に動いた。是ではならぬと矯めてみても、其進行の停止する時は、即ち其處に大きな破綻があると知つては、自己の手腕を信じて疑はぬ文子も、什麼に慄然として身の毛が彌立つのであつた。

* * * *

事の露顯したのは、文子が未だ產褥に居る頃であつた。

何時までも無二の味方と頼んでゐた或商家の手代が、突然身を退いたのか思はぬ蹉跌で、今までの帳面づらは一時に公然になり、それが人もあらうに姑の耳に入つた。先方では強ちに荒立つた譯ではなかつたのだが、見つけた方が先に騷ぎ出して、段々に穿鑿が嚴しくなるにつれ、是ばかりは大丈夫だと信じてゐた事までが、續々尻尾を出して來る。一つ一つは苦しい辯解も立つたけれど、終ひには何うにも斯うにも進退がつかなくなつて、文子はとう／＼匙を投げたのである。

心の底の機關に辛くも繋ぎ止めた遣繰の、一度切れて亂れ散ると、それが總て罪惡の光を放つた。詐僞、瞞着、虛構、横領、あらゆる汚らはしい名は其一つ／＼に與へられた。

が、文子はそれでも唯一つ、心に頼む處があつた。流行く身の藻屑となるとも、唯一つの救の手に自分を堰留めてくれると思つた。其綱は良人欣一である。

文子に言はせれば、自分の爲た仕事については、或處まで欣一も知つてゐたのである。母や姊の手前を考へて、思ふやうに物質の滿足を與へられなかつた彼は、文子の行爲に對して十分默認してゐたのである。のみならず、或部分には主として欣一が參畫したらしい形跡もあつた。其等の點から文子は良人が全部を庇護して呉れぬまでも、少くも最後の味方として回瀾を既倒にかへして呉れるだらうと信じてゐた。

然るに、いよ／＼となつた時、欣一は忽然として其最愛の妻を窮地に捨てゝ顧みなかつた。のみならず、彼は母や姊と一つになつて、峻刻に文子の罪を鳴らし立てた。而して文子は一溜りもなく破滅の谷に雪崩れ落ちた。

彼女は事毎に非なるを知つて、一言の辯解も無く一切の罪に服したのである。而して罵詈嘲笑、我身ばかりか親の名にまで拭ふべからざる泥をつけられて、やみ／＼實家へ逐ひやられた。

一年前に加へられた侮辱、今日の罪悪の動機となつた其侮辱と、今の悲しい立場とを思ひ較べた時、文子は今迄踏來つた道の、實に〳〵誤つた事を知つて、意地も虚榮も消え果てた淋しい目から、熱い涙が漣々と流れた。

自分は全く行ふべからざる事を行つてゐたのである。如何に我慢の智慧を絞つても、それ以上の同情ある批評は加へられなかつた。

＊　＊　＊　＊

文子は實家へ引取られて、惱の一段落はついたのであるが、事件は是のみで終らなかつた。血統の絲と、罪の絲と、其二筋は牧村と眞壁の間を繫いで、秋は日に〳〵深くなつた

會議（一）

つい此頃までは、稚子の笑ふも泣くも賑やかに、生命の泉は此處にのみ湧くかと思はれた其二階か、今は何の室もガランとして、燕の去つた後の軒に、初秋の風か淋しく渡るのみ。

欣一は書齋に閉ぢ籠つて何を爲るともつかず發然と考へてゐた。他氣無い、腹が立つ、情無い其心の底には、錐で刺すやうな痛苦が絶えないのだ。良人として賴まれ效の無い、優柔不斷な、卑怯な、自分の所業について、彼は睡ても覺めても如斯責苦から脱する事が能きぬのである。

何うか爲たい。助けられるものならば、何うにかして助けてやりたい。と思ふ中に、次第に手許から離れて、文子は黑い浪の渦に捲込まれて了つた。

「それは、俺の所爲ぢやない。」と、欣一は捨鉢になつて呟いたが、例の卑怯な、臆病な心から、何でもない母の怒りを恐れて、肝心の場合に突放した其情無さが氣に咎めた。

「もう少し本氣に庇護つてやつたら、斯樣事にもならなかつたらうけれども、併し、今では……もう駄目だ。」

彼は自分の外に人氣も無い四邊を見廻して、又しても本意無い嘆息を吐いた。

階下の座敷では聞馴れぬ話聲が絶間無く續いてゐる。又何か新しい日が發覺れにでも來たか、と思ふと、それも膽に徹へるのであつた。

少時すると、大儀さうに階段を昇る跫音がして、やがて母親の庸子が入つて來た。

「此處に居たのかい？」と、立つたまゝで「お前さんも階下へ來てくれなけりや困るよ。」

「何か用でも有るのですか？」

「有るのですかぢやないよ。今日は例の話を極めなけりやならないのです、追つけ眞壁が來るといふから……」

欣一は今更愕然とした。

「成程、然うでしたね、併し來てどうするか？」

「來なければ先方が惡いのだから」と、庸子は立疲勞れて、其處へ坐り「其時は是非が無いやね、けれど、先方だつて其程馬鹿でもなからうから、大抵やつて來るだらうと思ひます。それに就いては、野島の叔父さんも、鳥尾の源さんも、呉林さんも最早來てゐるのだよ。」

「え？」と、欣一は目を丸くして「那樣人達が何うして來たんです。呉林は左に右だけれど、他の親類は何も列る必要がないぢやありませんか、偶然落合つたのならば、今日は少し取込があると言つて歸したが可いでせう」

「那樣事か……お前、此方から態々呼んだのだよ。」

「何故ですか？」

「だつて、斯ういふ話の席だもの、親類の一人や二人立會つて貰はなければ、此方だつて心細いぢやありませんか。」

「馬鹿な」

「否、それにね、眞壁が彼樣小難しい人だから、何を言ひ出すか知れやしやしない。萬一事

が面倒になつた時、此方がお前一人に、あとは女ばかりぢや應待に骨が折れます。」

「然う何も……第一、内輪の恥辱を那樣公然に爲るのは間違つてゐますよ

「内輪で濟むと思つてゐるのはお前ばかり。世間では皆知つてゐます、今更祕したつて無駄な事さ。」と、庸子は嘲笑つたが「何にしても、態々來て貰つた人達に今更歸つてくれとは言へません。何方にしろ今日の事は妾の計らひだから、お前は唯席へ出て呉れゝば可いのだよ。」

欣一は可厭な顏をしたが、然りとて拒む譯にも行かぬので、澁々母と共に二階を降りた。

座敷へ出ると、今迄コソ〳〵話合つてゐた人々は、急に改まつて欣一の顏を見た。其笑止らしい樣子が、欣一の方では何より辛かつた。

誰も一通の挨拶はしたが、今度の事については一語も言はなんだ。併し欣一は主人として、何時までも默つては居られなかつたので、

「今日は又、御迷惑な事で……」と言つた。

人々は顏を見合せて、何日取とまりのない返辭をする

其うちに、母親の庸子と、足の惡い今子とが打連れて席に列つた。事を好む目色と、苦々しい目配りと、面白さうなのと、不安なのと、人々の視線は忙しく入亂れた。

其時、執次の女中が此も物々しい顏つきで入口に手をつかへ、

「眞壁の旦那樣がおいでになりました。」

驚破とばかり一同が容を改める 庸子は頷いて、

「此處へお通しなさい。」

誰も固唾を飮んで、窮屈さうに身動きばかりした。

やがて再び襖が啓いて、案内の女中が身を退くと入違ひに、俊彥の姿は閾際に現れたが、見馴れぬ人が居流れた座敷の有樣に聊か驚いて、一息其處に躊躇つた。

「おや、能うこそ！」と、庸子は身を起し「さあ、何うぞ是へおいで下さいまし。」

俊彥は輕く會釋して聽しも爲ず進入つたけれど、設けの席へは行かず、端近い處へ坐らうとする。

「それでは可けませんよ。何うぞ此方へ……」

「否、お構ひ下さるな 今日のお席は平常と違ひます 那樣嵩がましい事は致しかねる」

一通人々を見渡して、俊彥は恭しく頭を下げたが、其拍子に前を見ると、故意か偶然かそれは知らず、證據とも思はるゝ寫眞が三つ四つ、其處に麗々と取散されてあつた。

會議（二）

其忌はしい物を見た目で、俊彥はそと逸らしつゝ、萎えた袴の襠を搔探つた

誰も彼も有繫に笑止な面色で雅形式的な挨拶が交される 其うちに一順茶が出ると、庸子は女中を呼び、

「用が有つたら手を鳴らすから それまでは誰も來ないやうにしておくれ。」

女中は了承して引退つた。

人々の氣色は急に改まつて、際立つた咳拂が二つ三つ寂寞を破つた

落着の無い空模樣で、朝から吹出した風の次第に激しく、一息休んでは又ドッと庭木や障子を鳴らすと、雲の動きに隨ひ日影の、薄く濃く緣先に落ちた

「惡い天氣ぢやありませんか。」と、児林が鳥尾といふ若者に囁いた。

其途端に、違棚の置時計が二時を打つ

庸子は俊彥の方に膝を押向け、

「さて、眞壁さん 此度は思ひがけない事で、貴方にも飛んだ御心配をかけました」

「いや、

「委細は先日呉林さんから申上げましたが、猶本人からもお聽取下さいましてせうね。」

「如何にも、聽取りました。」と、俊彦は沈んだ語調で答へた。

「それで。」と、庸子は疊みかけて「手前共では萬事呉林さんを經てお話を致したい考へで居りましたところが、達て直接にとのお請求でございますので、何うせ其樣な表立つた御相談をする位なら、迚もの事に近い親類にも立會つて貰つた方が將來の爲にも可しからうと存じましてね。斯樣に皆樣にも御同席を願つたのでございます。」

「成程……」と、俊彦は改めて一座を見渡したのみ、頓には物も言はなんだ。

「呉林さん！」と、庸子は少し後へ退つて「是から先は何うぞ貴方から。」

呉林は是非無く入代つて、

「眞壁さん、御本人をお糺しになつた結果は何うでした。或は然るべき御辯解の辭がありましたか？」

傍で聞いてゐる欣一は次第に不安を感じて來た。若しや文子が、苦しさの餘り、自分に對して責任を負はせるやうな事を言はなかつたらうか、然うであつたら、此處分は……と懸念の樣子は傍からもあり／＼讀めた。

「一言もございません。」と、俊彦は謹んで「彼女は總て自己の罪であつた事を自白致しました。隨つて彼女の罪は俺の不面目、此上は親たる俺から謝罪をするの外はございません。」

彼は兩手を突いて、

「欣一さん、御隱居、竝びに御親類一統の前に、此通りお詫を致します。」

人々は有繋に俯いた。

「御當家の名譽を傷つけた娘は、實に赦し難い奴ではありますが、何事も此老父に免じ、寛大のお取計らひが願はしい。」

誰も答へる者のないうちに、庸子と今子は意外な目を見合せた。二人は眞壁から直接の會見を求めて來たについては、何か相應の理窟が有つて、次第によると逆捩をくふのではないかと案じてゐたのだ。

親類の誰彼を呼寄せたのも、種々の證據を披露したのも、皆其豫防に外ならぬのであるが、斯う手輕く下から出られてみると、大袈裟な陣立が何となく後めたくもあり、又力負をした感も有つた。が、眞壁の弱音もつまりは此方の威勢に吞まれた結果かと思ふと、此處ぞとばかり庸子は透さず第二の善後策を考へてゐた。

呉林は宛も安心したらしく頷いて、

「いや、それがお解りになつた以上は、此方でも最早追窮なさるには及ぶまいと存じます。」と、欣一を見て「然うではございませんか。」

「其通りです。」と、欣一もすゞしく答へる。

「其他の事は何れお打合せをしますが、今日の處は……」

少しも疾く切上げようとするのを、庸子は慌てて遮つた。

「一寸お待ち下さいまし。唯今のお話は眞の表面の御挨拶。其御挨拶にはもう少し規模が立たなければ可けますまい。」

「規模とは？」

「唯、惡かつたから謝罪るとだけでは、餘り無責……」と、詰つて今子の方を見た。

「無責任ですか。」と、今子が教へる

「然う／＼、其無責任だらうと存じます。」

「けれども、それは何も今御座にお話を爲ませんでも」と、呉林は苦い顏をした。

庸子は躍起となつて、

「呉林さん、貴方の御意見に逆ふのは失禮に當りますが、折角斯うやつて親類が立會つてゐるのに、唯口頭ばかりの謝罪で此まゝに濟ますのは些と筋が違つてゐるやうに思はれますね。」

呉林はムッとしたらしく、

「すると、金の事でも？」

「はい、それが當然でせう。跡始末といふのに、詭言ばかりで何の役に立ちますか。眞壁さんも態々是までお出向下すつたのですもの、其位の覺悟はお有んなさるだらうと考へますがね。」

「それにしても……」と、呉林は主人の欣一を見た。

欣一は衝動的に頭を搖つて、

「お母さん、左も右も、斷う話が解つたのだから、是で可いぢやありませんか。他の問題は呉林さんも仲に入つて下さるのだから、何うとも。」

「其何うとも……を何うとか極めた爲に、斷うしてお集りを願つたのぢやないか。呉林さんにお願ひをして埒が明くのなら、皆に足を運ばせていたゞく――お埒は明きませんよ。此方でいくら穩便にと思つても、眞壁さんの方で同意なさらないのだもの。折角皆さんもお忙しい處を繰合せて來て下すつたのに、他人の親が罷出て、誠に相濟みません、後の話は追て何とか致します……と、ばかりで、直にお歸し申せるかえ？」

「だつて、其外には。」

「御迷惑でもあらうが、其處が親戚の誼で、いざといふ時には言も添へてお貰ひ申さうと思へばこそ、集合をしていたゞいたのです。だから今も言つた通り、それだけの規模を立ててお貰ひ申さうぢやないか。呉林さんだつても、其方がお手數が省けるし、此方も再々可厭な話を聞かないで濟みます。ねえ、眞壁さん、然うぢやございませんか？」

呉林はあらずもがなといふ面色。欣一は唯俯き、他の人々は何れも氣の毒らしい目を見合せる。

其中に俊彦は一人深く頷いた。

「御尤もです。呉林さん！　俺も御隱居と御同說ぢや。」

「貴方も？」

「但し、俺が直接にお話を爲ようと申出でたのは、欣一さんへなり、又御隱居へなり、内々お話も能きたらば、總てが穩便に濟まうと考へたからであつた。決して貴方を疎外して、御一統の前に斯うして恥を曝さうとは思ひませなんだ。」

「併し……」

といふ隱居の言を俊彦は徐に遮つた。

「それも得手勝手で、考へれば此方が公明正大でした。唯今も金の事についてお話が有つたが、如何にも跡始末は其辨償の一點に歸着する。」

欣一は忸怩して、

「ですが、然うなると非常に不本意な事です。私は那樣。」

俊彦は憐むやうに其方を見て、

「欣一さん、貴方は然うでも有らうが、世間はなかなか難しい。因で彼女が費消しました金の全部は當然本人の親たる俺が償ひます。」

呉林は吃驚して、

「貴方が？」

「然樣！」と、見返して「それが能きぬと思召すかな？」

「否、」と、呉林は赤面した。

嗣子は横合から、

「而して、何ういふ方法でお償ひなさるのでせうな？」

「甚だお恥かしい次第ではありますが、即刻とは參りかねる。願はくは都合の能きますまで、當分お待ち下さるやうに。」

彼は少時躊躇したが、思切つて懷中から其日の新聞を取出し、

「呉林さん。證據として貴方にまで差上げて置く。其廣告欄を御覽下されば解る。」

呉林は手に取つて見たが、

「……賣耶。」

「賣？」

欣一は狼狽しながら、

「實際不本意です。私はそれを望みません。誰が何と言つても、それまでにしていたゞく必要は無いのです。」

「けれど、然うするのが當然だものね。」と、庸子は囁いた。

「何も二千や三千の金で、家が潰れるといふではなし、私だつて少し道樂を爲れば、其位な金は使ひます。罪は罪で責めるとしても、然ういふ事は望まないです。」

「否、金で罪の消えるものではない。」と、俊彦は沈んだ聲で「是だけの事で、彼女の罪を赦していたゞく事が能きたら、俺は寧ろ心安く思ひます。」

「そこは父今迄の義理も有るのですから。」と、庸子は微笑んで「此上左や右申すには當りません。何有貴方、丁と廉が立ちましたら、それで最早可しいので。」

誰も何とも言はなかつた。

先刻から痺を切らして、散々可厭な思ひを爲せられた親類達は、これを機會にこそ〳〵と歸つて行つた。殘るのは家族と俊彦と、何うで惡い役を背負つて立つた呉林ばかり。

人が少くなると庸子も有繫に居辛くなつたか、傍に居た今子を顧みて

「お前は御免蒙つて休んだら可いでせう。」

「えゝ。」と、今子は溜息と一緒に答へた。

「呉林さん、何もございませんか、唯今お茶でも差上げたいから、御ゆるり爲すつて下さいましよ。」

庸子は起居の不自由な娘を扶けながら、徐に奥へ立去つた。

老夫婦

廣い座敷に居殘つた三人は、淋しい面を見合せたが、呉林は慧くも俊彦の氣ぶりを察して、

「欣一さん、私は一寸御隱居に内談が有るから、少時中座を致します。」

「え？」と、欣一は當惑の體で「併し、お急ぎなんですか？」

「今のうちお打合せをして置かないと、面倒です。何有、直に片附けて來ますから。」と、俊彦の方を見て、「甚だ失禮ですが、右やうの次第で、御迷惑ながら、私の戻るまでお待ちを願ひ度い。又欣一さんとも何かの御相談が有りませう……其間に。」

俊彦は感謝の目を向けて、

「あゝ、種々と……御恩は忘却しません。」

「いや〳〵、那樣事は何うでも……欣一さん、可しく願ひますよ。」

彼は庸子の來るのを防ぐべく、故意と怱忙奥へ去つた。

「さて、欣一さん。」と、俊彦は席を進めて「貴方には此老爺が何とも申上ぐる辭はない。斯樣な事でお腹は癒えぬだらうが、稚い者に免じて、母の罪は耐へていたゞきたい。俺は敢て赦していたゞかうとは言はん。貴方の名を汚し、良人の前に詐欺を働いた彼女を赦してくれと願ふ勇氣は持ちません。」

「然う仰有ると、私も實に困ります。」と、欣一は悄々して「決して、いゝえ、別に……斯樣騷ぎを爲る程の事ではなかつたのですけれど、唯其。」

「否、罪は罪、情は情、身を修め家を齊ふるには、斯う爲さらねばならぬのだ。涙を揮つて馬稷を斬る。此御處分を、俺は當家の爲に極めて結構な事と信じます。」

「何うも、誠に。」と、欣一は唯汗を拭いた。

「唯、此老爺が願つて置きたいのは今後の事です。何れ時機を見て、呉林氏へも申出ようと思つて居つたが、幸ひの折ですから、直接にお縋りして置く。」

「はい。」

「元より、償却をしたから、それを功にといふ意味ではないが、他日然るべき時節も來たら、彼女が……此家へ戻れるやうに御配慮が願へんでせうか？」

「其事は……」

「尤も。」と、苦しげに「近きうちとは申さん。又俺の口から、彼樣者を貴方の妻にして下さいとも言ひかねる。たゞ能きる事なら、武夫の爲に、乳母としてでもお手許に置いてやつていただきたいと。」

「……………」

「未だ事實に於て埒も明けぬのに、謝罪をいふ口の下から斯樣お願を爲るのは、厚顏な奴と思はるゝか知らんが、先が短いだけに、短氣は老人の常と御勘辨なさつて、單に承諾の御返辭を與へて下さらぬか？」

「それは、申すまでもありません。」と、欣一は聲を顫はし「實は私からもお願申さうと思つて居つたのです。先刻もお聽の通り、斯ういふ騒ぎに爲たのは、決して私の本意ぢやありません。辨償なぞと、那樣事は斷じて不同意なんですけれど、其處には又いろ／＼事情もありまして、思ひがけない……それも何れ委しく申上げる時が有らうと思ひます。何しろ、其話は誓つて思召に愜ふやうに致します。假令誰が何と言はうと、私が然う爲なければ承知しません。」

「貴方が？　お誓ひ下さるか？」

「はい。」

「いつかは故に戻してやると！」

「必ず、然うします。武夫が私の子なら、文は武夫の母でなければなりません。」

俊彦の眼からは、熱い涙がハラ／＼と落ちた。

「有難う。別けてもお禮は申さぬが、老人は滿足しました。それに辛苦の效も有る」

「けれど、是程までに御心配をかけて、家邸まで取りあげるといふのは、實に心苦しい限りです。」

「何有、子の爲に捨てて可い體なら、命に替へてもと思ふ位です。家や地面は、容易い事ですよ。」

と、言ふ時、呉林は高い咳拂をして入つて來た。

「やあ、お待たせ申しました。」と、坐つて「眞壁さん、何事もお察しします。但し先日も申した通り、將來の事は、欣一さんとも能く御相談して、能きるだけは盡しますから。」

「可しくお頼み申します。」と、俊彦に嘆息して「何もお笑ひの種だらう、老いたる牛が犢を舐る。欣一さん、貴方には將來斯樣思ひを爲せたくない。」

* * *

「まあ／＼、然う煩悩しても爲やうがない。」と、禮子は娘の顏を見て「阿父樣の前で那樣事をいふと叱られるけれど、何も過ぎた事だもの。」

「えゝ。」と、言つたばかり、文子は何となく遠い方を眺めた。

「是で可いといふ譯ではないが、餘り思過して病氣にでもなると猶の事困りますよ。心を入替へたら、一生懸命に今迄の過失を取返すやうにして下さい。」

「えゝ。」

「今日のお話で何う極まるか知れないけれど、阿父樣が自身に出向なすつたのだし、それに呉林さんも彼樣に心配して下さるから、まあ何

うにか圓く治るだらうと思ひます。」

「然らねえ。」と、文子は半夢心地で「妾、何うなつても構はない。」

「那樣事を！」

「妾は我まゝをしたかも知れませんが、斯樣事を爲れるまで惡い事を爲なかつた意です。」

「文さん、後生だからそれを言はないでおくれ。いくらお前が辯解をしても、世間に味方はありはしない。少しでもお前に同情を寄せるのは、阿父樣と妾だけですよ。」

「それは妾だつて感じて居ます。御兩親の慈愛は能く知つて居ます　だけど、それだつて妾の心を眞實に汲んで下さるでせうか？」

「お前さんは、まあ！」と、禮子は呆れ顔で「那樣事をいふと罰が中りますよ。あれ以來、阿父樣は甚麼に心配しておいでなさるか。妾は傍で見てゐてもお氣の毒でなりません。」

「其事は知つてゐます。」

「子供といつてもお前一人ぢやなし、況して女ばかり多い處へ、壽子を初め三人の者は皆知つての通りの有樣だから、せめてお前だけはと平常から其ればかり言暮していらしつたが、それが又斯樣事になつて了つたのだものね。」

「……………」

「恩に着せる譯ではないが、三人の姉について是程力を入れなすつた事はありませんでしたよ。妾は今度の始末を見るにつけ、他の者に申譯が無いやうな氣もします。」

ポツリ／＼と話をしてゐる中に、淋しい秋の今日もまた風に吹かれて暮れかゝる。

「最早お歸りになる頃だわね。」と文子は立ちかかつて「母樣、お歸りになつたら能くお禮を申上げて下さいまし。」

力無い足を踏締めて、文子は茶の間を立出でたが、緣傳ひに今迄六一郎の居た部屋へ入ると、微暗い其机の前に坐つて、暗い涙をほろ／＼と落した。

父母の心を思ひ遣れば、彼女は身を斬られるよりも辛かつた。けれど斯らして一人になつて、沁々絞る涙は、仍且自分の爲のそれであつた。

五時少し過ぎた頃、俊彦は歸つて來た。氣遣はしげに出迎へる禮子と共に、彼は無言で奧へ入つたが、袴も脫がず其處へ坐り、

「茶を吳れぬか。」

「はい。」と、禮子は急いで其支度をする。

「文は何うしてゐるか？」

「あの、離室に居りますが、呼んで參りませうか？」

「否、それには及ばん、お前から言うてやりなさい。」

「はい。」と、恐る／＼「今日のお話は如何でございました？」

「罪は赦して貰つたよ。」

「而して、彼女の體は以前通りになれますのでせうか？」

「何？」と、目に稜立てて「お前は未だ那樣夢を見て居るのか？」

「でも、先方で赦してくれましたからには……」

「其處までは未だ距離がある。」と、首を揮つたが「併し、他の者は左も有れ、欣一は其位の人情を汲んでくれるだらう、俺は彼の人を信じて、心私に樂しんで居る意だ。」

「然樣でございますか。」と、禮子は曖昧のうちに頷いた。

俊彦は快く茶を啜つた後、偶と思出したやうに、

「それよりも先に話して置くが、此家は賣拂ふ事に爲たからな。」

「えゝ？」と、喫驚して「何故でございます。」

「然うしなければ埒が明かぬのだ。お前には語らなんだが、昨日然ういふ手續にして置いた。」

尤も急に賣れるか何うか、買手の有無は解らんが、今にも相談に來る者が有つたら、話次第で至急明渡さねばならぬ。其用意をして置きなさいよ。」

其使途は聞かずとも解つたけれど、禮子は落膽して返辭も能きなかつた。

「心配するな。住むべき家は何處にも有るが、幾人有つても子の掛替は無いぞ。」

「はい。」と、禮子は泣伏した。

移轉

門前には縱横に轍の跡が亂れて、繩の斷屑や壞れた紙箱が、溝の岸に散ばつてゐた。

停車場の方から大急ぎで歸つて來た六一郎は明放した門を入り、洞穴のやうにガランとしてゐる玄關を横に見て、其まゝ勝手口の方へ廻つた。

過日の嵐の時假に繕つて置いた古い垣が、不思議な蟠紆をなしたまゝ未だ危く踏止つてゐる下に、根分に餘つた菊が一側、貧弱な姿で日の當る方へ枝を伸べてゐた。蹄鐵を打つけた物干柱が二本、折から雲の往來も亂れた空にニョッキリと立つたが、竹竿は三本とも外して、一つに絡げられたので、それも手持無沙汰に淋しい風に吹曝されるのであつた。

六一郎は喘々息を切つて覗込み、

「母樣、母樣！」

其聲が底拔けの奧へ響くと、塵埃防けの手拭を冠つて、襷がけした禮子が、茶の間の方から現れた。

「おや、お前さん歸つて來たの？」

「えゝ、一寸。」と、上框へ腰をかけて「大急ぎで來たら汗を搔いた。それは然うと荷車は何時頃此方を出ました？」

「然うさ。」と、禮子は奧を振向いて「彼是十分位前だらうよ。ねえ、芳！」

母と同じ扮裝をした芳子は打捨つても可い瓦礫多を持つて出て來た。

「もう少し前でせうよ。六さん、お前は途中で逢はなかつたの？」

「僕は電車で來ました。」と、六一郎は足をバタバタさせ「では可いけれど、お父樣が餘り遲いから行つて樣子を見て來いといふんでね。」

「而して、彼方は少しは片附いたかい？」と、芳子は立つたまゝで訊いた。

「何うして！　片附くどころか、もう大概可からうと思つてゐると、又、時にドゥンと荷が來るので、其度に何うしたら可いか解らなくなつて了ひますよ。」

「然うだらうね。」と、禮子は微笑んで「何物も道具は無いやうでも、斯うやつて見ると容易でない　お父樣は何うして被在るね。」

「元氣旺盛です。年を取つても仍且力は有るですから、其處へ行くと僕等よりか偉いな。到底敵はない。」と、六一郎は落着かぬ樣に外へ飛出して空を見上げ「大丈夫だらうな。雨が降ると閉口だが。」

塵埃溜の方から歸つて來た芳子も共に仰見て、

「心配しなくつても可いわ。六さん、それから村越の姉さんは？」

「働いてゐますよ。一生懸命で！」と、彼は片附いた跡の有樣が珍しいやうな氣がして、庭の方へ入つて行つた。

芳子は水口を入ると、母親は勝手の棚から塵挨だらけの物をおろしてゐた。

「母樣、少とお休みなさいよ。六さんが來たから、お八ツでも食べようぢやありませんか。」

芳子は忽々と奧へ行つたが、少時すると、

「さあ、お茶が入りましたよ。」

禮子は未だ茫然と、元氣のない働きを續けてゐる。

「いらつしやいな。」と、芳子は焦れて一今荷車

が出たばかりだから、然う慌てないだつて可ござんす。」
「それも然うだね。」
「今のうちに少し骨休めをして置かないと可けませんよ。那様にダラ〳〵用を爲たつて、却つて無駄骨折ですわ。」
禮子は默つて手を洗つた。

* * * * *

今度の事が起つて以來、禮子は急に氣が挫けて、心の彈機の力が弛んだやうになつて了つた。烈しい打撃を受けた後には、誰しも一時斯ういふ狀態になるので、有繋に强氣な俊彥といへども、内々は然うした傾きの無いではなかつた。けれど誰も一樣に諦めて元氣を恢復した中に、禮子だけは依然として其第一の打撃から起上る事が能きなかつた。
諦めがそれぎりになつて、彼女は落膽の重量の爲に次第々々に暗い穴へ辷込んだ。以前は何事も一手に取りしきつて、些細な用にまで他手を借りるのを好まなかつたのが、今では或處まで芳子に任せて置くやうになつた。骨折るわりに仕事が捗取らず、而して仕事を爲ない時は茫然と考へてばかりゐる。
それと反對に、芳子は此頃急に生返つたやうになつた。彼女も實家へ出戻りの悲しい身の上で、我身一つの苦い經驗は疾うに味つてゐたのだが、姉の禮子程堅實でなく、妹の文子程華々しくない氣性だから、忘れるともつかず、諦めるともつかず、長い間に自然と現在の境遇に馴れて、大した悲しみも不滿も有たぬやうになつて了つた。けれど唯一つ、文子が牧村に嫁いた後、姉としての喜びも有る中に、文子が何時も何時も其榮耀を見せつけて、同胞中の幸福を一人で占めたやうな勢を示すにつれ、芳子の意氣は不思議に沈んだ。
彼女は文子を見る度に、一番喋々しく待遇つた。無邪氣な心をもつて其立身を羨んだ。或時は姉の權威を捨てて其機嫌取をするやうな事までした。けれども、妹が四邊を拂つて歸つて了ふと、芳子は非常に沈鬱に陷つて、父や母が其噂を爲るのさへ聞くに堪へぬ程であつた
「文さんは幸運者だこと。」と呟く時、心の底の悲しい響は自と口から外に洩れた。
其消息を禮子ばかりは知つてゐた。不幸な子程可愛い親心は、別けても一人下積になつた此芳子の身の上を憫んで、人知れず泣いてやる事も度々あつた。
か、其狀態は俄に一變して、禮子か淋しい心持になると、芳子の方は人が變つた程活氣づいた。斯うした打沈んだ家庭には、誰か一人は父母を慰め、傾く運を支ふべく、主となつて働く者がなければならぬと、其邊の賴もしい奮發もあるのだが、も少し深く彼女の心の奥へ入ると、それは文子の失脚を見るにつけ、彼女は何となく自分でも生きてゐる張合が出たからである。
同病相憫れむのは無論の事だが、自分と同じ境遇の者が一人でも殖えるだけ、其處に我に對する滿足が起るのだ。

* * * * *

「さあ六さんも此處へおいでよ。」
「えゝ。」と、庭に立つてゐた六十郎は緣側へ腰を掛けた。
芳子は番茶土瓶に湯を注しながら、
「お前さんもお腹が空いたらう？」
「空きましたね。ペコ〳〵だ。」と、身を捻つて遠くから煎餅を二三枚引摑み、「併し、燈火の點かない中には皆先方へ移れるでせうね。」
「何うしても然うしなけりや困るわ。夜になるとそれこそ面倒です。ねえ、母樣。」
「然うとも。」と、禮子は茫然坐つて、脫殼のやうな家の内を當も無く眺めてゐる。

「お茶が冷えますよ。」

「あゝ。」

六一郎は火盆の方に手を出したが、次手に母の様子を見上げて、

「母さん、餘り草臥れたら僕が此方を手つだひませうか？」

「何有、それにも及びません。」

芳子は遮つて、

「其方が可いかも知れない。彼方も大變でせうが、それでも三人なら、手が多いから然う爲さいよ、母様！」

「だがね。」と、禮子は目を伏せて「妾は仍且此方が可い。……妾は此家に成るべく長く居たいよ。」

芳子は弟と顏を見合せたが、

「でも、夕方になれば何うしたつて見捨てなけりやなりませんよ。二時間や三時間、早いも遲いも同じぢやありませんか。」

「それにしても、居られるだけはねえ。」と、禮子は嘆息を吐いて「あゝ、滿らない。」

「此様事を考へるから可けないのですよ。何も運です。最早考へない方が可うございますわ。」

「此家は……」と、禮子は又見廻して「此家はね、お父様が戰にいらしつて、其時御褒美に戴いたお金で買つたのです。お國の爲に命がけの働きを爲すつた其お記念の家ですよ。此家にはお父様の六十餘年の命が打込んである。生涯のお仕事が宿つてゐる。」

芳子も、六一郎も、その話は度々聽かされてゐたのだが、此場合には別けても身に沁みて、唯同じやうに溜息をした。

「あゝ、此處も退かなければならないかねえ。」と、禮子は忽ち涙に咽んで「何う思つても妾は辛い。お父様も、妾も、此家より外に居る處は無いのだもの。」

「何有、然う心細がる事は有りません。」と、六一郎は強ひて平氣を粧つて「いまに僕が成功したらきつと取返して見せますよ。其時は又買戻すんです。」

禮子はそれも耳に入らず、

「あゝ、父が彼様な事さへ爲てくれなかつたらねえ。妾は眞實に情無い。」

「然う言つたつて今更取返しがつきませんよ。」と、芳子は叱るやうに「それが愚痴といふものです。」

「まつたくだ。」と、六一郎は庭の方を見たまゝで「姉さんだつて病氣になる位弱つてゐるんだから、然う責めちや可哀さうですよ。村越の姉さんが然う言つてましたよ、今日移轉すんだと言つたら、非常に其事を氣にして熱が出たつて……」

「父か……」

「だからお父さんにも、其事は餘り言はないやうにと、村越の姉さんが賴んでゐましたよ。」

禮子は唯頷いた。

「それは、父さんにして見れば其位の事は當然さ。」と、芳子は母に向つて「だけど牧村の方もいまに元の鞘に納まるさうですから、然うしたら、まさか家の方が斯うなつたのを默つて見てもゐますまいよ。きつと牧村で何うかしてくれます。」

「けれどもね。」と、禮子は仍且元氣の無い聲で「お父さんか彼の通りの御氣性だから、先方で然うすると言つても、決して承知を爲さらないに極つてゐます。」

「何方にしたつて可いや。」と、六一郎は立上つて「斯様家は打捨つても、僕は新規にもつと立派な家を拵へるから。」

「お前がたは惜しくもないのかね？」

「惜しいには極つてますわ。」と、芳子は手拭を冠直した。

「僕は家よりも、裏の柿に別れるのが殘念だ。もう少し赤くなつてゐたら、皆喰つて了ふんだがなあ。」

禮子は悲しい思ひを耐へつゝ、膝に手を當てて辛と立つた。

＊　＊　＊　＊

五時頃には九分通り片附いたので、殘る一返りの荷車と共に、俊彦は代々木の新宅から歩いてやつて來たが、玄關を入ると大聲で、

「何うかな？　大分遲くなつたぞ。」

薄暗い臺所で最後の風呂敷包を拵へてゐた二女はひとしく其方を振向いた。上張の衣服も脱ぎ、襷も外し、もう出るばかりの身支度で、芳子は

「おや、態々いらしつたのですか。」と、言つた。

「うむ、跡の掃除が氣になつたからな。秋の日は早い。代々木を出た時は未だ明るかつたが、最早これ足許も危くなつた。」

「漸く悉皆出して了ひましたから、後は植木鉢に糠味噌樽位ですのよ。」

「然うか。」と、頷いて「お前達も嘸疲勞れたらう。戸締りが濟んだら、直に電車で行くが可いぞ。」

「お父樣は？」

「俺か……俺も一緒に行かう。」

俊彦は弓張提灯を下に置いて、燐寸を擦りつけながら、

「待て〳〵、いよ〳〵開城となれば、印の提灯も必要だ。」

裏手では車夫が重い物を持出すらしい。

「お前がたは雨戸を締めろよ。」と、俊彦は靜かに座敷の方へ行つた。

流槽の許の蟋蟀も今日は殊更淋しげに、門前を行く按摩の笛が、空家の中に澄みとほる。

座敷から離室と間毎を見廻つて俊彦も、雨戸の音に胸を鎖し、居馴れた居間の前に悄然として佇んだ

机の跡の窪みに、襖の引手の手擦に、長い生活は固着いてゐるけれど、火の氣も絶えた家のうちは、壁も天井も秋寒く、持つ手も冷える提灯の淡い影さへ悲しかつた

其處を去つて茶の間に入ると、思ひも寄らぬ人の立姿に、彼は少し弓張を上げたが、

「あゝ、お前か……」

禮子は默つて會釋した。

「斯樣暗い中で何をして居る？　忘れ物でもあるのか？」

「いゝえ。」

俊彦は隅々を見廻して、

「うむ、是で可い。道具が無くなると、廣々して誠に氣持の好いものだ。併しそれだけに又家の古びも目に立つな。」

「然樣でございます。」

「さて、是で殘らず見廻りも濟んだから、外へ出るとしよう。」

と、行きかける時、

「一寸！　貴方……」

俊彦は振向いた。

「是が見納めでございますね。」

「然うだ。」

「今までの事は全然夢になつて了ひます。」

「うむ、悪い夢であつたよ。」と、輕く外して「今度の家は非常に住心が可いぞ。お前は空家のうちに見たのみだから、然程にも思ふまいかな、諸道具を入れると小ぢんまりして誠に愉快だ。彼の家で今夜から新しい夢を見たら、嘸氣も慰む事だらうと思ふよ。疾く來なさい。」

「貴方！」と、禮子は良人の袂に縋り「行きたくはございません。妾は何うあつても……」

「これ。」と、低い聲に力を籠めて「何故お前は然う解らんのか。」

「はい、未練でございます。けれど、たゞ貴方にお氣の毒で、彼樣事さへ無かつたらと思ひます。」
「馬鹿な事を言ふぢやないぞ。此古家の一つと我子の愛と替へられるか。」
「それでも、此家は兩人の死場所でございますものね。」
「男兒は當に邊野に死し、馬革を以て屍を裹むべし。俺は我家で死にたくないのぢや。」
戸外で芳子の呼立てる聲がする。
「さあ〳〵、見苦しい眞似をして笑はれてはならん。」
「はい。」
「俺に引添うて來ぬと危いぞ。」
暗い廊下をトボ〳〵と、老夫婦はやがて玄關へ立出づれば、其處にゐた芳子が、
「何う爲すつたの？　先刻から待ちくたびれてゐるのですよ。」
「然うか。」と、俊彦は提灯を渡して「お前は先に立つて、母樣の足許に氣をつけてやれ。」

新宅

不用と思はれる品は、大概賣拂つては來たけれど、それでも未だ寄條、諸道具の、何うか斯うか納まる處へ納まり、家内の寢起は落着くやうになつて、外廻りも整然と片附いたのは、其れから半月程後である。
　取込の際ではあるし、一つは本人の心を察して、村越の家へ預けられた文子の病氣も、一日一日に快方に向つたと報せて來た。
　張立の障子に今年の秋の日覺しく、安普請の建附けが新しい中にはや乾反り出した隙間からは、朝夕の風が肌に寒く、肱掛窓の裏の明地には終日新築の物音がする。
　禮子は此處へ來た後、最早以前の如く取亂しはしなかつたが、それでも烈しい病みあがりのやうに、戸外へ出ても、内にゐても、唯うつらうつらと考へ事ばかりしてゐた。
　今日は芳子が村越へ見舞に行つたので、彼女は所在無さに縁側の日向へ出て足袋の繕をしてゐる處へ、不意に裏口から壽子が入つて來た。
「今日は！」
　禮子は振向いて驚き顏に、
「おや、誰かと思つたら……今しがた芳が見舞に行つたが、逢はなかつたかえ？」
「えゝ。」と、壽子は何となく浮かぬ面色で其處へ坐つた。
「では、行違ひになつたのかしら。」
「妾は朝から家を出ましたからね。」
　何やらソハ〳〵と、
「お父樣は？」
「被在るよ。」
「然う？」と、又考込んで默つて了ふ。
「何か用事かえ。」
「少し……」
　禮子もそれが氣にかゝるやうに、熟と相手を見詰めながら、
「では、直にお室へおいでなさい。」
「ですが、母樣から申上げて下さいな。」
「何故、自身で行つたら猶可いぢやないか。」
「けれどねえ。」と、躊躇して「左に右、然う申上げて下さいよ。」
「可怪しな人だね。」と、禮子は微笑みつゝ、居間と言つても座敷を兼ねた、隣室の六疊の襖を啓け、「貴方！」
　机に凭れて書を讀んでゐた俊彦が、肩越しに其方を見返つた。
「あの、壽が參りました。」
「然うらしいな。」
「何か、用が有りますさうで。」
「構はず入つたが可いではないか、今日は又大層愼重だな。此方へ入れと言ひなさい。」

「然う申したのですけれど。」と、禮子も笑つて振返り「さあ此方へおいでなさい。」
壽子は座敷に蹈入つた。
「これ、蒲團を持つて來てやりなさい。」
「いゝえ、それには及びませんの。」
「併し、太く改まつてゐるからな。紋附などを着て……何うしたのか？」
「寄道をして參りましたので。」と、壽子は膝に重ねた兩手を見詰めたまゝ「其話が有りますから、宅へも歸らず直に此方へ廻つて來ましたの。」
「ほう。」と、俊彥は徐に煙管を取りあげる。
「昨日、あの、吳林さんからお手紙がありましたのですよ。」
「吳林から？　はてな。」
父と母とは遠く目を見合した。壽子は猶俯いたなりで
「妾に會ひたい用があるから、都合次第至急來てくれとの事で……其手紙は昨夜遲く着いたのでございます。何か知れませんが、一應お話に出ようとも存じましたけれど、心も急きましたし、左も右其用向を訊いた上と考へたので、今朝、先に彼方へ參りましたの。」
俊彥は忙しく頷き、
「而て、其用といふのは何事かな？　大方、文の事であらう。其他に吳林が那樣事を言うて來る筈もないから。」
「お察しの通りでございます。」と、壽子は明瞭答へた。
「文の事で、何らいふ話ですえ？」と、禮子は橫から覗込む。
俊彥は膝を動かし、
「おゝ、解つた！　お前の處に彼女が居る事を吳林も知つて居るので、それで病氣の見舞かたがた、然うだらう！　自身で出向いては彼女が面目無がると思つて、然うに違無い。」
壽子はチラと父を見上げて、其目を再び膝に落した。是程慌てた樣子は父の氣性としては珍しかつたので。
「而して、見舞と共に何か其れについての消息を漏しは爲なんだか。病人を喜ばせるやうな事を、吳林は言はなんだか？」
「はい。」
「言つたらう。彼の男も世間の事には至つて馴れて、殊に今度の話については、忠實に骨を折つてくれる。態々呼寄せた以上には、必ず何等かの便が有つたからだ。」
「然うでございます。」
「それを聞かして呉れ。彼の男は何と言うたか？」
壽子は啞然と、正目に見返す事も能きなかつたが、左右の返事を爲る先に、持扱つた手巾で淚を抑へた。
「おや、お前は。」と、禮子は最早胸が潰れて「其有樣は何うしたのさ！」
「お父樣、お母樣。」と、見廻して「何うぞお耳に入れなければならない事ですから、思切つて申します。吳林さんの仰有るには、文子の事は駄目ださうです。」
「駄目?!」
「貴方！」と禮子の聲は鞘走る。
「騷ぐな。壽！　駄目というたか、吳林が然う言うたか？」
「はい。」
「ふうむ。」と、俊彥は二人を目で押へつゝ、少時は言ふ處を知らなかつたが、「いや、那樣筈は無い。然ういふ事は斷じて無い。」
「でも、吳林さんは。」
「吳林は然ういうたらう。併し、それは吳林だけの……思ひ違ひか、或は聞違ひであらう。第一確と其事が極つたのなら、俺の處へ來て直接に言ふべきが順序だ。然う爲んで、お前に

のみ話したのを以ても、それは單に一時の……
何有、それに違無いよ。俺は然う信ずる。」
「けれども、吳林さんの仰有いますには、お父樣に直に申上げるのだが。」と壽子は又俛首れて、定めし落膽なさるだらうから、其御樣子を見るに忍びないので、妾に事實を言ふと……」
「俺が落膽する？」
「はい。で、妾から能く、お氣の毒だが能く申上げてくれるやうにと。」
「馬鹿な事を！」と、俊彥は髯を掴み「彼は何と思つてゐるか、眞實は那樣男ぢやない。」
「でも貴方。」と、禮子はおろ〳〵して「若し然うだつたら何うしませう。」
「大丈夫！　俺は信じて居るよ。假令誰が何と言はうと、此男が手を突いて。」と二人の顏から目を外らし「いや、笑つて吳れるな、然う言うたら、お前かたは定めし意氣地が無いと呆れもしようが、今だからこそ言ふ、俺は此手を突いて牧村に賴んだのぢや、牧村とても一個の男兒だから決して徒には思うてくれまい。加之誓つた、彼の男はたしかに俺の面前で必ず然うすると誓つたよ。武夫が子なら、亦は武夫の母でなければならんと立派に、男らしく言うたのだ。」
「お父樣には然う言ひましたらうが、それは其時ぎりの挨拶です。吳林さんが然う申しました。」
「否、果して然うなら……仍且間違つて居る。かりに一歩を讓つて、それが事實としたならば、武夫の所置は何うする意か。」
「其事について、妾は口惜しくつて〳〵、お話申す事が能きません。先方の言ふには、如何にも自分の種に相違無いが、家へ引取つて繼母の手にかけるのも可哀さうだから、多少のお金を附けて此方へ貰つて欲しい、若しそれも不都合なら何處ぞへ遣つてくれといふのです。」
「誰が那樣事を言つた？」
「欣一さんが、自身で。」
俊彥は唯首を掉つた。
「いゝえ、吳林さんはたしかに然う言ひました。彼の方も今度の事については實に心外で、當家へ對しても面目ないし、餘り……餘り牧村が憎いから、其場で思切り言爭つたが、此事が濟次第に絕交すると言ふ事です。」
「何も感情だ　然ういふ處から大なる行違ひが起る」
「其程迄仰有るなら、念の爲に吳林さんにお訊ねなさるなり、又牧村へお問合せなさるなり、今のうち念をお押しになつたら如何です？　吳林さんも、それが望ましいと仰有いましたよ。」
「尤もだ。」と、俊彥は禮子を顧て「羽織を。」
氣忙しなく立たうとしたが、又其膝を折敷いて、
「いや、行くよりも手紙が可からう。」
禮子は元より、壽子もそれに取りあふだけの張合が無いらしい。
「何有、安心するが可い。」と、俊彥は一人賴もしげに「今に、吉報を得てやるから。」

＊　＊　＊　＊　＊

其晚俊彥は牧村に宛て、長い手紙を認めた。幾度か書改めて、筆を措いたのは曉近かつたが、彼は翌朝それをもつて吳林の家を訪るべく出かけた。
正午近く歸つて來たので、禮子が樣子を訊ねると、俊彥は、唯手紙の返事を待てとのみ、吳林の事については何も言はなんだ。けれど其顏色の甚く惡いのを見るにつけ、禮子はいとゞ胸を苦めるばかりであつた。
二日三日と過ぎても、牧村からは何の返事も來なかつた。
新開地の空は朝々白く、住みつかぬ家の吹晒しに、馴れぬ嵐が夜毎の夢を破つた。

四日目になると、俊彦は最早辛抱が能きなくなつて、眼鏡の曇りを頻りに拭ひつゝ、第二の手紙を書送つた。

それから又二日過ぎた。

「何うしたのでせう。未だ何とも言つて参りませんね。」

と、禮子が訊くと、俊彦は何時も斯う言ふ。

「急く事は無い。何有、今に好い便が有るぞ。」

其擧句、更に五日置いて第三の手紙も出された。

或朝、門口を掃いてゐた芳子が、慌てて庭から、駈込んで、

「お父樣、牧村さんから手紙が來ました。」

「おゝ、然うか。」と、俊彦は新聞から目をはなして受取つたが、其まゝ封を切りかけて又思直し衝と居間へ入つて了つた。

それから少時、何の音沙汰も無いので、禮子と芳子とは唯氣を揉んで控へてゐると、

「これ、此處へ來い。」

禮子は這ふやうにして其室へ入つた。

俊彦は其處へ置いた返事を指し、

「それを見るが可い」

「はい。」と、取りあげた禮子の手は激しく顫へた。

「拜啓、益々御淸適奉賀候。然者先日來度々御書面下され候ふところ、折から小生旅行中に有之、其爲御返信延引の段御海容下され度候。御書面三通、たしかに拜誦猶又先般御直談の旨も有之、仰の趣尤もに存候。

右につき小生も今日まで一方ならぬ苦心を致し、是非とも今一度以前の如く相成るやう骨折り候へども、何分種々込入りたる事情もあり、無理に御望通りに致し候ふとも、到底此緣を永續する見込無く、當方の不和合を繰返すのみならず、又々貴下にも非常なる御迷惑をかけ候ふ結果に立いたるべくと信じ候ふに付、誠に殘念千萬には候へども、斷然此まゝ無き緣と御諦めの程願上げたく、此旨は委細吳林氏へも申出置き候ふ次第、同氏の申すところ、聊かも相違無之候。

猶其事情につき委しく御話し致すべくに候へども、要するに右の通りの結果に及び候ふ上は、今更一々陳述するも愚癡に過ぎず候ふまゝ、此際何事も申上げず候。

小兒の處分、並に離婚に關する手續等は總て吳林氏に依頼致し置候ふ間、同氏と御熟談下され度、終りに臨み、唯々兩家の不幸を悲しむのみに御座候。　敬具

牧村欣一

眞壁俊彦樣」

讀終つた禮子は、我を忘れて良人の面前に突出し、

「貴方！　これは。」

「出せ。」と、俊彦は引取るや、颯と二つに引裂いた。

食客

牛込矢來町の奥に、一軒建だが狹隘しい、今年あたりは根繼でもしなければなるまいと思はれる古家の格子戸には、蟲封じの呪符や、大掃除檢査濟の札紙や、種々の物を小汚く貼散した中に、數木作太郎といふ名刺のそれも煤色なのが出してある。

路地の角を折廻した杉の生垣には、小さな蜘蛛の巢が一面に引掛つて、腐れ柱のグラ〴〵した裏木戸から、斜めに三軒使ひの共同水道の前へ道がついてゐる。

陸軍中尉内田金吾に嫁した眞壁の三番目の

娘徳子は、良人が病氣の爲に退職して東京へ來るやうになつてから、いまだに此家の厄介になつてゐるのだ。

此家の主人は良人の實兄ではあるし、姑も居る事だし、而して中園が手數のかゝる精神病者といふ處から、何うしても同居しなければならなかつたのだ。

弘前を引揚げて東京へ來た當時は、内田の容態は然したる事もなかつた。唯他人に顔を見られるのを嫌つて、終日奥の四疊半に立籠つたぎり、猛虎を手搏にすべき軍人が、處女の如くに含羞んでばかりゐる。其癖妻の徳子が片時でも傍に居ないと、子を奪はれた親猫のやうに悲しんで、果は亂暴になつて、細君も見もしないんで傍へ寄せつけぬ始末だ。それや是やで、徳子は東京へ來て以來、一度も實家へ歸つた事も無く、錢湯へ行つて少し手間取つてさへ、家から人橋が掛るといふ有様だつた。

父の俊彦も心配して、再々見舞には來たが、此家の體裁に憚ると云ふ事も氣兼ねて、他の者とも落々話を爲る間も無いので、自然と足も遠のく、其中には文子の事に取紛れて、今では稀に手紙の往復を爲る位になつた。それは徳子の望でもあつた。元來豐でもない數木の一家は、母に兄夫婦に子供が三人も居て、四十圓そこ〳〵の收入に慘めな生計をしてゐた處へ、手のかゝる病人と自分までが寄食人となつたのだから、いとゞ氣兼も苦勞も山と積んだ中に、實家の親同胞まで出入りを爲れては、いかな事でも體が續かぬ。

彼女は其意味で父の許へ手紙を送つた。俊彦からの返事に一委細快く了承した、此上とも他の事には氣遣無く、專心良人の看護に盡すやう。と、それだけの文句にも有難い親の情は籠つてゐた。

那樣理由で、徳子は親類からも、社會からも全く離れて、唯心の狂つた良人に仕へた。

*　　*　　*　　*

抑も内田夫婦が此家の厄介になるについては決してすら〳〵と事が運んだのではなかつた。姑にしてみれば同じ我子であるし、數木には唯一人の弟であるから、別に苦情は言はなかつたものの、嫂のお新は猛烈な異議を稱へた。元來苦しい所帶に、如何な義理でも我慢でも然ういふ事は能きる筈のものではない。強ひて弟夫婦を助けようとすれば、親子五人に姑が共倒れになつて了ふのだ。それは數木の妻として、三人の子の母として、到底承知が能きないと言張つた。

其言分には決して間違ひはなかつた、姑のお粂も數木も、尤もだと考へただけ、然りとて現在行所も無い者を、まさか撥ねつけもならぬ譯にも行かぬので、種々にお新を宥めた結果、一時のところといふ約束で、ともかく引入れたのである。

一つは又、數木の腹へ入ると、弟が斯らいふ病氣であるから、假令今日までに大した金は摘んで居ないまでも、他人の目の露は溜つて、半年や一年樂に送れるだけの用意は出來てゐるだらう。それさへ有れば、此方は多少面倒を見てやるだけで、次第によれば家賃位は助けて貰へるに違無いと……其邊の思慮も有つたのだ。

然るに彌よ引取つて後委しい話を聴いてみると、其目的は大きに外れて、然ういふ性質の金も寄らぬではなかつたが、身分に多過ぎた醫者やら、病院の手當やら、藥費やら、那樣事にあらかたは使果して、殆んど無一物も同樣な境遇。それを知つた數木の失望はたとへやうもなかつた。而して其結果が反感となつて、徳子に向つて隨分言難い質問の箭も向けた。お新はそれ見た事かと口汚い事を言つた。姑ま

でが何うやら德子の所帶持に對して愚癡らしい事を並立てた。

斯ういふ文句は、直接にも間接にも、寄食人の心を痛めさせたが、精神に異狀のある內田は聽いたところで一向平氣なもの、隨つて正氣な德子一人が總ての辛さを負はなければならなかつた。

半月と經ち一月と過ぎる中に、其苦情は種々の方面から身に迫つた。けれど、然うかと言つて、病人を追出す譯には行かず、又病人の爲には德子を除く譯に行かぬので、何うにも斯うにも詮方無しに、表面は其まゝ落着いてゐる。

德子にしても、其れは心外であつた。いつそ實家へ逃戾つて、黑い白いを分けて貰はうと意氣込む事も再々であつたが、此病人に愛想を盡して、那樣振舞を爲るかと思はれるのも辛し、一つは現在兄夫婦に厄介をかける身で、辯解以外に返す辭もないと考へると、何も淚を吞んで通してゐる。

而して情無い日は半年餘りも過ぎた。

內田の病氣は一進一退、取留りの無い有樣であつたが、秋のかゝり口から惡い容態が續いて、今迄の憂鬱が次第に積極的に變化した。それも一方から言へば陰氣が昂じたので、彼の人を恐るゝ事は益す烈しく、誰を見ても自分を殺しに來たのだとのみ、終には絕望の餘り我から凄じい反抗を爲るやうになつた。

親も兄も、老人も子供も、更に見界無く、追詰められた動物の如く反噬した。而してそれは眞の死物狂であつた。最早此頃では德子をさへ見別けがつかないのである。

斯うなつては數木と雖も死物狂ひで、百方奔走した擧句、親戚や、同鄕の人々や、本人の友達や、種々の方面に補助を仰いで、左も右も巢鴨の病院に送る事に爲た。

慘憺たる經緯が有つた後、內田は終に其檻に收容された。それは一週間程前の事である。

歸途

秩父の空は夕映えて、本鄕から南の方は鼠色の影も深く、兩側の軒燈には最早チラ〳〵と火も入つたが、廣い街は未だ暮切らず、板橋へ戾る空馬や植木屋の職人が、鴉と先を爭ふ頃、巢鴨の停留所に近い電車線路に沿うてしよんぼり步むのは德子であつた。

秋も稍寒の襟もとを、背後から吹く風は荒く、裾を拂つて舞立つ砂ほこりの黃昏時を微白いのも、何となく凄じい中に、彼女は心細く瞬きつつ、其まゝ小走りに行かうとする出會頭、左側の橫町から立出でた學生が、それと見つけて駈寄りさま、

「姉さんぢやありませんか。」

德子は振返つて、

「まあ……六さん。」

「やつぱり然うでしたね。」と、太い息を吐いて「何うも能く似た人だと思つたんだ。不思議な處で逢ひましたね。何處へ……」と言ひかけて氣が着き、一寸病院の方を見ながら、「あゝ、然うですか、解りました。」

德子は淋しく微笑んだ。

「義兄さんの御病氣は何うなんです？」

「とう〳〵、此處へ來るやうになつて了つたのですよ。」

「困りましたなあ。」と、帽子を冠つて「だけど、其後の御容態は、格別惡い方でもないんでせうね？」

「えゝ。」と、其答も力が無かつた。

「僕もお見舞に行かなければならないと思つたのですけれど、阿父樣が行かん方が可いと仰有るし……」

「えゝ、來ておくれでも却つて迷惑をしますからね。」

「姉さん。」と、六一郎は呼びかけ「少し歩かうぢやありませんか。風は有るけれど。」

「然うね、だけど、お前さんは本郷の方へ行つても可いのですか？」

「眞實なら、巣鴨から市外線へ乗るのが可いのだけれど、何有、此方を廻つて行つても構やしません。久しぶりだから送つてあげませう。」

二人はそろ〳〵歩き出した。

「お前さんは何處へ行つたの？」

「曙町の友達の許を訪ねたんです。」と、姉の横顔を眺め「姉さん、貴女も痩せましねえ。」

「然うかしら……」

六一郎は私に嘆息した。

「きつと年の所爲ですよ。」と、德子は故意と輕く言つて「お前さんにも久しい間逢はなかつたわね。」

「えゝ。」

荷車が向方から來かゝつたので、二人は左右へ道を避けたが、又雙方から歩み寄つた時、

「家では皆なお變りがなくつて？」

「……まあ、無事でゐますよ。」

「代々木とかへ移轉したのだつてね。」と、德子は可笑しさうに「何うして急に移轉なんぞを爲たのでせうね？」

六一郎はそれに就いて語るのを好まぬらしく默つて遠くの方を眺めた。

「大久保の家は阿父樣が御自分でお買ひなすつたのだわね。今度のも矢張然うなの？」

「…………」

「ねえ六さん。」

「今度は借家でせうよ。」と、詮方無く答へた。

「妾も然うだらうと思つてゐました。だけど何ういふ譯で、自分の持家を明けて、今更借家へなんぞ入つたのでせう？」

「其處には、種々事情が有つたのでせう。何しろ大久保は不便ですからね。それに……彼樣襤褸家なんだから。眞實に手入れを爲たら、大變金がかゝるといふ話です。だから、持腐れにするよりか、一層賣つて了つた方が經濟上得策なんでせう。」

「おや！」と、驚いて「では、賣拂つたの？」

六一郎は失策つたといふ面色をしたが、

「何でも然うらしいです。併し、僕は委しい事は知りません。」

德子も深くは訊ねなかつた。

「阿母樣はお加減が惡かつたさうだが、此頃は何うです？」

「大したこともないのです。けれど、年を取ると、矢張餘計な心配ばかり爲るから可けないんです。」

「それも其筈だわね。」と、自分の身の上を思ひながら「村越の姉さんは時々いらつしやるかえ？」

「えゝ……一週間に一遍位來るやうです。」

切々の話のうち、二町ばかりは過ぎた。一足づつ暮迫る日に、往來の人足も忙しくなつて、見上げる度に新しい星の光の殖えて行く。

「六さん。」

「え？」と、喫驚したやうに答へる。

「お前さん、お腹が空きはしなくつて？」

「然うですねえ。」

「お蕎麥でも食べませうか？」

「然うですね。」と、迂濶り言つて「併し、無駄ですよ。貴女だつて直に家へ歸るんでせう。」

「だけど可いわ。久しぶりで種々話も聞きたいし。まあお附合なさいな。少し位手間が取れても構はないでせう？」

「それは可いですけれど、話を爲るなら歩きながらだつて能きます。」

德子は微笑んで、

「まあ、那樣に遠慮しないでも可いわ。」

半町ばかり來ると、小さな蕎麥屋の行燈が目

についたので、
「姉さん、此處にありますよ。」
徳子は一寸覗いたが、
「何だか穢い家ね」
「だつて、食物は穢い事もないでせう。」と、六一郎は風に吹かれながら言つた。
「それに餘り狹いわ。」
何の彼のといふ中に通過ぎて、又二三町來ると、白山近くに今度は小綺麗な家が見つかつたので、徳子は先に立つて其暖簾を潜つた。
上端には職人らしい男が一人、食物は其方退けに、山かけで飲んでゐた。土間を廻つて突きあたりの廣い階段を上れば、二間續きの二階には、處々に衝立が淋しく立つてゐるばかり、客は一組も居合せなかつた。
「好かつた事ね。」と、徳子は片隅に座を取り「六さんは何を食べて？」
「何でも可いです。」
果しかないので徳子は好い加減に命じたが、女中が降りて了ふと、
「あゝ、忘れた。お前さんはお酒を飲むの？」
「調戯言つちや可けません。」と、六一郎は眞赤になつた。
徳子も笑つて、
「阿父樣は此頃でも矢張お酒はあがるの？」
「然うです。併しそれも大分量が減りましたよ。」と嘆息を吐き「元氣は好いですけれど、體力は衰へたんですね。」
二人とも斯うしてゐるのが樂しいやうな、又非常に忙しなく胸苦しいやうな氣がした。
誂へた物が來たので、六一郎は直に食ふ方に取りかゝつたけれど、徳子は一箸つけたばかり、それよりも考へにのみ耽つてゐるらしかつた。
「六さん、文子の事は何うたつて？」
六一郎は傷口へでも觸られたやうに、ピクリと姉の顏を見上げた。
「彼の後何うなつたか、自分に拘けて少とも樣子を聽きませんが……」
「別に、何うでもないです」
「では、阿父樣の仰有つたやうに、元の鞘へ納つたのですか？」
「駄目だつたのです。」と、打切棒に「姉さん、世の中の事は、なか／＼思ふやうにはなりませんね。」
「然うですとも。けれど、阿父樣のお話では、一時家へ引取つたが、跡の始末さへつけば、又彼方へ適くやうになるんだと……」
「それが此方の希望だつたんです。併し、其處が然う思ふ通りにもならなかつたのです。」
「まあ！ 然うすると、今でも家に居るんですか？」
「當分叔母の方へ行つてます。今の家は狹いし、それに姉さんは自分でも工合が惡いんでせう。阿父樣や阿母樣は何一つ小言も言ひませんがね。」
徳子は膝を前めて、
「それにしても、全然話が切れたといふのではないでせう。急には行かないまでも其うちには以前通りになれる時も來るのでせう」
「僕だつて然う思ひますよ。」と、六一郎は言鋭く「それが至當だと思ふんだ。けれど、世間は冷酷ですよ。僕は實に憤慨に堪へない。」
力を籠めて膳に突いた箸が、ピシリと折れて辷る手許を、彼は茫然と見詰めてゐたが、やがて靜かに腕組をして、
「僕が家で斯樣事を言ふと、可否に關らず、子供の癖に生意氣だつて、阿父樣に叱られるから、何も言はずにゐますがね、僕みたいな者だつて今度の事は實に口惜しい。能きる事なら思ふ樣撲つてやりたいと思ふんです。」
涙含む程に激したのを見ると徳子はやゝ驚いた。而して宛も年上の者にでも言ふやうに、

「言ふまでもなく文さんが惡いには違ひないけれど、然う責めるのも可哀さうだわ。」

「無論ですとも。だから僕の憤慨するのは先方の人達ですよ。公平に言つたら、それは何うならうと此方の自業自得なんです。其事に[illegible]ゐる。假令姉さんの身に取つては種々な事情も有つたし、又同情すべき點は有るにしても、僕は決して身贔屓なんか爲ない。唯阿父樣が彼樣に辛苦して……のみならず、立派に阿父樣に對して誓まで立てて置きながら、其損害が償はれると、後は全然相手にもしな[illegible]。姉さんのみか、稚い武夫までを捨てて顧みないといふのは、餘り亂暴だと思ひます。ねえ、然うでせう?」

徳子は唯頷いた。

「女だつて腹が立つわ。お前なんぞが然う思ふのは無理も無いわ。併し、阿父樣が默つて[illegible]在らつしやると、他の者が左や右騷いでは間違ひますよ。言ひたい事も言はず、怒りたい事も耐へて[illegible]のに、私の爲を考へて[illegible]のだらうから、無暗な事をして、世間に恥を曝したら、それこそ此上の不孝を重ねますよ」

「姉さん、」と、六一郎に[illegible]に、「家の阿父樣や、阿母さんは、眞實に不幸なんですね。長の姉さんも、黒川の姉さんも、貴女も、文子さんも、一人として無事のはないのだもの。」

「まつたく、不思議だわね。」

「でも、貴女だけは、まあ無事の中です。過日も阿父さんが然う言つてゐましたよ。曲りなりにも徳が彼樣して居てくれるから、未だ一つだけは張合が有るつて。今まで他家の爲に盡してゐるのは、貴女ばかりだ。」

「それでも、斷樣事になつては……」と、徳子は心細い溜息をして、「けれど、妾だけは切めて此まゝで居たいと思ひますよ。」

「而して、一日も早く義兄さんの病氣が癒れば可いですね。」

「何うか妾と一緒に祈つて下さい。義兄さんの爲にも、妾の爲にも、眞壁の家の爲にも……」

二人連の客がドヤドヤと押上つたので、姉弟は其れぎり口を噤んだ。

* * * *

戸外へ出ると、日はトップリと暮果てて、南と北へ往來の電車が、今更のやうに氣忙しない[illegible]た。

「六さん、電車へ乘らうぢやありませんか?」

「然うですね、大變遲くなりました。」

徳子は急に淋しさに喚込まれて、

「では、途中まで送つて來て呉れて?」

「可いですとも、僕は御馳走になりつ放しにはしませんよ。」

あら! 那樣意で言つたのではないのよ。」

「まあ、何でも可いから乘りませう。」

白山の停留場で二三の人と打交りつゝ、姉弟は待つ間の佗しさに遠い家路の空を望んだが、やがて來かゝつた電車に乘ると、あとは互に話も無く、水道橋で乘替へ……

姉弟は隅の方に並んで腰を下すと共に、僅に進行しかゝる後部の方から衝と飛乘つた二人の若い紳士があつた。扉を押開けて、來る姿を、六一郎は何心無く見上げるや否や、

「呀!」と口の裡に呟いて、隣席に俯く姉の體を[illegible]で動かす。

徳子は驚いて眼を睜き、

「何うしたの?」

「姉さん!」と、低聲に力を入れて「彼處に彼處に立つて居る奴の顏を、能く御覽なさい。」

「彼の人を……へえ、誰です?」

「卑劣な、不人情な!」

[illegible]、俄に停つた電車に[illegible]に、不意と打たれて[illegible]人が姉弟の前に蹌つきつゝ、

「危い。」

「氣を注けろ！」
少しは醉つてでもゐるらしく、相顧て笑つたが、其目を六一郎と見合せると其人は更に激しい衝動を心に受けたか、忽ち色を失つて人中に分入つた。
「姉さん！」と、六一郎は其後姿を睨めつけながら「彼の男が牧村ですよ。」

星月夜

山伏町で電車を降りた姉弟は、それから暗い小路を矢來町の方へ入つた。
「遲くなりましたねえ。餘り長話をしてゐたものだから。」と、六一郎は其事ばかりを氣に爲る。
德子は兩袖を胸に掻合せながら、
「お前さんは都合が惡いかい。」
「いゝえ、僕は構ひませんけれど、姉さんが家へ惡いでせう。」
「那樣心配はいらないよ。それよりも六さん、妾はお前に賴んで置きますがね、先刻のやうな彼樣亂暴な擧動はなるべく愼んで呉れないと困りますよ。妾は電車の内でいまにお前さんが何か仕出しはしないかとハラ〳〵したわ。」
「僕は又、先方が何か言つたら多勢の前で惡口を言つてやらうと思つて、待つてゐたんです。」
「其れが惡いのですよ。いくらお前が焦躁つたつて先方は先方で默つてゐますまい。」
「けれど……僕は負けるにしても、平氣では居られませんからね。僕だつて血の有る人間です。」
「其血氣を愼んで貰ひたいのよ。他の事とは違つて、假令相手を困らせても、此方の名が知れては暗黑の恥を明所へ出すやうなものです。阿父様が其まゝにしてお置きなさるのも、それをお思ひになるからだよ。お前さんも文さんも自分の事よりか、家の爲といふ事を頭に置いて、耐へるところは何處までも耐へておくれ。ね、可いかい。」
「大丈夫です。」と、頷いて「是からは氣を注けます。」
「斯うなるのも運命だから、此上は誰も彼も心を協せて、お氣の毒な阿父さんや阿母さんに心配をおかけ申さないやうに爲なければ可けませんよ。」
「えゝ。」
「別けても、お前は始終お傍に居るのだから、能く氣をつけてね。」
夜の小路の露霜に女の歩行の後れ勝なのを、六一郎は幾度か見返りつゝ、やがて數木の家の近くまで來たが、彼は其處の角に足を止めて、
「姉さん。此處まで來れば可いでせう？」
「何うも有難う。だけど折角送つてくれたのだから、次手に一寸立寄つておいでな。」
「廢しませう。姉さんの方も面倒でせうし、僕も餘り遲くなりますから。」
「然う。」と、德子は殘惜しげに言つた。
「又其中に來ます。」と、帽子を脱りながら「家の方へ何か傳言はありませんか？」
「別に用は無いけれど……然う〳〵病人の容態は好い鹽梅に少しは落着いたやうですから、御安心下さいましと申上げておくれ。それから妾も達者で働いて居りますと。」
「然う言ひます。」
「何時も〳〵御無沙汰ばかりして居ますが、其方が家の爲と思召してお赦し下さいますやうに……」
「えゝ、解つてます。」と、頭を下げて「ぢや、然様なら。」
行かうとすると、又追ひかけて、
「あゝ、一寸待つておくれ。あの、段々お寒さに向ひますから、何うぞお大切に爲さいましとね。」

「えゝ、姉さんも氣をおつけなさい。」

「有難う。」

「失敬します。」

「待つておくれよ。」

「まだですか。」と、六一郎は世辭の無い聲を出して「僕は可いけれど、餘り暇取ると姉さんが困りますよ。」

「然う〳〵。それでは最早別れませう。」と、悲しさうに「又少時は逢へないのね。」

「那樣心細い事ばかり言ふと、益々行けなくなるぢやありませんか。」

「然樣なら！」

「姉さん。」と、今度は六一郎が小戻りした。

「何です。」

六一郎は唯嘆息を吐いて、其まゝ電車道の方へ走去つた。

徳子は暗い角に立つて、やゝ久しく後を見送つたが、半町ばかり向うの街燈にチラと現れた其姿の深い闇に消え去ると、不意無い吐息に肩を落し、狭い小路に我家へ急いだ。

立附の惡い格子戸を啓けて入ると、奥の六疊の賑やかな話はハッタリ止んで、

「何人？」と、甲高い聲は姑のお箱である。

「只今歸りました。」と、内へ上り一寸畏でございます。」

誰も何とも言ふ者はなく、急に火の消えたやうな靜寂さ。

徳子は徐と坐つて古障子を押開け、

「誠に遅くなりました。」

見れば姑と嫂と、近所の細君と三人、世間話の最中と見えたが、誰も依然として言を掛けないので、徳子は手持無沙汰に客の方へ會釋して、其まゝ立たうとすれば、

「お歸りなさいまし」と、飛んでもない時分にお新は切出した。

「思ひの外手間取まして。」

徳子が物を言ふと、又以前の默然になつた。

今度は姑のお桑が兎も冷淡に、

「容態は何うですね？」

「仍且……」

「可けないのですかい。」と、不意に忙しく續ける。

「はい。」と、徳子は面くらひながら答へた。

「やれ〳〵、困つたものだ。」

「病院といふから、何れ手當も屆いてゐるでせうが、些とも験が見えないのは心細い譯ですね。」

徳子は唯俯いた。

隣家の細君は氣の毒さうに、

「でも、何の病氣によらず、然う急には行きませんよ。」

「因果な事でね。」と、姑は額を蹙め「同じ病氣でも、肺とか脚氣とか言へばまだしもですが、男のくせに、加之貴女、軍人でゐながら氣が狂ふとは情無いぢやありませんか。一體全體何の罰があたつたのだらう。」

「けれども、體さへ御丈夫なら、それが切めてもでさあね。」

「體は達者でも頭が死んで了つちや何にもなりませんよ。」と、お新は徳子の方を横目で見やり「併し、彼樣いふ病人は長生を爲るといひますわ。」

「それは違ふよ。白癡は長生をするものだが、狂人は心を揉むから何うしても短命が多い。」

「然うかしら。ぢや白癡の方へ轉宅をして下されば可かつたのに、ついお隣家だから。」

「處が、此分ならいつそ早く死んで呉れたが可い。今のまゝで萬一十年も十五年も持たれた日には、終ひに此方も氣が違ふかも知れないよ。」

徳子は悲しい眼で見上げた。

お新はグス〳〵いふ子供に乳を宛行ひながら、

─何方にしてもやり切れませんよ。世の中が不景氣で、お米が高くなるばかりの處へ、斯う厄介ばかり多くつては、病氣にかゝらないでもいまに餓死です。─

─眞逆……─

近所の細君は大きな聲で笑つた。

─事實ですよ。─と、徳子の方を見て─然ういへば、貴女は御飯前ですか、それとも病院でお辨當でも食べて來たのですか？─

─はい。濟ませて參りました。─

─へえ。─と、其れが又癪に障つたやうに「御馳走樣ですね。」

姑は身震をして、

「時に、お徳さん、話が有るなら此方へ入つて、其處を締めておくんなさいよ。明放しにして置かれちや風が入つて爲やうがない。

─何なら、其方で休息なさいな。別に面白い話の有るでもないから。─

─それでは、甚だ勝手でございますが、妾是で御免を蒙ります。─と、徳子は身を退いて、此頃まで良人の病室になつてゐた其四疊半の部屋へ入つた。

壁といはず、襖といはず、疊も柱も疵だらけで、其一つ〳〵に此頃までの病人の狂暴な振舞が歴然印されてる、火鉢も無ければ座蒲團もない、何にも無い、其眞中に坐つて、徳子は草臥れた脛を撫でつゝ、淋しい息を衝と吐いた。落葉か、露か、小庭に物の音がして、昨日から此近所に捨てられた兒狗の饑に勞れて啼く聲が言ふかたもなく哀れに聞える。

茶の間の方は又賑かになつて、鐵瓶の湯の沸く音も、目覺し時計の刻む音も、傍から見れば暖かさうに。

─併しねえ、奥さん、お宅なんぞは小勢で被在るから、甚麼にお靜かで好いか知れませんねえ。─

と、お新が宛も〳〵羨ましさうに言ふと、姑が尾に附いて、

─然うとも。何時何つても整然と片附いて、何處も彼處も小綺麗で、眞實に好い心持でございますよねえ。─

─何う致しまして。それは散かす者が無いからですよ。─と、近所の細君は笑つて─加之に小勢ですと誠に淋しうてね。來年になりますと、惣領が金澤から歸つて參りますから、然うしたら、少しは好からうと存じますよ。─

「おや、來年で卒業なさるのですか？─

「はあ。─と、嬉しさうに─漸とねえ貴女！─

「ふうむ。─と、姑は鼻を鳴らして─夫れ、早いものでございますねえ。つい此間[illegible]でなすつたと思つたが、へえ、然樣ですかい。─

─來年といへば最早間もないが、お樂しみですねえ。─

「彼のお子さんは又お小さい時分から出來が好かつた。

けれど貴女、是からが何うなりますやら……」

それ〳〵お嫁さんをお探しにならないと可けませんよ。

─然うも思ひますが。─と、途切れて─好い來人がありましたら、お心懸けなすつて下さいまし。─

其中に寢てゐた子供が又目を覺したので、お新は部屋の隅に横になり、添乳をしながら茶話に口を入れる。

─さあ、其お嫁といふのがねえ 世間には幾何も有るやうですが、倅貰つて爲になるのは至つて少いものですよ。─と、姑は眞の嫗に媚びながら─本人の前で申すと世辭のやうに當りますが、宅のお新なぞは其處へ行くと難の無い方ですが、昔者と違つて、當節の嫁さんに、人前では兎角神妙に見せかけても、内證ではなか〳〵油斷の能きたものぢやございませんよ。」

「へゝえ」と、相手は迷惑さうに答へた。

「世の中には随分夫婦掛向ひでゐると、何の彼のと誤間化して何時の間にか臍繰金を拵へる者が有りますがね。」

お新はムク／＼と起上つて、

「えゝ、妾なんぞは自體馬鹿な生來で、能く主人に、お前は智慧が無さ過ぎると言つて叱られますが、善い智慧も悪い智慧も無いお蔭で、然ういふ事だけはつひぞ爲た覺えが有りませんよ。」

「けれど、那樣事を爲た者に限つて、天の罰で、末始終何うせ好い目は見ませんよ。良人に別れるとか、子供を亡くすとか、それだけの報いは何時か廻つて來ます。恐ろしいものでねえ。」

「まあ、那樣ものかも知れません。」と、相手は益す弱切つた。

「併し阿母さん、良人や子に別れるのを、然ういふ人は何とも思つてやしますまいよ。自分でやつて行くだけの用意が有れば、却つて獨身の方が氣樂な譯ですもの。」

「大きにねえ。」と云つて、姑は口頭で笑つた。

此處へ來てから病人の世話で、晝も夜も碌々落着いた事は無い上に、三日にあげず起る親子喧嘩、夫婦喧嘩。それや是やの引合に出されて、徳子は何を爲れても、何も言はれても、近頃では苦勞に爲なくなつた。

長い年月の、まして斯ういふ不如意の生活を續けてゐると、誰も心が刺々しくなつて、衣食足らねば禮節に構つてはゐられぬといふ事も、馴れるにつれて思ひ知つた。

然無きだに普通の心で物事を考へてゐては到底狂人の看病は能きぬので、此半年の間といふものは、唖の如く、聾の如く、彼女は一切の感情を殺して良人にばかり注意してゐたのだ。

今聞くやうな諷刺や、面と向つての惡口は、是までとても再々受けてゐた。けれど、良人の居るかぎり、自分は外に大切な務があると思へばこそ、右から左へ、左から右へ、默つて聞流してゐたのだが、便り便られる其相手を失つて、たつた一人此中に殘された現在の身になつては、其言の端々が胸に徹へて、錆釘を打込まれるやうに辛かつた。

せめて何か爲る事でも有ればと　押入から行李を引出してみたが、燈火が遠いので色合も解らぬ。彼女は其まゝ行李に凭れて、少時は途方に暮れてゐたが、聞くまいと思ふ話の、氣に爲ればいよ／＼耳につくので、慌てて其れも片附けた後、錢湯へ行く事にして家を出た。

更行く空は霜に冴えて、星の光も煌々と、嵐に絡む目白の鐘は、途切れ／＼に九時を打つ。

淋しい徑を小半町、其處の角を曲らうとする出會頭、近く行違ふ人の擧動を徳子は可怖々々星明りに透かしたが、

「あ、義兄さん、お歸りでございますか。」

數木は立止つて、

「徳子さんか、斯樣に遲く何處へ行きなさる。」

「一寸お湯に。」

「一人でかい。」

「はい。」

「そいつは御苦勞樣だ。まあ疾く行つておいでなさい。」

「御免下さいまし。」

徳子は急いで歩出した。

不用もの

翌日は日曜なので、數木も朝から何處へも出ず、狹い庭の掃除なぞを始める。學校へ行く子供を交ぜて三人とも鼻を揃へ、いくら叱られても喧嘩を爲る、それを叱るお新は又數木に叱られるといふ騷ぎであつたが、それでも内田といふ手のかゝる者が居なくなつたので、姑もお

新も何だか物足らぬ顏をしてゐた。

食事のやうな朝飯が濟むと間もなく上の二人の子供は隣家へ預けられたので、何の爲かと徳子は怪しんでゐる中、親子三人は茶の間に額を鳩めた。

自分が居ては邪魔にもならうと、徳子は盥を持つて水道の井戸端へ退き、今日の空模樣を氣にしながら洗濯に取りかゝる、彼是半時間も經つた頃、お新が乳吞兒を抱いたまゝ態々其傍へやつて來た。

「一寸、其仕事は急ぐのですか？」

「否、別に……」と、徳子は心安く言つて「何か御用なら致しますよ。」

「手をお借り申すつちやないんです。一寸相談しなければならない事が出來たのですよ。」

「然樣でございますか。」

「其物を一枚だけ洗つたら、直に來て下さいまし。待つてゐますからね。」

平常より穩かに言つてお新は庭の木戸へ引入つた。徳子は手捷く用を終つて臺所へ戻つたが、其相談といふのは、又しても病中の費用を埋める金策か、何うで碌な事ではないと心私に考へた、

襷を外して其處へ行くと、三人とも待構へてゐたらしく、各自少しづつ席を讓る。

「水仕事は寒いでせう。此方へ寄つてお當りなさいよ。」

「否、却つてほか〳〵する位でございます。」と、徳子は美しく赤らんだ兩掌を擦りつゝ、小さくなつて會釋した。

三人は顏を見合せて、互に讓合ふやうな氣振も見えたが、仍且姑が先へ、

「時にお徳さんや。今日は改めてお前さんに、私達から話さなければならない事が有るのですがね。」

「はい。」と、心許なく見わたして「何ういふ御用でございませうか？」

「それは、今作太郎から申します。」と、姑は其方に向き「さあ、お前が口を切つて、概略の譯を言つておくれ。」

「可しい」と、數木も今は乾と頷き「では言ひませう」

姑もお新も坐直して徳子の方を打目戍つた。

數木は青髯のバリ〳〵した頬を撫でて、

「外でもないが、實は彼の病人もいろ〳〵まあお骨折をかけて濟まなかつた。尤もお前さんからいへば亭主の面倒を見るのだから、其位の事は當然かも知れないが、親なり兄なりから見れば是は深く感謝しなければならん事だと思ふ。」

「然う〳〵。」と、姑は大業に頷いて「眞に作太郎の云ふ通り、全くそれに違ひありませんよ。東京へ來てからも半年餘り、まして彼樣病人に附ききりで萬事萬端世話を焼いておくれだつたのは、なか〳〵並大抵の事ではありません、馴れれば何の彼のと勝手な事を言ふやうなものの、腹の中では皆も何程感心してゐたか知れませんよ。」と、お新を顧み「ねえ、お前。」

「えゝ。」と、お新は意味深長に頷いた。

徳子は最初から奇異な思ひをしながら、口をきく者の顏を順々に打目戍つた。今日に限つて何故に、斯樣改まつた話を爲れるのか、假令ば言ふべきが至當であるにしろ、時ならぬ感謝や褒辭は、聞く方に取つて嬉しくも何ともないばかりか、其れに對する一種の危惧を懐かざるを得ぬのであつた。

彼女は悄々した樣子で、

「まあ、何ういふ譯でございますか。妾……那樣お言をいたゞく理由はございません。」

「けれども、然う言はなければ我々の心が濟まんのだ。親しき仲にも禮儀あり。是だけの事は

是非とも言はして貰ひます。處でまあ、それだけ骨を折つて下すつたにも拘らず、とう〳〵斯様事になつて了つて、お互に殘念千萬の次第だが、是も定まる約束で、今更何とも致方がない。」

「はい。」

「其事について、私も前途が心配になるから、醫者に逢つて、種々様子を訊いて見たのだがね。」

徳子は俄に胸騒ぎがしだした。

「何うも、到底彼の病人は癒らんといふ事でね。」

「命にかゝはるとでも……」

「否々、然うぢやない。壽命の事は醫者にも豫言は能きぬのだが、唯死ぬまで經つても正氣に戻る事はないといふのだよ。」

「然様でございますか。」と、徳子は術無氣に嘆息した。

「其處で、いよ〳〵然う極つてみると、本人は彼の通り生きながら葬られてゐるやうなものだから、癒らずば癒らぬで却つて世話がなくて可いとしてだ、こゝに現在考へなければならぬのはお前さんの身の上です。」

物をも言はず、徳子はたゞ固唾を呑んだ。

「お前さんも年は若し、子供は無し、早い話が此まゝ朽果てる人間ぢやない。此方とは縁を切つて、一度實家へ歸つた上、改めて他へ縁づくなり、其れが可厭なら生涯獨身で親御の世話をするなり、自由な行動を取つたら可いと思ふがね。お前さんの了簡は甚麼ものです？」

「…………」

徳子は茫然光の無い眼を瞬つた。

「其打合せがしたいのだが。」と、藪木は煙管を取りあげた。

姑は先刻から口をムグ〳〵さしてゐたが、

「ねえお徳さん。お前の考へには何うか知れませんが、妾達は然うするより外ながらうと思ひますよ。今もいふ通り、お醫者様の見立も、又素人の妾共の考へも、とても見込が無いと極つた以上は、親でさへ無い者と諦めて了ひました。而てみればお前さんも假令一歳なりとも若いうちに自由におなりの方が身の爲ぢやありませんか。」

「では、妾に實家へ歸れと仰有るのですか？」

「然様さ。縁あつて斯うなつたものだけれど、本人が居なければ其縁は切れても決して不都合な事はないので。」

藪木はあとを引取つた。

「つまり此話は其方に便宜を計つた事さ。露骨に言へば萬一貴女が腹の中では然うしたいと思つてゐた處で、自分の口から有繋に切出し難い事だからね。」

「お言ではございますが、妾は夢にも那様事を考へては居りません。」

「然うだらう！」と、重々しく「お前さんの心は能く解つてゐる。だから今もお禮を申したのだ。因で其貞節も可い、律儀も結構ではあるが、然ういふ中にも自ら世の中といふものを見なければならない。生活について考へなければ、今日の時勢には立つて行く事が能きないのだ。昔支那の伯夷叔齊といふ人は、義を重んじて周の粟を食はずに、とう〳〵餓死をしたとかいふが、然ういふ律儀は今から見れば馬鹿な沙汰で、惡い事を爲ない限り人間と生れたからには程好く生きて行くのが本分だ。ね、他の爲を思ひ、身の爲を思ひ、四方八方に迷惑のかゝらぬやう、損をさせぬやう、怜悧に立廻るのが人たる者の眞實の心懸で、男も女もそれが一番大切なのさ。」

「けれども、妾には那様事は能きません。」と、徳子は泣顔をした。

姑が入代つて、

「何故能きませんね？」

「病中の良人を捨てゝ、此まゝ實家へ歸る事は何うしても能きないぢやございませんか。」
「然ういふけれども、到底癒らないと極つた病人は謂はゞ死んだも同然ですよ。」
「貴方がたは然う思召すか知れませんが、妾の目には現に生きておいでです。氣が狂つても、間違つても　確に此世においでなさるのです。」と、徳子は忙しく涙を拭いて「亡つた人さへ折にふれては生きてゐるやうに思ふのが、親子夫婦の人情でございます。それを那樣反對な事が……貴方がたはお諦めなさるかも知れませんが、妾には何うしても然う思ひ切る事が能きないのです。」
數木は苦い顔をして、
「然うですかい。では訊いて置くが、是から先貴女は何うする意だね？」
「良人の生死にかゝはらず、妾は内田の妻で居る意です。」
三人は目を見合したが、
「それは御奇特な事だ。」と、數木は嘲るやうに言つて「貴女が然ういふ考へなら達て止めようとは言はない。本人の傍へ附ききりで、死ぬまで看病しようとも、石塔へ赤い信女を彫りつけようとも、すべて其方の御隨意だが、左も右も此後は私の家でお世話を爲る譯には行かないから、其點だけは心得てゐて下さい。」
「あの……」と、胸懷を突かれて「では、何う致すのでございます？」
「お互に嘘の懸合ひでは市が榮えない。話が極り次第、早速此處を出てお貰ひ申したいのだよ。」
徳子は膝の手を疊へ突いて、其まゝ首を垂れて了つた。
「實はね。」と、姑は覗き込んで「家も都合が好ければ、斷樣話を爲たくはありませんが、何しろ知つての通りの有樣で、親子五人に妾が居るだけでも、隨分難澁してゐた上に、長い間病人の手當やら、何やらで、段々借金は嵩むばかり、妾達も傍で見てゐられないのだから、其處はお互に讓り合つて、少しでも息の吐ける工夫をしたいと思ふのさ　お前さんに斷樣事をいふのだつて、決して本意ぢやないけれど、まあ今言つた通り、内田も彼樣なつて了つて見れば、同じ切つても切れぬ仲といつても、お前さんが一番離れた人……そこでまあ、一人でも身を退いて口を減らして貰つたら、いくらか生活に緩みも出來ようと言つた譯でね。」
「御尤もでございます。」と、徳子は面を俯して「然う仰有れば、妾も申す事はございません。」
「解りましたかね。」と、丁寧に[illegible]つたら、此上異存は有りますまい。」
「はい。」
「それでは早速……」と、數木の方を見て「ねえ、其方が可くはないか？」
「同じ事なら一日でも早い方が可うございますよ。」と、お新が口を出した。
「然うさ。荷物といつても此處に持つて來た品は知れたものだし、御同樣着のみ着のまゝだからなあ。」
「では、お徳さん、是から直に出かけたら何うですね。」
「あの……歸るのでございますか？」と、徳子は茫然として二度聞直した。
「然う極めたのではないかね。」
「妾は。」と、慌てて言はうとしたが、後は涙に掻暮れて、徳子は其まゝ泣伏した。

放逐

三人は各自鋭い眴をした。
數木は頬邊を氣にして撫でながら、
「泣いても笑つても、然うするより外は無いの

だから、相談が纏まつたら、疾く決行するが可い。」

「俥を吩咐けて來ませうかね。」と、お新が誰にともつかず言つた。

　那樣話がポツ／＼取交されてゐるうちに、德子は偶と我に返つた、迂濶り人々の口に乘つて、自分も然う爲ねばならぬやうに考へたのは飛んでも無い間違ひである、それは全く思ひもかけぬ事である、と氣が着いた。彼女は慌てて面を起し、

「けれど、妾にも少々申上げたい事がございますので……」

　後悔の色が現れたのを見ると、數木は激しく眉を顰めた。

「別に言ふ事も無いでせう。我々も此上お前さんに對して何の要求もしない意だから、今後の一身は何う爲ようと、それは貴女の心に任せる。假令何處へ再縁なさらうとも、此方からは決して苦情は言ひませんよ。」

「那樣お話ではございません。」

「はゝあ？」

　姑はジロリと眼を光らした。

「それでは、手當でもよこせと言ひなさるのかい？」

「いゝえ。」

「眞逆、いくらお前さんが圖々しくつても、其れほど間違つた了簡は起すまいと思ひますよ。然うしてみると、差詰何も言ふ事は無いぢやありませんか。」

「亭主も居ないのだから、元より未練の有らう筈も無し。萬事は落着してゐるのだ。」

　德子はハラ／＼しながら、自分の口を出すべき機を待つてゐたが、やがて思切つて、

「妾、唯一つお願が有るのでございます。それは外でもございません。」と、熱心に、「何うか妾を此處へお置きなすつては下さいますまいか？」

「何です？」と、姑は吃驚した。

「お話の事は能く解つて居りますが、妾としては、此まゝ生家へ歸る事が能きません。御無理ではございませうが、何うか此家へ置いていたゞきたいのでございます。」

「其れは可かん。」と、數木が大きな聲を出した。

「お話は能く解つて居りますけれど……」

「否、那樣事を言ふやうでは、貴女は少とも解つてゐないのだ。母と私が是だけ口を酸くして言つたのが半分でも腹に入つたら、然ういふ事は言へない譯ぢやありませんか。」

「併し、妾の身にもなつてお考へ下さいまし。」と、德子は切々に「病氣の良人を見捨てて、長年連添つた良人を捨てて、今更……いくら考へても那樣事は能きませんもの。」

「困るなあ。」と、數木は眉を顰め「然ういふ話は疾うに濟んだのです。お前さんもすでに歸る事を承諾して置きながら、いざとなると那樣下らない……其れこそ言ひがかりといふものだ。私は聞く耳を持ちませんよ。」

　德子は忙しく人々を見廻したが、姑の方に向直つて、

「阿母さま、それでは貴女にお願を致します。」

「……」

「此家の御都合は好く解つて居りますけれど、今日までのお馴染效に、何うぞ妾の心の中もお察しお願ひたうございます。妾は歸りたくございません。」

「へえ。」と、姑は横を向いて煙草を燻らした。

「其代り、是からは妾一生懸命に内職でも致します意です。女の力で大した事も能きますまいが、それでも一人が食べて行く位は、きつと自分で稼ぐ考へですから。」

「感心なお心懸です。併し、數木も貧乏はしてゐますが、未だ自分の同居人に間貸を爲る程

でもないのですからね。」

「それほど内職が爲たければ、家へ歸つて行つたが可いでせう。眞壁さんでは定めし大助かりでせうよ。」と、數木は立上つて欠伸をしたが「左も有、惡い事は言はないのだから、此方の請求通りにして下さい。濟らん義理立や、形式的の泣言は一切拔にした方がお互に世話が無くつて可い。」

徳子は最早何を言つても無駄だと考へたので、其まゝそつと茶の間を辷出た。而して例の四疊半の室へ入ると、一時にガックリ氣脫がして、倒れるやうに其處へ坐つた。

「餘りだ、餘りだ。」と、心の叫喚が突上げ、凝乎と見詰める目は暗く、恐ろしい位耳鳴がして來たが、我にもあらぬ咽聲の漏れるのを押へる拍子に、冷たい涙のハラ〳〵と亂落ちるのを知つた。

「餘りだ。」と、彼女はもう一度呟いた。

是まで普通ならぬ辛苦をして來て、其れも空しくなつたばかりか、良人とも其家とも別れて、今更おめ〳〵と生家へ歸らなければならぬとは餘り情無い身の上だと思ふと、彼女は不幸な自分に愛想が盡きた。

「何の罰が中つたのだらう。」とも考へてみる。

内田に嫁してから、樂しい月日を送つたのは眞の僅の間で、其樂しいといふ新婚當時にも常に經濟上の苦勞は絕えなかつた。中尉になりたてには古い借金も大分殘つてゐたので、其方へ月々引去られる上に、毎月若干かの扶助料を東京にゐる母の許へ送つてゐた。其間には數木からの無心もあつたが、請求の全額には屆かぬまでも、出來得るかぎりの算段はしてやつた。

邪樣斯樣で、内田の新家庭は常に見かけによらぬ貧苦と鬪つてゐたけれど、其れも總て徳子の氣働きによつて、何うやら斯うやら切拔けられたのであつた。

漸くの事で借財も片附く、是から……と思ふ端に良人の病氣が起つて、捲締めたゼンマイの切れて一時に戻つた如く、其後は最早何うする事も能きなくなつて、とう〳〵斯ういふ運命にいたつたのだ。

良人は元來氣の毒である。併し其人は現在總ての意識を失つてゐるのだから、結句思出も無ければ悲みも無い氣樂な日を送つてゐるかも知れぬが、正氣な徳子には何うしてもそれを悲しまずには居られなかつた。

爾も、如何に悲しい身の上にしろ、斯うして苦しみに耐へてゐれば、未だ〳〵生きてゐる效もあらうけれど、其最後の立場をも突落されて了ふにいたつては。

「あゝ、妾は何うしたら可からう。」

其考へはつかぬが、徳子は何うしても此家を去らねばならぬ。

茶の間の方では、其始末をつけるべき三人のひそ〳〵話が猶何時までも續いてゐるのだ。

此家の人の言ふのも考へれば無理はない。今は離れ〳〵になつた自分が、此處に斯うしてゐたところで、水に交る油である。良人が居ればこそ妻の自分も此家の家族だが、其良人の無い後は要するに赤の他人である。不用者である。親子夫婦揃つて、人數も多い此中に、其迷惑を顧みず强ひて置いて貰はうといふ方が、或は無理な註文かも知れぬ。

「仍且是が眞實なのかしら。」

彼女の涙は盡きなかつた。

此處に居ようと、生家へ歸らうと、一人で暮さうと、自分は自分であれば可い。其自分が内田の妻であるとないとは、畢竟自分の心一つで、體の置所にはよらぬのだ……とは思ひ極めたものの、同時に歸るべき其生家の有様を思ひ浮べると、彼女は又胸が迫つた

姉二人、妹一人、未だら若い年齢をして、

揃ひも揃つて不運に陷つた。加之最近の出來事は、眞壁の家を根柢から覆して、年老いた父母は住馴れた其大久保の邸を見捨てたのである。四人の姉妹は三人とも良人に離れて、殘る者は自分のみ。苦しくとも辛くとも、今は唯一人與へられた綱に縋つてゐるのだ。

自分だけはといふ信念は、此頃の千苦萬苦のうちに彼女の弱い一身を支へてゐた。それと共に、彼娘だけはといふ希望が辛苦に疲れた父母の體を支へてゐる事も、德子は私に心得てゐる。

其自分が、仍且緣家から突出されて、おめおめ父母の許へ歸る事は……彼女は死んでも能きない。

「然うなつたら、阿父さんや阿母さんが……」と思へば、彼女の心は寸斷されるやうであつた。

＊　＊　＊　＊

「何う爲さいました？」と、柔しい聲がしたので、德子は漸く我に返ると、其處に嫂のお新が立つてゐた。

「最早お支度は出來まして？」

「はい……」

「然うですか。」と、一寸控へたが「では是でお別れですね。長々勝手な事ばかりして、嘸お腹の立つた事も有りませうが、何うか惡しからず思つて下さいましよ。眞實にねえ、彌よお別れとなると、何だか可厭な氣が致します。」

德子は彼樣も斯樣もと思ひながら、其れが口には出なかつた

「けれど、斯う申すと變なものですが、お家へお歸りなすつた方が貴女の爲にはお幸福ですよ。」

「何故でございます？」

「だつて、考へて御覽なさいまし。此處に居て、斯樣貧乏生活をして。」と、小さな聲で「姑や小姑の顏色ばかり見て、餘計な氣兼をするよりか、家へ歸つて御兩親の膝許に居た方が何の位可いか知れやしません、然うでせう？」

德子は唯溜息を吐いた。

「妾なんぞなら、疾うに自分から望むところですわ。斯樣子供さへ無いのなら、妾も一緒に然ういふ事にして貰ひたい位ですよ。」

「嫂さん。」と、德子は思ひ切つて「妾、貴女にお願ひがございますが。」

「何です？　俥でも賴むのですか？」

「否、那樣事ではございません。實は妾、何うしても家へ歸りたくないのですから、阿母樣や義兄さんにもう一遍貴女から何とかお話し下すつて。」

「え？」と、お新は目を丸くした。

「大變勝手なお賴みですけれど、此まゝ御厄介になつて居られますやうに、御相談が願へますまいでせうか。其代り、今迄通りとは申しません、下女としてでも。」

お新は頓狂な聲を出して、

「何を馬鹿な事を言ふのです。」

「それで澤山でございます。若し終日家に居りましては煩いとお思ひでしたら、何處かの工場へ通つても少とも厭ひは致しません。左も右も此方に籍を置いて下さいましたら、其れで澤山なのですから。」

「……」

「德子さん、貴女何うかしたんですか。」

「貴女も內田さんに感化れて、氣でも狂つたのぢやありませんか。」

一層然うなつて同じ病院へでも容れられたならば、斯樣苦しい思ひもしなかつたら、と德子は心の裡に泣いた。

「最早可い加減に爲さいましな。何時まで那樣事ばかり言つてゐるんです。」

「けれど、然うでも爲ていたゞかなければ、妾は生きてゐられませんもの。」

「おや〳〵。」と、笑ひ出して「へえ、斯樣事で死

ぬの生きるのと、まあ何ういふ譯なんでせう。
「貴女は斯うなるのを大變辛い事のやうにお思ひのやうだが、其れからして考へが違つてゐるぢやありませんか。先刻數木が言つた通り、此方では精々貴女の爲を思つて、計らつてあげる事ですよ。」
「併し、生家へ歸りまして、妾何の口で……」
「言へるぢやありませんか。」と、嘲るやうに「其口で立派に仰有いな。自分から出て來たと言つたら、薄情者だと言はれるかも知れないが、出されて來たといふのに何の後暗い事が有りませう。其れこそ立派な言立ですわ。」
お新は忙しく膝を動かした。
「御兩親だつて、其れでも家へ入れないとは仰有いますまい。それとも何ですか……お宅の親御さんは御自分の實子を養はないと言ふ程、那樣因業な方なんですか。一度他家へやつた以上は、後家にならうが、離縁にならうが、一切構ひつけないといふのが、眞壁さんの御家風なんですか。」
「嫁にまゐる時の家風は存じて居りますが、歸る時のことまでは妾心得ては居りませんのです。」
「おや、口幅つたい。其程偉さうな口をきく智慧が有るなら、何も妾風情に物をお頼みにならないでも可いでせう。」
爲損じたと思つたが、最早取返しがつかなかつた。
「やつぱり貴女は、那樣文句をつけて、手切金でも取らない中は此處を動くまいとするんですね？」
「飛んでもない事を……」
「其れなら、疾くお出なさいな。出て行けと言渡されたら、さつさと立つたが可いぢや有りませんか。」
「參ります。」と、徳子は悄然と涙を拭いて「それでは致方がございません。」

霜夜

矢來町の數木の家を出たのは未だ日の暮れぬうちであつたが、其れから先は何處を何う歩いたか、徳子の頭には唯代々木といふ地名の彫りつけられて、其處へ行かねばならぬといふ思ひの折々明瞭と浮ぶのみであつた。
けれど、彼女は電車にも俥にも乘らなかつた。程近い甲武線の牛込見附から、二十分足らずで行けるとは知りながら、那樣便を借りようとは思はなかつた。彼女は代々木といふ場所が百里も二百里も遠い處なら可いと考へてゐた。而して願ふ事なら、歩きに歩いて其處へ行着かぬうちに、饑餓と疲勞に動けなくなつて、此まゝ死んで了へば猶更可いと考へてゐた。
四谷から青山の練兵場へ出た頃には初冬の日はトップリ暮れて、廣野を渡る北風は便り無い身を荒く吹いた
渦卷きあがる砂埃の夜目にも白い風筋に顏を背けつゝ、徳子は又繰返した。
「代々木へ……」
其方角を今迄は鮮かに彩つてゐた夕映も薄れて、寒い姿にそゝり立つた富士の高嶺も見えなくなつた。原の外端の兵營から、悲しい喇叭の音が聞え、電車の燈火も遠く過ぎ行く。
「あゝ、妾は仍且歸らなければならない。」と、徳子は其處に一本しよんぼりと立つた樹の、枝も疎に葉も無い影に佇んで、心細氣に瞬く星を仰いだ。
又何時間か過ぎた。或ひは何分……何秒であつたかも知れぬ。
徳子は偶と氣がついた。夕越えて行く人は絶え、寒氣は襟から爪先から人の體を引緊めて、氣味惡い暗黑の力は地の底へ押入れるやうに重なつて來た。と感じた時、彼女は不意に何物か

が自分を目がけて忍寄るらしく思はれ、ハッと一歩後へ退つた。

人か、獸か、魔性か、それとも自分の心の影か、何とも知れぬ氣勢は暗の奥からジリ〳〵と迫つて來る。德子は今迄知らなんだ恐怖に戰慄しながら、忙しく四邊を見廻した。

家も無ければ木立も無い唯蓬々とした平地の中央に、自分は目にも見えぬ敵の襲撃に身を委ねるばかりである。

「何うしたら可からう。」

其呟きは益す恐ろしい響を傳へた。彼女は最早方角が判らなくなつて、一つ處にうろ〳〵するのみ。怪しい氣勢は次第に近づくらしい。

德子は小包一個を兩手に抱いたまゝ、遙に見える燈火の、其處は町の入口と思はれる方へ走出した。

疲れ切つた足は心にまかせず、幾度か物に跌き、窪地に踏入り、漸くの事で明所へ出た時は、此寒空にシットリ汗を搔いて、息詰りに卒倒するばかりであつた。

心の落着くと共に前後を見ると、幸ひ見當は取違へてもゐなかつた……。此處は青山三丁目なので、

其處から道を教はりつゝ、代々木に辿着いたのは、やがて一時間程後であつたが、最早其處此處に戸締りを爲る音が聞えて、心細い軒燈火は霜の小道を淡く照してゐる。

德子は唯或る角の煙草屋の店に立寄り、

「一寸物を伺ひますが……」

「何ですね。」と、奥で帳合でもしてゐるらしい亭主が其まゝ訊いた。

「此邊に、眞壁といふ家はございますまいかしら？」

「眞壁……何番地です？」

德子が其れを告げると、

「おやあ此奥あたりだかな。」と、少し考へるらしかつたが「然うだ、其家ならつい此頃越してきたのでせう？」

「えゝ、然うです。」

「では此處から二軒目の路地を入つて、其突當りを空地について右へ曲ると、其處に普請中の家が二軒ありますがね、えゝ、新しいから暗くつても解ります。其新建と背中合せになつてゐる家がたしか眞壁さんと言ひましたよ。街燈が出てゐるから直に知れます。」

「有難うございます。」と、德子は店頭をはなれた。

「空地の處が路が惡いから、能く足許に氣をおつけなさいよ。」

教へられた路地を入つた時には、德子は嬉しさに氣ばかり急いてゐた。今迄の事も、途中の疲勞も、一切忘れ果てて、唯少しも疾く父母の顏を見たいと思ふばかり。

空地の邊は言はれた通り足場が惡かつたけれど、其處を過ぎて新築の横手を拔けると、生垣で圍つた小さい門の處に微暗い燈火があつて、實にも眞壁と記してあつた。

「あゝ、此處……」と走寄つた德子は、門の扉に手をかけると共に、忽ち夢の覺めた如く、其まゝ凝乎と足を停めた。

＊　　＊　　＊　　＊

机の前に端坐して、淹れたての香茶の熱いのを啜りつゝ、古い漢書を讀んでゐる良人の横顏を、禮子は恐る〳〵見上けたが、

「明日あたり、一寸見舞に行つて來たいと存じますが、如何でございませうか？」

「内田の處へかな？」

「はい。病院へ……」

「ふむ……」と、俊彦は少時考へて「元來それが當然だがなあ。」

「甚麼容態でございますか、話の樣子では迚も逢つた處で解りは致しますまいけれど、それに

しても、一度は訪ねてやりませんでは、何うも氣が濟みませんから。」

「大きに尤もな事だ。逢うて見たら却つて悲しい思ひを増すばかり、淺ましい有樣に失望を重ねるかも知れぬけれど、左に右、然うしてやらねばならぬ譯だ。敷木の家に居るうちこそ、來られては迷惑だといふ話であつたが、今は病院に入つて居るから其心配は入るまい。お前が然う思ひ立つた事であれば、早速見舞うてやりなさい。」

「はい。」と、禮子は嬉しさうに言つた。

「けれど、其前に德子に逢うて、彼女の考へも能く聞いてみるが可いぞ。他の病人と違つて、親戚知人の顏を見せて可いものか、惡いものか、醫者の意見も有るだらうから、其れを確めて置かねばならん。」

「然樣でございますね。」

「敷木に對しても、兄弟とは言ひながら、此方としては今迄の禮を述べるが至當だ。而して病院の事は德から委しく訊くが可い。」

又少時話が絶えると、禮子は思ひ餘つたやうに、

「其れは然うと、彼女の體はどうなるでございませう？」

「何うなるとは？」

「……萬一の事が有りましたら。」

「又、那樣事を言ひなさるか。」と、俊彥は眉を顰めて「お前は左右怖氣癖がついてゐるから可かぬ。」

「ではございますが、先日德子から寄越しました手紙では、何うやら心細くなりましたので。」と俯いたまゝそつと涙を拭いた。

「其れも命だ。誰にしても人間は遲かれ速かれ死なねばならん。夫婦は一體とは言ひながら、是とても何方が先へ死ぬか解らん。然ういふ事を氣にして居つたら際限の無いものだよ。」

「はい。」と言つたが、何うも落着かぬらしく「是で四度目でございますからね。四人が四人、ひよつと同じやうな廻り合せになりはしないかと思ひますと……」

「するとお前は——德が家へ歸つて來るやうな事でも——」

俊彥も其れを考へてゐるらしく、言には一種の力も籠つたけれど、直に思ひ返して、

「何を馬鹿な事を言ふか。彼女は文のやうな人間ではない。」

「でも、何しろ內田が居りませんでは、他に便が無いのですから。一人法師でございますものね——」

「何が一人か。良人は宅に居らぬにしても、姑が居るぢやないか。又義理ある兄夫婦も居るではないか。他に親戚の無いものなら親の家へ歸つて同居するも已むを得ぬが、良人に代つて仕へなければならぬ姑の有る身が、何で那樣我儘が能きるものか。」

「……。」

「それは、考へれば……」と、俊彥は熟と窓の方を見詰めたまゝ「彼女の運命も決して幸ひではなかつた。併し彼女だけは未だ辛うじて其不運な場所に踏留つて呉れるだらう。姑も義兄も無論今迄の忠實な行ひに免じて、彼女を愛してくれるだらう。本人は又家名を思つたならば、那樣事の出來る道理はないからな。俺は信ずる、四人のうち三人までは最早望の無い事になつたが、殘る一人は大丈夫だ。德子に限つては必ず安心だ。彼女だけは親の望を支へて呉れる。」

と言ふ時、門の方で犬の吠立つる聲がするので、俊彥は忽ち耳を側だて、

「六一郎！」

「はい。」と、それを聞きつけて室を出て來た六一郎が緣側で答へた。

「何か來たらしいぞ。出て見なさい。」

休養

「阿父さん、姉さんでした。」と、六一郎が慌しく告げた。
「姉さんとは？　誰……」と、禮子が立出でようとする時、
「内田の姉さんですよ。」
俊彦も禮子も、愕然として顔を見合せた。
「何うしたんです。」と、六一郎は玄關の方へ小戻りして「姉さん、那樣處に何をしてゐるんです？」
徳子は暗い壁の方を向いて、答も爲ずに立つてゐる。淡い燈火に肩が搖いで、障子に映る影も薄い。
「何故斷樣處に……」と、差覗いた六一郎は、急に聲を竊めて「姉さん、心配な事でも起つたのですか？」
「えゝ。」
「兄樣の病氣が惡いんですか？」
それを語る間もなく、奧に俊彦の聲がした。
「これ！　何を手間取つて居るのか、六一郎…」
「はい。」
「誰が來たのは眞實か？」
「はい。」と、六一郎は狼狽して「姉さん、疾くおいでなさいよ。」
「まつたく來たのか？」
縁側へ歩み出る音がすると、徳子は慌てて入口の方へ身を退いた。
「姉さん、此方ですよ。變だなあ。」
廣くもない家の奧から、俊彦は衝と現れた。
「おゝ、矢張然うか。」
徳子は最早遁れやうもないので、其まゝ隅へ膝を突いた。
「那樣處で愚圖々々して居る事はない。此方へ來なさい。さあ、構はずに……」
引返す後に附いて、徳子は心ならずも座敷へ入つた。禮子も入口まで出て來たが、
「まあ、斷樣遲く……能く初めてで家が解れましたね。」
「其處の煙草屋で教へて貰ひましたの。」と、徳子は漸く口をきいた。
「然うか。」と、俊彦は火鉢の炭火を掻け「まあ、此處へ來て當るが可い。寒いのに、嘸かし困つたらう。」
「いゝえ、其程でもございませんわ。」
徳子は少し兩親の方へ膝を進めながら、思つたよりも見窄らしい家の有樣を見廻した。併し嚴格な父も、内氣な母も、元氣の好い弟も、此狹い處に固まつたのが以前に較べると却つて打解けてゐるやうにも思はれる。居所が小締りとした所爲か、それとも重ね〳〵の不幸に、憂ひを分つ人々の心が自然斯うなつたのか、何れにしても是までよりも一層親しい團欒に、其夜は話も濃であつたらしく見受けられた。
「能く來たな。今夜訪ねて呉れようとは考へても居らなかつたのに。」
「今も今、お前のところの噂をしてゐたのだよ。」と、禮子は顫へ聲で「まつたく噂を爲れば影とは此事でございますね。」
「うむ。」と、俊彦は頷きつゝも、其目を徳子の姿から放さず「時に早速だが、内田の病氣は甚麼風かな？」
「相變らずでございます。」
「すると、未た意識は明瞭して居らんか、其處までは行かぬか？」
「はい。」
「然うか。」と、腕を組んで「困る喃。併し他の病氣とは違ふのだし、況して素人考へではあるが、病氣が未だ初期だから、事によると、又何うかいふ動機で偶と以前の頭腦に歸らんとも限らん。まあ〳〵其れを祈りつゝ、看病に努

めねばならぬ。」
　那樣望の無い事は醫者から聽知つてゐるので、其慰藉の言を聞いても德子は格別嬉しいとは思はなかつた。
「何に依らず、人間は悲觀しては可けぬ。何處までも前途に一つの望をもつて、絕えず元氣好く進むのが一番だ。」
「然うでございますとも！」と、禮子は何時になく熱心に「然うすれば心が屆かないとも限りません。蟻の思ひも天までといふ事がありますからね。」
「はい」と、德子は力無い聲で言つた。
　兩親は父顏を見合した。互の心には黑い一つの影があるのだが、其れに觸りたくない、見たくもない、考へる事さへも爲たくない……といふ氣持は二人の間に漂うて、用心深い目が幾度か出會ふ。
「初めて伺ひましたけれど、大層好い家でございますのね。」と、德子は心にも無い事を言つた。
「おゝ、お前にも然う思はれるか。」と、俊彥は故意に喜ばしく「實は此家へ移るについては、種々と深い理由があつたのだが、德！　お前も知つての通り彼の大久保の家も非常に古くなつて居るのでな。今年中か來年の春は、根繼でも爲なければなるまいと思つたところが、恰度幸ひに……」
　那樣事を言つても何もならぬと思ひつゝ、俊彥は心安く語つた。禮子は傍から、
「あの、お姑や皆さんにはお變りが有りませんかい？」
「はい。」
「お前さんも壯健で……それが何よりですよ。」
「阿父樣も、阿母樣も、御丈夫で結構でございますわね。」
「うむ、其れだけは安心してくれ。」と、俊彥は頷いて「何が有らうと、我々は此通り元氣だ。」
　話が絕えると、二人は又不穩の目を合せた。而して德子の蒼い顏色が、益す恐怖を起させた。
「今も妾は阿父樣にお願ひして、明日あたりはお見舞に行かうと思つてゐたのですよ。」
「病院へでございますか？」
「其方もだし、數木さんの處へもお寄りして、種々是からの事をお賴み申さうと思つてね。」
　德子は何とも答へなかつた。
　俊彥は我慢が能きなくなつて、
「其れは然うと、不意に夜中にやつて來たのは、何か急な用事でも出來したのかな？」
「然うですの。」
「はゝあ」と、兩手を膝に「何事か。」
　德子は遣瀨無ささうに母の顏を見た。
「疾くお言ひなさいよ。聽かないことは餘計心配になります。」
「……………」
「何うしたの？」
　黑い影は次第に明瞭して來た。而して誰も最初のやうに徒らに恐れて避けては居られなくなつた。德子は幾度か言はうとしながら、何うも思ひ切る事が能きなかつた。
　冷い夜風が戶の隙から吹込んで、襟元の寒さに各自は身を縮めた。壓迫されたやうな沈默を破つて、生木の柱の裂ける音がする。
　禮子は其音に怯えた如く、
「それぢやお前は……もしか。」
　德子の膝には潸然と淚が零れた。
「え？」と、禮子は傍へ差寄つて「仍且然うだつたのかえ。」
「はい。」と、疊へ泣伏す。
　俊彥も色を變へたが、
「單にそれだけでは解らん。明瞭と言ひなさ

い。お前の口から、其顛末を！」
「申上げる事はないのです。唯無理に歸れといふので、妾は追出されたのですもの。」
「誰に？」
「家から……でございます。」
「それでは、數木の家には置く事が能きんといふのか。内田が入院した後は、お前一人を置けぬといふのだな。」
「然うでございます。」
「生活向の都合か。」
「それが、一番重な事情でございます。」
「ふむ。」
嘆息と、歔欷と、長い〳〵無言の後、俊彦は徐に言つた。
「已むを得ん事だな。」
禮子は茫然と、
「何うなるのでございます。此始末は。」
「都合とあれば是非がない。此女の身は此方で預るさ。」
「申譯がございません。」と、德子は又小さな聲で言つた「妾、斷らして歸つて參ります筈はございませんでした。今までの種々な出來事を知つて居りますから、其上に又妾までがと思ひますと、いつそ途中で何うとも爲つた方が可いとも存じましたのです。」
「何を言ふ。」と、俊彦は遮つて「お前ばかりが那樣遠慮はいらん事だ。」
「まあ、何といふ事でせう。」と、禮子は泣くにも泣かれぬ樣で「何うしたといふのでせう。四人とも、とう〳〵斯樣事になるとは！」
「併しながら是が終局だ。最早此以上に不幸の來やうもなからう。」と、俊彦は和しく「德！お前は其四人のうちで、一番長く辛苦したらう。お前の良人に忠實であつた事は、誰が何と言はうと我々が能く知つて居る。盡すだけ盡して、それで斯うなつたのは、決してお前の罪ではない、此休養は寧ろ名譽だ。此處へ歸つたのは數木の家から都合上眞壁へ移つたのみ。而して其移つた事は、我々の爲にもお前の爲にも、却つて都合が能かつたのだ。俺は貧しく暮して居るが、未だ〳〵お前を休養させる位の事は能きる。」
「でも大勢が……」
「那樣事は心配するな。」と、禮子を顧みて「茶でも淹れて、何ぞ暖かい物を馳走してやれ。」

藥とり

代々木の霜は日に〳〵白く、緣の見晴しの空地には、處斑の草が黄み、向方の森は骨も露はになつて、朝の寒さに落漠つた西の空には、雪に化粧つた富士山が畫のやうに劃然と見えて來た。
四人が四人、他家へ行つたものは殘らず歸つて來て、眞壁の家は賑かになつた。而して各自に侘しい膝を突合した。
文子は姉の許に、芳子と德子は父母の許に、落着くものは落着いて、此上は最早悲しい事の有りやうがない。不幸も是で種切れだと定つた俊彦の言には何とも言はれぬ淋しい絶望的の響があつた。
併し、實際不幸は種切れでなかつた。望む事に際限の無い如く、望まぬ物も際限無く此一家を見舞うた。
十一月の末から風邪の氣味で引籠つた禮子は、それが拗れてドッと床に就くやうになり、三十九度近い熱が其まゝ續いて、半月程經つても少しも快い方には向はぬ。醫者の見立に、別に心配するやうな重態とも思はれぬが、如何にも平常から體力が衰へてゐるので、存外恢復が遲からうといふ事である。
俊彦も其れを氣にした。體力といふ條、其れも詰りは氣力である。自分から元氣を振興し

て、病に打勝つやうに爲ねばと、言を盡して勵ましたが、病勢は依然として悪くも快くもならなかつた。

　恰度朝の十時頃、芳子と德子が裏口で洗ひ物をしてゐるところへ、俊彦は帽子を片手に現れた。

「おや、お出かけですの？」と、先へ見つけた德子が言つた。

「ふむ。一寸麹町まで行つて來るから、跡を頼むぞ。」

「畏まりました。」

「それから、何方でも可いから、手都合で午前中に藥取に行つて來て呉れ。」

「はい。」

「病人は今能く眠つて居るやうだが、目を覺すと可かんから、一人は枕頭に附いて居らぬと困るぞ。」

「可しうございます。」

　俊彦は帽子を冠り、霜解にグシャ〳〵した徑を行きかけたが、偶と立止つて、

「俺の事を訊いたら、麹町の森本さんへ行つたと言うてくれ。正午頃には戻つて來る。」

「行つていらつしやいまし。」と、姉妹は揃つて小腰を屈めた。

　寒菊の咲く四ツ目垣をめぐつて、俊彦は往來の方へ歩んだ。足許も確りと、直な頸、聳えた肩、それは以前に變らぬが、此半年ばかりの中に滅切り痩せた後姿の、寒い風に吹かれて行くのを見送つて、二女は共に心細い氣がした。

　德子は襷を掛けながら、

「姉さん、森本さんといふのは少將の…彼の方でせう？」

「然うよ。」と、芳子は頷いた。

「今ではたしか後備におなりなすつたのね。」

「え〻。此頃では間接に實業の方へ關係しておいでなさるのだとさ。」

「へえ、然うですか。」

「彼の方は最前から金滿家だから、大方株でも澤山持つて被在るのだらう。」

「那樣事も聞きましたつけ。」と、德子は盥の前に蹲み「阿父樣は、此頃時々森本さんをお訪ねなさるんですね。」

「あ〻。前方はお正月と、間には稀にしかいらつしやらなかつたのだけれど、此頃では……」と、芳子は井戸側に倚りか〻つたま〻、呢と空地の方を見たが「妾も能くは知らないけれど、阿父さんは、何處かお勤めの口を探しておいでなさるらしいわ。其れだから、以前の關係も有るし、種々森本さんにお願ひなすつたらしいの。」

「お勤めを？」と、德子は姉を見上げ「だけど、今のお年齢で何を爲さるんでせうね。」

「それは老人に能きるやうな事でせうが、假令少とは無理な事でも、我慢しておやりなさる御決心らしいわ。然うしなければ、家の方が困るからね。」と、久しい間の家政に與はつてゐるだけに、芳子は其邊の事も察してゐるのであつた。

「まあ、那樣に…ですか？」

　芳子は答へずに嘆息を吐いた。

「眞實の事なの？」

「昨日も、壽子さんと其事で内證話をしていらしつたわ。貯蓄も最早少くなつたから、來年は是非大改革をしなけりやならないといふやうな事を。」

　德子は悄然として、

「然ういふ事になつたのも、皆妾達の爲ですわね。」

「然う、皆の責任です。それでも壽子さんは言ふ迄もなく、妾やお前さんは未だ〳〵其罪の輕い方だけれど、一番重いのは彼の父だよ。彼

の人の爲に、家は無くして了ふし、其外にもお金はお費ひなすつたし。彼様事さへなかつたらと思ふと、妾は一人で口惜しくつて爲やうがないの。」

「だけど、姉さん、其れは五十歩百歩ですわ。貴女は一番長い間厄介をかけておいでなさるし、妾は一番困る處へ歸つて來たのですもの、而して是から先阿父様や阿母さんの御厄介になるのは、誰も同じ事です。」

芳子は可厭な顔をした。

「誰も一様に不運で、誰も一様に惡いのです。然ういふ者が寄つて集つて、お年を召した御両親を苦しめるのです。」と、面を背けた徳子はハラハラと涙を流して「あゝ、妾達は不孝者ですね。」

「然う考へた日には、一日だつて此處には居られない。」

「貴女も然う考へて被在るの？」

眞面目な徳子の問に對して、芳子は非常に狼狽したらしかつたが、

「まあ、然ういふ話は廢しませう。考へるにつけて段々心細くなるばかりだから。それは然うと、妾はお薬取に行つて來なけりやならない。」

徳子も氣が着いて、

「然うでしたね。妾が行つて來ませう。」

「可いわ。此前貴女に行つて貰つたから、今日は妾が行きます。其代り阿母様の方をお頼みしますよ。」

「えゝ。」

芳子は急いで家へ入つた。徳子もやがて洗物を半ばで切揚げ、手を拭きながら入らうとすると、恰度支度して出て來た芳子が、

「未だ能く寢ておいでなさるよ。」

「然うですか。」

「お目が覺めたら、牛乳をあげて頂戴。」

「可うございます。」

「外は彼方に用は無かつたかしら。」

「鷄卵は未だ有りましたのね。」

「次手だから、五個も買つて來て置きませうかね。」と、言捨てて、芳子は緣の逆剝れた吾妻下駄を突かけて、忙しさうに出て行つた。

其れから十分程經つた頃、玄關の格子の啓く音がしたので、徳子は急いで出て見ると、末の妹の勝子が徐と内へ入つた處。

「あら、お前さんだつたの？」

「今日は。」と、勝子は會釋した。

年も若し、所帯持の苦い經驗は無いし、殊に外國人の家庭に居るだけに、彼女は何となく活々と元氣に充ちてゐた。

「寒くなりましたわね。」と、肩掛を脱して「御病氣は何う？」

「相變らずなの。」と、徳子は低聲で言つた。

「困る事ね。」

直に病室へ行かうとするのを、徳子は引留めて、

「今は能く寢ておいでだからね。」

「あゝ、然うですか。」

勝子は頷いて、忍び足に其次の間に入つた。

「今日はお休みなの？」

「いゝえ、一日お暇を貰つて來たのです。母様が病氣だといふ事を話したら、大變心配して、直に行つて來いと勸めて下さるから。」と、持つて來た包を引寄せて「姉さん、是はお見舞に下すつたのよ。」

「まあ、何ですか有難う。」

「林檎とオレンジなの。其オレンジは亞米利加から來たのです。大變美味のですよ。」

「其れはまあ、嘸お喜びなさるだらう。」と、徳子は嬉しさうな顔をした。

「而して姉さん、今日は貴女一人で被在るの？」

「えゝ、阿父様は麹町へお出かけなすつたし、芳子さんはお醫者様へ藥取に行つて下すつたし。」

「然うですか。」と、勝子は麻のハンケチを出して、膝の上で小さく疊んだ。

「お前さんも、今日は夕方まで居ても可いのでせう？」

「えゝ、五時頃に歸れば構はないのです一體今はクリスマス前で忙しいのですけれど、他の事ではなし、少とも差支は無いのですよ。」と、障子の硝子越しに霜枯れた庭を見やり「此邊は眞實に田舍ですのね。稀に來るせゐか、氣が伸々しますわ。」

「餘り淋し過ぎるわ。夜なんぞ、其れは……」と、徳子は茶を注ぎながら「でも、此頃では大分開けて來たのですとさ。」

勝子は漫に頷いたが、

「あ、妾すつかり忘れてゐました。内田の兄様の方は何うなんです？」

「其方もね、」と、徳子は俯いて「仍且同じ事なんですよ。」

一叢雲に日は蔭つて、菊の小庭が暗くなると、何處から來たか鵯が氣立ましく啼立てた。

病室では、禮子の咳入る聲がする。

病床

徳子は障子の際へ身を傾げて、其隙間から病室を覗いたが、やがて其方へ躙寄り、

「阿母さん、阿母様……」

「誰？　然ういふのは。」

「妾です、徳ですの。」

「然うかい。」と、微に咳入つて、又少時は身動きも爲ぬ。

徳子は徐に其枕頭へ寄つた。

「阿母さん、お目が覺めたら何か召あがりますか。然う……牛の乳が有りますが。」

禮子は頭を振つた。

「あがりませんの？」

「あゝ、今は欲しくもありません。お徳さんや。」

「何でございます。」

「阿父さんは何うして被在るね。時々はお傍へ行つて御用を伺はないと可けませんよ。」

「はい。阿父様は唯今お出ましになりました。」

「おや……何處へ？」

「麹町の森本さんへいらつしやいました。正午頃までには戻ると仰有つて。」

「あゝ、然うですか。此お寒いのに御苦勞な事ですわね」と、少し身を動かし「お芳は？」

「姉さんはお藥取に行きました。」

禮子は頷いた。

「それから、今勝が參りましたのよ。」

「何か用でも有つてかい？　あゝ、寒くなつたので衣服の仕立直しを取りに來たのぢやないか。妾がこんな體にならなければ、疾に仕立てて置いたのだけれど……其事も氣になつてゐましたよ。嘸不自由してゐるだらうと思つてね。」

「那樣事ぢやないのですよ。」と、徳子は手を振つて「お見舞に來ましたの。」

勝子も其處へ入つて、姉の背後から差覗いたが、思ひの外の窶れやうを見ると、彼女は胸が一杯になつた。

「母さん！」

禮子は眼ばかり上げて其方を見たが、其光もドンヨリと、時雨れた空のやうであつた。

勝子は思はず涙ぐんだけれど、徳子の氣遣はしげな眴せに、其まゝ強ひて笑顔を作つて、

「母様、如何です？」

「有難う……何うもねえ、困りましたよ。」

「妾、御病氣だといふ事を聞きましたけれど、こんな……あの、ずつと寢て被在る程ぢやないと思つたのですよ。」

「妾もね、斯うしてゐても氣が氣ではないのですよ。」
「けれど、餘り焦躁なさらない方が可いわ。」と、勝子は次第に枕頭へ寄つた。
德子は替つて次の間へ立つたが、やがて盆の上に菓物を盛つて入つて來た。
「阿母さん、是は勝がお見舞に持つて來てくれました。貴女のお好きなオレンジも澤山に……」と、其處へ置いて「是は外國から來たのですとさ。」
「まあ、見事なのね。」
「一つ剝いて差上げませうか？」
「否、阿父樣がお歸りになつてから……お目にかけた上にしませうよ。折角然うして親切に遠方を持つて來てくれたのだもの。」
「然うですか。では此處へ置きませう。」と、少時は病人の樣子を見た後「あの、御用が無ければ妾一寸張物をして了ひたいと思ひますの。恰度此人も居てくれますから……」
「あゝ、可いとも。」と、禮子は快く「今は日が短くなつたから、朝のうちに手廻しを爲て置くが可い。」
德子は妹の方を見て、
「では少しの間お賴みしましたよ。用が有つたら此處から呼んで下さい。」
「えゝ、可くつてよ。妾お話を爲てゐますから。」
雲の切目を移る日が、障子に明るい影を投て、室内が少し陽氣になると、其れにつけても母の衰へが目に立つ。一人殘つて差對ひに顏を見合せた勝子は、急に襲ひ來る不安の念に何うしても默つては居られなかつた。
「母樣、それでも少とは御氣分の快くなつた方ですか？」
「……………」
「何うですの？」
禮子は目を閉ぢ、熟と思案をするらしかつたが、又ふつと見開いて、
「でも、能く來ておくれだつた。お前も忙しい體なのに、眞實に能く來て……」
然ういふ中に溢れる涙が、ホロ〳〵と白い敷布の上に落ちるのを見ては、勝子も何がなしに引入れられて、ついハンケチを顏に當てながら、
「何うなすつたの、母樣！　何故那樣悲しい事を仰有るの。」
「あのね。」と、禮子は瘦せた手を伸べて「妾は斯うして居ても、お前の事が心配でならなかつたのだよ。」
「然ういふ事にお心を使はない方が可うございますよ。妾今ではあの……非常に幸福ですから、コールさんも彼の通り親切な人ですし、勤めは大變氣樂ですし、何事も神樣の思召にまかせて愉快に働いて居りますのよ。」
「其れは然うでせう。妾もお前の現在の身の上については何にも氣遣はしません。」
「えゝ、何うぞお心安く思つて下さいまし。」
禮子は深い嘆息を吐いて、
「妾の案じるのは將來の事なの……」
「那樣事は何うだつて。」
弱々しい冬の蠅が、うるさく枕頭を飛廻るので、勝子は徐にハンケチを振つた。
「いゝえ、可くはありません。五人有る姉妹のうち四人だけは……四人だけは最早極りも附いたけれど、お前一人が未だ其まゝでは、妾何うも氣にかゝる。」
「……………」
「六一郎は男子だから、是はまあ先へ寄つて、自分の力で何うともなるだらうけれど、女は然うも行かないからね。」
「それは何の事？」と、勝子は目を丸くした。
禮子は無理に俯しになつて、額を枕に埋め

つゝ、
「お前が一人殘つてゐる。妾の役も未だそれだけ殘つてゐるのですよ。
「母樣。」と、勝子は母の肩に搔卷を掛けて「何故那樣事を仰有るの？　え、何うしてなんでせう。」
「妾は、最早助からないよ。」
「まあ」と、其手を後に疊へ突いたが「然ういふ悲しい事を仰有るものぢやないわ。人の命は自分にだつて解るものぢやありません。誰だつて然うです。」
「でも、妾は知つてゐますよ。」
「いゝえ、唯那樣夢を御覽なすつたのです。其れも御病氣の所爲ですわ。母樣！　誰でも病氣に罹ると、然ういふ氣も爲るでせうが、其れは全く無意味ですわ。人といふものは然う容易く死ぬものではございません、死ねるものでもありません。神樣は道傍に餌を拾ふ小さな雀の命をも護つて下さいます。」
「では、妾の身もお護り下さるのかね？」
「えゝ、其れは言ふまでも有りませんわ。」
「妾でさへお惠が受けられるなら、其神樣に仕へるお前の事は、別けてもお護り下さるだらうね。」
「誰彼の區別無く、我々はお惠に浴して居ります。罪有る人に代つて、此世の苦痛をお受けなすつた神の子は、誰をも慈愛の御手に撫でて下さいますのよ。悲める者は幸ひなりと仰有つたのは、眞實に有難い思召なのですわ。母樣も然う信じて安心して被在い、きつとお救を受けると信じて。」
「自分の事は何うならうと、お前さへ幸福なら、それで妾は喜んで居ます。妾が居なかつたところで、阿父樣は被在るし、多勢の姉達も居るから、きつと面倒は見てくれるだらうが、妾の代りに骨を折つては吳れるだらうが……」
「母樣！」と、勝子は息詰つたやうに「貴女は妾の……其事を思つて被在るのですか。」
「可い所へ緣づけて、幸福な生涯を送らせたいといふのが親の望です。而して又、それが親の義務ですもの。」
勝子は骨ばかりの母の手を取つて、
「有難うございます。其お慈悲は忘れは致しません。けれど……斯樣事を言ふと、定めし生意氣だと仰有るか知れませんが、妾……ねえ母樣、妾疾うから決心してゐます。自分は結婚しない事に！」
「え？」と、禮子は落窪んだ目を睜つた。
「お心に背くか解りませんが、固く然う思つて居ります。」
「それは、家の爲にかえ？」
「否、妾自身の爲に……」
禮子は稍しばらく見詰めてゐたが、片手を額に押當てて、胸も潰れる程歔欷いた
「親としては言ひたくない。言つては間違つてゐるけれど、其志の有るかぎりは、何うぞ輕々しく結婚なんぞをしてお吳れでないよ。皆が皆然うではない、吉も凶も運だけれど、人の妻になるのは、きつと幸福とは限らない。人の母となる者も……」
「安心して下さいよ。」と、勝子は頰を摺寄せて「妾は能く考へて、今自分の有つてゐる、此生れたまゝの幸福を失さないやうにしますわ。」
「然うしておくれ。お前だけは……家の爲より自分の爲に、殘つた一つの幸福を大切に持つてゐておくれ。」
「えゝ、大丈夫よ。」
禮子は切ない聲で言つた。
「あゝ、妾は何の爲に生きてゐたのだらう。多くの我子の不幸を見た擧句、自分の娘に斯樣氣の毒な事を言遺す爲に、妾は生きてゐたのかしら。」

「母様！」と、勝子は母の手に縋つて、泣伏した「貴女こそ、貴女こそお氣の毒な方ですわ。」

電　報

禮子の病勢は其後一時快い方に向つた。此分ならばと、俊彦を初め一同は愁眉を開いて、當時泊りぎりにしてゐた勝子も漸く昨日築地へ歸つた。

小春日和のぬく〳〵と續いて、庭の枇杷の樹は葉隱れて侘しい花をつけると、時を極めて來る鶯が明障子に影を落し、チョッ〳〵と小忙しない聲で啼くやうになつた。

四五日ぶりで曇つた日の、正午時から俄に寒氣を増して、低い雲行の少時も保たず、やがてパラ〳〵と霰の降る音がした。交る〴〵看病してゐる芳子も德子も、

「あゝ厭な日だ。」と、思つた。

「姉さん、何も取込む物はなくつて？」

「然う〳〵。」と、芳子は氣が着き「足袋が乾しばなしになつてゐるの。」

其れを聞いた德子が急いで取りに出る時、細い路を搖られ〳〵醫者の俥が入つて來た。德子は小戻りして、

「姉さん、先生がいらしつてよ。」

「然う……」と、芳子は周章と病人の枕頭を片附ける。

間もなく德子に導かれて入つて來た醫師は、四十恰好の脊丈の高い、でつぷりした赭顔の薄髭を生した人で、此近傍では一番信用のある學士であつた。

「惡い物が降つて來ましたな。」

と、ゆつたりした語調で言ひながら座に着くと、德子が車夫から受取つた小鞄を持つて來る。

「恐れ入りました。」輕く會釋して「今日は阿父様は？」

「今日も、一寸麹町まで出かけました。追つけ戻つて參るのですが……」

「然うですか。時に……甚麼御様子でしたな？」と、スヤ〳〵睡つてゐる病人に目を注いだ。

「寒い所爲か、昨日あたりよりも元氣がございませんやうで。」

「ふむ。」と、頷いて「召あがる物は？」

「今朝程ソップを眞の少量飲みましただけでございますの。」と、德子が少し膝を前め「ねえ、其れぎりですわね。」

「はあ。」と、芳子は學士の顏を見た

學士は口を結んで、一寸小首を傾げた後、

「左に右、拜見しませう。」

病人を見詰めたまゝ、横手の火鉢に少時手を翳してゐたが、モーニングの背後から手巾を引出して其手を拭ひ、二膝ばかり刻寄つて、蒲團の下に投出した禮子の手を握つた。

芳子は傍から、

「母さん！　先生がいらしつたのですよ。」

禮子は微に呻吟いて目を開いたが、ドンヨリした瞳に見廻した後、又夢心地になつた。

「母様！」

「否、可しい。」

學士は大きな時計を出して脈を數へると、急に面白からぬ顏をして爪の色をしらべ、其れから瞼を押開けて眺めた結果、

「ふむ。」

「如何でございます？」と、德子は顫聲で訊いた。

「否……」

「大分惡いのでございませうか？」

「然うですな……左に右阿父様がお歸りになつたら、一寸お報せが願ひたい。」

あとは默然として手を洗ひつゝ、

「私は是から二軒ばかり廻診して、一度宅へ歸ります。夕刻には又伺ふが、もしそれまでに

お歸りになつたら、お越し下さるやうにお話し下さい。」
「畏まりました。」と、芳子が言つた。
學士が玄關へ出る後を、二人は氣遣ひながら追ひかけて、
「先生！　あの、もう難しいやうな事でも？」
學士は頭を振つた。
「何有、那樣急な事はありません。」
深い事も言はずに歸つて行つた。其俥を見送つた姉妹は、俄に淋しい氣持で顏を見合せたけれど、何方も物は言はなかつた。
枯れたまゝに未だ四ツ目垣へ括しつけた菊の上に、サラリ〳〵と霰が降つて、木立の向うの停車場では悲しい汽笛が長く響いた。
「姉さん。」
「え？」
「何うしたら可いでせう。」
「心細いわね。阿父樣が早く歸つていらつしやると可いけれど。」
「妾、お迎ひに行きませうか？」
「然うさ。事によつたら……けれど、先生は又夕方に來ると仰有つたし、未だ然う心配する程でもないのだらう。」
「左も右も、用心してゐないと可けませんわ。」
二人は病室に引返した。
一時間も經つて霰の音も小止んだ頃、麹町から歸つて來た俊彦は、芳子から醫師の傳言を聽くと、下にも居ずに又戸外へ出かけた。
「阿父樣！」と、德子は走出て「傘をお持ちなさらないと可けないでせう。」
「然うさな。」
暗い空を仰いで、
「用心に持つて行かうか喃。洋傘で可いぞ。」
差出したのを杖に突きながら、二歩三歩出かけたが、慌てて立戻つて、
「これ！」
二人は共に顏を上げた。
「言ふまでもないが、能く注意してくれ。」
「はい。」
「あゝ、可厭な天氣だ。」と呟きつゝ、俊彦は大急ぎで出て行つた。
其れから又小一時間すると、門に其人の足音がしたので、德子は逸疾く迎ひに出た。
「如何でございました？」
「ふむ。今話す。」
俊彦は其れぎり口を噤んで病室へ入り、其容態を見澄した後、徐に立つて次の間へ出た。
「今はよく睡つて居るらしいな。」
「えゝ。」と、二人は一緒に答へた。
「其處へ坐れ。」と指さして、父は力無く机の前に落着き「お前等も略察しがついたらう。今醫師の話によると、多分明日中の壽命だといふのだ。」
芳子も德子も今更のやうに胸が潰れた。
「それも致方がない。」
微な嘆息と、噛締めた歔欷と、少時は壓つけられたやうな靜かさが續いた末、德子は漸く口を開いた
「皆の處へ報せなければ可けませんね。」
俊彦は目を開いて、
「いや、歸りがけに電報を打つて置いた。」

遺言

壽子と文子は千駄ケ谷から、勝子は築地から、何れも其晩の中に集つた。
狹い家内に込入つた多くの人の、尋常ならぬ氣勢に引立てられたのか、禮子の心は其夜中から又冴返つた。昏々として唯眠息のみ續けてゐたのが、急に意識が戻つてハキ〳〵物も言ふやうになつた。
姉妹の或者は此分ならばと喜びの色を浮べたが、或者はいよ〳〵大事の近づいたといふ氣

がして、心私に落膽した。けれど、可くも不可くも俊彦のみは依然として沈默してゐるので、誰も思ふ事を口に出す者はなかつた。

何人が言を出しても、禮子は不思議さうな目で打目戍つた。而して、

「お前は何時來たの？」と訊いた。

目の醒めてゐる時には、見る物毎に訝しさうに、祕密でも嗅出さうとする心持も見えるので、後には芳子と德子だけが枕頭へ行く事になり、他の者は次の間に固まつてゐた。

其日は終日雨が降つた。淋しい軒滴が、家をめぐつてしと〳〵と可厭な音がする。一滴づつ心の底に沁みるやうな音だつた。醫師は朝と夕方と二度見舞つて、二度目には俊彦に何か簡單な話をして去つた。

燈火が點くと、室内は少しく陽氣にも見えたが、一歩緣に踏出せば暗い重々しい氣がいやが上に抑重なつて、最早逃れさうもない死の手が此一家の上に力強く被さつてゐる事は、誰が目にも明瞭と映つた。

俊彦は折々病室に出入して、其間々には古い表紙の書物に目を曝した。芳子と德子は少時も床の傍を離れず、他の三人は六一郎と共に玄關の三疊に籠つて話も爲ずにゐる。時々文子の抱いてゐる武夫が憤る聲が聞えて、あとは咳を爲るさへ忍びやかに、雨の音は夜と共に高くなつた。

柱時計が十一時を告げると、雨戸の隙から來る北風が何とも言ひやうのない冷たさを吹込んで、誰も彼も氣味惡く慄然とした。

急に一大危險が迫つたのではないかといふ感じが、期せずして人々の胸を轟かす。

俊彦が其傍へ坐つた時、禮子はフッと目を啓いた。

「何うかな？　氣分は……」

「有難うございます。」と、禮子は微笑みながら言つた「壽が參つて居りますなら、此處へお呼び下さいまし、それから他の者も……」

「何ぞ用でも有るか？」

「はい。少し申して置きたい事がございますから。」

俊彦は一寸考へた後、德子に母の言ふ通りにしろと命じた。

やがて壽子を先に、玄關に居た者は其室へ詰めかけた、座に餘つたものは明放された次の間の閾の傍に居並んだ。

「皆來たぞ。」と、俊彦は徐に報せて「壽！　阿母樣はお前に言ふ事があるさうな。此方へ寄つて聽くが可い。」

「はい。」と、壽子は周圍を見廻してから徐に母の方へ進出て、呢と其顏を覗込んで「母樣！　妾ですよ。お解りになりますか？」

「あゝ、能く解りました。お前さんには種々と賴んで置きたい事が有るので……よ。」

「何でございますの。」

「妾が死んだ後の事をね……」

壽子は今更のやうに喫驚して父の顏を見たが、

「母樣、氣の弱い事を仰有るものぢやありませんよ。」

「いゝえ。妾は最早駄目ですよ。」

「那樣事を……」

「壽！　默つて聽きなさい。」と、俊彦は眴せをした。

壽子は俯いて涙を抑へながら、

「伺ひますから、何でも仰有つて下さいまし。」

「お前は惣領の事だからね……」と、禮子は苦しさうに息を吐いて「別けても賴んで置きます。阿父樣も最早取るお年だから、何かにつけ傍で能くお世話をしてあげなければなりません。若い者は左右些細の事に行屆かぬ勝なやうに思ひます。其れは誰しも年の行かぬ爲でもあら

うが、お前さんは姉妹中の頭だからね、自分が先に立つて、他の者を能く引廻して下さいよ。孫の面倒ばかりでも一通りの事ではあるまいけれど、是から先は妾に成代つて、阿父樣の事と、今一つは六一郎の事を賴みます。」
「はい。」と、鼻を詰らせつゝ「其事は能く承知して居ります。」
「多くの子供達は未だ／＼此先種々の事にも出會はなければなるまいが、何ぞの時にはお前が心棒に立つて、好いやうに計らつてやつて下さい。ならうなら些細の事は阿父樣のお耳へ入れないやうにして……」
「能く解りましたよ。」
「第一に體を大切にしてね。」
「はい。」
「芳！」
「はい。」と、芳子が入替つた。
「お前には始終お手數をかけたね。」
「……………」
「お前は此後とも、仍且家に居て、何時も阿父樣に附いてゐておくれ。お前は二度と世の中へ出ては可けない。同じ苦勞を爲るなら、家にゐて苦勞を爲る方が自分の爲にも仕合せですよ。」
「妾も然う思つて居ます。」と、芳子は沈んだ聲で答へた。
「お前は妾に似てゐる。一番損な性分だから、決して……間違つても一人立にならうなぞと思つては可けません。」
「然うです。」
「女といふものは、左右他の事を羨んだり、餘計な處へ智慧を廻して、自分で自分の苦勞を求めたがるものだけれど、それは一番惡い事で、斯樣損な話は有りません。求めないでも苦勞は有るもの、詰らない事で壽命を縮めたところで、誰も褒めてくれる者は有りませんからね。」
「はい。」
「それで可い。お德を呼んで下さい。」
父の横に坐つてゐた德子は泣きながら斜めに進み出た。
「お前は一番因果だねえ。」と、言出した母親の聲は少時咳に途切れたが「何處へ行つても病人の世話ばかり……併し是も前世からの約束かも知れません。斯樣事が續いたからとて、決して嘆いては可けないよ。他の爲に盡すのが自分の持つて生れた運だと思つて、此先も何うぞ今のやうに眞面目な心をなくさないでおくれ。而してお前さんは未だ若い方だから、此後は家に居るよりも、自分の力で何なりと働くやうにするのが可いよ。志さへ固く眞面目にさへしてゐれば、何處へ行からと自分だけの働きは能きます。」
「お指圖はきつと守ります。」と、德子は能くも口がきけなかつた。
禮子は一つ頷いたぎり、上を向いて熟と目を閉ぢた。
長い沈默の後、壽子は父の方へ氣を兼ねながら、徐に、
「母樣……」と、呼んで見た。
「何？」と、禮子の答は意外に明瞭してゐた。
俊彥は腕組をしたまゝ、
「何か飮んではどうかい？」
「お湯を戴きませう。」
德子が室の隅に沸かしてあつた藥罐から溫湯を汲んで出すと、其れも一口附けたゞけで、禮子は再び目を閉ぢた。
「母樣！」と、壽子は又差寄り「他の者に……お話は有りませんか？」
「勝子には……もう能く言つて置きました。ねえ？」と、鈍い目をあげて其顏を探すので、壽子は少し身を開いた。
勝子は閾を越して內へ入り、
「母樣、もう何も心配なさいますな。此間の

お言は忘れませんからね。」

「能く考へておくれよ。それからね、妾の爲に何うかお祈りをして下さい。」

「えゝ。」と、氣丈な勝子も咽入つた。

「妾は安心してゐます。」

勝子は俯いて次の間へ出た。

「六一郎や。」

「何ですか？」

「多くの同胞のうちで、男はお前一人だから、お前の荷は一番重いね。」

「僕は、那樣事を苦しいとも何とも思やしませんよ。」

「然う……男はそれでなければ可けません。今も衆に言つて置いたし、各自それ〴〵に考へも有るだらうから、假令何うならうとも、お前に迷惑をかけるやうな那樣事はありますまいけれど。」

「僕は將來能きるだけの事はきつと爲ます。僕は此家の柱に成る意です」

「眞實に確り賴みます。阿父樣の志を繼いで、家を興して貰ふのはお前一人！ たつた一人しか有りはしません。」と、嘆息を吐いて「せめてもう一人も男の子が居てくれたら、阿父樣も甚麼にか氣丈夫にお暮しなさるだらうに……」

「だけど。」と、六一郎は忸怩して「僕一人で六人分の働きを爲ますよ。」

「あゝ。」と、淋しさうに微笑んで「何うか其元氣を何時までも忘れないで下さい。妾は草葉の蔭で、お前の出世を樂しんで見て居ますよ。」

六一郎は兩手を疊に突いて恭しく頭を下げたが、母の言が切れると、やがて悄然と後退りをした。

禮子は一寸辱を顯はした後、又前のやうな沈默に落ちた。

「母さん！」と、壽子は焦慮して「もう仰有る事は有りませんの？」

「……」

「あの、未だ文が來て居りますのよ。」と、耳許へ口を寄せ「何うぞ言葉をかけてやつて下さい。」

「別に……言ふ事は有りません。」

「でも、折角お伽をしてゐるのですから、一人だけ除者にしては可哀さうです。」

落窪んだ禮子の眼には忽ち淚が湧いた。

「阿父樣は何と仰有るか、伺つてみておくれ。」

「はい。」と、壽子は淚の目で父を見上げた

「呼んでやれ。」と、俊彥は顫聲で「此期に及んで、何の遠慮も氣兼もいらんぞ。」

「有難うございます。」と、禮子は微に言つた。

姉妹に促されて、嬰兒を抱いた文子が泣きながら蹈入つた。

「母樣、文が參りましたよ。」

「何處に？」と、禮子は少し頭を起したが「ああ、お前……」

文子は淚に汚れた顏をあげる。

「お前は仕合者ですよ。」

「はい。」

「此處へ呼んで戴いただけでも、阿父樣のお慈です。」

「……」

「此御恩と、姉さんの骨折を、何時が世にも忘れずにゐておくれ。過ぎた罪は今妾が償つてあげるから、是から先の孝行を賴みます。」

「はい。」

「武夫を大切にしておやりよ。」と、言終つて老いたる良人の方を見上げた「貴方！」

「安心しなさい。お前の心盡しは能く解つた。」

「此女を許してやつて下さいますか？」

「文は俺の子だ。お前のみの子ではないぞ。此女の爲に謝罪を爲るなら、俺もお前に謝罪びねばならん。最早何事も思殘すな。多勢の爲に未だ此父は踏止つて居るからな。」

「何うぞ、お頼み申します。」と、細い掌を合せて「貴方にばかり御苦勞をかけて、妾は今死ぬる身ではないのですが、是だけはおゆるし下さいまし」
「天命は是非もない。唯心安く逝つてくれ。」
「段々とお寒さに向ひますから。」
「うむ。」と、頷く聲は顫へてゐた
「衆もお氣をつけてあげておくれよ。」
「はい。」と、涙の聲を合せる。
「貴方……」
「何かな。」
「それでは……お先へ參ります。」
俊彦は熱と其顏を見てゐたが、やがて徐に手を伸べて、禮子の額を抑へた後、
「衆！　嗚呼、お前達の母は逝かれた。」
驚く氣勢と、摺寄る音と、泣く聲と、小家の内は搔亂れて、戶外には雨が降りしきる。

冬枯

代々木の小家から淋しい葬禮が出て後、其初七日もやがて過ぎた。
冬の中頃の霜日和が昨日も今日もぬく〳〵と續くうちに、何時とはなしに寒さは增して、カレンダーの乏しい日數も、一枚づつ剝行く跡の心細いやうになつた。
恰度其二七日といふ日、白金の寺に打揃うて墓詣りした五人の姉妹は六一郎と共に代々木の家に集つた。
賑かで淋しい六人が庭口から入ると、日當りの好い緣側の障子を一枚だけ啓けて、其陰に坐つてゐた俊彦は靜かに外を差覗いたが、手には長い刀がキラリと光つてゐた。
「唯今……」と、壽子は奧を覗込んで「お手入ですの？」
「うむ。餘り所在がないし殊に天氣も好いからな。」
と、俊彦は心靜に奉書で拭きあげた刀身を美しい日長に翳して飽かずも打目戍つたが、其一口を鞘に納める時、一同は揃つて閾際に手を突いた。
「おゝ御苦勞だつたの」と、眼鏡を外して「此天氣では寺詣も好都合であつたらう。」
「はい。」
「それは可かつた」と、改めて一同を見渡し「あゝ、彼女も毎日淋しがつてゐたらうに、お前等が揃つて行つてやつたら、嘸滿足に思つたであらう」
誰も何とも言はなかつた。少時すると、壽子が、
「阿父さんこそお一人で、定めしお淋しうございましたらう？」
「いや、俺には友達が三四人有るからな、一人で居ると、其人達が出て來て相手をしてくれる。」
「おや、何方がいらしつたのですか？」
「すでに三人ばかり來てくれた。」
「何人ですの？」と、芳子が訊いた。
「一人は大和の人で五字の忠吉、一人は井上眞改……」
「あら、刀のお話ですか。」
俊彦は笑つた。
「何れも今では隱居をしてゐるが、併し皆立派なものばかりだ。老妻に別れた俺を、此人々は能く慰めてくれるよ。」
やがて女達は座を退いたが、德子が膝を立てようとする時、俊彦は偶と思出して、
「然う〳〵。德！　お前の處へ手紙が來て居つた。」
提煙草盆の抽匣から一通の封書を出して渡したのを、德子は進寄つて受取りつゝ、裏を飜して見ると、數木作太郎と記してある。
「あゝ、數木……」
吉事か凶事か、德子の聲は先づ顫へた。俊彦

は靜かに其方を見やつて、

「早速讀んで、差支無くば俺にも話してくれ。久しく内田の消息も聞かぬから、心配でならぬのだ。」

徳子は目を閉ぢたまゝ封を切つた。俊彦は膝を進めて、

「内田の事が書いてあるか。」

「拜啓……」と、徳子は低聲で明瞭と讀出した。

「逐日寒氣に向ひ候處、益々御清適の事と奉存候。陳者内田金吾事、病中永らく御世話に相成候段、拙家一同深く感謝致居り候儀に御座候。猶入院中も度々御見舞下され候趣、附添の者より承り常々御芳志に感じ居り候次第に有之、然る處……』

徳子の聲は俄に絶えた。

俊彦は眉を顰めて、

「ふむ。其れから何うした？」

「はい。然る……」

「然る處？ 追々快くなつたのかな？」

「……」

「何うしたか？」

徳子は讀んで聞かせるより先に忙しく目を通したが、あとは唯唇を顫はして一句も口に出なかつた。

「何故讀まぬか。」

「阿父様！」と、其物を差出して「妾には讀めません。」

「讀めぬ事があるか。」と、慌てて眼鏡をかけ「どれ此方へ寄越すが可い。」

唯見れば徳子は俯いたまゝ、保ちきれぬ涙を零すのであつた。

「徳……内田は死んだか？」

「はい」

俊彦は力無い手を膝に突き、悵然として嘆息を吐いたが、靜かに手紙を引寄せた。

『……去る十一日病院にて死去致候。其節早速御報知致すべくの處、唯今の御關係上それも如何と存じ、且又時節柄萬事質素に目立たぬやう葬式相濟まし度旨本人の意見に有之、猶他より傳聞仕り候ところによれば、貴家に於ても此頃御愁傷の事ども御出來のよし、それやこれやにて御通知差控へ候次第、何卒御海容願上候。申までも無く葬儀萬端無滯相濟候まゝ、これまた御含み下されたく候。再伸。今日に於ては内田なる家名は斷絶致せし事に有之、且又其前より貴家との御姻戚關係も消滅いたし候につき、故人に對する有形無形の義理は一切御無用に願上げたく、單に生前の御厚誼を思ひ、右まで一寸申上置候のみに御座候。時節柄御自愛專一に存候。敬具。』

俊彦は讀了つて卷納めたが、片手に眼鏡を脱りながら、

「あゝ、何處も同じ秋の暮だ。」

「那樣事が有りましたら、其當時に何故報せては吳れなかつたのでせう。妾それを思ふと口惜しくつて堪りません。」

「それも愚癡といふものだ。お前も當家へ歸つて來た以上、然ういふ形式的の事をして貰はんでも可い。他人として葬儀に列り、悲しい思ひをするよりも、お前はお前として、誰に氣兼も無く死したる良人に仕へるが可からう。」

「はい。」と、徳子は止度無い涙を抑へた。

「寺は知つて居るか？」

「存じて居ります。」

「それでは明日にも參つて來るが可い。淺ましい病苦から免れて、靜かに眠つてゐる内田も、お前に訪はるゝのを待つて居るだらう。」

と言ふ時、六一郎が緣傳に入つて來た。
「阿父さん。」
「何か？」
「吳林さんがおいでになりました。」
「おゝ、然うか。此方へお通し申せ。」
德子は手紙を懷中して父の前を退く。引違へて吳林が六一郎の案内で入つて來た。
「好うこそ。例の如く取散して居ります。何うぞお構ひなくお通り下さい。」
吳林は丁寧に會釋して、二つ三つ世間話をした後、
「時に、文子さんは唯今何うしておいでですな？」
「仍且彼のまゝで姉の許に居ります。」
「はゝあ。」と、頻に手を當てたが「では其後別にお變りも無く……」
吳林の問は意味有り氣であつた。而して彼は文子が那樣境遇に居るについて、自分にも責任のあるもののやうに感じてゐるらしい。
「實は其事につきまして、手前も其後種々と勘考いたしましてな……御承知の通り、彼の折は憤慨の餘り牧村とも衝突して暫時往來も爲ん位でした……併しそれも時の經つにつれて、まあ腹を立つて了へば其れまでの事ではあるが、此方のお爲、又牧村の爲を思ふと、此處は何うでも蟲を抑へて、時機を待つた上に、もう一度元の鞘に納まるものなら納めてみたいと斯う案じたものですから、萬事其方針で、手前一個の考へとして舊の如く牧村へも折々出入し、好い機會を窺つて居つたやうな次第です。」
「御親切に……有難う。」と、俊彥は心から感謝したが「但し、折角ではあるが、それは及ばぬ事と思ひます。我々は然ういふ事を希望するだけの勇氣だも有りません。」
「いや、貴方の御意見は御意見……何はんでも能く存じて居るですが、手前は又手前の義務として、然う爲ねばならんと存じたのです。」
「其御厚志は能く了解して居ります。」
「處が、近頃に及びまして、實に意外な事を聞きましたので。」
其處に差向ふ俊彥も、蔭で聽いてゐた文子も、共に胸を轟かした。其話が恐ろしいやうな、樂しいやうな、何とも言はれぬ喜悅の色が心の底に閃いたので。
「意外とは？」
俊彥は努めて感情を抑へつゝ訊いたが、其聲は有繫にはずんでゐた。
「牧村は……後妻を迎へました。」
輕く躍つた俊彥の心も、文子の胸も、一時に破裂したのである。吳林は一切夢中で、
「言語道斷とは此事ではございませんか。實に……」
「吳林さん。」と、俊彥は徐に制した「暗い夜道を行く者には、倏忽に燃えて又消ゆる燐寸の光が却つて煩ひとなるものです。期待爲ぬ僅な光明の後には、更に暗さが增すばかりだ。御好意は謝しますが、我々親子の爲に今後とも願うて置きます、望の有り氣なお話、樂しい消息、然ういふ類の事は何うか言うて下さるな。如何なる吉事も、御親切も、不幸なる此眞暗の室では、それが悲しい聲となるのみです。」
「はい。」と言つたが、吳林には其意味が十分に解らなかつた「いや、お氣に障つたらお許しが願ひたい。處で、今日伺つたのは、單に然ういふ可厭なお話をお聽かせ申す爲ではございません。牧村の事は其れまでと致して、すでに斯うなりました以上は、我々は意地にも不人情な彼奴等に對し、復仇的な事を爲てやらねば腹が癒えません。就ては文子さんのお身の上ですが、是非とも手前が身にお引受して、必ず良緣を……」
「それも思召は有難いが、親としては最早何處

へも遣したくありません。折角だが其件については御心配下さらんやうに願ふ。」
「いや、貴方は然うお考へでも……」
「本人も父と同樣に思うて居りませう。」
「御本人は然うでも、奥樣のお心としましたら！」
俊彦の眉は動いた。
「家内の意見も同樣でした。」
「否、それは少と……御一徹に過ぎやしませんか。手前は貴方より、文子さんより、第一に奥樣のお心をお察しするから、斯う申上げるのです、既に先頃も固くお約束を致した事がございますので。」
「呉林さん。」と、俊彦は今迄閉ぢた目を開いて「何を願つたかお約束したか知らんが、其家内は歿しました。」
「え？」と、呉林は仰天して「奥さんが……」

＊　＊　＊　＊

怱々に歸去つた呉林を送出した俊彦は、座敷へ戻つて少時すると、
「文！」
「はい。」と、目を泣腫した文子が武夫を抱いて入つて來た。
「今の話は……定めし聽いて居つたらうな？」
「はい。」
「お前の運も最早是で定まつた。併し落膽するなよ。お前ばかりぢやない、德子もお前と同じやうに萬一の望を失つた。しかも今日……人間といふものはもし逆境に立つた時には、其時こそ眞に悲しみを分つ姉妹があると思うて、それを慰めと爲ねばならん。泣く時にこそ親子もある、姉妹もある、朋友も有る。」と言終つた俊彦は遠く次の間を見渡して「我々不幸の仲間も、七人居れば賑かで可いな。」

雪の日

又幾日か過ぎた。
其日は朝からの雪催ひに、家内に居てさへしんしんと底冷がしたが、都の空には何となく押詰つた師走の氣勢が立つて、浮世の浪の及ばぬ此あたりにも、忙しい電車の往來が耳に響き、鮭や砂糖の袋を提げて古風な歳暮の廻禮をする人も二三人は垣の外を通つた。
雪を氣遣うて見上ぐる空は鼠色に低まり、裏の枯木立を鳴らす風に、小さな凧が三つ四つ勢ひよく揚つてゐる。
十一時近く、次の間から入つて來た壽子は、徐に父の傍へ來て、
「阿父樣、それでは妾、是でお暇を致します。」と、
俊彦は片手を机上にかけたまゝ其方を振向き、
「未だ可からう。やがて正午だから食事でも爲て行つたら何うか、折角だから皆揃うて飯でも食はうぢやないか。」
「有難う……ですけれど、又雪が降つて來ると困りますし、それに子供達が歸宅を待つて居りませうから……」
「然うか。では強ひても留めまい。」
「何れ大晦日には一寸でも參ります。」と言つたが「それから、え阿父樣、春になつての事でも可うございますが、先刻妾の申上げた事をもう一度お考へなすつて下さいまし。」
「うむ。併合問題かな。」
「今も衆と話してもみたのですが、誰も然うした方が安心で可いから、阿父樣さへ御窮屈でなければ、然ういふ事に爲て欲しいと申して居るのですよ。」
「成程……」と、頷いて「俺はなあ、お前の心も能く解つて居る。又他の者達の心も嬉しいと思ふ。又俺はお前と一つ家に暮すのを窮屈とも思はんし、稚い子供を煩さがりも爲ん。實を言へば是から先はなるべく賑かに、稀には子供の守

でもして暮すのが老樂だと思うて居るよ。けれど、それでは何うも氣が濟まん。」

「歿つた村越に對して、那樣氣兼を爲さいますの？」

「否、それも違ふ。俺は俺自身に對して濟まんのだ。彌よ食へなくなつた時、此體が利かなくなつた時は、然うも爲て貰はねばなるまいが、未だ斯うして達者で居る以上は、俺は自身の家を捨てたくない。死んだお前がたの母親と共に、千辛萬苦して建てた此心の家を、無慘々々と崩して了ひたくないのだ。假令此朽木の柱が雨露霜雪を凌ぐべき大きな屋根を支へきれず、脆くも折れて倒れようとも、それまでは何うかして此家の爲に立つてゐてやりたい。不幸にして各自の身を納るゝべき家を持ち得なかつた娘達の爲に、歸る古巣となつてやりたい。」と、言來つた俊彦は、一句々々確りした語も聊か顫へを帶びてきた「男女の別無く、人間といふものは何れも理想がある。俺なぞも人と生れ、男と生れた效に、若くしては名を揚げ家を興したいと思ひ、老いては其終りを全うしたいと思ふのは、行住坐臥に忘れぬところだ。今六十の歲も過ぎてみれば、過去の理想は其十の一にも屆かなかつたが、それでも俺は御國の爲に二度戰の庭に立つた。碌な功も樹て得なんだけれど、俺としては聊か君の御恩に報ずる事が有つたのを喜ぶ。又父母も格別御不自由も爲せずにお見送りする事が能きた。一身の榮達は左も有れ、俺は爲べき事は何うやら斯うやら爲て來たのだ。併し未だ一つ一生のうちに爲すべき仕事が殘つて居る。」

「それは貴方御自身の終りを全うなさる事でせう？氣樂に御老後を養ふ事でせう？」

「否、若い理想も十分に達し得なんだ俺は、必ずしも其れを希はぬよ。」

「では何がお望ですの？」

「俺の殘した唯一つは、お前達の爲に死ぬまで心配してやる事だ。此處に此まゝ居殘つて、仕事に疲れて歸り來る若人の爲に、肩を撫で脚を摩り、屋根とも床ともなつてやりたいのだ。」

壽子は胸が一杯になつたが、

「阿父様、那樣事を仰有ると衆は罰が當ります。是だけ御苦勞をかけた上に、未だ然ういふ事を爲て戴く事は誰だつて恐ろしく思ひます。妾達は此世に出して戴いた御恩だけで澤山でございますわ。」

「俺は又お前等を斯樣不幸な境涯に生落した事を、相濟まんと思つて居る。揃ひも揃つて、學問こそ人並に仕込んで置いたものゝ、俺の勝手に嫁入さして、揃ひも揃つて斯樣不幸な身の上に爲せて了つた。」

「阿父さん！」

「俺は泣く、不幸な五人の娘の爲に泣くぞ。お前等の母は我子の苦勞を負うてやりたいが爲に、喜んで命を捨てゝ呉れたが、彼の潔い最期を見るにつけ、俺は實に恥しく思ふ。何故此五體をバラ〳〵にして、五人の良人の命に代へ、地獄の底に投入れてやらなんだか！」

其處に居る壽子を初め、次の間に居た家内の者は聲を合せて泣出した。

俊彦は心着いて、

「最早廢さう。老人の言ふ事は左右女々しい愚癡になつて可かん。が、俺の志は此通りで、今までにお前等の爲に死なんだ代り、是からは衆の爲に柱となり、杖となり、家の軒端の燈ともなつて、何時までも生きたいと思ふ。力の續かぬ時は是非もないが、それまでは此處に殘して置いてくれ。」

壽子は兩手を突いたまゝ、其上何とも言へなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

壽子は歸ると間もなく、雪はとう〳〵降出し

た。

　三時までに歸る約束で來た節子は續いて暇を告げて去つた。

　看護婦を志願した德子と、事務員に雇はれた文子が、やがて去らねばならぬ番になつた。一度に出拂つては餘りに後が淋しからうと、其中一人は明日にすると本人達は言出したけれど、父は大事の鹿島立に、然ういふ未練を許さなかつた。

　日の暮れぬうちに新宿まで買物に行く六一郎と、停車場へ見送る芳子と、惣勢四人が門へ出ると、家の内に殘るものは老いたる俊彦だけであつた。

「阿父樣！」と、德子は傘を傾けて「それでは最早參ります。何うぞお體を……」

「お寒い時ですから。」と、文子が言つた。

　俊彦は緣側に立出で、

「俺の事は心配するな。滿洲の雪の中で幾度か鍛へた此體だ、何年經つても背は渡いぞ」

　莞爾と笑つて、

「それよりもお前達にこそ、冷えぬやうに用心してくれ。雪よりも氷よりも、俺の心を冷すものは、お前がたの病氣だ。さあ！　何時までも立つてゐずに、早く行け。」

「はい。」

　二人は共に俯いて、行くべき方が解らなかつた。

「六一郎、何を愚圖々々して居るか。お前が先立になつて道を拓かんと果しがない。」

　六一郎は思切つて、

「姉さん、行きませう！」

　德子と文子とは涙を拂つて、無言に頭を下げた後、雪の細道をとぼ／＼歩出した。

「氣を注けろよ、出かけに轉ぶのは幸先が可くない……」

　何時か歩み鈍つた二人は、其まゝ一つに固まつて、後から來る芳子と共に、心細氣に家の方を眺めた。

「それ！　危い！」と、俊彦は手を振つて「何故然う躊躇するか。」

「然樣なら……」

「然樣なら……」

　風に吹かれる其聲は、寒さと辛さとに顫いた。

「早く行け。」

　其行く姿は雪を隔て、頭に隱れ、僅に見えた四つの傘も、頓に小家の向方に去つた。

「……行け、行け、前途の先は長いぞ。若しも途中に草臥れたら、何時でも歸つて來いよ。」

　俊彦は緣の柱につかまつて、身を斜めに遠く見遣つた。

「母は彼の世に、父は此處に……何時までもお前達を待つてゐるのだ。」

　伸びつ屈みつする中も、軒端外れに吹込む雪が、悲しい面を亂撲つた。

（大正四年）

棒手振

二月十六日の點燈頃、颼々いふ西北の風に吹かれながら、魚定は茫然飯田町の家へ歸つて來た。

歳は四十五だが、氣風が面白い男だから、何うしても五つ六つは若く見える。酒の爲に頭の毛が薄く成つて、顏は脂肪氣の無いバサケた色艶を爲てゐる。莫大小の襯衣の上に腹懸を着て、出入の大店の印を染めた半纏を三枚、其上に黑羅紗の筒袖外套を襲ね、折屈の出來ぬ程しつくりした紺の股引に、刺布の底へ皮を張つた大和靴を穿いて、兩手を交互に脇の下へ突込んだまゝ、少し前屈に飄然歩いて來る。酒が惡く持越して、よろける度に頭がヅキ〳〵するらしい。

横町へ入つてからは、目を瞑つてゐても足數で覺えてゐる。桶屋の角を曲つて四軒目の格子を、遠く上眼で見ると共に、愕然とした體で立止まつたが、裏口で何だか呟いて、其から出來るだけ強く顏を顰めて見た。

追かけるやうに風が吹く。赤い文字で魚定と書いた街燈が未だ暮切らない中から悄然點火いてゐる。足許の小砂利の上に、新聞紙の切端がビラ〳〵飛んでゐる。那樣ものを險しい目つきで一寸睨めてゐたが、思切つて舌鼓を爲ると、

「あゝコン畜生！　又か。」

怨めしげに言つて、急にグッタリ首を垂れ、又力の無い足取で自分の家の門口へ來た。

二間間口の半分は格子で、不漁に休んだ時には魚定が男の力で精一杯拭込むのを仕事に爲てゐるから古びたまゝに何處か光澤がある。一方は水口の腰障子で、二枚とも大きく魚といふ字が書いてある。

門口の溝板を跨ぐと、俄に恐しさうに四邊を見廻して、少時は家内の樣子を窺つて見たが、宛然空家のやうに物音が爲ないので、餘計に氣味が惡く成つたのだらう、靴の踵で左右代る代る土を蹴つて見たが誰か人が此横町へ入つて來る足音が爲ると、其を機會に怱忙しく格子を啓けた、左の手は袖口から引込めてゐるから、羅紗の襟巻が入口に支へて縺つたまゝ、ズル〳〵と三尺の土間に入る。

「オイ、お作は居ねえのか。」

無茶に大きな聲を出した勢で、入口の障子を啓ける。六疊の取付の間の長火鉢の向方に、女房のお作が眼ばかり光らして煙草を喫んでゐた。

「返事を爲ねえな。默つてゐちやあ解らねえ。」

其癖返事を待つのでも無く、面倒臭さうに足袋の鞐を外して、

「俺が留守だつて何も面當に土間を取散かして置く事は無え。」

惡垂口を利きながら火鉢の前に突立つたが、矢張處在が無いから、兩手を入違に脇の下へ挾んで、正面の神棚の燈明を苦い顏で見詰めるのだ。

女房は魚定より二歳年上だが、一方が若く見える處へ、此方が老けてゐるので、てんで釣合が取れない。髪結が上手で、二三年前までは此界隈を一手に引受けてゐたのだが、近頃は奥歯が脱けて元結が締らないといふので、家へ來る花客ばかりを受けてゐる。臍繰が相應に在つて、貯蓄銀行の通帳を後生大事に何處か藏つて置く女だ。

「何の事だ。」と魚定は漸く坐込んで「俺の面を見たら お歸んなさい位言つても罰は當るめえ。」

「お株が始まつたよ、又極つてゐらあ。」

「又だ?!」

其を待構へたやうに定は鋭い聲で言つたが、忽ちジワ〳〵と成つて、苦しげに溜息を吐いた。

「眞實に極つて居らあね。」と女房は冷然と煙管の雁首を扱りながら「三日も四日も家を明けてさ。歸つて來ると八當の小言を言ふのは昔からお前さんの癖ですよ。」

「言はせるやうな種を蒔いて置くからよ。」

「それはね、小言を言はうと思へば、何だつて種に成るのさ。其よりも自分の事を考へて見るが可いぢやないか、お前さん今日は商賣から歸つて來たの?」

腹掛の丼から生臭い手拭を摑出して、魚定は氣持の惡い額の油汗を引摩つた。

「第一其事を考へて見たが可いぢやないか。」

「極つてゐらあ、お前の愚癡を云ふのも。」

「さうさ、其方の遊ぶのも極つてゐるからね。」

「可い加減に爲ろ、それぢやあ鼬にフンだ。」

苦笑を爲て腰の煙草入を拔取つたが、仰向いたまゝ自棄に煙草を詰込んで、

「あゝあ、面白くも無え。」

「お互樣だあね。」と女房も五德の下から吸ひつける。

「俺は最早自分で愛想が盡きちやつた。斯うも意氣地が無えのかと思ふと……あゝあ自分ながら情無く成るんだ。」

女房は知らぬ顏で、靜に煙草を吸つてゐる。

「全く病氣なんだなあ。えゝおいお春。俺は何うしても斯ういふ病氣なんだ。」

「然うでせうよ。」

「然うでせう?!」と反問して「でせうなんて……茶化して呉れるなよ。正直の處俺は何うしたら此癖が直るんだらう。」

我慢が出來ないといつた風で力任せに頭中を掻捲りながら、

「何うしたと云ふんだらう、俺には少とも解らねえ。おい、お前は何う思ふ?」

「自分でも解らないものが、私には猶の事解る筈は無いぢやありませんか。」

「然うかなあ。」

落膽して、頭を引抱へたまゝ身を揉んでゐたが、其手を離すと共に又大きな聲で嘆息する。

「解らねえ、何故斷樣事ばかり年中性懲も無く行つてゐるんだらう。俺あ知つてる! 丁と知つてゐるんだぜ……家ぢやあお前が困つてゐる事を、酒を飲んで遊んでゐたつて、其は明瞭目の前に見えてゐる。」

「格別驚きも爲ないのさ。」

「然うだらうさ。今に始まつた事でも無えからなあ。」と苦笑して「だが然う言つたつて亭主が酒を飲んで、遊び惚けて幾日も歸つて來なけりやあ、好い氣持は爲めえ。」

「お調戯でないよ。誰が那樣了簡でゐられるだらう。」

「だからよ……其を思ふと飲んでゐる方だつて其は腹ン中を挘られるやうだぜ、酒だつて甘くはねえ甘くは無え、お前なんぞは嘸面白い事でもして、それで何も斯も忘れてゐると思ふだらう。え―だい、乾度然う思つてゐるんだらう。」

「何うだかねえ、他へ行つて聞いて見るが可いのさ。」

と女房は鼈甲の簪を掌で撫でてゐる。其手の退く度にキラ〳〵光る簪が又湯氣で舊の通りに曇つて行くのを、魚定は心細さうに凝と見詰めてゐたが、

「あゝ、無理は無えな。何うせ俺の腹の中は解らねえから……。」

「其は事新しく言はないだつてもさ、四十面を下げて、小さくつても何でも一軒の家を持つて稼人でゐながら、年が年中此始末なんだもの、他の腹は解らないとは能くお言ひだ。妾にはお前さんの腹の中は何うしても解らない。」

「其通り、怒るのは尤だ。四十面を下げて……あゝ然う言はれるだらうと俺は丁と覺悟してる。稼人の癖に月の中に三度も四度も家を空けて、錢は消費いて了ふ。おい、買出しの資本も無えぜ。

「へえ、然うですか。」と横を向く。

定は腹懸の中へ手を突込んで、少し體を傾げたが、銀貨と銅貨を洗ひざらひ摑出して、

「こら、此處に一兩と少ししか殘らねえ。」

女房は益々冷淡に、其方を見ようとも爲ないので、未練らしく勘定を爲ながら、

「是ぢや何の足にも成りやしねえ。有つたつて無くつたつて同じ事だ。」

「何うも爲方が無いのねえ。」と女房も此時ばかりは心から溜息を吐いた。

「全くだ。悔んだつて取返しがつかねえ。けれども其を知つてゐながら斯ういふ馬鹿を爲てゐるのだからなあ。」

茫然掌の上の金を眺めてゐると、

「だけどねえ、妾は最う諦めてゐるの！」

「何を？」と定は蘇生つたやうに其方を見た。

「是からはお前さんが何んな事を爲て來ようとも、何にも言ふまいと。愚癡も自分の方で飽きたからね。」

「あゝ然う言ふだらう、俺は屹度然う來るだらうと覺悟を爲て來たんだ。無理は無え。」

「お前さんは護謨のやうな人なんだから、少しの間ピンと張つて置いたつて手を放せば直に舊へ戻つて了ふ。年が年中同じ事ばかり爲てゐるんだもの。」

「俺は斯ういふ病氣だ。」

「否、其がお前さんの生地なんですよ。」

「然うかなあ。」

「而して歸つて來ると、那樣哀ッぽい事ばかり言つてさ。眞實に其辯解だつて聞飽きてゐる、お前さんは何時も女房の前で芝居を爲るのだからね。」

「芝居だ！　俺が芝居を爲る！」と大きな聲で「馬鹿な事を言ふな。何時俺が……其だから困るんだ。大概お前だつて、え、俺の此腹ン中が解らねえのか。」

「だから初めから解らないと言つてゐます。」

「困るなあ、何てえ張合の無えんだらう。女といふものは。」

「男といふものは、物事が解つて確乎してゐるわねえ。」

定は胡坐の兩膝に手を當てて、力一杯推しつけてゐたが、

「俺は然うまで見違へられてゐるのかなあ。」

一心に見据ゑた目からボロ〱涙を零し始めたので、

「まあ、何うしたつて言ふの。」

「齒痒くつて爲やうがねえ。」

「お止しなさいよ、好い年を爲て……お前さん未だ醉つてゐるのだらう。見つとも無いぢやありませんか。」

「大きなお世話だ。手前には最う何にも言はねえ。」

「又言ふ事も無いのだらう。」

「聞かせたつて眞面目に受けて吳れねえのだから、迚も駄目だ。」と檢束無く泣きながら「言ふ事に事を缺いて芝居だなんと疑りやあがる。篦棒奴、芝居か、眞劍か、能く目を開いて見ろ。」

「だつて眞劍だと思つた處で、別にお前さんを褒める譯には行かないからね。」

「誰が褒めろと言つた、褒めろとも勘辨しろとも、俺は那樣事を言ふんぢや無え。是だつて少

とは意氣地の有る人間だ。」

「おや然う？」

「嬶の前だから、虚飾も外聞も其方退けで、斯樣に底を破つて見せるんだ。他の氣も知りやがらねえで。」と勃然に成つたが、忽ち勢が挫けて「だが其も無理な註文なんだらう。疑られるのも俺が惡いからだなあ、斯樣事を言つて擧句の果はお前の貯めた金を出せと來るんだから、然う思はれるは當然かも知れねえ。」

「だから此前にも言つた通り、帳面はお前さんに渡すから、預けて置いた金を皆引出して使つて了ふが可いのさ。其上お前さんの取前も片端から使つて、天秤棒まで叩賣つて了へば最う思置く事は無いだらうから。何うせ妾は野垂死を爲る意さ。」

「那樣事を言つて呉れるなと言ふのになあ。お春、俺はお願だ。」

「でも何うせ然う成るに極つてゐるから、一層の事早く片を附けた方が可いぢやありませんか。」

「怒るのは尤もだが、然う言つて呉れるなよ。此方は立つ瀬が無え。」とウンノ\頭掻きながら「帳面も資本も何も要らねえ。あゝ何にも要らねえよ。」

「其ぢやあ何うする意なの？　資本が無くつて買出しは出來ないに極つてゐるのに。えゝお前さん何う爲るんだね！」

「生きてゐるのが馬鹿々々しい。」

「其はお互樣さ。」

「お前なんぞは自分で自分が解つてゐるから、未だ張合も有らな、俺を見ろ、自分が解らねえぢやあ、全く生きてる效も無からうぢやねえか。」

「那樣事は醉漢の言種だよ。其醉漢を亭主に持つた女の事を考へて見るが可い。」

「其も氣の毒なものさ。」

「有難う、お前さんも隨分察が有る事！」

定は何にも言はなかつた。で、五六分間は互に火鉢の中を見詰めて、相變らず嘆息ばかり吐いてゐたが、

「お前さん！」

直に顔を揚げたが、此方は一寸返辭が出ない。

「又平常の處なの？」

「遊ぶんだ。」

「ぢやあ何處です。」

「品川よ。」と苦り切つて「新公が連だから。」

「何うせお前さんが引張つて行つたのでせう。」

「俺は最う辯解は爲ねえ。引張らうが引張られようが、何の途罪は輕くならねえんだ。」

「然うともれえ。」

「だが、然うは言ふものの、今度ばかりは俺も弱つたぜ。丁度彼の日には到底不漁で、思はしいものは一つも無しと來たから、今日は休業にしようと思つて茶屋で一服喫んでゐると、其處へ新公が茫然入つて來てからに、斯樣馬鹿な事は無え、何うせあぶれだから其處邊で一杯やらうと言ふんだ、此方も自棄だけれど、先日の事も有るからなあ、實は逃げてえと思つたのよ。」

「思つただけなんだらう。」

「まあ聞きねえ。全く思つただけなんだ。其から一杯飲んで、今日は綺麗に別れようと言ふと、新公が何うしても交際へとつて放さなからうぢやねえか。」

「放れも爲ないんだ。」

「まあ默つてろと言ふのに。で、愚圖々々してゐる中に時刻は夕方に成るし、醉つた勢に電車へ飛乗つてとうノ\品川へ行つたのよ。其からお前、今朝まで飲續けだもの、頭は破れるやうだし、腹工合は惡し、今日の心持つたら宛然大病人だ。」と額を押へて「俺は斯樣思ひを爲ても酒と離れられねえのかなあ。」

「呆れもしない。」
「他は然うだらうな、自分で呆れた。今度といふ今度こそは心から愛想が盡きちやつたぜ。其も面白く飲んでゐるんなら未だ可いが、少しの間だつて氣の紛れる事は無くつて、其苦しい事つたら身も切られるやうだ、醒めかゝると可厭な氣が爲て、居ても立つても我慢が出來ねえから、自棄に成つて飲むんだ、醉つたつて寐られやしねえ、段々冴えて來て、其は家の事も思出せば、商業の事も氣に成る。斯樣辛い思を爲て何で酒を飲むんだらうと思ふと、俺は實際涙が出るんだぜ。だけど妙だなあ、酒を見るとふらふらと其方に引かれて行つて、斯う何かに魅入られるやうだ。

可厭だ、可厭だと何程振切つて見ても、其ぢやあ又壽命が盡きて了ふやうな心持が爲るから、祕と一杯飲む、飲むと最う何うしても好い頃で濟ませなく成つて、又苦しみながら底の底までやらかして了ふんだ。

お前なんぞは、屹度俺が、面白がつて浮かれてゐるんだと思ふだらうが、然うぢや無え、此方は死ぬ苦みだ。」
「まあ何うでも可いのさ。面白からうが、苦しからうが、他人に泣を見せる味は同じなのだから、最早那樣事を言ひつこ無し！」
「然うだ。同じ事だ。お前に心配させるのはなあ。」と膨ればつたい目を瞑つて「あゝ何うしたら可いんだらう。飲めば苦しいし、飲まなくつても苦しいし、後悔したつてお前は本氣に爲て呉れねえし。」と言つて見たが、相手が默つてゐるので「本氣に爲せると後が又苦しい。あゝ駄目だ。」

フイと立つたのを、女房は危險さうに見てゐれば、押入から夜具を引ずり出して、股引も脱がずにゴロリと寐て了ふ。
「而してお前さん、明日の事は一體何うするの？」
「俺には解らねえ。」
「ぢやあ勝手に爲るさ。」
と力任に煙管で火鉢の縁を叩くと、魚定は夜具の中から、ムクムク顏を出して、
「怒つたのか。」
「…………。」
「成程、腹が立つだらうなあ。」と又泣聲で「何うでも爲て呉れ。俺は誰かに思ふ存分酷い目に逢はされて見てえ。斯樣風で愚圖々々生きてゐるよりか、腦天から玄翁か何かで一思に叩潰されてえな。然う爲れば何處か行く處へ行けるだらう。」
「可い加減にお爲なさいよ。それよりも明日の事は何うするのだね。」
女房は金切聲で喚く。
「病人は何時死ぬか解らねえんだ。」
「お前さん、何處が惡いのですよ。」
「酒……酒で苦しむ病だ。」
「那樣病が有るものか、飲みたがるのはお前さんの生地だと言ふのに。」
「生地?! 可厭な生地だなあ。」
寢返りを打つて、大息ばかり吐いてゐたが、旋て靜に成つたので、お春が行つて覗いて見ると、定は目に一杯涙を溜めて、何時の間にか寐入つて了つたのだ。

（明治四十一年三月）

古驛

一

多摩の川瀬に小鮎はしりて、山には桃の花盛、此處邊の春の景色は又無く旅人の心を慰めた。其鮎を汲むにもあらず、花を觀ようでも無く、自分は公用の爲に日野と立川の間の或町へ赴いた事がある。二三日は逗留せねばならぬので、役場から宿屋を取つて與れるやうに賴むと、千田某といふ萬事心得顏の書記が譯も無く引受けたが、

「然し御承知の如くの町ですから、宿屋といふ程の物はございません。尤も日野か立川へでもおいでに成れば、少しは足を伸してお憩みなさるやうな家も有りませうけれど。」

彼は綺麗に梳つた頭を、右の手でもつて撫でつゝ斯う言ふのである。

「其程な旅館で無くとも、眞逆木賃宿以上の家は有るでせう。」

「無論の事で……ハツハツ。」と彼は反返つて笑つたが「唯貴方をお泊め申すには如何かと心配致すのです。尤も（と此一句に力を入れて、急に老人染みた鹿爪らしい顏を爲るのが此男の癖と見える）其家といふのは、以前此町の繁昌な頃から在るのださうですが、其後土地の衰へると共に、自然家も傾き、大きな家臺骨を賣らうにも買手の無いといふ始末。其うちに主人は死ぬ。後家と子息で所帶を張つては居りますけれど、何分客と言つたら長年の間に數へる程しか無いので、段々零落するばかり。下宿も始めて見たが、是も客は無し、今では主人が内職を爲たり、昔から持傳へた諸道具を賣つて、其で家業を續けて行くらしいです。」

自分は此話に少しく驚いて、

「其でも宿屋を爲てゐるのですか？」

「家の構が宿屋ですから、他に商賣の爲やうもありません。尤も……。」

と言ひかけるのを遮り、

「お言の中ですが、其では泊るのも氣味が惡いやうですな、他に何處ぞ有りませんか、贅澤な事は言はんが。」

「はい、然し其……。」と千田は當惑して「其外には私共の知己の家へ賴むより方法は無いですが、其では又貴方が御迷惑でせうし、何とも早困却致しましたな。」

彼の頻に頭を撫でるのを見ながら、自分も困つて茫然してゐたが、不圖思返すと、其家とて旅宿を渡世に爲てゐる以上は、眞逆食はせずに捨てて置く氣遣は無からう。若し又如何な冷遇を爲た處で、其時は他に家を搜すまでの事。然う高を括つて見れば何も經驗である。自分は直に其宿へ行かうと決心した。

「宜敷い。妖怪に食殺されるといふ譯でも有るまいから、左に右今晩は其處へ行きませう。」

「然樣ですか。」と千田は息を吐いて「其は早速御承知で有難い。尤も、手前餘計な事を申したやうでは有りますが、豫めお話を爲て置かんと、御覽になつてから急に喫驚爲さるやうな事が有つてはと存じたものですから。其に他は心當が一軒も無いので。」と冗々辯解を述べた擧句「猶其女主人は手前久しい間の懇意ですから、決して惡い待遇は致させません。」

「何うぞ然るべく願ひます。又然ういふ舊家には面白い昔話が殘つて居るかも知れん。」

「然樣！　格別古い話も承知しませんが、何

しろ現在の有樣が餘程佗しくて哀が深いですから、先づ其を御覽下さい。」

何氣無く云つたのだが、自分は其言で不圖好奇心を起し、今迄の進まぬ氣が急に引立つて來た。

「此處から大分遠いのですか？」

「否、三四町の處です。」

「何うぞ御案内下さらんか、私は直に行きませう。」

と外套を片手に立上ると、千田は慌てて引留め、

「唯今小使を遣つて、其旨を申付けて置きますから、何うぞ御悠りなすつて下さい。御荷物は持たして遣ります。」

彼は外へ出て行つたが、間も無く小使を連れて來て、片隅に置いた鞄を渡し、

「能く疎相の無いやうに持つて行くのだぞ。其からな、今言つた事を明瞭解るやうに女房に言聞かして、大事のお客樣だから、其意でゐろとな。」

小使は了承して引退つた。千田は旋て席に着いて、

「別に御用もお有りなさらずば、其邊を御案内致しませうと存じますが。」

自分も其氣は無いでも無かつたが、今日は餘程疲れてゐるので、折角の厚意を斷り、直に宿へ行く事に爲た。彼も頷いて、

「成程、又明日といふ日も有ります。其では手前が御案内を致しませう。」

二人は帽子を冠り、共に役場の門を出た。麗な春の日も彼是四時に傾いて、灰色に晴れた空には太陽の光鈍く、習吹く夕暮の風は未だ何處にか鋭い寒氣を含んでゐる。

千田といふ男は中々喋る、都を離れた土地には一人二人能く有る人柄で、何ういふ調子でか都の風に感染すると、極端に服裝や言語を氣取り、齒の浮くやうな事を言廻つて、土地の者は一人として對手に成らぬと斥けてゐる……無論土地の人々からも對手には爲れぬが……如恁人物に捕つた東京人は飛んだ災難で、其人の詰らぬ名譽心の爲に散々引張廻され、諸方で鼻を摘まれなければならぬのだ。其而已ならず、先方は此旅行者から新知識を輸入しようとかゝるから、間斷無く種々な質問も爲れば、注意深い目で萬事を見てゐる。斯う成つたらお客は棒縛に爲れたも同樣である。

千田氏もやゝ是に近い人物であつたが、自分は少しも此人を嫌はなかつた。何の彼のと言ふものの、如恁親切な人が有ればこそ、知らぬ土地へ踏込んで、大して不自由も爲ずに濟むのだから。

浮世話を爲ながら、二人は旋て四五町も歩いたら、千田は立止まつた。

「此處です、御宿は」

と指示す方を見ると、大道の角地面を取つて、成程古い一軒の旅籠がある。二階は普家同樣、犇と雨戸を閉切つた處へ、華かな西日が一杯に當つてゐるのが、先づ物哀れな感を起させた。格子は煤つて白く、片面は破れた大行燈に、御旅籠駿河屋と書いた字ばかりが、誰が目にも明瞭と讀める。

「お先へ御免を蒙ります。」

千田は入口の格子へ手を懸けたが、敷居を外れた戸はガッチリと閊へて動かず、是を開けるまでは中々骨を折らせたものだ。

漸う上端へ足を入れると、自分は穴倉へでも落されたやうな可厭な氣が爲た。眞黑な天井、擦切れた疊、是が抑も客商賣を營む家かと呆れざるを得ぬ。

格子の音を聞付けて奧から現れたのは、五十以上の痩せた婆さんで、慌てて襷を外しながら、上框に膝を突き、

「入らつしやいまし。」と其古疊へ額を擦付け

た。

千田は心易げに、

「ヤ、お内儀、先刻役所から使をよこしたが、大方荷物は届いて居るでせうな。」

「はい、お小使様がお持ちに成りましてございます。」と一寸自分の額を仰見て猶更慇懃に「入らつしやいまし。」

「室は一番好い處を掃除して置いたらうね？」

千田は何處までも肝を焦る。

「へえ、其何でございます。」内儀は少し口籠つて「お指圖通りに致しました。」

「然うかい。では參らうではありませんか。」

自分も領いて店へ上ると、内儀は效々しく立廻り、

「彼のお帽子を此方へ……。」

何だか氣味が惡かつたが、出さぬ譯にも行かぬので、其手に渡し、導かれるまゝに大きな階段を横に見て、廣い廊下を奥深く進むと、荒果てた中庭を圍んだ幾個かの室は、何れも閉切つて人氣無く、破障子の隙から見れば、或は板屑を積んであつたり、疊の上に番傘が干してあつたり、家中物置同樣の體裁である。加之に濕つぽい押被さるやうな空氣が充滿ちて、一種の惡臭が酷しく鼻を衝くので、自分は一足毎に不快な念を強めた。

廊下の盡端に一個所、唐然と障子を明けてある室へ我々は導かれた。其處は思つたよりも調つてゐて、疊こそ古けれ、壁こそ見苦しけれ、先は人の坐れるやうに成つて居た。窓から日も射込み、座蒲團も小綺麗に、其上火鉢に火が起つてゐるので、自分は初めて心を安んじたのである。

内儀が出て行つた後で、千田は莞爾しながら、

「如何です、隨分變つた宿でせう。」

「變り過ぎて居ますな。來る前に妖怪邸では無いかと聞いたが、私の想像も餘り違つては居なかつた。」

「けれども。」と千田は眞面目な顏を爲て「決して那樣事は有りません。」

「一體家の者は幾人居るのですか？」

「二人限……今のが母親で、其子息が一人居るのです。」

「二人？　是だけの家に？」

「尤も、決して御不自由な事は致しません、其點は手前必ず保證しますから。」

自分は此人の心配に對しても、最う不平らしい事は言へなかつた。

「君の御好意は感謝します。左や右言ふものの、長く居るのでは無いのですから、私は是で十分ですよ。」

「然う仰有つて下されば、手前も大きに面目を施します。」彼は滿足の體で一時に此家に就いては、實に面白い話が有るので、其を貴方にお聞かせ申したい。」

「何れ哀れな履歴が有るだらうと思つて居ました。私も夜分は用も無いから、悠り話を伺ひませう。」

「斯樣な事もお土産話に成るかも知れません。」

千田氏は言了つて俄に懷中時計を取出し、

「ヤ、最う五時です。私は是でお暇を致しませう。」

自分は杖とも賴む此人に置いて行かれるのを、子供のやうに心細く思つたから、成らう事なら一緒に食事でも爲て、今宵は悠り遊んで行くやうにと勸めたけれど、已を得ぬ用事を控へてゐるといふので、彼は無理遣に歸つて了つた。

二

取殘された自分は、耐へ切れぬ淋しさに、默然と爲て此廢屋の一室に兀坐し、一人都の事を思ひ、又樂しい我家の事を思つた。

間も無く、女主人は夕飯の膳を運び來て、

「お一人様で、嘸お淋しう被在いませう。他にお客様でもございますと宜敷いのですが、生憎今日は暇でして……。」

愛想好く言つて、侘しく微笑んだ。

自分は實に食事を爲る勇氣が無かつた。然し其を斥けるのも餘り可哀さうに思はれて、厭々ながら箸を取つたが、先づ口に入れぬ前に驚いたのは、其器具の見事なので、其はなか〳〵如恁家などに有るべき品で無い。と考へると共に、不圖此家の以前の繁昌を思出し、是も其當時の遺物かと、現在の家や主人の見窄らしさに引較べて、そゞろに涙を浮べたのである。

川魚に野菜の料理、是も亦意外に味好く、前の毛嫌も其方退けに、近頃旨い夕餉を思寄らぬ處で認めた。

膳を退げると、今度は風呂が沸いたと言つて來たが、是ばかりは何うしても氣が無く、

「又明日にでもしよう。」

主婦は落膽した顏で、

「お疲勞でございませうに、お風呂を召してお寐みに成つた方が宜敷うございませう。」

宛然親切な奉公人が若い主人を氣遣ふやうな語氣。

「否、少し風邪を引いたかと思ふから、今日ばかりは止めにしませうよ。」

「然樣でございますか。」然も本意無げに言つて、少時悒悒してゐたが「嘸お一人でお淋しうございませう。千田樣でもおいでに成ればお對手が有つて可うございますがねえ。」

後刻に其人が來たら直通して貰れと言ふと、彼女は承つて出て行つた。後は又一人法師、所在が無さに、汽車中で買つた新聞五六枚鞄の中から捜し出し、常は見た事も無い論説をぼつぼつと讀始めた。

物の十分餘も經つたらう。廊下で男の足音が聞えたから、偖は千田が訪れて來たのかと、自分は心嬉しく入口に目を注ぐ時、靜に障子を開けて顏を出したのは、年齡二十三四の若者である。

手織木綿の筒袖に、盲縞の汚れた前垂を締めてゐるが、骨太で、丈の高い處へ、衣服の裄丈が短いから猶の事不恰好に見える。而して脂氣の無い大きい顏、鈍い小さな目、締の無い口、是だけ見ても凡其人物が想像されるのである。

洋燈と硯函と宿帳を兩手に持つて來たが、無遠慮に火鉢の向方に坐り、

「帳面付けて下さい。」と硯函ごと我目先に突付けるのだ。

自分は呆れながら其を受取り、默つて其樣子を打目戍れば、彼も同じやうに熟々此方を眺めるのみ。旋て少時すると、突然思出したやうに、

「おい、帳面付けて下さいよ。」

「其は承知したが、其洋燈を下に置いたら可からう。」

「あゝ是か。」と莞爾して「今掃除して來たが、何うだい、是でも傘はお前瀬戸物だぜ。」

果せるかな此男は足らぬ哩と、自分は直に感着いた。

「へ、明いつちや有りやしない。點けて見ようか？」

「未だ早い。」と此方は遮つて「まあ下へ置け、私が自分で點燈けるから。」

「ぢやあ帳面を……。」

紙が燒けて茶赭色に成つてゐる宿帳へ、自分は法の如く認めて返すと、彼は筆の動くのを不思議さうに、あんぐり口を開いて見てゐたが、

「あはゝ、旨く書くな。」と膝の上で擴げたまま「お前國は何處だい？」

「其處に書いてある通りだ。」

「成程、お前は越後の者だな。」

「えゝ？」自分は目を丸くした。

「然うで無けりや……あゝ解つた。信州の者だらう。」

「お前は字が讀めぬのか？」と聞くと、彼は極の惡さうに瞬を爲て、

「まあ可いや。越後で無けりやあ、信州に違ひ無いからな。」

其顔色が可笑しかつたので、自分は思はず噴飯したのである。

「お前湯に入らねえつて？」

「今日は止めにしたよ。」

「滿らねえぢやねえか、俺は折角沸して置いたのに。誰だつて家へ泊る者はきつと入るぜ、お前然う遠慮を爲るから駄目だ。」

「遠慮は爲ないが、全く今日は入りたく無いのだよ。お前代理に入つて吳れ。」

「其は然うとも。」當然だと言はぬばかりに頷き「だが餘程馬鹿たな。越後の者は一體遠慮を爲る。」

未だ斯んな事を言つてゐる。

「時に、お前は一體此家の奉公人かね？」

「奉公人？」彼は勃然として「馬鹿言ふない。俺は主人だ、主人とは解らねえかい。だから越後……。」

「あゝ然う〳〵、私は全然忘れてゐた。大きに失禮。」

何んな事に成るのかと悖々しながら詫れば、彼は忽ち面相を崩して、

「お前能く考えねえからだ。積つて見たつて解りさうなものぢやねえか、ハッハッ、積つて見たつて！」

「然うとも〳〵。」爲方無しに言を合せた。

「主人だから宿帳を持つて來るのだ。な、奉公人が持つて來る道理は無からう。其とも有るかよ。」

「成程無いな。」

「無からう！」

其冗い事際限無しなので、自分は殆々倦じ果てた。彼は大得意に其大きな手を振舞しつゝ、

「此家は皆俺の物さ。誰が何と言つたつて、最う極つて居らあ。お前家を持つて居るのか？」

「否、私は他の家へ食客を爲てゐる。」

「然うか。」と物珍しさうに我姿を見上げ「食客といふものは意氣地無しだなあ。」

「お前の言ふ通りさ。斯樣な大きな家を持つてゐる人は實に羨ましいよ。」

退屈紛れに調戯つて見ようといふ氣も有つたが、一つは此男の機嫌を取つてやるのは、我々此家へ泊つた者の義務だと考へたからで。

彼は是を聞くと他愛も無く莞爾しながら、

「羨ましいだらうな。食客なんてお前働が無い者か、其で無けりやあ不具者だぜ。」

是ばかりは義理明晰である。

「あゝ氣の毒だなあ。だが俺不具者程嫌な者は無え。」と意味有りげに小さな目を光らして「不具者つて言ふ者は皆狡猾だもの、狡猾とも、大狡猾だ。」

「然うかな。」

「お前不具者に飯なんぞ食はしちやあ可けねえぜ、眞實の事だ。」

何だか譯が解らなかつたので、自分は好い加減に口を開き、

「其は然うと、お前の名は何といふか？」

「中沼……」とケロリと爲て「おい中沼と言つて見ねえ！」

「中沼、其から名は？」

「大次郎。可いかい、中沼大次郎と言ふのだ。母さんの名が中沼お琴、俺は大……大といふ字を知つてるか、大きと書くのだよ。俺は斯う！體も斯樣なに大きいし、其から家も大きいから、大次郎といふんだ。」

「成程好い名だな。」

「羨ましいかい？」

自分は又失笑した。彼も一緒に成つて嬉しげに打笑ひ、

「ハッハッ、羨ましいだらう。」頻に顏を撫でてゐたが不圖其手を止めて「お前に道具を賣つてやらうか？」

「何だか少とも解らないな。」

「道具だつてば！ 家に有る道具は皆俺のだから、何でも賣るよ。花瓶でも、火鉢でも、懸物だつて賣らあ、何でも一圓二十錢だ。洋燈も負けとくよ。」

「大次郎、大次郎。」と遠くで呼ぶ聲がしたと思ふ中、旋て室の前へ來て「大次郎は此方に居りますか？」

「あゝ、母樣、居るよ。」

母親は恐る〳〵障子を明け、

「まあお前、彼程言つて置くのに、又お客樣の處へ來てお邪魔を爲てゐるのだね。」

「道具を賣るんだ。」

母親はハッと赤面し、上目で自分の方を見ながら、

「飛んでも無い事を申上げて……お客樣、嘸御迷惑でございましたらう。斯んな無遠慮な者ですから。」

「何う爲まして、種々な話が出て、お蔭で誠に愉快です。」

「恐入ります。」と益々困つた樣に「何を申し上げたか存じませんが、斯樣な無遠慮な者でございますから、何事もお取上げ下さいませんやうに、妾からお願ひ申します。」

「心配するには及ばんですよ。中々氣輕で面白い人だ。」自分は心安氣に笑つて見せた。

大次郎は此時燈火を見てゐた目を轉じて、

「母さん、洋燈を見たかい？」

「那樣事は何うでも可い……時にお客樣、大分遲く成りましたが、最うお床を取りませうか？」

九時近く成つて、千田氏も今夜は來まいと思つたから、自分も直に寢る事に爲た。主婦は押入より其でも相應な夜具を出して、邪魔に成る大次郎を追除け、忠實しく寢床を設け、

「さあ大次郎、お前は早く室へお歸りなさい。」

「未だ可いよ。」彼は平氣で頭を掉る。

「又那樣我儘ばかり、お客樣といふ事を忘れましたか。」

「まあ宜敷い。此處へ置いて行くさ。」

と制めて見たが、主婦は如何な肯入れず、可厭がる者を無理に連れて行かうとする。

大次郎は不精無性に立上り、

「爲やうが無えな。ぢやあ明日は早く起してやるぜ。」

「何を言ふのだよ。」主婦は室の外へ引張出して「其ではお寢み遊ばせ。」

靜に障子を閉めて出て行つたと思ふと、大次郎は再びノソ〳〵と立戻り、

「おい、道具は……。」

強く引張られたと見えて、後は言ひ得ず立去つた。

自分は左右して寢床へ入つたが、此寂寞たる旅籠屋、利巧さうな老主婦、而して件の如き子息の事を順々に考へ出し、唯一筋に物の哀の身に沁みて、彼等の味氣無い生活の爲に、人知れず涙を流したのである。

三

曉近くうと〳〵と眠つて、目を醒したのは八時頃であつた。例の濕多い空氣を出して了はうと思ひ、先づ窓の戸を明けて見れば、目の前は廣々とした空地で、片隅に僅ばかりの畠が有る。一方は低い垣で區劃つて、其向方は青々とした春の野が横はり、小さな岡が處々瘤のやうに頭を擡げてゐる。更に其遠くの眺は秩父の山か甲斐の山か、高く低く平野を圍うて、長閑

に足を踏伸ばす。

花曇の空は重たく被さつて、氣持の惡い曖さは今にも雨に成るかと思はれた。衣服を着更へて顏を洗ひに出た時、彼の大次郎は效々しく尻紮を爲て、精々と廊下を拭いてゐたが、逸早く自分を見付けて、

「ヤ、お早う。」

此方も機嫌好く挨拶した。彼は宛然朋友ででも有るやうに、嫣然しながら我行方に立塞り、

「おい、最う何時だな。」

「八時だ。」

「ふむ。俺は今日五時に起された。お前が居るから早く起きるんだと言ふから……。」と言ひかけて不圖心配さうな顏を見せ「お前今日歸つて了ふのか。」

「否、未だ一日二日居る意だよ。」

と言へば、彼は然も滿足らしく打頷き、

「然う爲ねえ。俺後刻で立川へ行つて、旨え物を買つて來て遣らあ。え、御馳走を爲るぜ。」

「其は有難う。」

此方は急ぐので餘り對手に成らず、顏を洗つて室へ入ると、間も無く主婦が朝の飯を運んで來た。

昨夜の譫言やら、今日の機嫌何やら、其言葉にも親切は籠つて、種々と取成してくれるのが却つて心苦しい位。自分は何うしても旅宿に居るとは思はれなかつた。

終日近在を驅廻つて、漸く豫定通りの用向を片附けたが、鬱陶しかつた空は此時愈々怪しく、腕車で宿へ歸着いた頃から、とう〳〵本降に成つたのである。夜分は日記を記して了ふと、最う他に何の用事も無い體を持扱つてゐる處へ、折好くも尋れて來たのは千田氏であつた。何より嬉しく立迎ふれば、彼は例の馴々しい調子で、

「昨夜は大きに失禮を致しました。已を得ん用事が有つて、存外手間取つたものですから。如何でした、嘸無聊でお困りでしたらう。」

「實は私にお待ち申して居つたのですが、其中思懸けぬ話對手を得ました。」

「ハヽア、誰かお訪問を致しましたか？」

「此處の子息です。」

と言へば、彼は忽ち眉を顰め、

「其は飛んでも無い者だ。」自分と同格に言はれたのを不平らしく「彼樣な者をお近附なすつては可けません。彼は貴方白癡です。」

其は聞くまでも無い事だと、自分は心の中で打笑つた。

「何處でも構はず人の前へ出たがつて非常な厄介者ですから、呉々もお客樣の處へ出すなと申附けて置いたのに、左右注意が足りんから困る。」

大次郎は此時案内も無しに我室へ入つて來た。

「お客樣、又遊びに來たよ。」

腕組を爲たまゝ突立つて、先づ可懐しげに我面を眺め、續いて千田氏の方を見ると、急に險しい眼光を爲た（此男が斯んな鋭い目を持つてゐようとは今迄夢にも知らなかつた）而して束々と火鉢の傍へ寄り、可笑しい程横柄な態度で、

「お前も來てゐるんか。」

千田氏は眞面目に成り、

「手前の樣な者が來ては此お客樣のお邪魔に成るから、彼方へ行つて引込んでゐろ。」

「お前引込んでゐろ。」大次郎は素氣無く言捨てて自分の方を向き「今日は雨が降るなあ。」

「那樣事は何うでも可い。早く彼方へ行かんか、強情を張るとお袋を呼んで來る。」

「可いぞ、呼んで來たつて構ふものか。」

と楯を突いたが、彼は慌てて衣服の襟を掻合せ、救を求めるやうな顏付で自分の方を打目戍つた。

其擧止が如何にも傷はしかつたから、此方は千

田を和める意で、
「まあ可いですよ。昨夜から私と非常に懇意に成つたのですから、此處に居たいと言ふなら置いてやつて下さい。」
「然樣ですか。」と氣遣はしげに「だが始末が惡い先生ですよ。」
有繋に對手に爲るも大人氣無いと思つたか、彼は輕く打笑ふのである。
旋て談話に花が咲いて、千田は例の如く盛に喋り出したので、大次郎は一人別物に爲れたま、腕を組み肩を聳かし、木彫の人形のやうに固まつて、物言ふ顏を見比べてゐる。
談偶ま此家の事に及ぶと、千田氏は一寸大次郎を顧みて、
「主婦は實に可哀さうな者です。」
察せよがしに言つたが、やをら新しい卷煙草を吸付けて、
「前にも一寸お話を致した通り、此駿河屋は其以前町中で聞えた大家で、實際立川日野邊にも是程な旅籠は無いと言はれたものです。其に死んだ主人の大太郎といふのが、此土地での顏役でして、なか〳〵物の理窟も解つた男だつたさうで……尤も、私は其本人を知りませんが……處が妙な話といふのは、此駿河屋は代々內儀に祟が有ると此邊では專ら風說を爲るのです。尤も、地方人は迷信が強いですから、理由も無い事を然も恐ろし氣に申すので、一向滿らん臆說です。」と例の如く土着の人を嘲つて、
「然し此家の內儀といふのは、今申せば烈しいヒステリーで、殆ど手も付けられない始末だつたが、家付の娘なので何う爲る譯にも行かず、何でも久しい間座敷牢へ入れてあつたといふ事です。祟るとかいふ風說は自然斯んな處から起つたのでせう。
因で唯今の主婦と申すのは、元來東京の者ださうです。」
萬事の取廻しから物の言ひやうまで、自分は大方然うだらうと思つて居た。
「何うして此土地へ來たのか、其邊は聞きませんが、左に右身分も卑しからぬ者で、一度然る處へ嫁したのが、何等かの事情で夫に別れ、此地へ流れて來たのです。
其が又何ういふ譯から大太郎の妾に成つたかと思召せ。其時分は未だ本妻が生きて居つたのです。然無くても氣が違うて始末に卒へない處へ、妾を置いたといふ事を聞いたので、其病氣は益々烈しくなる。又家に附いてゐる親類達は、大太郎が虐待するからして、斯ういふ病氣も出るのだと、寄つ集つて攻擊を爲る、其當時は近村で此評判を爲ぬ者は無い位で、彼是する中に本妻は遂に病死を爲て了つた。續いて妾を後妻に直す事に成ると、此時も又大騷ぎが持上つたが、今もお話を爲た通り、大太郎といふ男は斯樣な事に頓着しない、太腹の人間ですから、親類共の故障を一切撥付けて、立派に自分の意を貫いたのです。」
自分は別に氣にも留めずに、此人の能辯を聞流してゐた。大次郎は自分の父の話が出ても一向氣乘が爲ぬらしく、小さな目を閉ぢた代りに、其大きい口をパクリと開いてゐる。
「此處までは先づ無難で來たが、人の壽命は爲方の無いもので、大太郎は間も無く酒毒の爲に死にました。
さあ今迄は主人に恐れて引込んでゐた先妻方の親類が、斯う成ると一時に蜂起して、大事の駿河屋を渡り者の妾上には任して置けぬと熱り出す。後妻方の親類は主人の遺言を楯に取つて爭ふ。既に裁判へも持出さうといふ騷動でしたが、其時分此大次郎先生が出來てゐたばかりで、何しろ一人しか無い跡取を動かす事が出來ず、其に一つは今の主婦が御承知の通りの溫

良貞淑な女ですから、自然其方に同情を寄せる者が多く、とう〱此大阪城は落城しずに了ひました。處が一方は時勢の變遷が捷く、此時分から最う駿河屋は家運が傾きかゝつて居つたので、其から段々と町は寂れる、前にお話を爲たやうな哀な有樣に立至つたのです。主婦も此家の壽命の長く無い事は知つてゐますが、唯此隊長、」

と大次郎を指さして、

「が有る爲に、何處までも駿河屋の名を存して置きたい。又以前自分に同情を寄せ、萬難を排して此家を立てゝ吳れた親類共への義理も有るから、家内の諸道具は賣盡すまでも、此家臺骨だけは人手に渡さぬと言つて居ります。考へれば實に哀れな身の上で……。」

土地の者と言へば片端から貶稱す人も、是ばかりは心から同情してゐるらしい。自分も親しく此家に宿り、此親子に接し、猶此哀れな物語を聞いたので、他事とは思はれぬ程情無くなつた。

一座が白け渡つた中に、一人平然たるは主人公の大次郎ばかり、彼は家中へ鳴響くやうな大欠伸を爲て、

「あゝ滿らねえな。」

「何うだ隊長。」と千田氏は笑ひながら「お前も可哀さうだと思ふだらう。」

「馬鹿を言ふない。俺はお前は大嫌だ。」

噛んで吐出すやうに言つて、彼は挨拶も爲ず出て行くのである。千田氏は其後を見送り、

「彼の通りの人間ですからな。彼でも唯一個所親に似て居るさうです。其は强情一徹な處で、然し何程强情でも白癡では……。」

自分も同じく嘆息した。

千田氏の歸ると直に自分は寢床へ入つたが、滴々落つる霤の拍子も面白く、何時か引摺込まれるやうに夢路に入つた。

幾時間かの後、夢か現か外より來つて驚かす者の有るので、自分は瓦破と撥起きた。枕許の燈火は弱い光を投げ、春雨は未だ止まぬと覺しく、淋しい音を續けてゐる。目を開いたのは可いが、一體何ものに驚かされたとも解らず、唯息を詰め耳を澄して、一心に樣子を窺ふのみ。

が、相變らず夜は靜である。偖は猶且夢であつたかと漸く心を安んじて、再び枕に就く途端、今度は確に中庭の方に當つて、人の忍び來る足音が爲た。と聞定めるや、自分は襟元から水をかけられたやうに、一縮に縮んで夜具に噛付いたのだ。

足音！　其濡れた土を踏む足音は、正しく我居る室の前に近く。而して其は盜賊に違無いと思ふと、最う居ても起つても我慢が出來ず、手を束ねて彼が戶を搦明けるのを待つより、寧ろ此方から飛出して、盲滅法に引捕へてやらうと決心した。恐怖も極度に達すると却つて勇氣を奮起させるものだ。

洋燈を片手に廊下へ立出で、矢庭に此方から雨戶を引明けさま「誰だ！」と一喝して屹と暗中を睨まへたが、戶外は唯眞黑に、燈火の屆く限り雨は銀線を並懸け、而して靜に柔かい若草に降注ぐのみ、人らしい物の影も見えぬ。

「誰だ！」

勢に乘じて再び叫んだものの、最う此時は力が拔けて、偖は寢惚けたのかといふ疑も起つたのだ。

若し僻耳なら馬鹿々々しいと思ひつゝ、念の爲に燈を差出して見廻してゐる處へ、聲を聞いた主婦が慌しく駈付け、

「何かございましたのですか？」

自分が其疑を話すと、彼は顏色を變へたが、

「其は何かのお聞違でせう。私共では今迄決して那樣事はございません」

今迄の事が證據には成らぬが、自分も内心輕擧を悔いてゐた處なので、

「然う言へば何かの間違かも知れん。大きに騷がせて氣の毒でした。」

主婦も入變つて今一度戸外を見廻し、舊の如く雨戸を閉てて、

「御安心なさいませ、然し若しお淋しいやうなら妾が次の間で不寢の番を致しますから。」

自分は未だ多少疑つてはゐたけれど、其を賴むも男らしからずと思つて、事も無げに彼の心配を斷つた。

主婦は此時何か考へてゐたが、極めて低聲で、

「誠に恐入りましたが、明日倅に此事を仰有つて下さいませんやうに、彼は御存知の通の一徹ですから、是を聞きましたら、何を致すか知れません。」

「元來私も自分の間違だから、決して斯樣な事は言はん意だ。」

と言ふと、彼は幾度か禮を述べ、自分の安心して床へ入るを見定めた上、持つて來た小洋燈を片袖に圍つて、靜に店の方へ歸つた。

四

雨の音が止むとすれば、朝の光は華かに戸の隙間から射込むので、自分は直樣床を離れ、窓を開けて清い空氣を入れようとした。

梢にも草葉にも昨夜の雨は殘つてゐるが、其上に美しい旭を浴びて、野山はこゝに蘇生つたやうな姿。

垣の邊の桃林で老行く鶯が聲を限りに啼立てる。

自分は恍惚として此朝景色を眺めてゐたが、人の足音を聞付けて其方を見向けば、老主婦は今しも背戸口から立出でて、空地の方へ行かうとする處、何か四邊へ憚るやうに一足づつ目を配るので、自分は戸の陰に體を祕め、熟と其擧動を打目戍ると、先方は見る人が有るとも心着かねば、又忙しく歩出した。手には一個の竹の皮包を持つてゐるので。

今迄は氣にも止めなかつたが、空地の隅に小さな社が有る。稻荷でも祭つた物と見えて、赤い華表が曲つたなりに立つてゐるのだ。彼は旋て其社の前へ行くと、破れた狐格子の隙間から彼の包物を投込んで、其まゝ後をも見ずに引返し、背戸口へ來た時今一度先刻のやうに四邊を見廻したが、心を安んじた樣に家へ入つたのである。

自分の好奇心は、是を見ると最う一分時も我慢が出來ず、庭口から祕と忍出て、同じく四邊に心を配りつゝ、彼の古社の方へ進んだ。

屋根は半ば落ち、床板は朽ちて、恐らく犬も住めまいと思はれる。自分は辛くも階段を昇り、何心無く中を覗かうと爲た途端、何とも言ひやうの無い凄い聲で、

「母さんかい。」と呼びながら、むく／＼と物の動く氣勢が爲た。

驚くまい事か、自分は一飛に階段を驅降り、一目散に我室へ逃戻つた。此眞晝間の怪しい聲は、昨夜の雨中の足音よりも可怖かつたのである。

＊　＊　＊　＊　＊

午後、役場で千田氏に逢つたから、是等の顛末を委しく話すと、彼は小膝を打つて、

「あゝ、彼が來ましたか。」

「彼とは？　一體何です。」

「昨夜其事は漏しましたが、稻荷の社に居たといふのは、猶且主婦の子息なので。」

「では大次郎の兄弟ですね。」

「まあ然うですが、尤も主婦の先夫の子です。生落ちるから盲目で、今は東京で按摩を爲てゐます。主婦が駿河屋の後妻に成つた頃から、折々彼處へ遊びに來たのを、大太郎が哀れがつて、來る度に衣服を拵へてやつたり、小使錢

を持たして歸したのですが、此奴が年を取ると非常な惰者で、最う三十にも成るのに食つて居る事より知らない動物です。

其で月に一度づつは必ず母親を強請に來る。當人の考へでは未だ駿河屋は昔のやうに盛だと思つてゐるのでせう。而して昔のちやほや爲れた事を忘れぬと見えます。何程母親が言つて聞かせても、然う信じ切つてゐるのだから仕樣が無い。襤褸一枚で慄へて來るのを、親は見かねて、苦しい中から大次郎の綿入位を與へると、其を着て行つて三日も經たぬ中、又元の杢阿彌でやつて來るのです。

が、主婦が彼の通の謹直な女ですから、決して一足も家の敷居を跨がせない、因で先生據無く庭の片隅に巣を構へてゐます。」

「誰か法を付ける人は無いですか。」と聞くと、

「先達近隣の者は是を笑止に思つて、盲目者を捉へて度々強意見を爲ましたが、其時は肯いたやうでも翌日は駄目です。或時は手を代へて、母親は遠い處へ行つて了つた、と嘘を吐き、聲を聞かせないやうに仕向た事も有りましたが、其時は奴も一生懸命になり、停車場下へ忍込み、奥の間の話聲を聞澄した上、さあ皆で欺したと頑張つて何うしても其手に乘らなかつた。此後は人も呆れて構ひ付けません。

主婦は見る度に泣の涙で怒るが、其處は親子の情で、十日でも二十日でも彼が巣に籠つてゐる間は、毎朝食物だけを運んでやるさうです。

昨夜の足音も、今朝の聲も確に其に違ひありません。」

自分が領くのを見て、

「其から此盲目者が來ると、大次郎は忽ち氣が荒く成つて、是も少も働かないのです。畢竟自棄でも僻見を起すのでせう。」

大次郎が不具者を罵つたのも、昨夜母親が怪しい物音を言つて呉れるなと賴んだのも、此話で全然讀めた。

*　　　*　　　*　　　*　　　*

出發の日數も盡きたので、翌朝早く宿を立つた。主婦は涙に暮れて別を惜み、沁々東京が戀しいと言ふのだ。

自分は的も無い再會を契つて出たが、最う此家も長くは持つまい。雨に、風に、あはれ三年と建つてゐれば宜いが。

腕車に乘る時大次郎の姿を見たので、

「左樣なら！」

と暇を告げると、彼は眤と此方を見詰めたが、今日は珍しく物も言はず、不機嫌な顏を爲てプイと行つて了つた。

（明治三十八年十二月）

靄の里

信州松本在に知る人があるので、或年の夏休暇を此處に費す事に爲た。最初の程こそは未だ踏まぬ地の物珍らしく、外へ出るにも、內に居るにも、唯氣が變つて面白かつたが、軈て一週間とも經たぬうちに、狹い町や、單調な生活に飽が來て、散步に出かけるにも面倒に成つて了つた。

さあ斯う成ると、見る物は無し、聞き事も無し、一日後で屆く新聞が何より便と成る程の心細さ、凡そ世の中に所在が無くて暮す程困る事はあるまい。

いつその事、東京へ歸らうかとも思つたが、折角此處まで踏出して、斯んな詰らぬ事を爲て歸つた處で、何の效も無い話。それよりも是から信濃の名所を廻つて行かうと決心したのだ。

其事を知人に語ると、然も本意無げな顏を爲て、

「それも可からうが、未だ日數も有る事だから、切めて今一週間も遊んで行つたら何うです。別に面白い事も有るまいが、其代りに此通り遠慮抜きで、決して心を勞さする事は爲ぬから。」

田舍人の常で、容易に歸す氣色も無く、達てと言はゞ腹も立てかねぬ樣なので、又其まゝ二三日逗留の事と成る。

友人は親切に待遇して吳れる。宿屋に居るのと違つて居心も惡くは無いが、何分興が去つては矢も楯もたまらず、座敷牢へでも入つた氣に成つて二三日辛抱した擧句、再び前の事を云出した。

「ぢやあ何うしても行く意かね。然う思立つた處を無理に止めるのも惡いから、詮方無いお返し申す事に爲よう。」

と彼も今は諦めて、

「僕も少し體の都合さへつけば、同行して諸方を案內したいのだけれど。」

家を明けかねる事情が有るので、何れ此冬にも成らば東京へ尋ねて行かうと約束して、さて快く別杯を酌交した。酒の間にも彼は行先々の事について、細かに注意など爲てくれたが、互に深くも飮まぬ口なので、食事を終つたのは未だ燈を入れたばかりの頃であつた。

今日一日で見捨てる土地と思へば、有繁に名殘惜しい氣も爲て、食後の散步に主人をそゝのかし、其處等足の向く方へ出かけたのである。二三町も行けば町は盡きて、小さな川を一つ越えると、其から先は一面の靑田、右は次第に高く成つて大うねりにうねつた先は低い山が此村を界してゐるので、甚來て見ると其山の半腹まで一目に靑々としてゐる景色が、得もいはれず涼しいのであるけれど、月無き宵の足許さへ見分かず、只風になぐれて飛ぶ螢の、流星のやうに光つてゐるばかり。左は打開いて、處々に鞠のやうた森が有るが、是も目には入らぬ暗さである。

小川を渡す土橋の上に立つて、涼しい風に吹かれながら、やゝ暫時話も爲てゐたが、此まゝ立歸るのも何と無く殘惜しい氣が爲て、又打連れて川添ひに五六町、道の平た方へ步いた。

見返れば、村はづれの燈火が三つ四つ稻穗の上に並んで、追分うたふ聲が遠く〳〵聞ゆるなど、何れも侘しい夏の景色ではある。

此道連が美術文學を語る人であつたら、客の身には更に興も深かつたであらうが、不幸にも然る方には疎々しい友なので、唯蠶を語り、稻の

出來を噂しながら、それでも思はず遠く村を離れたのである。

少し飲み過した爲か、余に急に喉が渇いて耐らなく成つたので、

「何處か水を飲む處は無からうかしら。」

と尋ねると、

「實は僕も先刻から然う思つてゐるのだが、何程清だと云つても眞逆川の水を呑む譯にも行かず、此邊に人家は無し、困つたものだ。」

友人は立淀んで云つた。自分は斯う云ひ出すと共に益々我慢が出來無く成つて、

「何の位行つたら人家が有るだらうかしら、一番近さうな處へ急いで行かうではありませんか。」

「然やうさ。一番近い處と云へば猶且家へ歸るより外は無い。歸りませう。」

家までは彼是十町も有るので、自分は太く失望爲たが、爲う事なしに直に此説に隨つて、

「では引返すと爲ようか、何處か近道はありますまいかな。」

「然樣さ。」

彼は首を捻つたが、

「暗くつて險道だけれど、まあ左に行つて見ませう、僕の後に跟いておいでなさるが可い。」

今度は暗い畦路を覺束無くも辿つて、村の燈火を目的に、斜に四五町を進むと、やがて道らしい道路へ出た。案内者は余を顧て、

「此處が近道なんです。向方に見える大きな建築物が僕の村の小學校さ。」

と教へたが、不圖心着いたやうに、

「學校と云へば、此處まで來れば家へ歸るがものは無い。學校の小使は能く知つてゐるから、宿直室へ行つて水を振舞つて貰はう。」

「成程、それは結構です。然し構はないですか、知らぬ者まで一緒に行つても？」

「少とも差支はありません。何うせ夜は授業を爲てゐるのでは無いから。」

二人は板塀について曲つたが、先に立つ彼は裏門の戸を押開けて、

「さあ此方へ、暗いから用心なさい。」

門内は廣い草原で、突當りの校舎に續く建物の一隅に、薄暗い光火が窓を漏れる。

「オーイ夏目さん！」

友人は大きな聲で呼びかけると、少時してから戸口が開いて、

「誰ですね。」

顏は見えぬが老人の聲である。

「私だよ。（　）だ。一寸燈を出して下さらんか。」

「はい、お待ちなさい。今見せてあげるだ。」

引込んだと思ふと直に洋燈を持つて現れ、

「足許に氣をつけておいでなさい。其處に機械體操が有るから、衝突らないやうに。」

我等は漸く小使室の前へ來た。

「やあ何うもお世話でした、不意に押かけて來て。」

我友人は斯う云ひながら其處の土間へ踏込んだ。小使は先に立つて、

「何う爲まして。納涼のお歸りですかな。私もへえ一人で怠屈の燈切つてゐる處でした。まあ悠り遊んでおいでなさいまし。」

と外に立つ余に氣が着いたか、

「誰かお連樣でもあるかね、遠慮無く此方へお入りなさい。」

「あゝ二人連の洒落だよ。」

「それは佳い意氣な事ですね。」

余は此時何と敷居を跨いで内へ入つた。彼是十畳も敷からうかと思ふ土間で、其片隅には長い腰懸が二三脚据ゑられ、學校名を記した提灯や、番傘、綱曳、其他種々の道具が壁に掛けてある。

此先は六畳の室で、中央に大きな爐が切つてあ

るか、今は火の氣も無く唯ブリキ製の大きな藥罐が懸けてあるばかり。一方には茶櫃が一つ、其上には古い目覺時計と、大形な鈴と、それから新聞やら雜誌の古いのやらが亂雜に積重ねてある。其奥は、隅釣らぬ蚊帳が場を取つてゐるので、何が有るやら確とは見えぬ。小使は洋燈を自在鉤へ懸けて、古びた團扇を二本差出し、

「さあ悠りお休みなさいまし、何うも此處は蚊が多いので。今蚊遣でも焚きませうよ。」

我連は手を打振つて、

「否決して構つて下さるな。實は二人で散歩してゐた處が、急に喉が渇いて耐らなくなつたので、水を一杯貰はうと思つて來たのです。」

「あゝ水？ それはお易い事だ、丁度今汲んで來たばかりのが此藥罐に有りますで、腹一杯呑んでおいでなさい。」

重さうに持出し、

「此水はね、生徒達が呑んでも毒に成らないやうに能く氣を附けてゐるのです、少しも心配はありませんよ。」

聽て起つて行つて、今度は大きな茶碗を二箇持つて來てくれた。

此小使は年齡五十七八、最う六十に手の屆いたかと思はれるが、氣分のまめらしい割には髮が太く衰へ、痩せて青白い顏には何處か苦勞の後の疲苦が見えてゐる。學校の小使と云へば、隨分勞働も烈しからうに、此年齡を爲て此體で、能く職務が出來る事だと、余は内心痛々しく思ひながら、連の蔭から其擧動を打目戍つてゐた。

友人は簡單に余の身分を話して、明日此地を出發する由を聞かした。彼老人は初めて我方を見て、

「はあ、然うですか、夫はお名殘惜しい事だ、最う少し涼しく成つてから、お歸りなされば可いのにね。」

此方は醉覺の水に漸く人心地が付いて、それから四方山の世間話に、つい立端も無く話込んで了つた。而して余は老人の方へ常に注意を怠らなんだが、彼は能く談ずるうちにも、時々淋しさうな顏を爲て、始終浮立たぬ氣色に見ゆる。然し友人は一向是を氣にも留めず親しげに語らふのを見ると、今日ばかりでは無く何時も斯う云ふ風な人物なのであらう。すると友人は何かの話の次手に、

「何うですお爺さん、東京の人にお前さんの身の上話を爲ては。」

と云ひ出すと、彼は例の物思はしげな顏をいといと曇らして、頓には返事も爲なかつたが、

「身の上？ 那樣事は面白くもありませんわ。」

と又余の方を見て、不性無性に片頰に笑を浮べ、

「まあ、餘り變つた事でもありませんからね。」

余も別に聞きたいとも思はなかつたが、何とか云はねばならぬやうな破目に成つたので、

「差支が無ければ聞かして下さらんか。」

此方も餘り氣乘の爲ぬ言で促した。

「話す事は何でも無いが、云つたつて面白くも無し。」

と彼は何うやら其重い口を開きさうな樣子であつたが、此時ゆくり無くも外から又誰か入つて來る足音が爲たので、彼は其限口を噤んで暗い草原の方を透見した。

「暑いな〳〵。」

大きな聲が爲て、途端に入口に偶然現れた人が有る、明るい處に二人の客を見付け、

「ヤ、今夜は大分お客様が有るな。」

と其處に立塞がつたまゝ、急には入る氣色も無い。

「五兵衛さんかな。」

小使は首を引込めて、

「まあ此方へ入らつしやい、丁度お客も有るから。」
「俺能く知らねい人だ。」
と外なる人は猶躊躇つたが、折から振向いた友人を見て、
「是は〇〇さんか、私は又然うで無えと思つたよ。」
「奥山の老爺さん！　お入りなさい。」
友人は少し座を讓ると、戸外なる人は遠慮無くづか／＼と入つて來て、
「今日は暑かつた事、話に成ンねえぞ。私は夜に成つてから蘇生つたやうな氣が爲た。」
と不思議さうに余の顏を見て、
「此方の人は何方だな。」
友人は又余を紹介して、此老人は近所に住む豪農の隱居だと敎へてくれた。彼は手織木綿の單衣を着て一見下男と同樣な風采であるが、如何樣何處かに金持らしい大風な處が有つて、其所拔目無ささうな、始終莞爾々々してゐる老人であつた、年は小使と同じ程に見受けられる。赤顏の骨組の岩疊なキビ／＼爲た體格で、聲から先づ元氣に充ちてゐるのだ。
「年を取つた上に、夏の晩は餘計寐られず、又常の通り無駄談にやつて來たよ。」
と我等の方を見て、
「老人は老人同士でないと、何うもへえ談が合はねえで。」
天井を仰いで一人カラ／＼と笑つた。
「何時も元氣ですな。實は今夏目さんに身の上談を聞かうと思つてゐた處ですよ、彼方が濟んだら貴方のも聞きたいものです。」
友人が水を向けると、彼の奥山といふ老人は目を丸くして、
「身の上話？　フム、其事はお前さん能く知つてゐるでねえか。」
「僕は知つてゐるが、此處に居る友人は未だ知らんのですから。」
「あゝ然うかね、然し東京のお客樣に聞かせたつて何に成るべえ、而して夏目の老爺近頃は最う那樣事人に云はねえだ。喃。」
彼は小使の方に向いた。夏目老人は頷いて、
「私も何だか面白くも無えだから。」
所謂老人同士で顏を見合せたが、余は滿らなさうに默つてゐるのを彼の奥山は、大方氣を惡く爲たとでも思つたか、
「然しね。」
と言を改めて、
「是でも此老爺は以前は私等から見ると餘程大きな身代で、此村でも一二の大百姓でごしたが、それがへえ此男の代に成つて、爲る事爲す事が不思議に間違つて、他の者が手を出せば理も無い事でも、此老爺が始めると妙に不幸福ばかり、とう／＼地面も家も無くなり、今では此通りの有樣ですわ、喃老爺。」
「はゝゝ、然うとも。」
小使は强ひて平氣らしく笑つた。奥山は言を繼いで、
「其一番の最後が、彼の見なさる通りの山の田ね、平地から段々高く成つてゐる……彼へ水を引く事だつた。」
夏目老人は此時何とも云はずに頷いた。
「彼處へ水を引くには、山の上に井戸を掘りやして、深く／＼掘つてからに、いよ／＼水が出ると、其處から又横穴を掘つて水を出すのだ。是は一寸考へると譯も無え事のやうだが、なかなか難しい仕事で、掘るには唸と金の入る。而して井戸が一つで巧く水が出れば可し、萬一二も三も掘つて出ねえとなると、第一が費用、それから田が無駄に成る。何んな身上でも斯う成ると直に潰れますだ。此男も結局は其井戸を掘つたが、是も猶且やり損なつて、彌此有樣に成つて了ひましたよ。」

余は此話を聞くうちにも、彼の夏目老人が初のやうな淋しい顔色で、何か考へる處の有るらしく鬱いでゐるのを見た。

話といふのは是だけである。而して聞終つて少しも面白くも無かつたので、余は好い程に友人を促し、二人の老人に別を告げて、此暗い學校の門を出た。

町へ出ると友人が余を顧て、

「何うですね、今の井戸の話は？」

と聞くから、

「何うかとは面白い計畫ではないかといふのですか……僕は少しも然うは思はない。井戸を掘つて水を出す位、然程困難な事業でも無いではありませんか、其程水が必要なら斯道の技師でも雇つて、調べて貰つた上で着手すれば造作も無い事です。」

「所が此土地の人なんといふものは、那樣事は頭から考へずに居るのです。其癖隨分破天荒な山仕事を行る風で、誰も皆然うです、小使先生なぞは最も其方の心が發達してゐた爲に、終に彼樣境遇に成つて了つたのです、然し彼の男は今でも猶且人に魁けて、大きな事業を行る事にばかり頭を使つてゐるのですが、當時の身分では迚も思つた事の萬分の一だつて出來やしない、畢竟考へばかり進んでゐるので、而して斯樣人は得て好い事の手本を殘しながら、自分は詰らなく終つて了ふんです。」

「成程、然ういふ人は何處へ行つても有るでせう、然し今の井戸のやうな事は實際出來得るのですか。」

「無論其事で其後成功した者が幾人も有る、現に今の奥山なぞは後から手をつけて、其が成效したばかりに、彼の通りな大きな身代に成つたのです。」

余は此言を聞いて驚いた。然うして見れば彼の夏目老人は決して空想の人では無いのである。立派な事を發明して、其成效を他人に占められた、如何にも悲しむべき運命の人なのだ。

一生人の蔭に成つて、所謂縁の下の力持で終る程氣の毒な事は無い。彼等は常に傑い考を産出して、人の前に提供して、自は其身を犠牲に爲て見せ、後から來る者の近道を開拓してゐるが、其報酬は極めて少い、否寧ろ極めて價の無い物を得るに止るのだ。

美しい花を開く菓樹は實を結べば人の爲に取られて了ふ、是が人であつたら隨分情無い事であるが、彼等世の中の不運な人は其花さへも自分の身に開く事は無い、菓樹よりも一倍哀れな境遇ではないか。

余は友人の話を聞いて、何か知らず涙を零した。而して同じ事を爲て、一は成效、一は不成效、一は富み、一は貧しい二人の老人を、加之同じ場所で見たにつけて、其事以外に大いなる教を受けたるやうに感じたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌朝早く余は輕裝して此村を出立した。

斜に續く山田の中を行けば、見渡す限り青々とした稻の波で、其葉の底には清い豐な水を湛へてゐる、是こそ例の掘井の水か。

小山の頂に登つて、麓の村を見降せば、唯一圓に靄に包まれて、其處を人里とも思へぬ靜けさ。

然し其太古に似たる靜けさの裡には、此處にも恐ろしい運命の波が渦巻いてゐるのだと思ふと、彼等の外に立つ旅人の余も、自から悵然として朝風の身に寒さを覺えた。

（明治三十八年七月）

年譜

明治十年

柳川家は、代々播州龍野藩の家老の家、祖父數彌は、幕末の世に處して現る。父至に迄るまで、現在の東京市二長町に當る藩邸に住む。三月五日、春葉は、至の長男として、此處に生る。名は專之、之れを音讀にして、千葉の別號を用ゐしことあり。

明治二十七年

十八歲、はじめて、牛込區橫寺町の尾崎紅葉の門に入る。小學校を出で、英學塾に專ら語學を修め、一方文筆に志して居たのが、こゝに紅葉門下となる機を得。

明治三十一年

「白菫」の短篇を「國民之友」に載す。雅文體に歐風を交へ、紅葉補作たり。後、三十四年、紅葉門下の小說集「仇浪」に收錄せられたり。「文藝俱樂部」に「花[illegible]」、小說集「はじにほひ」に「都人」、「新小說」に「命中々々！」などいづれも五頁乃至十頁內外のもの、紅葉閱、紅葉補などの添書を以て公にさる。外に「讀賣新聞」に「街頭」を出す。紅葉門に入りて五年目、二十二歲なり。

明治三十二年

「復讐」を「學窓餘談」一月號に出す。次いで「中外商業新報」に「卯花縅」を、共に歷史材を取扱ふ。七月の「文藝俱樂部」の「行路心」は一躍、前年の小篇、補閱付の殼を破つて、單獨署名となり、三十餘頁の長さとなり、言文一致體を以てす。「伽羅文庫」に「櫂の雫」、「文藝俱樂部」に「街頭」、「活文壇」に『應接室』等々。

明治三十三年

「新小說」に「何ら考へても」「機關手」、「中學世界」に「鼓の聲」、「女子の友」に「若芝」等々。此年の夏、千葉鐵藏大川端なる深川區安宅町に住し、臨川夢人と號したりしが、一夕知己を招き、納涼宴を催す。春葉亦、泉鏡花と共に、紅葉に隨うて參す。席に伊臣眞（紫葉）ありて、初めて會見す、伊臣と春葉は終始相かはらざる友にして、春葉歿後猶、伊臣は其遺族に厚し。こゝに特記する處也。伊臣は安田善三郎の兄弟なり。

明治三十四年

「小天地」に「都ぶり」、「新著月刊」に「乳母が宿」、「平民文學」に「木綿襷」、「文藝俱樂部」に「馬肉會」、「花籠」に「めぐり逢ひ」「心ごゝろ」、其他、毎月二三篇の作品を爲し、「九州日日新聞」に『裏表』、「秋田魁」に「都の春」、「秋田公論」に「一節切」、「臺灣日日新聞」に「ひと昔」、「德島日日新聞」に「夕まぐれ」、「橫濱新聞」に歷史小說「安藤帶刀」など、まつしぐらになり創作す。猶餘力を「團々珍聞」などに送致せり。

しかも、前記の外、「新小說」三月號所載、約九十頁の「遠砧」、同十二月號九十四頁の「錦木」、「文藝俱樂部」一月號の「梅子連」、及び大阪に於ける「小天地」九月號の「初あらし」など、頗る好評。『錦木』は、後（四十年）單行本として「獨身者」と名題、出版さる。

明治三十五年

「新小説」一月號に「鳥襷」、同六月號に「人えらみ」、同十一月號に「寢ごゝろ」「文藝倶樂部」十二月號に「秋袷」などが重なる作で、地方新聞は省略するとして、大家の小説を一作づつ發表する「アツキ」の第六号に「酒中花」を發表す。百二頁で、單獨刊行に取扱はれし初めなり。

一方に詩作にも前々から沒入して、自作「親子連」に、戀人と永別する終末を、

かの大空の星をもて
人の命にたとふれば
闇を離れて闇に飛ぶ
星にも似たるわが身かな

以下六章の長詩に結んで居り、小栗風葉作「蔓下地」中にある二十餘章の長詩、「破金扇」は、春葉代作であるなど見るべし。

明治三十六年

「泊り客」は「新小説」新年號に掲載さる。三十九頁の短篇ながら、非常の好評にて、特に短篇大家たりとの位附をされたる感あり。後(三十八年)單行本として出版さる。此年六月、七月、九月と「新小説」に續載さる、題は「在郷唄」「人の情」「及び」「忘れ水」なり。「忘れ水」は七十八頁に從つて「文藝倶樂部」に「世わたり」「桃李」、「文華」に「行く春」、「婦人界」に「誕生日」、「女學世界」に「愛の光」、「太陽」に「畫家」等々あり。前年より、其作風が齎す結果として、女性方面、教育方面の雜誌の小説依賴あり、題名等一々には略す。

十二月に「夢の夢」出づ。長篇小説として單行出版されたる最初のもの、少年の躍動に特色を以て歡迎されたる「讀賣新聞」連載の小説なり。恩師尾崎紅葉に、此の上梓を捧呈し得ずして永別す。

紅葉は同年十月三十日歿せり。春葉が紅葉に師事して滿十年、時に二十七歳。

明治三十七年

四月迄は發表されたる作品なし、昨秋紅葉の死せるためなり。日露の役猛烈に、雜誌「戰爭文學」に「乘合馬車」又は「馬賊」を載す。「文藝界」に「露しぐれ」、「女學世界」に「小春日」、「文藝倶樂部」に「結び葉」等。十二月に歷史小説長篇「山櫻」單行。飜譯アレキサンダー三世原著の「セバストポリ」單行出版さる。

本郷區動坂の上、千駄木の化物屋敷などと噂されし古邸を借りて、こゝに最古の門下佐々木春風と、永らく、[illegible]暮しを續け、文士相撲の江見水蔭等を顧問として、庭に土俵を築き、大いに角力を闘はすに夢中となり、自ら主筆となり、菊四倍版の「相撲新聞」を發刊した事ありしも、此の動坂上の生活を止め、京橋區越前堀一丁目の親戚の二階に引移る。幾何もなくして、六月に日離子夫人を娶り、結婚と同時に、牛込區東五軒町の邸宅に新家庭をつくる。夫人は宇都宮市の産。

明治三十八年

「明星」に「田舍紳士」「孀の里」「經驗」、「新古文林」に「二筋道」「古驛」、「文藝界」に「放れ心」「ひとつ星」、「中央公論」に「爐のほとり」「窓かけ」、「新小説」に「薄情者」、「文藝倶樂部」に「紐鏡」が、短篇小説としての重なるもの。「古驛」は好短篇として、「爐のほとり」は新しい傾向のものとして、「薄情者」はイブセンがノラの風ありとして、いよ〳〵其價値を重からしむ。三十六年の「泊り客」單行本として刊行。短篇小説等十七篇を收めて、「いさゝ川」と題せる單行本出づ。

『いさゝ川』には俳文が澤山あり、紅葉門である處から、俳諧にもよく句も多し、「紅葉先生追悼」の一句を擧ぐ。

夜もしぐれ日にも時雨の涙かな

明治三十九年

「太陽」新年號に『人の噂』、「新小說」新年號に『文の使』出づ。「新小說」六月號に『二おもて』を載せたるが、前篇にして、遂に後篇は出でず。「中央公論」十二月號に『枯蘆』の一篇好評なるも、創作上の動搖悶々に甚だ惱める風あり。時に大阪より捲土重來せる喜多村綠郎の爲めに、『やどり木』の上演を許し、本郷座の五月興行に大當りを取る。其作品の上演はこれを機會として爾今、文壇以外劇界に傾向するに到る。之れと前後して、長篇小說所謂家庭小說にて、菊池幽芳等流行の後に續きて、春葉時代を造らんとす。『やどり木』『綠の絲』『浮沈』『新夫婦』などの長篇小說、いづれも新聞紙連載ものにて、續々單行出版さる。

明治四十年

「新古文林」新年號に『空ッ風』「新小說」八月號に『蘇生』の兩代表作を出し、「中央公論」に『家鳩の鏡』、「新潮」に『農夫の娘』、「日本及び日本人」に『人戀』、「文藝俱樂部」に『妥協』『小膽者』、「文章世界」に『師弟』、「趣味」に『手紙』等々を載す。一方單行本としては、『春葉集』に短篇小說九篇を集め出したる外、『富と戀』『心の影』『後の世』及び、三十餘年の『錦木』を『獨り者』と改題して出づ。上演效果は、五月に大阪朝日座に『心の影』が大當りせるを初め、盛んなり。

明治四十一年

新聞連載長篇小說、いよ〳〵好評なり。「新小說」新年號に『殘り物』、「趣味」同號に『飯時分』、「中央公論」三月號に『棒手振』、「新小說」四月號に『邪魔者』、十一月號に『女優』等、毎月一篇を發表すれど、婦女新聞の如きまでが、其作を乞ふ程に新聞小說に忙殺さる。年末、『女の望』單行出版さる。小栗風葉、德田秋聲と共に、『三人叢書』刊行さる。

明治四十二年

「新文林」の新年號に『空想家』、「日本及び日本人」に『啞』、「新小說」に『二週間』『お水取り』『手簡』、「十二人集」に『細君』及び、「太陽」十二月號に『[illegible]』の小篇を出す。單行としては、『[illegible]』『[illegible]大人』『小說從弟』にて、新聞小說と上演效果いよ〳〵續く。

明治四十三年

「新小說」へ『思ひ出』の一作を出せるのみ。單行本出版は、『操』『女同士』等。上演つゞく。此年居宅は、同じ東五軒町ながら、江戸川の前河岸に引移る。

明治四十四年

單行本出版は、『妻と子』『獨力』『花吹雪』、『[illegible]』、イプセン全集の譯出をはじめ、第一卷出づ。

明治四十五年（大正元年）

新聞小說執筆時代つゞく。

大正二年——三年

著中の、「女學世界」に『家と人』出づ。「大阪毎日新聞」及び「東京日日新聞」に掲載されて未曾有の人氣を占めたる『生さぬ仲』四卷は單行として出版さる。上演にまた多大の效果を收

め、歿後も長く、猶演劇に映畫に演映さるに到る。「女一代」「母」「歩一歩」『かたおもひ』單行出版。

大正四年
「武侠世界」新年號に『父と子』、同夏に「源太の敵と味方」を出す　新聞の外に、「婦女界」等も「五人姉妹」其他の長篇連續ものを載す。單行本出版は、『疑ひ』『うきよ』「五人姉妹」等々。

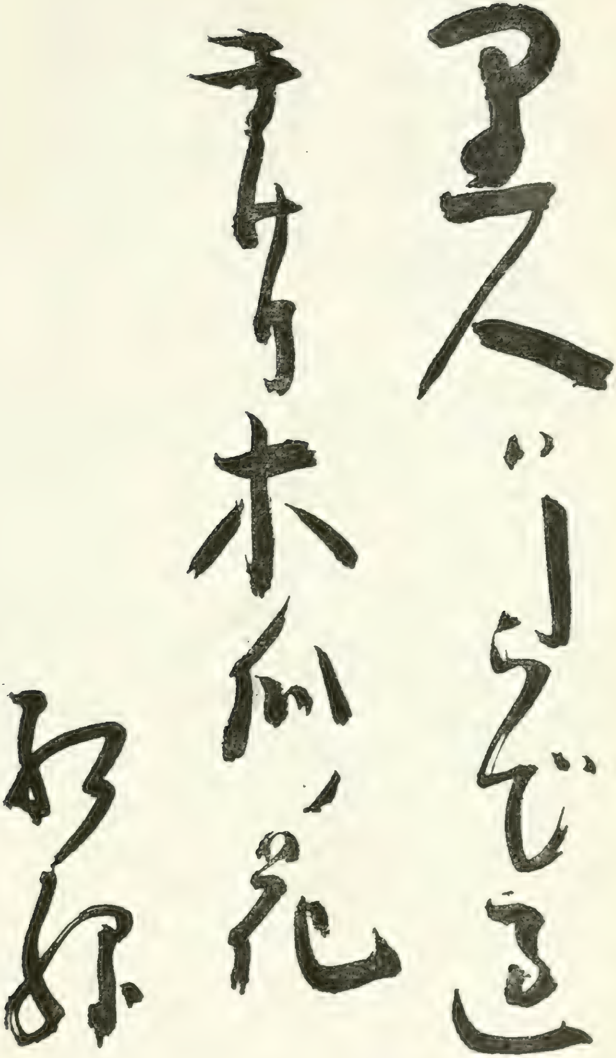
大正五年
「文藝俱樂部」六、七兩月に亙り、「かたみ」を續載せるも、遂に未完に終る。明治三十九年「新小說」の「ふたおもて」の未完と、此「かたみ」は永久に、未完裡に終る。猶爾今、遂に短篇小說の發表されたるもの無きに到る。單行出版は、『銀の鍵』「うき身」等。新聞執筆つゞく。
俳句もあまりなく、十二月二十五日、舊知として厚き安田善之郎が、蜜柑を贈れるに答へて、『少年行』の前書にて「うれしさは袂に重きみかん哉」
當時、牛込區北町の矢來を見下したる崖上の邸宅に住む。長女千枝子生る。結婚後、はじめての子なり。

大正六年
「ほまれ」「二人靜」「誓」、「脚本女一代」を單行出版す。
歳晩かりそめの病ひ重く、麹町木澤病院へ入る

大正七年
舊臘より病院に在り、一月九日急性肺炎にて歿す。四十二の厄歳なり。墓所は芝公園內、大光院にて、「法林院香誉恵日春葉居士」と法號す
前年より連載中の作品にて中絕となれるは左の如し。
「人の力」「報知新聞」(一月三日まで)
「世間」「婦女界」(三月號まで)
「願の絲」「福岡日日新聞」(一月六日まで)
歿後長男生る。祖父の名の欽哉と名く。
遺子未亡人は一男一女と共に宇都宮市に移轉す。

原田信造編

佐藤紅綠集



黄金

霞　一

寒い風が軒の注連を吹くと片側の並木から木の葉が思ひ合せた様に一度にはら〳〵と散つて其れがさら〳〵と音立てて一尺ばかりの高さに舞ひ上ると直ぐ霜解の大地に歸られて軽いものは四五間も先に走り残るものは波形に片側の杭の邊で吹溜まる。棒杭を繞らしたテニスのコートは家根に遮られた南の日の筋を十分受けて、日當りには少しづつ日光が進んで居る。棒杭を前にした爪先上りの緩坂の上に小さな構の一軒家、硝子戸に横に牛乳ホールと書いて、硝子越に見ゆる棚の上に清涼水やサイダー瓶が行列して居る。硝子戸に添つた右手の格子窓は勝手元で、窓の隙間から今朝の煙がほら〳〵と漏れると、其れが正面に受くる風に叩かれ、右と左へ流れて行く。右は崩れて向うに並んでる下宿屋の窓を見下して居る、左は隣の家の硝子戸、其の上に張つた注連と一本斜に突き出した國旗は霎時煙に撫でられたが、再び吹いて來る風に煙は屋根を越えて日向の光に薄らいで行く。

いつもは學生の往き來るさゞとよめき喧騒に賑ふ此の邊も元日は流石に靜かで片田舎の様に鶏の聲さへ聞える。

―あら煙くて仕様がないわ―

勝手の竈に火を焚べて、口元から突返されて來る煙に一寸まごつきながら睦子は白い細やかな手で我が眼を擦りながら呟いた。

―蓋が閉まつてゐるんぢやないの」と奥から母の聲が聞える。

―あら厭だ」と睦子は笑ひ出した、而して火口の下の蓋を開けてもう一度「あら厭だ」と言つた。

―それ御覧なさい―と母も笑ふ聲がした。―元日は火を焚かないものだといふのに焚くもんだから―

「でも萬龜さんは手も足も泥だらけになつて歸るんですもの、お湯を沸かして置かなくちや―

―萬龜さんは何處へ行つたんだい―

―テニスよ―

母は火鉢の前に坐つて耳を欹てた。テニスの音、―ワンゼロなどいふ聲が手に取る様に聞えた。

―あの裝で庭球をしてるのかえ、呆れたね、紋付を着て庭球をするなんて―

「可いわ、御正月だから―

―睦子は恁う言つて手拭に手を拭きながら店から茶の間に入つて來た。荒い大島の上下に御正月だからといふので新しい紋羽二重の紋付羽織を着て居る、着物と羽織と調和はない處に彼女の温和しさが見えて、羽織は三四年前のが未だに妹のものともならずに用ひられて居るのが解る。其れでも彼女の若さが全身を光らして居た。くつきりと白い肌で、其の白さのために眉も眼も極めて明瞭と引立つ、而して房やかな髪は首筋や頬を一層明かに見せる。瓜實ではあり何處やらに愁を帯びて居るが、もの言ひの靜かなのと態度の穏やかさで彼女の體は十分に飾られて居る。母は娘の額を眤と見て頭から胸元まで見下したとき靜かに微笑した。一年一年と經つて行けども自分の年を老るのが解らずに只娘の大きくなるのが眼に付く、而して其れと共に得も知れぬ感慨を感ずるのであつ

た。
「何を笑つてるの、御母さん」と睦子は言つた。
「お前今年幾歳になつたの」
「二十三よ、御母さん」と睦子は火鉢の鐵瓶を猫板の上に下して兩手を炙りながら言つた。
「まあ二十三かえ」と母は大袈裟に驚いて「すると萬龜ちやんは？」
「十九よ、厭ねえお母さんは、娘の年を忘れてさ」
「ぢや、お母さんは幾歳だか知つてるかえ」と母は仍且笑顔で言つた。
「知らないわ」
「それ御覽なさい」
「だつて娘は母の年を覺えて居なくたつて可い事よ。母といふものは娘の年を覺えて居なければ子に對して濟まないわ」
「まあ勝手な事ばかり言つて、萬龜子もお前もいつまでも子供で仕様がないね」
然う言つたものの母は何時までも子供じみて居る娘二人に對しては心の底から滿足して居るのであつた。
「早くお嫁に行かなくつちや」
「厭だわ、お母さん、私一人で行かない事に決めたの」
「なんだつてさ」
「約束したのよ」
「誰と」
「萬龜ちやんと」
「どんな約束？」
「お母さんと私と萬龜ちやんと三人一緒の家なら行くつて」
「呆れてしまふよ、お前達は」と母は噴飯した、而して二人とも自分を思うてくれる志を嬉しいと思つた。

二

床の間に天照皇大神宮と書いた掛軸を掛けて兩側に今上天皇陛下の御肖像を掲げ御供の上には齒朶の綠に海老の紅も鮮く、白米の白砂にごまめ、勝栗などが散つて居る、二つの燭は長く明るく點つて賑やかな御飾りの中に蔭膳を据ゑた小さな寫眞は父の姿である、睦子は今其の方を見やつた。
「御灯が消えやしないかしら」
彼女は突と立つて寫眞の前に坐つた。什麽いふ理由か母は父の寫眞を見る事が嫌ひである、一年に一度元日の朝に蔭膳を据ゑるきりであとは佛壇の奧深く藏つて居るので、父の姿を見るのは元日の朝きりである。
幼さい時から睦子は之が疑問であつた。
「何故家に御父様が無いのだらう」
學校の友達にも近所の人達にも御父様があるのに、なぜ私達には御父様が無いのだらう、然う言つて彼女は妹の萬龜子と泣いた事があつた、其れが女學校へ行く様になつてから、御父様は死んだのでない、生きて居るのだ、而も大阪東京の二箇所に店を有つて居る商人である事が解つた、油谷國助といふ名は折々新聞にも見える。其れを什麽して私達は一緒になれないのだらう。彼女は然う母に訊いた時母は眞蒼な顔をして言つた。
「それは今に解ります、もつと〳〵大きくなつたら」
只た是だけであつた。若し父と母と離縁になつたのならば、自分達も油谷といふ姓を名乘る事が出來ない筈だ、之には何か仔細があるだらう、其れは子供の訊くべき事ではないに違ひない、其れを訊いて母に厭な思ひをさせるよりか默つて居る方が可いと彼女は思つた。
寫眞の前に坐つてしみ〴〵と父の寫眞を見て居る睦子の姿を見やつて母のお浪は横を向いた。

「お母さん」と睦子は聲を掛けた。「お父様は東京の人？　大阪の人？」
「爾ね、大阪の人だらうよ」と母は冷やかに言つた。
「爾？」と睦子は濟まない事をした樣な顏で言つた。什麼いふ理由か母は大阪が嫌ひである、日常の話の中でも大阪の事に及ぶと殆ど仇敵の樣に惡く言ふのであつた、睦子は其れを思ひ出して默つてしまつた。
此時入口の戸が靜かに開いて、紫色の羽織がちらりと見えた。
「兄さんが來て居ない事？」
「あらお蝶さん」と睦子は急いで座を立つて「御目出たう」
「御目出たう」とお蝶は急に思ひ出した樣に言つて頰を染めた、お下髮に結つた前髮を二つに分けて二所にリボンを結び付けた、其の愛くるしい顏は抱付いて頰摺をしてやりたいと睦子は思つた、
「兄さんが來ない事」と蝶子は再び言つた。
「いゝえ、昨日御出でになつたきりよ」
「何處へ行つたんでせうね」と言つた時蝶子は鈴の樣な眼に涙を充滿に溜めた。
蝶子の兄といふのは早稻田の大學生で、森川克巳といへば野球の選手として學生間に名高い男である。毎日の樣に此の牛乳ホールへやつて來る。而して此の一家族とは骨肉の樣な間柄になつて居る。
「昨夜御歸りにならない事？」と睦子も心配さうに問ひ寄つて「まあ御上りなさいよ」
「えゝ」蝶子は顏を反向けて長い袂を弄りながら「何處へ行つたんでせう」
「では今朝まだ御兄さんと御一緒にお雜煮を祝はないの？」
蝶子は微かに首肯いた。
「まあ可哀さうに」と母は早や涙ぐんで「睦さん御鍋をお掛け」
「いゝわ、私お雜煮なんか」
袂をくるりと振つて其儘両手を袂ながらに顏に付ける。
兄一人に妹一人、父もなく母もなく、長年奉公した爺やの世話で百姓家に淋しく暮らして居るのが、大晦日から兄は留守、元日の雜煮も祝はずに心配してるかと思へば睦子は自分も一緒に泣きたい程に思つた。

三

「どうなんでせう、お兄さんはお酒を上るけれども、何處かで飲潰れてるといふ事もあるまいし」と母は火鉢の傍に蝶子を坐らして其の手を我が手で温めてやりながら、今に歸つて被來いますわ」
「でも兄さんは今まで他所へ宿ることとかないんですもの」と蝶子は狎える樣に言ふ。
「爾ね」と睦子は嫣然して見せて「橋本さんや何かと御一緒だつたから乾度橋本さんの下宿へお泊りになつたんでせう」
「爾だと可いけれども」と蝶子は聊か元氣づいて「爾かも知れないわ」
「髮は御自分でお結ひになつたの？」と睦子は背後へまはつてリボンを掛けなほしてやりながら「本當に髮が澤山あるのね、毎日一人で結ふには大變でせうね」
「慣れると何でもないわ」
「お洗濯も、誰が仕なさるの」
「私がするのよ」
「まあ」と睦子は感心して「お兄さんのでも何でも持つて被來いね、私がしてあげますから」
「難有う」と蝶子は明るく答へた。
「本當にお豪いわ、萬喜子なんか十九にもなつて自分の足袋も洗へないんだもの、蝶子さんは

お幾歳におなりになつたの？」
「十六」
「まあ」と母は感服して頭を引いた。
此時表の方で大勢の聲で唄を唄ふのが聞えた。睦子と蝶子は中の障子を開けて外を見やつた。庭球は今最中と見える。前傾をして居る萬龜子は首尾能く難球を打ち了らせて敵の狼狽する状を見やつた。黒縮緬に種々な南國の花を染めた振袖を着て緋錦の丸帯の下紐に前褄を二所摘んで揷み、緋羽二重に亂れ波の長襦袢の裾も現はに、はあ〳〵呼吸苦しさうにラケットを振つて居る。髪は亂れて後れ毛がはらりと白い額や豐かな頬に掛ると彼女は左手に其れを拂ひ拂ひした、而して熱火迸る眼を凝らして敵の手元を睨つて居る
「本當に綺麗だわ」と蝶子は言つた。
「あゝ綺麗だわね」と姉の睦子は惚れ〴〵と見やつて我れながら妹の美しさに一種の矜恃を感じた
「馬鹿だね、着物も何も堪りやしない」と母は言つた。此時蹴負が濟んで學生達はわい〳〵高聲に笑つた。
睦子と蝶子が元の席へ戻つた時座は急に賑はつた。
「やられた〳〵」といふものもあり「腹が減つた」といふものもあつた、片肌脱や頭巾姿、異様の姿の學生に交つて萬龜子が入つて來た。
「お母さん」と彼女は戸口から聲を掛けた。「森川さんが來たぢやない？」
「あゝまたよ、蝶子さんも訊きに來たのよ」
「あら、厭な方ねえ、約束をして置いて」
然う言ひながら彼女はラケットの泥を拭き取つて柱に掛けた。
「ラケットなんか何處でも可いぢやないの、早く手を御洗ひなさい」と母が言つた。
「あゝ朗々、イッツロングウエイ‥‥」と唄ひながら勝手の方へ行く
「森川君ですか」と一人に言つた「彼奴昨夜警察へ引張られたよ」
「警察へ？」と一同は愕然として言つた。「而して什麼した？」
「今に此處へ來るよ、橋本と一緒に」
「どうして警察へ引張られたんだ」と一人が云ふ。
「巡査の帽子を奪つたんだ」と櫻井は答へた。一同わつと笑つた。
「だが什麼して其麼事を」と一人は言つた

四

「諸君！」と櫻井は眞黒な日に燒けた顔を逆さして泥と泥足袋を脱ぎ捨てながら「實に痛快だよ」と言つた。彼は何事にも「痛快」といふ二字を付けるのが癖である。
「其りや實に痛快だ」と彼が何か言つた時一同は着物を着替へ終つて卓子を圍んだ。障子一重を隔てて睦子と蝶子と母が耳を欹てて居る。萬龜子は勝手元で手を洗ひ其れから座敷で話を聞し始めた。
「痛快が什麼した」と一人は冷かせつ返した。
「電車に乘つたのだ」と櫻井は言つた。
「諸君——
森川と橋本と僕がさ、すると電車は滿員だ、三人が乘らうとすると待ち兼ねた群集は眞先にと爭ふのだから堪らない、老人や女や子供は呼吸も吐けぬ様に揉まれる。と見るとでぶ〳〵太つた三十四五の男が車掌臺の上り口の棒に攫まつて前に乘らうとして居る婆さんを突退けようとして居る。突退けられても婆さんは身體のやり場がない、そこで婆さんは上せかけた片足を引いた、同時に下駄を脱ぎ落した、拾はうとすれば後から押し來る群集に潰されてしまふ、

さりとて下駄なしでは困る、此の途方に暮れた婆さんにお構ひなしで大きな男は遮二無二上る拍子に婆さんは群集の中へ倒れた。其の騒ぎが濟むと我々三人が漸と吊革へぶら下る事が出來た、と僕等の前に七つ許りの女の子を伴れた婦人が居る。背中に一人を負うて居る上に臨月近い大きな腹をしてるんだ」

「能く其那處に氣が付いたね」と一人が言ふ。

「貴樣女を孕ました事があるんだらう」

「馬鹿言へ」と櫻井は眞面目になつて「是から痛快なんだ、七つになる子供を負うてさ」

「おい、什麼して其れが七つだと斷定するんだ、六つかも知れない、或は八つかも……」

「叱ッ〳〵」と他の學生が制した。

「處で其の……」

「痛快といふ奴だね」

「うむ、其の痛……快……」と櫻井は苦笑して「眞面目に聽けよ」

「うむ、聽いてるよ」

「七つの子供……其の子供を伴れた上に腹の大きい女だよ、可いか、其れで人に押されてベソを搔いてるんだ、婦人は吊革に漸と摑まつたものゝ背後からは負うた子が押され、前では腹か押される、即ち腹背皆敵なんだ」

「巧い〳〵、活辯になれ」

「叱ッ」

「と見ると先刻の大きな男は肩を張り胸を伸ばし兩股を擴げて二人分の席を占領し、加之に氣持快ささうに居眠りして居るんだ、そこで僕は非常に癪に障つたから其の紳士を揺り起した、失禮ですが婦人が困つて居ますから席を讓つてあげて下さいませんかと恁う言つたのだ」

「論を吐け、貴樣の事だから痛快に席を讓れと恁う言つたらう」

「いや爾ぢやない、其時は痛快を忘れてしまつた、すると其の男は眼を開いて僕の顏を見たきりにやりと笑つて又睡り始めたんだ、すると橋本は直ぐ洋杖の先で其奴の胸を突いて『おい、君にものを言つてるのに聞えんのか』と言つた、すると、其奴は大きな欠伸をしてへゝゝと笑つた。と森川の拳骨が其奴の横面へぴしやりと參つた。確かにスリーベース位だね」

「痛快！」と二三人は言つた。

「俺の言ふ事を濫用するない」と櫻井は笑つて「其れから其奴を電車から叩き落さうとしたが彼奴却々降りない」

「其の人は乾度大阪の人でせう」とお浪は次の室から聲を掛けた。

一同笑ひ出した。

「爾ですよ、東京の人には其那勝手な人はありやしませんよ、私達が電車に乘つても職人ですら席を讓つてくれますもの」

「小母さん、爾言つてくれるなよ、僕も大阪の人間だよ」と櫻井は言つた。

「貴方は大阪でも特別だ」とお浪が言ふ。

一同は又笑つた。

「ところで諸君」と櫻井は續けた。「電車の中はごつた返しだ、僕等三人ばかりぢやない、車中の人達は總立ちになつて其の男を撲つた、電車は停つた。其處へ巡査が來た。これからが益々痛快になるのだ」

恁う言つて櫻井は一杯の茶を飲んだ。

五

「何しろ時は大晦日の眞晝だ、處は日本橋だ、電車の中から乘客が悉く溢れ出す、車掌は笛を鳴らして制すれども聞かばこそだ、そこで車掌は森川の胸を突き飛ばした、森川は怒つて居たい、不徳漢を懲らしたのに何故僕を突き飛ばすかと怒鳴つた。怒鳴られた車掌は面喰つて無茶苦茶に森川に突懸つた、乘客と弥次馬と車掌とごつちやになつて騒いだ、森川は車掌に

眼を打たれた。あつと言ふまに車掌が逃げようとした、其れを捕まへてぐつと大地に引据ゑた。何しろ眼が見えないから仕方がない、滅茶々々に撲る拍子に森川は足を滑らして車掌の上に折重つた。下から車掌が頻に森川をこづき上げた、そこで森川は其奴の鼻を噛つた「鼠の様だね」と誰かが言ふ。一同笑つた。「處が其れは車掌ではなかつた、巡査であつたのだ」

「はツ／＼／＼」と皆は笑ひ轉げた。

「さあ警察署へ來いと巡査は眞赤になつて怒り出した」

「然だらう、鼻を噛られたら顔が眞赤になるだらう」

「うむ、行から、さあ來い、吾々三人が警察署へ引張られた、何しろ巡査の鼻が唯一の證據だ、諸君も知つてる通り森川の顔と言つたら夏になると黒奴よりも黒い、而して彼の歯と言つたら雪よりも白い、あの鋭利な歯でやられたんだから堪らない、巡査の顔は一面に紫になつて腫れた。警察へ行つてから署長に説諭を食つた。天下の學生たるものが巡査の鼻を食ふ奴があるかツ」

「はゝゝゝ」

「説諭で濟んだものの是から森川式を發揮したんだから痛快だ、俺はあの巡査に濟まないと恁う言ふんだ、あの巡査だつて吾々と同年位だ、學資があるなら學校へ行つてるんだ、貧乏だから巡査になつてるんだ、妻子もあるだらう、大晦日は什麼して越さうといふ屈託もあるだらう、其れを君、鼻を噛つて明日から勤務が出來なくしては僕は濟まないから僕は謝罪りに行から、而して出來るだけの治療費も拂はなきやならん、恁う言ふのだ、僕と橋本は其れに反對した、元來鼻を噛られたのは巡査の落度だ、苟くも巡査たるものは自己の鼻を防禦する事が出來ないのは即ち我が身の不覺だ、のみならず聞いふ災難があればこそ政府が月給を拂つてるのだから、君は既に署長に免されたる以上は其の上に氣を痛める必要がないと論じたけれども聽かない、君等の蟇口を皆な出せと言ふんだ、僕は幸にして五十錢しきやなかつたが、橋本は三圓五十錢ばかりあつた、其の中から電車代を十錢づゝ僕と橋本に渡して森川の奴さつさと行つてしまつた。」

「痛快だね」

「痛快ぢやない、僕は珈琲を飲まうと思つて居た六十錢を只取られたよ」と櫻井は苦笑した。

「森川はそれから何處へ行つた」

「巡査の自宅を訪問したさうだ、貧巡査の階い家で子供が三人もあるんだ、細君は女學生上りか何かだらうと思ふ」

「それは君の想像か」

「後で森川の話を綜合して見ると聞いふ事になるよ、海老茶色の座蒲團があつたといふから」

「座蒲團と細君と什麼いふ關係があるんだ」

「女學生時代の袴を座蒲團にしたのだらうと僕は思ふ、その位の事が解らんで文學者になれるか」

「そんな話は止せよ、それから森川は什麼した」と他の一人が言つた。

「うむ、巡査は未だ歸つて居ない、そこで森川は細君に向つて實は恁う／＼いふ次第で僕は君の亭主の鼻を噛つたと話したら細君は驚いて眼を圓くしたさうだ」

「當り前だね」

「森川は自分の持つて居た六圓餘りと橋本と僕のと合計十圓許りの金を出して取つてくれと言ふ、細君は良人に聽かなければ取れぬといふ、談判の最中に巡査が歸つて來た、そして森川の話を默つて聽いて居たが突然「おい、その金で飲み明さう」と言ひ出した、何からといふ

んで昨夜二人が元日の朝まで飲み明した、二人はすつかり親友になつてしまつたのだ、どうだい、痛快ぢやないか」

「なる程痛快だ、森川といふ奴は男に惚れられる樣に出來てるよ」

「男ばかりぢやないよ、なあ睦さん」と櫻井が聲を掛ける、睦子は答へずに蝶子の髮を弄つたまゝ恍惚として居る。

「萬龜さんは什麼だい」と櫻井は再び奥の室へ聲を送る。

「私好きよ、大好きだわ」と萬龜子は鏡の前で頭に髮針を插しながら答へた。

そこへ符子戸を開けて森川が入つて來た。

六

森川の姿を見るや否や一同は椅子を離れて喝采した。

「森川君萬歳!」

「鼻嚙、命萬歳!」

門口を通り行く廻禮の絹帽を被つたり羽織袴を穿いたりした人々は何事が起つたかと店を覗いて行く、小栗といふ一人の男は即席に唄を作つて唄ひ出した。

「鼻を嚙つた森川は、萬日はたいてオョチョコチョイのチョイ」

一同は之に和して唄つた、而して卓子の周圍をぐる〳〵廻り出した。奥にはお浪や睦子萬龜子蝶子の女連が疊の上を轉がつて笑つた。獨り森川は只呆氣に取られて茫然と人々の爲る事を見て居た、其れが可笑しいと言つて人々は猶も卓子を叩いて唄つた。彼等が唄ひ疲れた頃には森川は奥の室へ年頭の挨拶に行つて居た。

「隨分待つたわ、兄さん、昨夜私ちつとも眠れなかつた事よ」と蝶子は水々しい瞳を光らして抑へる樣に言つた。

「濟まなかつたなあ」と克巳は心から悔悟する樣な態度で怖々して言つた。

「可哀さうに蝶子さんはお雜煮も祝はないんですつて、兄さんと一緒でなけりや御雜煮を食べないつて斷言つてるのよ」と睦子はしみ〴〵と言つた。

「やあ」と克巳は恐縮して頭に手を掛ける。

「巡査と一緒に飲み明したんですつて、厭な方ねえ」と萬龜子は鏡の前から言ふ「本當に厭だわ、巡査の鼻を嚙つたりしてさ、人間が惡いぢやないの」恐う窘める樣に言つたかと思ふと直ぐ噴飯して「鼻を食べて美味かつた事?」

「やあ」と克巳は又も恐縮して頭を掻いた。

彼は睦子や萬龜子や蝶子に代る〳〵責められても一言も言はなかつた、而して只矢鱈に頭を掻いて居る。其れが如何にも男らしいと母のお浪は絶えず微笑を以て見詰めて居た。人並より一寸も背丈が高く、すらりとして、運動で堅めた骨格はがつしりと肉が緊まつて居る。太い眉、大きな眼、眞直な鼻、色が黒く齒が白く、滅多に無駄な口を利かず腹も立てず、沈默つて居る代りに自然と人間の尊敬を受けて、野球のグラウンドで捕手のボックスに立つ時には全選手に偉大な力強さを與へると噂されるのも無理ではないとお浪は思つた。お浪が何より好きであつたのは克巳が思慮がありさうな顔でありながら何とも言はれぬ子供らしい素朴な處がある點であつた。

「もう可い加減に森川さんを窘めるのは御止しよ」とお浪は笑ひながら眼に涙を溜して「お眠いでせう、お炬燵へでも入つて御休みなさいな、睦さん、お炬燵へ火を入れておあげ」

「あゝ、眠さして貰はう」と克巳は言葉短に言つて「蝶さん、お前は御雜煮を食べ[illegible]して[illegible]」

「あゝ、兄さんが起きるまで待つてるわ」と蝶子は言つた。

「もう眠るの? 厭ねえ、歌留多をしようぢや

ないの」と萬龜子は鏡を離れて傍へ來た、而して克巳の頭を見やつて「あら頭が泥だらけだわ、鼻を嚙つた時に泥が付いたんだわ」と頭の埃をぴしや〳〵打ちながら叩いてやる。
　克巳はにこ〳〵しながら萬龜子の爲すが儘に任せてる中に、くり〳〵と居眠りを始めた。
「お炬燵に火が入りましたよ」と睦子が次の室から聲を掛けた。
　克巳はよろ〳〵と炬燵へ入つた。
「厭だわ、陰氣で厭さ、晝日中寝るなんて厭だわ」
「おい森川、橋本が來たから捕球をやらう、來い」と櫻井が店から言つた。
「お寝みになつてよ」と睦子は答へた。
「はゝゝ」と一同が笑つた、而して唄ひ出した。
「鼻を嚙つた森川は、炬燵に入つてぐう〳〵ぐうー」
「薄情な人達だわね」と蝶子は言つた。
「學生さんは罪がなく面白うございますわ」とお浪は言つた。
　と突然克巳がのそ〳〵出て來た。
「どうしたの？」と萬龜子は言つた。
「眠られん」
「どうして」
「どうも君の處の蒲團や枕は女臭くて眠られん」
「家は女ばかりですもの」
「捕球をやらう」と克巳は逃げる樣に店へ出た。

七

　お浪は火鉢の前に坐つて何を考へるともなく茫然として居る、而して二人の娘が學生を相手に話してるのを夢心地で聞いて居た。外には風が出たやうだ、門松と注連を吹く音がさら〳〵と聞ゆる。次で森川と櫻井と橋本が捕球をして居る聲も聞ゆる。
「お止しなさいよ、歌留多をするから早く彼來い」と妹娘の萬龜子が大きな聲で店から怒鳴つた。
「歌留多なんか厭だい」と森川の聲がする。
「いやよ、御邪魔をするから」
「危いッ？ あゝ危かつた、球を拾つて御出で」
「いやよ、貴方が拾つて彼來い」
「君のために落したんだから君が拾へ」
「ぢや歌留多をする？」
「いやだい」
「いや拾はない」
「萬龜さん、拾つて御あげなさい」と姉の睦子ははら〳〵して言ふ。
「いやよ、森川さんの用なんか死んでもしやしないわ」
「ぢや私が拾つて來ますわ」
「いゝよ、睦さん」恁う言つて森川は驅け出した樣子。
　母は霎時微笑ながら其の方に耳を傾けて居たが軈て一寸首を捻つて急須の御茶を音をさせて注いだ。
「何方か知らん」と彼女は口の中で言つた。此の問題は彼女の肚に久しく蟠つてる問題である、姉の睦子と森川とは殆ど兄妹の樣に親しいが雙方とも何となく遠慮深い點がある、妹の萬龜子と森川とは全で犬と猿のやうに仲が惡い、二人が寄ると喧嘩をする、惡口を言ひ合ふ、到頭萬龜子は泣いて口惜しがる、爾でありながら一日森川の顏が見えないと萬龜子は默つて塞ぎ込んでしまふ。
　娘時代の心持は太陽に照られ行く雲の樣に何方が表で何方が裏だか解らない、母のお浪は今自分の若い時やら二人娘の素振やらを考へて注ぎさした茶の冷たくなるを知らなかつた。店で

では森川と萬龜子が盛に喧嘩をする、櫻井や橋本はわい〳〵囃し立てる、其間に睦子が心配さうに仲裁して居る。

突然硝子戸の開く音がした。喧嘩の聲はひたと止んだ。

「……居やはりまつか」と聞き馴れぬ聲が言つた、此の聲には答へず一人や二人くす〳〵と笑つたものがあつた。

―お母さんですか―と睦子は言つた。

―お母はんだね―と件の男が言ふ。

お浪の顏色は刷と變つた、而して彼女は慌てて座を起たうとしたが、軈て氣を靜むるものの如く冷たい茶を飲んだ。

―誰方ですか―と睦子が言ふ。

―お店から參りましたんね―と男が言ふ。

今まで喧嘩して泣いて居た萬龜子は可笑しさを怺へた樣な顏をして奧の室へ驅けて來た。

―お母さん、大阪の人が來てよ、お母はんが居やはりまつかだつて

―僞?―と母は靜かに言つた。―どうせ碌な用ではないんでせう―

恁う言つてる處へ件の男はひよつくりと入つて來た。慌てて外套を脫ぎ帽子を脫つた時綺麗に禿げた頭が疊の上に現はれたので萬龜子は又も眞赤になつて店に逃げた。

「これよ」と彼女は自分の頭を撫でる眞似をして見せた。一同はくす〳〵笑つた。

―恐ろしい鼻の大きい爺さんだね」と一人が言ふ。

―大阪の人は皆な鼻が大きいよ」

―馬鹿言へ、大阪の人間が鼻が大きいと決まつてるもんか、俺も大阪人だよ―と櫻井は言ふ。

―貴樣は特別だ―と橋本が言つた。これは毎もお浪が言ふ言葉なので一同は笑つた、而して大阪嫌ひのお浪に會ひに大阪の人が來たといふ事が頗る不思議に思はれた。

八

來客があるので一同は奧の離室へ引揚げた。睦子は獨り殘つて店を片付け始めた。彼女は突然の此の來客が何を齎し來たかを略推量した、而して胸を轟かしながら折り〳〵茶の間の樣子を覗いた。と軈て母の少しく急き込んだ聲が聞える。

―では什麼しても伴れて行くと仰有るの?―

「はい、仕方がおまへんよつてな」と男は答へる。

―仕方があるの無いのぢやないぢやありませんか、元と〳〵私が什麼して油谷の家と緣を絕つたかといふ事を貴方は御存知でせう、何も娘二人を抱へて路頭に迷ひたい事はありません、けれどもあの人は大阪の藝者を落籍して妾になさる、其れも其れだけなら構はないけれども、今度はお前は表面だけ別れてくれと恁う言ふんでせう、何も商賣のためだ、藝者は小金を有つて居るから其れを資本に絞り出して一儲けしたら屹度お前を什麼かしてやるし娘二人にも樂をさしてやるから其れまでは夫婦の關係を絕つてくれと恁う言はれた時私の心持は什麼だと思つて? 女房や子供とお金とを兩換する樣な人は良人でもない女房でもない、大阪では其那事が流行るかも知らないけれども東京では夫婦親子が餓ゑ死しても一緒に暮らさうといふのが人の道になつて居ます、私はもう呆れて愛想が盡きてあの人の言ふ通り御註文通りにしてあげたんです―

母の聲は憤怒に顫へて涙が折り〳〵言葉を途絕らした。

―左樣、御無理おまへん―と男は呼吸の切れ目毎に言つた。

母は霎時涙を呑んでから又續ける。

―女の身空で娘二人を伴れて東京に戻つて來

た時私は首でも縊つて了はうかと思つたのです、でも二人の娘……一人は九歳で一人は六歳の顔を見ると、什麼して繩片一筋でも首に當てられませうか、義理ある兄を頼つて轉がり込んだものの兄だつて其日々々を牛乳配達で暮らしてゐたんです、私はね、其時、兄の手傳ひに牛乳の配達までしたんです、此那事は娘共にも知らせません、私は三十三の年から今日まで愍して人様に後指一つ指された事もなしに二人の娘を馬にも踏ませず育てて來るには什麼に苦勞をしたかとお思ひですか、其れを今妾が死んだから歸つてくれ、お前が歸らなければ娘を寄越せ、二人で不可いなら一人でも可い、娘は店の番頭に嫁づけてやるとは能くも／＼言へた義理ですね」

「そりや爾だんな……爾仰有られると面目なうおまつけれども、そこを何とかな、お家はん」

「貴方は御使だからの御迷惑でせうけれどもね、御歸りになつたら爾言つて下さい、二人の娘は荒い風にも當てずに育てて居ます、もう年頃ですからどうせ何處かへ縁付けますが、お金と女房を引替にするよな良人は有たせませんから御安心なさいと爾言つて頂戴」

「お家はん、其處の處をな何とか怺へて貰へまへんやろか、なあお家はん」

「もう歸つて下さい」と、母は反抗的に言つた。

男は却々動かない、而して長い間默つた、と靜かに言ひ出す。

「旦那はんかて若い時にはな什麼な事がおましたか知りまへんけれどもな、今ではすつかり後悔しやはつてな、貴方と孃はんの事ばつかり言つて居やはりまつせ、それに此の暮から悪い熱病でな、氷が毎日一貫目も要りまんね、たつた一目貴方達を見たい、娘の祝言を見て死にたいと恁う言やはるよつてな……」

母は答へずに俯向いた。涙がぽとり／＼と火鉢の縁に零れた。

「其れに御家はん」と男は又續ける。「別れた時には約束がある、其れは二人の娘の中どつちか一人は私の方へ寄越す事になつてると旦那はんが言やはりまんね、其の約束を楯に兎や角言ふやおまへんがな、約束の事も約束だすさかいにな、何しろ今では、何百萬圓いふ身代になりはつたのに只た一つ儘にならないのは貴方と孃はんの事だすさかい……」

「歸つて下さい」と母は鋭く言ひ放つた。

「ほん困りますなあ」と男は頭をつるりと撫でた。

九

奥には歌留多の音がする。

「御父様とお母様の間は其那事になつて居るのだ」

睦子は思ひ設けぬ新問題に胸を躍らして怔と考へ込んだ。

番頭は例の大阪言葉で猶も續けた。其れは油谷家のためには什麼しても歸つて貰はねばならぬ事、強つて厭なら二人の娘の中一人だけ至急に歸して貰ひたい、養子にしようといふ坪山爲三といふ男は却々の敏腕家である事、大阪の本店でも東京の支店でもお孃さんの好きな方へ置いてくれる事、店や別莊の立派な事などを並べ立てた。

「御歸り下さい」と母は三度言つた。

「まあどうか其那に仰有らんと能く考へて見て下はれ」

恁う言つて男は煙管を腰に差した。

「山里は冬ぞ淋しさまさりける……」と歌留多の聲が一段賑やかに聞えた。

「もう歸るだらう」

恁う思つて睦子は臺所から座敷へ出る押戸を押さうとすると其處に萬龜子か兩袖で顔を隱

しながら立つて居た。
「あら吃驚したわ」と睦子は小聲に言つた。萬龜子は顏を眞紅にして笑ひを耐へて居た。
「どうしたの？」
「あの禿さんの頭を御覽なさい、箆荷麥の様に底が空いてゐるのに一本つゝ綺麗に櫛を入れてるんですもの」
「聞えるわよ」と睦子は制して「話を聞いて居たの？」
「えゝ、みんな聞いたわ、姉さんのお嫁貰ひの話だつたら後で一同と一緒に萬歳を言つてやらうと思つたら當が外れたわ」
「まあ暢氣だわねえ」と睦子は呆れて「どんなに思つて？」
「誰が行くもんですか、お母さんを酷い目に會はしたお父様の許へなんか、死んでも行きやしないわ、姉さんは什麼？」
「私だつて厭だわ、だけれどもね……」と躊躇つて「お母さんが彼處へ行るなら私達だつて行かなきやならないわ」
「其りや厭ですわ、でもお母さんは厭だと仰有るわ、屹度」
「私も爾思ふけれども……でもお父さんも可哀さうだしね、私達だつてお父さんの顏が見たいぢやないの？」
「私見たくないわ」
「貴方は幼さい時だから忘れたんでせう」
「でも厭だわ」
「厭だと言つても仕方がないとなると什麼して？」
「姉さんは何故そんなに心配するの？」
「心配ぢやないの？」と姉は未が餘りに此の問題に無頓着なのに驚く様な眼をして言つた。
「行かないと決めれば可いぢやないの」と萬龜子は睥睨した眼をぱちくりさせて姉の神經質を詰る様に言つた。睦子は答へなかつた、而して自分の足元を見る様に首を低れた。
「戀すてふわが名はまだき立ちにけり……」と櫻井の朗らかな聲が聞えた。
「歌留多に行きませうよ、皆さんが待つてゝよ」と萬龜子は促む。
「えゝ、後で行くわ」と睦子は益々沈んで答へた。
「直ぐでなくちや厭よ」と萬龜子は刻み足に出て行つた。其の後姿を見やつて睦子は兩手を胸に當てた。
秃頭の男は何時の間にか去つたらしい、室の中は閑として音がない、と軈て底の深い溜息が聞えた。

一〇

妹の蝶子と共に牛乳ホールを出た森川克巳が戸塚の家へ着いたのは九時頃であつた。蝶子は此頃兄が酷く沈默になつたり、又急に燥浮ぎ出したり、夜中に家を飛び出して二時頃までランニングの稽古をしたり、大きな聲で突然笑ひ出したりするのを見て、小さい胸を痛めて居た。が、今日は馬鹿に機嫌が可い、昨夜警察の事件で留守だつたのでまんじりともしなかつたけれども、兄の活潑に語る顏を見ると眠氣も起らない。
彼女は室へ入るや否や着物を着換へて長襦袢一つになつて脱いだ着物を疊み始めた。
「寒いよ、蝶ちやん」と克巳は悠然した氣持で妹の眞紅な姿を見やつて言つた。
「寒くないわよ」と蝶子は後ろ向になつて蹲みながら言ふ。
克巳は默つて其の手元の動くのを見ながら貰めてやりたい様な、叱つてやりたい様な心持でいそ／＼して居た。と突然蝶子は爾う言つた。
「兄さん、お嫁さんを貰はない事？」
「うむ」と唸つたが克巳自身では其れが什麼い

ふ意味も解らなかつた、只暗夜に不意打を喰つた様な。
「今年で卒業でせう、だから今から決めて置かなきやならないつて衛言つた事よ」
「だ、だ、誰がそんな事を言つたんだ」
「誰でも」
「ばかな、嫁なんて、ばかな、兄さんはお嫁なんか要らないよ」
「いゝえ要るわよ」と蝶子は眞面目に言つて着物を疊み終り、次に帶に取掛つた。
「兄さんにはお嫁さんがあるぢやないか」
「何處に？」
「お前が兄さんのお嫁さんになるんだ」
「あら厭だ」蝶子は轉がる様に笑つたが急に嚴粛な態度で「兄弟はお嫁になれないぢやないの？」
「なる程お前は學者だ」と克巳は感服したらしく言つた。
「だからねえ兄さん」と蝶子は帶を疊んでしまひ長襦袢を脫いで銘仙の寢衣に着換へ簞笥を閉けながら「早くお決めなさいよ、早くね、早くないと困るつて」
「誰が困るんだ」
「小母さんが」
「小母さん？」と問ひ返した時蝶子は漸と凡てを片付けて火鉢の前に來た。而して冷たい手で兄の手を弄り始めた。
「小母さんて誰だ」
「睦子さんのお母さんよ」
「うむ」と克巳は再び妙に唸つた。
「早く決める方が可い、兄さんに其の氣がないか什麼か聞いて見てくれ、私が聞いては本當の事を言はないからつて……而して其の位の事に氣が付かない様では妹と言はれないつて私に衛言つた事よ」
「何だつて其那事を……餘計な」
「餘計な事ではないと私は思ふわ」と蝶子は大人らしく言つて吾ながら切口上なのに氣が付いて獨り笑つた。
「小母さんが何だつて其那事を言ふんだらう」
「睦子さんを貰つて貰ひたいんでせう」と蝶子は無造作に言ふ。
「睦子さん？」
「えゝ衛よ、私睦子さんが大好でせう、睦子さんも私を一番可愛がつて下さるでせう、其れでね、會日ね私睦子さんが私のお姉さんだと可いのにねえと言つたのよ、すると小母さんが何時でも姉さんにしてあげますよと言つたのよ」
「睦子……さん……か」と克巳は失望した様に言つた「僕は嫁なんか貰はない」
蝶子は急に不機嫌になつた兄の顔を見詰めた。

二

明るい電燈が八疊の間を照らして、鐵瓶の湯が煮る火鉢の前に兄妹二人が……一人は岩疊な岩の様な男、一人は蕾の様な少女……親しく語つて居る。
「どうして貰はないの？」と蝶子は抑える様に言つた。
「兄さんはね、學問をしなきやならないだらう、そんな……嫁の事なんか考へて居るべき場合ぢやないぢやないか、まだ／＼自分といふものが出來上つてからでなきや……」
「でもお嫁さんがあつてからでも勉强が出來るわ」
「不可」と克巳は叱る様に言つた。「兄さんは生涯獨身だ」
蝶子は默つて弄つて居た兄の手を放した。而して泣き出しさうな顔をして恐る／＼兄の顔を覗いた。其れが如何にも慘らしいので克巳は急に

に額を和らげた。

「兄さんは怒つてるんぢやないよ、可いかえ」

蝶子は微かに首肯いた、而して危く落ちさうになつた涙を怺へた。

「お嫁さんの話をしちや不可いの？」

「不可いといふ事もないけれどもね」

「睦子さんが私の姉さんになれるんだと思つて私喜んで居たんだけれども……駄目なの？」

「其れはねえ、蝶ちやん、もつと〳〵後になつてからでも可い話だよ、兎も角兄さんは學生だらう、學生の時には勉强さへすれば可いんだ、嫁の事なんか考へると勉强が出來なくなるだらう、すると兄さんは落第するだらう、爾だらう？」

「あゝ」と蝶子は合點したらしく又もや兄の手を弄り始めたが軈てとろりとした眼をして「私眠いからお先に眠るわ」

「あゝ可いとも」と克巳は身體を起して蒲團を敷いてやつた。蝶子は直ぐに床の中に藻繰り込んだ、而して嫣然して兄の方を向き何やら口の中で呟いて居た

克巳は火鉢を押しやつて机に向つた　其處には去年から讀みさしの米國史が開いた儘に我を待つて居る。彼は一二行讀み下した　アブラハム・リンコルンが主義のために戰つた一條は何時讀んでも血を湧かす處である。

と彼の眼は米國史を離れて障子の棧に移つた　其處には曾日櫻井が赤インキで「馬鹿野郞」と書いたのが其儘になつて居る。

「君は戀をしてるだらう」と櫻井が言つた。「そんなことはない」と僕が答へた。「譃を吐け」「譃は吐かん」此の口論の結果櫻井は僕を虛僞者だと言つた、そして馬鹿野郞と此處に書いた。

彼は今此の顚末を思ひ出した、而して彼は僅かに肩を搖つた

「全く櫻井の言つた通りかも知らん」

彼自らはこれが戀といふものだと意識はして居なかつた、彼は戀の何物たるを知らない、彼には此の女を我が所有にしようといふ考は無かつた、爾いふ事は學生として思ふまじき不純なものであると思つた。だが此の不純さは益熾しくなつた。

彼は人の話を聞き又小說を讀んだ、其等に依つて學んだ戀といふものは頗る清くして美しくて純で靈的で明るいものであつた、併し彼の今の心持は毫も清く美しく純で明るくない、彼の燃ゆる如き青春の血と肉と空想とは極めて不純で卑劣で性慾的で而して屈辱的なものであると彼は思つた。實際これが戀といふものなら戀は屈辱的なものだと彼は心に恥ぢた。彼は此の不純な心持に打勝たうとしてどれだけ苦しんだか知れない。彼は折り〳〵夜半に床を蹴つて外へ出る、或時は身體が氷の如く冷える迄運動場の土の上に坐る、或時は疲れて疲れて倒れるまで町中を走り廻る、而も彼は之が戀だとは信ずる事が出來なかつた。

「どうして俺は他人の樣に純潔になれないんだらう」

彼の苦みは只是であつた。是がために彼は努めて萬龜子に反抗して見た、萬龜子とは離れて睦子に親まうとも思つた、萬龜子の惡口も言ひ、喧嘩もした、併しそれは却つて自己を萬龜子の中に吹込む樣な結果になつた。

障子の落書を見詰めた彼は軈て再び米國史を開いた。彼ははつと驚いた。そこに萬龜子の貴麗な姿がある。瞳を定めると其れが段々に輪郭から崩れてリンコルンの姿となる。

「馬鹿ツ」と彼は自分を叱つて本を閉ぢた、而して眠れる妹を見やつた、妹はすや〳〵と美しく無邪氣な顏をして眠つて居る、枕に蒼く時に嫣然した其の笑顏その儘に眠つて居る。

「馬鹿ツ〳〵〳〵」と彼は又もや言つた。

三の靈

一

油谷家からの使を歸した後でお浪は二人の娘を火鉢の傍へ召んで一伍一什を話した。

「行かない事に決めてしまひませう」と萬龜子は明らかに言つた。

「爾いふ譯にはゆかないでせう」と睦子は思はしげに言つた。

「お前達の決心次第ですよ」と母が言ふ。

「ぢや行かない、其れで可いわ」

相談は立どころに纏まつた。假令什麼な事があつても親子三人水入らずで暮らさう。此の決心は室中を明るくした。二人の快活な顏を見てお浪も漸と安心した、そして口の中で「什麼な事があつても行かない」と繰返した。一二週間は夢の如く過ぎた。

「其れにしても」とお浪は一日不圖思つた、娘達を早く形附けなければならない、順から言ふと先づ睦子だが……。

彼女は睦子に相應しい學生達を順々に頭に描いた。男らしいのは森川で、賢くて熱情があるのは櫻井で、頑固で豪傑なのは橋本だ、先づ此の三人の中何れが善からう。何れも善い人で立派だが、此の中森川さんだけは什麼しても何方かの婿さんになつて貰ひたい。睦子にしろ萬龜子にしろ器量は人並であるし、學校も女學校を卒業したんだから人樣に嫁つて恥かしい事もない。だが御當人の心持は什麼だらう。森川さんは默つて居るから何だか見當が付かないが、多分睦子の方が御好きに違ひない。

お浪は恁う自分の考を辿つて更に森川の素振を彼れや是れやと對照して見た。

「着物が綻びたと言つては睦子に縫はせる、お腹が空いたと言つては睦子に茶漬をねだる、そして、睦子とは長い閑話をして居る、だが萬龜子とは毎も口論をなさる、滅多に一緒に歩く事もない、して見ると睦子の方が氣に入つて居るんだ、だが只お氣に入つてるだけで嫁に貰はうとまで進んで居ないかも知れない、沈默だけに本當に氣心が知れなくて困る、仕方がないから櫻井さんか橋本さんに賴んで森川さんの氣を探つて貰はうかしら、いや、あの人達も二人の何方かに氣があるんだとすれば餘計な事を賴んで大變に氣拙い事になるし……」

彼女ははたと當惑した。と店の方で大きな欠伸をする者がある。

「誰方？」と聲を掛けた。

「僕だよ、小母さん」と答へる聲は森川であつた。

「あら何時被來つたの？」

「先刻から來てる」

お浪は默つて障子の腰硝子から店を見やつた、森川の大きな背中が硝子一ぱいに塞がつて見える。

「お入りなさいな」

「うむ、此處で可い」

「娘達は今御湯へ行きましたから私一人なんですよ」

森川は答へなかつた、而して心の中でひやりとした。御湯へ行からが行くまいが娘達に用があつて來たのではあるまいしと彼は言ひたかつた、が其れは直ぐ腹の底で引戻された、實際の處は娘達に用があつて來たのに違ひないんだと腹の蟲が彼に言つたので。

彼は椅子に凭れて腕を拱みながら先づ官報を睇めた、敍位及び辭令といふ四號活字が讀める、其の次に誰かが嚙りかけて捨てた束髮パンの缺片を睇めた、次に茶を零した痕が奇妙な形で卓子の上を這つて居るのを睇めた。と、突

拍子もなく彼の頭に今日の用事が苦い心持で湧いて來た。其れは丁度試驗が近づいて來た時に能く感ずる不安の氣持である。

「どうしても言はう、今日こそは」と彼は口の中で言つた。悶えに悶えた此の苦みを一日も早く解決せずには居られなくなつた。

「何と言はう、萬龜さんに何と言はう」

彼は前夜から……否數箇月前から獨り復習して置いた言葉は極めて覺束なくなつて來た。

「貴方は僕を愛しますか」、恁う言ふのは新派の芝居じみて輕薄だ、僕の妻になるか……これも餘りに唐突だ

いつそこれは小母さんに言ふ方が可いかも知らん。

「小母さん、萬龜さんを僕の嫁にして下さい」

其れが可い／＼と彼は決心した、而して一生懸命に卓子の上を見詰め「小母さん」と聲を掛けた。

「え、？」とお浪が答へた。

「僕は麵ハンを食ひます」と彼は突然に言つた。

「壜の中にありますよ」とお浪は言つた。

「臆病者ッ／＼」と彼は自分を叱る樣に言つた、而して仕方なしに硝子壜の中から麵パンを取出した。

二

いや、むしや／＼麵パンを食ひながら森川は忌々しさに堪へなかつた　小母さんとは障子一重を隔てて居る、四邊に人もなし、絶好の機會を看す／＼逃がしてしまつたと彼は思つた。彼は再び言ひ掛ける勇氣もなくなつた。是だけでも胸は早鐘の如く響き頭が暈としたのである。

と此時表の方で笑聲と足音がした。硝子戸が開くと先づ萬龜子の姿が見えた、彼の眼には只眞白な首筋と柔かな喉を縊る樣に合せた萌黄色の半襟が見えただけである。

「其ら彼來つてよ、私勝つたわ」と萬龜子は言つた

「彼來い」と睦子はほつと湯上りに仄めいた顏をして嫣然し「あ、私負けたわ」と笑つた、而して二人はきやつ／＼騒ぎながら奥へ入つた

「お湯は好かつた事よ、御母さん、空いてるから行つて彼來い、今の中に」と睦子は言つた。

「爾かえ、ぢや行つて來ようかね」

「えい、私御留守をするわ」

「だけれども私何だか氣が進まないんだよ、又父家から手紙が來てね

「煩いね、あんなに斷つたのに」と萬龜子が言ふ。

「そんな事は氣にしないで御湯へ行つて彼來い」

「ぢや留守を頼むよ」

母は手拭と石鹼を持つて外へ出た。

克巳は恁らいふ平和な家族の狀態を見ると自分の父や母を懷ひ出す、そして自分も恁ういふ家族の人になりたいと思ふのであつた。

奥の室は各自に髮を直しかけてるので靜かであつた。

克巳は依然椅子に凭れたまゝ考へて居た。

「俺はまあ女に釣られてる樣なものだ、何といふ意氣地なしだらう、俺は女の尻を追廻すには未だ早い、學生だ、其れに俺は……」

自分を嘲る例の心がむら／＼と出た。彼は椅子を離れた、硝子戸を開けて外へ出ようとした、途端に萬龜子の聲がした。

「森川さん」

「何だい？」

「待つて彼居いよ、一緒に行くから

「何處へ？」

「私用事があつて御宅の近所まで行くのよ

「勝手に行け、俺の知つた事か

彼は恁う言つて外へ出た時、何とも言へぬ勝

利を感じた、豪い〳〵、能く言つた、其れでこそ學生だ、と誰かが賞めて居さうな氣がした。

運動場の前に小高い丘を負うた赤土の平地がある、其處に子供が大勢ゴム球で野球をやつて居た。彼等は森川の姿を見るや否や敬禮した、彼等の眼には森川ほどの英雄が無いのである、他の大學と試合をする時、森川の眞黑な顏の一喜一憂が幾萬人の早稻田黨を一喜一憂せしめるのである。今森川が來たのを見て彼等小英雄は更に血を湧かした、下駄を穿いてるものは下駄を脫いで素足になつた、羽織を着てゐるものは羽織を脫いだ、そして我こそ森川さんに賞められんと勵み出した。

「これだ」と克巳は豁然として胸に一種の響を感じた。「俺は今全國學生の模範にならなきやならんのだ、此の子供等は悉く俺を知つてる、俺を尊敬してる、俺を學ぶ、然るに俺なるものの狀は何だ、馬鹿ッ〳〵〳〵

彼は敢然とした勇氣が五體に湧き立つを覺えた、彼は微笑を以て此の子供等の眞摯な遊戲を眺めた。ものの十分間も經つて彼は其處を去つた、丘を上つて細い徑に差掛つた時彼は思はず立停まつた、今まで氣が付かなかつたが彼の十步前を萬龜子が步いて居る。

「はッ〳〵〳〵」と萬龜子は崩れる樣に笑つて「意地が惡いのねえ、待つてくれたつて可いぢやないの」

恁う言ふ無遠慮で大膽で無邪氣な萬龜子の態度は毎も克巳が堪らなく好きなのであつた、彼は默つて寧ろ歡びの眼を以て萬龜子を見やつた。

「一緒に行かなくつて？」

「うむ」

二人は並んだ。

三

二人は段々學校と遠ざかつた。學生の群の喊聲や子供等の聲や其等が次第に後になりゆくと戶塚の町の半ば都會じみた半ば田舍じみた町が眼前に展開する、此日は三月の如く暖かであつた、正月も末になれば何となく春の景色である、赤い郵便函の前で屑屋が二人暖かさうに日向に當りながら立話をして居た、其處の理髮床では亭主が小鳥籠を提げて戶を開けて出た、而して籠の小鳥に水をやりながら口笛を吹いて居る。

「私汗をかいたわ、隨分足が早いのね」と萬龜子はほつとした顏をして言つた。

克巳は此の横町を過ぎれば自分の宅だといふ事を考へて居たので急になる程と慌てて答へた。

萬龜子はくすつと笑つて克巳の茫然した顏を見やつた。

「何を考へて被居るの？」

「いや……なに」と克巳は又も慌てた。實は宅の前で萬龜子と別れねばならぬから例の事を今の中に言つてしまはなければ二度と機會があるまいと考へて居たのであつた。

「どうしても言へない」と彼は思つた。

「おや、お宅の前ぢやないの？」と萬龜子は言つた。

「備です」

「もつと步きませうよ、今日は御天氣が好いから」

克巳は直ぐに足を返した。二人は再び並んだ。二時の日射は町を美しく照らして其處らの子供や犬や鷄やが悉く日向に出て遊んで居た。萬龜子は能く語り能く笑つた。學校の先生の逸話や櫻井と橋本が蕎麥を九つ宛食べた事や、お洒落なお友達の事やテニスに負けて口惜しかつた事や、明るい輕い調子で思ひ出し〳〵言ひ續けた。中にも彼女は非常な姉自慢で姉ほ

ど美人で高尚で親切なものは天下に無いと思つて居るらしい、克巳は頗る長閑な心持で其れを聞いた、而も時々は萬龜子が何を言つてるのか解らない時もあつた。其れは他の事を考へた場合であつた。言はうか言ふまいか、馬鹿々々しい事だ、いや大切な事だ。

二人は何時の間にか池袋の方へ出た、而して何處へ行かうといふ事を語り合はずにずんずん落合の方へ引返した。一二度二人は通り過ぎる汽車や電車に嚇かされた。天はかいつきりと晴れて長い長い軌道の向うは微かに霞んで見える、太陽に照られる軌道や、崖や、停車場の橋や、崖の赤土や、其の上の家などは一様に輝いて、ずつと遠くの野面で鍬を振つてる人が動く度にぴかりぴかりと硝子の様に光るのであつた。

「一休みませうか」と萬龜子は堤の中程で言つた。

「うむ」

二人は堤を背後にして足を拋け出した。堤の上は閑靜である、二人の頭の上を汽車が通ると響く、喧噪おして段々に松風の様に薄らいで行く。足元の芝は暖かであつた、日は正面に二人を照らした。芝の中から薺草や菫花が緑の若芽を出して居る、土の崩れた處から蕗の薹が頭を擡け、名も知れぬ下萠が白と黄の葉を現はして居る。

二人の話は途絶れた。克巳は默つて次の言葉を待ちながら萬龜子を見やつた。萬龜子は恍惚と春の光に溶けゆく様な眼をして足元を見詰めて居た。赤に白斑の入つた草履の鼻緒が白い足袋に緩く當つて今にも脱げさうになつて居るのを萬龜子は兩足とも雛様の様に立てて居る、爪先が斜めに小さく微かに鼻緒の色が滲んで居る。

「言ふなら今の中だ」と彼は思つた、併し彼の胸は甚き喘が塞つて什麼する事も出來ない。

「私ね」と萬龜子は言つた。「私貴方に聞いて貰ひたい事があるのよ」

「どんな事？」と克巳は言つた。

「あのね、私、あのね」と萬龜子は言ひ澁つた。

四

萬龜子が言ひ澁つた時、克巳は何とも言へぬ歡喜を感じた

「或は僕と同じ事を考へてゐるのではあるまいか……いや、其れは餘りに僕が自惚過ぎる……併し萬一したら……」

彼の頭は歡喜の底に混亂した。

萬龜子は深い溜息を吐いた。日に醉うた故か彼女の兩頬は林檎の様に紅らんで美しく瞳は自らの情熱に溶けさうに見える。

今まで快活で雄辯であつた彼女は急に沈默になつた、而して自らの胸の鼓動を數ふるかの如く片手を胸に置き再び「私ね」と言つた。「私什麼しようかしら」

「何を」

克巳の肩に接着いた彼女の肩は激しく溜息と共に動いた。

「何か心配な事かえ」

「うゝん」と彼女は子供の様に鼻聲で言つて「可いわ、私言へないわ」

克巳は默つた。彼は「僕でも言ひたい事がある」と言はうとしたが、其れは口に出なかつた。

長い長い沈默が續いた、此の沈默の間に克巳は種々な事を考へた、其れは殆ど取止めのない離れ離れの妄想が走馬燈の如く出沒するのであつた。忽然として自分は萬龜子の良人となり忽然として蝶子が誰子の妹になり忽然として學校の教室で櫻井が講義をなし忽然として運動場が日比谷の公園になる。汽車が轟然として頭の上を過ぎた。彼は不圖妄想から覺めて萬龜子を見た。萬龜子は眼に充滿の涙を溜めて自分を見詰めて居た。

「萬龜さん」と彼は小聲で言つた、「行かう」
「えゝ」
「又遊びに來ようね」
「えゝ、毎日でも可いわ」
二人は立上つた。
「とう／＼機會を逸した」と彼は思つた。二人は眞直に路を急いだ。萬龜子は又もや快活になり雄辯になつた。
「送つて行かうか」と克巳は曲り角で言つた。
「いゝえ可いわ」
夕日が赫と町を明るくして高い丘の家々は燃える樣に明るく低い家々は靄と夕餉の煙に昏れ初めて軒並に灯が點り出した。萬龜子は兩方の袂を搖かして少し屈み腰に歩いて行く。克巳は凝と其れを見送つた。五六間過ぎた頃彼女は振返つて此方を見た、と又思ひ返して荷車や往來の人の姿に紛れたかと思ふと、向うのぱつと明るい店の灯に微かに其れらしい姿が動いて軈て全く見えずなつた。
「路が彎曲でなければもつと見えるのに」と克巳は思つた
克巳に別れた萬龜子は只管路を急いだ。彼女の胸は喜悦に滿ちて居る、今まで顏を見ると喧嘩ばかりして居た克巳と二人限で散歩したのが今日が初めてである。染々と語つた、染々と笑つた、而して染々と嬉しかつた。
「男らしい方だ、優しい方だ、無邪氣な方だ」
恁う思ふと何も彼も嬉しい、路行く人に言葉を掛けて思ふ樣笑つても見たい、跳んで踊つても見たい。
「明日もある、明後日もある、其の翌くる日も又其の翌くる日も……」
限りのない是からの月日が樂しい。彼女は例の如く荒々しく硝子戸を開けた。と見ると卓子の前に姉が茫然立つて居た。
「只今」と彼女は言つたが啻ならぬ姉の顏色を見て「どうしたの？」と問ひかけた。
「彼來つたのよ」と姉は小聲で奧の室を憚る樣に言つた。
「誰が？」
「御父さんが！」
「まあ！」

五

殆ど顏さへ知らぬ生みの父が來たと聞いて萬龜子は吃驚して姉の顏を見上げた。
「して什麼して？」
「お母さんを散々お叱りになつて……御母さんか泣いて被居るのよ」
「お母さんを苛めたんですつて？　馬鹿にしてるわ」と萬龜子はぴくりと眉を動かして言つた。
「萬龜が歸つたら二人共此處へ御出で」と聞知らぬ聲が奧で言つた。
「私行かないわ、其那處へ、誰が誰が、馬鹿にしてるわね」と萬龜子は聞えよがしに言つた。
「そんな事を言ふものぢやなくつてよ、七歳の時に別れた御父さんぢやありませんか」と睦子ははら／＼して言つた。
「來なければ來んでも可い、母親の躾が好いから親を親とも思はないんだね、立派に育て上げたもんだ」と父が吐き出す樣に言ふ。
「あれ、行かなきやお母さんが惡く言はれるからね」と睦子は宥める樣に言つて、萬龜子の肩を押しながら共に座敷へ入つた。座敷の襖の側に母が俯伏して泣いて居る、其れを見やりながら床の間の前に桐火鉢を抱へて苦りきつて居るのは父であらう。萬龜子の眼には、胡麻鹽頭と、色の黒い顏の長い眉の太い、そして眉と眉との間に深い八字の皺のある老人が見えた。
「お前は萬龜か」と父は火鉢にのし掛る樣な恰

好をしてつく〴〵と見詰めた。

「私はお前の親父だ、はゝゝ、お前達は親父を悪い奴だと思つてゐるだらう、お母さんの事だから散々悪口を言つたらうさ、はゝゝ、まあ可い、何でも可いさ、なあお睦お萬龜、大きくなつたね、何かえ、もう好きな男でも出來たかえ」

萬龜子はふいと顔を上げた、其の眼は輕蔑と憤怒に燃えて居る。彼女は唇をわな〳〵と慄はしたが、總て自ら制する様に言つた。

「久し振で御目に掛ります、私は萬龜でございます」

「好い女になつたなあ、お睦も却々別嬪だ、お前も別嬪だ、お睦は錦繪風でお前は當世流行の丸ぽちやてえ奴だね、書生さん達が張りに來るだらう」

「其れが久し振でお眼に掛つた御父さんの御挨拶でございますか」と萬龜子は屹となつて言つた。

「何だと、お多福！」と父の聲が鋭い。

萬龜子はわつと泣き出した。

「御母さん、之が私達の御父様なの？　私達のお父様が此那人なの？　あゝ私情ないわ」

「何を吐かしやがるんだい」と父は立ち上つた。

「御免なさい」と睦子は父の帯に縋り付いて言つた。「お父さん、御免なさい、萬龜さんが悪いんですから、ねえお父さん、十何年振りでお眼に掛つて厭な思ひをするのは私だつて厭です、お父さんだつてお厭でせう、お父さん、何故もつと優しいお父さんだと私達に思はして下さらないの？」

「うむ、お前は感心だ」と父は再び坐り直して

「此の家に人間らしいものはお睦ばかりだ」

「私は失禮します」と萬龜子は立つて去らうとした。

「待てツ」と父は怒鳴つた、而して急に呵々と笑つた。「俺が惡かつた、勘忍してくれ、爾だ、俺が商人だから上品な言葉を知らない、だが矢張お前達の親父だ、今日は私自身で迎ひに來たんだからな、どうか一緒に歸つてくれ、可いか」

「私は厭です」萬龜子は決然と言つた。

六

父は萬龜子の顔をじろりと見て眉根の皺を一層深く寄せた。

「なぜ厭だ」

「御父様に妾があるんでせう」

「爾だ」

「其れが死んだといふのは譃でせう」

「うむ、譃だ、死にやしない」

「では曾田の番頭さんが譃ばかり吐いて行つたのね、御父様が大病だの、妾が死んだのつて」

「そんな事は什麼でも可い、私は油谷の家のためにお前達を迎ひに來たんだ」

「いゝえお父さん、其れではお母さんや私達の立つ瀬がないぢやないの？　お母さんだつて隨分妾に苛められたんでせう、而して御父さんも御母さんや私達を追出したんでせう、十何年間お母さんが什麼に苦勞をしたか知れないんです、其れが私達が漸く大きくなつたからつて御父様の都合で三人を伴れて行かうといふのは酷いぢやないの？　御母さんの身にもなつて考へて下さい」

「だからお母さんが行きたくなければ來んでも可い、お前達二人だけでも可い」と父は煙管の雁首を掌に叩いた。睦子も萬龜子も呆れて顔を見合した。

「其れでは話にならないぢやないの？　御母さんを置いて私達ばかりが行けると思ひなさるんですか」

「だからお母さんが來たければ來るが可い」

「お母さんは行けません」

「何故だ

「妾が居ますから」
「解らん奴だな、妾が居ようが手掛が居ようがお浪は私の女房だ、戸籍上立派に私の妻となつて居る、お前達も私の娘だ」
「其れは違ひます、私達は妾の居る樣な家へは入りません、お母さんを此の上苦しませる事は出來ません」と萬龜子は一歩も退かじと顏を蒼白にして言つた。
「親の云ふ事を聽かないのか」
「親の言ふ事？」と萬龜子は繰返して「御父さん、貴方が私達の親だと思つて下さるんですか、私達だつてどんなに父親が欲しいか知れやしません、でも貴方は私の御父樣になつて下さらないぢやありませんか」
「親でないと言ふのか」
「御母さんの良人でない人は私達の親ではありませんわ」
「なぜ良人でないか」
「妾があるからです」
「學校へ行くと其んなに生意氣になるものか」と父は滿面に朱を注いで怒鳴つた。
「だから御父さん、妾を追出して下さい、私達が可愛いなら妾を追出して下さい、御母さんを可愛がつて下さい、本當の親らしい親になつて下さい」
「解らん〳〵解らん奴だな」と父は煙管を火鉢に叩いて吃る樣に急き込んだ。萬龜子は少しも怯びれずに父の前に膝行寄つた。
「お父さんこそ解らないのです、何故私達を伴れて被行らうとなさるんです」
「油谷家の相續をさせるためだ」
「では若し妾の腹から男の子が生れたら私達は要らないんでせう」
「何を？」
「いゝえ爾です」
國助はぐつと行塞つて劇しく鼻から息を吐いたが「其ればかりではない」と叫んだ。「お前達を幸福にしようと思ふんだ」
「幸福は御母さんと三人恁うして暮らして居る方が此れに越した幸福はありませんわ」
「財産が要らんといふのか」
「百萬圓の御金でもお母さんとは交換へる事は出來ませんわ」
萬龜子は凝と父の顏を見上げて涙をはら〳〵と零した。

七

睦子は氷の刃を渡る樣な心地で萬龜子が父に反對して居る論難を聽いて居た、而して今までほんの子供の樣に思つて居た妹が、自分の言へない樣な事まで臆面もなく言ひ放る大膽に驚くと共に其の言ふ所が條理正しく何處までも母のため姉のために爭ふ熱烈な愛情を感ぜずには居られなかつた。泣き伏した母は膝を正して顏を上げ驚異の眼を以て萬龜子を見詰めて居る。
妾を追出したら母も行かう私達二人も行かうといふ道理には何人も爭ふ餘地がない、併し國助には解らなかつた。富豪が妾の一人や二人を持つ位は世間一般の習慣であり又寧ろ富豪の矜持とすべきものである、其れを否認するのは學校上りの女だからでほんの小理窟に過ぎない、もう少し世間の事が解ると男が妾を持つのは無理がない位が解つて來るだらう、兎に角、娘の言ひ條は理窟一點張だから採用の價値がない。
國助は恁う思つて居る。是が父と娘との意見の合はない第一の理由である。國助は次に恁う思ふ。
「娘は絶對に父の命令に服さなければならないものだ」
だが萬龜子は恁う思ふ。

「母に對して愛がなく子に對して愛のないものは父でない」

國助は、此奴等を數百萬圓の相續人にしようといふのに何故喜ばないか、馬鹿な奴だ」と思ひ、萬龜子は黃金よりも愛の生活が貴いと思ひ、國助は戶籍上の親子を重んじ、萬龜子は精神的の親子を重んず、一は日本古來からの習慣だけに據り、一は其れよりもつと新らしい道德を楯に取る。二人の議論が融和すべき餘地が更に無い。

睦子は其れよりも亦別種な考迷うた、親でありながら子でありながら一緒に暮らす事も出來ず、仇敵の樣に睨み合ふといふのは何といふ情ない事だらう、此儘父の許へ行けば母は益苦勞をせねばならず私達とても泣きの淚で月日を送らねばならぬ、左りとて父を怒らして此處で親子の緣が愈明かに絕れたら、母は良人の無い人になり、私も萬龜さんも生涯父のない娘にならねばならぬ、妹は一本氣で道理の前には少しも讓歩せぬ、母は感情的で妾のために散々苛められた恨みがあるから是も亦融和の見込がない、併しこれには何か方法があるだらう、父と母の心を何等かで結ぶものがあるに違ひない、其れは何だらう、什麼すれば可いだらう。

睦子が恁う惑うて居る中に父と萬龜子との爭論が益激しくなつた。

「親不孝者め」と父は齒切して怒鳴つた。

「親不孝と言はれても仕樣がありませんわ、私は私達を捨てた貴方よりも、女手一つで私達を育てて下すつたお母さんが大切ですから」と萬龜子は昂然として言ふ。

「何を？　御多福、死ばつてしまへ」と父は立上つた。

「打たれませう、殺されませう」と萬龜子が言ふ間に父は母の頭をむづと摑んだ。

「手前が此那に仕込みやがつたんだ、さあ今日こそ本當に緣を切つてやらあ」

蠑螺の如き拳骨が宙に閃くと同時に裂帛の樣な睦子の聲が起つた。

「待つて頂戴！　御父さん！」

睦子の白く細い腕が父の腕に絡んだ。

「私が參ります、御父樣の處へ參ります」

恁う言つて彼女は父の胸に顏を當てて泣き出した。

「お前が行くか」と父は霎時あつてから言つた。

「えゝ、參りますわ」

「姉さん！」と萬龜子は姉の顏に我が顏を押付けて泣いた。「厭です〳〵、姉さん行つちや厭です」

八

父の態度はがらりつと變つた。

「よく解つてくれた、お前は本當に賢い子、さあ御坐り」と彼は睦子と萬龜子を坐らせた。

「姉さん行くの？」と萬龜子は姉の顏を覗く樣にして歔欷りあげた。

睦子は默つて首肯いた。

「厭だわ、姉さん、姉さんが厭な思ひをして暮らすのを私見て居られないわ、ねえ姉さん、三人一緒に今までの樣に面白く暮らしませうよ」

萬龜子は聲を擧げて泣いた。

「何を言つてるんだ」と國助は苦々しく言つた。

「萬龜ちやん」と姉は我が膝に泣き伏す妹の後れ毛を撫でてやりながら「御父樣が今氣が昂つて被居るから何も言つちや不可ません、何と言つても御父樣は御父樣ですからね、縱令御父樣に惡い事があるにしても私達は其れを騷ぎ立てては不可せんわ、靜かに〳〵ね、機を見て御父樣を御諫め申してね、妾や何かを出してしまつて御母樣を元々通りに御父樣の御側へ上げる樣にしなけりや不可せんわ、其れをするには

私達より他ありませんもの、ねえ萬龜ちやん！可くつて？　私の言ふ事が解つて？　幾ら理窟を言つた處で絶らうとしても絶られない親子の間柄ぢやありませんか」

「だつて姉さんが偏思つても御父さんが改心なさらなきや無駄ですもの、姉さんだつてこれから什麼な辛い思ひをするか知れないぢやありませんか」

「爾那事を言ふものぢやありません、これが私達の勤です」と姉は弟を勵まして言つた。

母のお浪はもう生體なく泣崩れて居る。

「何も言ふ事はない」と國助は投げる様に言つた。「お睦が行くといふにお前達が水を差すに當らないぢやないか」

「でも姉さんは……」と萬龜子は泣き腫らした眼を父の方へ向けて「私のたつた一人の姉さんですもの、そんな厭な處へ……」

「默つて被居いね」と睦子は袖を惹いた。

「では本當に行くんだね」と父は念を押す。

「はい」

「後で文句はないね」

「はい」

「これから何でも私の指圖通りにするんだよ」

「はい」

「私が決めた養子があるが、其れも異存がないな」

「はい」と睦子は我が決心を猶も勵ます様に一段決然した聲で言つたが顔はたゞ理石の如く蒼白めて脣がぶる／＼と慄へた。

「姉さんが、そんな見ず知らずの養子を取るの？」と萬龜子は言つた。

「えい」

「厭な人だつたら什麼して？」

「萬龜ちやん」と睦子は萬龜子の肩に額を當て「私死んだ積りで行くんだから、何にも厭な事はないわ

「でも其りや餘りだわ」

「もう何にも言はないで、もう何にも／＼」と睦子は二言三言續けたが妹の肩から額が離れると同時にばたりと疊に倒れた。

「姉さん／＼」と萬龜子は狂氣の樣に叫んだ」

「大丈夫よ、大丈夫よ」

恁う言つて睦子は立上つた、よろ／＼と二足三足、踏みしめようとしては又蹌踉と障子の棧を頼りに次の室へ去つた。お浪も萬龜子も直ぐ後に從いた。睦子は店へ降りた、卓子に手を突いて頭をぐたりと低れたが、靜かに椅子に腰を下して母の持つて來た洋盃の水を一口に嚥み干して、「大丈夫よ」と再び言つて母に嫣笑して見せ「御安心なさいね、もう快くなつたから」

母は柱に縋り付いて背後を向けた。

九

「ぢや直き迎に來るからな」

恁う言つて父が歸つた時睦子は其の後姿を見送ると同時にぐら／＼と眼が眩んだ。一時間の後彼女は奥の室に寢かされて氷嚢を頭に載せられて居る自分に氣が付いた。

「氣が付いてよ」と萬龜子が嬉しさうに言つた時、母の心配さうな眼が自分を見詰めて居るのを見た、で彼女は嫣然して見せた。

「あゝ嬉しい」と萬龜子は言つた。

「おゝ能くまあ氣が付いてくれたね」と母はもう涙脆く頻りに眼を瞬いて居る。

「もつと眠たいわ」と彼女は言つた。

「ぢや彼方へ行かうか」と母が言ふ。

「私だけ添いてるわ」と萬龜子が言ふ　其の中に睦子は再び昏々と眠つた。

此の事を聞いて傑の學生達が森川、櫻井、橋本を首として皆な集まつた、或者は醫者へ走り或者は氷を貰ひに行つた。克巳の妹の蝶子も來た、而して枕元を離れず看護した。人々の厚

意氣しからす其の曉方から熱が次第に冷めて來た。睦子は極めて大きな火の輪が環の如く旋轉しては中から崩れ、崩れては又擴がり、直ぐに手毬ほどに小さくなり、又緑や青や紫や黃金色の無數の輪となつて搖き廻る、而して其れがぱつと消えたかと思ふと直ぐに現はれ、同じ事を幾度も繰返してる中に色が段々水淺黃となつて涼しい風が音立てて吹くと思ふ途端に眠から覺めた。

「あゝ綺麗だ」と彼女は暫時恍惚した。

「夢を見たの？」と萬龜子が言ふ。

「えゝ、綺麗な夢よ」

是で大丈夫だと人々は思つた。彼女は初めて人々に手數を掛けた事や人々の親切を感じた、而して其の夜は努めて母や妹や蝶子を枕元に集めて快活に話した。

「皆なで陽氣に遊んで頂戴」と彼女は言つた。

「歌留多をやらう」と學生達が言ふ。

「えい、私次の室で聞いて居ますから」

一同は直ぐ歌留多を始めた。斯ういふ事は睦子の病氣には宜しくないといふ事をお濱は知つて居た、而し睦子は陽氣に賑やかにして貰はなければ猶苦しくて堪らないのであつた。

間がな隙がな聞いて來るのは昨日の問題である。父と母の仲直りをさせるには什麼しても自分が犠牲にならなければならない、犠牲！犠牲！と彼女は幾度となく口の中で言つた、而して父のため！母のため！と又繰返した。彼女は犠牲といふ美しい文字や親孝行といふ美しい言葉をもつと／＼美しく見做して自分の苦しさを忘れる樣に努めた、丁度出征軍人を見送る人々は、國家のためだぞ、君のためだぞ」と言つて勵ます樣に、彼女自身に向つて「これは立派な事だ」と賞め稱へ、而して苦みを忘れようとした。

併し恁う思つて居る矢先に、殆ど不意に胸を刺す樣に暗い／＼影法師が襲うて來る、母に笑顏を向けてる中に堪らない程の悲哀が骨を削る樣に迫つて來る

「他の事は何でも辛抱するけれども是ばかりが何とかならないものかしらん」

是ばかりといふは我戀である、克己に對する愛である。

「行つてしまへばもう其れきりだ、二度とは御目に掛れない、生涯を厭な養子に捧げればならない」

男には事業があらう、名譽があらう、戰ひがあらう、女の生命とする處は只戀である、美しい犠牲も可し親孝行もしたいは山々だが、何年間思ひを焦して居た男に胸の中を打明ける事も出來ずこれきり暗の中に朽ち果てるのかと思ふと泣かずには居られない。

「我袖は汐干に見えぬ沖の石の……」と櫻井が朗らかに讀んだ。

「よい來た」

「人こそ知らね乾く間もなし……」

「全く厭だ」と睦子は枕に頭を當てた儘身動きもせずに聞いて居た。

一〇

今までは何とも思はずに暗記した百人首の歌は什麼いふ譯か今日に限つてしみ／＼と身に沁み込むやう。

春の夜の夢ばかりなる手枕に空しき思ひを泣いた人もある、人知れず思ひ初めしに浮名ばかりが先出つを恨んだ人もある、底知れぬ淵に比ふ戀もあれば、相見ぬ昔の方が氣樂であつたと喞つ人もある、數多き歌人の數多き歌にはあれども、睦子が今の苦しさに寄るものは一つもないと彼女は思つた。

「一生埋にされ[illegible]」と彼女は胸の中で言つた。厭だ、厭だ、而も身體を土に埋めて

首ばかりを外に出して世間を見て居ねばならぬのだ。

　睦子は泫然として涙を垂れた。

「あら什麼かしたの？」と萬龜子が言ふ。

「いゝえ、何でもないのよ」

　蒲團に顔を埋めて凝と怺へてる中に彼女は又しても發熱がして來た、而してうと〳〵と眠つた。

　萬龜子は歌留多を蝶子に讓つて枕元に付き添うた、而して竊と姉の頭に氷嚢を載せて寢呼吸を窺つた。たつた一日の病氣だけで頰の肉がげつそり減つて蒼白めた顏に生氣がない。

「此那になるまで辛い思ひを怺へて御父さんの許へ被行るといふのは何と云ふ慘酷な事だらう」と萬龜子は今更の如く父が恨めしくなつた。

「姉さんは何よりも私とお母さんに別れるのが辛いんだ、其りや私だつたら迚も辛抱が出來ない事なんだもの、こんな善い姉さんやお母さんに別れたら死んでしまふかも知れない、何故姉さんが御父さんの許へ行かなくちやならないんだらう、斷れば可いのに、本當に斷れば可いのに」

　萬龜子が恁う考へ込みながら姉の顏をつくづくと見戍つて居た。と微かに極めて微かに歔欷泣きの樣な聲が聞える。次で烈しい溜息が二度ばかり出た。と又寂寞に復る。

「悲しい夢を見て居るんだわ」と萬龜子は思ふ途端に睦子の脣が微かに動いて、

「克巳さん、私辛いわ」と睦子は言つた。

　萬龜子は吃驚して次の室を見やつた、而して姉の口元へ我が耳を寄せた。

「仕方がないんですもの……ねえ克巳さん……私の心が解つてくれて？……私の口からは言へないんですもの……御免なさいね……御別れにたつた一度ね、貴方の御返事が聞きたいんです……いゝえ聞かない方が可いわ、若しも私が御厭だつたら私はもう……あゝ私厭です〳〵、御父さん私行くのは厭です、私死にます、……あゝ死にます、お母さんと萬龜子さんを可愛がつてねえ、御父さん……ねえ、ね、ね」

　烈しい歔欷泣きが始まつて眠つた眼から涙が滲み出た。萬龜子は脊筋に氷の棒を突込まれた樣な氣がした。

「あゝ姉さんが克巳さんを！」

　如何なる驚愕も是ほどの事がない、我が生命を掛けて未來の良人と定めた男は姉の戀人であつたのだ。父の前で立派に言ひ切りながら直ぐ卒倒したのも是がためであつたのだ。

「姉さんが克巳さんを！」と彼女は再び繰返した。

　突然姉は聲を出して泣いた、而して眼を開いた

「あゝ私夢を見て居たわ、何か言はなくつて？」

「いゝえ、姉さん」と萬龜子は言つた。

「あゝ爾？」

「よつく御眠みなさいね」

「魘はれたら起して頂戴ね」

「えゝ」

　姉は又もや睡入つた。

二

　萬龜子の心は千々に亂れた。

「姉さんは死ぬかも知れない」

　彼女は突然恁う思つた時、慄然と身を顫はした。戀人に別れて厭な男の妻になる位なら死ぬ方が可い、私だつたら矢張死ぬだらう。

「姉さんはお父さんとお母さんの仲を結び付けるために行くのだ、それが濟むと自殺する決心なのだ

　萬龜子は凝と姉の寢顏を見詰めて呼吸も吐かずに考を辿つた。

「爾だ、確かに爾だ、姉さんが死んだら私什麼しよう、死なくたつて姉さんを暗い處へ追ひやつて私が其の戀人と夫婦になるなんて事は出來やしない、あゝ什麼しよう、姉さんは何故早く私に打明けてくれなかつたのだらう、私でなければ克巳さんだけにでも言へば可かつたのに」

彼女は强ひて自分の心を靜めよう靜めようと努めたが、咄嗟の驚愕に氣を顚倒された彼女は最早續れ來る種々な感情や理性や空想を制する事が出來なかつた。睦子はすや／＼と快い眠りに入つた。眞直な鼻筋、切目の長い眼、小さな脣、何處から見ても優しい姉である、美しい姉である、幼稚園から小學校、それから女學校と順送りに通つて居る間に、學校の支度やら復習やらお琴やら生花やら、着物の事やら、髮を結ぶお化粧をする、足袋や襦袢の洗濯まで骨身を厭はずに可愛がつてくれた姉である。

其の姉が今身に餘る悲哀を包んで父の許へ死にに行く。

一どうしても助けて上げなければならない一と彼女は漸と考を決めた、扨て助けるには什麼したら可いか、二人の中一人が行かなければならないものとすれば、而して姉さんを行かしめないとすれば、歸する處は自分が行かねばならぬ。

「爾だ、私が行かなきやならん……でも」

考へに考へ拔いた結果は、今まで遠くの火事だと見て居た事が切實に我が上に落ちて來たのであつた。

「私が行くとすると……私が……」

徑路は全然姉と同一である、姉は戀を捨てて死にに行く、自分も矢張戀を捨てて死にに行くのだ。而も其の戀人は同じ人なのだ。一人が生きれば一人が死なねばならず、一人が明るくなれば一人が暗くなる。

「あゝ／＼」と彼女は袂の尖を嚙んで泣いた。

他所の親達は自分を犧牲にしても我子を幸福にしようとする、家の御父さんは娘を犧牲にして自分勝手の事をなさる。

これが他人であつたなら、競爭しても戀人を取らう、だが世界中の誰よりも親切で優しい姉の戀人を私が什麼して取られよう、取られないとすれば私が父の許へ行く方が可い。

一爾だ、行く方が可い一

恁う言ふ下から彼女の腹の蟲が再び頭を擡げる。「でも私は克巳さんは思ひきれない」

歌留多が止んで人々が散つた。

「左樣なら」と蝶子は暇を告げに來た。

「大分快い樣だね」と克巳は立ちながら睦子の顏を覗いた。

睦子はぱつちりと眼を開いた、而して克巳に向つて嫣然した。此時萬龜子は何となしに赫と顏が熱した、而して不安と嫉妬に胸が躍つた。

「左樣なら、大事にしたまへよ」

恁う言つて克巳と蝶子は去つた。出る時に克巳は萬龜子の方をちらと見た、而して何とか萬龜子から愛想の好い言葉が出るだらうと豫期せらるゝものの如く躊躇して居た。其れを萬龜子は早くも感じて居たが、扨て何にも言はなかつた。

と、一瞬間にして萬龜子は直ぐ正氣に復つた。

「あゝ私本當に厭な根性だわ、これが嫉妬といふものかしら、此事から私姉さんを憎む樣になつちや大變だわ」と彼女は心の中で言つた。

二

睦子の氣分が捗々しからぬながらも床を出る位になつた。父の許からは數々催促が來る、今一日々々と延び／＼になつて居たのが到頭其の日が迫つて來た。萬斛の愁を懷くとは知る由も

なく、學生達は睹子が舊藩家の父の許へ行き實業家の養子を迎ふるといふだけでも大盃を擧げて祝さねばならぬと思つた。
「送別會をやらう」と一人が言ふと悉く其れに贊成した。婦人の事だから普通的な宴飲は不可い、茶話會にして皆なで聖誕祭の樣な餘興をやる樣にしようといふ睹子の提案は異議がなかつた。喜ぶべき事なら此方から願つても祝つて貰はう、死にに行くに何の祝があらうと睹子は腹で泣いた。斷つたが許されない。彼女は恁う思ひ返した。祝の送別會を私は葬式だと思ひませう、而してしみ〴〵と皆さんの親切を心に刻んで行きませう。
一日萬龜子は森川に恁う言つた。
「克巳さん、散歩に行かなくつて？」
「うむ、行かう」
「朝から晩まで疲れて動けなくなるまで歩くのよ」
「可からう」
二人は家を出た。此の日は風が少し出て寒かつた、併し萬龜子は少しも怯まなかつた、彼女は例によつて能く語り能く笑つた。二人は曾日歩いた路を辿つた。線路を左に何處までも行く、果しなく歩き續ける。だが克巳は折り〳〵萬龜子が深い沈默に入るのを見た。
「君は什麼かしてるね」
「いゝえ、私詩を考へてゐるのよ、詩は可いものね」と彼女は言つた、而して聲を限りに唄つた。
「打明けるのは此時だ」と克巳は又しても思つた、然し萬龜子は殆ど其の暇を與へなかつた、彼女は間斷なしに饒舌つた、唄つた、走つたり跳つたり、溝を跳び越えたり、鷄を追うたりした。
「全で子供だ」と克巳は思つた、そして「此頃君と僕とは喧嘩しなくなつたね」と言つた。
「喧嘩してる方が可かつたわ」と彼女はしみじみと言つた。
「何故だ」
「都の西北・・・と彼女は克巳の問に答へずに唄つた、二人は曾日の土手に腰を下した。
「何にも言はずに一時間恁うして居ませう」と萬龜子は言つた。
で克巳も其の通りにした。天に雲が遊んで居た、其の中を太陽が潜りつ入りつした。其の度毎に向ふの田圃が順々に明るくなつたり暗くなつたりする。田圃の外れは森、森の中から煙がゆら〳〵と立騰ると軈て薄霞に溶けて遙かの村を掠して行く、田圃と森の間に一簇の聚落がある、其處を出入する犬や馬や荷車に夕日にはつと燃えて見えたり又鼠色に見えたりした。折り〳〵通る汽車の外は音といふ音は全く絶えて、日に照らゝ、枯芝の上は黄い〳〵と輝き出しさうに暖かい。二人の沈默は長く續いた。時には何方かが規則を破りたさうにしたが直ぐ思ひ返して默つてしまふ。一時間は過ぎた。二人はもつと〳〵長い沈默で居たい樣な氣がしたと萬龜子は又もや美しい聲で唄ひ出した。

心にながく捨てはてし
面影またも浮ぶかな
きみがことばの中にして
身にしみたりしものや何
我を戀ふとな君・・・

（有明氏譯ハイネの詩）

此處まで唄つた時彼女ははたと口を噤んた。而して「さあ行きませう」と言つた。何といふ好い聲で又何といふ情調だらうと克巳は思つた。彼は家へ歸つたが其の聲はいつまでもいつまでも耳に殘つて居た。

一三

其の日は朝から雨が降つて夕方になると一層

烈しくなつた。家根や軒を打つ雨音は恰らに溪流の如く響く、四時になると室の中は暗くなつた。電燈が點くまで間があるので世話方の人達は蠟燭に火を點して準備に掛つた。恁ういふ事に掛けては櫻井が一番器用であつた。蝶子は手も顏も赤インキや墨だらけにして種々なものを書いた。先づ大きな紙に「睦子さん送別會場」と櫻井が筆を揮つて座敷の入口に貼つた。其れから判じものや縮さがしや其れは蝶子の手に成つた。一番喝采を博したのは櫻井の意匠で「睦子孃一代記」と題する繪であつた。先づ母の出産の光景から書いて幼稚園通からミルクホールの應對係から一轉して富豪の令夫人になり、夜會服でダンスをやり、自動車に乘つて顚覆りかへり、遂に赤兒を生んで振出しの母の出産と同じ光景に立復る、途中の種々な形が遊つても人間の一生は歸する處は同じ圏内を廻るものだといふ哲學的の考案だといふので、櫻井自身が得意になつて說明した。

　雨戸を二枚外して其の上に載せて床を造る、毛布を敷き火鉢や鐵瓶湯呑と恰らに寄席の高座が出來た。天井に五色の切紙や南京玉の紐が設された、恁ういふ子供じみた趣向に隔く、一同の氣に入つた。

車軸を流す樣に降り注ぐ雨を冒して十二三人の人々が集まつた頃に電燈が點つた、蠟燭の灯は懷かしいといふので燃え盡きるまで消さずに置いた。活人畫で蝶子は正行になり櫻井が正成になつた。蝶子の下膨れの可愛らしい顏は如何にも上品で氣高く見えた。櫻井の正成は紙袋で作つた烏帽子が頭に合はないので幾度も滑つて落ちたので大喝采であつた。蝶子と睦子と萬龜子との三曲合奏もあつた　藝なしの橋本は一同に强ひられて澁々ながら四つん這になつて片足を擧げた、自ら註して三本足の馬だといふ。一同は腹を抱へて笑つた。

　夜が進むに伴れて雨は止んだ、暖かい春の夜、人々の賑ひで室は明るさを加へた。睦子は人々の厚意を感謝した。身を切る樣に辛い思ひを怺へて父の許へ行く、辛さは人の知る處でない、彼女は心で泣いて笑顏で人々の親切に報いた。

　賑やかな笑聲と話聲を現に聞きながら庭を見やると、雨後の月は洗はれた鏡の樣に、庭の竹叢や檜葉や手水鉢や板塀や凡ての濡れ色を照らして居る。

「明日から此の月を何處で見るであらう、恁ういふ嬉しい人々の會合はもう二度と見る事は出來ない」

　彼女は折り／＼克巳の方を見やつた、而して一生見忘れない樣に記憶のどん底に刻んで置きたいと思つた。克巳は人々と共に能く語り能く笑つて居た。あの方は私が恁那に辛い思ひをして居るのが解らないのかしらと思ふと餘りに情なくなつてつい淚が催して來る。

「いつそ別れ際に思ひのたけを打明けようか」と胸を轟かす。「いや其れは却つて思ひを增すばかりだ」と思ひ返す。千々に亂れた心を怺へれば怺へるだけ胸が迫つて呼吸苦しくなる。此時彼女は萬龜子の顏を見た。萬龜子は每もに似ず沈み勝であつた。人よりも大きな聲で騷ぎ、饒舌り笑ひはするものの什麼かすると默つて急に泣き出しさうな顏になるのであつた。

「こんな面白い事をして遊ぶ事が出來なくなるわね」と睦子は妹の手を取つてしみ〴〵と言つた。

「えい、本當に僻よ」と萬龜子は姉の手を堅く堅く握りしめて「姉さん、私を忘れないで頂戴ね」

「忘れるなんて事はありやしないわ、だけれども男と異つて女の姉妹は何かにつけて自分の思ひ通りにならないからね」と睦子は言つた。

「でも私……姉さんのためなら私どんな事でもするわ、生命を捨てたつて構はないわ」と萬龜子は涙ぐんで月を見上げた。

手水鉢の傍の竹の葉から雨の雫がぽたり／＼と落ちる、其れが金剛石の様に、紅や、紫や青の美しい光を雫す。睦子は其れを見るとなく見ぬともなく言つた。

「私たつてお母さんと萬龜ちやんのためなら何時でも死ぬわ」

二人の手は又も確乎と握られた。

一四

餘興が進むにつれて人々は熱した、謙遜して居た者も今は平氣で隠し藝をやる様になつた。終りは萬龜子が姉を送るための自作の歌詩を獨吟する事になつて居る。

今は感興絶頂に達して居る。橋本は二度目の藝として大きな聲で體操の號令をやつたので一同拍手喝采した。

「萬龜さんの獨吟だ」と櫻井は言つた。

「眞打、早く出ろ」と人々は叫んだ。

「萬龜子さん／＼」と蝶子が呼んだ。

「太夫身支度の間暫く待たせ置かれませう」と櫻井は曲馬の口上で言つた。だが萬龜子は出て來ない。

「どうしたんだらう」

「何處へ行つたんだらう」

「萬龜さん／＼」

母も蝶子も睦子も櫻井も克巳も家中を呼び廻つた。姿が見えない。とお浪は火鉢の猫板の上に一通の手紙があるのを認めた。

「母上様、萬龜子」と表に書いてある。お浪は急いで封を切つた、而して讀みゆく中に、彼女の顔色は蒼白になつた。

「どうして？」と睦子が言ふ。

母は默つて睦子に手紙を渡し、人々に向つて

「萬龜は急に用事が出來て親類へ參りましたから、皆さんよろしく」と挨拶した。

歡樂の終は哀傷であつた。人々は氣の抜けた様な顔をして散々になつた。母の言葉で森川兄妹と櫻井と橋本だけが殘つた。人々の去つた後の室は亂雑なものであつた、襖は取外されたまゝで座蒲團が散らばつて火鉢は煙草の吸口だらけで、土瓶や茶碗や菓子袋の死骸が淋しげに枕を並べて居る。高座に點した蠟燭だけがいやに明るくぢい／＼音たてて涙を垂れて居る。

お浪は萬龜子の手紙を睦子にもう一度讀む様に言つた。何事かと森川其他の人々は胸を騒がした。

睦子は聲を顫はして讀んだ。

「お母さん姉さん、私は昨夜此の手紙を書きかけましたが心が亂れて書けませんでしたから今再び書き出しました。此の手紙は森川さんにも櫻井さんにも橋本さんにも見せて上げて下さい。

お母さん！　私は御父さんの許へ參ります、何故參りますかといふに私はお金が欲しくなつたからです、此那ミルクホールの様な慘めな貧乏暮らしが厭になつたからです、お父様は何百萬圓といふ財産があつて、其れを譲つて下さると聞いた時私は眼が眩む程羨ましくなりました。姉さんが其那立派な身分におなりなさるのに私は詰らない一生を送るかと思へば情なくなります。私は思ふ存分贅澤な生活がして見たいんですもの、姉さんを出し抜いて出世しようといふのは人の道でないかも知れませんが、姉さんとてお父さんの許へ行くのは氣が進んで被居らない程ですから私が代りに參ります。

虚榮の女だと御笑になつても仕方がありません、實際私は虚榮の女です、今

夜姉さんの送別會に皆さんが御集まりになるでせうが、私は其れを私の送別だと思つて居ます、お母さんと姉さんに海山の御恩を受け又皆さんに一方ならぬ御親切を頂戴した御禮は此に書き盡せません。どうぞ我儘な私を憫れみ下さい、

私は虚榮の女です。

私の望みを叶へさせようといふ御慈悲が御ありなさるなら何卒此事に就て故障を仰有らないで下さい、安らかに御父さんの相續人にさして下さい、養子はどんな人でも構ひません、私は人と夫婦になるのでありません、お金と夫婦になるのですから。

御母さん初め皆さんの幸福を祈ります。姉さんどうぞ本當に貴方の思ふ樣に暮らして下さいね、貴方の幸福と私の幸福とは異ひますからね。左樣なら皆さん……左樣なら……左樣なら　萬龜子―

一五

手紙を讀み終つた睦子は只眼を瞠つたばかりで呼吸が吐けなかつた。

「まあ呆れた子だね」とお浪は言つた。

「虚榮の女だ、驚いた、實に驚いた」と橋本は唸つた。

「係うなつて見ると此儘にして萬龜さんの望みを叶へさせるより途がありませんな」と櫻井は言つた、而して克巳の顏を見やつて「森川君、君は？」

「どうでも可い」と克巳は投げるやうに言つたが「お先に失敬」と帽子を取つて外へ出た。

「小母さんも姉さんもお淋しいから私此家へ宿るわ」と蝶子は言つた。

元より睦子は心から厭な事であり、其れに萬龜子が拔駈をする程父の許へ行きたいなら其れに越した事は無いと母は思つた　彼女は寧ろ二人の姉妹が望み通りになつた事を喜んだ。獨り櫻井は首を傾げた。平素から推してもそんなに虚榮の女ではない、其れが今掌を返した樣に行つたといふは合點がゆかぬ、女といふものは飾る事が巧だから平素の行爲を見たばかりでは、眞相が解らないものだと思つた　睦子と雖も萬龜子の此の手紙以外に別な意味があらうとは什麼して想像し得よう、若し妹が克巳に戀をして居るのだと知つて居たら、妹の脫走には辛い涙があるのだと[illegible]し得ようが、二人の心を知らない睦子は、此の手紙にある通り妹は只贅澤な生活がしたさの餘りに此の擧に出でたのだと思ふより他はない、爾思ひつゝ、彼女は妹の前途を氣遣つた。

「心にもない厭な養子を取つて一生何の慰安もなく暮らしてゆく心細さを何故考へなかつたらう、私に相談してくれゝば私は何が何でも妹の不幸になる事だから制めるのだつたけれども、其れも是れほどまで財産が欲しいなら制めやうもない」

係う思つて彼女は我が身の如く深く〲悲しんだ。

蝶子には他の人達の樣に深い想像もなければ判斷もなかつた、が彼女は只不快であつた。お金が欲しいからと言つて動いて行つた女の心狀を卑しいと思ひ、其れに比べると姉さんの方が遙かに人格が高いと思つた。

淋しい思ひを懷いて櫻井と橋本はホールを出た

「虚榮の女か」と橋本は腹立たしさうに呟いた「芝居や小說にある樣な女が世間に幾らもあるもんだね」

「女には何が一番大切なんだか、解らなくなつて來た」と櫻井は歎息して　僕は今夜は眠られ

ん」
「なぜだ」
「森川が氣の毒で堪らん」
「森川？　うむ……だか女を戀するなんて愚な事だ」
「爾は不可よ、失戀ほど心苦しいものはないよ、生涯それが心の傷になるんだから」
「併し森川は失戀のために荒むなんて、其那へナチョコ野郎でないよ」
「ヘナチョコでなくても苦しむよ」
「森川はそんな男でない」
「君と森川とは異ふよ、實に氣の毒だ」
「俺は氣の毒とは思はん、下らん事だ、戀？　戀なんて馬鹿々々しい、畠の肥料にもならん戀だらう」
「そんな事を言はずに親身になつて相談してくれよ」
「俺に戀の相談をしたつて駄目だよ」
「兎も角も運動場を一巡しよう。」
「可からう」

一六

二人は運動場に入つた。雨後の月は隈なく晴れて家々の屋根は硝子の様に光つて居る、向うの目白臺は夾霧に鎖されて白濛々の中に窓々の火が處々抹されて消れる。

「處でね、此處に一つの問題は」と櫻井は帽子を前のめりに被り直しながら言ふ「君は氣が付くまいが睦さんが森川に戀をしてるよ」
「大戀の話か、驚いたね」
「驚かなくても可いよ、兎も角も聞け」
「うむ、兎も角も聞くよ」
「睦さんが戀をしてる、其れは可なり突進んだ戀だ」
「おい、突進んだ戀だの、退却した戀だのつてそんなに種々あるのか」
「まあ聞けよ」
「うむ」
　若し森川が萬龜さんを諦めて睦さんを愛する事が出來れば是ほど喜ばしい事はないのだ」
「つまり補缺だね、戀の補缺かね、野球と同じ事だ」
「困るな、野球の話をしてるんぢやないよ」
「あゝ爾か、戀の話のつもりだつたね、處で什麼した」
「其れだけの事だよ、睦さんと結婚が出來れば可いのだ」
「譯のない事だよ、出來るツ」
「出來ると思ふかね」
「うむ、大丈夫出來る」
「どうして君は然う思ふか」
「男と女だ、夫婦になれないといふ法があるものか」
「君とは話が出來ん、迚も駄目だ」
「駄目なのは僻つて居る、無理に諦し込む君が惡いのだ」
　櫻井は焦れたさうに帽子を脱いで一振二振振つた。と橋本は選手腰掛の方を見て櫻井の袖を引いた。
「彼處に居るのは森川ぢやないか」
「うむ、森川だ」
　いかにも腰掛に腰を落して腕を拱んだまゝ茫然と考へて居るのは森川であつた。彼は睦子が讀んだ手紙を聞いた時兩耳ががんと固まつて、頭が石になつたかと思つた。萬龜子は金が欲しさに養子を迎へる！　そんな事が夢にだに想ひ得べき事であらうか、殆ど八年の間、自分が中學に通ひ彼女が小學に通つて居た時から兄妹の様に互に喧嘩しながらも心の中では親んで居た。たつた二度の散歩！　其れでも互の心と心は既に良人よ妻よと許したのである。縱令此の早稻田の運動場が一面の海となつて目白

に波が泡立つ時があるにしても、萬龜子の無邪氣な純潔な心情が黄金の爲に汚れようとは想像し得ない。

青年は未來のために生きて居る者である、克巳の未來には功名あり富貴もあり而して美しく賢い妻が微笑して立つて居たのである。其れが一瞬にして……闇だ、一朝、ほんの一瞬の中に消え去つた。純なものは不純となり清いものは泥塗れになり、夢が現になり了つた。彼には未來がなくなつた。あるものは只穢れた屈辱と誰に洩らす事も出來ない[illegible]劣たる苦悶ばかりである。

「どうしても〳〵信じられん」と彼は夢を辿る樣に獨りで言つた、「萬龜さんが去つた、萬龜さんが俺を捨てた、そんな事はあるべき筈がない、だが其れが事實なのだ、事實である以上は什麼するか、俺は什麼すれば可いんだ、と云ふ其れだ、俺は什麼すれば可いんだ」

彼の心は[illegible]名狀しがたい混雜さを以て滿ち[illegible]冷しつゝした。

「どうした」と櫻井は彼を驚かすまいと靜かに言つた

「俺は什麼なる……克巳」で、櫻井の肩を摑んで言つた、「櫻井、俺は死ねば可いのか生きて居れば可いのか敎へてくれ、おい櫻井、其れを敎へてくれ、死ねと言つてくれ、死ねと言つてくれ、死ねと……死ねと……言つてくれ」

「苦しからうな」と櫻井は友の頭を我が胸に抱き寄せて涙をほろ〳〵と零した。

一七

初戀と煩悶は人間の必ず遭逢しなければならぬ關門である。[illegible]に行くものは明るく美しく[illegible]と過ぎるが、[illegible]と生命を失ふ。克巳は今[illegible]の境に立つた。實際彼は此の際如何に自分を扱つて行くべきか、解らなくなつたのである。

「どうすれば可いのだ、死か生か敎へて呉れ」

櫻井は慰めやうがなかつた。之が普通の遊蕩兒であるなら「諦めろ」とも言へよう、諦めることの出來る樣な輕浮な戀は誰でもやる馬丁もやる不良少年もやる。ただ眞實を以て生きて居る純な森川克巳の戀はそんなものでないと彼は知つて居る。彼は答へる術がなかつた。

「[illegible]しろ、[illegible]ッ」と橋本は怒鳴つた、「見つともないぞ、何を泣くのだ、たかが女一匹の事でないか、櫻井、貴樣も何だ、泣いたのかな[illegible]かし[illegible]ッ」

「何が[illegible]だ」と櫻井は怒つた「[illegible]ぢやないか、世界中に女がないぢやなし、さ、[illegible]しくば俺が今直ぐにも伴れて來てやる、[illegible]だの愛だのハイカラになるから弱蟲になるんだ」と橋本は洋杖で[illegible]を叩いた

「貴樣には解らんよ」と櫻井が言ふ。

「解つてるよ、貴樣達は色情狂だ」

「何だ馬鹿」

「貴樣こそ馬鹿だ」

「おい橋本」と櫻井は涙に塞つた聲で言つた「貴樣は親友一人が情ひきれない苦みに悶えて居るを見て同情がないか」

「親友だから言ふのだ」と橋本は叫んだ。「おい森川！ 貴樣はいつ其那だらしのない人間になつた、おい、貴樣は俺の[illegible]が見えんのか、橋本[illegible]道郎だ、俺は平素貴樣を兄貴と呼んで居た、實際學問から言つても知識から言つても人格から言つても貴樣は俺の兄だ、[illegible]は[illegible]中の[illegible]にも[illegible]れない、[illegible]に[illegible]た、俺は何處へ行つても[illegible]の自慢にする[illegible]た。[illegible]森川克巳といふ[illegible]と[illegible]

いふ、失戀？ そんな言葉は武士道の盛な昔の日本には無かつたぞ、女郎に振られて首を縊つたのは昔の素町人ばかりだ。失戀といへば立派な事の様に思つてるんだらう、俺は其れが癪に障る、男てえ奴はな、女がなくたつて生きて行けるんだ。可いか、女に振られて泣面を掻いてるのが男の名譽か、男は男に惚れられゝば可いんだ。女なんて下等な動物に惚れられたつて寧ろ恥辱だ。恥知らずめ、ババ馬鹿野郎」

「橋本、靜かにものを言へ」と櫻井は窘める様に言つた。「貴樣は其那事を言つても解らないが、男だつて女だつて愛情に違ひなからう、什麼だ」

「其れや違ひない」

「男が男を愛すれば、友になるんだ、我々三人の様になるんだ、生命を捨てる氣にもなるんだ、貴樣は森川のために生命を捨てる氣にはなれんか」

「なる、なる、大いになる、そんな事は貴樣に訊かれんでも解つてる」

「爾だらう、爾だ、其れは貴樣と森川が親友だからだ、男同士が惚れ合つてるからだ」

「然り、大いに然り」

「だが男と女と愛すれば其れは何だ」

「親友だ、女だつて親友だ」

「爾だ、其の通りだ、だが其の場合には名稱が違つてくる、即ち親友一名夫婦といふものだ」

「然り、大いに然り」

「然らば男女の愛は友を求むる自然の情だ、親友を求むるのだ、男の親友もあれば女の親友もある、其れを貴樣は否認するか、否認すれば貴樣と森川も親友でなくなる道理だ」

「うむ」と橋本は行塞つて唸つたが「其れなら許してやる、だが親友といふ奴は振つたり振られたりしないぞ」

「考へて見ろ、野球の選手は皆な親友だ、其の中の一人が寢返りを打つて敵方に從いたら貴樣口惜しくないか」

「其りや口惜しいよ、俺は其那奴は撲り殺してやる」

「口惜しいだらう、爾だ、森川が萬龜さんに逃げられたのは親友が裏切したと同じだ、親友を失つた悲しみだ、之を稱して失戀といふのだ」

「爾か、解つた」と橋本は躍り上つて叫んだ。「可し可し、大いに可し、失戀！ 可し、森川、失戀に泣けッ、大いに泣け、口惜しからう、俺も泣いてやる」

落椿

一

十年の苦勞を一夜に仕盡すものは失戀の第一夜である。森川の前には希望がなく光がなくなつた。死に似たる冷たい黒い幕が其の五體を裹んで犇々と迫るのは只自らを嘲る心と自らを憫れむ心と混淆した取止めのない屈辱を感ずる心である。

早く我戀を打明けなかつたのが惡かつた。打明けさへしたら必ず彼女は父の許へ行かなかつたであらう。

いや、其れは同じ事だ。打明けても彼女は逃げるだらう、彼女と俺とは口でこそ約束を結ばないが心で旣に互の愛を語つたのだ。其れに逃げたといふのは彼女は黄金に眼が眩んだのだ、彼女の望む處は只其れであつた。

逃げるものを追ふ様な未練がましい心は更にない。虛榮の女を妻とした處が早晩必ず逃げて行くものとすれば一日も早く解つたのがせめてもの幸福である。然るに其れが什麼して恁う腹が立つだらう。女に未練がないのに腹が立つ

べき理由がない、たゞ矢張腹が立つ。

森川は自らを叱り自らを責め自らを罵つた、而して此の屈辱を一日も早く忘れたいと努めた。凡そ彼の眼に觸るゝあらゆるものは悉く自分を嘲るかの如くに見ゆる、同級の學友、往來の人、櫻井や橋本、妹の蝶子までが何となく打解け難いものに見ゆる。彼等が同情めいた言葉を吐く時には猶更自らを敗殘者扱にするかの如く思はれる。

彼は五六日――或はもつと多くの間――一室に籠つて一切外出をしなかつた。机の前の障子を見詰めて一日を暮らした事もある、飯も不味い、話す事も厭だ、笑ふ事は更に厭だ。

獨り氣を揉んだのは、妹の蝶子であつた。頃日は兄さんの機嫌が惡い、何を言つても返事をせぬ、什麼いふ事情かは知らないが、終夜坐つて物思ひに沈んだり、湯にも入らず外へも出ぬのを見ては、小さき胸を痛めずには居られない。

「兄さん、什麼なすつて？」と彼女は一日恁う訊ねた。

「什麼もしない」と克巳は言つた。

「だつて今日は御飯も食らないぢやないの」

「うむ」

「學校へも被行らないぢやないの」

「うむ」

「私にだつて一遍ものを言つて下さらないぢやないの」

恁う言つた時蝶子は悲しくなつて眼を袂で蔽うた。

「何を泣くか、馬鹿」と克巳は叱つた。

「だつて私淋しいんですもの、學校から歸つても詰らないわ」

克巳は默つて、妹の顏へた頭を見詰めた。二つに分けた眞中の髮の地肌が、美しく白く見える、其の上にリボンの蝶々が動いて居る。

「ぢや、ねえ兄さん、今までの樣になつて下すつて？」

「うむ」

「御飯を食べて？」

「うむ、大いに食ふよ、今日はお前と遊ばう」

蝶子は嬉しさうに涙を拭いた、而して久し振で提琴の絃を出して彈き且つ歌つた。

「兄さんはもうお厭？」と暫時あつて蝶子は言つた。「何か別な事をしませうか」

「うむ」

克巳は又た撞球盤を出して彈き始めた、二三回、勝負があつた後く言つた。

「兄さんはもうお厭になつたでせう、外に何かしませうか」

彼女はまぢ／＼と兄の顏を眺めた。

「蝶ちやん」と彼は何か考へてゐたが全く別の調子で言つた。

蝶子は答へなかつた、而して默つて裏口へ出た。裏口の小屋の中で爺やの茂平が唐臼を搗いて居た。

「何を泣いてるだね」と爺やは足を停めて言つた。蝶子は默つて居る。

「兄樣が什麼してるかね」と茂平は唐臼を降りて蝶子の顏を覗き「矢張何かね、學校へも被行かずに鬱ぎ込んで被居るだかね」

「えゝ」と蝶子は心配さうに爺やの顏を見上げた

「可し／＼」と爺は舌打して「俺あ異見してやるべえ」

「駄目よ、爺や」と蝶子は言つた。

「駄目ちふ事は無えだ」と茂平は前を掃つて久首を傾げた。

二

茂平が何事か考へ込んでゐる中に蝶子は默つて外へ出た。

「何ちふ事だ」と茂平は呟いた、而して積莚の上に腰を落して、零時煙草を喫かした。丈夫でも最早や六十の坂を越して居る。頭の髑天は禿げて湯氣の様にぼや〳〵と疎らな髪が立つて居る。勞働と苦勞に寠れた老の皺は深く顔に刻まれ、古びた皮膚の色さへ凋落の近づくを示して居る。

「一イ、ウ、ミイ……」と彼は骨太な指を折つて數へ始めた。彼は今克巳と蝶子の年を數へたのである。彼が克巳の父に助けられて佐渡の鑛山に賣られて行く危急から逃れ得たのは彼の十六歳の時であつた、其れから此に五十年、一生を恩人の奉公に捧げて忘れ形見の兄妹までも引取つたものの、米搗や、粉挽、百姓仕事だけでは迚も二人を養育する事が出來なかつた。

克巳の父は豪農として有名なものであつたが晩年親類のために欺かれて自分の知らぬ負債を背負ひ込み到頭恢復の時なくして死んでしまつた。彼の死際には薄情な親戚や知人は一人も見舞に來なかつた。彼は下男の茂平を枕元に呼び、二人の子を指さしたまゝ眼を瞑つた。

「安心さつしやい、お二人は茂平が引受けますだ」

彼は恁う恩人の屍に向つて言つた。遺産としては僅かに一段歩の田地と保險金が二千圓ある許りである。茂平は決して一文も是に手を付けまいと誓つた、彼は朝の黎明から日暮るゝまで働いた、而して兄妹二人には一切生活向の事を言はなかつた。

「お金は幾らもあるから、うんと學問さつしやい」と彼は毎も言つた。だが老いたる彼の力には限りがある。女學校や大學校へ二人を通はせるには什麼しても年々遺産を喰ひ込まざるを得なかつた、保險金の二千圓は空しくなつた、一段歩の田地も抵當に入れざるを得なくなつた。

「坊ちやんが大學を卒業さへすれば一文無しになつても構はない」

彼は恁う覺悟を決めた。然るに此頃の坊ちやんの態度は違つて來た。蝶子の心配と彼の心配とは同じものである。

茂平が緣先へ出た時に克巳は茫然机に凭れて額を腕の間に埋めて居た。

「坊ちやん」と茂平は緣に上り込んで行儀正しく坐つた

「何だ、爺や」と克巳は澁々に言つた。

「坊ちやんは頃日學校へ行きませんね」

「うむ」

「何だつて行かねえだね」

「休みだよ」と克巳は煩さゝうに言つた。

「いんにや、休みぢやねえだ」と茂平は障子をから」と向けて「不孝な其那嘘を吐くだかね、坊ちやん、學校は休みぢやねえ、櫻井さんと橋本さんも皆な毎日行つて被居えた、其れにお前さんは何故に休みなさる、俺は御父様に申譯が無えだ、なあ坊ちやん、俺はお前様が竹馬に乘つてた時からお前様をお預かり申したゞ、そんな嘘吐きの怠け者にしようと思つて育てやしねえんだ、今坊ちやんが途中からソレ出した日にや取返しの付かねえ事になるだ、たつた一人の御孃様をどうする積りだね」

「爺や」と克巳は苦々しげに言つた。「僕の事に構つてくれるな」

「いんにや、構はずにや居られねえ」

「休みたい時には休むんだ、彼方へ行け」

「いんにや、行かねえ」と茂平は膝行寄つて涙をはら〳〵と零し「坊ちやん、明日から食ふ米が無くなるちふにお前様はよくも〳〵其那々々」

と言ひ掛けて聲を呑んで泣いた。

「米が無くなる？　金は幾らでもあるだらう」

「もう何にもない、それも今二月や三月は什麼ともなる、お前様の卒業までは爺やが土を嚙つても饑じい思ひをさせやしねえが、それから後

は……―

―金はないのか―

―なんにもねえだ

恁う言つて茂平は一家の事情を初めて打明けた。

三

聞く事毎に克巳は驚いた。十餘年間の茂平が忠義！ 其日々々の苦しき生活、而して今まで其れとも知らずに暢氣に遊び暮らし無駄遣をして來た事、次で蝶子の今後の處置！

―凡てが俺の責任だ―と彼は突然叫んだ。僞だ、凡てが俺の責任だ、俺は愚圖々々して居るべき場合でない、若し今期を落第すればもう二度と學校へは行けなくなる、妹を養ふ事が出來なくなる、勞働者の群に入らなければならなくなる、而して森川の一家は遂に再興の機會がなくなる。

―恁うして居られない―と彼は言つた。

―有難え、氣が付いて下されば俺は死んでも構やしれえだ―と茂平は嬉し涙に泣いた。

―勉強すると、爺や、僕は屹度お前に安心させるよ、なあに學校を卒業さへすればね、お前と蝶ちやんと二人位は引受けられるからね」

「親類の人達を見返してやつておくんなさい」と茂平は老の眼を輝かした。

茂平は去つた。軈て皺嗄れた聲で田舍唄を唄ふ聲と唐臼の落つる音が聞えた。

「あゝ――お前一人かよう連れ來ないかよう――」

克巳は汯然と涙を垂れた。俺達二人を人間にしようと思つて生涯を抛つた爺やの心に對しこの俺は奮發しなきやならん。戀は何だ、女は何だ、笹子は何だ、俺には妹がある、爺やがある。二人を餓死せしめたら俺は男でないのだ。

當然として谷を出でて廣い青田を見渡したやう、彼の責任觀念は彼の濃霧を驅逐して得知れぬ勇氣と輝かしい光が彼の胸に溢れた。

―俺は今まで什麼したんだらう―

彼は明け放した障子から軒に迫る青天を見やつた。此時蝶子が靜かに憚る樣に入つて來た。

「蝶ちやん、安心してくれ、兄さんは勉強するぞ―

蝶子は疑ふ樣に兄の顏を眺めた。

―兄さんは惡い夢を見て居たのだよ、遊ばう、久し振で遊ばう、大いに愉快に暮らさう―

半信半疑の蝶子の眼は固定した樣に動かずなつたが、次第々々に光を帶びると到頭涙が一杯に湛つた。

―嬉しいわ―と彼女は兄の胸に抱き付いた、而して霎時離れなかつた。

「さあ遊びに行から」と克巳は言つた。

―えゝ行きませう、睦子姉さん處へ行かなくつて？ 姉さんが心配してるから―

「うむ、何處へでも行かう」

二人は互に微笑して家を出た。久し振で牛乳ホールの店へ行くと櫻井と橋本は碁を圍んで居た。

「おい、什麼した」と櫻井は心配さうに言つた。

―なあに惡夢だつたよ」と克巳は快然として言つた。

―豪いツ―と橋本は叫んだ。

其處へ睦子が歸つて來た。彼女は克巳の顏を見て刷と耳を染めたが靜かに會釋して奥へ入つた。

―只今！―

―あら、もう歸つて來たのかえ、什麼してり？」とお濱が言ふ。―御婚禮に行かなかつたのかえ―

―いゝえね、お母さん」と睦子は力なく火鉢の前に坐り髮を搔き上げながら 私行かなきや可かつたと思ふわ―

「什麼して？」

「萬龜子さんはね、此儘歸つてくれつて言ふんですもの、御手傳ひ旁ね、お前の一生の御祝儀だから見て行きたいと言つたらね、姉さんに居られると困る事があるからと僞言ふのよ、お母さんにも來て貰ひたくないつて其儘奧へ入つて了つたのよ」

「呆れた子だねえ、御父樣の許だし其れにお金持になつたからつて高慢になつたんだよ、屹度、そんな處へはもう二度と行かない方が可い」と母は半ば宥める樣に半ば腹立たしく言つた。

「いくら姉妹でもお嫁になるともう他人になつてしまふのね」と睦子はほろりとして袖を嚙んだ。

四

克巳は默つて店を出た。櫻井と蝶子が呼びとめたが聞えなかつた。

「今日が結婚日！」

一天拭ふが如く晴れ渡つた克巳の胸に又しても黑暗々たる雲が湧き出した。妹と茂平に對する責任から反抗的に燃え出した光は脆くも挫けて、

「今日は彼女が確實に他人の所有となるのだ」

といふ考が幾度も〳〵、縄の如く彼の心を刺す。

どんな顏をして白粉を塗り髮を結ひ婚禮服に着替へて居るだらう、元より我が想は知る由もなからうが、脊澤を盡した小座敷で周圍の笑聲軟語に取卷かれて皆やかな美しさを矜るは今ぞと例の嫣然な顏に少し含羞を帶びて居るであらう。丁稚小僧其他出入の人々は驚異の眼を以て彼女の美しさを讃美して居るであらう、而して彼の良人たるべき男は得意滿面に祝賀の人々の羨望の的となつて居るであらう。時計の針は何の遠慮もなく進む、一生に一度の——終生忘るべからざる式が今現に日比谷の大神宮で行はれつゝあるのだ、此の一時間が彼女を人の妻といふ肩書の下に奪ひ去る、同時に俺は敗殘者の名簿に登錄されるのだ。もう來ない、二度と來ない、彼女の處女時代は永久に去る、而して俺の希望も永久に消えるのだ。

克巳は只眞直に步いた、自分が何處を什麼して步いたか解らなかつた。雨は名殘なく晴れて何時の間にか町並に灯が點つて居た。一二度彼は知人に逢つた、併し彼は挨拶もしなかつた、只眞直に步き續ける。二月の風は寒かつた、彼は外套の襟を立てたまゝ兩手を衣匣に突き入れた。

不圖氣が着くと彼は何時か街道を步いて居た。一週間前に萬龜子と共に散步した野路が眼前に展開する。

「あゝ是は什麼した事だらう」と彼は呟いた、而して矢張足を停めなかつた。野路は段々暮れて來た。月の出には未だ早い、向ふの森に灯がちら〳〵見え初めて、暗がりの中を無提灯で行く荷馬車は突然と彼を驚かしたり又背後から通り過ぎたりした。

「此處を二人で步いた時には萬龜さんは嫣然して呼吸を弾ませながらもう少し緩くり步きませうと言つたつけ」と彼は思つた。

「馬鹿ツ、今更其那事を思うて妹や爺やを什麼する」と彼は自分を罵つた。彼は堤を下りて軌道に添うて步いた。鼻から先は眞暗である、併し彼の眼には極めて鮮かな彼女の姿が現はれた。自分の前になつて行く彼女の後姿！ 房やかな髮、少し橫を向くと柔かに美しい耳朶といゝふつさりとした頸顋の毛、子供らしく華々と生えた頸の生毛、其れから針を刺したら血が五六尺も迸りさうに豐かに薄紅の頰、上品な如何にも女らしい鼻、紅い脣、其等が一つ一つに判然と浮んで來る。

「髮針が動ともすると落ちさうになるを俺が

背後から近づいて刺してやると其の度毎に魅入る様な咬る様な眼を以て俺に威嚇したつけ」

「馬鹿ッ〳〵」と彼は再び自分を叱つた、

森川！　貴様よりも黄金を重しとする女を思うて什麼するのだ、

　とつぷり日が暮れると其處此處の闇々から靄が立ち始めた、初めは遠くで模糊と白んだが何時の間にか擴がつて森も屋根も靄の海の中に巻き込まれてしまふと白さが次第々々に濃くなつて足元まで覺束なくなつた。汽車の線路……兩側の崖に介まつた一筋も見えなくなつた。線路の遙か向うにシグナルの赤い灯が茫と黄ばんだ光を投げて居る、光は風に吹かるゝ靄のために時に明るく時に暗く又突忽として赤と黄の圏を二重にも三重にも靄に描くのであつた。

　彼は何處までも歩いた。と軈て月が出た。

　彼は黙つて堤に腰を下した、恐ろしい寒い、耳と両足が凍えさうに寒い、併し彼の頭は熱して居た。彼は月に明るさを増した靄を見やりながら凝と考へた。

「二人が思を語るべくして語らなかつたのは此處だ、何故俺は語らなかつた、あの時高亀さんの肩と俺の肩とは相觸れて女の神經は鼓動と共に通うて居たのだ、其れを俺は……」

　彼は繰返し〳〵當時を思ひ續けた、而して又自分を罵つた、彼の頭は錨の如く重くなつた、重い底に種々な悲哀や不平や後悔や屈辱が渦巻いて居た。ものの一時間も彼は其處を動かなかつた。

　汽笛の聲を聞いたと思つて彼は立上つた、而して又もや歩いた。背後から一二度又もや汽笛が鳴つた、彼の耳には確かに聞えた、が彼は其れを聞流してしまつた。靄は彼の足元を包んで恰ら雲を踏む様――

　あの時は暖かかつた、夕日の色が美しかつた――

　突然轟然たる音が彼の耳元に聞えた。彼ははつと思つた、途端に彼の身體は空に煽られた。汽車は消魂しい笛を鳴らして停まつた。

五

　半死半生の克巳の身體は鐵道員の手に依て附近の醫者の許へ運ばれた、報知に接した蝶子は茂平と共に驅け附けた、睦子も櫻井も橋本も來た、是が若し汽車に轢かれたのであつたら無論即座に死んだであらう、併し克巳はほんの轢れ遊びに過ぎなかつた、外套の一部と腰の一部か何處かに打たれて、突風のために跳ね飛ばされた時に崖に脚と腦とを打つた、左脚は骨膜に達する傷を負うた。後頭部は二ヶ所の疵口から血が流れて草を染めた

「餘程の重傷ですから」と醫師は手當をしながら心配さうに言つた。

「助かりませんの？」と蝶子は蒼白になつて訊ねた。

「助からない事はありませんが」と醫師は全然死んだ様に横はつて居る克巳の呼吸に氣を配つて言つた。

「助からない事があるもんか、屹度助かるよ、ドクトル君、爾だらう、助かるだらう」と橋本は脅迫する様に言つた。

「さあ、何しろ重傷ですからな」

「重傷だから助かるまいといふのだよ、爾だ、大丈夫助かるぞ」と橋本は負けずに言ふ。

　睦子は殆ど顔色が無かつた、彼女は卒と櫻井の肩に縋つて身を支へた、櫻井は九分通りは恢復の見込がないと思つた、彼は自分の責任や恐怖を感ずるよりも第一に考へたのは蝶子と睦子の事であつた。女だから卒倒しはしまいか、病氣を引起しはしまいか、彼は只其れが心配であつた、で橋本が事々しく屹度助かるぞと言ふのを聞いて縱令其れが一時の慰

慰めに過ぎないと思ひつゝも能く言つてくれたと心の中で感謝した。茂平は何にも言はずに默つて首を低れて居たが、
「御先祖樣が護つて下さるだ」
　恁う言つて口の中で何やら唱へた。
　だが櫻井が心配したに拘らず蝶子の態度は案外に靜かであつた。彼女は兄の呼吸を聞き又顏色を見詰めてる中に什麽しても兄は死ぬとは思へなくなつて來た。
「私達が生きて居るのに兄さんばかりが死ぬべき筈がない」
　恁う言つた風の極めて漠然たる考ではあるが、此儘に永い別れとなるには餘りに人生が無意味で慘酷である樣な氣がしたのである。殆ど一時間餘りも五人は沈默した、而して各自に種々な空想に驅られた。
「痛いとか苦しいとか何とか一言でも仰有つて下されば可い」と睦子は思つてた。只前後も知らずに眠るだけでは實に心細い。
　橋本の奔走に依つて、有名な醫學博士達も來た。負傷は左程でもないが腦震盪は甚だ氣遣はしいと言ふ意見は何れも一致した、而して明日までの模樣を見て病院に移すや否やを決しようといふことになつた。留守が心配だからというので人々は強ひて茂平を歸宅せしめた。四人は枕元に坐つて此の生死を判たぬ人を看護した。稀に克巳が深い呼吸をした、又は唸る樣な聲を出した。其の度毎に人々は何となく頼母しい思ひをして互に顏を見合はすのであつた。夜明方になつて克巳の唸りが段々多くなつた、而して口の中で何やら呟く樣になつた。
「占めたッ」と橋本は言つた「もう大丈夫だ」
　恁う言つて彼は克巳の耳に口を寄せた。
「森川！　森川！」
「うむ」といふ極めて微かな聲が聞えた。
「俺だ、橋本だよ、解つたか、蝶子さんも睦子さんも櫻井も此處に居るぞ」
　克巳は手を動かして探る樣にしたが、其れはほんの指先だけで、高く擧ぐる事は出來なかつた。
「兄さん、私よ、蝶子よ」と蝶子は言つた、而して兄の手を握つた。握られた兄の手には確かに握り返す力があつた。
「あゝ助かつた」と蝶子は初めて涙を零した。
「睦子姉さん、握つて見て頂戴！」
　睦子は直ぐに蝶子に代つた、靜かに握ると微かに握り返す、指の温味より生の力が呼吸をして我が手に何事かを與ふる樣に思はれた。其れは恰度「俺は生きてるぞ」と言ふかの樣。睦子は何時までも手を離さなかつた。

六

　翌日克巳の身體が擔架に載せられて大學病院に運ばれた。櫻井と橋本は擔架に從いた。
「大丈夫だね」と橋本は歩きながら言つた。
「さあ、癒るには癒るとしても腦をやられたんぢや變な事になりはせんかね」
「癡呆になると言ふのかえ」
「うむ、其れがさ……」
「何を言つてるんだ、森川に限つて其那事はないよ」恁う言つたものの橋本は知識上の事に就ては平素櫻井に一目を置いて居るので「癡呆になつても助かりさへすれば可いよ、俺達は飽までも保護してやるんだ、爾だらう、癡呆な兄を有つて生れたと思へば可いだらう」
「僕等は其れで可いが、蝶ちやんと睦子さんがね」
「うむ、それや困るな。うむ、成程、それは實に困るな」
　二人は染々と語つた。櫻井は殆ど常人の考へる事が出來ぬ將來の將來まで考へて居た。縱令ば克巳が死んだ場合には是れ〳〵の方を取

らう、癡呆になつた場合は恁うく、只足だけが不具になつた場合には恁うく、此の學期試驗は恁うして、病氣が長びけば恁うするといふ風に其の順序が極めて精密に確乎たるものであつた。橋本は一々驚歎と感謝を以て聞いた。

「萬止むを得なかつたら君は蝶ちやんの世話をしろよ、僕は森川を引取つて睦子さんと夫婦にしてやる」

「癡呆になつたら夫婦になれないぢやないか」

「癡呆になつても狂氣になつても睦子さんなら屹度喜んで森川に生涯を捧げるよ」

「うむ」と櫻井は首肯いて「併し其れは慘酷だ」と呟いた。

二人の後になり前になり擔架は默々として歩いて行く。

病院へ移つてから克巳の容態は少しく險惡になつて來た。

「痛いくく」と彼は續けさまに叫んだ、而して床の上を悶搔き廻つた。

蝶子と睦子は[illegible]を捉らた。

「可しくく」と、蝶子は小兒を扱ふ様に優しく言つた。「痛さが[illegible]ればもう占めたものだ」

眠つたかと思へば覺め、覺めたかと思へばにく譫言を續ける。體温や脈搏や呼吸は些も一定しなかつた。其夜から二人づつが交代に看護する事にした、だが睦子だけは決して傍を離れなかつた。

「長引くかも知らんがもう心配な事はありません」と醫者が言つたのは一週間も後であつた。

睦子は強ひて蝶子を學校へ通はしめた。櫻井も橋本も學校があり野球の練習があるので夜だけ看護する事となつた。茂平は毎日見舞に來た、而して三十分許り默つて克巳の顏を見戍り、其れから歸りしなには毎も「御先祖様が護つて下さりますだ」と言ふのであつた。

睦子は朝の七時頃から正午頃まで看護婦と代つて眠るのみであつた。彼女は詳らかに看護婦の狀態を知る事が出來た。

凡そ今日の看護婦ほど始末に終へないものはない、彼女等の十中八九まで、懶惰で片意地で傲慢で冷淡である、彼女等は病人の日誌に脈搏と體温と便通と食事とを記すのみである、一定の時間に體温器を插む、服藥を勸める、繃帶や氷嚢を取替へる、仕事と言へば其れだけである。彼女等は患者の心理や氣分や感情に就ては些も考へない、官立の病院すら其れである、所謂看護婦會などと稱する商賣本位の看護婦の如きは如何なる家庭に於ても信用を失ひ蛇蝎視されるのも無理はない。彼女等は患者は人間である事を忘れて居る、而して肉に於て憐み感情に於て惱める者に對しては同情と慰藉を持たなければならぬといふ看護婦特有の天職の意義を忘れて居る。

「患者に氣を御遣ひなさるから隨分苦しいでせうね」と睦子は一日看護婦に恁う言つた、

「いゝえ」と看護婦は答へた。「一月の中に幾人となく變る患者さんですもの、一々同情をして居た日にや死んでしまはなきやなりませんわ」

睦子は愕然した、是が最も正直な告白に違ひない、併し其れで看護婦が勤まるだらうか、彼女の頭に極めて大きな問題が起つて來た

七

一週間は過ぎた。克巳の容態は依然として好くもならず惡くもならなかつた。睦子は到底看護婦の力を頼む事の無駄である事を覺つた。朝から正午までの五時間の睡眠時間を三時間に縮めた。彼女は段々瘦せ出した、時には眩暈を感じて倒れさうになる、併し彼女は決して克巳にも他の人々にも疲勞の色を見せなかつた。

最も良好の時には克巳は我儘を言ふ、苛れ出

す、怒鳴るのであつた。其れが却つて睦子に嬉しかつた。無理を言はれゝば言はれる程克巳の精神が恢復して來たのだと思つた。一夜彼女は眠れる克巳の顔を凝と見詰めて居た。極めて樂しい前途の光が自分を待つて居る様な氣持になるかと思へば又俄然として暗黒の底に落された様な氣持になる。どうしても癒さなきやならない、生命に代へても癒さなければならない。

彼女は悄然と眼を開きながら幻影に捉はれる事が屢あつた。先づ克巳と夫婦になる。自分が赤兒を抱いて居る。赤兒の頭に眞白な柔かな毛の帽子が動いて居る。彼女は今何か用があつて外出しなければならない處であつた。

私が抱くから、お前は出てお出でと母が言ふ。

私此の子を抱いて行きますわと自分が言ふ。

風邪を引かしては惡いと母が言ふ。そこで自分は良人に訴へる。ねえ貴方、此の子を作れて行つても可いでせうと言ふ、次の室から克巳が答へる。

「俺も出るから一緒に行から」

「貴方は今何をして被居るの？」

「僕は今足を繃帶してるんだ」

そこで彼女は幻覺から覺めた。克巳は依然として眠つて居る。蒲團の裾から繃帶の足が露はれて居るのに氣が付いた時、彼女は悲しくなつた

早く、癒らないものだらうか

早く癒つて卒業して……と彼女は考へる中に又しても彼女の妄想が果しもなく擴がる、而して疲勞が彼女の全身を襲うて彼女はうと〳〵と假睡むのであつた

實際彼女の全生命は只克巳の上にあつた。彼女は今まで人の死といふ事を考へた事もなく神や佛の事も考へた事はなかつた。だが彼女はあらゆる神に祈つた、什麼な惡魔でも森川さんの生命の代りに私を取ると仰有るなら私は何時でも身體を捧げますと言つた。

十日は經つた。克巳は次第に恢復しかけた。十五日二十日と經つ中に彼は全然意識を取戻した。或夜克巳は不圖眠から覺めた、病院の夜半ほど物靜かなものはない。彼は関然たる此の古寺の様な靜かさに充たされた一室を薄暗く照らして居る電燈を眺めながら自分の過去や目下の狀態を回顧した　其の中に彼は渴きを覺えた。臺の上の吸呑を取るには手を伸ばさねばならぬ。と見ると睦子は自分の寢臺の端に頭を凭せたまゝすや〳〵と眠つて居る。看護に窶れた額に婆娑と後れ毛が掛つて鼻筋が透徹る様に瘠せて居る。無造作に束ねた髮にセルローバの留針を挿してあるが其の脚が歪んでニッケルの鍍金が[illegible]色になり、鏤めた貝殻が剥げて黒い地金が現つて居る。克巳は凝と其れを見詰めた。

一錢の[illegible]たなあと彼は言つた。一體彼は什麼して此の女に看病されて居たんだらう。今まで其れに氣が付いて居たに相違ないが、何故斷らないんだらう」

彼は益睦子の寢顔を見詰めた。突然として彼の胸に重苦しい痛みが迫つた。

「似て居る〳〵、仍且姉妹だからな」

恁う思つた時睦子はふいと顔を上げた。

「あら、私大變だわ、假睡をしちやつて」と彼女は狼狽へて言ふ。

「可いよ、眠つて下さい」と克巳は言つた。

「何か御用だつたんでせう」

「あゝ、喉が渴いたから」

睦子は直ぐ吸呑を取つて克巳の口に當てた。

一口飮んで克巳は言つた。

「睦さん、明日からね、家へ歸つても可いよ」

「どうして？」と睦子は愕然として言つた。

「僕はもう大丈夫だから」

「いゝえ、まだ〳〵ですわ」

「併し君にも氣の毒だからね」

一氣の毒だつて仰有るの？」と睦子は怨めしさうに眼を擧げて「私ね、いつまでも此處に居ますわ」

「有難う」と克巳は言つた、而して深い呼吸を吐いた。

八

不具にもならず癡呆にもならず漸次恢復に向つたので、蝶子を初めとして櫻井、橋本は無論の事、野球に趣味を持つ滿都の學生が悉く愁の眉を開いた。併し退院には未だ一月も費らなければならない。其れが何人よりも茂平の心配する處であつた。

一週間目毎には病院の支拂をせねばならぬ規定である。茂平は毎も其の日が來ると、金を懷にしてやつて來る、而して默つて金包を睦子に渡して行くのであつた。三週間目には時刻が後れて夕方となつた。四週間目には翌日となつた。其の日は雨が降つて一日鬱陶しかつた。睦子は來るべき筈の茂平が來ぬので若しや病氣でもあらうかと心配した、が其の日の午後彼はヽヽのそりと入つて來た。全身雨に濡れて汚い筒袖の上に黑いぼろ〳〵の外套を着て居る。

「晩くなつて濟みません」と彼は懷から金包を出し凝と其れを見詰めながら「三圓ばかり足りないかも知れませんが」と小聲で言ふ。

「可いわ、足りないのは私が什麼かしますから」と睦子は言つた。

茂平は深い皺に刻まれた眼を瞬いて深い呼吸を漏らし「未だ〳〵退院が出來なかつぺえか」

「もう半月ばかり經つたら温泉へ行けとお醫者さんが仰有つてよ」

「もう半月……其れから温泉……」と茂平は呟いたが軈て「お先祖樣が助けて下さるだ」と言ひ捨てて室を出た。

睦子は金包を解いた……と見ると毎もは紙幣だけであつたが、今日は銀貨紙幣取り交ぜて其の上に汚い銅貨……中には五厘錢……などまで雜つてある。睦子は思はずはつと胸を轟かした。

「お錢が無いのだ」

彼女は金包を片手に持つたまゝ殆ど身動もしなかつた。私は何故今まで是に氣が附かなかつたのだらう、可哀さうに爺やが獨りで心を痛めて居るんだ、若し私が森川さんの妻であつたら私が第一に此の事を考へなきやならないのだ。

彼女は直ぐ茂平の後を追うた。耗びた下駄を穿いて破れ傘を差し、泥濘の中をびしよ〳〵歩いてる姿が並木路に見える。

「爺やさん」と彼女は呼び止めて、漸と近附いた。「爺やさん、お金が都合が惡いのぢやなくつて？」

茂平はしみ〴〵と睦子の顏を眺めやつて靜かに首肯き「だけんど、坊ちやんにもお孃ちやんにも言ふ事なんねえぞ、心配するからなう」

「可いわ、私引受けるから安心してね」

茂平の眼から大きな涙がぼろ〳〵零れた。而して何にも言はずにさつさと歩き出した。睦子は室へ入つて吻と息を吐いた。私が引受けると言つたものの此の將來の病院費や温泉行を什麼しよう。母子三人で其の日暮らしをして來た自分達には十圓の貯蓄すらないのである。だが要るだけのお金は什麼にかしなきやならない、櫻井さんは大阪の富豪の息子さんだから相談すれば何とかなるだらうが、併し森川さんの事は一切私だけの手で引受けたい。

睦子は又しても新たな心配が出て來た。

「たつた三百圓ばかりのお金があれば病院も温泉も濟むんだ」

彼女は毎日其れを繰返した。

「三百圓！　三百圓！」

で彼女は折を見て早稻田の家へ歸つた。彼女

は先づ簞笥を開いて、自分の着物や帶を取出した、其れから手箱の指環、襟留、帶締、凡てを前に並べて胸算用した、元價で凡そ三百圓のものが什麼して半價にも賣れよう、彼女は情なくなつて幾度も〳〵着類を疊んでは擴げ擴げては疊みつした。

「まあ何をしてるの？」と母は不思議さうに睦子を見やりながら言つた。

「いゝえ、何でもないのよ」

母は默つて立つた、而して自分の着物を凡て取出した。

「これも一緒にしておやり」

「お母さん」と睦子は驚いて母の顔を見詰めた。

「森川さんのためなら什麼事でもしてあげなきやなりません、其れがお前の義務ですよ」と母は靜かに言つた。

睦子は𥡴と顔を染めた。

九

金には限りがあるが、費用には限りがない。睦子母子の苦心の金も次第に殘り少なになつて來た、此の按配では退院の頃には一文もなくなる。睦子は其れのみ案じながら其日々々を送つた。人に言ふべき事でなし、言うたとて却つて人々に心配させるだけの事、彼女は一方に克巳の快復の喜悅があると共に一方に恰ら熱湯を飲む樣な苦みがあつた

「あと一日で勘定日だ、」二日になつた、もう一日だ

退院の日と勘定の日と同日である。祝ふべき日と血の出る様な涙の日と同日である。蝶子は明日は退院といふので兄の居室を掃除するやら皆を請待して夕飯の御馳走をする獻立やらに喜悅いつぱいの胸を轟かして病院と自宅の間を二度も三度も往復した 櫻井や橋本其他の友人達も待ち兼ねた様に病院へ押寄せて萬歲萬歲を浴びせ掛けた。人々の喜ぶ顔を見るにつけて睦子の胸は苦しい。

「どうして明日の勘定を濟まさう、そして溫泉へやる事が出來るだらう」

彼女は自分の簞笥が空虛で母までが着替さへ無くなつた今日、百圓と纏まつた金の出來るべき筈がないと覺悟して居る、其れでありながら矢張「どうかならないものかしらん」と焦り出す。彼女は默つて窓際に立つて居た。

「今日中に調へて置かなければならない」

彼女の苦心は知る由もない、克巳の寢臺の周圍に屈強の青年達が盛に煙草の烟を漲らしこ[illegible]、お[illegible]くでせう

「自分[illegible]にも心[illegible]たね」と櫻井は[illegible]子を[illegible]上に載せて、其[illegible]代りに[illegible]か好きなものを兄さんに買つて貰ふさ

「ええ、買つて戴くわ、此[illegible]時こそ[illegible]何を買つて下さらないんだもの、ねえ兄さん」と蝶子は媚へる様に兄の顔を見上げる。

兄は悠々と微笑して「うむ、何でも買つてやるよ、菓子でも餡パンでも」

「あら、其那ものは不要いわ」

「ぢや何だ」

「あのね」と蝶子はぱちりした眼を開いて何か言はうとしたが軈て兩手を顔に當てて肩を搖つた。

「何だ〳〵」と二三人の聲が起る。

「言へないわ」

「ぢや、僕にだけ聞かしてくれ」と櫻井は蝶子の頰に耳を寄せる。

「あのね」と蝶子は眼をくる〳〵と一同に廻して見せて小聲で囁いた。

「うむ、成程、うむ、なある程」と櫻井はにこにこして首肯 「ほう、まだあるのかえ、なる程、うむ、椽に草履に西洋人形」

「あら、言つちや厭よ」と蝶子は顔を隱した。「

同は喝采した。

「可しッ、皆な買つてやるよ」と克巳は言つた。

睦子は默つて此の模樣を見て居た。

「何にも知らずに、袴と草履と人形を請つて彼居る、兄さんの病氣祝だから請られなくとも私が買つて進げなきやならないのだ」

然う思ふと情なさが充滿になつて堰き來る涙を喉元で漸と抑へた。今は一文も目的がない、貯金が二十圓餘りあつたのが其れも引出して殘るのは只た二圓である。百圓に對する二圓では什麽する事も出來ない。

「然ういふ時は萬龜さんが居てくれたら什麽に力になるか知れないのに、其の萬龜さんさへ今では何のためか音信不通になつて居るのだから仕方がない」

此時彼女の頭に閃いたものがある。萬龜さん！　萬龜さん！　と彼女は繰返した。

「爾だ、九死一生の場合だから他の事は考へて居られない、萬龜さんに賴みませう、それで不可かつたら御父樣に……」

一〇

謝る、そのは寧でも厭む。睦子は今萬龜子の事を想ひ出すと共に是が最上の方法であつて今まで何故此處に考が及ばなかつたかを怪んだ。

萬龜さんなら屹度何とかして呉れるだらう。

彼女は暗雲の中に日の光を認めた樣に胸を跳らした。彼女は直ぐ室を出た。

「何處へ被行るの？」と蝶子は言つた。

「貴方のねお人形を買ひに」と睦子は冗談らしく言つて「皆さんよろしく御賴みしてよ」

彼女は入口を出て門に向つた。門へ行くには病室の窓の下を通るのが徑路である。窓から濛々たる煙草の煙と話聲が漏れて居た。

「あの人達は今に驚くだらう、私と克巳さんの結婚の日に什麽騷ぎをするだらう」

彼女は然ういふ擽つたい思ひに微笑した、而して足を早めた。父の家は築地の一丁目にある。彼女は電車を降りて眞直に父の門内に入らうとした。廣い敷砂の門内に今自動車が一臺タイヤに空氣を入れてある。彼女は勝手口から案内を請うた。

「少々お待ち下さい」と女中は紡績絣の給にメリンスの帶をしめた睦子を見やりながら奥へ入つたが軈て出て來て「どうぞ此方へ」

睦子は今までの叫ひも何も忘れて、久し振で妹の顏を見る事が出來ると思ふと、今の工面も是で首尾能く出來ると思ひ、只嬉しさにそは〳〵しながら女中の後に從いた。そして萬龜子の居室は什麽に立派だらう抔と想像した。が、この想像は直ぐと外れた。彼女の通されたのは洋風の應接室であつた。

「御客樣ですか」と睦子は訊ねた。

「いゝえ、只今御稽古で」と言ひ捨てて女中が去つた。

御稽古だつて何だつて肉親の姉だから居室へ通さない筈が無いのにと彼女は思つた。彼女は一時も早く妹の愛らしい顏が見たかつたのである。

十分は過ぎた、二十分は過ぎた、三十分を經てども萬龜子は出て來ない。彼女は段々不安になつて來た。

「どうしたんだらう、餘り酷い」

今まで思はなかつた事が、俄然として彼女の頭に浮んで來た。

「爾だ　二度と來て下さるなと言はれたのだつけ」。

彼女は憮然として今日此處に來た事の不覺であるのに氣が付いた。

「馬鹿にされに來た樣なものだ、歸りませう」

彼女は扉に手を掛けようとした、途端に父の姿が見えた。

「何しに來た」と父は叱る樣に言つた。
「萬龜さんに逢ひたいと思ひまして」
「お前は約束に背いた人間だ、此の家へ來る事はならん、萬龜も逢ひたくないと言つてるからお歸り」
「はい」と睦子は頭が上らなかつた、彼女はちらと父の顏を見た時「あゝ來るんぢやなかつた、お母さんに濟まない」と思つた。
悄然として勝手口から出る時、流石に耗びた下駄が恥かしかつた。廣庭では今自動車が音を立てて居た。彼女は腰を屈めて自動車の横を拔けようとした刹那！　玄關に現はれたのは萬龜子の盛裝した姿であつた。
「あら！」睦子は進み寄らうとした。萬龜子もあつと驚いて聲を擧げた樣に見えたが直ぐ車の中に姿が隱れてしまつた。ぶう〳〵と車は鳴つた、而してする〳〵と敷砂の前に半圓を描いて滑かに門を出た。玄關の式臺に三人の女中が手を並べて御辭儀をして居る。
睦子は逃げる樣に門を出た。

二

門を出て彼女は吻と息を吐いた。
「もう來るものか、決して〳〵二度と來ない」と彼女は口の中で叫んだ。母と姉娘は身の皮を剝いでも百圓の金に困つて居る、父と妹娘は寶玉と綺羅とに飽いて居る。恁ういふ一家族が世にあらうか。生れてから二十三年、一緒に育ち一緒に泣きつ笑ひつしたものが、富家になればとて掌を返す樣に姉を姉とも思はぬとは餘りに酷い。
「もう〳〵姉でもなければ妹でもない、自動車に乘つた妹と、耗び下駄を穿いた私と、どつちが眞の人間か今に鳴らして見せませう」
彼女は暫く父の邸宅を睨んだが、軈て頭を低れて靜と下唇を噛んだ。刻一刻に迫るは明日の勘定である　さあ其れを什麼しようか、蝶子さんにも人形を買つてやると約束した、お金が出來なければ病院へは歸れない。彼女は何といふ考もなしに電車に乘つた、いつの間にか乘替へた、而して又思案に耽つた、不圖氣が付くと電車は神樂坂の上に差掛つて居る、彼女は其處で降りた。
「家へ歸つてお母さんに相談しようか、但しは爺やに……」
二つとも不可いと彼女は思つた。
「兎も角も郵便局へ行つて此の貯金でも受取つて置かう、たつた二圓でも何かの足しにはなるだらう」
彼女は牛込郵便局へ入つた。局は多數の人が居た。貯金の口には五六人に顏が集まつて居た。何れも〳〵預ける人ばかりで出す人はない。小さな丁稚が自轉車に乘つて來た、而して嬉しさうに口笛を吹きながら襯衣の衣囊から五圓の紙幣二枚を出して預けて行つた。睦子は恥かしかつた
「二圓不殘は不可せんぜ」と係員は鐵網の中から言つた。「いくらか殘して置きませんと」
「はい
「いくら殘します」
「よろしき樣に」
「よろしき樣では困りますな、私のものでありませんから」
「では……あのう……」
「いくら？」
「五十錢」
「五十錢、よろしい、では一圓五十錢ですな」
笊の中に三枚の銀貨をがちやんと入れて更にもう一度數へ直し「一圓五十錢！」と高聲に言つた。
睦子は恥かしさに消えも入りたく思つた　彼女は夢中に笊を攫んだ。

「笊を持つて行つちや困ります」と係員は笑ひながら言つた。「では帳面を直しますから待つて下さい」

睦子は銀貨を財布に入れて帯に挾み腰掛に腰を下した

「六十三番」と係替係が叫んだ。

「おう」と太い聲が聞えて向うの隅から脊丈は低いお米俵の様に丸く肥つた五十恰好の男が出た。

「いくら？」

「八百五十圓」と男は言つた、而して笊の中から紙幣を取つて手早く數へた、新らしい紙幣がばら／＼と氣持能く男の指先に跳る。

「あゝお金といふものはある處にはあるものだ」と彼女は羨ましく思つた。

と此方の係員が呼ぶ。

「油谷睦子さん」

「はい」

夢から覺めた様に彼女は立上つた、而して財布を持つて格子扉を出た。と彼の肥つた男は自分の先に立つて格子を前のめりに潜りながら歩いて行くのを見た。

「八百五十圓！」彼女は肚の中で繰返した。「八百五十圓、其の半分もあつたら……」

二

藍色の薄羅紗の外套を着て、中折帽を被り、裾を端折つたと見えて、外套の下から繻子の股引と赤皮の靴が見える、煙草を持つた手を動かす度にダイヤの指環が光る。

「請負師だらう」と睦子は思つた、而して再び八百五十圓！と繰返した。此の人達には八百圓や千圓の金は塵の様に見えるだらう、飲んだり食つたり賭博をすると一夜の中に消えてしまはう、だが其の八分の一あれば此に未來に立派な世の中の仕事をする青年が助かるのだ、世の中は什麼して恁う無駄な人にお金があるのだらう。

彼女は殆ど魅入られた様に男の袂や懷の方を見やりながら空想に驅られた。今恁うして此の路を歩いてるあの人の懷に八百五十圓ある、して見ると向うから來た人にも亦百圓や二百圓あるかも知れない、此の店の主人も彼の八百屋も米屋も魚屋も……皆な此處を歩いてる人は必ず幾許か持つて居る、一圓五十錢しか持つて居ないものは私だけだ、而して什麼しても百圓の金を調へなければ生きて居られない破目になつてるのも私だけだ。此れだけ多い人の中で私ほど苦しい思ひをしてるものは一人もなからう。

「八百五十圓！」と彼女は又もや獨りで言つて溜息を吐いた。

男はふいと背後を向いた。此の時睦子は何時の間にか江戸川畔に出たのに氣が付いた。

「あら什麼したんでせう」

自分で自分の迂濶を嘲る様に立止つて、病院へ行かうか、家へ行かうかに迷うた。と肥つた男は再び背後を向いてすた／＼と近寄つて來た。

「姐さん……奥さんかも……お前さん、何か心配がありなさるね」

朴訥で荒つぽい聲であるが、優しさうな語に睦子は思はず引込まれた。

「はい……いゝえ」

「いや、相だらう、お前さんは屹度[illegible]心配事がある、短氣な考へを出してるぢやねえか」

「いゝえ、何事も」と睦子は耳根を染めた

「若えから思ひ詰めるて[illegible]るだから、多寡がお金の事ぢやねえか、ねえ[illegible]、いや御孃さんかも知れねえが、ほツ／＼、まあね、お孃さん、金の事なら、俺が[illegible]」

「はい」と睦子は[illegible]答へた。

「爾だ、俺の眼に間違ひが無え、何だらう、御嬢さん、金の事なら金で濟ませるが可いぢやねえか、いくらだか知らねえが俺が出してあげようぢやねえか」
「いゝえ、私は別に……」と睦子は只不思議さに度を失つて曖昧に言つた。
「可いよ、お前さんは俺が郵便局で受取つたのを見て居たんだ。して見ると俺にはちやんと金がある、金がありながら難儀な人を見逃すてえのは男と言はれねえからな、爾でせう、お嬢さん、惚れた男があつて親達が承知しないてえなら其りや又其の樣に話の仕樣もあるしさ、なあお嬢さん、金で困る位馬鹿げた話はあるもんでねえ、俺には今金がある、これが懷にあつても明日が日にや一文もなくなるかも知れねえ、して見りや人助けのために費つてしまふ方が可いんだ」
「御親切に有難うございますが、でも見ず知らずの人樣からお金を貸して頂くわけがございませんから」と睦子は辛と言つた。
「貸すんぢやねえぜお嬢さん、俺が此に打捨るんだ、それをお前さん拾つて使へば可いんだ、はツ〳〵〳〵」
「でも私は……」
「まあ俺と一緒にお出でなさい、此處で言ひ合つて居ちや人立がするから」

三

親方風の男は直ぐに通りすがりの車夫を呼止めて何やら言つた。睦子は拒む勇氣も出なかつた。二臺の車は三月の春風を切つて走つた。
「あゝ是で助かるのだ」と彼女は車の上で思つた。「世の中には恁ういふ事があるものだ、見ず識らずの人が生命を助けるなんて全で小說にある樣な事だ」
夢かと思へば夢でない、肥つた男の肩から上が車の上に見える。車は道灌山の大きな門內を入つた。
「被來い」と玄關口に女中の二三人が現はれた。
「どつか靜かな處が空いてるかね」と男が言ふ。
「どうぞ此方へ」
案內したのは奧二階の六疊である、幾つもの廊下や押戶を通つて最後の戶を押すと日暮里の田圃は一望の下に見下される、其處は此の家の一番奧の室である事が解つた。
「快い見晴だ」と男は外套を脫いで欄干から下を眺めて言つた「丁度下は汽車路だ」
睦子も默つて下を見やつた、いかにも此の二階は崖の端に建てたもので、ほんの眞下は何十丈とも知れぬ石垣である、其の下を通る汽車は全然玩具位の小ささに見える。
「地所を儉約しやがるもんだから此那危え處にまで建てるんだ」と男は笑つた。
睦子は閾に引着く樣に坐つて、女中等が酒や肴を運ぶのをもどかしく思ひながら見て居た。
「可し〳〵、用がある時には呼ぶからな」と男は言つた。
「畏まりました」
女中が去つた時睦子は突然恐怖に襲はれた、其れは何といふ事なしの淋しさであつた。
「まあ一杯やりませう」と男は言つた。
「私は頂けませんから」
「あゝ爾ですか、ぢや何かお食りなさい」
男は依然優しい快活な聲で言つた。
「はい、でも私……もう日暮れになりますから」
「あゝ其れも爾だ、ぢや早く御飯を食べてね」
「御飯も頂きたくはありませんから」
「爾ですか、いや御道理で」と男はにこ〳〵しながら「併し能く私の言ふ事を聽いて下すつた。私は此那請負の樣な事をやつてるもので石政と言へば仲間だけにや名前を知られてるものです

がね、なにしろね之が性分とでも言ふんですかね、人の難儀を見ると黙つて居られねえんでね、その爲に詰まらねえ目に逢ふ事もありますよ、お前さんの事もね、今此で什麼な事情が什麼いふ紛糾になつてるかなんて事は聞きますまい、聞いたつて仕様の無え事なんだからね、只金でお前さんの生命が助かるてえなら、金は天下の廻り持だ、なあお嬢さん、私の持つてるものをお前さんが遣ふのも私が遣ふのも同じ事だからな…處で金は幾許要るんですか」

「あのう…」と睦子はもぢ／＼して顔を火の様に赧くなし「百…圓…ばかり」

「百圓？」と問ひ返して男ははツ／＼／＼と笑つた、「百圓、それんばちで苦勞しなすつたか」と急に眞面目になり「いや、金てえ奴あ無え時にや一錢銅貨も無くなる時があるもんだから…可哀さうに苦勞しなすつたか」

恁う言つて彼は懐から紙幣束を出し、其れを鼻先に包んで前に抛げ出した。

「二百圓まるめて持つて御出でなさい」

「はい、では御言葉に甘えまして拝借致します、私の宅は早稲田の電車場の前の牛乳ホールで瀧と申しますものでございます、何れ片附き次第御禮に伺ひます」

睦子は金包を戴いて帶の間に確乎と入れ、

「では之で失禮致します」

「あゝ／＼急ぐだらうからね」と男は盃を取上げて立ちかける睦子を見やり「だがね、忘れものはありませんかね」

「いゝえ、何も」

「いや、あるだらう、一寸待ちなさい」といふ男の聲は改まつた。

一四

睦子は不思議さうに立ちかけた腰を落して坐つた。

「別に忘れものは……」

「いや、ある筈だ、ねえ御嬢さん、私は何も恩に着せるといふ譯でもねえが、お前さんは學校へ行きなすつた方だ、なあお嬢さん、人の世話になつて御禮もしないで此儘歸りなすつちやお前さんは心苦しからうと思ふのだ、可いか、私は什麼でも可いんだ、お前さんが氣が濟むめえ、只衛思ふのだよ」

「御禮は何れ屹度御伺ひ致しますから」と睦子は徐々潮しくる不安に胸を轟かしながら兩手を突いて言つた。

「何れお宅へ伺ふつて？」と男は飽までも和かな相好を崩さずに言つた。「私に宅が無かつたら什麼しなさる、伺ひたくても伺へないぢやないかね、だから私は言ふんだ、御禮をするなら今の中だ、解つたかね、お嬢さん

「今の中に？」と睦子は合點ゆかぬ様に眼をぱち／＼動かして途方に暮れた。

男は突と立上つた。其の太い腕で彼女の首に絡み付くと酒臭い呼吸が鼻を撲つた。

「何をなさるんです」と睦子は男の腕を拂ふ様にして叫んだ。

「俺の妾になつてくれ」と男は言つた。

「貴方は何を…何を…お金で以て…」と睦子は途切れ／＼に叫びながら男の腕を漸と潜り抜け「お金をお返しします、お返しします、失敬な」

「すべた！　默つてろい」と男は眞直に立つた、今までの和かな地藏顔が酒の氣と血の氣を帯びた惡鬼の様に變つた。彼はどろりとした眼を睦子に向けて下脣を二三度嚙みしめたかと思ふと膳の上を一足飛びに睦子の胸を摑まうとした。

「誰か來て下さい、誰か」と睦子は悲鳴を擧げて逃げ廻つた。

「誰も來やしない、爾吩咐けて置いたんだから」

睦子は男の手を潜つて縁側へ出た、縁の盡きたる處は押戸である、此の戸を出づれば最早安全だと彼女は思つた。

が押戸は開かなかつた、一度二度三度、彼女は押戸を押した、けれども戸は釘付にされた如く動かない、彼女は身を翻して欄干から跳び降りるより仕方が無い。此儘節操を汚されるよりも寧ろ死ぬ方が可いと彼女は決心した。此の決心はほんの瞬間であつた。男の腕が彼女の首筋に掛ると彼女はずる〳〵曳きずられた。

「御免なさい」と彼女は言つた。「お金は御返し申します」

「何も言ふ事はない」

男は欄干に掴まつた睦子の手を掩ぎ放さうとした。放されまいと睦子は横木を抱く様に獅噛み付いたまゝ、一生懸命の力を出した。放さうとする、放れまいとする、劣情に渇して猛獸の如く猛り立つた男の力と、節操を守つて生命を的に爭ふ女の力！ 二つの力が相爭ふ機會に欄干はめり〳〵と音した。はつと思つて手を離す途端に男の兩腕は彼女を待つて居た。

「何をするんです」

睦子は滿身に力を籠めて男の胸を突いた。

男はよろ〳〵と背後に倒れた、と睦子の眼には何にも見えなくなつて、遙かの田圃や森がほんの眼の先でぐる〳〵廻つてる樣に思はれた。倒れた筈の男の姿が見えない。と見ると欄干の一方がかいゝかたりと外れて下に垂れて居る、睦子は下を見やつた。崖の上は殘る日影に明るいが、崖の下は既に暗くなつて居る、其の薄暗のどん底に人間が倒れて居る。

「落ちた」と睦子は思つた。どん底に倒れた人間は手と足をばた〳〵と一二度動かした、而して起き上りさうにしたが又倒れた。彼女は悚然として押戸を引いた、押しても開かなかつた戸は引くと直ぐに開いた。彼女は裏梯子から降りた、而して庭木戸から竊と町へ出た、町は灯が點つて居た。夕闇の賑やかな灯の下を忙しさうに人々が歩いて行く。

一五

睦子は車に乘る事も電車に乘る事も忘れて只眞直に歩き續けた、假令ば夢の中で妖怪に追ひ驅けられて氣ばかり焦つても身體が動かぬ樣な苦しい氣持で何處までも眞直に歩いた。もう大丈夫かしら、あの男が背後から來はしないかしら、彼女の恐怖は只是だけであつた。

だが、彼女は漸と本郷の停留所に來た、而して宏壯な大學の建物が夜の闇に聳え立てる影を見た時に彼女は初めて常に復つた。

「皆さんが待つてるだらう」

彼女は思はず帯の間を探つた、不快といふ男から貰つた一百圓の紙幣が紙に包んだまゝ其儘に帯に挾まつて居た。彼女は悍然として其れをちらと見やつたまゝ元の如く帯に挾んだ、何とはなしに全身が顫へ出して歯の根が合はぬ樣に動く。

「什麼して此のお金が此にあるんだらう」

彼女は路の隅に立つて兩手を帯に入れたまゝ首を低れて前後の光景を考へた。郵便局の前から江戸川畔、其れから車に乘る、料理屋へ行く。男から金を渡された、其れから……。

其れから後は極めて朦朧となつた、彼女は只一瞬間に男を突いた時の手應を知つて居た、大きな重たい柔かな樣な堅い樣な或る物體を力を極めて突いた時の心持！ 而して次の一瞬間に男の姿が見えなくなつて遠くの青い田圃がぐる〳〵眼の前で廻つたかと思ふと、薄暗い崖の下で男が起上らうとして又倒れ奇妙な聲で唸つた時の心持！

順序なしに種々な光景がぱつと眼前に出た

かと思ふと又消えて其の次に又々出て來る。

「私はあの男を殺したのだ」

恁う思ふと、突き飛ばした時に自分の手先と男の胸と觸れた其の體溫が未だ手先に殘つてるかの樣！彼女は兩手を帯から出して振つて見た。

彼女の此時の心持は殆ど混亂の極に達した、假令ば彼女の持つて居る感情や意識や微細な神經が假りに十種あるものとすれば、其の十種のものが一つの意識の中に働くのでなくて悉く一つ／＼勝手放題に別々に働いて居たのであつた、眼は何物かを見て耳は別なものを聞き頭は全く異つた事を考へる。彼女は石政を殺した事を考へて居る積りであつた。が彼女は病院の事も考へて居るのである、其れから築地で妹が自動車に乘つたのを見た事も考へて居る、二百圓の金が帯の中にある事も考へて居る。理窟から言へば石政を殺した事と二百圓の金とは密接な關係があると思ふべき筈である。だが許子は石政と金とは全然無關係なものゝ樣に思へた。いつの間にか石政が二階から落ちて死んだ。只其れだけで……

「あら姉さん、あら」

電車からどや／＼人が降りる中に睦子の聲が聞えて、荒い銘仙飛白の長い袂がひらりと自分の方に動いたと思つた。

「隨分探してよ」

「まあ蝶子さん」と睦子は漸と明るみへ出た樣に嬉しさうに言つた。

「姉さんが出たきり御歸りにならないもんだから兄さんや櫻井さんも淋しがつて……私お迎へに行つたのよ、だけれども解らないんですもの、何處へ被行つたの？」

「私ね、貴方の御人形を買はうと思つて……」

と睦子は不意に言つた

「あら嬉しいわ」と蝶子は嫣然して「だけれども私……氣の毒だわ」

「いゝえ、氣の毒な事はありませんわ、お金は爺やから澤山預かつてあるんですから」

二人は明るい片側へ出た、而して大きな西洋人形と羅紗裏の草履と袴とを買つた

「あら可いわねえ、あゝ嬉しい嬉しい」と蝶子は草履と袴を睦子に持つて貰ひ、自分は人形を箱から出して兩袖を搔き合せて胸の處に確乎と當てがひながら歩いた。

「是で決まつた、是でもうあのお金に手が付いたのだから」と睦子は我が勇氣を確かめながら自分に向つて自分で言つた。

一六

其の夜の夢は案外靜かであつた。彼女は曉方に眼が覺めた、快い克巳の鼾が聞える、彼女は自分ながら氣が落着いてゐるのを喜んだ。

「もう今日は退院だ」

恁う思ふと昨日の事は既う／＼遠い過去となつてしまつた。

「あの男が惡いのだから決して私には罪がない、お金だつてもあの男が私に貸してくれたのだから盗賊ではない」

彼女は幾度も／＼恁う繰返した。克巳は何時までも眠つて居る。無論退院の手續をするには未だ時間が早い。

「行つて見よう」と彼女は不圖昨日の事を又考へ出した。「死んだか生きたか解らない」

彼女は其の日の新聞を擴げた、道灌山の崖下で男が死んで居たといふ記事を探したが、何處にも掲てなかつた。彼女は暫時考へて、ふいと病室を出た。最初は吾ながら大膽であると思つたが電車に乘つてから極めて平氣になつた。郊外線の電車に乘つて日暮里から田端の間の線路を電車の窓から眺めて注意した、昨日の料理屋の二階から雨戸を閉めたまゝ高い／＼崖の上

に見える、毀れた欄干は何の名殘もなく、元の形になつて居る、が石垣の下は春の草が亂雜に亂れて、人の足痕や、血の色の様な泥の様な汁に涜されて居る、が死骸らしいものは一つもない。

「死骸が形付けられたんだ」と彼女は悚然とした、而して彼女は次の電車に乘つて病院へ歸つた。克巳は未だ眠つて居た、其の男らしい顏に微笑むかの如き平和な色を湛へて熟睡して居る。彼女は地獄を逃れて極樂へ出た樣に吻と息を吐いた。

「私は生きなきやならない」と彼女は斷乎として自分に言つた。「死んだ人は自業自得だ。若し私に罪があるものとすれば神樣が私を罰しなさるだらう、戀人のために人を殺したとて其れは私の罪でない　さうしなければならなかつたから仕方のない事だ」

寧そ死んだといふ事が確かまつたので、彼女には確乎した決心と勇氣が出た。而して終には「あんな惡い人は死ぬ方が可いのだ」とも思ひ、「私達二人の生命が助かるためには彼那惡い人が犠牲になつても構はない」と思ふ樣になつた。彼女の心は次第に明るくなつた。彼女は大急ぎで會計局へ行つた、而して直ぐに勘定を濟ました。其れから彼女は種々な手道具や何かの荷造をして居る中に克巳は眼を覺ました。彼女は全く恐怖を脱する事が出來た。

櫻井橋本初め友人に圍まれて克巳は病院を出た。久し振で家へ歸ると、蝶子や茂平はお浪と共に綺麗に室内を掃除して待つて居た。時は四月の春である、風は暖かく縁側に日が充滿に射し込んで、庭の蝶子の作つた花壇に、櫻草や菫や嫁菜や薔薇が咲いて居た。障子を明け放して克巳は蒲團の上に足を投げ出し、悠然した氣持で人々と語つた。勝手では睦子が人々を欵待すべく白い前掛を掛けて煮物が忙しかつた。

「處で君」と橋本は克巳が他の人々と語つて居る暇に櫻井に向つて言つた。「温泉へ直ぐ行くつもりか」

「爾だ」

「箱根か湯河原か」

「湯河原の方が廉い、だが誰か添いて行かなきやね、未だ〳〵全快といふんでないから」

「其れや爾だね、蝶ちやんが行くだらう」

「でも蝶ちやんは學期試驗だからな、お互だつても爾だらう」

「ぢや睦さんに行つて貰ふさ、店の方は小母さんも居るし、我々が手傳つても可い」と橋本が言ふ。

「處が睦さんは什麼だらう、行くものとしても變だからな」

「變ぢやないよ、夫婦になるんだらう」

「さあ其れがね」と櫻井は思案して「行くなら第一に結婚式を舉げてからにする方が可いだらうと思ふが……」

「無論だね、新婚旅行といふ奴だね」と橋本は珍らしさうに言ふ。

「早く決めようぢやないか」

「併し森川が何と言ふかね」

「何と言つても構はんさ、君と僕と二人で決めてしまへば可いのだ」

一七

柴垣の外に鷄と雛鳥が遊んで居る。梅の花が鱗の樣に散つて、一本の桃は蕭々として枝に紅の脣を開きかけて居る、春風がさや〳〵と通り過ぎると、其處らの藁屑がばさ〳〵と動いて、軈て粉挽場の戸や鷄籠を音させて行く。粉挽場の屋根に蔽さつた柳は既に青々と芽を出して、枝が搖れる度に靜かな日の光を波の樣に織り返す。今まで長閑な聲で唄つて居た茂平

は何處かへ出て行つた様子、積藁の上に敷いた筵に茂平の煙草入が殘つて居る。其處に蝶子は恍惚した眼をしながら睦子に髪を結うて貰つて居る。

「もう廂髪にしても可いわ」と睦子は後背に立つて櫛を使ひながら言つた。

「いやよ、お下髪の方が可いのよ」と蝶子は押へながら言ふ。

「だつて御下髪にばかしすると髪が傷んでよ」

「だつて大人の様で厭だわ」

「ぢや、お下髪にね」と睦子は嫣然して蝶子の頬を覗く様になし「髪が多いから手に餘りさうよ」

「姉さん、何時湯河原へ被行るの?」と蝶子は顔を仰向けながら矢張鏡が見たさに下眼で鏡を見る様にして言つた。

「いつだか克巳さんの御都合で」

「行つたら早く歸つてね、私淋しいから」

「あゝ〳〵直ぐ歸るわ」

「手紙を頂戴ね」

「えゝ、でも未だ私が行くか行かないか決まらないんですもの」

「どうして」と蝶子は眼を圓くして手に持つた組紐を睦子に捧げる様な手付をなし「姉さんが行かなければ誰も從いて行く人がないわ」

「でも私では役に立たないんですもの」

「そんな事はないわ」と蝶子は熱心になつて「兄さんが可哀さうだから行つてあげて頂戴ね」

睦子は答へなかつた。此の時庭の花壇の前で櫻井と橋本の聲が聞えた、

「來たわ」と蝶子は笑つた。「橋本さんに餡ハンを進げると可いわ、今朝野球の人から貰つたでせう」

「あゝ、堅くて食べられませんわ」

「橋本さんなら屹度皆な食べるわよ」

「まあ」と二人は笑つた。

柴垣一重を隔てて克巳は縁側に坐つて居る。其の胸の邊が垣根の隙間から見える。日は暖かに蝶子と睦子の身體を照らして、名も知らぬ小鳥が啼いては飛び移り、移つては又啼く、黄色な蝶々が二つ隣の方から飛んで來た、一つが高くなると一つも高くなる、低くなれば又低くなる、くる〳〵と廻つて互に何事かを囁くかと思ふと又直ぐ離れて青天の光の中に紛れ植込の緑の前に現はれる、蝶子は呢とそれを見詰めて居たが軈ていゝ、こくり〳〵と居眠を始めた。

實の妹に別れた睦子は更に蝶子が可愛くなつた。怜悧で無邪氣で快活で能く笑ひ能く唄ふのは萬龜子と同じであるが、蝶子は其れよりも無邪氣である、時には大變に大人びた事を語すかと思へば七つ八つの子供の様な事を言ふ。什麼事があつても悲しい顔をした事がない、而して如何なる場合も人を疑つたり人の惡口を言つた事はない、時には恁ういふ質問を發する事がある。

「姉さん、私は綺麗?」

「えゝ、綺麗ですよ」

「爾かも知れないわ、皆なが私を美人だと言つてよ」

これには睦子もお浪も笑はずには居られなかつた。實際蝶子は此の世の「美」のために生れて來たのだらうと睦子は思つた。屈賦する蝶子の頭を輕く和かに撫りながら睦子は五六年前の自分の事を回想した。私だつて此の位の年には何の苦勞もなかつた。其れが今ほんの瞬く間に此那苦勞の身となつた。彼女は恁那事を思うて居た。と垣の彼方で橋本の熱烈な聲がした。

「夫婦になれば可いぢやないか、馬鹿々々しい、俺は面倒臭い事は嫌ひだ」

「まあ待てよ、君は疎笨で不可よ」と櫻井の朗らかな聲が言つた。

睦子はほつと顔を染めた、而して再び櫛を取

上げたが其の手は顫へて居た。

一八

克巳は只にこ〳〵して二人の顔を見やつて居た。

「一體何の話だよ、其れは」と彼は言つた。

「君が湯河原へ行くに就てだね、看護人が要るだらう、其處で睦さんに行つて貰ふより他に人が無いんだ」と櫻井も矢張りにこ〳〵しながら克巳の顔を見戍つて「睦さんに行つて貰ふに就てはだね、いつその事君と睦さんと結婚して行く方が可いだらうと恁う思ふんだ」

「誰が爾思ふんだね」と克巳は靜かに言つた。

「僕等二人がだ」

「うむ」と克巳は頭を低れたが再び顔を上げて「どうして其那事を思ふのだ」

「其れが一番可いからだ」と橋本は唸る樣に言つた。

克巳は默つた。

「そこで君の考を聽かなきやならんのだが」と櫻井はバットの吸殼を庭へ捨てて「無論僕等は強ふるんぢやないが」

「僕が強ふるよ」と橋本が言ふ。

「困つたなあ」と克巳は腕を拱んで「一體爾いふ考を什麼して起したんだ」

「僕等は睦さんが君を愛してる事を知つたからだよ、なあ森川、君は今此處で直ぐと決める事が出來んかも知れんが、君は睦さんの心が解つてるだらう」

「解らん」と克巳は言つた。

「睦さんは君に對して什麼いふ態度を取つたか又什麼いふ親切を盡したか……」

「其れは解つてる」

「解つてるか」

「感謝してるよ」

「どの位の程度まで感謝してるかね」と橋本が言ふ。

「言葉に盡せないさ」

「爾だ、其れでいゝ」と橋本は勇んで「言葉に盡せない、全く其れだ、だが感謝があれば報いがなければならんね」

「無論だ」と克巳は力を籠めて答へた。

「其の報いを君は什麼するか」

克巳は默つた。橋本は續ける。

「最も欲する處のものを與へるのは即ち眞の報いだらう、睦さんの最も欲する處は即ち君の嬶になるにあるんだ」

克巳の顔は見る〳〵赤くなつた、而して額から汗がだら〳〵流れ出した。彼は何にも言はなかつた。

「そこで、君は睦さんと結婚しなきやならんのだ、君は厭か」

「厭ぢやない」と克巳は初めて口を切つた。

「ぢや結婚するか」

「其れは出來ない」

「なぜだ、君は厭でないと言つたぢやないか」

「厭ぢやないが結婚が出來ないんだ」と克巳は苦しさうに言つた。「僕だつて男だ、睦さんが僕を愛してくれるなら難有い事だ、僕は睦さんが好きだ、だが僕は夫婦にはなれないんだ」

「何故だ」

「僕は人を愛する力がなくなつたのだ、萬龜さんに捨てられてから僕には生活が無くなつたのだ。今假りに睦さんと夫婦になつた處で、其れは本當の僕の心に燃え立つた愛ではない、僕の力も魂も生命も萬龜さんに引拔かれてしまつたんだ。櫻井君、橋本君、もう言つてくれるな、睦さんには氣の毒だが僕は自分の魂を欺く事が出來ない」

「馬鹿な事を言ふな」と橋本は詰つた。「睦さんの親切を感じ人格を信ずれば愛が成立つぢやないか、逃げた萬龜さんより睦さんがどれだけ立

沒だか知れやしない」
「橋本ッ」と克巳は額に手を當てて言つた。「僕は恁う思ふのだ、妻を娶るといふ事は勸工場で物を買ふのとは違ふのだ、此方の品が高いから彼方の廉いのにして置かうと言ふ氣で生涯の妻を決められないと思ふ。我々は一つの事業に目的を有つて全身を其れに打込む、若し事業が成功しなければ斃れるまでの事だ、成功しないからと言つて途中で目的を變へる樣なら初めから目的を立てぬ方が可い、生涯を共にする妻を選んだ僕は今更他の女を娶る事が出來ると思ふか」
「待て〳〵」と橋本は制める樣にして「其れでは君は睦さんを殺す樣なものだよ、睦さんが君に盡したのも其の目的があつたからぢやないか、君は恩人を殺すのか」
「仕方がない」と克巳は額の汗を拭き〳〵溜息と共に言つた
「爾だ、仕方がない」と櫻井は言つた、而して轉りと横になつて天を仰ぎながら「皆な苦しむのだな、自然といふ奴の皮肉のために我々が滅茶滅茶にされるんだ
「俺には什麼しても解らない、睦さんの樣な立派な女を何だつて君は……」と橋本は下唇を凝と嚙んだ。
睦子は頭の腦天から杵を突込まれた樣に立竦んだ。
「姉さん」と居眠をして居たと思つた蝶子は向直つて下から睦子の顏を覗いた。其の眼に涙が充滿に湛つて居た。
「何にも言はないでね」と睦子は微かに言つた。
蝶子は立つてゐたが、睦子の帶に摑まつた、而して顏を其の胸に埋めた。珍らしい鳥が粉白小屋の屋根と柳の間で鳴き出した。春の日は雲に隱れ又二人をはつと照らした。

一九

學生で一しきり往來が賑やかになつて、庭球や野球の人々も散り、合の夕日が高臺の屋根の背後に傾くと、並木の木立を吹く風が烈しく、此の邊が急に淋しくなる。お浪は店を形付けて硝子戸を閉め、其れから食卓の上に茶碗やお菜を載せ、埃の掛らぬ樣に白い布を掛けて扨煙草を一服して凝と考へて居る。彼女は睦子の歸宅を待つて居るのである。
「御飯を濟まして來るかしら、其れとも食べずに歸るかしら」
不圖でなは「萬龜さんや」と呼ばうとして口を噤んだ。姉の留守の時には、妹、娘を相手にし、妹の留守には姉を相手にする習慣が殘つて居るので。
萬龜子は既に此の家の人ではないのだと思ふと彼女は急に淋しくなつた。一度父の許へ走つてから音も沙汰も無い、姉が訪ねれば門前拂を食はすのみか、端書の一枚だつて呉れた事もない。我が娘とは言ひながら薄情になればなるものだ、其れにつけても睦子だけは幸福にしてやりたい、克巳さんの病氣が快くなつたから、兎も角も下話だけはして置きたいものだ。
お浪は次から次の空想に恍惚となつて煙管の吹殻が既に盡きたのも知らずに其儘眼を一方に向けて居た。
「只今！」と睦子の聲が聞えた。
「おうお歸り」と母は夢から覺めて改めて雁首を火鉢に叩き「何時頃湯河原へ御出でなさるんだい」
「何時ですか」と睦子は氣の無い返事をして衣桁に掛けた前掛を出した
「可いよ、御掃除は皆な濟んだし御飯の支度も出來てあるんだから」とお浪は注意深く睦子の素振を見やつて「さあ御飯にしませうね」と優しく言つた。

「えい」
二人は食卓に向つた。
「今日の電燈は暗い事ね、タングスに代へて見ようか」と母は執成顔に言ふ。
「いゝえ、可いわ」と睦子は箸を下に置いて「私食べたくないわ」
「どうして？　森川さんで御馳走になつたの？」
「いゝえ」
「では後でね、お腹が空いた時におしよ、私も何だかお腹が滿いから」と母は逆はずに自分も箸を置いて白い布を引いた。
睦子は母に優しくされゝばされるだけ悲しさが昂み上げて來た。で彼女は次の室へ行つて机の前に坐つた。お浪は默つて其の後姿を見やりながら深い息を吐いた。二人は何時までも默つた。約一時間も經つてお浪が睦子の傍へ行つて見ると睦子は泣いて居た。
「どうしたの？　睦さん」
「お母さん！」と睦子は母の膝に顔を埋め「私お父さんの許へ行けば可かつたわ」
「どうして？」と母は驚いて睦子の髮針を插し込みながら云つた。
「私知つて居たら……私知つて居たら萬龜さんを克巳さんのお嫁にしてあげるのでしたわ、私知らなかつたんですもの、私些とも知らなかつたんですもの」
母は肩を搖がして息を吐いた　事の原因は凡て解つた。
「何ですね、睦さん」と母は故意と笑聲で言つた。「其那事を言つたつて仕樣がないぢやないの？　お前の心持が通じさへすればね屹度誰だつてお前を捨てて置きはしませんよ、お前の心持が克巳さんに能く解つて居ないんですよ」
母は恁う言つて、男といふものの心理狀態や、世間の儘ならぬ事や、自分の若い時の苦勞や、種々な話を仕向けて睦子の悲しみを釋かうと努めた。母が努める顔を見ると睦子も默つては居られなくなつた　彼女は强ひて母に笑顔を見せた。
「氣を永く持つてね、氣を永く」と母は幾度も言つた。

二〇

二人の夜は更けた。お浪は自分と床を並べて寢て居る睦子の頭を見やつて又眼を閉ぢた。彼女の空想は果しもない處まで擴がつた。
「睦さんは什麼に悲しからう」と彼女は思つた。彼女の頭は自分の若い時に溯つた。彼女は若い時に戀人があつた。戀人は從兄弟同士であつた。嚴格な母は彼女の戀人との間を割いた、而して今の良人の油谷國助の嫁にした。詩の樣な夢の樣な青春の戀は脆くも破れて金儲一點張りの男に身を委した時の悲しさ口惜しさは今に忘れられぬ。若し二人の娘が無かつたら彼女は自殺を遂げたかも知れぬのであつた。
「心ならずも親兄弟の義理のために身を賣る悲しさと、生涯を捧ぐべく心に決めた男と添ひ遂げられぬ悲しさ」
此の二つの悲しさは女としての一番大きな悲しみである、お浪は此の二つを嘗めた。若し彼女が世間普通の母であつたら「男は天下に幾許もある、今に好い婿さんを取つてあげよう」と言つて睦子を慰めるであらう、併しお浪は恁いふ事の最も恐るべき罪惡である事を自分の經驗に依つて知つて居る、自分が信じ自分が尊敬し自分の心の底から愛する男を良人にしないもの程不幸な人はないと信じて居る。萬龜子は知らぬ事、睦子だけは女としての最も大きな幸福を與へたいと思つて居た、其れが今に破れかけた。
「何の因果で私達親子は恁那に不運なんだらう」

眼を開くと睦子の顫へる頭が見える。

―泣いてるんだ、泣きたかろ、お泣き〳〵、私も泣きたい―と彼女は肚の中で言つた。「私が、死んで此の娘が幸福になるなら何時でも死ぬるんだが―彼女は不圖恁う思つた。―爾だ、其れが可い―と肚の底の蟲が言つたが「私が死んだら克巳さんだつて此の娘を可哀さうだと思つてくれるだらう、其れが可い―恁う思ふ途端に直ぐに其れを否定するものがある。―無理に此の娘を押付けても克巳さんが厭なのなら克巳さんが迷惑だ―

彼女は蒲團を被つて泣いた。

睦子は迚も眠れなかつた。今日一日が自分の前途も光も悉く破壞された悪日である。幼い時からの希望、頃日中の苦心、企の算段、遂には殺人、其れほど恐ろしい罪を犯しながらも生きて居たのは只愛の一滴に生命の渇きを醫さんためであつたのだ、其れも凡て空である。此那苦しい事になるなら寧そ風から諦めれば好かつた、近付かなければ可かつた、介抱もしなければ可かつた。克巳さんが何時までも〳〵十年も二十年も五十年も病氣が癒らなければ可かつた、爾すると私は一生看護して居られるのだ。癒つたら嫁になれるといふ希望の下に看護して居る方が今より遙かに增だ、何も彼も終だ。私は人を殺した身體だ。其の報いが來たのかも知れない。爾だ、人殺しをした、爾だ。

彼女は凝と喉を塞らして考へた。失望の苦みと殺人の罪の苦みが混亂して胸を昂り上る。

―私は生きて居られない、生きて居ても詰らない―

彼女は死を考へた。彼女の母が死を考へた如く彼女も亦死を考へた。生きて行くとすれば前途に只暗と苦みと悲みとある許りである、死ねば凡てが拭ひ去られる。彼女は自ら轟く胸を靜めて成るべく冷やかに此の問題を考へるべく努めた、が歸する處は矢張死にある。

―死ぬのが一番可い―

睦子の頭には極めて明晰と解つた、生きて居る必要を認めない自分が泣きつ苦みつ生きて居る事こそ却つて大きな罪惡の樣に思はれた。

―死にませう〳〵―

彼女は一滴の淚さへ出なかつた。彼女は死場所を考へた、而して人々に厄介を掛けぬ樣に汽船の甲板から投身をしようと決心した。彼女は凝と起き上つて机の上の手帳を開いた、而してなるべく簡單に書置を書かうと思つた、併し筆を取ると書きたい事は雲の湧くが如く續いて出る。種々考へて到頭彼女は只母に對して不孝を謝し克巳兄妹や其他に對して今までの御禮を述ぶるだけの事にした。次に彼女は此の手帳を何處に入れて置かうかを考へた、夜が明けたら何氣なく家を出よう、それまで手帳の置場を考へて置かう、彼女は手帳を枕の下に入れた。

―これで何も彼もおしまひだ、お母樣と枕を並べて寢るのも今夜限りだ―

彼女は母の方を見やつた。母は頭から蒲團を被つて眠つて居るらしい。外の闇に雜木がざわざわと風に動いて、時計が淋しく三時を打つた。

―御免なさい、お母さん―と彼女は口の中で言つた、而して自分も蒲團を被り母の方に向つて兩手を合せて拜んだ

―御免なさい、お母さん、ねえお母さん―

彼女は又もや繰返した。彼女の極めて微かな聲は彼女の胸を一度に衝いて、恰も堰き止められた流れが一時に潰えた樣に悲しみの波が全身を襲うた。彼女は聲を立てまじと懷手と寢着の袖を噛んだ。だが怺へようとすればするだけ胸苦しくなる、吃逆りあげる淚は喉に昂み上げて來る、彼女は呼吸を殺して泣き出した。彼女の

聲は殆ど蟲の音よりも低かつた。と其の聲よりも一段と低い泣聲が聞える、二つの聲は或は一緒に或は別々になつた。彼女は不圖夜具から顏を出した。母の蒲團は波の如く動いて歔欷の聲が段々に高まつて來た。

「御免なさい、お母さん」と睦子は不意に床を出て母の枕元に兩手を突いた。「お母さん、私死なないわ、私今死なうと思つたけれども死なないわ、私にお母さんがあるのを忘れて居たつよ、私が死んだらお母さんも死ぬわね、私死なない、私死なない、どんな事があつても」

母は蒲團を跳ねのけて吃驚した樣に涙ながらの眼を向けたが、默つて睦子の手を掴んだ。

「お前辛からうね、さあ此處へお入り」

睦子は轉がる樣に母の床の中にもぐり込んで確乎と母に抱き付き其の胸に顏を當てた。

母は靜かに二人の上に横を掛け直し其れから片手を延ばして睦子の首の下に差し入れ、片手で其の背を撫でながら、

「睦ちやんや」と嬰兒の時の樣に優しい聲で言つた。「母さんと半分づゝ泣きませうね」

「私死なない、私死なない」と睦子は矢張泣きながら言つた。

別天地

一

硝子窓に櫻の花片が粘着いて居る。暖かい小雨がしと〳〵と庭の植込を濡らして、春も終りの金絲雀が一しきり奥の室で啼き出す。萬龜子は風呂場の小桶を前に恍惚と糠袋を持つたまゝ動きもせずに默つて居る。風呂桶から湯氣がほや〳〵と出て硝子戸を曇らすと、雨ながら日射が又ぼつと其處らを明るくして風呂端の銅を閃々させる。棚の上に脱ぎ棄てた茄子紺地の縞のお召の袷は紅絹の裏を飜して、友禪の襦袢の間から市松格子の伊達卷が垂れて居る。萬龜子は不圖吾に返つて首筋を洗ひ始めた。滑かな柔かい肩先まで糠袋が氣持快く滑る。二三度同じ事をして居る中に彼女の手が段々弛んで又恍惚と窓の外を見やつた。土藏の方で誰かが歌を唄ふ聲が朧に聞えて電車や荷車の響が遠く人界を隔つたやうに一定の間歇と律調を送る。

「もう春も終ひだ」と彼女は窓の花片を見やつて言つた、而して凝として居る中に何とも知れぬ淋しさが胸を衝いて起つた。

此時浴場の方で良人萬吉の聲が聞える。

「あゝ好い樣か、えらい良い風呂やな、一寸座に附いてんねやろ」

女中か誰かの聲が聞えると直ぐ又良人の笑聲が聞えた

「そや〳〵、俺に惚れてるさかいな」

後は二人の混合した聲に亂されてしまつた。

萬龜子は悚然として立上つた。彼女は名状し難い苦しい樣な壓される樣な氣分になつた。

どうして彼那に下卑てるんだらう と彼女は思つた。商人は凡て恁ういふものかも知れぬが來客のある時に、人の顏を見ると先づ第一に恁う言ふ。「儲かりまつか」

朝に晩に語る處は金儲の話である、何を見ても、何を見ても、なんぼ位やろな」と言ふ。新婚旅行の日に箱根へ行つた、而して玉簾の瀧を見た時良人は恁う言つた。

「此の瀧を大阪へ持つて行つたら儲かるやろな、此の石一つ千圓でも安いもんや」

風景を賞でて自然の美の中に樂んでこそ旅行も意義あるものだが一本の樹一塊の石に一々價踏をするとは何といふ心理状態だらうと萬龜子は不思議に思つた。彼女は今まで幼さい時から接近して居たものは學生ばかりであつた。自

由な放膽な而して精神的な學生の國から俄かに大阪の商人の世界に移された彼女は、見るもの毎に驚いた、更に驚いたのは新婚の第一日の夜であつた。宿屋の主人及び女中達は二人を心を籠めて待遇した、而して新婚夫婦と見て取つた彼等は成るべく二人の室に出入せぬ樣にした。たつた二人限で鼻を突き合はして居ると互に手持無沙汰を感ずる、爲三は頻りに話を持ちかけようとしたが、萬龜子に取つては頗る無味な話ばかりであつた。

「まあ是から金を儲けて二人で豪らなろな」

恁う言はれた時彼女は何と答へて可いか解らなかつた。知識の上人格の上に於て豪くなるといふ事は學生の希望である、金を儲ける人が豪いといふ事は萬龜子の未だ聞かざる處であつた。凡て恁ういふ風に二人の話は全然合はなかつた。併し爲三は構はずに言ひ續けた。今鴻池の財産は幾許で住友の財産は幾許だといふ樣な知名の人々の財産調べを言つて聞かした。萬龜子は段々心細くなつた。

財産調べが濟むと給仕の女中を捕へて藝妓の話に移る、女中が去るといかにも退窟さうな顏をして欠伸ばかり續ける、而して二人の前途や互の人格を高める事に努力すべき事に就ては何事も語らなかつた、終りの話は更に恐ろしく更に卑しいものであつた。彼は一本の酒にとろりとした眼を向けて恁う言つた。

「恁うしてお前と夫婦になつたらお互に隱す事も無いわい、お前かて家に居る時は情人の一人や二人はあつたやろ、どんな男や一寸言うて見い、一人か二人か、まあ三人ほどあるねんやろ」

萬龜子は餘りの淺間しさに泣いた。

二

萬龜子は緩くり溫つて風呂を出た、而して鏡臺の前に坐ると矢張其の事を思ひ出す。濁りなき美しいものと思つて暮らして來た此の世の中に恁那恐ろしい人もある。結婚の當日！處女の夢が破れて現實の世界へ突き出される第一歩の日に於て百年を共にすべき良人が恁ういふ卑しい人かと驚いた其の驚きは深く〱彼女の腦に刻まれたのであつた。

日は猶豫もなく過ぎ月は人を待たずに去る。元より覺悟の上ながら左りとては此の若い盛りの五體をあの男に蹂躙られるのが恨めしい。霎時鏡臺を見詰めて居る中に我が顏が判然と解つて來る。眞白な肌は湯溫りのために薄紅を帶びて、若やかな血が胸に腕に跳つて居る、豐澤な髮は續に嚴び又首筋を徹つて脣の色は薔薇の如く紅い。彼女は自分の顏を見るのが好きであつた。其れは子供からの嗜好で、自分の姿を映しては笑つたり齒を露したり眼を三角にしたり額に皺を寄せて見たりして睦子や母に笑はせたものだ　實際彼女は鏡に向ふ時に毎も自分の生を感ずるのであつた。此の悅びは處女特有のもので、肉の色、健やかな四肢の發達、呼吸と共に動く胸、むつくりとした乳の形、其等を見る度に、自分の青春は限りなく前途の幸福をほのめかすのである、今彼女は鏡に向つて凝と其等を眺めて居たが、軈て驚いた樣に乳房を兩手に隱した。

「爾だ、爾ぢやないかしら、いや爾だ」

口の中で呟きながら暫時眼を閉ぢたが又恐々ながら眼を開いて窃と兩手を放す、豐かな肉付の胸、女性の美しさと神秘を蔵むる胸の如く柔かな乳房の尖端に、一點の梅の蕾を彩る、其れの周圍は微かに薄暗い吉野紙に包まれてをかの如く見える

「少し早い樣だ、爾ぢやないかしら」

鏡に見、又首を低れて見る、以前に處女の誇と滿る濁りなき白い色とは異つて疑ふべくもなき此の濁色は消さうとしても消えない、若

や若しやと思ひつゝ暮らした破滅の日が眼前に歴々と現はれた。其れは死刑の宣告を受けた罪人が愈執行の日が來た時と同じ心持であつた。萬龜子は慌てゝ乳房を抑へた、而して急に着物を着けた。彼女は化粧する勇氣も失せたのである。

「これで何も彼もお終ひだ」と彼女は言つた。

一生の運命が此に定まつた。豫てから恁うあるべき事と思ひ來たのだが、扨て恁うなつて見ると餘りに慘酷だ。あの男は永久に私の良人となつたのだ。私は心にもない男の胤を宿して人の母となるのだ。これから何十年といふもの厭な良人の顏を見て暮らさねばならぬ以外に厭な子供の母となつて暮らさねばならぬ。良人と子供は別なもので、良人は厭でも子供だけは可愛いものだと言つた人があつたが、若し私が子供を愛する事が出來なかつたら什麼しよう、どうせあんな人の子だから碌なものは生れはしまい、爾すると私は此の上に二重の苦勞をしなければならない。

彼女は自分の友達や近所の若い人達を見て少からず恐れた事がある。華美で若くて青春の氣が漲つて居る樣に思はれた令孃達も、一旦人の妻となるともう意氣地がなくなり、姉妹の樣に仲好くして居た友達とも往來しなくなり、而して子供を生むと段々に顏が窶れて凡てが凋落して來る。「私あんなになりたくない」と彼女は毎も思ふのであつた。其れが今自分の境涯となつた。

彼女は逃げる樣に風呂場を出た、而して急いで居室へ入らうとすると良人の聲が聞える。

「阿呆らしいツ、其那事ありまつかいな」

「貴方は御俐巧で被居いますよ、まあ爾思つて被居い、今にね」と女の聲がする。で二人は萬龜子の姿を見るや否や急に口を噤んだ。

三

「丁度可い處や、お萬龜」と良人の爲三は今まで笑つて居た顏を其儘に向けて「此の別嬪さんは櫻井さんの姉さんえ、新らしい女やよつてお前とは可い御伴侶や」

「新らしい女ではないわよ、もう古い女よ」と婦人の客は抑える樣に言つた。

「櫻井さんの？」と萬龜子は合點ゆかぬ顏に一寸躊躇して兎も角も「お初にお目に掛ります」と挨拶をした。

「私はね」と婦人はもの馴れた態度で「章の姉ですよ、早稻田で大變に御世話になつたさうで夏休みに歸りますと貴方のお噂ばかりですよ」

「まあ」と萬龜子は懷かしさにはツと顏を染めて「まあ櫻井さんの、まあ爾ですか」と言ひ續けた。殆ど一家族の如くに毎日遊んで居た人、中にも我が戀人の親友たる櫻井の姉かと思ふと些しも他人の樣な氣がしない。

「どうか是を御緣に御近付にして頂戴ね、大阪といふ處は無智の世界ですから、思想上や文藝の話やなんか解る人は全然無いのよ、貴方は私達の歌の會へ一遍被來つて下さいね、ほんの五六人ですけれども皆な新らしい歌ばかりよ」恁う言つて婦人は嫣然して「爾々私、名前を言はなかつたわね、菊江といふのよ、昔風で厭な名だけれども親の付けた名だから仕樣がないわ、私の親達は商人ですから趣味は低級だつたのよ、災難だわね、ほゝゝゝ」

「はてな」と萬龜子は首を傾げた、自分の知つて居る櫻井章は輕快で單純な人ではあるが、此の樣に薄つぺらで饒舌ではない、此の人は果して本當に章さんの姉であるだらうか。

「あの……章さんの御姉さんで被居いますか」と萬龜子は念を押す樣に訊いた

「えい爾よ、隨分ラブストーリーもおありだつたさうですね」と菊江は眼に笑を帶びて言つた。

年の頃は一見すると二十三四かと思はれるが、房やかに額の上に渦々く前髪に透いて見ゆる生際の薄いのと、肌の光澤が失せても白粉と紅白粉を巧みに塗つて小皺を隱してる處を見ると最早や二十七八にはなるだらう。金紗縮緬に草葉の裾模樣をした袷を着て其の上の半被布は茶地の裾だけに埃及模樣の環繋ぎを横一文字に見せて居る。

「大阪の事は何も知らんよつてな、能う敎へてやつて下はれ」と爲三は立上りさうにして言つた。

「いゝえ、私こそ」と菊江はダイヤの指環を二本まで嵌した手を被布の鈕の處へやつて「でも爲さんは幸福ですわね、こんな綺麗な方を奥樣に御持ちになつて」然う言つて直ぐ萬龜子に向ひ「まあ可いお髮ですこと、隨分髮が多いでせう、貴方此方では好い髮結さんがなくて困るのよ。美顏術をする處が一箇所だけなんですもの、私は癇性ですから外の處へは行かないのよ、美顏術だけなんですの、何しろね、大阪といふ處は一年に一遍か二遍しきや髮を洗はない處なんですよ、芝居などへ行きますと頭の臭い香がぷんぷんして堪らないのよ、東京では大抵五日に一遍やそこらは洗ひますのね、本當に大阪は厭な處よ、爲さんなんか是で大阪では堂々たる紳士で豪商で被居いますからね、おや御免なさい、貴方の旦那樣でしたつけね、私子供の時からの御馴染なもんですからつい口が滑つたのよ」

「棚下しは止めて下はれ、是でも付いてる人が付いてますさかい」と爲三は言つた。

「ではねえ爲さん、今日奥樣と御近付になつた記念に何處かへ伴れて行つて頂戴」

「何處へ」

「浪花座……」と菊江は言つて「ねえ奥さん」

「宜しい、行きませう」と爲三は言つた。

萬龜子は呆氣に取られて、ものが言へなかつた。東京と大阪とをちやんぽんにした言葉で滑かに無遠慮に饒舌り續けた此の女は果して章さんの姉さんだらうか、而も斯くまで狎れ狎れしくする二人の間は何だらうか。萬龜子は默つて二人を見比べた。

四

芝居行は一決した。萬龜子は氣が進まぬながらも居室へ入つて着替に掛つた。彼女の頭は餘程疲れて居た、初めは嫉妬をしたといふ恐怖・次には突然の來客菊江の舉動、此の二つのものが種々な絲の亂れとなつて鮮明と見えもし又空虚ともなり更に取止めのない胸騷ぎともなつた。彼女はいつそ芝居行を斷らうかと思つた、併し良人の命令、來客の所望、其れを度外視する事が出來ぬ。

「お召替しやはりまつか」と女中のお竹は背後へ廻つた。

萬龜子は默つて箪笥から着物を取出しながら「あのお客さんはどんな方なの？」

「櫻井の孃はんだつか」とお竹は疊に膝を突いて「あの人はな、四遍ほどお家に行かはりましたんね、何處へ行つても辛抱出來やせんよつてな、出戻りになつて居やはりまんね、宅の旦那はんともな、お家の話ありましたんねや、旦那はんが嫌ひやよつてな、貴方はんが來やはるまでに……」

「あゝ爾かえ、其れで解つた」と萬龜子は猶も續けようとするお竹を遮つて長襦袢をふはりと肩に掛けた。

三人は連れ立つて店を出た。途中から電車に乘つた。

「自動車にしませう」と菊江は言つた。

「自動車に乘つてもな、浪花座の前まで行かれやせんよつてな」と爲三は言つた。

電車は滿員で、而も乘りしなには押し合ひへし合ひしたので菊江は男の客に突き飛ばされた。二人は漸く吊革に摑まつた。

「大阪の人は是だから情ないわ」と菊江は徐々言ひ始めた。「東京だつたら學生さんや官吏は無論の事職工に至るまで婦人に席を讓る事位は知つて居ますわ、大阪では婦人を突退けるんですもの、無智ほど恐ろしいものは無いのね」

大きな聲で四邊に聞えよがしに饒舌り續ける。腰を掛けた人達はくす／＼笑つた。

「靜かにして下はれ、賴みまつせ」と爲三は賴む樣に菊江に言つた。

「でも東京では……」

如何なる場合にも亦如何なる事件に遭遇しても東京を賞めちぎつて大阪を貶す。

萬龜子は母のお浪を憶ひ出した、で彼女は小聲で恁う訊いた。

「貴方大阪はお嫌ひ？」

「えい、大嫌ひ」

「貴方長らく東京に被居つて？」

「えい」

「何年ばかり？」

「一年より少し……少く」と刷と顏を染めて菊江は小聲で答へた。

「でも言葉はすつかり東京ね」

「爾でもありませんわ」

菊江は稍や得意になつた。

「思うた程惡い人ではない」と萬龜子は肚の中で思つた。

道頓堀の賑やかさは萬龜子に意外であつた。只見る、往來の軒から軒に渡した大旗や小旗、幟、櫓下、看板、其の眼まぐるしい裝飾の衣を着て五つの劇場が無數の人を吞みつ吐きつして居る、吳服屋、小間物屋、飲食店、寫眞屋、どの店も／＼客が充滿で西から東へ、東から西へ、但しは南へ折れ又南から來る人の數は幾千幾萬とも知れぬ、劇場の裝飾と店々の裝飾と光り合ひ、輝き合つて只騷々しく賑やかな一郭は東京の淺草にも見られまじき興奮的狀態である。

まあ大變な人ですこと」と萬龜子は言つた。

「この人達は何處へ行くんでせう」

「皆な芝居や活動を見に行くのよ」と菊江は答へた。

「毎日此那に賑やかなの？」

「えい、大阪の人は讀書や園藝や冥想や、高尙な音樂が解らないもんですから、此那低級な芝居や活動ばかりが樂みなのよ、御覽なさい、此處を通る人に學生らしいのは無いぢやありませんか、東京では……」

「もう解りました」と爲三は宥める樣に言つた。

五

浪花座の呼物は鴈治郎の天の網島であつた。

「これだけは東京よりも優つて居ますよ」と菊江は萬龜子に言つた。

見物席は立錐の餘地もなかつた、兩側の桟敷は八分通り藝者に占領されて居るのだ、黒い髮と白い顏、種々な美しい着物の色は膝隱の赤い色や紋の提灯の彩色や電燈の光に輝いて欄境に灯の影が重つた樣！　見物人の間々に茶簞笥の小型の樣なものを据ゑてある、其れは酒や肴の器であると說明を聞いて萬龜子は肝を潰した。

―飲食をしながら芝居を見てるんだ―

恁う思ふと彼女は、ほんの遊興に芝居を見る人々の氣が解らなくなつた。彼女は曾て帝劇を見た、又藝術座の芝居も見た、其時に見物人は煙草すら喫まなかつた。見物席に酒器を運ぶは東京では場末の小屋ばかりと聞いて居た、で菊江に此の事を語ると、彼女は此の點だけは大阪を罵らなかつた。といふのは菊江自身もオヘラ

袋の中にキャラメルや焼栗を忍ばして居たからであつた。

次に嬉しいのは見物の藝者や内儀や令嬢達に至るまで能く、いろいろのものを食べる事であつた、殆ど間斷なしにキャラメルや欠餅や昆布を頬張つて居る、口の動くのが止むと懐中鏡を出して公然と御化粧を始める。尤も菊江は何とも言はなかつた。萬龜子は國が異へば風習も異ふものだと感じた。

紙治郎の紙屋治兵衛はいかにも濃艶で情的であつた。チヨボ床に太棹が響る、其の荘厳ある引締つた音色は曾根崎といふ狭斜の巷にすつくりと調和したものであつた。其處に人目を忍ぶ治兵衛が頰冠りを取つた時は凄艶な見返で小春の許へ通うて來る、花道の面影からして宛然三百年前の治兵衛其の人であつた。劇の筋が段々進むに伴れて役者の身に熱氣が溢れ見物人の眼に昂奮の光が漲うた。小春も治兵衛と孫右衛門と見物人と四つのものの魂は遂に一つに融け合つて藝術といふ偉大な恍惚境に流れ込んだ。幕が閉つた。見物人は眠から覚めた様に各自に復つて又もや酒を飲む、ものを食ふ、がや〳〵としたどよめきに満ちて居る。

萬龜子は默つて舞臺へ見入つて居た。彼女は芝居を見て居る間は何もかも重苦しい力に壓せられた様な氣がした。若し太兵衛が面白くもない因縁々々しい行爲をして此の劇の興味を妨げた時彼女は一二度吾に復つた、其の時彼女は自分のお腹の事を思ひ出した

嫉妬だらうか、確かに其れに違ひない

此の厭な思ひは、次の小春の愁嘆に打消された、其れから般若の事は忘れて居た。

ただ萬龜子は此の芝居の根本に潜つて考へて見たくなつた。どう考へても可笑しい、昔の人は斯うであつたらう、又今日の人でも恁ういふ治兵衛の様な男に同情を有つ人があるかも知れないが、自分には少しも同情を有つ事が出來ない

治兵衛が小春を愛して財産を蕩尽させにしてしまつた、其れは仕方のないとした、たゞ其れほどまでに小春を愛して居るなら女房のおさんと潔く離縁しないのだらうか、人は同時に二人を愛する事が出來ぬ、二人を愛するといふのは虚偽だ、良人の愛がなくして單に妻といふ名義だけを與へて置くのは治兵衛は卑怯におさんを侮辱し過ぎて居る、おさんを愛するならおさんの人格を認めておさんを自由にしてやるべき筈だ。其が萬龜子の第一疑問であつた。

三人の中で一番同情すべきものは、おさん一人である、手足の爪を離しても皆な良人の爲ぢやないといふおさんの主義は如何なる犠牲を拂うても自分の恩むに足るものがある、おさんは徹頭徹尾良人本位である、良人さへ幸福であれば自分は死んでも構はない、これがおさんの精神である、純なる愛、本當の戀はおさんにある。

其れに比して小春の愛は何といふ虚偽だらう、小春はおさんに對する義理だけを重んじて愛想つかしを言つた。然た、小春の行爲は義理である、治兵衛を幸福にしようといふのではない、おさんに失はれまいとする虚栄だ、多少憫れむに足るとするも、おさん程の貞節の愛ではない。其れと共に治兵衛に至つては言語同断で、二人の女を同時に我がものとして居ようといふデカダンである

萬龜子は恁う思つた　同時に彼女は慄然として身慄した

一おさんが生命がけで良人を愛した、あれだけ良人を愛する事が出來たら什麼に幸福だらう、私は、私は……私の良人は……

六

おきいが病氣をした、小春が病氣をしたといふ

つて見物人は眼を泣き腫して居る。併し萬龜子には二人とも少しも可哀さうでなかつた。生命を賭して戀する男のために什麼苦勞をすればとて其れは女の最大幸福である、世の中に最も慘めな最も可哀さうなものは、愛する事の出來ぬ良人を有つた女である。其れは私だ、私はおさんより小春より可哀さうな女だ。而も其の呪はれた良人の胤を宿して呪はれた子は此のお腹の中に生きて居るんだ。

彼女は默つて下を見詰めたまゝ脣を嚙んだ。と突然彼女は再び身顫に襲はれた。

「虛僞だ、小春の義理立が虛僞とすれば私は其れ以上の虛僞だ、愛する男があるのに、夫に義理を立てて戀を讓るなんて、其れは本當の虛僞だつた。小春以上の虛僞だ、戀は女の靈だ、靈は讓つたり讓られたりするものではない」

飛んでもない事をしてしまつたと彼女は足元から鳥が立つた樣に驚いた。恁ういふ事は今まで考へなかつたではなかつた。併し彼女は一方に於て姉の犧牲となつたといふ事を大變な美德として誇る心があつた。だが今となつては凡て其れが虛僞である、而して其の結果は克巳さんと姉さんとを幸福にする事が出來ない。

何にもならない事をした。足を踏返して元へ歸らうにも自分は既に爲三の子を宿して居る、虛僞の錘は大盤石の如く重い。虛僞の結婚、虛僞の妊娠、虛僞の生活、虛僞の靈魂、これから先は十重二十重に虛僞の雲が動いて居る、だが什麼する事も出來ない。

「何を考へて被居るの？」と菊江は萬龜子に昆布の片を與へながら言つた。

「いゝえ、何も」と萬龜子は漸と氣を陷いて强ひて嫣然して「今芝居の事で……」

「貴方什麼思つて？」

「いろんな事を考へましたわ、私苦しくなりましたの」

「あら、此那浪漫的な誇張的の劇を見て何か觸れる處があつて？」

「えゝ、ありますわ」

「どんな事？」

「治兵衞の事ですが、私治兵衞は不徹底だと思ひますね」

「不徹底？」と菊江は何氣なく言つて「でも男といふものは二人も三人もの女に戀するものぢやなくて。例令ば肥つた女と瘠せた女と中位の女と同時に三人の女があると、男は其れ〲違つた處に戀が出來ると思ひますわ」

「まあ」と萬龜子は呆れて「男には左樣だとすると女は什麼なるでせう、同時に二人も三人もの男を戀する事が出來るでせうか」

「其りや出來るかも知れないわ、何故つて貴方、人間はお刺身と燒魚と香物と吸物を同時に食べられるでせう、ほゝゝゝ」

萬龜子は不思議さうに菊江の顏を見詰めた。

「洋食にしてもビフテーキとフライとコロッケと——」彼女は此の比喩が餘程得意らしく繰返して隣の桝を指さし「御覽なさいな、貴方、治兵衞さんが小春に惚けて居ますよ」

と見ると良人の爲三は何時の間にか隣の藝者の群に入つて機嫌の好い顏をして高話をして居る。

「何處ぞへ行きまよか」と爲三は言ふ。

「斷つてからにして下はれ」と藝者の一人が言ふ。

「奧樣にだつか。宅の奧樣はおさんよりも貞女やさかい、大事おまへん」

「もう一人の方は。第二號は？」

「二號も三號も十號まで承知や、自動車を言ひまよか」

「自動車よりも飛行機にしなはれ」

「何でも構やしまへん、錢の安い處で行きまよ

う」

「貴方でもお錢が惜しうおまつか」

「阿呆らしい、錢のお蔭で生きて居まんね」

丸々と肥つて首が短く色が白く四角な顔で、少し猫脊の背中を丸くして藝者達の顔を見廻しながら、話は段々卑猥に陷ちて行く良人の姿を見て萬龜子は思はず席を立つた。

七

次の幕が開いて萬龜子は座に戻つたが、彼女は舞臺に如何なる藝が行はれ如何なる役者が何をしてるかさへ解らなかつた。

「是から所作事よ」と菊江は言つた。

萬龜子は漲る樣な三味線の音を聞きながら又もや暗い／＼思ひに耽つた。

「厭になつてしまふわ、あれが大阪の紳士といふものよ」と菊江は突然萬龜子の袖を惹いた。

氣が付いて見ると隣の桝に藝者を相手にして居るものは爲三ばかりでなかつた。金時計や金指環を光らしてる紳士が二三人、其等が傍若無人に酒を飲む、いやらしい話や擧動をする、中には人々の視線を受ける事を矜るかの樣に藝者に巫山戯らすものもある。萬龜子は默つて心の中で泣いた。消魂しい太鼓の音が聞えた、見物人は總立になつた。

「もう歸りますのよ」と菊江は言つた。「爲さんは未だ藝者と巫山戯てるわ」

然う言つて彼女は爲三が花柳界に勢力ある事や、他所に妾を圍つてある事などを小聲に語つた。其處へ爲三の圓い顔が現はれた。

「私一寸寄る處あるよつてな、一足先に歸つてや」

「藝者と一緒なんでせう」と菊江は嘲る樣に言つた。

「阿呆らしい」と簡單に言ひ捨てて爲三は人集の中に隱れた。

然う言ふ事は萬龜子に取つて大した事ではなかつた。出來る事なら只た一人で暗い町を歩いて見たかつたのである。

家へ歸ると夜は更けて丁稚共の鼾が快く聞えた。二階の父の居間には父は未だ床に入らないと見えて算盤を彈く音がぱち／＼と響く。萬龜子は窃と階子段を昇つた。と見ると明るい電燈の下で父は膝の前へ帳簿や紙屑を充滿に廣げ、大きな老眼鏡を掛けた眼を凝と算盤に向けて屈へ込んで居た。鼻高く額廣く顔長く黑と白との短い鬚がもじや／＼と頰と腮を汚して居る。節太な樹木の樣な指先を算盤の五珠の上に突き差して扨て帳簿の方へ眼を移し又一心に指先を瞶める。

「あの指先に生命が籠つてるんだ」と萬龜子は思つた。仕事の邪魔にならぬ樣に窃と足を戻さうか但しは默つて見て居ようかと思ひ惑ひながら躊躇して居ると、軈て父は鼻から太い息を吐いた、而も五珠の上の指先は依然として突立つて居る。彼の眼と彼の力と彼の精神は凡て此の指先に注がれて恰らに物凄いまでの眼光に萬龜子は慄然とした。と彼は軈て算盤をがらりと捨てて此方を見た。

「お萬龜か」と彼は驚きと共に言つた。

「はい、只今」

「芝居へ行つたのか」

「はい」

「爾か」と父は凝と萬龜子の顔を見て「まあ入れ」

萬龜子は入つた。

「爲三は？」

「一寸用事があるとかで……」

「未だ歸らないんだね、うむ、可し／＼」と父は首肯きながら「これを見て御覽」

膝の前に書きかけた一枚の書付をお萬龜は手に取るや否や吃驚した。

「遺言狀！ まあ什麼したの？ お父さん」

呆る〻娘の顔を見詰めて父は矢張黙つて居る。

「どうしたの？」

「俺は死ぬんだ」と父は言つた。

「どうして？」

「死ぬ様な氣がした、二三日前に爾思つた」

「そんな事は當になりやしませんわ」

「いや、爾ぢやない」と父は膝を進めた。

八

大阪に屈指の豪商、西洋薬品雑貨店で僅々十年の間に數百萬金を貯へた油谷國助の傳記に就ては何人も知るものはない。或者は稅關の役人に取入つて密輸入をやつたと言ひ、或者は支那濠洲の沈沒船から幾萬の英貨を盗んだのが本となつたのだと言ひ、或ものは財産家の未亡人を瞞着したのだと言ふ、區々にして何れとも定まらぬが、兎も角彼は官吏ともなり紙屑買ともなり支那朝鮮の浮浪人ともなつた事だけは事實で、又ある未亡人のために妻子を捨てた事も事實で、一時は三箇所に妾宅を置いた程の荒淫者である事も事實である。彼は今六十の老の坂でありながら猶勇名を花柳界に轟かして居る。

彼の生涯を通じて一貫した主張は只左の一語であつた。

「金と女」

其れだけである、彼は毎も斯う言ふのである。人間の價値は金で決まる。人間の樂しみは女にある。什麼人間でも金で以て動くし什麼人間でも女が嫌ひなものはない、若し人間が女に好かれない様になつたら其れは其人の末期である。此の持論は彼としては根據のある説であつた。彼が商賣に於て又相場に於てする事爲す事毎にとん／＼拍子に成功した時は彼が最も多くの藝者に持て囃された時であつた。

萬龜子が爲三と結婚して間もなく彼の妾のお照といふ女は某喜劇役者と通じて逃亡した、逃亡した事を知つた時彼は直ぐに斯う言つた

「女に逃げられるのは俺の運が末になつたのだ」

其の日から彼は一切店の事を爲三に引渡した、而して一歩も酒色の巷に踏入らなかつた。或日彼は轉寝をして居ると自分の影法師が無くなつた夢を見た。眼が覺めると身體中に寒氣を感じた。振返つて見ると影法師がない、彼は慌てて縁先へ出た、そして障子に鮮かに映る我が影を見て笑つた。

が其の日から、彼の心は段々に淋しくなつた。

「俺は死ぬ」と彼は思つた。翌日彼は物置小屋へ梯子を取りに行つた、梯子の下に大きな古い風呂桶があつた。桶の中に木屑や板片や瓦落多が詰まつて居た。

「まだ使へる風呂桶をこんなにして置いて勿體ない事だ」と彼は呟きながら其等の芥を掃き出した、而して桶を動かさうとすると[illegible]と音して底が割れて中に大きな穴が開いた。

「使へば使へるのだが使はずに置いたから腐つてしまつたのだ」と彼は腹立たしさうに言つた。家へ入ると丁稚共にも女中にも同じ事を言つて聞かした。と其れを言つてる中に彼は自分と風呂桶とは同じ運命だといふ様な氣がした。

「俺は餘か進んだ、[illegible]が俺の許から逃げた」

彼は黙つて二階へ上つた、而して食事の時の他は決して下に降りなかつた。愈々死ぬんだと決まれば種々支度をしなければならぬ事が澤山ある。第一に彼の頭に浮んだのは財産の處分である。帳面の上では三百萬圓、此の半分は爲三に遺すべき約束だが後の半分は自分の權利に屬するものである。其の百五十萬圓を什麼分配しようか。勿論全部は萬龜子に遺すべきもの

に違ひないが、扨自分が死ぬとなると長い間捨てて置いた妻のお浪や姉娘の睦子の事も氣に掛る。百萬圓を萬龜子に遺して五十萬圓を睦子に遺さうか、其れは多過ぎるから三十萬圓にしよう。いや、彼等は俺に背いたもので親でもない子でもない妻でもない、謝罪りに來たら恕さうと思つたが一度も顏を出さないから一文なりと與るべき筈がない、全部を萬龜子に與るのが至當だ。萬龜子に與るといふよりも、萬龜子と爲三の間に生れるべき子に與るとする方が爲三の氣持も好からう。

「什麼だ、其れで可いだらう」と國助は萬龜子の顏を見やつた。

「御姉さんには？」と萬龜子は父の顏を見返して言つた。

「彼奴か、彼奴には與らないよ」

「では私も戴きません」と萬龜子は言つた。

「何故だ」

「御父樣」と萬龜子は改まつて「御父樣はまだまだ御老へにならなきやならない事は幾らもありますわ、無論遺言狀なんて此那ものは早過ぎますけれども」

「老へなけりやならない事？」と父はむつかしい顏をして額に手を置いた。

九

萬龜子の言つた考へなきやならない事といふのは母の事、姉の事、自分と爲三の事、金錢を以て喜ばしてくれるよりも爲三と離緣してくれる方が遙かに嬉しい事なのであつた。併し國助には其れが解らなかつた。

「其れでは、せめて十萬圓なりと睦子に與らうか」と思つて見た。

恁ういふ風に彼は毎日の樣に遺言狀を書き直して見た。其の中に金を與らなければならぬ費途が續々と殖えて來た、番頭にも丁稚にも、自分の情を掛けた藝者達にも。

「是では幾らあつても足りやしない」と彼は思つた。同時に彼はあらゆる奸策や陰謀や卑劣な行爲を以て人の知る能はざる屈辱や苦勞を忍んで漸く貯へ得た百五十萬圓の財産もいざ人に施すとなれば極めて僅少なものである事に氣が付いた。

「娘達を喜ばすためなら、何も財産など貯めなくても可かつたんだ」と彼は思つた。「さて恁うなると人間は何を遺すべきものだらう」

考へは漸く其處へ入つて來た。人間は何を遺すべきものだらう。一日いつぱい考へた後に遂に大きな口を開いて笑つた。

「何も遺さなくても可いのだ。自分の髪の毛一筋だつて遺りやしないんだもの。社會のためだの國家のためだのといふのは死んでから賞められようといふ淺間しい考へに過ぎないんだ。俺も今まで隨分惡い事をしたが法律で罰せられた事もなし、左りとて市會議員だの種々な會社の重役だのといふ肩書は地獄へ行つてから女の餓鬼に惚れられる資格になるぢやなし、まあまあ生きて居る間に面白い事をしたのは一番有難い事だ」

彼の結論は遂に恁うなつた。而して相變らず遺言狀を書き替へ〳〵して居る中に或日彼は風呂から上つて膳に向ひ箸を取つたが直ぐぽとり箸を落したかと思ふと、こくりと頭を前に垂れて横にばたりと倒れた。

彼は死んだのであつた。萬龜子初め家中は大騷ぎをした。醫者も藥も其の甲斐がなかつた。萬龜子は只茫然と途方に暮れた。豫てから父が言つた事ではあるが、眞逆に事實にならうとは夢にも思はなかつた。彼女は直ぐに母の許へ電報を打つた、而して一人で[illegible]思つた。一間の父の書室は其の儘になつて居る。[illegible]算盤や硯箱や帳簿類の位置は一時間前

の父の生きてる時と同じ位置にあつた。彼女は不圖氣が付いて父の用箪笥を開いた。書き損じの遺言狀は一纏めに束ねられてあるか、抽出の中にたつた一枚父の捺印したものがあつた。其れは「全財産を兩分し其の一半は爲三夫婦の嫡子に與へ殘る一半は長女睦子に與ふるものとす」と書いて巨細の財産表を添へてあつた。

「御父樣は到頭本當の事を御考へになつたのだ」と萬龜子は心嬉しく思つた。

電報に接した母と睦子は翌日大阪に着いた。父の死體は座敷に移されて凡ての準備が既に整へられてあつた。睦子は汽車の中で眼を腫らすまで泣いたらしい。母は座敷へ通つて父の傍に坐り父の顏に掛けた白い布を取つて凝と其の死顏を見詰めたが母の顏色は少しも變らなかつた。が其の脣は微かに顫へて眼の底に一點の露が動いたかと思ふと靜かに父の顏を蔽うて一同に挨拶した。

「何といふ靜かさだらう」と萬龜子は今更ながら母の意志の強いのに驚いた。

爲三は事細やかに父の近狀、お膳に向つて倒れるまでの事を母に語つた。母は一語々々に首肯いたが、終りに低う言つた。

「平素に睦子や私達の事を何とか言つて居ませんでしたか」

「いゝえ、別に何にも」と爲三は答へた。

「其れでは矢張死ぬまで爾なんですね」と母は言つた、而して急に疊に突伏して聲を擧げて泣いた、睦子も泣いた。萬龜子も泣いた。

「たつた一言でも御父樣らしい御言葉を御前に聞かせなかつた」と母は睦子の手を取つて又もや泣き出した。

「私だつてお母さん、一遍でも御父樣と御母樣と仲睦まじい日を見たいと思つて居ましたわ」と睦子は言つた。

妻と娘の悲歎を他所に國助は寂寞として眠つて居る。永久の眠! 再び什麼する事も出來ぬ眠である。

一〇

國助の葬式は立派に行はれた。お浪は汽車の疲れやら葬式の疲れやらから急に面窶れしたが其れでも日毎々々の墓參は怠らなかつた。十餘年の間女手一つに二人の娘を育て上げ身に餘る苦勞を忍んで來たのも只良人が眞面目な人間になるのを待つて居たのであつた。其れが今凡て無駄となつて良人は遂に改心せずに死んでしまつた。お浪に取つては此の上の失望があらうか。私はもう生きて居なくても可い身體となつたと二人の娘に言つた。

或夜母子三人は久し振で水入らずに座敷に坐つた。

「電燈を消しておくれ」と母は言つた。燈を消すと佛壇にお燈明のみが明るく疊の上を照らす、障子を明け放したのでぼんやりと暈を着た春の月が土藏の屋根の上に見えた。お浪は默つて位牌に向つて合掌した。

「御母さん、椽先に出て御覽なさいな、可い月夜よ」と睦子は言つた。

「いゝえ、御父樣はね、生きてる中に澤山罪を作つたから私達が如來樣に御許を御願しなきやなりません」と母は言つた。

睦子と萬龜子は椽に坐つて是も暫時默つた。久し振で會ひながら葬式や何やかやに取紛れて二人が染々と語り合つた事はない、今夜こそは丁度好い機だと二人は口に言はねど心に思つた、而して先づ學校の噂や東京の家の近所の事などを萬龜子が訊ねた。

「蝶子さんは什麼なすつて」

「蝶子さんは櫻井さんと結婚する事に決まつたのよ」

「あゝ爾? 其りや嬉しいわ。で爺やは?」

「達者で居るわ」

「其れから橋本さんは？」

「辯護士になるとか言つてるけれども、あの方は暢氣だから……」

「櫻井さんは？」

「直き大阪へ來るわ」

「まあ爾？　皆な卒業なさるのね」

「えい」

二人の言葉はひいたと途絶れた。睦子は次に克巳の消息を訊ねさうなものだと思つた。萬龜子は自分の口から言へないから姉さんから言つてくれさうなものだと思つた。何人よりも第一に知りたきは克巳の事なのである。此時睦子の肩が動いて深い溜息が聞えた。

「怪我をなすつたんですつてね」と萬龜子は思はず言つた。左の頰は月の方を向いて居る。

「えい、森川さんでせう、隨分大變だわ」

「其れでも能くまあお癒りになつたのね」

「えい」

睦子は今更ながら其時の事を憶ひ出して胸が充滿になつた。二人は又もや沈默に歸した。萬龜子の肚では折角自分が戀を捨てたのに何故姉さんが克巳さんと夫婦にならないのだらうといふ恨めしさがある、睦子の肚では萬龜さんが養子を迎へなければ私はどんな勞力を費しても克巳さんと萬龜さんを夫婦にしてあげたものをといふ恨みがある。二人の恨みは運命の神に對する恨みである。どうする事も出來ない人生の葛藤に對する未練である。

「良人のある萬龜子に今更克巳さんがお前を戀して居ると言ひ聞かす事は恐るべき罪な事だから何も言へない」と睦子は思ひ、「姉さんと克巳さんと夫婦になれない事情を強ひて聞くのは却つて姉さんを苦める樣なものだ」と萬龜子は思ふ。二人は益々默つてしまつた。

「貴方は幸福に暮らして居て？」と霎時あつて睦子は言つた。

「えい、幸福よ」

「爲三さんは親切な人？」

「えい、親切よ」

姉や母に心配をさせまじと思つて答へた言葉の中には熱湯を浴びる樣な苦みがあつた。

「其れなや可いわ、本當に良人は大切にしなけりや不可いわ」

「えい、有難う、して姉さんは？」

「私はね、私も幸福よ」

恁う言つた姉の聲は殆ど消え入る樣に小さかつた。と見ると姉は橫を向いて溢れ落ちさうな涙を漸と怺へて居る。

「姉さん！」と萬龜子は姉の手を取つた。「仲好くしませうね、元の通りね、本當に元の通りにね」

睦子は默つて妹の手を握り返した。月の暈の中にある小さな星は折り〳〵泣く光つたり又遠くなつたりして居る。

二

曾て克巳の病院費に苦んで築地の家を訪ねた時兩親を謝絶した姉の傲慢に對する恨みも今は忘れて、二人は昔ながらの親しい心持になつた。佛壇の燈明はじり〳〵と音しては明るく燃えたり又風に動いて急に暗くなつたりする毎に母の痩せ衰へた姿がまざ〳〵と見える。

「お母さんも年取つたのね」と萬龜子が言ふ。

「えい、たうとう御父樣を取戻す事が出來なくて什麼に殘念でせう、これから私達が大切にしてあげませうよ、ねえ萬龜子さん」

「えい、爾ですとも」恁う言つて萬龜子は當時考へ込んだが「私貴方と御母樣に見せたいものがあるわ」

「何なの」

「御父樣の遺言狀なのよ」

「あら、そんなものがあつて？」
「えゝ、爲三から披露するまで默つてる方が可いと思つて今まで言はなかつたのよ」
「その方が可いのよ、此の家の事は一切良人任せにしなきやなりませんからね、でも什麼事を書いて？」
「此の家の財産は百五十萬圓ばかりあるんですとさ、其の半分を貴方に進げるんですつて」
「財産の半分を？」と睦子は吃驚して「まあ本當？」
「えゝ、私御父樣に相談を受けた事もあるし確かに書いてあるのを見たんですもの」
「まあ」
此時母はひよいと此方を向いて言つた。
「遺言狀は財産の事だけなのかえ」
「えゝ」と萬龜子は答へる。
「外に何にも書いてないのかえ」
「えゝ」
「お浪に對して、睦子に對して、濟まない事をした、お浪は私の家内だ、睦子は私の娘だ、と書いてなかつたかえ」
「えゝ　何にも」
「爾かえ」と母は落膽して首を左右に振り「爾だらう爾だらう、そんな遺言狀なら見なくても可い」
恁う言つて再び小聲に念佛を始めた。
「でも私持つて來てお目に掛けるわ」
「いゝえ、其れは可くないわ、何れ爲三さんからお話があるまでわね」と睦子は制めた。
「でもねえ姉さん、七十五萬圓といふ財産があると姉さんも隨分樂たわね」
「爾ね」と睦子は思案して、「私其れを戴いても可いのか知らん」
「可いとも、御父樣が下すつたんですもの」
「其れも爾だけれども」と睦子は暫時考へたが、急に決然と顏を擧げて、晴れ〴〵しく言つた。
「私嫌〳〵わ」
「えゝ、其れが可いわ、だけれども迚も姉さんには費ひきれないわね」
「私ね」と睦子は嫣然して「私ね、他所の人に進げるのよ」
「誰に？」
「誰につて萬龜ちやん」
二人は互に顏を見合つた、同時に萬龜子は、
「あゝ解つてよ」と言つた。
「解つて？」
「えゝ、克巳さんにでせう」
睦子は答へなかつた、而して仄かに耳根を染めたが、
「でも受取つてくれないかも知れないわ」
「爾ね」と萬龜子は答へたが、心の中では姉さんがどれだけ克巳さんを愛して居るかに感服し如何なる故障があつても二人は夫婦にしなければならぬと思ひ定めた。
「姉さん、私屹度受取らせる樣にしますわ」
睦子は微かに首を振つて熟と月を見上げた。

二

七十五萬圓の金は、睦子に取つては何でもない、縱令千萬圓の金と雖も睦子は其れよりも克巳が欲しいのであつた、最も高い最も大きなものを失つたものは其れより小さなものを得た處で左まで嬉しい筈はない、併し睦子は克巳が貧に迫つて居る事を知つて居る、病院で[illegible]日に茂平爺が手を合せて拜んだのを見た、縱令我慾は叶はずとも、且心の中で良人と定めた人を幸福にする事は自分の義務である、卒業後は什麼なさる積りか知らねど男は社會に立つに一文なしでは何が出來よう、睦子の心配して居たのは是であつた、其處へ偶然天から降つた七十五萬圓、其れさへあれば克巳をして十分活躍せしむる事が出來よう、恁う思ふと睦子は急に晴

い谷底から山の巓に上つて東雲の曉の色を眺むる樣な氣がする。彼女は蘇生した。彼女の幸福は戀人を幸福ならしむる事に依つて得られるのであつた。姉の嬉しさうな活々した顏を見ると萬龜子も心の底から嬉しかつた。元はといへば姉を幸福にしようと思つて自分が犧牲にたつたのだ。彼女は自分の苦勞を忘れてこれから開かるゝ姉と克巳の運命を微笑を以て眺めた。

不思議な事である。睦子は克巳を幸福にする事を以て自らの幸福とし、萬龜子は睦子を幸福にする事を以て自らの幸福として居る、而して二人ともに少しも自分の苦勞を苦勞としない。今の世に斯かる[illegible]し、心立てのものは無いと言ふ者あらば其れは愛を知らぬ人である。眞の戀！ 眞の愛は其處にある。犧牲がなくて愛のあるべき筈がない、而も其れは極めて心嬉しき犧牲である。いや／＼なかなか犧牲ではない。世間の教育家や頑固な父兄は無暗に戀愛を罵り、戀愛小説を呪ひ、青年の戀愛を罪惡視するが、彼等は睦子と萬龜子に對して愧死すべきである。

二人が元の如くに親しくなるのを見なかつたお浪の口元に何時も何時も微笑が浮んだ。

世の中に姉妹ほど可いものはない、お互に力になつて助け合つておくれ

お浪は毎日の樣に斯う言ひ／＼したが、今までの氣の弛みと共に僅々二三日の間床に就いたまゝ極めて靜かに此の世を去つてしまつた。父の死に次で母の死！ 睦子と萬龜子は涙さへ出なかつた。

葬式を濟ました後は更に淋しかつた。一生を放蕩な良人に捧げ凡ての精力を盡して良人を善人に導かうと努めながら何物をも得ずに此の世を去つた母の壯烈な意志を酌み取つて睦子と萬龜子は今更の如く人生の慘酷に泣いた。

「もう私は何方かに身體を決めなきやならない」と睦子は思つた。

「姉さん、いつまでも私と一緒に居て頂戴ね」

と萬龜子は縋る樣に頼む。

えゝ、いつまでも居てよ」と睦子は姉らしい優しい微笑を以て妹を見やるのであつたが、彼女は到底此の家に居することが出來ないことを知つて居た。

母の一七日は夢の如く過ぎた。睦子は悲しみの中に從つた日を送るべき場合でないと思つた。彼女は更に種々な計畫を立てた。計畫の中には無論遺産の一件が含まれてある。彼女は折り／＼獨りで克巳の將來を想うて見た。大政治家となつて議會の演壇に立つ姿を見た。實業家となつて米國に渡航する甲板上の姿も見た。博士となつて卓子に凭れて論文を書く姿も見た。

「どんなに嬉しからう／＼」と彼女は心に繰返した。姉の心を萬龜子は能く知つて居る。彼女は一日も早く姉を喜ばしたいと思つた。で或時爲吉に斯う言つた。

「いつかの遺言狀を姉さんに見せてあげたら什麼でせう」

「遺言狀？」と爲吉は眉を顰めて噛み出す樣に言つた。「そんなものはありやせんがな」

三

萬龜子は吃驚して良人の顏を見詰めた。

「御父樣がお死くなりになつた日に用箪笥の中に入つて居ましたが、貴方は御覽にならなくつて？」

「お前は其れを見たか？」と爲吉は聲を低くして萬龜子を見返したが、[illegible]自分の手の爪を噛み始めた、何か面倒な事が始まると爪を噛んだり、椅子の柄を叩いたりするのが爲吉の癖で、萬龜子は其れを見るといつも[illegible]しく感ずるのであつた。

「えい、見ましたわ」
「ふうむ、左樣か、どないな事を書いてあんねエ」
「財産の半分を姉さんに進げると書いてあつたわ」
「半分を?」と爲三は驚いた樣に仰山に言つて「ふむ、左樣か、何で其ないな事を書きやはつたらうな、お父さんの財産に何もありやせんがな、私が相續人やさかい」
「では什麼してあんなものを書いたんでせう、私下書だけなら澤山持つて居ますけれども」
「下書を持つてる? 下書では役に立ちやせんがな」
「でも下書がある位だから本當の遺言狀がある筈ですわ」
「ふうむ、私や知らん、あるんなら持つて來て見い」
萬龜子は二階へ上つて用簞笥の抽出を開いた。遺言狀は煙の如く消えて痕もない、ありとあらゆる抽出を開き數多き書類の中を一つ〳〵に探つたが其れらしいものはない。彼女は落膽して下へ降りた。
「あつたかいな」
「ありませんわ」と呆然と言ふ。
「何かの思ひ違ひぢやないか」
「いゝえ、確かに……盜まれたのでせうか」
「下書を見せて見い」
「こゝにあつてよ」と萬龜子は五六枚の反古を差出した。
「ふうむ」と爲三は一枚々々に見終つて「こんなもの役に立ちやせん」と言ひさま寸々に引裂いて袂の中に丸め込んだ。
「あら裂いても可いの?」と萬龜子は驚いて「本ものが盜まれゝば其れでも役に立つ事があるかも知れないわ」
「實印の捺してないものは無效だんがな」と爲三は言つた。
「でも貴方……」
「可いわ、もう可いわ」と睦子は突然言つた「私に下さると仰有つても私が戴けないものなんですもの、當家の財産は貴方方のものなんですから御父樣も遺言狀に書く筈がありませんわ」
「左樣、私も爾思ひまんね」と爲三は慌しく小指の爪を噛んだ。
「でもねえ姉さん、他の事と違ひますから」
「萬龜ちやん、何にも言はないでね」と睦子は宥める樣に言つた
「まあ能う考へて見や」と爲三は座を起つて書齋の方へ去つた。
萬龜子は呆然と眼を一方に向けたきり身動きもしなかつた。
「良人が盜んだのではあるまいか」といふ疑ひが此時むら〳〵と起つた。同時に又いくら金一點張の商人でも此麽事はあるまいと打消しても見た。縱令其れが僞であつても夫の身として良人の罪惡を發くといふ事は絶對に出來ない、左りとて此儘に過すと姉さんには一文の遺産も渡らなくなる。良人を發かうか姉を欺かうか。彼女の頭は二岐の途に迷つた。
「騷ぎ立てると盜んだ當人が判るに違ひない、其時になつて若し其れが良人であつたら澁谷家の恥辱、我が恥辱である」
萬龜子は益々迷ひ出した。

一四

七十五萬圓の財産が我が手に入ると聞いてから睦子は光り輝く世界を見付け出した。克巳を立派に出世させよう、其の喜びに彼女の胸は躍つた。だが空想の夢は俄かに破れて、父の遺言狀は煙の如く消えてしまつた。彼女は最早や名狀しがたき絶望の淵に叩き落されたのであつた。彼女の恨めしさは今まで全力を擧げて期

待したゞけに更に一層深かつた。こんな話を聞かぬ中なら何でもないが、幸福の入口に立ちながら急に門を閉ぢられた彼女の心中は什麼であらう。
　彼女も亦萬龜子と同じ様に默つて溜息を吐いた。凡ての様子から察すると遺言狀を盗んだものは爲三である事は明かである、扨て爲三が盗んだものとして其れを公けにすると油谷は什麼なるだらうか、父の志は什麼なるだらうか、萬龜子は盗賊の妻となり萬龜子のお腹の子は盗賊の子とならねばならぬ。左ればとて生命を掛けた戀人を出世させるには七十五萬圓が必要である、妹の良人を罪人にして我が戀人を出世させようか、我が志を抛つて妹の一家を無事ならしめようか、妹を取らうか戀人を取らうか、彼女も亦二つの路に迷うた。
「姉さん」と萬龜子は漸と言つた。「悪く思はないで頂戴ね、私二三日中に屹度捜し出しますから」
「何とも思やしないわ、考へて見ると其のお金は貰はない方が可いかも知れないわ」と睦子は言つた。「お金の爲に私達姉妹が氣拙くなるのは厭ですからね」
「どんな事があつても、私、姉さんの幸福になる様にするわ」と萬龜子は涙ぐんで「私此那事で姉さんが此の家を出て行きやしないかと其れが心配になつて來たわ」
「どうして其那事を考へるの？」と睦子は驚いた顔をして「私出て行きやしないわ」
「屹度？　姉さん、屹度？」
「えゝ、屹度よ」と睦子は淋しく笑つて「大丈夫よ、だけれども萬龜ちやん、貴方は只の身體ぢやないでせう、良人の事や子供の事を能く考へてね、輕忽な事がない様にしてね」
　恁う言ふ中に睦子は悲しくなつて思はずほろりと涙を零した、と萬龜子は突如姉の膝に泣き伏した。
「いや／＼、姉さんは出て行くんでせう、いやです、姉さん、姉さんが出て行くなら私も出て行きます」
「そんな事はないわ、萬龜ちやん、折角一緒になつたものを私何で出て行くもんですか」
「私ね、お父さんに死なれお母さんに死なれて誰も頼りになる人がないんですもの、姉さん、どうぞね、いつまでもいつまでもね……」
　後は泣聲で聞えなかつた。
　睦子は子供を賺す様に默つて萬龜子の頭を撫でてやりながら「私だつて此家を出たら何處へも行く處がないぢやないの」
「其れぢや本當ね」と萬龜子は漸く顏を擧げて嫣然しながら「私今急に何だか姉さんが出て行く様な氣がしたのよ」
「姙娠をするとね、神經質になるもんですとさ」
「爾かも知れないわ」
「お萬龜／＼」と呼ぶ爲三の聲が二階から聞えた。
「はい、只今」恁う答へて萬龜子は睦子に向ひ「直き來ますからね、待つてて頂戴ね、一緒にボートに乘るから倉庫の裏で待つてて下すつても可いわ」といそ／＼出て行く、其の後姿を見送つて睦子は兩手で顏を掩うた。

一五

　父もなく母もなき姉妹二人、男と異つて女は猶更互に頼りにならねばならぬとは言ひながら、遺言狀の事爲三の事を思へば、自分が此の家に居ると紛紜の絶えぬは今から知れた事、黄金のために一家の不和を來たさせ、妹に憂目を見せる位なら、此儘此家を去るに増した事はない。此家を去つてから東も西も知らぬ異郷の空に彷徨ふより東京へ歸る方が可い、左りとて東京には一文の貯蓄もない、貯蓄がないからとて妹

に相談すれば引留めるは必定だ、其那事を考へて居るべき場合ではない、自分の去るのは妹のため油谷一家のために最も利益だとすれば、爾だ、此れから直ぐ立去らねばならぬ。

睦子は恁う決心した。其れと同時に自分の去つた後で萬龜子は什麼に泣くだらう、どんなに淋しがらう、急に雨身を失つて知らぬ人達ばかりの別世界で暮らすのは什麼に心細い事であらうと思つた。其れを思へば流石に決心も鈍り出す。

自分の手道具だけを風呂敷に包んで人目に付かぬ樣に竊と勝手口から出ると、「姉さん」と呼ぶ聲が聞える。「はつ」と思つて立留ると其れは空耳である事に氣が付く、後は只夢中で歩き出した。何處へ行くにも當が無い、旅費がなければ梅田へ行つても仕方のない事だ、彼女は橋の袂に立ち盡したまゝ思案に耽つた。と又妹の泣顏がまざ〳〵と眼前に現はれて來る。彼女は此時横堀の河岸にボートを繋いであるのを見たので萬龜子の言葉を思ひ出した。

「今に此處へ來るだらう」と思つた。爾思ひながら早く此處を立去らうといふ氣になれなかつた。

「どうせ別れるなら得心さして別れる方が可いかも知らん」と思ふ、と又「いや、此儘別れなければ別れる機がない」と思ふ、而して又寧その事誰かが來て捕まへてくれゝば可いとも思ふ。御父さんやお母さんの佛壇が目にちらつく、墓地の光景も浮んで來る、倉庫の裏に人足が二三人重い箱の樣なものを肩に積んでるのも見える。彼女の頭は次第に朦朧となつて夢の如く油谷倉庫と書いた文字や人足の動くのを見て居た。其の中に彼女は銘仙の袷に紅い襦袢の袖を食み出して小走りに走り來る若い女の姿を見た。

「萬龜ちやんだ」と彼女は思つた、彼女は愕然として夢から覺めた、而してすた〳〵と歩き出したが又踏み戻つて家の軒下から竊と覗いた。

人の妻となつても娘づくりの名殘は失せず、荒い銘仙飛白に赤と緑の入つためりんすの帶を締めた萬龜子は倉庫の横を出て河を見廻した。

「私を探してるんだ」と睦子は思つた。

岸に立つて北と南を見、其れから背後に振返り又水の面を見る、人足共に一言二言言つて直ぐ倉庫の蔭に走り入る、隱れたかと思ふと又現はれる、一度二度三度、終りに狂氣の如く驅け廻り、到頭落膽した樣に荷箱に腰を落して袂で顏を隱した。

「泣きたからう悲しからう、龜萬ちやん、許して頂戴ね」と睦子は聲を忍んで肚の中で泣いた。漆の樣に黑い髮が白い額に婆娑と垂れて袂で隱した顏は刻一刻に顫へるのを見ると睦子は堪らなくなつて聲を掛けようかと思つた。「いやいや、其れでは何時までも埒が明かぬ」と彼女は思ひ返した。夕日は向う岸の屋根を滑つて倉庫の壁をあか〳〵と染めた。船に荷を積む人足の聲が一段と繁くなつて物忙しい巷のどよめきの中に萬龜子は獨り悄然といつまでも顏を蔽うて居る。

睦子は堪らなくなつて逃げる樣に西の方へ走つた。

朝晴

一

一年は過ぎた。

麗かな春の朝、東京からの急行列車が京都驛で無數の客を吐き出して又徐々動き出した。其の食堂に五人の客があつた。其れは克巳と蝶子と櫻井と橋本と今一人は櫻井の新成大崎藤兵衛といふ白髮頭の紳士である。櫻井が蝶子と結婚の約束が出來たのは一年前であつたが

愈母や姉及び親戚に紹介すべく下阪するのであつた。食堂は賑やかで陽氣であつた。

「大阪は未だ？」と蝶子は子供の樣に櫻井の顔を見上げた。

「もう一時間よ」と櫻井はにこ〳〵して優しく答へた。「隨分退屈した？」

「うゝん」と蝶子は小刀で燒肉を切りながら嬉然して「隨分面白かつたわ、橋本さんが汽車の中で都の西北を唄ふんですもの、其れから他所の人が眠つてる毛布を剝いで自分で着たりなんかして私本當にひや〳〵したわ」

「燒肉をもう一皿食ひたい」と橋本は怒鳴つた。

「あら、貴方は二皿食べてまだ食べるの？　燒肉ばかり三皿なの？」

「いや、コロッケも三皿だ」と橋本は言ふ。

一同は聲を擧げて笑つた。

「森川君、君は什麽だ」と櫻井は窓から外を見てる克巳を見やつて言つた。

「僕はもう可い、併しもつと食べても可い」と克巳は答へた。

「强ひて食べてくれなくても可いよ」と櫻井は笑つた。

藤兵衛は只呆れて三人の顔を眺めて居た。

「書生さん達にや敵ひませんな」

「構ひませんよ、勘定は貴方が拂ふんだから」と橋本は小刀を捨てて「フライをもう一皿」

一同は又もや笑つた。洋々たる和氣を載せた汽車は快く走つて行く。線路の兩側に菜の花畠が黄色な毛氈を敷いた樣に窓から見える。菜の花畠が盡きると青草、青草が盡きるとれんげの紫田、春の五彩がぐる〳〵窓を廻つて送迎に遑がない、時に雲雀の諸聲が天から落ちしきると、眞白い薄い浮雲が青空の下で緩く遊んで居る。

「好いわね」と蝶子は恍惚した眼をして櫻井に言つた。

「春だからね、沙翁は斯う言つたね、春は天と地との結婚の月だつて」

「おい、馬鹿にするない」と橋本は叫んだ。「俺の前で惚氣を言つた罰としてボーイ君更に燒肉を一皿持つて來い」

「いやな方！」と蝶子は橋本を叱る樣な眼をして言つた。「もう橋本さんと一緒に旅行しないわ」

「無論覺悟の上だよ」と橋本は霎時考へたが軈てしみ〴〵とした聲で言つた。だが今日の愉快に就て思ひ出すのは牛乳ホールの母と姉妹だね、母は死ぬ、睦子さんは行方知れずさ、其れを思ふと僕は……」と斯う言ひかけたが、悵然として小刀を捨て「ボーイ君、燒肉はもう要らんよ」

ボーイは笑つたが、三人は少しも笑はなかつた。蝶子はもう眼に充滿の涙を湛めて居た。

「森川君、葡萄酒を飲まんか」と櫻井は克巳の心を察して勵ます樣に言ふ。

「飲んでも可い」と克巳は暗く答へた。

併し最早や汽車は徐行して停車場に入りかけた。一同は荷物よ鞄よと霎時騷ぎ出した。歩廊へ出た時蝶子は櫻井に斯う訊いた。

「大阪は隨分廣い事？」

「あゝ廣いよ」

「いくら廣くても私探し出すわ」

「何を？」

「睦子姉さんを」

櫻井は靜かに首肯いて「二人で搜し出さうね」と言つた。

二

荷物は後廻しにして一同は電車に乘つた。東京と異つてどの家もどの家も赤澁を塗つて薄暗くなし、家根が低いのと往來の人が忙しさうに步いてるのが蝶子の眼に付いた。伏見町の櫻

井の家では母のお民は菊江と共に早朝から待ち設けて居た。

「もう一時間や……もう三十分や」とお民は時計ばかり眺めて我子の姿を思ひ浮べ、又新たに嫁となるべき蝶子の姿を彼れや是れやと想像して居た。若しや飛んだ生意氣なハイカラ娘ではあるまいか、宅の菊江の様に我儘に育つたのではあるまいか、寫眞と當人とは餘程違ふのではあるまいか、十七といへば未だほんの子供だから永く辛抱する氣になれるか什麽か、どうせ結婚は二三年の後にしたいと當人同士が言つてる位だから正式の嫁といふでもなければ其れまでに家風に馴らして躾けて行くに酷く骨が折れはしまいか、母だけに種々な心配がある。

其の中に門口にがや〳〵と人の足音がした。

「只今」と息子の章が大きな聲で言つて「さあお入れ」と伴の人達に言つた。

「おゝお歸り」とお民は章を見て優しく言つた。「皆はん、どうぞ御入りやす」

克巳や橋本は窮屈さうにお民の前に挨拶した。

「お母さん、これが蝶子さんです」と章はもぢもぢして居る蝶子を紹介して「お母さんだよ、此方は姉さんだ」

「お初にお目に掛ります、私は蝶子でございます」と蝶子は耳根を染めながら丁寧にお辭儀をした。

母と菊江の眼は極めて敏捷に蝶子の上に注がれた。

「大阪と東京とは違ひますさかいに不自由でおまつしやろけれども、暫々したら慣れてきますさかいにな」と母は手づから茶を入れて人々に配り蝶子に向つて種々な事を訊ねた。

蝶子は章の母を一眼見るなり直ぐ懷かしさを感じた。縞木綿の袷に黒繻子の細い帯を締めて頭は銀の様な白髪を總髮にして居るが、身體は至つて小柄だが其の眼元や鼻は章に酷似で、何とも言へぬ上品さと親しさが溢れる様、ものを言ふにも東京の人の様に稜立たず、ゆつくりゆつくりと優しく言つて皺だらけの口元を窄める様にして微笑む、これが大阪の船場の御家はん氣質といふものか知らんと蝶子はすつかり感服してしまつた。東京の様にぱつと明るい室でなく、角々の柱が暗く光つて見える様な薄暗い座敷で、商人の事とて箱の様なものや種々な商品が積まれてあるが、其れは一寸の歪みもない様に整然と置かれてある。蝶子が東京に居る時も汽車の中でも第一に氣に掛つたのは姑の事であつた。芝居や小説にでもある様な意地悪の婆さんではあるまいか、又大阪の人は誰も使ふ様な野卑な言葉でも言ふのではあるまいか、恁ういふ懸念は今お民を見ると同時に綺麗に晴れ渡つた。彼女は今まで心配した事を忘れた樣に平氣でお民の間に答へもし笑ひもした。お民は一々〳〵に首肯いて満足さうに蝶子と菊江を見比べて微笑した。

「皆なが疲れても居るし、蝶子さんも着替へたいだらうから、お母さん、話は又後にしませう」と章は言つた。

「あゝほんに御苦やつた、うつかり話に實が入つた、ゆつくり二階で御休みやす」とお民は笑つた。

一同は二階の章の部屋へ移つた。つい此頃まで前髪を二つに分けてお下げに結つて居たのを急に廂髪に結ひ替へたらしい蝶子の頭の横に眞白な大きな西洋花を插した姿を見やつてお民は恁う言つた。

「賢さうなお娘や、これで私も可い嫁が來てくれて安心や、なあ菊江」

先刻から例に似ず默つて居た菊江はふいと座を立ちしなに言つた。

「でも随分生意氣さうだわね、あゝいふ子は猫

を被る事が巧いわ―

三

伏見町の櫻井家といへば大阪に著名な藥種屋の一つである。昔は唐藥と言つて大黄、甘草、麝香や樟腦、龍眼肉や砂糖の類まで支那から渡來したものであつた。渡來の藥は幕府が貿易をして其れを大阪約三百軒の唐藥問屋に卸し、唐藥問屋から道修町の仲買商に卸したものである、藥品は人の生命を司るものなればとて幕府は時に唐藥屋に保護の帶刀を許されたものすらある。特に保護の一端として約三百軒以外には決して特權を與へなかつた。櫻井家は其の頭目なる小西屋の支流で、先代の徳兵衛までは實に八代を續けて居る。徳兵衛の死後は未亡人のお民が娘の菊江と長男の章を養育して、店の事すら臺所の事すら女手一つでやり遂げた。勿論後見人には徳兵衛の弟に當る大島義兵衛といふのがあつて、諸事其人の監督があるにせよ、良人の死後に、櫻井家を榮えさしたのはお民の力が多きにあると言つても可い。但し何れの家庭にしても圓滿無缺といふことは望み得ない。櫻井家にも一つの不幸がある。

其れは嫡娘の菊江の事である。菊江は嫁さ時に脾弱で、癇癪が強かつた。嚴格な父も病弱な娘を躾けるには餘程手加減をしなければならなかつた。欲しいものを與へなければ一日泣き續けて飯も食はぬ、自分の氣に入らぬ事を無理に命ぜられると癲癇の樣に齒を食ひしばつて倒れてしまふ――仕方がないから、菊江だけは八釜しく言はない事にしようと父は何も言はなくした。之が菊江の第二の天性となつた。彼女は初め同業の藥種商に緣附いた。良人は放蕩で妾を圍つて居たのを知ると同時に彼女は其の家を去つた。商人は厭だから官吏の嫁になりたいと彼女は思つた。朝から晩まで働いて算盤ばかりを彈きゆつくりした氣持で夕飯を共にしようといふ餘裕もない生活はつく〴〵厭だと言ひ出した。で彼女は大藏省の官吏に嫁して東京へ行つた。行つて見ると月々の月給は百圓位で迚も彼女の半襟一枚すら買ふ事が出來ない、彼女は良人は餘りに意氣地なしだと思つた。で彼女は九箇月にして大阪へ歸つた。次に彼女は某工場の主任たる工學士に嫁した、工學士は會社の信用も篤く美男子で稍々彼女の理想に近きものであつたが學士の日常が氣に食はない、朝から晩まで工場に居る、宅へ歸ると箸を擱くと書齋に入つて讀書する、試驗室で機械や瓦斯や電氣やを弄り身體中を油だらけにして研究に夢中になつて居る。彼女は侮り捨てられた樣な氣がして良人を恨んだ。すると學士は恁う言ふ

「お前は趣味性に乏しいから自分で何ものかを樂む事が出來ないのだ、其れで亭主の仕事の邪魔をしたがるんだ、何でも可いから自分の好きなものをやつて時間を費したら什麼か、時間があり餘ると退屈で淋しくつて獨りで暮らせなくなるよ」

菊江は考へた。其の三味線茶の湯生花、其等の趣味に深く立入りたいと思つた、だが其等の遊藝は自分ながら少しも面白くなかつた。彼女は到頭學士とも別れてしまつた。此時彼女は篤三が家を探して居る事を聞いた。叔父の口から、篤三の處へ嫁いては什麼かと言はれた事もある。篤三は子供の時から知合の仲である。

「あんな、でぶ〳〵の脊低の鼻垂し嫌だわ」と彼女は言つた。而して次に某貿易商の主人へ嫁付いたが、其の男は相場で大失敗をして逃亡してしまつた。

人間ほど脆いものはなく、運命ほど[illegible]ものはない。脾弱に生れたのは彼女の一生の不幸で、其れが我儘の基となり、何處へ行つても

抱が出來なくなり、一度から二度、二度から三度と良人を代へる毎に初めの羞恥心が段々に薄くなつて、女としての初々しい優しい心持が次第々々に荒み出す、其ればかりでなく彼女は自分の運命を呪ふ樣になつた

「私は何も惡い事をしないのに什麼して恁う不運なんだらう」

彼女は物に觸れ事に觸るゝ毎に僻む樣になつた、其れは強ち彼女ばかりの罪ではない、眞直に流れるべき筈の河が、岩に堰かれて思ひも寄らぬ方へ曲つてしまふ、其れを吾々は河の罪と言へようか。

四

恁うなつて來ると菊江は何を見ても不愉快な事だらけである、中にも自分より年若い娘達が相當の家へ緣付いたといふ話を聞き、昔の友達や知合の女が良人と睦まじく暮らしてゐるを見ると自分ばかりが侮辱された樣に感ずるのであつた、而してあの人は離緣になつたとか、あの人は緣付いたけれども夫婦が毎日喧嘩ばかりをしてゐるとか、他人の不幸を聞くと何となく愉快な氣になる。

恁ういふ狀態からして彼女は折り〳〵人の間を割いたり、時としては自分で一生懸命に骨を折つて媒介をしながら突然二人を喚しかけて喧嘩さして見たりする事が屢であつた、其等を見るに付けて獨り胸を痛めるのは母のお民であつた、何とかしてあの僻んだ根性を矯したいものだ、恁う思つてお民は當人にも言聞かせ神や佛にも念じた。

章が友達と一緒に二階へ上ると間もなく高らかな笑聲が聞えた、お民は先刻菊江の言つた言葉で菊江が最早や蝶子に好意を有たない事を知つたので不安さうに次の室を見やつた、丁度二階の階段の下に菊江は立つて居る、而して凝と上を見上げながら耳を欹てて居る

「菊江さん、あんたも一緒に二階へ寄せてお貰ひ」とお民は言つた、

「誰が行くもんですか、墮落書生や女學生の中へ入るのは御免蒙りたいわ」と菊江は憎々しく樣に言つてのそ〳〵母の傍へ坐り「でもあんな人達に來られては店の人達へのしめしにならないわね、此の家を宿屋の樣に思つてるのよ」

「菊江、お前はん其ないに氣儘な事言ふから不可へん、皆はんが初めて來やはつたのにお前はんがあんじよせんにや不可やないかいな」

此時又もや笑聲が起つた。

「あれ[illegible]」

此時蝶子は[illegible]

[illegible]さつは[illegible]

花[illegible]小さな[illegible]た姿は大阪で見る女學生と異ひ何となく[illegible]けかして品が好い、なるほど東京で大阪とは違つてるものは女學生の風采だ、世間で言ふのは無理もないとお民は思つた

「お湯を戴きに參りました」と蝶子は土瓶を持つてきちんと前に坐つて端然とした、

「お湯はお勝手の方にあるでせう」と菊江はけんもほろゝに言つた、

「あゝ、[illegible]」と蝶子は他愛なく笑つて「私知らないもんだから失禮をしましたわ、まあ私本當に失禮しましたわ」と立上らうとするをお民は呼留め、

「お湯はこゝ」と鐵瓶のを注いでやつた

「お姉樣」と蝶子は抑れ〳〵しく菊江に言つた、

「貴方も彼方へ來いまし」

「私？ 私なんか」と菊江は不意打を食つてどぎまぎしながら「お邪魔でせうから」

「あら、お姉樣が彼處に居らなきや私達一人で詰らないんですもの、章さんが是非貴方を伴れて來いつて[illegible]いふんですの」

「でも私なんか話が合ひませんからね」

「あら、其那事はありやしませんわ、皆なが爾う言つて居ますのよ、ねえお姉さま」

菊江がむしやくしやいゝいゝ腹で厭味を言つてるとは毫も氣が付かず、骨肉の姉に對する樣に半ば狎え半ば遠慮氣味に肩を搖つて、

「お姉樣が被來らなきや私も二階へ參りませんわ」

恁う言つて嫣然して菊江を見上げた眼の中には一點の邪氣もなければ阿諛もない。菊江は慄然とした。

「ねえお姉樣、ね、ね、ね？」

慈母に對つてものを強請る樣な態度！

「ぢや行きませう、私貴方は本當に好きになつたわ」と菊江は晴れ〳〵とした顏をして蝶子の手を取り、晩に貴方と一緒の室で寢ませうね」

「えい〳〵」と蝶子は笑つて「お母樣は？」

「私は此室へ一人で」

「どうして御姉樣とお母樣と別々に御寢みになりますの？今夜から三人一緒の室にして頂戴な」

「あゝ爾するわ、便所に起きたら私をお起しなさいよ、私いつでも起きて上げるから」と菊江は言つた。

母はにこ〳〵して二人の顏を見比べて居る。

五

併し克巳も橋本も何時まで櫻井家に宿つて居る譯にもいかなかつた。四五日經つて橋本は同家を辭した。彼は一先づ郷里の土佐へ歸つて再び大阪へ來り辯護士の開業をする計畫であつた。克巳は我が目的を語らなかつた。萬龜子に捨てられてから彼の苦惱は少しも減らない、此の動搖の最中に一身の方針を定める事は無論出來なかつた。「死ぬか生きるかの事をやつて見たい」と彼は獨り思つて居た。で彼は毎日外へ出ては大阪の市中を歩き廻り又近郊の山々を渉獵した。

櫻井は東京を去る時に既に一定の方針を有つて居た。其れが大阪へ來て我家の經濟狀態や市民の生活狀態を見るに付け、彼の決心は愈鞏固となつた。彼は母及び叔父の義兵衛から櫻井家の財產と帳簿とを說明された時に我ながら自家の財產の豐かなるに驚いた　ざつと概算しても五百萬圓のものはある。其れが年々に十萬圓つつも殖えて來る、營業上の利益ばかりでなく地所や家屋、其れから貸金、爾いふ利潤は頗る多い。

「それだけの金を蓄へて何にするのだらう」と彼は第一に考へた。父祖連代の人々が骨身を碎いて子孫に殘してくれた其の志は感謝に堪へぬが、併し五百萬圓の金を如何に活用すべきかに就ては父も祖父も曾祖父も何人も言ひ遺して居らぬ。世の中には如何にして金を得べきかに腐心してるものが多い、併し自分は爾いふ苦勞が絕對に無い身分である。學校を卒業し、立派な一人前の男として父の後を繼いだ彼が、今此の巨大な財產の上に立つて途方に暮れた。如何にし一儲けようかではない、此の金を如何に使はうかの問題である。

彼の次に接した問題は人間と金との價値である、彼は店の番頭や手代が一厘一毛の利を爭うて商賣に沒頭してるのを見て人間は何故そんなに金が欲しいかといふ疑が出て來た。で彼は一日克巳に訊ねた。

「僕は什麼したら可いかと迷うて居るよ」

「君は金が目的か人間として完全になる事が目的か」と克巳は簡短に言つた。

「無論人間說だ」と彼は言つた。

「其れぢや解る筈だよ、目的が其處にあれば盛んに金を儲けると同時に國家を富ますが可いぢやないか」

解りこつた事なので章は笑つた。が彼は又次の疑問に捕へられた。

―金を儲けるに現在の狀態で可からうか、但しは他に良法が無からうか、而して儲けた金を如何に活用しようか―

―其れは君の意志次第だ、兎に角金は人間が生活の道具に使用するもので、金のために人間が使はれるものでないといふ事さへ忘れなければ可いのだ―

恁ういふ議論をし合つてから章は熱心に種々な事を考へた。彼は大阪の商店制度に大なる缺陷がある事を見て取つた。丁稚から手代となり番頭となつて羽織を許され別家や親戚並の待遇を受くるまで、奉公人の苦勞は並大抵なものでない、併し彼等には後日資金を貰つて獨立するといふ前途の光がある、彼等は此の光を唯一の綱として働く。これは大阪古來の美風で、多年奉公した家を我が主家と仰ぎ一旦緩急あれば一家族の如く馳せ參ずるといふ事は外國にも例を見ざる處である、併し其れと同時に種々な弊害が伴ふ。

假令ば一家の生活狀態である、丁稚は商人としての見習が目的であるに拘らず、臺所の用事もさせられゝば子守をも仰せ付けられる、勞働時間が不規則なのと食物が粗惡なので、十分の學問する事も出來なければ、精神的の方面に伸びてゆく暇がない、讀書もせず思想上の刺戟を受けず、文藝の趣味も養はず、碌々たる勞働の傍ら教へられるものは金儲一方で、日曜若くは一日十五日の休暇には極めて低級な芝居や活動寫眞に依つて僅かに心を慰めて居る、恁ういふ狀態で育つた彼等は長じて一人前の商人になり紳士になるが、其の低級な趣味や品性は藝者買を此の上もなき樂みとなし御茶屋受けの好い旦那となる事を唯一の誇となし、指環、金時計、別莊、其れで以て自分の價値を高めるものと思ふ樣になる。

六

昔の如く町人は武家よりも一段低い人間だと觀念した時代なら其れで可いが、今日國家の中樞になつて居る商人の品性が其れであるとすれば日本の前途も悲觀せざるを得ない。

一方主人の方に於ても昔の如く丁稚を我が子の如く愛し、二十年の後に約束通りに資金を出してくれるかといふに、近年の風潮は段々其れを出し惜み、甚だしきは他人に教唆さして番頭に放蕩をさせ使ひ込みの罪に託して解傭するものさへある。主人の心が其れであると等しく奉公人なるものも昔の如く主家を生命の捨て處と思ひ主人を親の如く思ふものはなくなつて來た。文明の思潮は個人の權利を重んずると共に主從の關係が稀薄になるのは爭はれぬ。

主人は奉公人を利用せんとし、奉公人は主人を利用せんとする、是では到底昔の美風が保てべくもない。

章の發見したのは是であつた。彼は自分の全財産を拋け出して此に大きな株式會社としようと思つた。株主の重なるものは無論自分であるから他に奪はれる心配はない、而して功勞ある番頭は重役として之を用ひ、丁稚に至るまで半期々々の賞與を供する、及び月給の一部は貯金としてこれを後日獨立の時の資金となす樣にして置く。

無論此の案に依ると章自身も會社より一定の月給を受くる事になるので決して公私混淆を許さぬ。彼は又社員教育の案も立てた。營業部と銀行部の二つに分ち、營業部に於て利益を博し、銀行部に於て最も低利に有益な事業に貸付けようといふ案も立てた。

―國家に有益な事業は投資者にも必ず利益があるものだ―

之が章の持論であつた。案が出來上つた時兄巳は暫時沈思して恁う言つた。

「僕は贊成する。だが餘りに理想に走り過ぎない様に氣を付け給へ」

章は殆ど自分の立案に熱狂した、彼は直に親族會議を開いた。人々はあつと言つたきり更に言ひ出すものがなかつた。

「怪しからん事だ、お前は發狂したのか」と叔父の義兵衛が言つた。「先祖代々の家風を破つて其那事をするより寧そ財産を大川へ捨ててしまふが可い」

章と義兵衛の議論が沸騰した。

「お前は金の有難味を知らんのか」

「金より貴いものがあるのを叔父さんは御存知ないのですか」

「お前はお前の母を乞食にする氣だね」

「叔父さん、私の案に依れば金が今までよりずつと多く儲かります、而して國家の利益になり商人の品位が高まり、日本の富豪に金の使ひやうを敎へる事になります」

「使ひやうを考へるより儲ける事を考へろ」

「其れでは貴方は御承諾下さらないのですか」

「當り前だ」

「では私は櫻井家の相續人たる事は御免蒙ります」と章は昂然として言つた。

「うむ、勝手にしろ」と義兵衛は席を起ちかけたが後室お民の方を向いて「貴方は什麽思ひますか、可いも惡いも貴方の意見次第だ」

お民は切目の長い眼を一同に向けて少しく膝を進ませ「私はな、私の一存では決められませんよつてな、佛様に伺つて見ませう」

恁う言つて靜かに眼を閉ぢた。

七

元より親族の反對は覺悟の上ながら、斯くまで揃ひも揃うて反對とは思はなかつた。議論に又議論、打續く喧嘩の花が咲いて其の夜は其儘になつたものゝ章は少しも屈しなかつた。

一同の後で母のお民は章を室へ呼んだ。

「お前の考へはつた事は立派な事やらうけれどもな、もう些と考へ直して見る氣になられまへんか」

「僕は全力を盡して考へたのですから訂正したり延期したりする餘裕がありません、若し不可ければ僕は富家を去ります」と章は答へた。

「世の中が變つて來ましたよつてな」と、母は暫時頭を傾け「お前のお父はんもな、屢も爾お言ひやした、お金が無うて人に笑はれるよりもお金を仰山有つて人に笑はれる方が恥辱や、金持乞食いふものが世間にあるさかいにてな」恁う言つたが又もや額に手を當てて凝と考へ「お寢みやし、私も寢みませう」

「お寢みなさい」と章は二階へ上つた。彼は床に就いたが眠られなかつた。未だほんの書生上りでありながら破天荒の改革は餘りに傲慢で狂氣じみると親戚に思はれたかも知れぬ、併し俺は若いから改革が出來るのだ。大阪の空氣が浸み込んだらもう駄目だ。

彼は如何して叔父を説破しようかを考へ、又若し成らざる場合には蝶子と共に如何にして生活すべきを考へ、其れから其れと湧き出る空想に彼の頭は次第に熱して來た。と下でも微かに唸る様な聲が聞える。耳を欹つれば母の室である。

「病氣かしら」と彼は床を出た。靜かに階段を下りて母の室を覗くと佛壇に一穗の燈が搖いで其の前に母が一向專念父の位牌に向つて物語るが如く何事をか呟いて居る、兩手の指先に水晶の珠數が涼しく掛つて、老衰の首筋を少しく前に伸ばした狀は、痛々しく尊い。

「お母さん」と彼は言つた。

母ははたと聲を止めたが又思ひ返せるものの

如く撓まず倦まず何事をか念じては眼を閉ぢ、閉ぢては又瞬く。章は一道の靈氣に觸れて背元に寒氣を感じた。逃ぐる様に二階へ戻つた時、時計が二時を打つた。

「あゝ、母は思案に餘つて父の位牌に訴へて居るのだ、母の眼から見ると櫻井家を斷崖の上に立てる様に見えるだらう、左りとて聽かなければ僕が此の家を去ると言ふ。家が大事か我が子が大事か、此の兩端に迷うてるのだ、其れほどまでに母を苦めるなら僕は自說を撤回して今まで通りにしよう、僕の主張は左まで急ぐにも及ばぬ事だ。今の場合に自己の理想よりも母に對する孝の道を考へなければならないのだ」

章は恁う思つた。

「明日朝に起きたら母に倒言つて安心させよう」

うと〳〵となつたかと思へば眼が覺めた。雨戶の隙間から曉の色が仄かに流れて來る。章は直ぐ床を出て下へ降りた、店の者等は未だ眠つて居る。母の居室を覗くと母は未だ佛壇の前に合掌して居る。

「お母さん」と呼べど答へもせぬ。章は又もや二階へ上つた。

其の日の十時頃まで お民は同じ状態で居たが、軈て章を室に召んだ。其の顏は生々として眼の底に力強い光が溢れて居た。

「お父様に御伺ひを立てましたらな、章の思ふ通りにさせいといふ仰せだによつて親類の人達にも倒言ひませう、お前もそのつもりで思ふ通りに立派にやりなはれ」

章は疊に兩手を突いてはら〳〵と淚を零した。

「其れぢや私は什麼なるの？」といふ聲が聞えて、菊江は緣の障子をからりと開けて入つて來た。「此の家の財産を章さんが勝手に滅茶滅茶にして、私を什麼する積りなの、此那事を教唆するのはあの克巳さんでせう、蝶子さんと克巳さんさへ可けれぱ姉なんか什麼なつたつて可いのね」

「いえ、これは御父様の思召やさかいにな」とお民は靜かに言つた。

「死んだ人が何言ふもんですか、蝶子さんの入智慧に決まつて居るわ」と菊江は疊を蹴立てて奧へ入つた。

「どんな事を言つてもな、姉は姉やさかいにな、あれだけは可哀想や思つておくれ」と母は菊江の後姿を見送つて言つた。

八

お民から親族へ改革案に就て諸の話があつた時親族一同は悉く憤慨した。

「もう二度と櫻井の閾は跨がん」と義兵衛はぶりぶりして歸つた。

「ハイカラ息子が今に先祖の財産を潰してしまふだらう」と親族の人々は言つた

お民は默つて此等の罵詈惡口を聞いて居た。其れを見ると章の胸は充滿になつた。

「死力を盡して成功しなければならん」と彼は心に誓つた。

克巳は一日も早く櫻井の許を去らうと思つたが、章一人が身に餘る大計畫に苦んでるのを見て其儘去るに忍びなかつた。彼は章と同じく改革の調查に熱中した。

店は第一に改築されて、更に隣の地所を買ひ入れ小さいながらも銀行樣のものを建てた。番頭は凡て通ひとなし、丁稚だけは見習として宅に置き執務時間を一定して夜は教師を傭うて夜學せしめた。凡てのことは順序能く運ばれた。蝶子は女學校へ毎日通ふ事となつた。

今までの商賣とは異つて銀行部もあれば營業部もある、丁稚養生部もある、仕事が殖える

に從つて店員も多く要る、是には章も困つたが、丁度章の改革案を聞いて大阪に於ける富豪の子弟や學校出の青年等が風を望んで馳せ集まつた。

「老朽どもの仕事と青年の仕事と何方が善いか腕比べをしよう！」

店員の凡ての心は一致した。

此の混雜の中に際して菊江は獨り淋しさを感じた。今までは退屈の時には店へ行く、番頭を揶揄ふ、丁稚を泣かせる、夜中にでも眠つてる丁稚を起して郵便を投函させにやる、然ういふ事は全然出來なくなつた。人々が忙しさうに働いてるのを見ると自分だけが取殘された樣な氣がする。

「皆なが私を馬鹿にする」

然う言つて八方に當り散らすのであつた。毎も事とて母は一向に構ひ付けぬ、そこで彼女は蝶子を捕まへて種々な事を言ふのである。蝶子は決して逆はなかつた。

「姉さんは病氣だから大切にしてあげなければ不可ない」と彼女は思つて居た。

或時蝶子は獨り本を讀んで居た。すると菊江は詰らなさうな顏をして入つて來た。

「蝶子さん、貴方勉强なの？」

「えゝ、明日の英語を少し……」

「私が手傳つてあげませうか」

「有難う、だけれども可いわ」

「どうして？」

「晩に章さんが教へて下さるつて約束しましたから」

「章さんに教へて貰ふ方が可いの？」と菊江の顏色が變つた。

「あら、爾ういふ譯ぢやないけれども」

「いゝえ、爾でせう、何の英語だか知れやしない、貴方方は始終二人で何かこそ／＼話をしてるのね」

「えゝ、隨分面白い話をして下さるわ」

「馬鹿にしてるわ」と菊江は肩を搖つて「私は出戻りで後家で獨り者だからつて其那に馬鹿にしなくても可いぢやないの？」

「あら、爾いふ譯ぢやありませんわ」

「もう可い」と菊江はぷいと室を出て自分の居室に戻つたが、暫時すると我ながら詰らない事に腹が立つたのに氣が付く。左りとて今更蝶子に謝罪る事も出來ず、むしや／＼した氣持で下へ降り、母に何か言はうとしたが、母が默つて裁縫をしてるのを見ると其れが又癪に障る。

「皆なが仕事があるのに、私ばかりが仕事がない」

彼女は見るもの毎に然ういふ腹立たしさに堪へられなかつた。

九

蝶子を怒鳴り、母を怒鳴つて、而も肚が益々むしや／＼する許りなので、菊江は再び二階へ上つて克巳の室を竊と覗いた。克巳は一生懸命に調べものをして居た。

「克巳さん、御忙しくつて？」と彼女は襖の間から顏を出す。

「あゝ少し……」と克巳は何處までも眞面目に机に向いたまゝ言ふ。

「いゝえ、あのね、ちよいと御訊きしたい事があるのよ」

「何ですか」

「なに、詰らない事なのよ」

口から出任せに然那事を言つてる中に彼女は頗る快い心持になる、何のために此の室へ來たのかは自分でも解らない、畢竟若い男を相手に話をして居るのが好きなのであつた。

「私ね、歌を作つたのよ」

「はあ、成程」

「[illegible]よ」

「はあ」
「いつまでか胸に秘めなん行く春の灯ともし頃を泣きたき心……恁ういふのよ」
「はあ」
「詰らなくつて？」
「成程」
「もう一つあるのよ」
「はあ」
「眼さむれば轉寢悲し手枕の腕の痺れ夢の人思ふ……これは什麼？」
「はあ」
克巳は谷莨をすぱ〳〵燻らして其の煙を眺めながら心は全然他の事を思つて居た。
「氣に入らなくて？」
「成程」
「どうなすつたのよ」と菊江は自烈たさうに叫んだ。
「僕には解りませんな」と克巳は初めて我に復つて言つた。
「可いわ〳〵」と菊江は十六七の小娘の樣に肩を搖つて拗ねて見せたが克巳は一向其れに氣が付かなかつた。
「貴方はね、牛乳ホールの萬龜子さんに大變なラブをなすつたんですつてね」
「爾です」と克巳は眞面目に答へた。
「失戀？」
「爾です」
「今でも未練があつて？」
「未練か何かは知らないが苦しいですな」
「第二の戀をなさらないの？」
「さあ、人間は二度生れるものだと都合が好いですがなあ」
「まあ猛烈な事」
何を言つても眞面目一方なので菊江は言葉の繼ぎ穗がなくなつた、彼女は霎時默つて更にもいゝもぢ〳〵しながら言つた。
「貴方は私を什麼思つて？」
「什麼とは？」
「私はね、貴方方の樣な學問のある人は好きよ」
「はあ爾ですか」
「大阪の人は皆な無學でせう、第一家に居て本など讀んでると、あれは阿呆やと言ふのよ、迚も私達の趣味に合はないわね」
「爾ですかな」
「私だつて、今まで戀といふものを知らなかつたのよ、其れが今度初めて……ねえ克巳さん、私の歌を御話したでせう、誰がために此の黑髮を梳り朝な〳〵の亂れ苦しきといふ歌よ」
「御用といふのは？」と克巳に大きな欠伸をして言つた。
菊江はもう張合が拔けてくす〳〵と笑つた。
「また後刻程ね」
彼女は恁う言ひ捨てて室を出た。が彼女の肚の蟲が又そろ〳〵と頭を擡げ出した。
「あの人までが私を馬鹿にしてる」

一〇

別に人を戀するといふでなし、又戀に小說や詩や歌にある程眞劍なものでもなく、苦しいものでもなく、只暇塞ぎに男と話をしてるのが氣持が好いだけの事で、菊江は屢克巳の室を訪れたが、何を言つても木で鼻を括る樣な挨拶なので、これには何とも致し方がない。自分の室へ歸ると、何だか大變に仂ない事をした樣に思はれる。私を笑つてるだらう、恁う思ふと恥かしさが充滿になると同時に「書生ぽの癖に生意氣な」といふ憤怒が出て來る。
「什麼かして彼奴にすつかり降參さしていざといふ時にぽかんと鼻を明かして笑つてやりたいものだ」
菊江は恁う思つた。
克巳は菊江が何のために屢〳〵自分の室へ來る

のか解らなかつた。東京人でもない癖に東京の言葉を訛だらけで使舌り、生れ故郷の大阪を罵ることを以て新らしき女だと思ひ、二十八九になつて小娘の樣な態度をする、何かは知らねど克巳は顏を見るたびに頸筋に水を浴びせられる樣な氣がした。と或時机の抽出を開けて見ると艶めかしき手紙が入つて居た。封筒の中には香水の匂が鼻に突くばかり、潜んで居る。克巳は思はず長大息した。恁ういふ事を櫻井に言つたら櫻井は什麼に憤激するだらう、一家の風波を起させる位なら言はぬが可い。左りとて彼は日毎に襲撃し來る菊江の鋒先には敵すべくもない。

「僕は此の家を去らねばならぬ」と彼は思つた。

彼は今日の女といふものに就て考へた。菊江は新らしき女を衒つた邪道に陷つて居る。萬龜子は黄金のために親兄弟及び自らの戀をも捨てた。是が今日の婦人の思潮であるなら日本の前途は實に恐るべきものであらう。

恁那事を考へて居た日、菊江が突然入つて來た。

「克巳さん、ちよいと店へ行つて御覽なさい、好い人が來てるから」

「誰ですか」

「誰でも好い人よ」

「誰ですか」と再び訊いた時外に自動車の音が聞えた。

「まあ下へ降りて御覽なさい」

「僕に會ひたいと言つてるんですか」

「えい〳〵、是非一寸御目に掛りたいんですつて」

「橋本だらう、彼奴は折り〳〵頓狂な行爲をして人を驚かす奴だから、自動車に乘つて來たんだな」と克巳は笑つた。

「えい、橋本さんよ」と菊江も笑つて居る。

克巳は急いで二階を降り半硝子の扉を押すと外に一臺の自動車が待つて居る。

「おい、橋本か」

恁う言つて克巳は自動車の中を覗かうとした一刹那！　彼は電氣に觸れた鼠の如く立竦んだ。車の窓の中に悚然と坐つて居る飛模樣のお召を着て藤色の半襟に白い頤を埋めて居るは萬龜子であつた。克巳の驚くと共に萬龜子はびくりと身體を動かしたが、ほんの一瞬間に直ぐ舊に復つて凝と伏目になつたきり見向きもしなかつた。髷の上に插した白椿の花が只微に顫へて居る。克巳は殆ど夢の如く窓を見詰めて居る。萬龜子は克巳の眼に魅入られた樣に悚んで居る、二人の間はほんの二三尺の距離であつた。

「へゝゝ、では又寄せて貰ひまさあ、花嫁やよつて恥かしがりまんね」

男の聲が背後に聞えて店から一人の男が出て來た。丸々と肥つて色が白く丈が低く鼻が平つたく眼が小さい。彼は其の懷に友禪縮緬で包んだ赤兒を抱いて居る、房々とした帽子の下からふつくりと肥つた垂頰の寢顏が覗かれる。彼は直ぐ克巳の姿を見て取つて頭の上から爪先まで見上げ見下ろし、

「へッ〳〵〳〵」と再び笑ひ「此のお方だんねや」と店に立つて居る義兵衞に言つた。

「爾々、爾だ」と義兵衞は答へた。

「へッ〳〵〳〵」と男は又もや笑ひながら自動車に乘りしなに赤兒を萬龜子に渡しながら恁う言つた。「お萬龜、さあ是からお前の好きな處へ行きまよう」

自動車は走つた。克巳は茫然として後を見送つた。

二

戀人が人の妻となつた。其れでさへ腹が立つのに今いゝ〳〵しく二人連で、而も赤兒まで伴れて場所もあらうに我が居る家へ見せに來ると

は餘りに人を侮辱して居る。克巳の折角忘れかけた憤怒が再び猛然として燃え立つた。

「森川さん」と大島義兵衛はにや／＼と笑ひながら聲を掛けた。「今自動車で來た人を御存知ですか、あれは油谷篤三と言つてな、却々の豪物ですよ、中に居たのは奥さんでな、貴君は御存知でせう

森川は答へなかつた。

「二人は至つて仲が好くてな、近所でも評判ですよ」

聞くまいと思つても義兵衛の皮肉な言ひ振が耳に轟く。克巳は默つて齒を喰ひしばつた。

「家へ御入りなさいな、克巳さん」と菊江は二階から聲を掛けた。「面白い話があるから」

克巳は帽子も被らず其儘歩き出した。

「何處へ、被行る……」

克巳は答へなかつた。彼は只眞直に鼻の向いた方へ歩いた。何物かをめちや／＼に叩き毀すとか、人と喧嘩をするとか、千丈の絶壁から身を躍らすとか、此の身體を血だらけにするとか、何とか凄まじい刺激を受けなければ氣が狂ひさうだと彼は思つた。一方に於て蒸風呂の湯氣に圍まれた樣にもや／＼した氣持でありながら一方に於て又判然とした意識もあつた。彼は自分で何處かへ行く積りで足を動かしてるんだと知つて居る、併し何處へ行く積りなのか其れが解らなかつた。彼は何處までも歩いた。電車にも乘つた、汽車にも乘つた、同じ處を二度も乘替へて逆戻りした。不圖氣が付くと自分に淋しさうな村に立つて居る、其れは丁度自分の隣に坐つて居た人が汽車から降りたので其れに釣り込まれて何時の間にか自分も降りたのであつた。

「此處は何といふ處だらう」と彼は其の人に訊いた。其の人は五十恰好の田舍の村長か郡書記らしい人で、舊式の背廣を着て頸に手巾を卷き洋袴の裾だけを二寸ばかり端折つて淺黄色の靴下を露はして居た。前歯が二本缺けて居るので言葉が聞取りにくいが、東京の法學院で學んだ事もあるといふので田舍では幅を利かして居るらしい。

「此處は富田林といふ處ですよ」と其の人は答へた。「貴方は此處で降りる積りぢやなかつたのですか」

「うむ、何處と言つて僕は……」と克巳は急に恥かしくなつて言淀んだ。

「はゝあ散歩ですな、郊外散策といふ奴で、其れは結構ですな、試みに一瓢一壺を攜へて行吟して御覽なさい、隨分浩然の氣が養へます」と件の男はにこ／＼して言ふ、朴訥な處が人にはよくある人で頼まれもせぬ世話を焼いて暇を潰しては貧乏して居る、此の男も其れらしい。

克巳は思はず釣り込まれて男の背後に從いて行く。男の言葉は依然古式なもので語彙の豐富を以て自分の學識を示さうとするものの如くであつたが、其の語彙も維新當時の漢語が多いので克巳も聞きづらかつた。

「先づ眼を開いてあれを御覽なさい、南に聳えて假令ば鐵の兜を伏せたらん如く又逆まに立つ惡鬼の怒髮とも言ふべき山は金剛山です、其の隣は葛城山です、其れから眉に方つて大小の山が起伏せるは是なん二子の山脈です、どうです、此の桃の綺麗な事、所謂紅雲靄靆たりですな、夭々として君子の好逑ですかね、大和川は蜿蜒として帶の如しと言ひまへうか」

前歯が二本缺けて居るので此の人が、せう」といふのが、へう」といふ樣に聞える。

二

克巳は此の人の饒舌るに任せて默つて從いて行つた、何のために從いて行くのか自分で解らない、只何時の間にか此の人と行動を共にすべく約束でもしたかの如く、從いて行かなければ

義理が濟まない」と言つた風であつた。
「恁うして行けば何處かへ行くだらう」
彼は恁う思つた。何處かへ行くには違ひないが、此の男には目的がある、克巳には目的がないのだ、彼は其れに氣が付かなかつた。
「どうです、桃の紅雲、菜花の黄圃、紫雲英の紫、麥の綠、七彩絢爛を極めて居ますね、どうです、告天子獨り雲上を領して嚠々たりですね、二子の遠景は蛾眉の翠黛宛として其の……」
妙句を考へるらしく口の中で唸つて居る。
克巳には桃も菜の花も青麥も見えなかつた、只ぼつとした種々な色の眞中を自分が通るのだと意識してゐるだけである、風光も春色も彼に取つては少しも心を慰むるものではなかつた、彼は只凝として同じ所に坐つて居る事が出來ないために歩いてるに過ぎない。折り〳〵菜畠の中から自動車が見えたり、麥圃の上を萬龜子の姿が見えたりした。
「處で貴方」と件の男は畔の路が盡きて廣い路に出た處で言つた、「私は此處で御別れしなきやなりまへん、貴方は葛城へ上るんでへう」
「はあ」と克巳は何時の間にか自分が葛城へ上る事に決められて居たのに驚いて、もぢ〳〵した。
「葛城へ上るには河内村からでも持尾からでも上れます、私は河内へ行くのですが、貴方は？」
「僕は持尾から上ります」と克巳は答へた。實はいつまでも此の男の漢語の相手になつてるのが厭になつたのである。
「それぢや此の路を南へ取つて御出でなさい」
「有難う」
「左樣なら」
「左樣なら」
男は懷かしさうに克巳に挨拶して、柄の太い洋傘を肩に擔ぎ直し、背中に背負つた風呂敷包を手に提げ替へて、赤皮の靴を重さうにのそりのそりと歩いて行つた。十二三間も互に離れたと思ふ頃役場の先生はすた〳〵と足を戻した。
「もし〳〵貴方」
「何ですか」と克巳は停まる。
先生は息をせか〳〵して近寄り、
「貴方は帽子がありませんな」
「忘れて來ました」とも言ひかねて克巳は只首肯いた。
「若し何なら私の帽子を御讓りしまへうか」
今まで氣が付かなかつたが、此の先生は羊羹色の山高帽を被つて居る、絲が擦りきれて縁がほぐれて居る上に、頂天の處は埃で釜敷の樣な輪を描いて居る。
「いや、其れは御氣の毒ですから」と克巳は斷つた。いくら何でも二十年前に流行つた山高帽子には被れやしない。
「御遠慮にや及びまへん、これは東京で買つたので品が上等なのですから。無論十八年前ですけれども」
「併し貴方が御不自由でせう」
「いや、私はどうせ新らしいのを新調します。私は頭が大きい方でして七半ですから大抵の人には間に合ひます、お厭ですか」
いやではありません、結構です」と克巳は如何にして此の帽子難を逃れようかと考へながら言つた。
「其れならお被りなさい、日中ですから暑いですよ、若し何なら」と彼は一寸首を傾けて「まあ被つて御覽なさい」
自分の頭から脱いだ時、裏皮は油ぎつて黒光に光つて居るのがちらと見えた、克巳は憮然として首を縮める拍子に帽子がすぽりと頭に嵌まつた。
「上等々々、却々能く似合ひますよ、冠冕此に新たなり隆々たる容儀ですなあ、全く能く似

合ひますよ」

克巳は泣き出したいほど情なく思つた、が此た至つて辭する言葉がなかつた。

「處で貴方、お讓りすると言つても餘りに失禮ですからね、管鮑の交りは金を斷つてですね、そこで私は貴方に買つて戴きませう、私は今日大阪で新らしいのを買はうと思ひましたら二圓七十錢だと言ひます、二圓なら買ひたいのですが七十錢だけ高いので買ひまへん、そこで貴方はこれを七十錢に御引取り下さいまへんか、それとも高いでせうか」

「いや、廉いです」と克巳は蟇口を出して七十錢を男に渡した。

「やあ此れで御互が便利ですな」と男は笑つた。

一三

七十錢に古帽を賣つた男は再び戻りさうにして又立停まつた。

「貴方はこれから山へ上るんですね、何か食べものがありますか」

「ありません」

「それおや困ります、勿論麓に寺がありますが、麥飯位のもので何もありまへん、貴方は腹が空きまへんか」

言はれて見ると先刻から空腹を感じて居る、で克巳はその旨を答へると男は蹲んで風呂敷包を膝の上に載せながら說き始めた。

「これは煉乳です、大阪では此頃ミルクが高くなつたので驚きますよ、今まで二十三錢のものが三十八錢ですよ、それで品が惡いのです、私は子供を育てるに月に一二度恁うしてミルクを買ひに行きます、大人が飮むなら什麼でも可いが子供に飮ませるミルクが粗製では困りますからな、澤山ありますから一罐だけ御讓りしませう、實價で可いです、三十八錢です、それから此に餡パンがあります、これは一つ五錢づつです、二つほど御分けしませう」

帽子より此の方が餘程有難いと克巳は思つて直ぐ買ひ取つた。

「左樣なら」と男は機嫌よく立上つた。「私は河内村役場の收入役で矢田孫藏といふものです、貴方の御名刺を頂戴して下さい、若し帽子が御厭になつたら何時でも七十錢と引替にします、左樣なら」

彼は克巳の名刺を衣匣に入れ再び「左樣なら」と步きかけながら「どうも實に好く似合ひますよ」

克巳は默つて敎へられた路を步いた。一町ばかり步いて振返ると男は振返つた、而して何やら高聲に言つた樣だが聞えなかつた。自分に「實に能く似合ひますよ」と言つてるのだらうと思つて克巳は益々忌々しくなつた。

併し彼が半里も步いた頃には染々と帽子の有難さを知つた。日がかん〳〵照り付ける、顏にも背にも汗を催す、帽子がなかつたら什麼する事も出來なかつたのだ。

山の麓で初めて彼は前後の顚末を判然と考へる事が出來た。

「なぜ此那處へ來たんだらう」恁う思つたが肚の中では「大阪へ歸つて什麼なるんだ、倒れるまで步け」といふ聲が聞える。

「死ぬ樣な苦しい目に逢つて見ろ、そこで死ぬなら其れが運命だ、生きるのなら其時に又考へて見ろ、いや死ね、死ね、お前は死ぬ方が幸福なのだ」

「爾だ、死ぬのが一番可い」と克巳は搭然として思はず叫んだ。「葛城の山奥で死んだら何人も知るものはあるまい、屍は鴉や鳶や狐などが食つて綺麗に形付けてくれるだらう」

死に對する勇氣は新たに燃え立つた。彼は一生懸命に山を登つた。山は嶮しきにあらざれども蓬勃たる草は人の影を沒するほどで、松も

なく杉もなく檜もなく、只一面の雑草の波が白日に照らされて起伏して居る。克巳は途中で餡パンを平らげた。煉乳も嘗めた。七十錢の山高帽は汗に濡れてゴムの如く柔かくなつた。山の中程で煉乳は盡きた。其の時分から彼は下痢を催した。元來彼は煉乳の蓋を開けた時其の色に既に異狀があり斑點があるのを見た。嘗めて見ると妙に甘つたるく、處々に澱粉の淀みさへある。併し彼は之か左まで人身に害かあるとは思はなかつた。

彼は屡下痢に惱まされた、一回は一回より繁く、其の度毎に身體中が懈くなり眩暈を感ずるのであつた。彼は山間の谷水を掬んでしたゝかに飲んだ、而して又登り續けた。渾身汗に濡れて呼吸苦しく頭は大盤石に壓される樣、一歩は高く一歩は低く、終に夢に夢見る心地の中に漸く頂上に着いた、同時に彼は歩く事が出來なくなつた。

一四

克巳が渓の水を掬んで飲んだのは偶然とは言ひながら其れが頗る有效な治療法であつた。腐敗した餡パンと不純な煉乳が悉く腸を下つて腹が空虚になつた時、彼は最早や下痢の患がなくなつた。併し彼は最早や歩く事が出來ぬ、精神は極めて爽かで草の葉摺れのさや〳〵といふ音までが靜かに聞取れたが、腰は痺れ足は重く此儘死を待つより他なかつた。彼は最初自然に任して置かうと思つた。

「俺は死ぬんだ、死ぬる事が最上の幸福なんだ」

彼は自分の氣を勵ますが如く恁う獨りで言つた、而して靜かに死の至るを待つた。今までじりじり頭を照り付けた日は次第に力を失つて草吹く風が汗の後の肌を冷やかに撫でる、と見ると、盆大の夕日が今沈々として西の海に入りかけて居る、夕日の周圍には朱龍の鱗を散らした樣な雲が一刷毛に彩つた如く中空まで擴かる、日に近いものは瑪瑙の如く紅く其れが遠ざかるに從つて次第に透明になり薄色になり眞白な浮び雲と亂れて駱駝の樣な形になり孔雀の翼となり又世界の地圖ともなる。北に南に又種々な形の雲が陣取つて居た、其等が刻一刻に變つて段々に近付き崩れては又異樣な形象となり、ゆら〳〵と日輪の方へ流れては赫々たる朱盆の光に躊躇つて音もなく鈍色の薄紅に溶けてしまふ。

千變萬化の雲の舞踏を後にして夕日は益落下した、其の紅い色は悲しい、麓の林では鴉や小鳥が今朝から自分達に光を與へてくれた此の美しい慈母に別れるのが辛さに、一分間一秒間の光をも惜んで頻りに聲を揃へて鳴き立つる。野には霞か棚引いて、其處らの草や木も等しく「もう駄目だ、明日を待つより他に仕樣がない」と諦めて居るものゝ如く其の葉を垂れ草に露を帶びて夜に入る準備をして居る。地上にありとあらゆるものは毎日の事だが毎日恁ういふ悲しみを繰返して居るのだ。

「さらば太陽！」と克巳は口の中で言つた。

此時彼の頭に極めて靜かで明晰として何とも言へぬ哀愁が徐ろに湧いて來た。

「日は沈みつゝある、日は沈みつゝある、沈みつゝある夕日と死に瀕して居る自分とは丁度同じものであるまいか。雲は最後の舞踏をなし鳥は最後の唄を歌ひ、媚びつ强請りつ牽き留めるに拘らす、大自然の法則に依る太陽は自分自らも悲しい紅い顏をしながら默つてさつさと沈んで行く。

「あれだ〳〵」と克巳は思つた。「俺も今沈んで行くのだ、だが何人も其れを知らない、夕日は凡てのものに仰がれて沈みゆく、俺は此にある栗の葉が散る樣に此儘死んでしまふのだ」

彼は急に淋しくなつた、其の淋しさは一面に

於て極めて緊張つた淡い哀愁の中の快感で又一面に於て今此處で死ぬといふ事が餘りに無意味で慘酷であるといふ地上に對する未練であつた。

「俺は何のために生きて居たんだらう、何のために生れて何のために生長して學問をして來たんだらう」

恁う考へると餘りに無意味であつた、生きて居た事も無意味であると共に死ぬ事も無意味である。太陽は朝に出て地上に光と熱と幸福を與へる、太陽に依つて人類が育つのだ、して見ると太陽の存在に意義がある、然るに俺の存在は什麽だ。

空の色は次第に鈍くなつた。凡ての雲が影を潜めた。眞紅な太陽は徐々と動いて水平線上に霎時たゆたひながら驟て思ひ切つた樣に沈んでしまつた。

一五

夜にならうとして西の空は未だ明るかつた。其れは沈みゆく太陽の未練と、別れを惜む地上の未練との二つの未練が此の微明に殘るかの如く思はれた。克巳の足元に小さな薄桃色の菫が充滿に咲いて居た。丈の低い山茱萸や二三尺ばかりの栗の木はかさ〳〵夕風に鳴ると、草共は小さな顏を顫はして夜の暗を恐る〳〵待ちつゝ囁く。麓は段々に暗くなつた。一聲二聲雉子が鳴いたが其れも聞えずなつた。西と北に當る大阪の方に灯が微かに見えた。今まで氣が付かなかつたが南に當る金剛山は早や眞黑になつて巨大な怪物の如く聳えて居る。溪々の流れが沈默した。而して天には星が輝き始めた。克巳は急に山を下りたくなつた。彼は恁ういふ山へ登つて來た事を不覺に思つた。

「死ぬのは恐くないが、人の居ない處で死にたくない」

彼は自家撞着ながら恁ういふ氣になつた。頻りに人が戀しい、友が戀しい、妹が戀しい。

彼はほんの一瞬間に妹や櫻井や萬龜子や睦子や橋本の顏を一度に描き出した。自分の死骸を取卷いて泣いてる顏も見た、馬鹿な奴だと怒鳴つてる橋本の顏も見た。而して死んでから後に校友や其他の人達が嘲笑する顏も見た。

「此奴は俺達に恩返しもせずに死んでしまつた」

彼自身で言つた此の言葉が妙に彼の心を苦しました。

「俺は死ぬべき場合でなかつたのだ」

恁う思つたものゝ、彼は最早や什麽する事も出來ない。彼は激烈な下痢と疲勞のために身體は綿の如くなつてしまつた。夜になるとすると差向き眠るべき場所を選定しなければならぬ。彼は周圍を見廻した。大きな樹木とては一本もない、蓬勃たる雜草と笹ばかりの此の禿山で夜露を凌ぐ場所を見出し得べき筈がない。

彼は不圖先刻溪へ下りしなに見た岩の事を思ひ出した。岩は山頂の横に瘤の如く突出して下界を睨んで居るかの如く見えた。彼は其れと決心して地上を這ひ始めた。二三尺這つては又二三尺立つて歩いて見る、而しては倒れて又這ひ出す。彼の背廣は土に汚れて、カフスの釦は既に無くなつて居た。靴を穿くのは重いから靴を捨ててしまつた、山高帽子は枕にもならうかと思つて被つて居たが其れも飛んでしまつた。

漸く岩の處まで來た時に彼は半ば死せるものの如く疲れて居た。

「下痢がなかつたら恁那に疲れるんぢやなかつた」と彼は今更ながら不純な煉乳を恨んだ。

傳へ聞く久米の仙人は葛城山の洞窟に籠り、遙かに吉野山を望んで雲の桟橋を造つて渡さうと思ひ立て工事半ばにして物洗ふ女の脛を見て

通を失ひ下界に落ちて死んでしまつたとやら。

其の洞窟は今克巳が辿り着いた岩である、土地の人は是を稱んで行者岩といふ。幾十尺とも知れぬ巨岩は半天に抗する如く峙つて居る、其の下は雜草柔かく生えて風も當らねば自然の宿となつて居る。克巳は其處に這ひ込んだ、而して横になつたが寒さが次第に襲ふて來た。初めは齒の根が合はぬ樣に顫へる、其れが一時間も續くと膝の節々が痛み出す、半身は自分のもので半身は他人のものの樣！

寒さと戰ふのは隨分辛かつた。彼は最早や是までだと覺悟を決めた。

一愈死ぬんだと決まれば……可しッ、俺は見すぼらしい死狀をせんぞ一

彼の反抗心が猛然と頭を擡げた。此の反抗心は彼の特有なるもので、野球選手として戰場に戰ふ時、味方が散々の敗北になればなる程彼は沈着になつた　彼は其の氣分を憶ひ出した。

俄かに起き直つて座禪の如く胡坐を搔く、臍を尻に當てて下腹をぐいと下に落して突出す、而して苦しくなるまで呼吸を吐き又苦しくなるまで呼吸を入れる。斯くする事三十分許りで彼の身體は段々温かくなつて來た。四邊は死せるが如く靜かである、音といふ音は全く絕えて只岩から滴る露の音が一定の間歇を以てぽとりぽとりと落つるのみである。彼は靜かに死を待つた、而して夜の空を眺めた。空は漆の如く暗い、其の暗の中に無數の星が散らばつて居る、彼は眼を定めて太白星を見詰めた。星は暗を透かして瞬くが如く輝いて居る。

「あの星が俺を見てるんだ」と彼は思つた。「何か俺に語つて居る、合圖をして居る、其れは何だらう一

彼の眼と星の眼とは互に謎の如く輝き合つた。凝と見詰めて居る中に克巳は次第に神祕な光の中に溶けてゆく樣な氣がした。

一六

櫻井の家を出た克巳は其の夜歸らない、翌日も歸らない。

「何處へ行つたらう」と章と蝶子は心配し始めた。無斷で外泊するやうな事は滅多になかつた。

二人は一昨日爲吉と萬龜子が來たといふ話を聞いた時互に顏を見合した。

「何事か起つたのではあるまいか一

此の前に萬龜子が家出をして爲吉の許へ走つた時、汽車に轢かれかけて手傷を負うた。若しや今度も其那事ではあるまいか。一本氣で凝性であるだけに種々子供の樣な失敗をやる、併し何か變事があるとすればもう何分の消息が解るべき筈だ。此度の失敗があつただけに二人は猶も氣を揉んだ。

丁度三日目の朝である、白木村の高貴寺の寺男が宙を飛んで來た。

「森川克巳さんいふ人は此方の人だつか」

聲を聞いて蝶子も章も飛んで出た。

「山に倒れて居まんね、山に……もう息がおまへんね。」

蝶子は吃驚して章の腕に凭れた。寺男は前後の樣子を語り續ける、其れは恁うであつた。

昨日の夕方寺男は溪間へ山葵を植ゑに山の中程まで登つた、すると背後から跟いて來た犬が片足の靴を咬へて走つて來た、山には種々な人が楠公の舊蹟を探つたり、探險の爲に來たりするので、若しや倒いふ人のであるまいかと思つたが、日は暮れかけて來た。どうせ歸路には此處を通るだらうから其の時にしようと思つて歸つて來たが、其の夜はそれらしい人が通らぬ、と今朝早く例の山葵を見に行つて見ると、帽子が風に吹かれ一落ちて來た　重ね〴〵の事に寺男は

山頂へ登り岩穴を見ると洋服を着た人が胡坐を掻いたまゝ死んで居る、吃驚して服の衣匣を探すと手帳がある、其れで漸と櫻井家に居る人だと解つた。
「呼吸が無いけれども脈がありまつしやろ」と寺男は解らぬ事を言ふ。
「行かう」と章は蝶子に言つた。
「えい、參りませう」と蝶子は脈があると聞いて俄かに勇氣が加はつた。
「私も行きませう」と菊江も言つた。「待つて頂戴、着物を着替へますから」
併し克巳の危急に菊江の御化粧を待つてる暇がない、二人は其儘醫者と寺男を伴れて家を出た。
白木村へ行くと克巳は既に高貴寺の書院に舁ぎ運ばれて柔かい蒲團の上に寢かされて居た。
「兄さん」と蝶子は兄の顏を見るや否や枕元に坐つた。
克巳は笑つて居た。
「あら」と蝶子は再び驚いた。「兄さん、生きてるの?」
「うむ」と克巳は言つて章に向ひ「濟まなかつたね、此の寺の住職や村の人達に助けて貰つて大變に世話になつたから、君から能く禮を言つてくれ給へ」
恁う言ふのも漸との事であつたが、併し其の朗らかに輝く眼と、明晰した聲とは今までの克巳よりも遙かに晴れやかで快活であつた。
「どうしたんだ」と章も微笑を含んで言つた。
「なにね、馬鹿々々しい事だよ」
蝶子は今まで眼に一滴の涙をも持たなかつたが安心と共に聲を擧げて泣き出した。
「馬鹿な奴だな」と克巳は笑つて「何か飲みたい」
醫者は直ぐに薄い葡萄酒を飲ました。一口に嚥み干して克巳は人々の顏を機嫌好く眺め、
「僕は恩返しをするよ」
「何の恩返しだ」
「僕は土地の恩を感じた、人類の恩を感じたのだよ、僕は恩惠に依つて生き返つたのだ。爾言つた風のものが吾々人類お互の間にあらうぢやないか」
「暫時御眠みになる方が可いでせう」と醫者は言つた。

一七

醫者の注意を克巳はにこ／＼して聞きながら
「大丈夫です、僕は只肉體が疲れてゐるだけですから」
恁う言つて彼は前後の顚末を緩くり／＼語つた。併し彼はあの夜太白星を眺めて、星の光から我が心の底へ透み込んだ或る神祕な力を什麼説明しようかに苦しんだ。
「凡てのものは生きて居る、金星も生きて居るんだ。星の光は星の言葉だ、われ／＼の言葉がわれ／＼の感情を交換する如く星もわれ／＼人類と感情を交換したがつて居る、詰り物と物との親しみだね、爾だ、親しみだ、情といふ奴だ。此の親しみは生きてるものだけにある、そこで僕は生きたくなつた」
葡萄酒の故か彼の蒼白めた顏が段々色づいて來た。
「併しむづかしい話は止さう」と彼は言つた。「これは僕だけに初めて解つて、君には既に解つてる事かも知らんからね、兎も角僕は幸福だよ、僕は今まで萬龜さんを呪うて居たが僕は萬龜さんの幸福を望むよ」
「其れが本當の愛かも知らん」
「えい、爾よ」と蝶子は言つて「だから睦子姉さんをも愛してあげなきやならないわ」
「愛するよ」と克巳は微笑して「僕はどんな人でも愛する」

「もう話は止さう、疲れてる樣だから」と章も言つた。

「はゝゝ」と克巳は笑つて「僕は死んで居たのぢやないよ、至極快い氣持で生きて居たんだ、只下痢してものを食はないだらう、二晝夜の絶食で疲れきつて胡坐を搔いたまゝ動けなくなつたのだ。座禪といふ奴はあれだと僕は思ふ、絶食して山の洞穴に坐つて大自然と親しむと實に何とも言へない快感だ。詰り人間と自然と渾然として化合するんだね、僕は寺男が僕を搬ぶつたり衣囊を探したりしたのを知つて居たが、其れにものを言つたり何かすると僕の此の靈妙な恍惚とした氣分が破れるもんだから默つて居たのだ。そこで僕は此の寺へ運ばれて皆の世話になつたが、此の寺の坊さんは中々豪い、絶食や座禪や難行苦行の經驗があるもんだから、手當の方法は實に能く行屆いたものだ。詰り僕は身體が死んでも精神が生きて居たんだね、靈魂不滅などいふのは此れだらうと思ふよ」

「それぢや兄さんは達磨さんになりかけたのね」と蝶子は言つた。

一同わつと許りに笑つた。

「爾だ、達磨の出來損ひだよ、達磨は九年面壁だが僕は三日間だ」

「三日達磨なのね」と蝶子は又も人々を笑はした。

醫者は歸つた。章は住職及び村の人々に篤く謝禮をして、

「どうだい、歸れるか」と克巳に訊いた。

「もう少し此の寺に置いてくれ、僕は今考へて居る事があるから」

「どんな事？」と蝶子が訊く。

「今に話すよ、もう少し考へて見てね」と克巳は矢張にこ〳〵して答へた。

其の日は夜になるまで蝶子と章が付添うて居た。

「僕が行くまで此處へ來んでも可いよ」と克巳は言つた。

「達磨になると不可くつてよ」と蝶子は言つた。

章と蝶子が夜中に大阪へ歸つて見ると母のお民は未だ床に就かず、一心に佛壇に向つて祈つて居た。

「只今」と二人は言つた。

「克巳さんは助かりましたやろ」とお民は確信あるものの如く言つた。

「どうしてお母さんが知つてるのです」

「判ります」とお民は眼を瞬いて「御佛壇から御告げがありましたさかい」

蝶子は何の故とは知らず只しみ〴〵と有難い姑だと心の中で拜んだ。

達磨

一

今日は〳〵と思つても克巳は中々大阪へ歸らなかつた。一週間を過ぎた日曜の朝手紙が屆いた。

「此の手紙着次第御出でを待つ」

二人は直ぐに準備をした。

「今度こそ私も」と菊江は言つた。

彼女は克巳の危難に際して又其の後に於て克巳に贈らうと思つて作つた歌が大分溜つて居たのであつた。で菊江も同行する事となつた。

三人が高貴寺へ着いた時に克巳は門前に立つて居たが直ぐ寺男に筵や重箱を擔がして山へ上つた。上ること約半町許りで河南の平野を一眸に見下す所に筵を敷いた。

「あれを見てくれ」と克巳は欣然として菜の花や桃の花毛氈を指さして言つた。「僕は此の土地に恩返しをしようと思ふ、其れは他でもない、僕は此處で牧畜をやるのだ、といふのも大

袈裟に失するが、此の平野及び此の山は雑草が多い、そこで僕は牛や豚や鶏を飼ふのだ。斯う言つた許りでは餘りに突飛だと思ふかも知れんが、第一に僕は大阪の食料品の餘り粗惡なのに驚いたのだ。大阪は食道樂だといふが僕をして言はしめば大阪は食物程度の最下等だ、尤も其れは普通と意味が違ふ、金のある者は幾らも上等のものが食へる、併し中流以下の人々になると滿足なものを食つてるものは甚だ少い、其れは例の儉約主義に依るかも知らんが、一方に於て廉價で滋養に富む食料品がないからだ。上等のものは富豪に占められて中流以下の大多數が枯葉の樣なものに滿足しなければならぬとすると、大阪の人間は段々に衰弱する許りだ、日本全國中で最も弱い軍隊は大阪師團だと言はれるのも其の點が一因をなして居る、僕が先達て死にかけたのは煉乳の粗惡なためであつた。其れから僕が考へた。煉乳は珈琲に入れて飲むならどんなのでも可いかも知らんが、病人…特に母乳がなくして煉乳に依つて子供を育てる人になると、牛乳や煉乳は人命を司る最も大切なものだ。英國では市營として育兒用の牛乳を取るために特に牧場を設けて居る、其れでなければならん、其處で僕は牛乳や乳酪や其等の食料品を製造し、殆ど實費で一般に賣り擴めようと思ふ。僕を助けてくれた此の村人、僕に偉大な感化を與へた此の山の恩を報いるために僕は特に此の一帶の地を選んだ、僕は今まで餘りに臆病だつた。精神上の打撃に負けて、より以上に自己を發見する事が出來なかつた。僕は人に愛されたいと思つた。何故人は僕を愛してくれぬかと恨んだ。だが其れは極めて勝手な考であつた。多くの人を愛する事が出來ないものが什麼して人に愛されるものか、太陽は萬物を照らして光を與へる、萬物は太陽を愛する、其れだ、更に星は地球を愛して其の深い情の眼を以て夜の空を見戍る。太陽の愛は何人も知るが星の愛は何人も知らない、人の眼に立たない隱れたる處に彼女の愛の光がいつでも輝いて居る、僕の仕事は何人も認めないかも知らんが併し僕は認められなくとも僕の愛だけは地上に提供しなければならんのだ―

斯う言つて克巳は熱した眼を三人に向け霎時息を吐いた。

「私は立派だと思ふわ、兄さん」と蝶子は直ぐに贊成した。

「贊成々々」と菊江は雷同した。「本當に哲學的だわ」

彼女は食料品が什麼の斯うのと言ふ事には何の興味も有たなかつたが、太陽や星の話を聞いたのですつかり感服してしまつた、而して詩の樣だと思つた。

二

無論章は異議がなかつた。資本金として當座十萬圓は章の手から借りる事となつた。最初から規模を大きくするよりも漸次に擴張したいといふ克巳の意見であつた。

「斯ういふ時に睦子姉さんが居ると可い」と蝶子は言つた。

翌日から克巳は其れ〴〵の手續をした。土地の借入から牧舍の建築、其れから[illegible]ではあるけれども些やかな工場、職工や其他の寄宿舍、其等がざつと出來上つた頃はもう四月も過ぎて五月の中旬であつた。

葛城山下の廣漠たる草原に新たに出來た此の工場や牧場は村人の眼を驚かした。柵が結はれる、牛や豚や鶏が運ばれる、人夫共が鼻唄を唄ふ、淋しい村は一度に賑やかになつた。克巳は毎日人夫共と共に働いた。晝飯時になると獨り山に登つて、牛の吼ゆる聲、鶏の鳴く聲、普請の音などを遙かに聞きながら會心の

笑を湛へる。

「今に此の平野を悉く我が所有にしよう」

彼の空想は果てしもなく擴がつて貧富の差別ない共産的の新らしき村が出來るのであつた。

職工の拂底なのに一番困つた彼は、種々奔走した結果江戸熊と綽名されて居る男を傭ひ入れる事にした。此の男は部下に大勢の職工を有つて居た。右の足が跛で自分が働かない代りに職工の指揮には妙を得て居る。職工と言つても煉乳や牛酪の罐を作るのが重なもので他は箱や什器位のものであつた。牧畜の方は重に百姓を雇入れ、東京から茂平爺を呼び寄せた。

「斯ういふ仕事なら坊ちやんより俺の方が教師だ」と爺やは力んだ。實際牧草の種蒔や刈入や牛豚及び鷄の事に掛けては茂平は手に入つたものであつた。

愈製品の順序が立つた時克巳は章や蝶子等を呼んで相談した。

「品物には其れぞれ商標を付けなければならぬが、何にしたら可からうか」

「ハート印が可いわ」と第一に菊江が言つた。

「景氣の可いものが可かつぺ、牡丹に唐獅子竹に虎」と茂平は言つた。

「達磨が可いぢやないの」と蝶子が最後に言つた。

克巳も章も其れに賛成した、葛城の山中で達磨になりかけて發心した此の事業に、達磨の標は最も當を得たものであつた。

「達磨印ミルクに達磨印バタ」と克巳は口吟んだ。販賣は凡て櫻井の店で引受けることとなつた。

式ばかりであるが落成式を行つて村人を招待した、其時例の收入役矢田孫藏もやつて來た。彼は新らしい帽子を被つて居た。

「貴方ですか、此の牧場を御やりになるのは」と彼は非常に驚いて且つ喜んだ。「處であの時の帽子がお氣に入りましたか」

斯う言つた時章も蝶子も腹を抱へて笑つた。

村の人氣は頗る好かつた、日毎々々に場内の管理が就く、工場の煙突から煙が出て河南の平野の風に靡く、機械の音が規則正しく響く、精選された煉乳は銀色の罐に入れられる、罐は二重蓋で表に達磨の印が捺されてある。

達磨印の煉乳が一度市場に出るや否や大阪市内の食料品商は目を欹てて驚いた。今までの煉乳は察過糖を入れたり澱粉を入れたり、有害な防腐劑を入れたりするものが多く、牛酪の如きは植物性のマーガリンが八分通りなのさへある。外國ではマルガリンはマルガリンとして堂々と記入してあるが、日本ではマルガリンを牛酪として賣るものもある、其等に比べると達磨印は一點の非難を許さぬ純良なもので、其れに賣價は他のものよりも四割程廉い。

「此那法外な事をして永く續きまつかいな」と市中の商店は嘲笑した。

三

市中の嘲笑に拘らず達磨印の需用が次第に盛んになつて來た。各病院は賞用する、市中の醫師は奬勵する、新聞紙は其の純良を紹介する。達磨印の勢は旭の天に昇るが如くなつた。克巳は獨り微笑した、併し彼は一方に於て什麼しても規模を大にしなければならぬ必要に迫られた。一月や二月の中に註文の增額は恐ろしい勢で迚も其れに供給する事が出來ない。

彼は此の事を章に語つた。

「少しも顧慮せずにやり給へ」と章は言つた、而して更に資金を增加した。

克巳は章と連名で土佐の橋本へ手紙を送つた、すると直ぐ橋本から手紙が來た

「家の整理で案外暇取つたが愈四五日中に其地へ行く、ミルクは飲みたくない

が牛なら食ふから然るべき奴を肥らして置いてくれ、序に辯護士事務所も借りて置いてくれ」

間もなく橋本が來た、北濱に事務所を借りてやつたが彼は辯護士事務は書生に任して置いて重に牧場へ來て邪魔になりながら手傳ひをして居た。二年前に早稻田の運動場で血を湧かした親友は一個の紳士として再び集まつた。

「睦子姉さんは什麼してるだらう」と蝶子は毎日の樣に思つた。

達磨印の好評嘖々たるに伴れて、森川克巳の名は次第に高くなつた。利益を外にして公共のために計畫したる此の事業家に一度會つて見たいと言ふ人は次第に多くなつた。併し克巳は斷然酒席に臨む事を斷つた。世間の評判のみならず櫻井商店の勢力は此のために益加はつた。

「好え御友達を有ちました。あの方は倅の嫁の兄さんでな」とお民は逢ふ人毎に誇つた。

斷然足踏をせぬと席を蹶立てて去つた叔父の義兵衞は其後間もなく仍且出入をして居た。彼は達磨印や櫻井銀行が着々として成功しゆくを見て案外に感じた。

「今に見ろ、屹度失敗るから」

凡て先輩とか老人などが青年の仕事を見て第一に言ふのは此の言葉である。義兵衞は恁う言つて澄まして居たが、克巳と章の事業は益好くなりこそすれ毫も挫折の色が見えなかつた。彼は額を叩いて唸つた。元來義兵衞は章の父の弟で若い時には始終兄の厄介になり勝であつた、彼は半分商人で半分政治屋である、兄が忠告したに拘らず、幾度も市會議員の選擧に打つて出て其の都度兄に迷惑を掛けて居る。理窟も言ひたし威張りもしたし玄關も張りたしといふ性質だから雜貨やめりやすの商賣をやつても純然たる商人になる事は出來ない。儲ける事を知らずに費ふ事ばかりに達者な彼は自然兄の財産を當にする樣になつた。

「兄が死んだら私は後見人になるから其時に融通しよう」と彼は肚の中で思つて居た。兄は死んだ。彼は望み通り後見人になつた。併し兄の妻お民は假令伯父と雖も一文も猥りにすることは許さなかつた。市會議員選擧の時千圓の借用を申込んだがお民は位牌にお伺ひを立てて遂に斷つた。彼は失望した。そこで第二の策として菊江を富豪へ嫁入らせて其の緣故を以て自分の腹を肥やしたが、其れはほんの僅かの間で、彼は次に章を手に入れようと試みた。其れが彼の最後の望みであつた、處が章は子供でなかつた。參謀に克巳が從いて居る、彼は喰入るべき隙もない、彼は種々に考へて到頭一個の活路を案じ出した。其れは菊江の事である、盛りは過ぎても標致は好し若作りをして居るから二十二三には見える、あれを然るべき處へ嫁入らして甘い汁にありつかう。

恁う考へて彼の定めた候補者は油谷爲三である。

四

「おい庄吉、何してんね、箱の釘を拔いたら釘箱へ入れんかいな、釘一本でも錢やな、爲七、お前箒を立て掛けたら箒が傷むやないか、逆に立てんか、逆に、おい仙吉、お前先刻から飯ばかり食べてるな、それで五杯目や、可い加減にしなはれ、おい〳〵忠七、疊の燒穴に指を突込んで、阿呆やな、紙屑を拾つて籠に入れんか

爲三は縞の袷に袴前垂を掛けて丁稚共に叱言を言ひ〳〵辛氣臭さうに舌打をして時計を見た。秋の日は短いと言ふものの時刻には未だ二時間もある、彼は今日夕方から浪の家で二三の同士と會合の約束がある。其れは彼等が稱して阿呆會と名付けたもので、月に一回づつ阿

果の極を盡して遊ばうといふ催しである。神戸の成金には鋼の目玉に寶石を入れて燒物にした者もあり、香水の風呂を沸かして入つたものもあり、足袋のこはぜを白金にしたものもあり、雪駄の底に純金を付けたものもあり、又煙草の火を點けるに百圓紙幣を小綯にして燭臺の灯を移したものもある。其れも陳腐是れも面白くないといふので大阪は寧そ大阪流にやらうと相談一決の結果今夜は銘々の買ひ馴染の藝妓——即ちお妾を一堂に會して踊をやらせようといふ計畫である、お妾は但し二人以下たるべからずといふ規約である。

「若し千代駒を出席させると米龍をも出さなければなるまい、爾かて若竹は顏は好いが色が黑いよつて踊には向かんし、富彌は可いが千代駒との關係を彼女に知られると喧嘩が出來るし、一奴は……

數ある妾の中で彼れや是れやと選つて見ると段々迷ふばかりで決心が就かぬ。縱令一人だけを選定した處で自分の妾を二人とも同席さして此の二人に拙者のでございと名乘つたら二人とも好い氣持はしないだらう。

「なる程これは皮肉な命や」と彼は肚の中で云つた。「其れも其れだが此頃はお萬龜にも少し冷淡やさかいに、お萬龜の機嫌も取らにやならんし……おい庄吉、居眠りには早いぞ」

踊やお妾や萬龜子の事を混淆に思ひながら丁稚に叱言を言ふ、而して又時計を見上げる。

「何も俺が儲けて俺が遊ぶのやさかい、お萬龜に遠慮する事は無いわい」

恁う思ひかけた處へ義兵衛が入つて來た。

「御機嫌よう」

「やあ大島はん、まあお上り」

「一寸通り路だつたので寄りました、御邪魔ぢやありませんか」

「いや、なに」と爲吉は又も時計を見て「構ひまへん、さあお上り」

爲吉は義兵衛の容子を見て早くも祕密の用談だと悟つた。彼の先天的才能は人の顏色で胸中を直覺する事にある、先代の國助の信用を得たのも是がためであつた。で彼は義兵衛を座敷へ案内した。

「どうも繁昌の店は何となく氣が立つて異ひますな」と義兵衛は坐りながら言ふ。

「何を貴方、あきまへん、もう暇でな」と爲吉は又ちらりと義兵衛の顏を見て「繁昌といへば貴方こそ……銀行が豪い評判だすな」

「いや、其れよりも貴方これですよ」と義兵衛は化粧紙に包んだ達磨印の煉乳罐を出して「貴方は此れを創めた森川といふ男を御存じですか」

「いつぞや櫻井さんの前で會つた若い人だつしやろ」

「あゝあれ〱、あれです、あの男がやつたのですが、中々の敏腕らしいですが、併し至つて素行の修まらない男でな、東京では書生の時から色魔といふ綽名を取つて居たのです、此の男のために何れだけ良家の娘や細君が誘惑されたか知れやしません、たしか貴方の奧さんもあの男に御存じだと思ひますが」

恁う言つて義兵衛は爲吉の顏を凝と見た。

五

何か商賣上の用向か選擧の話か何れにしても餘り儲かる話ではあるまいと思つて居た爲吉は、義兵衛が突然に克巳の事を言つたので少しまご〱しながら「惡い奴でおまんな」

「實に惡い奴です、今度の煉乳の事業も皆を欺して金を出させて己れが甘い汁を吸はうといふ肚なんだから堪りません、あゝいふ奴は大阪から叩き出してしまはなければ不可せんよ、第一物騷ですからな、何時なん時人の家庭へ入つて

娘や女房を誑し込むか知れやしませんよ」

「本當だんな」と爲三は言つた。

「處で私は餘計な事の樣だが、貴方に一應御注意して置きたいのですが、貴方の奥さんですが……」

「はあ」と爲三は突拍子もない喉に塞つた樣な聲を出した。

「奥さんに限つて什麽の恁うのと言ふ事はありますまいが、あの男は何でも奥さんを執念深く付け廻してるさうで、元と〳〵兄妹の樣に親しくして居たさうですから……」

「はあん」と爲三は再び妙な聲を出して「怪しい事でもおましたんやろ」

「其れは什麽か解りませんか、多分其那事は」と義兵衞は曖昧に言つて「何しろ用心に若くはないですからな」

爲三は面伏さうに煙管を銜へて疊を見詰め又慌てて火の消えた煙管を吸ひ込んで、

「頃日の學生は油斷がなりまへんな、本當に」と再び首を傾けたがにやりと笑つて「昔の事は咎めても仕樣がおまへんよつてな」

「左樣、無論過去は追及の必要がありませんが、禍が眼前にあるとすると用心にしくはなしですよ、これは私の老婆心で甚だ失禮な事ですか……此の事に關しては輕率に言ふべき事でもないから私は種々取調べた結果、見るに見兼ねて伺つた譯ですが、御存知の蒲江などは非常に貴方に同情して、幾ら養子とは言ひ條、餘りに酷いとな」

爲三の手はぶる〳〵と顫へて煙管を烈しく灰吹に叩きつけ、

「では現在何か不埒な事をして居まんのか」

「いや、爾とは斷言が出來ませんが」

「ふうむ」と爲三は我ながら昂み出す息を抑へる樣に「おほきに……能う言うておくんなはつた」

「いや、飛んだ詰らない事を」と義兵衞は我が計略の七分通り成功したのを喜びながら「處で油谷さん、私は外にもう一つ御相談があるのですがな」

「どんな御用で？」

恁う言つたものの爲三は最早や胸の中がもや〳〵して自分の聲すら解らなかつた。

「其れは例の煉乳の事ですが、森川のやつてるあの事業を貴方が全部引受けて下さらんか、利益は十分にあるし信用もあるのですから決して御損は行くまいと思ひます」

「はあ」と爲三は冷やかに聞き流して仍且萬龜子と克巳の事ばかりを思ひ續けて居たが、今利益といふ聲を聞くと等しく彼は急に暗然とした顏が明るくなつた。

「併しあれは森川がやつてる會社やよつて……」

「其れは此方へ係る事は造作もない事です」

「どうして？　其れは？」

義兵衞は膝を進めて聲を潜めた。

六

義兵衞の去つた後で爲三は座敷の中を氣忙しさうに歩きながら、義兵衞の話の事を頭の中で繰返した。

「どうも爾らしい」と彼は言つた。考へて見るとお萬龜の態度は怪しい事だらけや」

學生生活といふものに經驗がなく又讀書の趣味を有たぬ彼は、純潔な學生の氣質を知らぬ、男と女と親密になれば必ず醜關係が結ばれるものと信じて居る。

「爾かも知らんて」と彼は再び言つた。と直ぐに其れに反抗する考が別に起つて來る。

「他の女は爾かも知らんがお萬龜に限つて其那事は無いやろ、どうも無い樣だ、爾や、決して其那事は無い」

彼は放蕩者で數多の妾を有つてるだけに嫉妬

が深い、而して彼は自分で嫉妬深い事を知つて居る、知つて居るだけに强ひて其れを抑へようとする、抑へれば抑へるだけ胸苦しくなつて來る、そこで彼は成るべく善意に解釋して見たくなつた。疑へば際限がないが疑はなければ好い氣持で居られる。

「爾や、そんな事は無い」

恁う言つて彼は漸と安心した。そこで彼は今夜の阿呆齋を思ひ出した。最早や時刻が過ぎて居る。

「今夜は一つ底拔騷ぎをやらう」

彼は直ぐ萬龜子の室へ入つた。萬龜子は赤坊を抱いて乳母と共に笑つて居た。彼の胸に潛んだ例の疑ひが萬龜子の顏を見るや否やむくむく頭を擡げた。

「着物を出してんか」と彼は突慳貪に言つた。

「御出ましですか」

「出て行くのやよつて着換へるのや」

爲三の[illegible]に萬龜子はちらと顏を見やつたきり赤兒を乳母に渡して[illegible]を開けた、其の沈着いた狀が[illegible]癪に障る。

「早うせんかいな」

「はい、何れにしませうか」

「解つてるがな、秋になつてから單衣を着られんやないか」

「でも御出先に依つて御召物も違ひますからと思ひまして」

「散財に行くのや」と爲三は大きな聲で言つた。

「私はな、學生やないよつてな、御茶屋より他行く處がないのや、藝者が待つてんね、別嬪の藝者が……なあ坊々」と赤兒に顏を差し出す。

乳母は憎らしげに赤兒を搖つて横を向いた。

「では縞の大島にしませう」

「早う／＼」と爲三は素裸になり丸々と太つた臀をひた／＼と叩いて「風邪を引くがな」

萬龜子は默つて着物を出した。背後に廻つて着せかけようとすると、引奪つて自分で着ながら、「今夜は歸らんかも知らんぜ」

「御歸りにならないのですか」

「歸る事は歸る、歸らんで什麼すると思つてるのや、其れとも私は養子の身分やさかいにな」

恁う言つて爲三は「へゝゝゝ」と笑つて室を出た。

出たかと思ふと直ぐ又戻つて、

「おい亭主が他所へ出るのに門送りをせんいふ法があるか、女學校で爾教へたんか、私は養子やからて……」

「御免なさい」と萬龜子は疊に手を突いて「商人は忙しいから出る度に門送りをしなくても可いと仰有るもんですから」

「いらんわい、阿呆ッ」

爲三は怒鳴つてさつ／＼と出て行く。店を出てから彼は不圖立停まつた。

「些と酷過ぎたかも知らん……なあに構やせんわ」

散々怒鳴り散らして厭な思ひをさせて其儘家を出る方が彼には寧ろ出易かつたのである。

七

良人を見送つてから萬龜子は元の室へ歸りほつと息を吐いた。父の在世の時には下へも置かずに大切にしてくれたものが父が死んでから手の裏を返した樣に藝者買も公然になり夜泊日泊は愚か、其の藝者をも家へ連れて來る事さへある。愛する良人でないから嫉妬といふは毫もないが、自分の存在を認めぬ樣な仕打が恨めしい。彼女が默つて居る傍で乳母はほろ／＼涙を零した。

「男いふものはな、皆な薄情でおまんね」と乳母は言つた。薄情な良人に捨てられて子を生されて行き處がなく此家の乳母となつた彼女は萬龜子の朝夕を見るにつけて世間の男を呪はずには居られなかつた。

「お辛いやろけれどもな、恁ういふ可愛い坊々がおますよつてな私より増におます、何も坊々のために辛抱しておくれやし」

萬龜子は默つて赤兒を抱き上げた。生れてから最早や一ヶ年の誕生が過ぎた。垂頰の柔かな色、餘念のない眉と眼の間、微かに笑を含むかの樣に顏を天井に向けて眠つて居る。其の眠の中には何とを言へぬ安心の色が潛んで居る。

丁度僕にはお母さんが添いてる乳母が添いてるから僕は眠つて居ても平氣だ。風が吹けば窓を閉めてくれるし寒い時には着せてくれるし尿を垂れゝば襁褓を取替へてくれるし、僕は默としてても萬事二人で都合よくしてくれるんだ」と思つてるかの如く見える。

「乳母、洗濯ものを疊む間私が抱いてるから彼方へ行つても可いわ」と萬龜子は言つた。

「おほきに」と乳母は目禮して「ほんまに憎らしい旦那はんや、ほんまに」と言ひながら室を出た。

後で萬龜子は只獨り赤兒の頰に我頰を當てて涙を流した。

「坊や、坊や、太郎や、眼をおさまし、お母さんは淋しいからさ、坊や」

眠れば可いと思ふ時には泣き出し、起きてくれといふ時には眠る太郎は、母の頰に推されて小さな口をむく〳〵動かしたが又横を向いて眠つた。

「お眠かえ、眼を開かないかえ、ねえ坊や、早く大きくおなり、お母さんと一緒に何處かへ行つてしまひませうね、お父さんに似るんぢやないよ、お母さんにお似よ、お祖母さんにお似よ、其れからね……」

恁う言つて彼女はさつと顏を赧らめ四邊を見廻し極めて低い聲で何事か囁いた。

抑も萬龜子が姙娠を知つてから此の子が生れるまで什麽に苦悶したらう。「死んでくれゝば可い、流産になつてくれゝば可い」と彼女は毎日我が腹に向つて言つた。

「あんなお父樣を持つとお前は一生不幸福だよ、お母さんも一生泣いて暮らさなきやならない、若し什麽しても生れるならお父さんに似ずに克巳さんに似ておくれ」

それが人並の良人であり、互に愛する仲であつたら二人の間の子を生む事が什麽に樂みであらう、我が子に向つて父に似なと言はねばならぬとは何といふ情ない事だらうと萬龜子は泣き暮らした。

自然は人間に藥を與ふると共に毒も與へる、呪ひに呪うた我が子は極めて健やかに生れた。

「もうお終ひだ」と萬龜子は思つた。彼女は生れた我が子の顏を見るのが恐ろしかつたのである。

彼の命名日の時爲三は彼女に訊ねた。

「何といふ名を付けよう」

何でも可いと彼女は思つた。

「男だから太郎で可いでせう」

冷やかな萬龜子の返事がその儘に我が子の名となつた。母の冷淡に拘らず太郎はずん〳〵育つた。萬龜子は初めほんの母たる義務として乳をやつた。小さな口を當てて快げに飲む、飲んで眠る、覺めて又飲む、太郎の口と萬龜子の肌とは段々に親しくなる、時として母と子は凝と互に眼を見合す、肌と肌、眼と眼との間に萬龜子は慄へるほどの喜悦を感じた。今まで良人に對する反感から呪ひに呪つた感情は淨められて大自然の靈が眼を覺ました。

「この子だけは私のものだ」

彼女の潛みに潛んだ愛情は堰き止められた河が一度に流された樣に非常な力を以て太郎の上に注がれた。彼女の乳量が少いので乳母を傭はなければならなくなつた時、彼女は一日いつぱい此の世の別れの如く泣いた。

八

　良人の留守に孤閨の枕紙を濡らす涙の妻の心は知らず、萬龜子は良人の留守を喜んだ。太郎があればこそ生き甲斐もある。縱令十年二十年空閨を守るとも其の方が却つて好む處であつた。

　翌日爲三はにこ〳〵して歸つて來た。

「坊々は什麼や、機嫌が可えか」

　彼は妻の機嫌を取る時には先づ第一に太郎を利用するのが手段であつた。太郎を可愛がれば萬龜子が一番喜ぶと彼は知つて居る。

「えゝ、元氣ですわ」

「左樣か」と爲三はもぢ〳〵して手に提げて來た大きなボール函を出し「これは何だか當てて見」

「解りませんわ、何でせうか」

「お前にやろ思つて竊り誂へて置いたんや」

「まあ何でせうね」

「御禮を言ひや、お前の喜ぶもんや」

「有難うございます」と萬龜子は仕方なしに言つた。

「さあ浦島太郎の玉手箱」と爲三は頗る機嫌の體で、箱の蓋を開いた。紙に包んだ平つたいもの！　其れは西陣織の帶であつた。

「まあ帶」と乳母は仰山さうに言つた。

「展げて見い」

　帶は精巧な西陣織で、其れは薄紫や青黛や金茶の霞を地に織り、其れに眞黑な鴉を幾羽となく刺繍したものである。

「まあ鴉でおまんな」と乳母は恐る〳〵覗く。

「鴉や、眼玉を見い」

　いかにも無數の鴉の眼玉が星の如く輝いて居る。

「これは硝子でおまつか」と乳母は言つた。

「はゝゝ」と爲三は笑つて「金剛石や」

「皆な？」

「うむ、一イ二ウ三イ……七羽の烏で十四の眼玉が皆なダイヤや」

「まあ」

「どうや一萬八千圓の帶や、お萬龜、どうや」

　萬龜子は凝と考へて、

「有難うございますが私には勿體なうございます」と靜かに言つた。「この帶一筋だけの御金があつたら貧乏人が何れだけ助かる事でせう」

「お前厭か」と爲三は餘り喜ばぬ妻の顏を見て怒鳴る樣に言つた。

「えゝ、有難うございますけれども」

「厭なら可えわい」

　爲三は默つて席を立つた。店へ出ると丁稚や番頭が忙しさうに驅け廻つて居る。彼は一應帳場に坐つて帳簿に眼を通し其れから算盤をぱち〳〵彈いて扨て例の拇指を口に銜へ暫時凝として居た。

　大阪は商人の土地である、商人の目的は金にある。東京は名士の地である、名士の重しとするものは名にある。東京に虚名が盛んである如く大阪に黄金宗が盛んである。金！　金！　金と色！　これが大阪の空氣である。凡ての男は只金と色のために狂奔する。金儲けをする機械は色といふ油のために動く。縱令如何なる放蕩をしても酒池肉林に遊んでも金を儲けさへすれば何人も咎めるものがない。

　男は其れである、哀れなるは是等の男の妻である、良人の放蕩に對しては一言も挾む事を許されない。其れを言ふと只「嫉妬」といふ名の下に嘲笑される。そこで彼女等は暴君の下の百姓の如く凡てが泣寢入りにならざるを得ない。此の泣寢入りは僅かに着道樂と芝居道樂に依つて慰められて居る。亭主が浮氣をすれば其の埋合せに細君が着物を買つて貰ふ。其の着物を見せびらかす爲に芝居へ行く必要が生じて來

る。着物と芝居！ 其れを當てがへば、亭主の浮氣が帳消にされる。

實際衣服に對する慾望が大阪の婦人ほど強いものは、世界各國を通じてあるまい、未婚の處女、而も相當の家庭の娘が着物を作るがために藝者となり、人目を忍んで恥かしい商賣をするものすらある。男は女道樂を唯一の樂みとなし女は衣服道樂を唯一の樂みとなす、是れが大阪の半面である。

一萬八千圓の帶は如何に萬龜子を驚歎せしめるであらうと思ひの他、萬龜子は毫も喜ばなかつた。

「彼奴は森川いふ奴に惚れてるよつて私が何をしてやつても喜びやせんのか、但しは私が餘り發展するよつて悋氣してんのか」と爲三は首を傾げた。

と店先にふいと現はれた女がある。

九

女は菊江であつた。

「あら、大分御忙しさうね」と菊江は洋傘を措いて怔れ〳〵しく帳場格子の側へ蹲み「彼行らない事？」

「何處へ」と爲三は少しく煙に卷かれて菊江の身裝に氣を留めた。

「賣市へ」

「バザーて何だんねん」

「あら、恩間袋の義捐に種々な品物を賣るのよ、音樂もあるのよ、伊太利のクラ、夫人の獨唱もあるのよ」

「何處にだんね」

「ホテルよ」

「あゝ〳〵左樣か」

言はれて見ると頃日の新聞、聯合軍慰問のために紳士婦人等の主唱で音樂會兼賣市を開くといふ事が載て居る。

「彼行らない？」

「はあん」と爲三は氣の無い返事をして「詰らんがな」

「慈善のためだわ」

「はあん」と爲三は再び言つた。慈善か何かは知らねど、譯の解らぬ音樂を聞いたり、高價いものを無理に買はされるよりか、今夜は御茶屋の義理や藝者の約束で蘆邊跡に行かなきやならない事になつて居る。「賣市と溫習會と何方が面白うおま？」

「まあ」と菊江は呆れた樣な顏をして「面白いの面白くないのつて問題ぢやないわ」

「だお[illegible]、[illegible]は音樂だつせ」

「でもねえ」と菊枝は[illegible]に[illegible]て小聲になり「今日は貴方に見せたいものがあるのよ、叔父さんも後刻彼處へ來る[illegible]」

「見せたいものつて何や」

「森川さんが來るのよ」

「森川？」

「えい、だから私、是非に報告に來たのよ」

「森川て何だんね」

「あら、知つてる癖に、貴方の奥さんの戀人よ」

「阿呆言ひなはんな」

「あら、恐がつてるの？ まあ男の癖に森川さんが恐いの！…」

「何を言うてんね」と爲三は平氣に言つたが、又「ふうむ、彼奴が」と獨り呟く。

「私ならね、奥さんと森川さんを突き合はして見るわ、爾したら二人が什麼な關係があるか大抵見當が付くでせう、而して若し少しでも怪しいと思つたら處分をしておしまひなさいよ」

「處分てどうするのや」

「處分は處分ぢやないの？」

「私は養子の身ぢやさかいにな、おう恐や、ぶる〳〵」と爲三は不安を紛らすために故意と滑稽けて言つた。

「養子だつて姦通をしたら處分が出來るわ」

「そりや爾や」

「財産だつて貴方のものでせう」

「そりや爾や」

私だつて今まで言はなかつたけれども隨分酷い事があるわ、森川さんの妹さんから種々聞いて知つてるのよ」

「何を」

「何でも可い事よ、まあ行つて御覽なさい、今夜の模樣で解るわ」

「行きませう」と爲三は立上つた。「貴方からも勸めて下はれ」

二人は庭へ入つた。

萬龜子は今風呂から上つた許りでめりんすの小蒲團の上に素裸の太郎を轉がし着物を着せかへて居たが、二人の勸めを聞いて霎時考へながら、「えい、お伴をしませう」と答へた。

二人は互に眼を見合して微笑した。

一〇

大阪ホテルの大食堂で樂隊が鳴り響いて居る。今日の義捐賣市は重に在大阪の外人の發起とて凡ての設備は極めて華やかに都合能く運ばれた。廊下といふ廊下に支那や伊太利や日本風の提灯も吊つて其れに造花の紅の雲が夕日に溶ける霞の樣に棚引いて居た。歩くと音もせぬ絨氈の上を衣擦の音さや〳〵と踵が花苔を踏む樣に柔かに撫でて行く。階段の下の方にも上の方にも亦中程にも、種々な人が影繪の如く出たり入つたりする。外國人は何れも嫣然やかで溢るる許りの愛嬌の露を互に笑み交して居る。

萬龜子と菊江と爲三の入つたのは午後の二時頃で秋の日が充滿に窓々に輝いて居た、而して其の光が室々の扉まで屆いて又廻廊をも明るくした。大廣間の天井には色紙で造つた果物の樣なものや、鶴の翼を擴げた樣なものや、家鴨が逆まに水を噴いてるものや、花束を聯ねた扇形の枠の樣なものや、栗鼠と葡萄を透し彫にした欄間の樣なものもあつた。其等の裝飾を夕日は明るくしたり暗くしたりした。兩側と中程に徑があつて、其處は臺を並べた賣市の店であつた。店々には愛嬌の可い西班牙風に裝うた娘もあつた、海軍服を着て帽子を阿彌陀に被つて頻りに客に押賣する令孃もあつた。毛絲編物店の前に八十許りの老婦人が眼が覺める樣な赤い服を着て若い賣子達に負けぬ樣に御世辭を言つて居る。凡ての賣子は元より貴婦人令孃ばかりなので客の方でも買ひたくないものまで買はされてわい〳〵笑つて過ぎる。

「外國へ行つた樣だんな」と爲三は肝を潰して言つた。「ハイカラな事は俺にや解らんわ」

「何か買ひませうね」と萬龜子は言つた。

「買ふのも可えが餘り高過ぎるがな」と爲三が云ふ。

「高價いのは覺悟の上でなければ不可せんわ、義捐賣市ですもの」

「義捐なら新聞社に頼む方が廣告になるがな」

萬龜子はひや〳〵して情なささうに良人に目配したが爲三は其れに氣が付かなかつた。彼は隣から隣へと店々を素見した。

「これは何ぼや」と文房具屋へ顏を出すかと思ふと値段を聞いて吃驚しては隣の石膏細工店へ顏を出す。

「錢が無いよつて負けとくなはれ」

「其那事いふもんぢやないわよ」と菊江も見兼ねて言つた。

萬龜子は顏を眞紅にして途方に暮れた。

段々人の出が繁くなつた。知事も見えた、夫人も見えた。其の左右には高等官らしい紳士や其の夫人らしい人々が從つて居た。實業家らしい人や富家らしい人達も通つた。一人の老人は

嫁らしい女を伴れて來た。彼は何を見ても結構だ結構だと賞めて居た、而して餘程多くの買物をして喜んで居た。
「御國のためだからな、どれも〳〵可い記念品ぢや」
「全く可い御買物でございましたね」と嫁も謙遜らしい態度で言つた。
萬龜子は凝と其の人達を見戍つて何とも言へぬ崇高な感に打たれた。
「世の中にはあんなに奥床しい方もある」
恁う思つてる矢先に爲三は向うの店で「高價うおまんな、負けとくなはれ」と言ふ聲が聞えたので思はず身慄した。
「私ほど厭な良人を有つた女は世間にあるまい」
丁度此時外國人の一團が來た。彼等は一齊に喝采した。男は前へ廻つて萬龜子の顏を眺め婦人は遠くから其の華やかな贅澤を極めた帶を眺めて居た。ビューチフル〳〵の聲が處々に起つた。萬龜子は益穴へでも入りたい氣になつた。良人の勸めに拒みかねて此那帶を着て來たものの身裝が目立つだけに人の視線の的となる、帶の目立つのは忍ぶ事も出來るが良人の卑しい態度の目立つのは什麼しても辛抱が出來ない。
「彼方へ參りませう」と彼女は良人を促して賣市を出た。

二

階段を降りかけると又もや一群の紳士や婦人達に逢つた。
「まあ立派な帶だこと」
「ダイヤ〳〵〳〵」
人々の囁きが洩れて聞ゆる。
「皆なお前の帶に吃驚してるのや」と爲三は得意さうに言つた。
萬龜子はもう恥かしさが充滿になつた。自分の帶と身體とは別々なものの樣に思はれた。自分の矜持とするものは人格でもなく信念でもなく家庭でもなく良人でもなく、只寶玉を鏤めた一筋の帶のみであるとすれば餘りに情ない。
恁う思つて彼女は小さくなつて良人の蔭に添うて歩いた。其の謙遜な淑やかな態度は更に彼女の美しさを増した。私の帶を見てくれと言はぬ許りに傲然と振舞つたならば人々は一種の反感を起したに違ひない、併し萬龜子の物恥かしさうな樣子は帶の光を彼女の人格に包んでしまつた、而して却つて一種の氣高さを示した。
「中々素晴らしい美人だね」と銀行員らしい若い男が伴侶の男に言つた。
「うむ、一緒に歩いてる女も中々話せるよ」
「どうして〳〵君、あの洒々した顏を見給へ、大阪の新らしい女は私でございと言つた態度ぢやないか、あれは女優にでもなるが可い」
「爾いへば爾だが、併し若い方は人の細君らしいよ」
「細君だつて美人は美人だよ」
「だがあの男は一人で二人の美人を伴れて歩くなんて失敬だね」
聞えよがしに言つて居る聲を聞いて、爲三は益得意になつた。
「お前等と一緒に歩くと嫉まれて敵はん、なあ菊江はん」
「私知らないわ」と菊江はぷり〳〵して言つた。彼女は人々の視線が悉く萬龜子に注がれるのを不快に思つて居たのであつた。
「私の存在を認めないのかしら」
恁う思ふと涙ぐまれる程腹立たしくなつて來る。彼女は一人足を急がして音樂室の方へ離れた。
萬龜子と爲三は休憩室に入つた。其處には爲三の知合の人が澤山に居た。一隅には若い商

人や銀行家や會社員らしい人々が其頃に八釜しい取引所問題に就て頻りに議論を闘はして居た。中央には老人連が陣取つて居た、其の他の卓子には外人もあれば又素人らしい風をさして藝者を作れて來た紳士もあつた。煙草の煙と人の談話と何となき雜閙のざわめきは室に漲つて卓子の上の大花瓶の菊の花が人々がどよめく度に靜かに動いて居た。

「どうです、儲りまつか」と爲三はにこ〳〵して椅子に腰を掛けた。

「あきまへん」と一人の老紳士が買物の包を片寄せて「貴方も何か買ひなはつたか」

「未だ買ひまへん」と爲三は詰らなささうに「けつたいなものが流行まんねやな、賣市いふのは何だんね」

恁う言つた時若手連の席から激昂した樣な聲が聞える。

「詰り、何にしても森川は豪いよ」

「櫻井も豪いさ」

「うん、此の二人は實業界改革の先驅者だ」

「だが議論の餘地は未だ〳〵あるよ」

「議論の時代ぢやないよ、實行の時代だ、凡てが森川式にやるんだ」

森川〳〵の聲が頻りに聞える。萬龜子は耳を傾けて其の方に氣を入れた。斯くまで問題の的となり世間の賞賛を博した人は曾て共に百年を心に誓つたあの人だと思へば、其の成功が嬉しいにつけ又今の身の悲しさがぞく〳〵と迫つて來る。

音樂室から樂隊の和かな諧音が流れて來た。淸く澄んだ笛の音と穩やかい圓みを帶びた太鼓と咬る樣に顫へる洋絃の音と其他の凡ての音が、遠ければ遠い程調和をなして夢の如く擴がる、其の中に喇ぶ樣に又青天を眞直に昇る雲雀の歌の樣に春の草の根を囁いて過ぎる小流れの樣な肉聲が沈みつ浮きつ聞ゆる。

「トラビアタだ」と萬龜子は思つた。戀人に別れて病める身を薄暗い窓の下に横たへた薔薇の淚を語る此の音樂は次第々々に此の室內をも此のホテルをも此の群集をも凡てのものを偉大な和かな諧律の中に溶いて行く樣な氣がした。萬龜子は恍惚と其れに聞き入つた。彼女には自分もなく人もなく世界もなく只微かに胸を打つ心臓の響があるのみであつた。

と突然室內がざわついた。

「來た〳〵」

「おう森川、森川、森川」

椅子に掛けて居た青年等は一齊に起つた。其の眼は熱火を帶びて居る。と見ると扉の前に五六の人が集つて今入つて來る人を迎へて居る。

「やあ、失敬々々」と其の人は言つた。

萬龜子ははつと吾に復つた。人々に圍まれて靜かに入つて來たのは克巳であつた。

一二

萬龜子は吃驚して立上つた。同時に克巳の眼は萬龜子の視線とひたと合つた。克巳は立停まつた。次で入來つた櫻井も立停まつた。同時に爲三は敏捷く萬龜子の方を見やり又克巳の顏を見やつた。此の一刹那の動作は確かに人々に奇異の感を起させたに違ひないが、其れは櫻井の氣轉で都合好く行つた。

「久濶でしたね」と章は萬龜子に如才なく言つた。

「えい、久濶」と萬龜子は消え入る樣な聲で言つた。其の顏は火の樣に熱した。

「油谷さん、これは森川君です、此方は油谷さんで」と章は紹介した。

「はあん」と爲三は起上つてむか〳〵昂り上る胸の動悸を漸と抑へ「其れは可えお方に御目に掛りましたんやな」といふ聲は太くなつたり細くなつたりして、終りに咳が喉に塞つたので咳

拂をした。

「奥様とは東京で大變懇意にして戴きましたよ」と克巳は磊落に言つてにこやかに萬龜子を顧み「御達者ですか」と言葉短に言つた。

「えい」と萬龜子は微かに答へてちらと克巳を見上げた。克巳は平然として微笑して居る。いつか自動車の上から見た時には、其の憤怒の眼光に打たれたが、今日は什麼して恁う平氣なんだらうと思つた。

勝手かも知らんが萬龜子は克巳に怒つて貰ひたかつたのだ。克巳が怒つてる間は自分か忘れられないのだ。恁ういふ萬龜子の心は今俄かに失望した。怒らなくなる程私に冷淡になつたのかと思ふと情なくなつて來る。霎時の間彼女は前後が解らなくなつた。極めて混亂した渦卷が彼女の頭を朦朧とした。其の間はほんの二三分間であつたが彼女には三十分以上にも思はれた。不圖氣が付くと良人の聲が聞える。

「儲かりまつしやろ、達磨印は評判が可うおますよつて」

萬龜子はふいと逃げる様に席を起つた、而して扉口の外に立つた。此儘家へ歸らうか、いや其れは却つて穩やかでない、左りとて我が戀人と良人と同席して居るのを默つて見て居る事は出來ない、兎つ角つ思案しながら彼女は廊下を往つ戻りつした。と何時の間にか室内は鼎の湧くが如く種々な聲が沸騰した、何れも〳〵昂奮の狀態で恰ら蜂の巣を毀した如く亂れ立つて居た。一隅の若い紳士達と中央の老紳士達との議論が始まつたのである。

「靜かにして下さい」と櫻井は四邊を制した。

「僕の言ふ處を聞いた上にして下さい」

「聞かんでも解つてるがな、貴方の議論は社會主義や、全然無茶や、阿呆らしい、誰が其那事を聞きまつかいな」と爲三は四角な顏に充滿の筋を張つて力んで居る。

「僕等は若い者です、青年です、油谷さん、君も青年だ、だが僕等は青年として青年らしい生活をしたいのです、金を儲ける許りが人間の目的ではありません」と章は例の透き徹る様な聲で流暢に云つた。

「あゝあの聲だ」と萬龜子は思つた。「三年前には朝夕にあの聲を聞いて居た。あの美しい聲と克巳さんのベースと橋本さんの胴間聲で牛乳ホールの店が毎日賑やかであつた」彼女は凝と章の聲に聞き惚れた。

「阿呆らしい、錢が無うて飯が食へまつかいな、貴君の議論は親の脛を齧つてぶら〳〵遊んでるいゝぼんちの夢や」と爲三は再び言つた。

萬龜子は獨りさつと顏を染めた。

「爾や〳〵」と老人達は爲三に賛成した。「危險思想や、不良少年や」

次にどつと笑聲が起つた。

「老朽者には解るまい」と一人の青年が叫んだ。

「何を阿呆んだらめが」

「何を馬鹿野郎」

叱聲罵聲が一度に起つた。人々は椅子を離れて總立ちになつた。此の混亂した渦卷の中に、章は兩手を擴げて叫んだ。

「僕にも言はして下さい」

彼は手を擴げたまゝ左右を抑へる樣に振り返つた。一座は靜まつた、而して章の顏を見戍つた。章は霎時人々の靜まるを待つて衣匣から一枚の紙を出した。紙には鉛筆で畫が描いてあつた。其れは五つの姿であつた。僧侶と軍人と醫者と商人と乞食!

三

「僕は頃日或る本を讀みました。それに恁ういふ畫がありました。そこで僕は其れを寫して持つて居ます、諸君、これは何の畫ですか」

恁う言つた章は人々に書を示し「僧侶と醫者と軍人が一段高い處に立つて居ます、下の段は乞食が居ります、而して上段と下段との間に商人が居ります、僕は商人ですから初め此の畫を見た時に非常に商人を侮辱したものだと思つて腹が立ちました、が此の著者の説を讀んで非常に喜悦を感じました、其れを僕は諸君に御話しませう、世間では僧侶を尊敬します、醫者も軍人も尊敬します、然るに商人をば尊敬しません、乞食に至ると世間は侮蔑します、何故僧侶や軍人を尊敬するかと言ふに、是等の人に犧牲があるからです、僧侶は粗衣粗食に甘んじて人のために宗教の慰安を與へようと努力する、軍人は一旦の場合に生命を捨てて國を護る、醫者は患者のために智力と勞力を惜まない、即ち此の人々は自分のためでなく人のため國家のために働くから人民と國家が其れを尊敬するのです、然るに商人は自分の財を殖やすのが目的で、子孫に財産を遺すのが目的で、別莊や骨董を買つて自分を喜ばすのが目的であるから、人類と國家は少しも尊敬しないのです、そこで若し商人が自己を忘れて社會のために商ひをするといふ事になると社會は必ず尊敬する様になります、其れが本當の商人です、元來商人が金を儲けるといふのは間違つた考です、商人は物品の需用と供給を圓滑ならしめるために働くもので、即ち金の運轉手で自分の懐に入れべきものではありません、其れに依つて得る利益は國家の利益とならねばならぬのです、即ち軍人や僧侶や醫者が國家や人類のために働くのと同じくあるべき筈です。此の書は人の價値は犧牲の有無に依つて定まるべきものとして書いた書で、商人には犧牲がないから中段に引下げ、更に働きもせず犧牲もなく人の力に頼り縋る乞食を最下等としてあります、若し商人に犧牲があれば第一位の僧侶や軍人の同格になるのです、そこで僕は此の著者の言ふ處即ち商人は金を儲けべきものでないといふ事を眞理だと思ひます、僕の説ではありません、學者の説を御話するだけです」

恁う言ひ終つて章は椅子に腰を下した。

「豪い御説教や」と老紳士の一人は笑つた。「商人が金を儲けてはならんいふなら誰も商人になるものがありやせんがな」

「僧侶でも醫者でも軍人でも皆な金儲けのために働くのや」と今一人が言ふ。

「森川さんの御意見を聞かして下さい」と一人の青年が言つた。一同の視線は克巳の方に注がれた。

克巳は章の如く輕快でなかつた。彼は勞働服と他所行と兼帶と言つた様な粗末な厚ぼつたい狐色の背廣を着て、日に焼けた黑い顔をぬつと露した、而して口をもぐ／＼させ、頭を掻き如何にも迷惑さうな顔をして立上つた。

「僕は、僕は」と一二度吃つて「僕は金は貴いものだと思ひます、商人は僧侶や軍人や醫者よりも貴くなれるものと思ひます

恁う言つて又口をもぐ／＼させたが軈て再び頭を掻き「櫻井君は雄辯ですから櫻井君に質問して下さい」と椅子に腰を下した。

其の無器用で訥辯で子供らしい態度に老紳士連は「わつ」と笑ひ出した。

萬龜子は染々と恁う感じた。

「何といふ男らしいんだらう、櫻井さんの雄辯よりも克巳さんの訥辯の方が遙かに力がある、恥かしがりで無邪氣で眞面目な處は昔と少しも異はない」

老紳士連はぼつ／＼去つた。篤三も軈て席を起つた、而して眼で萬龜子を探して居るらしく見えたが直ぐ廊下へ出た。

「お前此處に立つて居たんか、なんで彼處に居ないのや、遠慮する事いらんやないか

「別に遠慮はして居ません」と萬龜子は答へた。「爾か、緩くり話しなはれ、私一足先に歸るさかいにな」
「御一緒に參りませう」
「いや、私は伴れがあるんや、菊江さんと一緒に歸りなはれ」
恁う言つて爲三はずん〳〵去つた。

一四

萬龜子は菊江と一緒に歸る積りで廊下を出て再び賣市へ行き一巡したが菊江の姿が見えない、若しや出口の方でなからうかと其の方へ行つたが其處にも居なかつた。彼女は直ぐ足を返して又元の廊下へ戻つた。室の中は閴として人の氣勢もない。
「皆樣が御歸りになつたのかしらん」
恁う思つて中を覗いて見ると窓に向いた壁の下、寢椅子に凭れて克巳が只た一人腕を組んで居た。萬龜子ははつと思つて顏を引いた。と同時に克巳の眼がひたりと合つた。萬龜子は立竦んだ。克巳は何か言ひたげに椅子を離れようとしたが、直ぐに思ひ返した樣に又元の沈默に歸つた。
此儘逃ければ逃げられ得るのであるが、此時の萬龜子は殆ど何ものかに壓へ付けられた樣に身動きも出來なかつた。而して克巳の方から何か言葉が出るだらうと豫期したが、克巳は默つて居る。克巳が默つてるだけ萬龜子は益〻默つた。室の內と外、そこに二人は無量の心を抱いて沈默して居る。
彼方の室で音樂者が入れ替るらしい、霎時群集のざわめきが聞えたかと思ふと拍手の音と共に又ピアノの音が聞えた。
「お入りなさい」と克巳は思ひきつて言つた。
萬龜子は殆ど何の造作もなく室に入つた。其れは自分にも不思議な位に輕い心持であつた。
「久濶でしたね」と克巳は言つた。
「お變りも御座いませんで」と萬龜子は言つた。
「いつか御怪我をなすつたさうですが些とも存じませんで」
「いや、何でもないです」と克巳は急に元氣が好くなつて「それよりも御母さんが亡くなつて飛んだ事でしたな、僕なぞは自分の母の樣に思つて居たんだが、恩返しもせん中に死なれてしまつて實に殘念です」
恁う言つた克巳の眼は濕れかけて居た、而して彼は脣を嚙んだ。
「止むを得ない事ですわ」と萬龜子は初めてしみじみと克巳の顏を見詰めて言つた。色黑く鼻高く眼が大きく何處かに小兒じみた點のあるのも昔の儘で少しも變らない。
「睦子さんの行方が解りませんか」
「えゝ」
「淋しいでせうな」
「えゝ」と萬龜子は何となく催して來る涙を怺へて「蝶子さんは？」
「櫻井伯と許婚が出來ましたんで此地へ來て居ます」
「其れは結構ですわ」
「皆ないろ〳〵に變つて行きますな」
「本當に爾ですわ」
恁う言つた時萬龜子は思はず涙がほと〳〵と垂れた。何のために恁う涙が出るのだらうと彼女は自ら不思議に思つた。二人は默つた。と又克巳が言ひ出す。
「貴方は今幸福ですか」
「えゝ」と萬龜子は耳根を染めて「いゝえ」
「お子さんが出來たさうですね」
「克巳さん」と萬龜子は遮る樣に言つた。「其那事は仰有らずに頂戴ね」
「何故ですか」
「私は自分の境遇を御話する事が出來ない身

體ですもの」

恁う言つて萬龜子は霎時考へ込んだが急に浮々した調子で「貴方は私の事を怒つて被居らない？」

「いや毫も」と克巳は答へた。

「何？」と萬龜子は嫣然して「貴方は何故姉さんと結婚して下さらないの？」

「僕に其れを説明してくれと言ふんですか」と克巳はぎよつとした眼付で言つた。

「濟みません」と萬龜子はさつと顔を染めた。

一五

胸に餘る恨みもあり憤りもあり又悲しみもあり、腹立たしい中に早く和ぎたいといふ氣もあり、會へば話したい事が山々ありながら扨て額を突き合せると、言ふべき言葉は泡雪の如く散つて跡なく、昔の萬龜子であり昔の克巳その儘ながら而も什麼する事も出來ない、互の胸の秘密は遂に口には出なかつた。

「もつと言ひたい事がある」と萬龜子は思ふ。

「俺は一番大切な話をして居らんのだ」と克巳は思ふ。

兩人とも心の中では眞實を語りたい又眞實を聞きたいと思ひつゝも、話は全然心と異つた樣に平凡な表面だけを滑つて走る。で、兩人は恁ういふ無駄な話は不用な事だと氣が付いたものの吾から進んで言ひ憎い話の火蓋を切る勇氣もなかつた。二人は默つた。默つてる中に互の眼と眼が見交される、呼吸と呼吸が聞き取れる、恐らくは心臟の響までが互に響き合つたであらう。此處に居るのは克巳さんだと萬龜子は思ふ、これが萬龜さんだと克巳は思ふ、其れは今日の二人でなくて昔時の二人である、冥想が深く深く沈みゆくと共に二人は互に三年前の二人となり四年前の二人となる。

日は充滿に窓に漲つて秋の蠅が二つ三つ硝子を歩いて居る、其れが窓枠の縁に衝突かると、ぶうんと微かな音を立てて硝子を離れ、而して二人の頭の上や耳の邊を飛廻つて又元の硝子に歸る。室は靜かであつた。

入口の向うの階段へ續く廊下に赤い服を着た風笛手や洋絃を抱へた老音樂師などが口數もきかずに靜かに通る、綠色の帽子を横に被つた若い鼓手は「別るゝ夜半の雨聞けば」と小聲に唄つて行く。

萬龜子は恍惚と夢心地に身を任した、何といふ事なしに此の一刻こそは羅の裳に身を包まれてふはり〳〵と暖かい雲の羽毛蒲團に埋もつて行く樣な氣がする。彼女の眼には涙が充滿に湛まつた。窓の蠅が再び硝子を離れて萬龜子の頭の上を飛廻つた。初めは頭に留まり次には袖に留まり其の次に額に留まり而して羽音を立てて額の周圍を唄ひ廻つた。萬龜子は手を擧げて蠅を拂つた、途端に彼女は冥想から覺めた。

「おう私はまあ什麼したといふんでせう」と彼女は慌てて立上つた。

「御歸りですか」と克巳は言つた。

「えい、私は〳〵」と彼女は恐ろしい夢から覺めた人の樣に呼吸を彈ませて「私は貴方に御目に掛る筈ではなかつたのでした、もう〳〵二度と……」

彼女は恁う言つて兩手で顔を掩うた。彼女の手から手巾が滑つて床の上に落ちた。

「これを御持ちなさい」と克巳は手巾を拾つて渡しながら「どうか幸福に御暮らしなさい、僕は幸福ですから」

「では左樣なら」と萬龜子は羞かんで會釋した。途端に彼女の前に立塞がつた男がある。

「何さらしてんねん」

歸つたと思つた良人の篤三が聲を顫はして怒鳴つた。

「只今歸ります處です」と萬龜子は言つた。

「歸らんでも可いがな、はあん、二人で濱寺か[illegible]屋へでも行つたら什麼や、はあん」
「菊江さんを待つて居たもんですから」
「何が菊江さんやね、はあん、男の菊江さんか、昔馴染の菊江さんやろ、可え度胸やな、はあん、おもろい話や、ほんまにおもろい話や、はあん」
「何を仰有るの？」と萬龜子は屹と言つた。
「間男やが、間男やが、爾や、間男の姦通やがな、相手は此の男や」
「君は什麼かして居ますね」と克巳は靜かに言つた。

一六

「何言うてやがんね」と爲三は自分の帽子を兩手でめちや／＼に揉みながら「此處に居るのは俺の女房や、人の女房とな、とつつきはつつき可笑しな眞似をするのは間男ぢやないか、汝は何ぢや、書生の尻から卵子殼が脱れた許りの青二才ぢやないか、俺はな、俺はこれでも紳士や、大阪での紳士や、汝のよな阿呆んだらに眼玉を拔かれてる俺ぢやないぞ」
　克巳は呆れて爲三の顏を見た。其の圓々とした卑しげな顏、扁平たい鼻、開いた許りで深みのない眼の光、而して如何にも自分が豪いものだといふ高慢さうな口元を見て彼は何とも言へぬ憐愍の情が起つた。
「靜かになさい」と彼は宥める樣に言つた。「僕が君の細君と話をして居たのが惡いといふなら僕が謝罪らうぢやないか、白晝公開の室で話をしたばかりで姦通の何のと騷ぐのは君の名譽のためにも能くない事で又僕も非常に迷惑だ」
「何が名譽や、汝のよな獸に名譽があると思うてやがんのかえ」
「貴方、其れは誤解して居ます」と萬龜子は蒼白になつて良人の傍に寄つた。「克巳さんと私とは昔から知つてる間柄ぢやありませんか、此那處で話をした處で其れが何でせう、場所柄も御考へなく餘りですわ」
「只の話とは違ひますわ」と菊江が突然扉の蔭から現はれた。
「爾や／＼、只の話やない、證人がある」と爲三は怒鳴つた。
「菊江さんは僕等の話を聞いて居たんですか、其れなら僕等の證人になつて下さい」と克巳は言つた。
「御生憎ですけれどもね、私譃を吐く事は嫌ひですから」と菊江は卓子の上に洋傘を載せて「萬龜子さん、白狀をなすつたら什麼？」
「何がですか」と萬龜子は漸と顏を向けた。
「何がぢやないぢやないの？　私先刻から聞いて居たんですもの、昔の戀物語ね、それから良人の惡口ね、其れから將來の理想や何かね、二人で泣いたでせう、それ、其の手巾で涙を拭いたり拭かれたりしたでせう」
「何を／＼」と克巳は吃驚してつく／＼と菊江の顏を睇め「貴方は僕の眼を見詰める事が出來ますか、萬龜子さんの眼を見詰める事が出來ますか、什麼です、若し貴方の心に僞がなくば顏を眞直に上げて僕を見て御覽なさい」
「えい、見ますとも、貴方方の樣に後暗い事がないんだから」と菊江はふいと顏を上げたが耳元まで眞紅になつて居た。
「實に大膽な女だ」と克巳は叫んだ、而してつかつかと菊江の傍に進み其の胸元をぐいつと攫んだが軈て力なく手を低れて默つてしまつた。理非を糺し虛僞を訐き、聽かなければ鐵拳の制裁を施す事は容易な事ではあるが、考へて見れば親友の姉である、妹の小姑である。むざ／＼恥を與へるには忍びない。
　克巳の默つてるのを見て爲三は益猛り出した。
「それ見い、文句がないやろ、どや、大きな面

してゝもた悪い事をすれば心が咎めるさかいにな」

恁う言つて萬龜子に向ひ「どうや、一言もありやせんやろ、汝つよなものは今日から人間やと思はんさかいに、爾思つて居や」

「油谷さん」と克巳は懼み來る胸を制へて言つた。「君は間違つて居る、氣を靜めて考へて見てくれたまへ」

「考へる事がありやせんわ」と爲三は烈しく怒鳴つた。

「其れでは君は什麼して僕等を不義者と見做すんだね」

「[illegible]さ/\/\」と爲三は眼を突出して言つた、途端に爲三の身體が壁に投げ飛ばされてどたりと倒んだ。

「馬鹿野郎！」

橋本の鬚だらけの顏が怒つて其處に現れた。

一七

「何を/\」と爲三は[illegible]をなおら漸と踏止まり、橋本の方へ向直つた、[illegible]から眼まで虎髯がむしやくしや生えた[illegible]爛々たる眼に何か[illegible]を帯びて居たので、爲三は振上げた拳骨を其のまゝに

「何を/\」と叉怒つた。

「失敬」と橋本は言つた。

「汝は何おや、汝は何おや、なんで俺をどやしたんや」と爲三は虚勢を張つた。

「撲つたのが惡いといふのなら僕は謝罪るよ」と橋本は落着いて「其の代りに君が僕の女人を姦夫呼ばはりした事に就て謝罪るか什麼か」

「姦通だんがな/\」と爲三は口を尖らして言つた。

「何が姦通だ」

「證人があるんだ」

「此の證人は當にならん」と橋本は菊江に向ひ「貴方は家へ御歸りなさい、弟の名を辱かしめるものは貴方ですよ」

「私は何をしました」と菊江は詰め寄つた。

「歸れッ」と橋本は大喝して「僕は弟に代つて櫻井家の名譽のために君に命令する」

「氣狂ひだわ」と菊江はくるりと踵を返して洋傘を取上げ其儘室を出た。

「一緒に歸りまつさ」と爲三は橋本と克巳を尻目にかけ「忘れん樣にして置きや」と遁ぐるが如く室を出た。

「お待ち下さい、私も」と萬龜子ははら/\して良人の後を追うた。

入口には自動車が待つて居た。爲三と菊江は早くも其れに乘つた。

「私も御一緒に」と萬龜子は扉を開けようとする手を菊江はぴしやりと拂つた。

「運轉手さん濱寺までよ」

「さうや/\」と爲三は言つた、而して萬龜子の方を向き「お前は誰かと一緒に行ね」

自動車は吼ゆる樣な音を立てゝ敷砂を滑らかに軋つて埃をぽつと立てるとホテルの道を東へ走り出した。萬龜子は茫然と後を見送つたが、其儘地上に坐りたいと思ふ程彼女は疲れて居た。ホテルの窓から外國人が覗いて居た。入口にボーイが二三人何事かを囁いて居る。萬龜子は悲しさと恥かしさが充滿になつた、而して歩くともなく歩き出した。

秋の日は暮れかけて、町は明るい灯が點いて居た。東の方には眞紅な月が今上つた處である。彼女は何處を歩いたか自分で解らなかつた。彼女は眼には河の流れを見、地上を見、耳には電車の音や人のどよめきを聞いた。併し自分が何處に居るのかは意識しなかつた。人の通らぬ處をと選んで歩いて居る中に彼女は歩く事が出來なくなつた。不圖見ると其處は公園の隅で圓頂の亭の樣なものがある、粗末な腰掛もある。彼女は直ぐそこに腰を下して首を傾れた。

「死んでしまはうか、いや／＼太郎が私を待つて居る—

種々な想ひに亂れて思ふ存分泣いて見たいと思つた。

「萬龜さん」と誰やら呼ぶ聲がした。はつと思つて顏を上げると橋本が背後に立つて居る。

「悲しいか、萬龜さん」と橋本は靜かに言つた。

「橋本さん」と萬龜子は涙を充滿に湛めて「私は什麼すれば可いんでせう」

「什麼つて何が—

「私生きて居れば可いんでせうか—

「なぜ其那事を言ふ」と橋本は言つた。

「死ぬ方が可いでせうか、良人と別れた方が可いでせうか、此儘辛い／＼月日を送らなければならないんでせうか」

「なぜ其那事を言ふ」と橋本は同じ調子で言つた。

「私は何故生れて來たんでせう、私はもう死んでしまひたいんです、死んで…死んで」

萬龜子は兩袖を顏に當てて泣いた。

「貴方は實に不都合な女だ」と橋本は大喝した。

一八

「私に何か惡い事でもあると仰有るんですか」

と萬龜子は顏を擧げた。

—ある、大いにある」と橋本は腰を下して洋杖を突き立て「今何と仰有つた、私は什麼すれば可いのですと言つたぢやありませんか、人の妻が、人の母が、今更私が什麼すれば可いかといふ疑問を起すべきものではありません、妻となる以上は既に覺悟があるべき筈だ、心が定まらんから迷ひを生ずる、迷ふ事は即ち不貞實だからだ—

「橋本さん」と萬龜子は蒼白めた顏を向けて「私を不貞實だと仰有るのですか、御覽の通りの男です、私はあれを心から愛する事が出來るとお思ひですか—

「いかにも貴方の良人は陋劣極まる人間です」と橋本は言葉を切つて「あの男を愛せよといふのは無理かも知らん、併しそれなら貴方は何故離縁をなさらんか、良人を愛する事も出來ず心の中で良人を輕蔑し良人を嫌ひ良人を呪ひながら而も妻として奧樣として御寮人さんとして甘んじて居るのは虛僞です」

—虛僞と仰有るんですか—

「爾だ、虛僞だ、心が既に良人に叛いて居るのに肉體と名義を良人に許すのは立派な虛僞だ、此の虛僞の心があればこそ死ぬの生きるのと迷うて居るのです、私は今虛僞と言つた、未だ云ひ樣が足らん、私は姦通と言ひたい、貴方は姦通をして居らるゝのだ—

—なぜです／＼、私は其那事は」と萬龜子は打消すやうに慌しく言つた。

—いや、姦通だ、貴方は良人以外の男に身體を許すことばかりが姦通だと思つて居る、以ての外の事だ。人格も信ぜず價値も認めず一片の愛情もない男と夫婦になつて居るのが即ち自らの靈魂を欺く姦通だ、世間には極めて多い、良人の惡口を言ひ廻り愚癡を言ひながら連れ添うて居る夫婦が、何萬何億人あるか知れない。僕をして言はしめば彼等は悉く姦淫者だ、夫婦といふものは身體と心と同一でなければならぬのだ。一つ／＼に切賣をするのは娼婦だ、醜業婦だ、貴方は其れだ—

「橋本さん／＼」と萬龜子は叫んだ。

激昂せる橋本は耳にも掛けずに續けた。

心に娼婦の思ひを懷いて『迷ふ』とは何事だ、取るべき道は只二つあるのみだ。一つは全然離縁して自由の身となり身體と心の切賣を廢業する事だ、今一つは苟くも一旦良人とした男を陋劣なればとて無智なればとて其れを捨つる事なく誠意を以て良人を感化し人間らしい人間に

仕立てあげる事だ、貴方に其の努力がない、良人を恐れ良人を呪へども良人を導からとはしない。其れが貴方の不純な點だ、私は貴方を不都合な女だといふのは其れだ」

「私は良人を教育する事は出來ません、あの人は私の言ふ事を聴く人ではありません、其れに私は何麼事があつてもあの人を愛する事は出來ません」

「それなら何故養子に迎へましたか」

「なぜつて？　橋本さん、何故つて」と萬龜子は塞つた。

「それだ、何故あの男を良人としましたか」

「……………」

「其れが根本だ、而して貴方は到底あの人を愛する事が出來ないと思ふなら何故潔く離縁しないのですか」

「……………」

「さあ此の二つを明白になさい、何故あの男と結婚したか」

「……………」

「なぜ離縁をしないか」

「……………」

「二つの間に迷うて猶罪の上に罪を作るつもりですか」

「私は姉さんがありますもの」と萬龜子は苦しげに言つてわつと泣伏した。

一九

姉さんがあります！

萬龜子の悲しい生涯は此の一言で盡きて居る。橋本には其の意味が解らなかつた、母にも言へず姉にも言へず生命を込めた戀人にも言へぬ胸の苦衷を橋本が知り得よう筈がない。

「其れが何ですか」と橋本は唸つた。

「其れは言へません」と萬龜子は言つた。

「なぜ言へない、萬龜さん、僕は徒らに貴方を罵つてるのでない、又徒らに貴方の後を跟けて此處まで來たのでない、我れ〳〵三人は兄弟の如く貴方方姉妹の幸福を祈つて居るのです、森川にしろ櫻井にしろ僕にしろ、一日だつて貴方の事を忘れた事はないのです、其れに貴方は僕等を他人視するのですか」

「いゝえ、御親切は能く解つて居ります」

「それなら何故言はんのですか」

「それを言ふ位なら私は此那苦勞をしやしません」と萬龜子は歔欷りあげた。

「譃だ」と橋本は大喝した。「貴方は最初富貴を望んだのだ、富貴を得て見ると案外富といふものは詰らないものだといふ事が解つた。そこで再び昔の森川が戀しくなつたのだ。貴方は矢張平凡な女だ、輕薄な女だ、不眞實な女だ。僕は見損つた」

立上らうとする袖を惹きとめて萬龜子は叫んだ。

「待つて頂戴、私皆な言つてしまひますわ」

良人を感化する氣にもなれなければ離別も出來ない、元を糺せば自ら踏込んで爲三を養子に迎へたからの事だ、富貴の恃むべからざる事、見ず知らずの商人を良人に迎へて何の幸福もない事、父の氣風と自分の氣風とは全然合はない事は、夙の昔から知り拔いて居る、其れを自ら進んで苦しい渦卷に飛込んだのは姉さんが克巳さんを愛してる事を知つたからである。

男の兄弟は知らぬ事、女の姉妹は男の其れよりも親しいものです、只一人の親の手で貧しく育つた姉妹は猶更の事です、自分で幸福になりたい、出世をしたい、思ふ男と添ひ遂げたいとは何麼女でも思はぬものはありますまい、其の幼少からの望みも慾も生命も捨てるといふのは只姉さんを幸福にしてあげたいと思つたからです。

私が側に居れば克巳さんが私を愛して姉さん

を愛して下さらない、私が幸福になれば姉さんが不幸になる、恁う思ふ時、妹として取るべき道は何でせう、姉を卻けても自分の慾を遂げたいなら何の世話もない事ですが、私は姉さんを愛しますもの、姉さんのためなら水の底でも火の底でも厭ひません。

私は實を申し出しました、富豪の花嫁になりました。克巳さんが什麼に失望なさるかといふ事をも知つて居ます、私の將來に暗だといふ事も知つて居ます、而しなければならない事で其れが人の道だと思つたからなつたのです。其の辛い心を誰が知りませう、姉さんも克巳さんも貴方も知りますまい、知られると困るから誰にも言はないのです。

爲三と離縁をしろと仰有るが、私が離縁をして獨身になつたら、克巳さんが什麼なさるでせう。一旦の怒を死ぬまで包んで忘れられない人なら何時までも私を恨んでるでせうが、男らしい方で胸の廣い方だけに獨身の私に同情して下さる、昔の戀が互に燃えて來たら其時は什麼しませう、私だつて今から綺麗な口が利けないのです、私は未だ若い女ですもの、姉さんには濟まない人になり今日までの心盡しが水の泡ぢやありませんか。恁う思ふと私は死ぬより外に仕樣がない。

御覧の通り心にもない男と夫婦になつて居るのは横道です、さりとて私は此の横道を逃れるために死んでしまへば私の子の太郎が什麼なるでせう、父がなく母親ばかりで育つた私はつくづく淋しいと思つて暮らして來ました。私が死んだら太郎が什麼します。左りとて心にもない罪の生活を針の筵の心持で何時まで續けられるでせう、離別も出來ず死ぬにも死なれず、泣いて泣き暮らして居るのは此のためです。其れが惡いと仰有るのですか、輕薄だと仰有るのですか、詰らない女だと仰有るのですか、其れなら什麼すれば可いか教へて下さい。

此那苦しみをして居るのは馬鹿々々しいと仰有るかも知れませんが、恁うならなければならない運命になつたのですもの、姉さんにも恨まれ克巳さんにも恨まれ貴方にも恨まれ、世間からは虚榮の女と罵られて誰一人私と一緒に泣いてくれる人もなく私の心を知つてくれる人はありません、知られたくはありませんが、私は淋しい、誰も居ない處で大きな聲で泣いて見たいと思ふけれども其れも出來ません。」萬龜子は途ぎれ〳〵に言ひ終つて立上つた。

「待つてくれ」と橋本は萬龜子の兩手を握り「僕が惡かつた、僕は謝る、僕は泣きたくなつた、泣かしてくれ」

恁う言つて彼は小山の樣な肩を搖かして男泣きに泣いた。

睦子

一

天王寺の東裏、片側は貧民窟らしい汚い町、路を拔けて獵業に行くと、元は畠であつた土地に青ペンキで塗つた田舍の郵便局の樣な建物がある、同じく青く塗つた門の柱に成溪女學校といふ札が掛けられてある、柵の中には敷砂をして綺麗に掃除せられ、玄關に掛けた藤棚の葉が既に美しい若葉をして、莟が將に綻びんとして居る。其の下の日影を賴りに集まつて居るのは生徒達で、今晝飯が濟んだ許りなので教室に居るものは一人もない。日向に蹲んで石を拾つてお彈きをしてるものもあれば、鐵環に摑まつてぐるぐる廻つてるものもある、一心に編物をしながら涕を啜り〳〵してる無精者もあれば、理由なく飛び廻つてきやつ〳〵と騷いでるものもある、何れも〳〵十五六から十八九までの青春で

四月の日光が海老茶や橄欖や紫紺の袴や、むらさき筒袖や長い袂を照らす。男の學生と異つて女學生の團欒は一目見たばかりで美しい。

今しも藤棚の下で一齊に聲を揃へて唄つてる一群がある。

「ザ サンシャインス ブライト インザ オールド ケンタツキイホーム……」

若やかな美しい諧音が暖かに響る。是は恐らくは此の學校のハイカラ黨に屬するものであらう。唄が進むに伴れて銘々の顔が次第に熱してほつと紅みを帶びると燃えるやうな瞳つもの眼が藤の葉を洩る日影に輝く。

「大變やわ〳〵」と昇降口から一人の生徒が走つて來た。唄が止んで一齊に其の方を見た。走つて來た子は縮れ毛の扁平な顔で上脣が上に反つて居る、少し出過ぎるから脣が自然と上に開いたのだと同級生は注釋した、それだけ有名な娘でもあつた

「姪やん〳〵」と直ぐに口を出したのは何時でも自分の下級と他の下級を間違へる粗忽屋、何時か教室で居眠りをして居た時先生に起されると同時に「御機嫌よう、唄つて居りませんかな」と言つたので一同が吹き出したといふ逸話を持つた、何か事件のある度に眞先に飛出すのは此の粗忽嬢であつた。

「まあ吃驚したわ」と粗忽嬢はいかにも驚いた樣に表情して「皆つたわ、月謝の盜人が—

「あゝ私の月謝を盗つた人？ 誰や〳〵」と粗忽嬢が言ふ。

「其れはな」と好嬢は急に小さな聲になつて校の庇の下に悄然と立つて雜物をして居る子の方を見やり「石田さんの本の間に挾んでありましたぜ、私今先生に屆けて來たんやわ」

「まあ呆れた事」

人々は眼を睜つた。

「石田さん〳〵」と粗忽嬢は呼んだ。

「えゝ」と石田といふ女學生が此の方を向いた、年は漸と十九だが、見た處十七位に見える、痩せて背が高く病人の如く青ざめて居るが、日に照らされた頰の端だけに若やかな色がほつと匂うて居る、紺絣の元禄袖に海老茶の袴を穿いて居るが其は既に流行んで居た、他の女學生の花瀟に目を受けて居る樣だから、石田は日蔭の梨の花とでも言はれよう。彼女は決して皆か自分を詰めると疑ふものの如く怯々して歩いて來た

「信子さん、貴方の本の中に石田さんの月謝袋が入つてありましたぜ？」

「えつ？」と信子は驚いて「私の本に？」

「えい、國語の本の中に」と好嬢は微笑みかけて「惡い癖やわ、ほんまに惡い癖やわ」と繰返す。

「私知りませんわ、私知りませんわ」と信子は眞紅になつて言つた。

「知らん事おまへんかいな」と口々が言つた。

「ほうら顔が紅うなつたわ」

「私の金が無くなつたのも、貴方やろ」

信子は口惜しさうに何か言はうとしたが、胸が迫つて何にも言へなかつたので泣き出した。

「盜人や〳〵」と一同が囃立てた。

「何をなすつてるの？」といふ聲が突然背後に聞えた

「先生！」と信子は其の方を指して抱き付く樣に摺り寄つた時わつと聲を擧げて泣いた。

「信子さんが月謝を盜みました」と好嬢が言つた

「其の事は確かな證據がなければ言へない事です、假令盜んだにしても其れを隱してあげるのがお友達の義務ぢやないの？」

教室から出て來た先生の言葉は、凛と耳に響いた。一同は默つた

「お許をすやありませんよ、私は信子さんは決

して其那事をなさる方ぢやないと信じますわ」と先生は我が胸に信子の埃だらけの頭を寄せて言つた。

信子は益泣いた。

讀者諸君！　此の先生は睦子である。

二

妹の家を出た睦子が女學校の裁縫や作法の教師となるまでに幾多の波瀾があつたが、簡短に言ふと雇人口入所から或る家へ小間使として奉公に入つた、其の家は女學校の校長の家であつた、校長は彼女の動作を見て尋常の女でない事を知つた、而して其の境遇や學歴を聞いた上で彼女を自分の學校の教師とした。教師仲間では誰一人彼女を愛さぬものはなかつた、其の謙遜な態度と眞實な教授振は生徒を全然感服せしめた。

戀に失望し、義理に虐げられて一旦暗の底に沈みかけた睦子は人々の愛に依つて再び光を得た、世の不幸なる人々、中にも妙齢の女が一生に一度は必ず嘗めねばならぬ結婚期の危險時代に於て本當の味方となり友となり親兄弟にも言へぬ祕密まで打明けて相談をする人がないのは一番悲しい事だと思ふに付けて、彼女は凡て生徒の本當の御友達になつて此の危險から遁れさせたいと思つた。生徒が泣けば彼女も泣く、生徒が笑へば彼女も笑ふ、而して生徒間に不純な問題が起る度に彼女は自分の罪として惱んだ。

「先生に御心配をかけては濟まないわ」

生徒は毎も恁う言つて互に品行を愼んだ。併し男と異つて女は弱いだけに僻みが多く、蔭口が多く嫉妬が多く、唇嬢の様にお饒舌なものや粗忽嬢の様に輕率なものが多い。

生徒の中に石田信子といふのがあつた、此の子は毎も淋しい顔をして團欒から離れて居る、學課も上の部であるし品行も好く、沈默で勉强であるが、朝には大抵遲刻する、而して如何にも疲れた様な眼をして懶さうに室の隅で編物をして居る事がある。

「家庭が好くないのだ」と睦子は思つた。此の子の家庭は不規則で時間の觀念に乏しいんだらう。恁う思つてる處へ睦子は或日信子の襦袢を見た、其れは單衣に半襟を掛けたものであつた。何の生徒でも女學校にある位のものは大抵相當の資産家の令嬢である、然るに信子の姿は見るも哀れな點が數々あつた。元より薄汚く垢ずんでは居らぬが、洗ひ晒しの紡績や襞の弛んだ袴や爪掛のない日和下駄などで其の貧しい狀が察せられる。

他の生徒達が頭のものや履ものまで美しく飾り、指環や時計を輝かしてるものもある、而して嬉しさうに群れて遊ぶのに、信子だけは遠く離れて孤獨で居るのを見て睦子は恁う訊いた。

「なぜ皆さんと一緒に遊ばないの？」

「皆さんが厭がるだらうと思ひまして」

氣の僻みでもない、富豪を呪ふのでもない、自分の身裝を恥づる謙遜な心からであると睦子はつく〴〵殊勝らしく思つた、彼女は自分の着物や半襟、襦袢の類まで都合して與へた時、信子は涙ぐんで言つた。

「他のものは頂戴しますけれども着物だけは」

「どうして？」

信子は暫時考へて、

「父が解らない人ですから」

家庭の狀が略察せられた。信子は依然として淋しい嬢であつた、其れと同時に他の生徒達が彼女を侮る狀が著しく見える、紛失ものの度毎に第一に嫌疑を受けるのは信子であつた。

或る冬の寒い日、生徒が裁縫室に集まつた、勢力のある生徒達は火鉢を占領した。信子は例の如く室の角に立つて居る。

―貴方も行つて手を御炙りなさい」と睦子は言つた。
「はい」と答へたが信子はもぢ／＼して居た。
―皆さん、此の方をも當てゝあげて下さい、手が凍えては御裁縫が出來ませんから―
睦子の言葉に一同は席を讓つた。信子は仕方なささうに火鉢の前に坐つたが此時割れ返る様な笑聲が起つた、と見ると信子は顔を眞赤にして顫へて居る。
「どうなすつたんです」と睦子は火鉢の側へ寄つた。
―先生、手が、信子さんの手が―と生徒達は轉げる様に笑ふ。
信子は恥かしさうに其の手を引込める事も出來ずに袖口の半ばに隱して居た。嘲笑の的になつた信子の手はいかにも慘めなものであつた。
一面の凍傷と皹！　赤く黒く腫れて輕石の様に穴が開いて、處々に膏薬を貼つた痕があつて手首まで大根おろしの様にがさ／＼して居る。
「皆さん」と睦子は一同に向つて酷く興奮して言つた。「信子さんは御宅で臺所の御用をなさるから此の通り凍傷になつたのです。立派な事ではありませんか。御宅で家庭の御用をなすつて又學校で勉强をなさる、信子さんの手は軍人の負傷と同じです、貴方方も私も、何にもせずに暖かに暮らしてる事を思へば私達は信子さんの手に恥ぢねばなりません―
一同は水を打つた様に靜かになつた。睦子の眼に涙が光つて居た。信子は默つて泣いた。

三

同じく地上に生れ來て明るい光の下を歩くものと、暗い陰を歩くものとの區別がある。他の生徒達を見るにつけ睦子は信子が可哀さうで堪らなかつた。睦子の厚い同情は信子の胸の底に犇々と響いた　何故恁那に親切にして下さるんだらう、之が彼女の疑問であつた。
月謝の紛失事件が、粗忽孃が誤つて自分が信子の本の中に挾んだのだと解つた時、粗忽孃は頻りに信子に謝罪つた。
「解りさへすれば其れで可いわ」と信子は何にも言はなかつた。
放課の時刻になると凡ての生徒は開放された自由の氣分で充滿に翼を擴げて樂しい父母の許へと歸る、彼等の樂しみは父の優しい顔を見る事と母に美味いものを貰ふ事と、兄弟や姉妹と學校の話をする事とであつた。今晩一緒に活動へ行く約束をして居るものもある、音樂會の話をしながら行くものもある、銘々の眼は其日其日の幸福に燃えて居る。
信子は後れて學校を出た。
―あゝ今日も是で日が暮れるのだ、家へ歸らねばならぬ―
恁う言つた風に彼女は茫然藤棚の下に立つて居た。
―お歸り？―と睦子は背後から聲を掛けて「一人殘つてゐるの？―
「えい」
―私の室へ遊びに被來いな」
恁う言つたが信子は答へなかつた。
「早く歸らなきやならないの？」―
「えい
「では御歸りなさい、私其處まで一緒に行きますわ―
二人は歩き出した。
―貴方はお母さんがあるの？―
―いゝえ―と信子は頭を掉つた。返事までもなく母のない娘だとは睦子が既に／＼察して居たのであつた。
―御父さんは？」
あります
―何か御商賣？」

「いゝえ」と言つて信子は深い呼吸を吐いた。

沈黙の間に二人は五六間歩いた。

「先生！」といふ信子の聲は顫へて居た。「私の父は酒を飲みますのよ」

「お酒を？」

睦子は此の一言で凡て此の子の生活が解つた樣な氣がした、何の商賣もなく、ふら〳〵と遊んで酒を飲んで夜更かしをし、朝寢をする、爾いふ人種は東京には澤山あるが大阪には絶無だと信じて居たのだ。

「貴方は東京で生れたの？」

「えい」

「いつ大阪へ被來つて？」

「一昨年」

「まあ其れぢや私が大阪へ來た翌年だわね、東京は御宅は何處？」

「牛込の伯父さんの處に居りました」

「あら牛込！」と睦子は驚いて「牛込の何の邊」

「鶴卷町」

「まあ私も」と言ひかけて睦子ははつと氣が付いた。自分の育つた家より一町も距らない町に此の子も育つたのだ、語り合へば昔を偲ぶ話の種もあらうが、名前を僞つてる今の身分では其れも出來ぬ。然う思つて睦子は何氣なく「早稻田の運動場を知つてて？」

「えい、知つて居ますわ、野球をする處でございませう」

「えい爾よ」

「野球の時には鶴卷町が學生さんで通れなくなりますわ」

「あゝ」と睦子は其時の事を憶ひ出してほつと息を吐き「私は野球が好きですよ」

「私もよ、先生」と信子は珍らしく笑ひを含んで「私は橋本さんといふ選手を知つて居ますの」

「橋本さん……まあどうして」と睦子は思はず言つた。

「先生、御存じ？」

「いゝえ」と睦子は我に復り「名前だけは聞いて居ますわ、有名な投手でせう」

「えい、私の小父さんが下宿屋だつたもんですからお友達の處へ橋本さんが被來つて、森川さんや何かと……」

「森川さん！」と睦子は電氣に觸れた樣に言つた。何も彼も忘れてしまつた積りの其の人の名を今生徒の口から聞かうとは思はなかつた。

四

睦子の驚愕を信子は知る由もなかつた。彼女は如何にも懐かしさうに睦子と肩を並べながら話を續けた。

「森川さんと言へば、隨分成功なさいましたわね」

「あら什麼して？」と睦子は言つた、新聞も讀まず、讀んだ所で大阪に興味の薄い睦子には何の興味もなかつた。彼女は森川が大阪へ來て居るのさへ初めて知つたのであつた。

「達磨印の煉乳やバタや、葡萄酒や種々な食料品が出來ましたのよ、それが廉くて品質が可いのですつて、利益よりも公衆の利益になる樣にって會社を起したのださうです」

「あゝ爾？」と睦子は夢かと許り嬉しく思つた。達磨印といへば頃日新聞の廣告や店先のビラに出て居る、學校でも達磨のバタは一番優良だと評判されて居る、曾ては自分も其の煉乳を飲み其のバタを食べたことがあつた、其れが戀人の手に成つたものだとは思はなかつたのである。

「葛城山の麓に工場がありますのよ」

「まあどうして其那に精しく御存知なの？」

「私の父が」と信子は言淀んで「父が工場へ行つてるもんですから」

「まあ爾？　何をなすつてるの？」

「職工の取締をして居ますの」

「まあ」

父の事を思ひ出したので信子の胸は又もや暗くなつた。で彼女は黙つた。

二人は天王寺の線路へ出た。

「こゝで御別れしますわ」と信子は悄然として言つた。

「爾？　ぢや又明日ね」

信子は俯向いて竊と涙を拭いた。

「什麼して彼那に悄然してるのだらう」と睦子は別れてから考へた。話に聞けば東京の伯父さんに預けられて居たのが、伯父が破産のために父の許へ歸されたのださうだ、伯父よりも生みの父の方が恐い、酒飲で癖が惡くて怠け者らしい。

睦子は急に可哀さうになつて足を返して信子の後を跟けた。信子は其れとも知らずに俯向きながら街の軒下を歩いてゆく。

「種々な苦勞があるものだ、父のための苦勞、母のための苦勞、姉妹のための苦勞！　あの子はあんなに若くても苦勞がある、私なぞは未だ未だ苦勞が足りないのかも知れない、今此の路を歩いてる人達も電車に乘つてる人達も、皆な其れ〳〵に苦勞があるのだらう、して見ると人間は苦勞に生れて來たのかも知れない」

恁那事を考へながら信子の姿を見失はぬ様に跟けて行くと、彼女は上本町の方へ指してゆく。其處の左側に小さな祠があつた、稲荷様か金神様か何の神様か知らないが、信子は其處へ立止まつた、而して學校の道具包を石段に置いて合掌した。口に何やら言ふと熱心に祈るかの如く拜む。

「まあ心配が餘つて神様に願つてるのだ」

恁う思つて睦子はもう涙ぐんだ。信子は直ぐに其處を去つて次の路次を曲つた、而して路次口から二番目の長屋建の入口に霎時佇んだが、軈て思ひきつた様に中へ入つた。睦子は直ぐその戸口に立つた。

「只今」と信子は言ふ。其れは自分が女學生であつた時に好きな母の家へ歸つて戸口から掛ける聲の様でない、いかにも元氣がなく半ば恐るるかの様であつた。

「何をしてやがるんだ」と怒鳴る男の聲がした。

「濟みません」と信子は言つた。

「酒も買つて置かないで什麼したんだ、おい、樽が空つぽぢやねえか」

「でもお父さん、お錢が……」

「なに？　お錢が無え、馬鹿野郎、お錢があつて買ふなら隣の婆さんを頼んだつて買つて貰へらあ、御多福め、女學校へなぞ行くから徧だ、持つてるものは何だ」

「學校の本です」

「賣つて來い」と親父らしいのが怒鳴つた。

「でもこれは」

「何？　學校へなんか行かなくたつて可い、手前は何か、親に不自由さして學問がしたいのか、親と學校と何方が大切だ」

「だから御父さん、私は什麼事でもしますから學校だけは」と信子は泣聲になつた。

「なんだと、どんな事でもする、可し、其れぢや藝妓になれ」

五

睦子は身慄した。世には恐ろしい親もあるものだ、信子が陰氣で淋しさうな顔をして居るのも此の親があるからだ、恁う思つて表口をうろうろして中の様子を聞いた。戸口の上の丸い電燈に「江戸熊」と書いてある、いかにも大工の棟梁か請負師か職工の口入屋に違ひない。中では父の猛る聲が益々鋭くなつて來た。

「なあおい、此の大阪ではな、[illegible]になつたつてから何も恥かしい事は無いんだ、立派な[illegible]

娘が藝者になるんだ、家にゐそ〳〵して親の脛を噛るよりか自分で働いて親を助ける事を考へてるんだ、三年も藝者をすれば親の世話にならずとも嫁入支度が出來る、可い客を銜へ込めや別莊の一つも貰つてよ、船板塀も古風だが煉瓦の上に硝子缺をぎざ〳〵に植ゑた門構位は貰へるんだ、大阪の女はな、東京の女よりずつと利口だが、お多福め、宗右衛門町へ行つて見ろ、何十萬兩て財産家の藝者がうじよ〳〵居らあ、朝から晩まで親父に灘を飲ましてよ、鯛の目玉の佃煮を食はしてよ、縮緬の座蒲團を三枚敷いてよ、木魚の樣になつて左團扇で居る御隱居さんが何千人あるか知れない、だから娘も其れだ、日髮日風呂だ、南の藝者けな、澤庵だの菜葉だのそんな汚えものは食はねえ、亞米利加から舶來の漬物に香水を掛けて食ふんだ。可いか、解つたか。足袋だつて西陣織だ、コハゼが皆な白金だ、其れを一日穿けば道頓堀へ捨ててしまふんだ、だから道頓堀の泥浚人は何百萬て金を貯めてるんだ、藝者大明神て神樣が祀つてあるんだ、親孝行をして人に賞められてよ、神樣に祀られるなんて、其れが女の手柄だ、女學校に行つたつて何になる、頃日は藝者學校てえのが出來た、八千代でも呂之助でも文部省から博士の肩書を貰つたんだ、藝者の博士だ、シャア與博士てんだ、べらんめえ、女の博士は藝者だけだい、親不孝め」

「御父さん」と信子は泣聲で言つた「他のことなら何でもしますから、其ればかりは堪忍して頂戴」

「なに？藝者が厭だと吐かすのか、藝者にならなきや何になるんだ、お多福め、女はな、身體が財産だ」

「御父さん、私の身體を賣つて、酒の飲代になさらうと仰有るの？」

「當り前だ、何も不自由しようと思つて今まで手前を飼つて置きやしないんだ」

「餘りだわ〳〵」と信子は泣き伏した。

「何が餘りだ、手前を出世させようと思へばこそ言ふんだ、博士にしようてんだ、白金のコハゼの足袋を穿いて、香水漬の漬物を食はせようてんだ、それが解らねえか、お多福め」

「それぱつかりは、御父さん、それぱつかりは」と信子は泣き續けた。

「もういゝちやんと受判まで出來て、南の蘆の家から出る事に決めたんだ、千兩で金が明日になれば懷に入るんだ」

「私の身體は千圓？」と信子は悲しさうに言つたが遂に明晰と續けた「御父さんは私より千圓の方が可いのね」

「當り前よ、今までの食扶持を積つて見ねえ、萬にも十萬にもならあ」

「では參りませう、私は千圓で賣物にされる、人の玩具になる、それがお父さんの御望みなら」

「お望みだよ」と父は言つた。「さあ來い、是から居へ行つて初目見えだ」

「これから？」

「うむ」

「はい、參りませう」

二人は立上つた、途端に睦子は入口の戸を開けた。

「あら先生！」と信子は顏を兩袖に隱した。

「信子さんの御父樣で被居いますか、私は森田花子と申しますもので」と睦子は靜かに挨拶して「只今門口で聞きましたが、信子さんを藝妓になさる事だけは何卒御止めになつて下さいませんか」

傲ういふ睦子の顏を凝と見詰めて江戸熊は叫んだ。

「お前は昔日の女だな、そら、道灌山の料理屋で俺を突落した……」

「あらツ」と言つたきり、睦子は棒の如く立竦

んだ。

六

夕の風が身に浸むに付け、曉の色が戸を漏るに付け、三年の間忘れようとしても忘られぬ恐怖しさは是であつた。縱令先方が理不盡であつたにせよ、懸崖の上から突落して而も懷に捻ぢ込まれた二百圓！其れを返しもせずに愛する男の病院費に使用つた。强盜詐欺と言はれても辯解の餘地がない。睦子は其れを思ふ度に身慄した。法律の網を潜つて僅かに生きて居る身は何時なん時牢獄に投ぜられるかも知れぬ。「暗い獄舍が私を待つて居る」と彼女は毎も思つて居るのだ。

其の當人が今眼前に現はれた、死んだと思つた當人！二百圓を懷に入れてくれた當人！其れが信子の父であつたのだ。

「やい〳〵」と江戸熊は睦子を疊に坐らして自分は胡坐を搔き「手前は腕が凄いな、何だと？女學校の先生だ？呆れらあ、御剩錢を出さあ、筒持たせの先生か、人殺しの先生か、色仕掛で金を奪掠くる四十八手の先生か、えいおい、さあ恁うなつたら逃がさねえぞ」

「逃げやしません」と睦子は蒼白になつて微かに答へた。

「逃げようたつて逃がすもんか、さあ俺を什麼してくれるんだ」

「御父さん、」と信子は淚を充滿に眼に湛めて言つた。「先生に對つて酷い事を言つちや不可せんわ」

「默つてろいお多福、手前の知つた事ぢやねえ」と江戸熊は怒鳴つた。而して「さあ什麼してくれるんだ」と睦子に言ふ。

「貴方の仰有る通りになりませう」と睦子は答へた。

「俺の言ふ通りに？」と江戸熊は嬉しさうに繰返して「爾だ〳〵、其れは好い度胸だ、さうなると俺も萬更ら無理な事は言へねえ。そこで第一にだな、そら第一にだな、お前は俺の嬶になるんだ」とにや〳〵して言ふ。

「御父さん」と信子は制める樣に言つた。

「默つてろい、さあどうだ、嬶になるか」

「其れは出來ません」と睦子は言つた。

「なに？出來ない？今何でも言ふ通りになると言つたぢやないか」

江戸熊の顏は又もや兇惡になつた。

「私に出來ます事ならどんな事でも致します」

「出來ねえ事があるもんか、お前は女だ、別嬪だ、俺の嬶になれねえ事があるもんか」

「私に良人があります」と睦子は決然と言つた。

「なに？良人？爾か、其れぢや仕方が無え、其の御亭主といふのに會つて話をしようぢやねえか、お前さんの女房は俺を崖から突落して二百圓の大金を持ち逃げしました、そこで其の埋合せにお前さんの女房を俺が自由にするから爾思つてくれと斷つて來よう、さあ什麼だ、御亭主は何と言ふ人だ」

「其れは言へません」

「譃を吐いてるんだな」と江戸熊は眉と眉の間に八字を寄せて「さあ、石政は男だ、手前達に馬鹿にされて引込んで居やしねえぞ。お信、酒を買つて來い」

「お父さん、どんな事があるか知らないけれども先生を慘める位なら私を什麼にもして下さい、私は矢張藝者に參ります」と信子は泣きながら言つた。

「其れと是れとは話が違ふんだ」と江戸熊は怒鳴り返して「さあ姐さん、いや先生！どうするんだ、俺の嬶になるのか嫌なら其所で第二の話があるんだ、どうだ」

「第二とは什麼でございますか」

「金の事だよ、爾だ、金だ、金で話を決めよう

ちやないか」
「お金とは？」
「まあざつと見積つて一萬圓だ」

七

「一萬圓？」と睦子は吃驚して問ひ返した。
「爾だ、一萬圓だ、お前が俺から取つて行つた金が二百圓だ、お前に突落された俺は半死半生の思ひで漸と人に助けられてよ、其れから醫者だ、藥だ、療治に半年も掛つたが、とゞのお終ひには此の通りの不具だ、右の足が一本短くなつたんだ。其のために俺は仕事が出來ねえ、子分共には馬鹿にされる、石政の看板を疊んでよ、大阪くんだりまで零落れてよ、江戸熊なんて變ちきりんな名前で漸と職工のカスリ取で飯を食つてる始末だ。電車に轢かれたつて慰藉料が一萬圓も取れるんだ、裁判へ出てよ、此の女が私を突落して金を盗つた、私は不具になつて働けないから之から先の事を御願み申しますと言やあ、お前は何と言つても一萬圓は出さなきやならねえんだ、嫌だと言ふなら裁判へ出る許りだ、どうだ、先生」
「一萬圓は私に出せません」と睦子は顫へながら言つた。「貴方を私が突落したと仰有るけれども貴方が私を手籠になさらうとなすつたもんだから私が逃げる時に貴方が落ちなすつたのぢやありませんか、二百圓のお金は貴方が私にお貸しなすつたのですから、私が盗つたわけはございません、御入用なら私から御返し致します、二百圓だけは屹度御返し致します」
「厭だい」と江戸熊は盃を疊に叩き付けて「一萬圓が一文一錢缺けても厭だい、裁判へ出れや解る事だ、學校へ行つて皆なの前で怒鳴つてやるから爾思へ」
「其れは御無理ではございませんか」
「手前が無理ぢやねえか。やい、御多福」と信子を睨めつけて「さあ酒だ、今夜は晩くなつたから明日は屹度藝者にするから爾思へ」
恁う言つて腹掛の丼から銅貨や銀貨を掴み出して疊へ抛り出し、
「行つて來い」
信子は淋しい顔をしてつく／＼と父の顔を見上げたが默つて銅貨を拾つた。涙が疊と銅貨へぽと／＼と零れた。
「行つて參ります……でも先生」
「行つて被居い、心配しなくとも可いわ」と睦子は故意と笑を浮べた。
信子の頭は顛倒した。今初めて聞いた父と睦子の關係、其れも大方は父に罪があつて睦子には罪がない、若しありとすれば二百圓の一件だけだ。
「私を救はうとなすつて却つて火の中に飛び込みなすつた樣なものだ」
信子は睦子の親切を感じ又睦子の種々な苦勞を思ふと共に、此の世の中は什麼して恁う光もなく喜びもなく、正しい人が苦められるのかといふ果敢ない悲哀が胸を割いて湧いて來た。彼女は涙を拭き取つて、やをら酒壜を袂に隱し急ぎ足で外へ出た。
酒屋の小僧が酒を注ぐ間ももどかしかつた、彼女は睦子の事が氣掛りである、恁ういふ間にも若し父が先生に亂暴しやしまいか。恁う思ふと身體が宙に浮いてる樣にふら／＼と足元が定まらない。
壜を受取つて急いで小走りに戻つて來ると睦子が戸口に立つて居た。
「あら、什麼なすつて？」と信子は何事か凶事でもあつたかの如く胸を躁かした。
「話が決まつたのよ」と睦子は蒼白めた顔をして言つた。「私の事は心配なさらなくても可いわ」
「どう決まりましたの？」

「明日私が參ります」

「なぜ被來るの？」

「信子さん、私は貴方の御父さんを氣の毒な方だと思ひます、御父さんの心持を癒してあげるのが貴方と私の義務だと思ひますわ」

「却々癒りやしませんわ」

「いゝえ〳〵」と睦子は眼を瞬いて「御父さんを不具にした私は御父さんの心の不具を癒さなければなりません、私は何でも御父さんの要求通りにする積りです」

「あんな無理な事でも？」

「えゝ、妻になれといふたら妻になりますと答へなきやなりません、併し其れには條件があります、若し御父さんが眞面目な人になつて世の中の利益になるなら私はどんなに辛い思ひをしても構ひません、元々私は世捨人ですから」

睦子の悲しい顏の中に言ふべからざる威厳が輝いた。

「私の幸福のために、貴方の幸福のために、御父さんを善人にしませう」

信子には其の意味が解らなかつた。

八

信子が家へ入ると父は疊の上に寢轉んで居た。眼を覺まされると却つて困るので信子は竊と蒲團を掛けてやつた、而して自分はお膳を出してこそ〳〵と夕飯に掛つた。彼女は茶碗と箸を手に取つたが何とも言へね悲しさが胸に迫つて來る。學校の友達でも隣近所の家でも皆な優しい父を持つて居る、あの人達は家へ歸るのが樂みだが私一人は家のない人間だ、恁ういふ暗い淋しい荒れ果てた顏で、聞くものは野獸な怒鳴聲だけである、せめて御母さんが生きて居てくれたら恁那でもあるまいに。

ふと氣が付いて茶碗を取上げる、一口二口食ふ中に彼女の眼は端なく父の方へ向く。埃じみた頭、眼の皮が弛んだ様になつて、日に焼けた顏の色は酒のために赤く膨れてゐる、片腕を延ばして片腕を枕に、頭を疊に擦り付け、大きな鼾を搔いて居る。

「お父さんらしいお父さんが欲しい」と彼女はつく〴〵思つた。でもう飯を食ふ力もなくなつて箸を擱き、其れから學校の復習をしようと思つたが其れも止めて、店の室の格子の處に立つたまゝ聲を忍んで泣いた。

「何を泣いてやがるんだ、もう寢ろ」と父は怒鳴つた。

寢るには早いが信子は蒲團を被つて思ふさま泣きたいと思つた、で彼女は靜かに後形付をして店の室に蒲團を敷き其處に倒れる様に泣き伏した。

うと〳〵と眠つたかと思ふと、彼女は話聲を聞いた。

「大丈夫か」と一人が言ふ。

「へえ大丈夫です」といふ聲は父である。何時の間に來客があつたのか信子は知らなかつた。

「どの位だんね」

「まあ今日までの處では十萬個ばかり」

「十萬個？」と其人は驚いた様に「大阪は概略だんな」

「まあ十萬個もやれや、小賣の方まで大抵行渡つて居ますさあ、其れはお前さん、煉乳は腐り易いですからな」

「どんな風にやつた？」

「何しろ目的は何でせう、達磨の煉乳を腐らして鑵に入れさへすりや可いんでせう、良くしようといふには骨が折れますが、腐らさうてんだから譯がありやしませんや、溝泥を詰めたり白水と澱粉だけにしたり、中にや蚯蚓を叩き込んだのもありましたよ、あれがお前さん、市中へ出た日にや一日の中に信用がなくなりまさあ、鑵だつて滿足なのは一つもありません」

「併し何だんな、餘りやり過ぎると却つて此方が疑られるさかいにな」
「大丈夫々々」と父は元氣好く答へて「江戸熊の仕事に失策はありません」
「森川も其れではもう二三日であかんな」
信子は靜かに蒲團の隙から客の方を見た。縞の羽織に黒い前垂掛をしてゐる横の方ばかりが漸く見えたが、其の圓々と肥つた恰好や聲柄で一二度此の家へ來て父と何やら祕密に話して行つた油谷爲三といふ人だと解つた。
「あの人が御父さんに賴んで、達磨印の煉乳を腐らさうとして居るんだ。どうして其那惡いことをするんだらう、自分の勤めてる工場の品物を腐らすなんて餘り酷い」
信子は淺間しさと恥かしさと情なさに胸が塞つて泣くにも涙が出なかつた。
「どうも、此那に澤山？　えつ千圓？　こりや多過ぎますさあ」と父は恐悅の體で言つた。
「なあに手付だんが、あとは又あとで……」
「これが手付？　ほう、これはどうも、御用があるなら何でも致しますさあ」
「あゝ賴みまつせ、ほんまにお前は私の片腕や」
恁う言つて爲三はちらと信子の方を見「お前の娘はんだつか」
「へゝゝ」
「別嬪やな」
「へゝゝ、飲料が無いから藝妓に叩き賣つて飲まうかと思つて居た處でしたよ」
「僭か、別嬪や、藝妓にしたら私、いの一番に買ひに行きまんが」
「違えねえ」と父は笑つて「お氣に召したら女中代りにでも使つておくんなせえ」
漸て爲三は立ちかけた。信子は動くにも動かれず顏を電燈に露したまゝ眼を閉つて居た。
「別嬪や、ほんまに、惜しいもんや」と爲三は枕元を通りさまに言つた。

九

信子はもう泣いて居られなくなつた。世の中に惡人といふ惡人は數々あるが、これほど恐ろしい罪を犯す者があらうか。萬人の飲む煉乳に汚物を入れて腐らしてしまふとは餘りに恐ろしい。其れが父である、血を分けた眞實の父である。
「あゝ什麽したら可いだらう」と彼女は胸を拗つて考へた。「恁ういふ場合に父の娘として執る道は何だらう」
父を諫むればとて聽き入るべき人でない、之を森川さんに告げれば父の非を訐く事になる、去りとて此儘にして置けば森川さんの信用が地に隊ちてしまふ。信子の頭は四途路に紊れた。
ふと見ると父はこそ／＼着物を着替へて居る。
「御父さん！」と信子は俄破と跳ね起きた。
「何處か御出ましですか」
「うむ、散財に行きまんね」と父は機嫌好く大阪辯で言つた。
「一寸待つて頂戴」と信子は寢卷の浴衣一枚のまゝ父の前に坐つて「私お父さんに御話があるわ」
「何だ」と父は呆れた顏をして立ちながら言ふ。
「だつて御父さん、私は……私は……私は」
恁う言つたがもう感情が昂ぶつて自分ながら何を言はうとしたのか解らなくなつた。
「何だ、寢惚けてるのか」
「いゝえ／＼」と信子は熱心に父の顏を見上げた時先刻睦子の言つた言葉を思ひ出した。御父さんの心の不具を癒してあげなければなりません、恁う言つた睦子の嚴肅な聲が未だに耳に殘つて居る。信子は何とも言へぬ勇氣を感じた。
「御父さん、貴方はお金を貰つたでせう」
「其れが什麽したと言ふのだ」と江戸熊はむつ

として言つた。

「私を藝妓に賣つて下さい、私は藝妓になります、其のお金でお酒でも何でも飲んで下さい、そして今貰つたお金を返して下さい」

「何を言つてやがるんだ」と父は怒鳴つた。「此の金を返せ？　御多福、此の金は什麼して不可えんだ、手前の知つた事ぢやねえ」

「お父さん」と信子は夢中になつて父の裾に捕まつた。「十萬人の人に溝泥や蚯蚓の汁を飲まして御父さんが好い氣持で美味いお酒が召上れますか、世の中の人に迷惑を掛けて御自分ばかり面白い思ひをして居られますか」

「馬鹿々々々々」と父は上から見下して信子の手を振拂つた。「馬鹿ツ、大阪といふ處はな、金儲けをするもんが一番豪いんだ、學者でも博士でも軍人でも金儲けの出來ねえものは阿房と言はれるんだ。大阪ばかりぢやねえ、東京だつて神戸だつて日本國中が皆な爾なんだ。今來た油谷のデブさんだつた爾だ、彼奴あ阿片を輸出してゐるんだ、阿片成金だ、支那では八釜しく禁じてあるものをコツソリ持つて行つて賣つてるんだ。阿片つて奴はな、腐つた煉乳よりも害があるんだ、其れでも世間では實業家だの紳士だの市會議員だのつてちやほやしてるぢやねえか、世間つて奴はな、強い者に降參して來るんだ、勝てば官軍だ、人の事など構つて居られるかえ」

「油谷さんの事は私の知つた事ではありませんわ、私は私のお父さんが……たつた一人のお父さんが誠の人であつて下されば可いんですわ。お父さん、お酒が召上りたければ私は藝妓になります、どんな卑しい商賣でもします、ねえ御父さん、本當の……本當の……本當の人になつて下さい」

「馬鹿な事を」と父はせゝら笑つた。「藝妓になりたければ何時でもならしてやらあ、だが今夜から當分酒代に困らねえから暫時預かりにして置かうよ、無くなつたら又賴むぜ、學校の先生にも爾言つて置きな、今の處は嬶が欲しくなくなつた、欲しくなつたら當方から沙汰をするから左樣心得つつてな」

「待つて頂戴」と信子は去らうとする父の裾に絡み付くを、向脛でぽんと蹴飛ばして父は素早く框の下に降りた。

「待つて居ろよ、明日半襟を買つて來てやるから」

信子はばたり疊に倒れたまゝ起上らなかつた。

一〇

克巳は馬に跨つて牧場を一巡した。牛小舍の牛は悉く出て遊んで居る、或ものは蹲り或ものは立ち、或ものは他の顏を舐めてやり、或ものは縛られてもうと鳴いて居る、黑や白や赤や斑や、何れも艶々と肥つて晩春の光に輝いて居る。牛の群の間を番犬が二頭組んづほぐんづ巫山戲て居ると、埓の外には鷄の群が燦やかに遊んで居る。

「旦那、八頭生みましたんや、八頭」と一人の百姓が汗を拭いて走りながら言つた。

「何が八頭だ」

「豚が、豚が」

「爾かえ、其奴あ剛氣だな、今行つて見るよ」

「もつと生むかも知れませんぜ」

百姓は又もやはあ／＼呼吸を切らして走り去つた。

克巳は馬から降りて豚小屋の方へ行かうとすると其處の畠から來た二三人の小娘が其に逢つた。きび／＼と肉付の好い脚を脛まで捲くり上げて、腕は肩まで出る樣に袖を絞つて、各自に手桶を提げながらやつて行く。其の背後から、から／＼と空に乾いた音を響かしてチャケツを

肥た若者が麥藁帽子を阿彌陀に被つて牛乳車を曳いて行く。其處から少し坂路になつて一面に藁を乾し並べてある。藁の香がほつと空氣の中を漂うて如何にも晩春らしい暖かな日光を充滿に吸ひ込むかの如く思はれた。克巳は其處に立つて脚下に並ぶ工場の甍を眺めた。煙突から夥多しい煙が雲の如くもく／＼と湧き出ると今度は渦卷いて一條の黒龍の如く中空に走り次第に薄らいで東北へと流れる。煙突の下は滑かな午後の日光に輝く工場で、窓々から職工や女工の動くのが見え、又窓の外に種々な人が或は荷造りをなし或は車に乗せ或は鉛管で何やら書き或は重さうなものを肩に乗せて來るのが恰ら蟲の如く見ゆる。二つの工場に一つの寄宿舍、三棟の建物であるが、此の建物の中に百餘人の者が働いて居ると思へば克巳は今更ながら微笑まずには居られない。

「尊き勞働者よ」と彼は神に感謝するかの如く口の中で言つた。「智慧よりも門閥よりも地位よりも學問よりも凡てに超絶して尊きものは諸君の汗である。神聖の二字は諸君の勞働に對して初めて用ふべきものである」

彼は恁う言つて微笑した。其の顏は滿足に輝き、其の眼は幾度か滿に潤うて僅かに涙ぐんで居た。彼は背後の高地に建てた大看板を顧みて一驚した、其れは達磨の形で下に森川工場と書いたものであつた。初め此の看板は一里の遠くから見上げても目立つ樣な巨大な達磨にしようといふ意があつたが克巳は其れを拒んだ。

「廣告のために自然の風景を害する程卑劣で淺間しい感を起させるものはない、商賣とは言ひながら人間は自然を尊敬しなければならぬ」

と彼は言つた。

背後に葛城山を負ひ、前に工場を控へ、機械の音や牛の鳴聲や雜多な工作の響を聞いて立つて居る克巳は見るもの毎に感謝の情が溢れた、自分の力ではない、第一に櫻井の力である、次に職工の力である、次に自然の力である、彼は例の如く信念として微笑した。此の性癖の微笑こそは彼の一日中の樂みであつた。

凡ての煉乳が達磨印に壓倒され、凡ての牛酪は達磨印に倒壓された。彼は自己の勝利に對する喜びよりも「正しきものは必ず世に用ひらる」といふ眞理を確め得た事が一番嬉しかつた。金儲けを目的とするものは倒れ、公益を目的とするものは榮ゆ、これが萬人に解つたら日本は世界中の最も正しき國最も富める國になるだらう。

克巳には其れが嬉しいのである。彼は不圖他の事を思ひ出したので引き返さうとした。其處へ事務員の小林が來た。

「社長、大變です」

「何が？」

「職工共がストライキを起しかけて居ます」

二

「何？ ストライキ？」と克巳は問ひ返して「そんな事があるもんか、他所の職工なら知らない事、私の職工に限つて其麼事はありやしない」

「いや、處が誰か煽動したものがあるらしいです」

「縱令煽動者があるにしても森川工場の職工は悉く紳士だ、道德を解して居る、禮儀を知つて居る、責任を知つて居る」と克巳は斷乎として言つた。

「いや、社長の氣質では爾信ぜられるのも無理はありませんが、彼等は無智です、金錢を食ませれば、什麼ともなる奴等ばかりです」

「小林君、考へて見たまへ、此の工場は凡て配當組織だよ、職工に十分配當を與へてあるんだ、他の工場は單に資金に對する配當ばかり

をするが、僕は勞働に對する配當をして居るんだ、若し此の工場の仕事を妨害すれば其れは彼等自身の損ぢやないか」

「處が、明日の一圓よりも今日の五十錢が欲しい奴等ばかりです、彼等に責任や道德を望むのは間違ひです、只今江戸熊が來て來月分と來々月分の給料をくれと怎う言ふんです」

「江戸熊？　彼奴は怠けもので始終缺勤ばかりして居るから解傭する樣に係に言つて置いたが何故解しなかつたのだ」

「處が彼奴を解傭すると職工を煽動する恐れがあつたから時機を見る事にしたのです」

克巳は默つて自分の足元を見詰め洋杖の尖で土の上へ字を書いた。

「正義！　正義！　正……」

書き終らぬ中に工場の中から吶と鬨の聲が起つた。

「萬歳！　萬歳々々」

見る〳〵職工は工場の凡ての戸口から溢れ出た、而して三々伍々集團を作つて罵り騷ぎ狂ひ廻つた。其の間を泣聲立てて女工共が走つて行く。

「行かう」と克巳は歩き出した。途端に江戸熊の姿が小舍の蔭から出た。

「旦那」と彼は跛の足を爪立てて眞直に立ち、肥つた腹を突出す樣にして首を縮め、上眼にちらと克巳の顏を覗いた、其の態度は既に輕蔑に充たされて居た。

「前借が出來ねえんですか」

「江戸熊君、當工場の規則として君は辭めて貰ひたいんだ」と克巳は嚴然と言つた。

「なぜですか」

「缺勤が多いから。前月は無斷で二十日も休んでるよ」

「私あ辭めても可うがす、だが旦那、他の職人達は」

「他の者は皆な精勤者だ、辭めさせるわけがない」

「では他の者達の給金を前借はさして下さるんですね」

「一家の事情止むを得んものに對しては、特に精勤者に對しては許す限りの都合をしてやる」

「では解して貰ひたいもんで」

「何がだ」

「職工一同に二月分の前借をさして貰ひたいもんで」

「一同？」

「女工も入れて百二十人でさ」と江戸熊はひよいと顏を上げて「へゝゝ」と笑つた。

「お前は教唆をしてるんだね」と克巳は屹となつた。

「教唆したが什麽だと言ふんでえ、べらんめえ、一人や二人に貸してくれるなら百二十人に貸されねえて筈が無えんだ、巫山戯てやがらあ、腐つた牛乳を賣つてる癖に」

「不埒な事を言ふな」と小林は眞紅になつて怒鳴つた。「何が腐つてるんだ」

「お前さんを相手にしちや居ないよ」と江戸熊は笑つて下を指さし「腐つてるか腐つてないか、彼處に檢査の御役人が來て居らあ」

如何にも職工の群を離れて、警部らしい人と內務部の役人らしい人の二三人が今しも箱を開いて罎を檢べようとして居る。

「今朝の浪花新報を見て見ろ」

怎う言つて江戸熊は坂を下りた。

二

元より我が正義を信じて疑はぬ克巳は單に職工等が一時の空騷ぎだらうと思ふの他はなかつた。彼は直ぐ小林と共に坂を下つて工場へ行つた。職工共は彼の姿を見るや否や路を開いた、而して遠卷に取卷いて口々に惡口を浴び

せ掛けた。

工場には既に檢査の役人が罐の口を開けて江戸熊と何やら語つて居た。

「僕は森川ですが」と克巳は役人に挨拶した。

役人は直に製品の粗悪を詰つた、而して其處に山の如く積んだ煉乳の罐を殘らず開いた。克巳は仰天した。或者は溝泥の如く濁り或者は薄墨色に腐り、或者からは蚯蚓の様なものが出た、而して何れも〳〵鼻持のならぬ様な悪臭を放つた。數の中の一つや二つなら知らぬ事、幾百幾千とあるものが悉く其れであるに至つては克巳は最早や辯解する力が無くなつた。

「責任は僕が負ひます」と克巳は言つた「併し平靜に御考へになつたら、商人が、而も天下國家の利益を唯一の目的として此の工場を起した商人が、誰が一目に見ても驚く様な恁る粗悪な品を作るべき筈がない事が御解りでせう、若し私利を目的とする商人にしても爾です、好んで世間の不信用を招く様な事はしますまい、此の點を能く御察しを願ひます、要するに是は何者か僕の商賣を妨害しようと思ふ者の悪辣な手段に過ぎません、併し辯解は致しません、如何様の御處分をも受けます」

克巳の言ふ處は極めて事理明白であつた。役人達は何れも一言々々に首肯いた、而して最後に粗悪品を回收する事、新聞紙に廣告して公衆に謝する事、今後の品質を吟味する事を注意して歸つた。

職工共は事の成行如何と窓から入口から頭を重ねて覗いて居たが、役人と克巳の應對が案外平凡に終つたのを見て、半ば失望した様な半ば安心した様な顔をして散々に去つた。

其の日は工場は休んだ、今までの賑やかさに引替へて凡ての機械は音もなく冷たく光つて居る、がらんとした建物の中には職工の影が一人もない、而して毀れた窓硝子の破片や、椅子や吊棚や卓子や、野獸が踏み荒した後の様に狼藉した石塊や泥や古新聞や木片の中を、一人の年老つた小使が何にも言はずに箒を持つて掃除してる姿を見ると、克巳は堪らなく口惜しくなつた。何のために此那災難が起つたのだらう、正しき事が禮を以て報いられずに侮辱を以て報いられるとは何事である。

茫然と立ち盡して居ると小林が今朝の浪速新報を持つて來た。其れには殆ど呆れる許りの虚構の記事が載つてあつた。先づ眼に着いたのは克巳の寫眞であつた、其れを中心に二段抜きの大活字の標題は「糞汁か？ 煉乳か？」といふのであつた、其れより少しく下に行つて四段活字で「達摩印の詐欺的手段」と「森川克巳の前身」といふ二行が並んで居た。克巳は其れを見た許りで暈となつた。記事は更に詳しかつた。森川克巳は色魔で、曾て大阪に居た時數人の情婦があつて、其の中二人を孕まして某富豪の令嬢から手切金を取つて其れで今度の工場を建てたので、現に大阪にも某富豪の細君に醜聲を流つて其の慣用手段に飜弄しつゝある、其の製作品も粗悪極まるもので、最初見本として賣り弘めた當時は精選無比であつたが賣行が善きに從つて品質を惡くし今日では達摩印のために死亡したる病人や赤兒は數へ切れぬ程多い、當局者は何故之を默過して居るか、森川の藥籠中の者となつたのではあるまい。かういふ風に毒筆の有りたけを盡したものであつた。餘りの事に克巳は哄然として笑ひ出した。

「野に毒草がある如く何處の國にも有毒新聞があるものだが、此那に極端な虚構を書くと却つて讀者が信用しまい」

「いや、併し」と小林は考へ深く言つた。「世間といふものは案外淺薄ですからね」

「そんな事は什麼でも可い」

恁う言つてる處へ櫻井と橋本の姿が見えた。

二三

橋本は今朝新聞を見てから憤慨に堪へず浪花新報社へ行つて嚴談をしたが要領を得ぬ處から櫻井を訪ね二人が同道したのであつた。

併し二人は職工のストライキを見、檢查官の來た事を聞いて案外此の迫害の計畫には根強きものがある事を直覺した。

「僕が居たら其の江戸熊といふ奴を叩き殺してやるんだが」と橋本は怒鳴つた。橋本の案に依ると第一に江戸熊を縛り上げて糺した上で教唆人を自狀させ、其れを引連れて新聞社へ行つて一頁大の謝罪文を掲載させ、同時に市內六千の小賣商を請待して大夜會を開くといふのであつた。

櫻井の案は其れと異つて、此の際世間や新聞の事は一切冷やかに看過し、益々業務を擴張し、資金を增加して精良の品を作り、海外の輸出に努めるといふ風に何處までも積極的に行くが可い、櫻井家の全財產を竭しても其れだけの事は都合するといふのであつた。

克巳は二つながら首を掉つた

「此儘で可い」と彼は言つた。「今度の事はほんの小波瀾に過ぎぬ、此の事に就て反抗する事は却つて我々の器が小さ過ぎるを示すものだが、江戸熊の樣なものを使用する樣では迚も駄目だから、先づ僕自身を改造し其れから內部を結束してからでなければならん、若し其れでも不可ければ獨り山へ隱れて世間が覺醒するのを待つ許りだ」

二人は強ひて爭はなかつた。三人が恁う語つてる間に飛報が紛々として來た。第一のは職工が明日一同押し寄せて來て工場を燒拂ふとの報であつた。

「痛快ッ」と橋本は叫んだ。「僕は宿つて待つて居よう、而して江戸熊を擒にしよう」

第二は明日大阪府會で粗製食料品取締に就いて府長彈劾の演説をする者があるとの事であつた。

「痛快ッ」と橋本は又叫んだ。「僕も府會へ行つて其の演説者の舌を拔いて來てやらう」

第三は小賣商が同盟して櫻井の本店を襲ひ凡ての買戻しを要求するために、今日必死となつて、達磨印の空罐を買ひ集めて居るものがあるとの報であつた。

「痛快ッ、僕は……」と橋本は言つたが「身體一つでは爾々は廻りきれんわい」と落膽して言つた。

克巳も章も笑ひ出した。

「だが、恁うなつて見ると、此の問題は却々騷々しくなるね」と橋本は初めて氣が付いたものの如く言つて「府會にまで持出さうといふのは餘程我々に對して惡意を持つて居る商賣敵があるに違ひない」

「其れが誰だか解つてるか」と章は橋本に言つた。

「油谷の豚さ」と橋本は言つた。「商賣敵兼戀の敵だよ」

「戀なら此方の方で恨まなければならんのだ」と克巳は笑つた。

「いや、僕は爾でないと思ふ」と章は例の天才的な眼を輝かして「油谷も一部だが其の黒幕になつてるものが別にある」

「誰か」と二人は案外な思ひをして問ひ寄つた。

「僕の叔父だ」と章は明晰と言つて歎息した

「どうしてだ、何故だ」

「精しい事は聞いてくれるな」と章は苦しげに言つた。「今君等に言へる事と言へん事がある、何れ緩くり話すけれども、森川君、橋本君、古い家庭には古い人間や古い道德や、古い習慣や、古い野心や、古い陰謀が丁度日蔭に蛆が生いてる樣にうじよ／＼して居るんだ、僕には自由と

いふものが無いのだよ、だから僕は君等だけでも自由に伸びて貰ひたいと思ふのだ」

恁う言つた章の眼の底に涙があつた。

「だから自由になりたければ貧乏人になれよ」と橋本は言つた。

「貧乏人になれないから苦しいのだ」と章が言ふ。

「厄介な家に生れたもんだ」と橋本が言ふ。「だが、君の叔父を絶交してしまふが可いぢやないか、もう些と若けれや兵隊にやれるんだがね、撲つちまへよ」

章は答へなかつた。克巳は默つて聽いて居たが章の心持が能く了解つた。

一四

翌朝は眩き許りの晴天であつた。山も野も一面に青々として初夏の日光が草にも木にも輝いた。職工は一人も來ない、廣い建物は闃然として古寺の如く靜かである。克巳は獨り工場を一巡して事務室へ歸つた。其處に小林が昨日職工共に破壞された硝子窓の修繕をして居た。

「橋本君から電話が掛りませんか」と克巳は言つた。

「只今來ました、いよ／＼府會に質問が出るさうです、質問者は大島義兵衛ださうです」

克巳は首肯いて「馬鹿な奴等だ」と投げる樣に言つた。

「今朝の浪速新報を御覽になりましたか」

「いや、見ん」

「ひどい事を書いてありますぜ、職工に賃金が拂へぬ事やら不渡手形を出した事やら同盟罷工の事やら腐つた煉乳は當局者に差押へられた事やら」

「解つてる、大抵解つてる」と克巳は言つた、而してぶら／＼室内を歩きながら「可哀さうな奴等だ」と呟いた。

午後から空が曇り出して風が出た。南の方に眞黑な一團の雲が湧いて、其の渦卷の底に微かに雷が鳴つた、遠く／＼の山々は雨が降つて居るらしいが、此方は只暖かい烈風が埃を揚げて荒れ廻るだけであつた。

今まで見えなかつたが遠くの森の中からちらちら人影が動いた。一人二人三人――其れが段々と人數を增して三手に分れ、田の畦路から眞直に此方を指して來る。

「何だらう」と克巳は二階の窓から眺めて言つた。

「職工共です」と小林も其の方を見て言つた。

「社長、彼等は何か陰謀があるらしいですぜ、或は恁うして居るのは危險かも知れません」

「何を爲し得るもんか」と克巳は笑つた。

人數は次第に殖えた。中には、職工でない破落漢の樣な者があつた。百人、二百人、殆ど三百人に近き群集は二團になつて、一つは右手の豚小屋の前に屯し、一つは左手の貯水池の邊に屯した、而して同時に鯨波の聲を擧げた。と軈て江戶熊は跛の姿を現はした。彼は二階の社長室につか／＼と入つて來た、而してぴよこ／＼と丁寧に御辭儀した

「社長樣、御願ひです、どうか昨日の話を決めて戴きたいもんで」

「昨日の話とは？」と克巳は室の眞中に立つて入口の江戶熊を見下す樣に言つた。

「前借の事なんで」

「其れは昨日言つた通りだ、困つて居るものには救濟の法を立ててやらう」

「皆な困つて居ますんで、職工全部が」

「江戶熊君」と克巳は靜かに言つた。「君は僕を脅迫に來たのだね」

「脅迫とは何でえ」と江戶熊は身構へた。

「不當な要求を受付ける事が出來ん」と克巳は斷乎として言つた。

「本當ですか、不可えと言つたね」と江戸熊は念を押して飛ぶが如くに去つた。

と同時に丘に屯して居た一群はわつと鯨波を作つた。其の中の一人は鶏を棒の先に縛りつけてぐる／＼と振つた、鶏は悲鳴を擧げた。と此時他の一人が豚小屋の豚を一度に逐ひ出した。群集は各自に棒を以て豚を叩いた、叩かれた豚は死にもの狂ひに逃廻つた。或ものは脆くも地面に倒れてしまひ、或ものは一旦群集の外へ逃げて又戸惑ひして群集の中へ飛び込んだ。

群集は次第々々に熱狂した、最初はほんの冗談であつたのが豚の狂奔と共に群集の感興が加はり、其れが妙に殺氣を帶びたものとなつた。と一頭の大きな豚は疾風の如く走り出した。其の後に續いて五六頭の仔豚が走る。

「やれ／＼」と人々は叫んだ。

「豪いやつちや／＼」と五六人は豚と共に走つた。群集は段々と事務所の方へ近づいた。

一五

左手の貯水池の邊に屯して居た一團は火を焚いてわい／＼騒いで居たが、薪が盡きたので池の邊の柳の枝を拗つて燻べた枝。は眞白い肌を露はして脆くも幹から離れた、二三本の柳は見る／＼裸にされた。誰やらが工場から石油罐を盗み出して其れに油を注いだ、火はけたゝましい音と共に燃え上つた。燃え上つた處を彼等は又棒切で叩いた

「豪いやつちや／＼」と彼等も叫んだ。此時例の大きな豚が數多の仔を伴れて驅けて來た。

「捕まへろ／＼」と人々は叫んだ、而して八方から豚を圍繞いた。豚は逃路を失つて大地に坐り込み絶望の聲を擧げて唸つた。

「待て／＼」と江戸熊は豚の頭をむづと摑んだ。「誰か鐵線と薪を持つて來い」

豚の背中に薪を積んだ、其れに石油を注いで、火をぱつと點けると、豚は恐怖と熱さに堪へかねて猛然と跳び上つた、一度に度底唸りをしてぐる／＼廻つた、と眞直に火焔を負ふたまゝ事務所の方へ走つた。

「豪いやつちや／＼」と群集は續いた。石や瓦や木片は雨の如く降つた。事務所の窓々は見る見る毀れた。

「何をするか、馬鹿」と小林は窓から怒鳴つた。此時一つの小石が小林の頭の上の硝子を碎いたので小林はひよいと顔を引込めた。

「わあつ」と群集は笑つた。これに勢を得て群集は扉を叩き庇を落し一團は機械場へ闖入し一團は丸太を持つて事務室の壁を毀し始めた。

「金をくれい／＼」

「社長、出て來い」

「豪いやつちや／＼」

恁うなつて來ると群集は昂奮から昂奮を生み破壞の快心から血が湧き立つて、勝ち誇つた鯨波の聲と共に工場も事務室も微塵になれと勢ひ立つ。

克巳は默つて刻一刻に破滅して行く周圍を眺めて居たが軈て決然と立上つて窓際から顔を出した。

「諸君！」と彼は叫んだ。

群集は雪崩を打つて窓の下に集まつた。

「出た／＼、社長の奴が出た」

「やれ／＼」

一しきり漫罵の聲が漲つたが嚴然と靜まるのを待つて立つて居る克巳の態度を見て次第に靜かになつた。一塊の土が克巳の右の肩に當つてぱつと埃を立てて碎けた。克巳は默つて肩の泥を拂つた。而して「諸君！」と再び叫んだ。

「諸君は我が手で我家を毀し、我が力で我が身を破るのである。森川工場は森川克巳のものでない、日本帝國のものである、大阪市民のものである、而して諸君のものである。若し僕が社

長としての資格がないならば僕は此の鍵を諸君の手に渡さう、諸君は此の鍵と共に當會社の財産と事業と一切のものを自由にするが可い。併し若し諸君にして何の成算もなく只徒らに不當の要求をなし暴力を以て僕を脅迫し國家の事業を破壊しようとするなら僕は此の拳銃の彈丸の盡きるまで諸君と戰はねばならん」

怎う言つて克巳は片手に鍵を捧げ片手に拳銃を擧げた。群集は暫時動搖した。

「さあ誰か鍵を受取りに此へ來い」

群集の聲々がひたと止んで、水を打つた如く互に顏を見合した。

「鍵を受取らぬなら此儘引退るか、但しは拳銃の彈丸を受取りたいか」

「やれ〳〵」といふ聲が背後から起つた。「何を愚圖々々してるんだ、やつちまへ〳〵」

江戸熊の獰猛な顏が眞先に現はれた。是に勵まされて群集は一度に戸口に押寄せた。克巳は空に向けて一發二發拳銃を射つた。

一六

二發の拳銃は群集を躊躇さしたが、其れが却つて反抗心を強めた、逃げても射たれるものならば室内に闖入して克巳を擒にしようとは誰しも思つた。窓といふ窓は悉く破壊された、庇はもぎ取られて壁の諸處に大きな穴が穿いた。殺氣立つた叫喚と破壊の音が物凄く起つた。克巳の怒は心頭に燃えた。

「可し、死ぬまで戰はう」

彼は壁に向つて第三發を射つた！　四發！　五發！　彈丸が盡きたので彼は平素愛玩のバットを手に取つた、而して驀然に突貫しようとした。此時小林は慌しく走つて來た。

「社長、駄目です、櫻井さんの店がやられました」

「なに、櫻井の？」

「今使ひが參りまして、店も住居も滅茶々々に壞されたさうです」

「櫻井君に怪我がなかつたか」

「皆さんは無事に逃げられたさうです」

「うゝむ、櫻井の……」

怎う言つた克巳の顏には絶望の色が漂うた。

「小林君、僕は櫻井に申譯がない、此の事業は凡て僕が計畫をしたのだ、僕の不注意からして此の工場のみか櫻井の家まで破壊され、世間の不信用を招き、櫻井の名譽を損ずるに至らしめたとすれば、僕はのめ〳〵生きて居られないのだ、小林君、僕は一歩も此處を立去らんから君は其の旨を傳へてくれ給へ、森田の遺骸が寸々に裂かれたら其れは櫻井に對する責めてもの申譯だと思つてくれ給へ」

「其那事を言つても仕様がありません、責任は死んだとて果たせるものではありません」と小林は泣聲になつて言つた。「社長、早く逃げなさい」

「いや、逃げん、事業の滅亡は僕の滅亡だ」

此時群集の吶喊は潮の如く響いた。

「社長々々」と小林は言つた。

「行け〳〵、僕に構はず早く行き給へ」

言葉が終らぬ中にばち〳〵〳〵と木の燃ゆる音が聞えた、續いてわあつといふ鬨の聲。

「火を付けた」と小林は叫んだ。「僕は戰ひます、僕は死にます、僕は社長のために死にます」

怎う言つて小林は狂氣の如く走り出た。

「小林が來た〳〵」と群衆は叫んだ。

小林は既に昂奮の極に達して居る、彼は殆ど眼にものが見えなかつた、平素從順である彼は驚くべき力を以て群集と格闘した、上衣は裂々になつて額と頬から血が滲み出した、而して口の中から血がだら〳〵と流れた。瞬く間に彼は群集に縛り上げられた。

「豚に乘せろ〳〵」と一人は言つた。

一人は一頭の豚を捕まへて來た。小林の死せる如き身體は其れに結へてつけられた。そこで彼等は豚の尻に一鞭を加へた、小林を乘せた豚は疾風の如く走り去つた。此の血祭に度胸を決めた群集は一度にどつと室内に入つた。彼等の目的は俄然として變更した。

最初彼等は只破壞が目的であつた。硝子や壁の壞れる音は緊張つた好奇心を滿足さしたが、彼等が勝利を意識すると同時に破壞ばかりでは物足りなくなつた、そこで彼等の無智で不德な慾望が起つた。

「金庫は何處だ〳〵」と江戸熊が叫んだ。其れが彼等の目的であつた。

「金庫は社長室だ」と誰かが言ふ。

「社長室々々」といふ聲が一度に和した。

「社長は居るか

居ても構はん」

「抵抗つたら殺してしまへッ」

金庫を開いたら百萬圓でも千萬圓でも入つてあるだらうと彼等は思つた、其れを分配しても千圓や二千圓にはなるだらう、各自の慾望は强盜となつた、斯うなると同盟罷工の意味は全然消え去つた、只我慾の煩悶に驅らるゝ獸類の一團に過ぎない

一七

群集の心理ほど恐ろしいものはない。一人一人に離して見ると良心もあり廉恥もあるのだが、多數が集まつて働く時には——而も其れが惡事に向つて現はるゝ場合には、人々の有つて居る良心は多數のために壓迫されて、遂には豫期しない全然別種の兇惡な狀態に變化して行く事がある。

同盟罷工が强盜に變じた。各自の心は金庫に向つた。どうせ此までやつたからには多少か儲けなくちや損だといふ氣にもなつた。今までの破壞に滿足した者等は更に第二の目的に熱し出した。

「金庫！　金庫！」

「社長室！」

案内を知つた五六の者は逸早くも社長室に驅け付けた。彼等は鬨を作つて扉を押した。扉を開くと大きな棍棒が稻妻の如く閃いた、二三人はばた〳〵と倒れた。

「氣を付けろ〳〵」と頭を抱へて逃げた一人が叫んだ。後から續いた群集は、一度に立停まつた、而して不安さうに扉を見詰めた。

「何を意氣地なしめが、百萬圓が待つて居るんだぞ」と江戸熊が眞先に進んだ。

「わあつ」と群集は再び鬨を作つた。

「やれ〳〵やれい」

江戸熊は半纏を脫いで扉に向つて突進した、肥つた丸太棒の樣な腕が閃くと扉の上半が柳の樣に撓つた。一度！　二度！　三度！　扉は段々に弛み出して鍵の處だけが柱に粘いたまゝ上も下も開扇の樣に煽られた、其の度每に棍棒を有つて入つて來たらば微塵に頭を碎かうと身構へて居る克巳の姿がちらと見えた。

「何を、畜生！」

江戸熊は下の隙間に手を入れて滿身の力を以て捩切らうとした。めり〳〵といふ音と共に鍵の部分を殘して板が剝ぎ取られた。江戸熊は一足すさつて再び次の板をめくり取つた。

「さあ行けー」

わつと群集は扉に迫つた。

「何をなさるんです」

裂帛の樣な女の聲が聞えたかと思ふと群集を押分けて江戸熊の前に立塞がつた女があつた。銘仙の飛白にめりんすの帶を締めて、廂髮は亂れ額に汗が滴つて居るが、青白めた顏色と屹と結んだ唇に決死の覺悟が籠つて居る。其れは睦子であつた。

「手前は何だ、邪魔するない」と江戸熊は怒鳴つた。
睦子は扉を背中に凝と立つた。
「貴方は何です、貴方は人に買はれて森川さんの工場を壞さうとなさるんですか、私は知つて居ます、私は知つて居ます、貴方を煽動した人を私は知つて居ます」
「邪魔をするない」と江戸熊は再び言つた。途端に睦子の身體は手毬の如く刎ね退けられた。
「待つて下さい」と睦子は起き上つて江戸熊の足に縋り付く。縋り付けば刎ね飛ばされる、刎ね飛ばされて又立塞がる。怪力の男と纖弱い女！ 元より敵し得べくもない。
扉一重の中に克巳は此の狀態を見て取つた。彼は突如扉の鍵を開いた。
「皆な入れ」
恁う言つたが何人も入るものがなかつた。
「皆な入れ」と克巳は再び言つた、而して江戸熊の手をむずと攫んだ。
「貴樣の生命は僕が貰つたぞ」
「何を」
江戸熊は身構へた。
此時表の方で消魂しい叫び聲が聞えた。同時にぐわら／＼めり／＼柱や壁の落つる音！ 同時に又風に煽らるゝ火勢の音！ 同時に又廊下から漲り來る黑煙と、白煙！
「隣の室まで／＼」と睦子は叫んだ。
群集は雪崩を打つて逃げ出した。

一八

群集が逃げる間もない程火の手が疾かつた。最初は廊下の壁がぱつと明るくなつたと思つた、と直ぐ其れが火の色に變つた、と又、ごうといふ音と共に黑い煙が流れて來た、煙は瞬く間に底に渦卷いて上に擴がつた、而して恐ろしい勢を以て窓から吹き出した。
「お逃げなさい」と克巳は睦子に言つた。
「いゝえ貴方が逃げない中は」と睦子は言つた。
「僕に構はず、早く／＼／＼」
「いゝえ／＼、逃けません」
「俺を什麽するんだ」と江戸熊は手を抑へられながら唸つた。
「貴樣は死ぬんだ」と克巳は言つた。
「默つて死ね、僕と一緒に死んだら本望だらう」
「俺は死なない、俺は死なない」
江戸熊は手を振り拂つて身構へた。此時眞黑な煙が一度に漲つて來た。何ものか巨大なものが地響を打つて倒れたかと思ふと背後の壁が一度に口が開いて、炎々たる焔がどつと渦卷いたかと思ふとめら／＼と天井を嘗め始めた。
「お逃げなさい」と克巳は必死になつて叫んだ。
「いゝえ、貴方が逃げない中は」
聲を頼りに二人は近付いた。克巳は確と睦子の身體を抱いた。
「僕は逃げられないのです、睦子さん」
猶言はうとしたが煙に呼吸が詰まつて言ふ事が出來なかつた。
「此で死ぬなら私本望ですわ」
睦子は克巳の胸に顏を當てて言つた。其れは克巳に聞えなかつた。此時火の光煙の渦卷の中から以前に聞えた裂帛の樣な聲が聞えた。
「御父さん！ 先生！ 御父さん！ 先生！」
狂ふ如く泣く如く天に向つて救を求むる如き女の聲が段々に近付いて來た。
「あゝ信子さんだ」と睦子は思つた。
「あの方を助けて下さい、あの方を」と睦子は言つた。
「お父さん！ 先生！」
「信子さん！」と睦子は答へた。
聲は霎時絕えた。と信子の聲と異つた聲が急に耳元に起つた。
「森川ツ、森川ツ、おい、森川ツ」

「橋本か」と克巳は言つた。
「うむ、何處だ」
「此處だ」
「何をしてるんだ」
橋本の姿が煙の中に見えた。
「早く逃げろ」
「いや、僕は……」
「馬鹿ッ〳〵馬鹿ッ、多分そんな事だらうと思つて居た、馬鹿ッ」
「克巳さんを助けて下さい」と睦子は叫んだ。
「おう睦子さんか」と橋本は勢よく言つて克巳の身體をぐいと肩に引寄せ「馬鹿ッ、危い處だつた、馬鹿ッ、貴様が逃げなきや俺まで死ななきやならんぞ、馬鹿、睦子さん大丈夫か」
「私は大丈夫よ」
「早く〳〵」
煙の中を三人は手を繋ぎ合つて走つた。三人が外へ出ると社長宅が焼け落ちると殆ど同時であつた。職工共の大半は既に逃げ去つた、殘つた幾分は中途から恐怖に襲はれて村人と共に消防に加はつて居た。三年間苦心に苦心を重ねて漸く出來上つた工場は僅か三時間の中に眞黒な灰となつてしまつた。牛や豚は行方が知れなくなつて鶏は一羽も殘さず暴徒が盗んで行つた。燒場の後に黒く燻ぶつた柱が二三本直立して居た。器械は鈍色に焼けて壁に埋まつて居た。克巳は默つて其等を眺めて居た、而して眼に充滿の涙を湛めた。橋本は何にも言はなかつた。豚小屋の横に信子が寝かされてあつた、其れは橋本が助けたのであつた。手足と顔の横を焼け爛らしたのであつたが、左までの重傷ではなかつた。豚に乗せられた小林は村人に助けられて縄を解かれ、後始末に働いた。
不思議なのは江戸熊である。職工の群にも入らず、途中から姿が見えなくなつたので、信子は其ればかりを氣にして居たが、夕方になつて彼が金庫の戸に右手を掛けたまゝ俯伏になつて焼け死んでるのが發見つた。

家庭

一

「ほう、又學問だつか、豪い勉強やな、學者やよつてな」
襖から顔を出して爲吉は笑つた。
萬龜子は机から離れて傍に寝て居る太郎の顔を、いゝよいと見やりながら良人の方へ向き「いゝえ、雑誌を讀んで居ましたのよ」
「左様か、雑誌は何か利益になる事が書いてあんねやらんな、其れは何ぼや」
「二十錢です」
「二十錢か、ほう高價いもんやな。何やろ、書生はんと女學生の事が書いてあんねやろな」
「いろ〳〵な事がありますわ」と萬龜子は例の事とて逆ひもせずに嫣然した。
「左様か」と爲吉は萬龜子の機嫌の好い顔を見て安心したらしく「昨夜早う歸らう思つたけれども、な、飲み潰れたよつてな……坊々か夜泣せなんだか」
「いゝえ、元氣でしたわ」
「左様か、ほう可愛い顔をして寝てんのやな、ほう可愛いもんや」
散財に行つた翌る日は殊更らに萬龜子の機嫌を取つたり太郎を可愛がつたりするのが癖である。萬龜子には其れが如何にも滑稽に思はれるのであつた。
「其の中にな、坊々を伴れて天王寺へ行かう、動物園に猿が居るよつてな、象の鼻て太いもんやな、何やら言ふものも居る、背中に瘤があるもんや、駱駝たら言ふ、何や〳〵、[illegible]や、私もあの獸になりたいもんや」

「何故ですの？」

「一生涯樂だ〳〵いうてるやないか、はゝゝ」

然う言つて直ぐ顔を引込めた。

萬龜子は侮辱された樣な氣持で再び「婦人の友」を開いて見た。中には姑に苛められて苦勞をした嫁の實驗談だの、思はぬ良人に嫁して遂に良人を感化した人の話だの、淫奔な娘を戒めて自殺しようとした人の事などが澤山に載つてある。何れを見ても我が身につまされる。世の中の凡ての婦人の涙は我が涙と異らない。

「私ばかりの不幸ではない」

然う思ふとしみ〴〵と然ういふ人達が懷かしくなつて、共に〳〵泣いて見たい樣な氣がする。

と又爲三の顔が襖から現はれた。

「お前な、私に一つ唄を教へてくれんか、何でも可いがな」

「どんな唄？」

「何たらいふ唄や、左りとは狹い御了見死んで花身が咲くものかといふのかいな」

「私存じませんわ」

「洋琴で以て唄つて行くやないか」

「門附？」

「あゝ爾や」

「存じませんわ、私」

「左樣か、一藝會をやるよつてな、私これでも半七さんと傳兵衞さん位ならさはりだけ巧いこと言へるぜ、其れぢやおもろくないさかいにな」

然う言つてひよいと顔を引込めて居なくなる。

「あんなにしてまで私の機嫌を取らなくても可ささうなもんだ」と萬龜子は幾分氣の毒に感じた。「男と言ふものは好き放題な事をして居ながら口先で以て女の機嫌が取れるものだと思つて居る。氣が咎めるなら其那事をしなければ可ささうなものだ」

彼女は再び雜誌を取上げようとした時次の室で「はゝゝ」と女共と爲三の笑ふ聲がした。

「素人と商賣人と何方が好きでおまんね」

「兩方や」

「ほゝゝ、箒やな、あんさんは」

二三人を相手に爲三の聲である。

「御客樣なの？」と萬龜子は其處へ來た乳母に訊ねた。

「はい、いつか家へ泊りやはつた藝者はんだす、其れに櫻井のハイカラはんと」

「藝者と菊江さん？」

「はい、厭らしうおまんな、ほんまに」乳母は鼻と唇の間に皺を寄せて言つた。

二

頃日は特に激しい、藝者などしば〳〵出入する、時には公然泊つて歸るものもある、其れは決して構はないが、奉公人の手前世間の思惑、一家の主婦としても餘りに權威がなさ過ぎる樣に思はれる。然う思つて居ると又々爲三の顔が現はれた。

「お前、一寸顔を出して下はれ、豆力に若奴に小久が來てるよつてな、厭か、お前が悋氣深いと思はれるのが私も辛いさかいにな、お顔を拜まして下はれと言ふのや、拜ましてやりな」

然う言つてにやりと笑ひかけ「菊江はんも見えてるぜ、極彩色のこて〳〵塗りでな」

「私は御目に掛りましてもお話が出來ませんから……其れに今乳母の手が塞がつて居ますから後程……」

「一寸拜ませてやると可いがな、美人の標本だて噂や、私に用があつて來るのやなくお前を見たいよつて來るんだがな」

「ではねえ、貴方」と萬龜子は子供を賺す樣に言つて「私着替へて參りますわ」

「サンキュウ」と爲三は妙に活動寫眞の樣な行

値をして「なるべくはあの金紗の茄子紺が可いぜ。色が白いよつて引立つさかいにな」

爲三の去つた後で萬龜子は殆ど笑ひたい樣な泣きたい樣な心持で溜息を吐いた。全然自分は玩具にされて居る樣、夜泊日泊の閨の淋しさよりも、朝に歸つてから見え透いた樣な御世辭の方が心の底から腹立たしい。

萬龜子は直ぐに起たうともせず其儘太郎の顏を眺めて居る中に次第々々に胸の曇が晴れてもいら良人の事も隣室の事も忘れてしまつた。

と暫時すると襖が又開いた。

「久闊ね、隨分御無沙汰をしましたね」

聲に驚いて顏を上げると菊江の大廂髪と黑模樣の袷に紗のコートを着た姿が目に付いた。

「どうなすつて？　御異状がない事？」

「あら、被來い」と萬龜子は笑顏をして座蒲團を勸め「私こそ御無沙汰をして居ますわ」

「まあ大きくなつた事」と菊江は太郎の顏を覗いて「一遍見たいと言つてるわ、どんな子だか、どんなに可愛いだらうつて」

「誰方が？」

「貴方の御姉さんですつてね、あの方は、睛子さんと仰有るのよ」

「えい、姉さんが？」と萬龜子は吃驚して顏を向け「どうして御存知なの？」

「森川さんと一緒に被居るのよ、そら、此頃の騷動の時から」

「あら、姉さんが」

萬龜子は眼を据ゑたきり口が利けなかつた。妙に氣掛い事があつて、姉さんが此の家を出てから二年餘りになる、雨につけ風につけ思はぬ事もないが、儘ならぬ身は搜索も自由に任せぬ、其れが今現に此の大阪に而も森川と共に暮らして居るとは什麼して想像が出來よう。

「貴方が御逢ひなすつて？」

「えい」

「身體は達者な事？」

「えい」

「私の事を何とか言つて居まして？」

「えゝ」

「まあ可かつた、私は本當に心配して居ましたのよ」と萬龜子はほつとした樣に呼吸を吐き、別れた當時の事を想ひ廻らして涙ぐんだ。

「私、是非一遍姉さんに會ひたいんですけれども、姉さんは來てくれないでせうか」

「でもねえ、奧樣」と菊江は言憎さうに「今何處に被居るか解りませんもの」

「おや、何處かへ行つてしまつたのですか」

「何でもね、天下茶屋の方に居るとかいふ話ですけれども、森川さんと一緒なんだから私が訪ねて行くわけにもいきませんもの、といふのは森川さんがあんな工場を作つて騷動を起して燒打されるし、私の店が毀されたり銀行が取付に逢つたりして商賣が休みになり、大變な損を受けたんでせう、其れで森川さんと私の家との仲が何だか變になつて、今では往來しないんですもの」

「まあ、そんなになつたのですか」と萬龜子は胸が潰れて暫時默つた。

三

萬龜子は聞く事毎に驚いた。新聞で燒打の事を知り櫻井商店の取付の話も聞いたが左程までとは思はなかつた。

「其れでは森川さんが隨分困つて被居るでせう」と彼女は漸との事で言つた。

「えい、弟が訪ねて行つても面目ないからつて會はない程ですもの、何でも百姓家の小さな家に入つてるさうですよ、睛子さんに聞いても判然と言はないけれども、是から何か仕事をするには一萬圓も要るので、其の工面が出來なければ首を縊るんだと言つてるさうです、弟

が一萬圓位なら出してやらうと言ふけれども、君からは一文も世話にならない、今までの恩だけでも返しきれないのだからと言つて斷つたさうです」

「あの方の性質としては爾なさるでせう、立派だわね」と萬龜子は思はず言つてしまつてはつと頰を染めた。

「爾！　立派と言へば立派な處があるわ」と菊江は澁々贊成して「貴方の戀人だけあつてね」

「あら、そんな譯ぢやありませんわ」と萬龜子は當惑して「では姉も一緒に貧乏暮らしをして居るんですね」

「爾ですとも、だから私、今貴方に御勸めしたいと思つて來ましたのよ、姉さんを救うてあげるのは貴方の義務ぢやあなくつて？」

「えい、其れは爾ですけれども」

「貴方はこれだけの財産がおありでありながら何とか御都合の出來ない事はないわね、私なぞは他人ですけれども種々骨を折りましたのよ、だけども櫻井の世話にはならないと仰有るもんだから仕方がないわ、まあ考へて見ると森川さんと睦子さんを助けるのは貴方より他にないと思ひますわ」

「全く爾です、本當に〳〵本當に爾ですわ」と萬龜子は夢中に言つた。

「ですからね」と菊江は聲を潛めて「森川さんと貴方とは昔の關係から何だか變になつてるので、油谷さんに言へる事と言へない事があるでせう、若し何なら其の祕密な御用は私が承はるわ、どんな事でも……」

「でも私は今……」

「あら、私を疑つて被居るの！　何日ホテルであつた事を未だ根に有つて被居るのね、あの時は私爲さんに賴まれたから仕樣がなかつたんですもの、何でも可いから保證人になつてくれつて……私隨分貴方に濟まないと思ひましたわ、だけれども私もう改心してよ、あの時の埋合せをしますわ、私だつて何方かと言へば油谷さんより森川さんの方が可いと思ひますわ、比べになりやしない、幾らお金儲けが上手でも人間は品性で價値が決まるんですからね、貴方、森川さんの鼻と油谷さんの鼻とを比較して見た事があつて？　私ね、男の價値は鼻で決まるといふ哲學を發見したのよ、希臘の美學者は鼻は顏の象徵だと言つてるのよ、假令ば油谷さんの鼻は平たく、小さくて凜とした威嚴がなく零餘子の芋の樣で……」

「何が芋の樣だんね」と爲三は襖の間からひよいと顏を出した。

「何でもないわよ」と菊江は腹を抱へて笑ひ出し「藝者さんは什麼して？」

「芝居の切符を百枚ほど置いて去んだ」と爲三はのそ〳〵入り、兩手を高く捧げる樣に欠伸をし「あゝ眠！」

「あんまり遊びなさるからよ」

「阿呆らしい、私ほど眞面目た人はありまへんな」

恁う言つて爲三は何か思ひ出した樣に慌てて室を出たが、直ぐに戾つて革の小匣を二つ懷から出した。「これは何や、當てて見や」

「指環でせう」と菊江は言つた。

「あゝ爾や」と爲三はにこ〳〵して手品師の樣な手つきをしながら勿體らしく押戴き箱の蓋を開くと、中から燦いばかりの金光がさつと迸つた。

「まあ美い事」と菊江は驚歎の聲を擧げた。

一つの匣は指環で一つの匣は帶留、一つの匣は耳環であつた。

「あら耳環！」と菊江は再び驚いた。

「それが私の趣向や」と爲三は自慢らしく二人の顏を見廻し「異人さんの中でもハイカラな人は耳環をするのや、日本人では未だ一人も耳環

をしてる女がないによつてな、どうせ錢を遣ふなら人の爲ん事をせにや面白らないさかい、なあお萬龜、お前に穿めて貰はうと思つて註文したんや、翡翠に浮波を彫つて波の水玉を皆なダイヤにした處が趣向や、翡翠に彫ものは名人でも出來ない事だつせ」

「可いわね、立派だわね」と菊江は幾度も言つた。其の眼には羨の色が滿ちて居る。

萬龜子は一寸其れを手に取つたまゝ良人の手に返し直ぐに太郎の顏を睇めた。太郎は今や眼覺めんとしつゝあつた。

四

「まあ可い事、立派だ事」と言ひ續けながら寶石を見て居た菊江は急に起つて暇を告げた。

「もつと遊んで行かはれ」と爲三は言つた。

菊江は答へなかつた。

「どうなすつたんでせう」と萬龜子は心配げに良人の方を見やつた。

「我儘娘や、ほつときさ」と爲三は言つた。

突然爲三の家を出た菊江は極めて不快な心持で路を步いた。

「人を馬鹿にしてるわ、あんな寶石なんか私に見せびらかしてさ」と彼女は肚の中で言つた。

元來人の慾といふものは極めて奇妙なもので人に依つて種々な慾がある、知識慾、名譽慾、競爭慾、其等は上等の部類として、色慾、金の慾、殺傷慾などは下等の部類である、世の中には慾張といふものがある、其の多くは大抵人の有つて居るものを欲しがるのである、知識慾などは他人の有つて居らぬもの卽ち自分だけの知識が渴ゑた時に要求する慾であるが、普通の慾張といふのは他人の財產を羨んだり人の妻に橫戀慕をしたり、通行人の着物が欲しくなつたり、それが昂ぶつて來ると如何なる罪を犯しても目的を達したくなつて來る、斯いふ人は多く怠けものにあり勝な事で、自分の腕を信じ自分の勞働を厭はぬ者は働きさへすれば必ず得られる是等の物質に、左まで深い執着を有たぬのである。婦人が萬引をするといふのも種々な原因があるにせよ、其の中の重なる原因は婦人の凡てが怠けものであるからである、男の力に凭れて生きて居るからである。

菊江は寶石が好きであつた、其れは恰度色情狂者が美人を見ると全身が痲痺する樣に、又骨董好きの人が骨董を見ると眼の光が異樣に輝く樣に生來の寶玉癖である、彼女は寶石ばかりでなく凡て他人の有つて居るものを欲しがる癖があつた。假令同一の品であつても他人が有つてるのを見ると自分のより好く見える、そして同じものを幾つも有つて居ながら又他人のものを羨む。

「私が獨身者だから皆なで馬鹿にするんだわ」

彼女は步きながら又恁う言つた。獨身者である事と寶石とは何の關係もない筈だが菊江は何時の間にか二つのものに關係を結び付けて考へた、そして其れが最も正しい理窟であると思ふ樣になつた。私は獨身者だから誰も寶石を買つてくれない、萬龜子さんには良人があるから寶石を買つて貰へる、萬龜子さんには良人があると同時に寶石がある、私には良人が無いと同時に寶石が無い、そこで萬龜子さんが私を愚弄するのだ。何か一つ氣に入らぬ事があると何も彼も一緒にして其れを同じ理由の下に解釋したがるのは僻みの強い人間の通例である。

非常に侮辱された樣な氣がして菊江は路を步いて居ると背後から聲を掛けた人がある。其れは叔父の大島義兵衞であつた。

「何處へ行くんだ」と義兵衞はにこ／＼して言つた。

「知らないッ」と菊江は肩を搖つて洋傘をくるりと廻した。

「何か怒つてるね」
「知らないッ」
「何を怒つてるんだ」
「知らないッ」
義兵衞は呆れた樣な顏をして菊江の態度をちらちら見やりながら「はゝあ、お前の洋傘に穴が穿いてるね」
「穴が？」と菊江は驚いて洋傘を見上げ「そんな事はないわ」
「そら穴が處々にあるぢやないか」
「これは刺繡で透かしたのよ」
「なる程爾か、だが透かして穴を穿ける位なら洋傘を差す必要がないぢやないか、そらお前の顏に日が射し込むよ、元祿格子の日影が横面に出來るなんてハイカラ過ぎるね」
「可いわ〳〵」と菊江は怒つて避ける樣に叔父の傍を離れた。

五

「何を其那にぷり〳〵してるんだ」と義兵衞は宥める樣に言つた。
菊江は答へなかつた、そして溜息と共に「私本當に詰らないわ」
「何が詰らない」
「欲しいものがあつても買へないんですもの、私こんなに不自由する位なら死んでしまふ方が可いわ」
「道理だ」と義兵衞は直ぐに言つた。「で、お前は何が欲しいんだ」
「私ね、寶石が欲しいのよ」
「わけのない事だ、章に買はせるが可いぢやないか」
「處が却々買つてくれないんですもの」
「そんな馬鹿な事があるもんか、櫻井の財産はお前と章のものだ、章一人が專斷めてお前に不自由な思ひをさして置くといふ法があるもんか」
「私も爾思ふけれども……」
「けれどもぢやない、寶石の十や二十買つたつて裂罅の入る樣な財産でもあるまいし、お前だつて章の一人の姉だ、自由氣儘にさすのが姉に對する義務ぢやないか」
「爾よ〳〵」と菊江は口惜しさうに言つた。
「爾だらう」と義兵衞は次第に昂奮する菊江の顏色を測つて「誰だつて爾いふよ、櫻井の菊江さんが可哀さうだつて、私も章の仕打に就いちや氣に食はない事が澤山あるんだ、第一姉弟の情が無さ過ぎらあな」
「叔父さんも爾思つて？」
「うむ、其れといふのもあの森川といふ奴が從いてるからだ、蝶子さんを見い、欲しいものは何でも買つてやる、學校へ行くに絹物を着せてやる、頃日も八百圓もする洋琴を買つてやつた、蝶子さんに洋琴を買つてやつた時お前に何を買つてくれたか」
「なんにもよ」
「爾だらう、その通りだ、自分の嫁に鼻毛を讀まれて一人の姉を粗末にするといふ事があるもんか。お前が餘り温順し過ぎるよ」
「でも叔父さん、章は戶主ですもの」
「それだから困る、戶主だ〳〵と言つて櫻井の財産を滅茶々々にしてしまふんだ、過日だつて爾だらう、腐つた煉乳に金を注ぎ込んで何十萬圓といふ大金を煙にしたのみか、櫻井銀行は取付に逢ふ、雜貨部の店はめちや〳〵に毀されてしまふ、世間へ顏出しが出來なくなつたぢやないか、それも是も皆な森川のためだ」
「爾よ〳〵」と菊江は勢ひ込んだ。
「先祖代々からの櫻井家を森川の樣な奴に滅されてしまふかと思へば私は口惜しくて夜の眼も眠られないんだ、お前は什麼思ふか」
「私だつて口惜しいわ」

今にあの蝶子が出しやばつてお前に赤兒のお守をさせる樣になるだらう、私はお前やお前の御母さんが氣の毒でならない」

「どうしたら可いでせう、叔父さん」と菊江は呼吸を靜まして「本當に私達は詰らないわ」

「さあ」と義兵衞は思案顏に下を向きながら歩き續け「私はどうしても森川と章の手を切らなきやなるまいと思ふよ」

「すると蝶子さんは」

「離緣するんだね、尤も未だ夫婦にはなつて居ないけれどもね」

「私も然う思ふわ」

「困たもんだ」と義兵衞は眞面目な顏をして「蝶子が森川の所に居る以上はお前は決して寶石の一つも貰へやしない、お前が正當に貰ひ得るお前の財産さへも彼奴らに横領されてるぢやないか、尤も叔父さんも、あの騷動があつてから森川さんは私に一文の助力もして貰はないさうだが

なくつて」と

「それを貰ひ、菊江、森川と章の關係がなくて蝶子がお家になれば同じ事ぢやないか」

「それで解たわね」

「叔父さまはあまり人が好過ぎてよ」

「解つたわ、叔父さま」と菊江は何事か決心したらしい聲で言つた。

六

聖天山の草に照る日がきら／＼と光つて麓の家並の甍に反射する頃になれば畑には菜の花の黄色が既に失せて路普請の石工の鑿も暑さうに家々の二階には簾が欲しさうに思はれて初夏の植込に若葉の風が涼しい。

電車路から東に溝の端を傳つて雲時塚に汚れた樣な長屋の前を行き其れから生垣や門構のある靜かな町に出て更に南へ其れから東へ拔けると、山とも付かず坂とも付かず、谷底とも付かぬ新らしく切開いた樣な崖の中程にごちや／＼とした長屋が五六軒、野良を背後に建つて居る、前は半坪程の庭とは名ばかりの垣根の中で短い竹の四つ目垣に着物が風に煽られて居る入口に蝶子はほつとした顏で時候後れの茶色の洋傘を疊んで立つた、無造作に束ねた崩髮の後れ毛が額に絡むを汗と共に撫でて上げて風呂敷包を持直し格子戸をがらりと繰る

「誰だ」中から嗄聲が聞える、

「私」と蝶子は笑ひたさうに答へた。

克巳は見向きもせずに庭の方を見やつた、庭はほんの三尺許り、直き鼻先に高い土塀が立つて居るので日がかん／＼と照り返す。

「今日は誰方か被來つて？」

「橋本が來た」

「信子さんは？」

「橋本が自炊では困るからと言つて伴れて行つた」

「それでは貴方が御困りでせうね」

「いや、困らない、君が二三日隔に來て二三日分ばかり飯を焚いて行つてくれ給へ」

「そんな事は出來ないわ」と蝶子は風呂敷包を擴げた、中には肴もあり鮭の切身もあり蓮根もあり饅頭もあつた。

「いろんなものを買つて來ましたわ」

克巳は默つて饅頭を頰張つた。

「何か容器を持つて來ませうね」と蝶子は立上りセルの裾を疊に摺つて勝手の方へ行つた、其の後姿を見送つて克巳は下唇を噛んだまゝ首を傾けた

日曜、時に依ると土曜日の夜に蝶子が來る、學校の放課後に來て夜は九時頃まで話して歸る、話と言つても何もない、家中を掃除する位のものであつた、但し克巳は其れに就て嬉しい顏をした事もなければ何を買つて來ても有難うと言つた事もない、時には蝶子に邪慳にされゝ

げされる程腹が立つ事もある、けんもほろゝの挨拶をして追出す樣に睦子を歸してから後で濟まなかつたと悔む事もある。此の家を借りる時も睦子がありたけの貯金を出して敷金を拂つてくれた、現に米や味噌やその日の生計も睦子の僅かばかりの月給から絞り出して居るのだ。然う思ふ時には感謝の念が充滿になるが、扨て一時間も一緒に居ると何とも知れぬ息苦しさを感じて早く／＼逃れたいといふ氣になる。何のためだか自分には解らぬ。

　昨日までは信子が一緒に居たが、橋本が伴れて行つたので今日は睦子と二人限である。克巳は益々沈默になつた。

　小鉢を持つて來た睦子は饅頭を其れへ入れ、芋や鮭を其れ／＼に藏ひ込んで克巳の傍に坐つた時、克巳はごろりと倒れて軒から覗く青天を眺めて居た。

「今日橋本さんから何か好いお話があつて？」

「無い」

「仕事の口は？」

「無い」

「牧場の計畫は？」

「出來ない。橋本も貧乏だからな」

「櫻井さんにお話しなさつて？」

「櫻井からは一文も出して貰へん、あれだけの損をかけて信用を失くさして其の上に櫻井は今禁治産にするとか何とか八方から迫害を受けるてんですからな」

「それでは什麼なさるの？」

「僕にも解らん」

「お金は幾何程？」

「さあ、萬圓でも可し、五千圓でも可し、千圓でも可し。だがそんな話は止さう」

　克巳は仰向に寢返りを打つて兩手を組んで頭の下に當てがつた。

七

　生れて曲つた事をした事があるでなし、世間を欺いた事があるでなし、世のため國のために生命を的に戰ひ續けて漸く社會の信用を得、達磨印が外國までも輸出される樣になつたのを、爲三や義兵衛や江戸熊のために酷くも陷れられて新聞では詐欺師と罵られ、粗製濫造の本元と言はれ、のみならず金主たる親友櫻井の一家にまで罪を及ぼして自分は見る影もなき長屋住居に滿々たる不平を懷いて燻ぼつて居なければならなくなつた。其の絶望の姿を見ると睦子は胸が充滿になるのであつた。其れも此れも爲三の所爲だ、父の遺産を盜んで私を一文無しにしたのも爲三だ、克巳さんを然樣にしたのも爲三だ、其れを默つて見て居る萬龜さんも餘りに薄情過ぎる

「いつそ萬龜さんの許へ談判して多少の遺産を取つて來ようか」と思ふ時もある、とて直ぐ思ひ返して「いや／＼、お金で以て姉妹の仲を惡くしては死んだお母樣の志に背く、其れよりも萬龜さんの罪滅しに私が萬龜さんに代つて什麼御世話でもしてあげなければならない」

　睦子は毎日其れを思ひ此れを思ひ心を千々に碎いて居る。

「何とかしてもう一度克巳さんに成功さしてあげたいものだ」

　然う思ふものゝ先立つものは金である。睦子は、はたと當惑した

「千圓あつたら什麼なさるの？」

「牛を二頭買ふんだ、鷄も買ふんだ、而して段々に殖やして行く、十年の後には今までの樣なものになれる」

「隨分氣の長い話だわね」

「僕は牛の樣な人間です、牛飼が適當です、他人の樣に利巧な事は僕に向かないのです、自分だけ生きて行くなら紙屑拾をしても食へるが、

「社會のために働かうといふには自分の事なんか考へて居られませんからな、牛は人のために重いものを背負つて尻を叩かれて汗を搔いて不平も言はずにのそ〳〵歩いて行く、あれが僕の生涯ですよ」

然う言つて克巳は起直つて腕を拱み、淋しい顔をして睦子の眼を見やつた。睦子は俯向いて我が膝を見詰めたが又懐かしさうに克巳の顔を覗いた。

「[illegible]だ、全く僕は牛だ、尻を叩かれて生涯を送れば本望だ、今では尻を叩いてくれるものもない、櫻井といふ彼女をも失つてしまつた」

睦子の胸は早鐘の樣に轟いた、そして眼には涙が湛まつて來た。

「金が欲しいな」と克巳はつく〴〵言つた。

「私お金をこしらへますわ」と睦子は言つた。

「どうして？」と克巳は愕然として見詰めた。

「どんな事をしても」

「貴方は無理な考を起すんぢやありませんか」

「いゝえ」と睦子は淋しく笑つた。「私に財産がありますのよ」

「どう——して？」

「どう——してもよ」

睦子は凄然とした。克巳は默つて睦子を見返したが軈て屹と膝を正して言つた。

「睦子さん」

「はい」

「若し貴方が僕の事業に金を提供なさる場合には僕は貴方と永遠に別れます」

「何故ですの？」と睦子は克巳の威厳に押へられて慌てて言つた。

「僕は此の上貴方の御世話になりたくはありません」

「何故でございますの？」

「僕は男です、男は弱いものです」

「解りました」と睦子は耳根を染めて「でも貴方は私の兄さんぢやありませんか」と微かに言つた。

寶石

一

荒いぼかし縞のセルに赤いめりんすの帯を締めて蝶子は茫然と外の方を見やつて居た。もう歸るか、もう歸るかと待てども歸りさうにもない、章は今朝から家を出て居る、頃日は親戚會議が頻りに開かれて店の一部を廢めてしまふとか、叔父の義兵衞が事務になるとか、甚しきは章を準禁治產にするとか、種々な噂が傳へられて居る。爾いふ可厭な話を聞くたびに蝶子は穴へ入りたい樣な氣がした。

「貴方の兄さんのために[illegible]になつたのよ」と菊江は箸の上げ下しに其れを言ふ、辛抱してくれと姑のお民が優しく言つてくれるものの時には怺へきれず獨り物置の蔭で泣く時もある、左りとて泣いて許りも居られなかつた。章は爾いふ周圍の迫害を受ける度に猛然として反抗するのであつた、親類の凡てを相手にして戰つてやらう、僕には親類が不必要だ、森川と橋本さへあれば可いのだと露骨に怒鳴る。「倅の言ふ事は道理やけれども、親類の心持を惡うしては損やさかいな」とお民はしみ〴〵と蝶子に言つて聞かせる、漸く女學校を卒業した蝶子も哀れ浮世の渦卷に立つて處女らしい明るい心も次第に暗くなつた。

「御飯も食べんで什麼したんやらな」とお民は奥の室を見やつて獨り裁縫箱を引寄せながら言つた。「お蝶さん、行つて見ておくなはれ」

「はい」とお蝶は氣が付いたものの如く靜かに菊江の室の方へ向つた。昨日から菊江は機嫌が惡い、章に寶石を强請つて拒絶けられてから更

に猛烈に惡い。蝶子は恐る〳〵襖を開けた。菊江は掛蒲團の上から兩手を出して、小說を讀んで居た。

「誰？」と彼女は叫びながら慌てゝ本を捨てゝ頭の針を手當り任せに引拔いた。

「御飯を召上れ、お姉さま」と蝶子は言つた。

「御飯なんか食べられやしないわ、病人ぢやないの」と菊江は窘める樣に言つた。

「御頭痛ですか」

「なんだつて可いぢやないの？　貴方の頭ぢやあるまいし」

「ではお粥にしませうか」

「お粥なんて其那低級なもの食べやしないわ」

恁う言つて「今幾時？」

「もう十一時ですわ」

いゝ

「もうといふのは何ですか、時計にもうと書いてあつて？」

蝶子は途方に暮れて暫時躊躇したが、默つて襖の外へ出ると、直ぐ菊江の聲がする。

「水を頂戴」

蝶子は洋盃に水を注いで持つて行つた。

「あら、是はどうしたの？」

「水と仰有つたのぢやないんですか」

「硯の水よ」

「あら、飛んだ間違ひでした」

蝶子は水入に水を入れて再び行つて見ると菊江は蒲團の上に起き上り膝頭を出したまゝ頭を束ねながら「私昨夜、癪に障るから長襦袢で寢たのよ、長襦袢で寢ると自分ながら媚めかしい氣がするのね」

今までぷり〳〵怒つて居たかと思ふとけろりとして太平無事な顏をして居る。

「貴方の結婚式ももう近日だわね」

「えゝ」と蝶子は恥かしさに頰を染めてもぢもぢして居た。

「結婚なんて汚い事は止す方が可いわ、一體良人といふものは卑しいものですからね」

男が卑しい事を口にするよりも女があられもなき事を口走るほど厭なものはない。中にも年長けた女が妙齡の處女の前で卑しい言葉を吐き處女を羞かしがらして喜ぶ癖があり厭なものである。菊江は散々蝶子を厭がらした上で漸く顏を洗ひに立つた

蝶子は虎口を逃れた心持で茶の間へ出ると、其處に章は母と語つて居た。

「それで克巳さんは？」と母が言ふ。

「取りません、當分往來してくれるな、結婚式の時にも僕は缺席すると言ふんです」

「お堅い人やなあ」とお民は歎息して「商賣の事は損もあれば德もあるのやさかいになあ、氣にかけんでも可いのにな」

「止むを得ませんよ、森川も男ですから僕は強ひて恩を賣るまいと決心しました」

恁う言つて章は蝶子の方を見て「これを藏つて置いてくれ、直ぐ出なきやならんから」

なあに、是は」と蝶子は章の抛け出した紙包を見て言つた。

「金だ、五千圓ばかり」と章は言つた。

「何處へ入れて置きますの？」

「直ぐ歸るから私の帳簞笥へでも」

蝶子は紙幣束を持つて章の室へ入つた。

「可哀さうにな」とお民は蝶子を見送つて言つた。「兄さんの事であの子も苦勞してるのやな」

二

用簞笥の中に紙幣束を藏つてから蝶子は暫時章の机の上を形付け始めた。窓の簾を透して正午近い日射が若竹の影諸共に机に動いて二三匹の蠅が微かに羽音を立てて遊んで居る。此頃は種々な事件で章は蝶子としみ〴〵と語り合ふ事もない。結婚の期日が近づいて來る、結婚してしまへばもう少女ではなくなるのだ、嬉しい

樂しいも、其れまでの間である、女學生の時代から人妻に移るほんの瞬間は右と左の一生の岐れ路だ、好きな事も言つて見たい、叱られるとは知りつゝも少しは抑えて困らしても見たい。恁う言つた風な淡い明るい樂みもなく章は毎日外出がちで、蝶子は毎日菊江に口叱言を聞かされる、中にも蝶子の一番恐れたのは章の留守であつた。章の眼の前では菊江も遠慮するものゝ、一旦章の姿が見えなくなると二言目には「克巳さんのために財産が減つた」と言ふのであつた。

「結婚なんか止めて女學校の寄宿舍にでも居たい」

恁う思ふ時も屢次である。

蝶子は今其れや之れやを思うて居ると菊江の聲が聞える。

「蝶子さん、私の白粉を知らない事?」

「いゝえ、存じません」と蝶子は慌てて座敷を出て菊江の室へ行つた。

「知らないたつて貴方より他に白粉を使ふ人はないわ」

「でも存じませんわ」

「御風呂場におました」と女中のお梅が白粉壜を持つて來た。

「それ御覽、氣をお付けよ、本當に」と菊江は片肌脫になつて鏡臺の前に坐り「あら、白粉が減つた事、昨日一ぱいあつたのに」

蝶子は靜かに室を出ると次の小さな室に菊江の寢卷やら襦袢やら腰卷まで脫ぎ捨てたまゝであつた。蝶子は其處に坐つて其れを疊んだ。大阪の婦人は如何に若い婦人でも令嬢でも家に居る時は細帯一本で甚しきは夏になると袖無一枚に腰卷一枚で腿も露はに乳房も露はに暮らして居るが、其の代りに外出の折は何處から何處まで飾り立てる。東京は外に出る時も内に居る時も左までの差異がない、女の身嗜みと言つて、家に居ても膝を崩してさへ母に叱られる、況して自分の寢卷や腰卷を人手に掛けるなどは蝶子には生れて一度も聞いた事も見た事もないのであつた。左りとて其れを始末せぬと菊江に叱られる。蝶子は絲と針とを持つて來て襦袢の綻びを縫うた。と聞くともなしに茶の間で母と客人との話が聞える、客は義兵衞であつた。

「其れでは親類の皆さんも爾決めはつたのだつか」と母の聲は少し氣色ばんで居た。

「左樣々々」と義兵衞は平氣で答へた。「何しろ店はめちや／＼にされる、信用がなくなる、銀行は取付になる、櫻井家あつて以來一度も無い恥を曝したのですからな、此の分で行つたら什麽なるかも知らんといふのは親類一同の心配する處なんです、そこで當分整理の就くまで章に手を引いて貰ひ、私に事務をやつてくれとの事ですが、私も憎まれものになるのは厭ですが、何しろ當家の一大事ですからな」

「章に隱居せい言ひなはるのやな」

「左樣、まあ當分な」

「其れでは章が什麽なりまつしやろな」

軟かに言ふお民の言葉に鋭い刺があつた。

「何を言うても章は主人やさかいにな、章の心持も聞いて見んとな…其れにあの子も思慮あつて仕た事だしやろに、儲かつたかて父損したかて他から八釜しう言うては誰が主人やら解らん樣になりやかまへんか、そこも能く考へておくなはれ」

「御道理です」と義兵衞は煙管をぽんと叩いて首を伸ばし「そこで私の考へる處は他の人とは違ひますので、詰る處、今度の失敗は章の罪と言ふよりも森川の入智惠から出たのですから、一口に言へば森川の罪です、森川さへなければ章は決して馬鹿な事をするんでなかつた…是は親類一同の認むる處です、そこで親類の心持を直すためには蝶子さんとの祝言もまあ止め

にして……」
「何を言ひなはんれん」とお民は屹と言つた。
蝶子は襦袢を疊む手を休めて耳を傾けた

三

お民の嗤んだ聲に對して義兵衛は益々落着いて言つた。
「何を言つても家が大切ですよ」と彼は念を押す様に力を入れて「親類の唯一人だつて章を恨むものはありません、皆な森川の故だと思つて居ます、森川と離れさへすれば今まで通り章に店を任せて置くのです、そこで親類に其の決心を示すには、蝶子と離縁して見せるのが第一・です、親類の中にあの位の娘は幾人もある、何も嫁は蝶子に限つたわけでもありませんからな、つまり家のためです、それでなければ親類から見捨てられます」
「其れでは叔父さん、家のためやさかいに蝶さんを追出してしまへと悠う言ひなはるのやな」
といふお民の聲は顫へた。
「左様」
「親類の機嫌取るためにと言ひなはるのやな」
「左様」
「皆さんに濟まんけれどもな、私が不承知やと言うとくなはれ」
お民は明瞭と言つた。
「其れは什麼いふわけで」と義兵衛は鋭く問ひ返した。
「蝶さんは私の嫁だす、私か好きで嫁にすると言ふに誰方からも差圖を受ける理由かおまへん」
蝶子はほろ〳〵と涙を零した。涙が頰に傳はつて胸に落ち膝に碎けて、疊みかけた襦袢を濡らした。
「それでは、親類があれだけに反對してもですか、櫻井家を滅してもですか」
「まあ好う考へて見ておくなはれ」とお民は急に靜まり返つて言つた。「蝶さんに何ぞ惡い事でもおますか、罪のないものを何で追出しなはる。親の口から言ひ憎いが宅の菊江を見て見なはれ、病氣や脾弱やと言うて我儘に育てた私が惡うおましたけれども、自墮落で僻みが強うて大阪中での我儘娘と評判になつて居ます、あれほど我儘な娘を持つて居ながら、賢うて辛抱強うて溫和しうて優しうて、何一つ缺けた處のない蝶さんを追出したら世間で何と言ひなさる、世間の口は什麼でも可いと諦めるにしても、章の嫁にあの様な立派な嫁が又と二人とありますかいな、蝶さんを貰うて宅が潰れるなら其れも何かの因縁や、章も氣に入り私も氣に入つた嫁やさかいに、其れで家が潰れても大事おまへん、佛様に何ふまでの事もおまへん、私が御斷りします、親類の皆さんにも僻いうておくなはれ、二度と言つておくなはるな、氣持を惡うするだけお互に損やさかいにな」
一語に一語と疊みゆく中に情が迫つてお民の聲が段々に淚に濕ると、次の室の蝶子は有難さに五體を顫はして俯伏したまゝ聲を忍んで泣いた。
「何をしてゐるの？」
突然菊江の聲が腦天に響いた。
「あら、私の福袢を滅茶々々にしてしまつてさ、あら濡れてるわ、居眠をして涎を垂れたのね」
「いゝえ、あの……」と蝶子は慌てゝ起上つた。
「居眠でなくて何なの？ あゝ解つた、立聞をしてるのね、叔父さんの話を聞いてるんでせう」
「はい、あの今此で御召ものを疊んで居ましたら……」
「人の話を立聞くなんて、まあ油斷のならない」と菊江は四邊へ聞えよがしに大きな聲で言つて茶の室へ走り「油斷がならないわ」
「氣を付けなはれや、御客やさかい」とお民は

窄める様に菊江に言つた。
「立聞をしてるのよ」と菊江は叔父に挨拶もせず首筋から下停まで眞白に塗つた頸を動かして言つた。
「他の事を言ふよりもお前は自分の事を考へて見なはれ」とお民は靜かに言つた。
「知らないッ」と菊江は故意と娘らしく肩を搖つて疊を蹴立てて去つた。

四

菊江は再び鏡臺の前に坐つた。塗り立ての白粉の上を水刷毛でざつと拂いて布に濕らせ、其れから頰紅を叩き付けてる中に今の事をすつかり忘れてしみ〲と我が容色に見惚れる。今日は髮も氣持能く結へた、白粉もすつくりと乘つた、額や目尻の小皺も目に立たぬ、口紅をこいてり塗けるのは大阪式で、東京では唇の筋だけにほんの印に塗ける許りである「口紅濃きを我れ恥らひぬ」と彼女は自分で此の大阪式を嘲つて歌を詠んだ事もあるが、扨て濃く塗つて見ると一層と若く見ゆる、にいと笑ふと紅の色に映る齒莖の白さが平素よりも美しい。其れが終つてから彼女は又髱を撫で付けた、髱の細工は彼女の自慢とする處で、彼女が東京で一年を暮らした今月日は髱の研究に費したと言つても可い。彼女は餘り髮の毛が豐かでなかつた、貧弱な髮を豐饒に見せるには入毛といふ重寶なものがあるが其れは頭の上の方で髱だけは什麼する事も出來ない。婦人の頸に最も風致を添へるものは生際と顳顬と髱である、菊江には顳顬の毛が無い、坊主襟と言つて襟元が間く短い、其の上に髱が乏しい。髱の薄い女が強ひて髱を擴げて横に突出すのを見ると恰らに透間だらけの秋の簾の様で見苦しき事限りなく左りとて髱を詰めると頸の形が露はに顴骨が高く見ゆる、そこで菊江は後頭の髱を倹約して髱の方に分配する方法を考へ出した、此の分配は中々骨が折れるので少くとも一時間を要する、漸と其れが出來上ると今一度耳の背後まで拭き取つて立上る、ぼかんと立つて考へると扨て何のために怎麼まで磨き立て塗り立て飾り立てたのか解らない、良人があるでなし戀人があるでなし、怎う空虚を感じた時に彼女は急に淋しくなつた

「蝶子さんは何をしてるだらう、もう少し窘めてやらうかしらん」と考へて見る。
「それも詰らないから歌でも作らうかしらん」とも思つて見る。
「歌に作るに何もこんなにお化粧しなくても可かつたのだ。何處かへ行つて見よう」
彼女は簞笥の中からあれや是れやと種々な着物を出した。
「今頃は本當に厭な時だわ、セルなんて毫も美がないわ」
何れを見ても彼女はセルが厭であつた、そこで瓶覗きの袷を着る事にした、帶は琥珀の浮織にした、紗のコートを着て時候には少し早いが水色の半襟にダイヤの針をちよいと插して又もや鏡の前に立つ、と何となく形が惡い、袷姿はすつきりと細身に輕げに涼しいのが理想的である、彼女はいろ〳〵に身體を動かして見たが氣に入らぬ、と軈て其れは袖が短いのだと解つた、大阪の婦人は什麼いふ理由か袖が短い、蝶子が東京風に袖を長くして居るのを見て菊江は毎も罵倒したが、今氣が付いて見ると、日本の服裝は左右の兩袖に依つて美の均衡が保たれてあると解つた。左りとて急に袖を長くする事も出來ぬ。
「あの吳服屋は本當に馬鹿だよ」
袖の短いのは吳服屋が馬鹿だからである、と彼女は判決を下した、此の判決は何の役にも立たない事だが、併し菊江に取つては之がために頗る氣が納まつた。何か惡い事があつても其れ

を自分の罪にせずに、他人の罪にしてしまへば氣が濟むのは我儘な人の常である。

袖の事は其れで可いとして彼女は次に又何となく不足を感じた。顔も飾り頭も飾り身體も飾つたが、手足に何の飾もない。丸い掌からによき〳〵と五本の指が枝の様に出たきりでは餘りに物足らぬ、そこで彼女は幾個もの小筥を取出して指環を嵌めて見た。眞珠もあれば紅玉もありダイヤもある、併し其れは凡て氣に入らなかつた。彼女は不圖萬龜子の寶石を思ひ出した。腕環！　耳環！　帶留！

菊江は凝と下脣を嚙んで下を向いたが突然足を返して室を出た。四邊を見廻すと人の氣配もない、そこで彼女は靜かに〳〵章の居間に忍び寄つた。

五

用箪笥を開いて紙幣束を袂に入れ元の室へ引返したまでは夢中であつた。彼女は慌てて襖を閉めた、そこで紙幣を袂から出して矢鱈に帶の間に挾み、殘りは手提嚢に詰め込んだ、詰め込むまでには胸が轟き脊骨から寒さが浸み込む様に思はれ、呼吸づかひばかりが荒かつた。が凡てを首尾能く仕遂げた時に彼女はもう一度鏡を見た、そして顔色に異狀がないのに安心して故意と卑俗なオペラの小唄を唄つた、而して「構ふもんか〳〵、私の財産だもの」と肚の中で言つた。私の財産だといふ事は非常に道理ある事だと思つた、而して此の道理のために無斷で弟の金を盜んだ罪が差引される様な氣がした。彼女は此時母と蝶子が話をしてる聲を聞いた。

「どんな風にして行からうか」と彼女は考へた。二人の前を通るに怒つた體をして行かうか但しは機嫌克く「行つて參ります」と言はうか、其れとも知らん顔をしてこそ〳〵と行かうか、それでは何だか後暗く思はれる。恁う思ふ途端に彼女は用箪笥の抽出を元の様に閉めて來たか明け放しにして來たかが解らなくなつた、閉めたのなら可いが明け放しにして置いたのなら今一度行つて閉めなければならぬ、左りとて再び彼の室へ行く勇氣がない。何か捜しものをする積りで行つて見よう。併し一人で行つては若し見付けられると後に嫌疑を受ける事になる。

「蝶子さん」と彼女は呼んだ。

「はい」と蝶子は遠くで答へた。

「私の萬年筆を知らない事？」

「萬年筆？」と蝶子は言ひながら走つて來た。

「存じませんわ」と恐る〳〵言ふ。

「萬一したら章さんの室にあるかも知れないわ、曾日貸してあげた事があるから」

「見て參りませう」と蝶子は室を出た。

菊江も直ぐ從いて行つた、而して彼女は用箪笥の抽出が正しく閉められてあるのをちらと見た時ほつと息を吐いた。

「ありませんわ」と蝶子は又しても難題を持出されるのを恐るゝものの如く言つた。

「可いわ〳〵、私何處かへ忘れて來たのかも知れない」

恁う言つて菊江は機嫌よく其處を去つた、而して去りしなに蝶子が猶も机や硯箱を搔き廻してるのを見た。

「可哀さうに」と彼女は思はず呟いた。

「何處へ行きなさる」と母は大きな眼鏡を掛けて針運ぶ手元から眼を放して言つた。

「今日はお花の日よ」と菊江は言つた、而して草履を穿いて逃げる様に外へ出た時、初めて我が帶の間から紙幣がはみ出して居はせぬかと俯向いて見た。此時彼女は又洋傘を忘れた事に氣が付いたが足を返す事は出來なかつた。

「三越へ行かうか、但しは何處か寶石專門の店へ？」

彼女は曾日爲三が萬龜子に寶玉堂の事を語つた事を思ひ出した。そこで彼女は心齋橋の方へ足を向けた。

寶石に胸を跳らして菊江が五千圓の金を盜んだ丁度其頃に萬龜子は一通の郵書を受取つた。萬龜子は封筒の裏を見ると單に睦子としてある。萬龜子は吃驚して霎時それを見詰めた。三年前に別れたきり行方の知れぬ姉からの手紙！　生死の程さへ疑つて居た只た一人の姉からの手紙！　萬龜子は懷かしさと嬉しさとで顏がほつと赧らんだ。

「まあ、よくまあ手紙をよこして下すつた、ほんとにまあよく……」

同じ事を繰返しながら封を切るのも惜しさうに彼女は恰も猫が鼠を捕へて急に其れを食べもせずに樂んで眺めてる如く凝と嬉しい氣分に身を任して其れから靜かに封を切つた。

六

「萬龜さん、お懷かしう」と先づ冒頭に姉の優しい手蹟が見えた。洋紙にペンの走り書きであるが、毎ものを書くにゝ顏を右の方に斜めにして廂髮の影で手元が暗くなる樣に亂に蔽さるのが癖である、萬龜子は今其の姿が眼に映つた。

「本當に懷かしいわ、姉さん」と彼女は恰ら姉と對座してる樣に口の中で言つた、で讀み續ける。

「お別れしてから三年になるわね、坊やが生れたんですつてね、私一遍抱いて見たいわ、だけれども彼樣いふ事情で私は顏を出せないんですものね、折があつたらしみ／＼と御目に掛るわ、萬龜子さん、御別れの後の事は言ひますまいね、何を言つても世の中は仕方のないものですものね、只私は無事に暮らして居ますから安心して頂戴ね、而も頃日は毎日の樣に克巳さんの御宅へ行つてるのよ、貴方も折り／＼來られる身分なら什麼に幸福だらうと皆さんが話してるわ、それを思ふと貴方が氣の毒だけれども、時節の來るまで氣永く待つて頂戴ね。

萬龜さん、私が今此の手紙書く前にどんなに考へたか知れやしません、でも什麼しても書かなきやならなくなつたから書くのよ、萬龜さん、貴方は今克巳さんが什麼境遇におなりだか知らないでせう、克巳さんは工場を燒かれて世間の信用を失ひ左りとて櫻井さんからは一文の補助を受けないといふ決心から、今は誰も助ける人もなく何方を向いても罵詈と惡口ばかりで其日々々の生計にも御困りなのです、萬龜さん、私は今の世に克巳さんほど正しい人はないと信じますわ、其の正しい人がどうして惡魔に難儀をなさるのでせう、貴方も爾です、私も爾です、克巳さんも橋本さんも爾です、正しくありながら世に虐げられるのは聖書にある約百が一番だと思つて居ましたが、私達は皆な約百なんですわね、この苦みは何時まで續くでせう。

私達は女ですから苦しんだ處で自分だけの事ですが、克巳さんの樣な立派な男が、何の罪もないのに、而も正しさのために陷れられたとしたらどんなに腹立たしくどんなに悲しい事でせう、世の中のためにも克巳さんの樣な人を朽ち果てさせるといふ事はどんなに損害だか知れやしません。

萬龜さん、貴方や私や克巳さんや橋本さんや櫻井さんが集まつて、縱令十年經つても百年經つてもお互に生きてる限りは互に兄妹の樣に助け合はうと約束し

た事がありましたね、庭球のコートに桃が咲いて、雨がさあ〳〵降つた静かな日でしたわね。私は折り〳〵其れを思ひ出すと悲しくなります。私達が其の約束を果すのは何時でせう、櫻井さんも橋本さんも出來るだけの事をして下さいました、然るに貴方と私だけは未だ何にもして居ません？　爾でせう、萬龜子さん。

克巳さんは今新らしい事業を計畫して被居います、其れには今千圓から一萬圓までのお金が要るのです、其のお金を什麼して工面しませう、それがなければ克巳さんを見殺しにする様なものです、私が貴方に手紙を書くのはこのためです、それで大抵御解りでせう。

併し私は貴方の心持を能く知つて居ると共に爲三さんの氣質も知つて居ます、此那事を言ふのは只徒らに貴方を苦める事に當るだらうと思はないではありません、けれども此の急を救ふのは貴方より他に誰がありませう、萬龜子さん、私は御父様からの遺産を渡してくれと言ふのではありません、そんな氣があるなら私は貴方と別れはしないのですものね、私は此の事を貴方の口から爲三さんに御願して貰ひたいのです、睦子が困つて居るから助けて下さいと一言仰有つて貰ひたいのです、克巳さんを助けると言つたら一文だつて出してはくれますまい、どうか睦子に貸していたゞきたいのです。」

七

萬龜子は讀み終つて吻と肩を搖つた、嬉しさが身體の底から燃える様。

「無論です〳〵」と彼女は獨りで言つた。「無論お金は屆けます」

恁う言つてもう一度最初から讀み返した、而して終りの聖天坂下の克巳の住所の處まで讀んだ時、「何讀んでんね」と爲三の聲と息吹とが一度に耳の邊に響いた。萬龜子ははつと手紙を握りしめた。

「艶書だつか、誰ぞ情人から來たんやろ」

「そんな事はありませんわ」と萬龜子は顔を染めて言つた。

「爾や〳〵、情人からだつしやろ、それ見や顔が赤うなつたやないか」

萬龜子は我れながら顔が赫と熱したのを知つて居る、併し其れは秘密を見られた羞恥心からではなかつた、如何にも卑しげな爲三の言葉に對する憤怒からであつた。情人と言ひ好きやんと言ふも花柳界で麻痺した爲三にはいゝ言葉でもなく、其れはほんの洒落位に思つて居るので、爲三は初めは冗戲に言つたものゝ萬龜子が顔を赧らめたのを見ると例の疑がむら〳〵と起つた。

「どれ私にも見せたはれ」

「これは私の親展書ですから」

「何ぞ秘密でもおまつか」

「爾いふわけでもありませんけれども」

「誰や、誰から來たのや」

「姉さんからです」と萬龜子は嫉妬に輝く良人の眼を見やつて言つた。

「睦子はんだつか」

「えゝ」

「睦子はんは行方が知れんやないか、譃を言ひなはんな」

「譃ぢやありません」

「ぢや御出しいな」

萬龜子は凝と考へた。何も彼も言つてしまふのは今ではあるまいか、どうせ一萬圓の金を調達するにしても良人に謀らんでは出來ぬ事だ、

とは言ふものの克巳の資本金とあつては一文の支出も拒むは知れきつた事である、これだけは絶對に祕密にせねばならぬ。恁う思ひ定めた時爲三の手は早くも手紙を摑んだ。

「何をなさるんです」

言ふ間も無く爲三はぐつと萬龜子の手を抑へ片手に手紙を擴げて讀み下した。

「ほう、何やこれは、むづかしうて讀めんわい」

恁う言つた時爲三の顏は段々弛んで來た、確かに睦子の手跡だと解つたので安心したのである

「ほう、豪い達者なもんや、姉はんは學者やさかいな」

にこ／＼して手紙を疊まうとした一刹那彼は突然叫んだ。

「なんや、克巳？　ほう！　なんや、克巳さんを見殺しにする？　おい、／＼／＼、これあ何ぢや」

萬龜子は冷然として默つた。

「おい、何ぢや、これは」と爲三は再び怒鳴つた。

「貴方！」と萬龜子は僅かに良人の方へ向ひ少しく下げて頭を垂れた「姉さんの遺産を返してあげて下さいませんか」

「何を？」

「御父様の遺言状が途中で失くなりましたが、假令失くなりましても遺言は遺言ですから、姉さんのものは姉さんに返さなきやなるまいと思ひます」

「そゝゝそんなものありやへんがな」

「いゝえ／＼、私は確かに見たのですから、多くは申しません、たつた一萬圓だけでもよろしうございますから」

「阿呆かいな、お前は」と爲三は笑つた。

八

元より快く出してはくれまいと萬龜子は覺悟して居るものの爲三の態度の餘りに空々しいのに彼女の血が湧き立つた。

「何と仰有つても是だけは御願しなきやなりません、姉さんは貴方が餘りにお金の事で隱し立てをなさるもんだから、自分が居ては氣拙からうと思つて三年前に家を飛出してしまつたのです、姉さんは自分の幸福よりも貴方と私の幸福を願つたのです、其の志に對しても是だけの事はしてあげなきやなりません、七十萬圓の財産は姉さんのものです、其の中一萬圓位は出してあげても可いぢやありませんか」

「私や知らんぜ」と爲三は苦い顏をして言つた。

「どうしても御存知ないと仰有るなら、どうか私に一萬圓だけ貸して下さい。」

「滅相な、お金は天から降るもんやありやせんぜ」

「でも只今の處では何百萬圓と御ありなんでせう」

「あるはあるかな」と爲三は氣短かさうに言つた。「森川の尻押に金を出すよな阿呆やないわ」

「何と仰有るの？」と萬龜子は顏色を變へた。

「森川の事業の資本金にするんやろ」

「姉さんが何に使はうと其れは姉さんの勝手だと思ひますわ」

「わかつてるがな／＼、手紙にちやんと書いてある、私にはな、森川は嫌ひや、今だから言ふがな、森川の工場をめちや／＼にしたのは私や、お前は昔の情人やさかいに貢いでやりたいけどもな、私は己れの女房が情人に貢いでやる金を、おい其れを出してやるよなお目出度い人物にやようなれんわ」

「私が克巳さんに貢ぐんですつて？」

「爾や！　爾やないか」

「貴方！」と萬龜子は憤怒と輕蔑が腦天に發して言つた「私が姉さんが克巳さんを戀つてるのです、姉さんは克巳さんと夫婦になるのです、良人の難儀を助けて一人前の男にしようと思つ

て姉さんは血の出る様な思ひで此の手紙を書いたのです、其れを察して下さらないのですか、私にはたつた一人の姉さんで、貴方にも義理ある姉です、其れを貴方は見殺しになさるんですか」

「金は他人やさかいな」と爲三は例の如く指の爪を噛み始めた。

「若し御父さんが生きて被居つたら屹度お金は出して下すつたらうと思ひます、お母さんだつたら猶更の事です、一萬圓のお金は姉さんのお嫁入の支度と思召してね」

「私のものは私が勝手にするさかいな、お前が世話せんでも可えわ」

「貴方ばかりのお金ではありません」萬龜子は涙に濡れた眼を擧げて良人の眼を見詰めた。

「誰の金や」

「お父さんからの遺産は？」

「お前は〳〵」と爲三は荒らかに呼吸を吐いて

「お前は離縁しいたいのやな、離縁したければさしてやるわ」

「貴方！」と萬龜子は猶言はうとしたが胸が塞つて言へなかつた、彼女は泣伏した。

爲三はふいと立つて室を出た。

後で萬龜子は散々泣いた。漸く涙を斂めても情ないやら悲しいやらが百千の針の如く胸を刺す

「姉さんには代へられない、克巳さんには代へられない」

彼女は殆ど狂氣の如く室を廻り又坐り又立つた。

「私はどんな事でもしなきやならない」

彼女は箪笥の抽出を開けた、彼女は幾個もの小筥を出した、中には、腕環指環耳環帶留の類が燦たる光を忍んで待つて居た。

九

萬龜子の一心は姉のため戀人のためといふ念で緊張めて居た、彼女は自分のあらゆる所有品を賣り盡しても一萬圓の金を調へようと決心した、衣類や其他を持出すまでもない、時計や寶石類だけでも一萬の價値はある、人目に立たぬ様にと彼女は手提嚢に入れた、而して乳母にも知らさず其儘家を出た。

「後で叱られた處で何でもない、私は私の爲すべき事を爲すんだから」と彼女は自分の勇氣を確かめる様に獨りで言つた。

併し彼女は直ぐ不安の念に襲はれた。

「買つてくれる店があるだらうか、どんな店へ持つて行つたら可いだらうか」

家を出る時には極めて無造作に思つて居た事が、恁うなつて見ると什麼して可いか解らなくなつた、貧乏に育つて來たものの生れてから一度も品物を賣つた事はない、中にも高價な寶石を何と言つて賣りに行かう。

差向き思ひ付いたのは、此の品々を作つた寶玉堂へ相談するのが一番可いといふ事であつた。自分の店で賣つたものだから、相當の割引をしさへすれば買戻してくれるだらう。彼女は懐勘定で品物と代價を計算して見た。

「耳環が二千八百圓、指環三つで六千圓、腕環が千六百圓、帶留が二千五百圓、時計が八百圓」其れだけで遙かに一萬圓を超過して居る、勿論それは爲三が買つて來た時に一々値段を言つて聞かした通りであるが、他の頭のものやらを入れると一萬五千圓は大丈夫だ。彼女は直ぐ其金を持て久し振で姉さんに會ひ、姉さんの喜ぶ顏と――今一つ――克巳の喜ぶ顏を見たいと思つた。

彼女は心齋橋の方へ路を取つた。心齋橋を渡ると兩側は例の目眩しき商店である、何の人も何の人も忙しさうに行く〳〵、どの店も客が充滿

で、家根と家根に張り渡す日覆の下に和かな光線を泳いで行く群集は恰らに走馬燈の如く波を織つて居る。彼女は寶玉堂の前に來た。洋風造りの立派な店で、白煉瓦の柱、一枚硝子の陳列棚、中央の大時計を中心に只燦爛たる金屬と硝子の光がぱつと眼に映つた時、彼女の足は動かなくなつた。

「何だか體裁が惡い」と彼女は呟いた。

と此時店に坐つた番頭らしい男がちらりと此方を見た。彼女は悸然として陳列を覗く風をしながら店の前を通り過ぎた、過ぎてから又店を覗いた。

「どうして入らう」それぱかりに喘つた。通行の人々は彼女をじろじろ睇めて行く、彼女は人を待つてるもの〻様に見せかけて向うの店に居る人を見やつたりした、而して五六軒がほどは徒に歩いた。

彼女は再び足を返した、而して殆ど眼が眩む樣な氣持の中に一歩店に踏込んだ。

「御出でやす」と二三人の聲が一度に起つた。

萬龜子は剛と顔を緊めた。

「あのう……ちよいと見て戴きたいものがあるんですが」

漸と言ひきつて番頭が何も言はぬ中に袋の口を開いて小筥を出した。

「はあ」と番頭は氣の無い返事をして、第一の耳環の小筥を開き「耳環だすな」

耳環と聞いて二三の小僧が顔を突き出して一緒に睇めた。

「波の水珠はダイヤや」と一人の小僧が言ふ。

「トッパアスや」と一人が言ふ。

「これは何店で御求めになりました」と番頭は言つた。

「此方ぢやないか」と萬龜子は不思議さうに言つた。

「手前共では……」と番頭は首を捻つて小筥の裏を見「寶盈堂だすな」

「爾？」

「失禮におますが幾何程で御求めやした。」

「二千八百圓とか申して居ました」

「二千八百圓？」と番頭は喉に塞つた樣な聲で言つて隣の番頭に向ひ「二千八百圓」と言ひながら耳環を見せた。

「左樣か、豪いもんやな」と件の番頭は手に取つて一目睇めて萬龜子の顔を氣の毒さうに覗き又耳環を取つて「寶盈堂て何處や」

「三寺筋を西へ入つた處たつしやろ」

「豪い事をやりまんな」

談話の中に先の番頭は次の筥を開き、指環を取出して「之は宅で願ひましたんや、違ひおまへん」

恁う言つて再び萬龜子をちらりと見やつた。

一〇

數の中に贋もあれば本物もある、店員は代り代りに手に取つて批評した、萬龜子は嬲りものにされてる樣な氣がして恥かしさに顔を擧げる事も出來なかつた。

「御賣りになるのですか」と番頭が小聲で言つた。

「ええ、少々都合がありまして」と萬龜子は微かに言つた。

「左樣か、其れでは……」と番頭は算盤を取つて見比べながら珠を彈いた。

其間御客が入り代り立ち代り出入した、女もあれば男もある。特に萬龜子と同年位の奥樣風の人が良人と共に指環を檢めながら折り折り萬龜子の身裝をちらちら見るのであつた。

「四千圓ばかりで……」と番頭は算盤を膝に突いて言つた。

「四千圓？」と萬龜子は驚いて「みんなですか」

「へい、五品で」

「でも其の耳環だけでも二千八百圓でしたのよ」

「へい、どうも是は一寸工合が惡うおまんな、尤も手前共の品は三割引に致しまして」

番頭は其れから品物の批評をし始めた。寶盈堂といふは贋物專門の店で、廣告が盛んである割合に地方の客を眩惑する事に長けて居る、のみならず恁ういふ貴金屬の製作品は段々に俗惡なのが流行して來た、細工と言つても名匠が一刀毎に意匠を凝らすのは絕無であつて、只金の費つた處を見せよう、透し彫にすべき處もなるべくプラチナを張り、彫り放しにすべき處でもダイヤを彫めるといふ風に贅澤を示すのが目的となつた、恁うなつて來ると美術も工藝もあつたものでない、金の量が多く寶石の數が多いのを最上品として居る、そこで其れが一旦他人の手に移らうといふ場合には技術の價値は全然差引されて地金代のみとなるのである。

其れにしても一萬五千圓餘りの品物が僅かに三分の一にも足らぬとは萬龜子の夢にも思はなかつた處であつた、とはいふものの差迫つた克巳の急を救ふには少しも猶豫して居るべき場合でない、漸く家を出て來たのに今日の機會を逸しては良人の監視が益〻嚴しくなるばかりであらう、此の店の他に他の店に又々恥かしい顏を曝すのも何より辛い事だ。

「其れでも可いわ」と彼女は小娘の樣に言つた。

「現金の方が宜しうおまつしやろな」

「えゝ、どうぞ」

番頭が起つて帳場の方へ行く中に、萬龜子は初めてほツと息を吐いた。

向うの隅で若い嫁さんが若い良人と共に頻りに指環を撿べて居たが軈て紙幣をさら〳〵と數へて番頭に渡した時、指に輝く寶石の光を眺めて嫁さんは良人と顏を見交して嫣然した。

「嬉しいだらうな」と萬龜子は思つた。「二人の顏に愛が滿ちて居る、縱令指環は八圓か十圓のものにしても互の胸深く、輝く愛の光がどんなに輝かしいものだらう」

良人と二人で買ひに來る人と良人の眼を竊んで賣りに來る自分と、全然異つた世界に住んでるものが、此の店に落合つて居るのだ。萬龜子は妙に暗い心持に引込まれた。

段々客が込み合つた。萬龜子は邪魔にならぬ樣にと片隅に寄つて人々を眺めた。買物といふものは實に不思議なものである、自分の欲しいと思ふものを散々に缺點を言ひ立てて而も其れを買つて行く人がある、品の善惡や自分の趣味に依らずに只高價いもの〳〵と買ひたがる人もある、爾かと思ふと、上等のものを一個買ふ代りに安いものを二個も三個も買ふ人がある、一人で決めかねて附添の人の言葉ばかりを賴りにして不平らしく買つてゆく人もある、恁ういふのは流行つて居まつかと二言目には流行を聞いて只流行の標準として買つてゆく人もある、ダイヤを買はうと思つて來たものか、氣が替つて紅玉にして歸る人もある、何れにしても、女は自己の趣味がなく輕薄でも華美なのが好きで、流行ばかりに醉うて居る事が解る。

「私もあんな風だ、私は毫も自分といふものが無い」と萬龜子はつく〴〵思つた。

「お待遠さまで」と番頭は紙幣を數へて萬龜子に渡した。

萬龜子は賣渡書をすら〳〵と書き終り紙幣を受取つて席を起つた。何んとなく背後を見らるる樣な氣がする。彼女は逃げる樣に出て店先でぱつと洋傘を開いた、そしてもう一度店の方を振返つた、と寶石を陳列した棚の前に立つて凝と自分を目送つて居る婦人がある。

「あらッ」と萬龜子は聲を立てようとして直ぐに踏み出した、開いた洋傘が斜めに彼女の顏を隱した。見送つて居たのは菊江である。

「番頭さん」と菊江は萬龜子を相手にした番頭の前に腰を下した。「その品物を私に賣つて下さい、口錢は幾何でも出すわ」

二

「御母樣、御手が空きましたら一寸教へて頂きませうか」

菊江の出た後で蝶子はお民の前で兩手を突いた。

「おう爾や〳〵、どれ、やりませうか」とお民は大きな眼鏡を外して裁縫箱を押しやり「もう皆な縫うて御しまひやはつたか」

「えい、隨分拙いのよ」と蝶子は嫣然した。

「いゝえ、結構だす、今時の若い人はな、何でも皆な仕立屋へやりなはる、富豪になるとな、御婚禮のものは夜具でも蒲團でも呉服屋に仕立てさせる事になつて居ますかな、蒲團は婿はんが一日の勞を休める安樂場やよつてな、嫁はんの手で仕立てておくれやしたら、章もどんなに喜びまへしやろ、縫方に上手でも下手でも貴方の心が籠つたなら、絹綿よりも溫うおまつしやろ、どれ〳〵御手傳しまよか」

お民は蝶子の顏をほく〳〵見やつて立ち上つた。二人は次の室へ入つた。其處に雪と紛ふ綿が伸べてある。傍らに燃ゆる緋羽二重は頃日から婚禮の支度にと蝶子が自ら縫うたものであつた。百萬長者の婚禮の夜具を呉服屋に縫はしもせず蝶子が女學校上りの覺束ない手つきで縫はうと言つた時、章は腹を抱へて笑つた。が、お民は獨り贊成した。

「やつて見なはれ〳〵」と彼女は言つた。

差向になつて二人は綿を入れ出した。片隅を引けば片隅が餘る、眞中を合せれば綿が食み出す。蝶子は困つた。

「結構や〳〵」とお民はにこ〳〵して言ふ。「ほんに好う縫へました」

「あらお母樣、私間違へましたわ」

「いゝえ、間違ひやおまへん、蒲團はな、細工ものやよつてな、綿の入れやう一つでどうもなりまんね」

蝶子の拙い處をお民は寧と直し〳〵勵ます樣に言つた。

「そうれ、それ見なはれ、能うなりましたやろ、貴方のお蔭で章が樂々寢られまんねや」

肩にふはりと眞綿を引掛けて老衰の指先を靜かに運びながら折り〳〵滿足さうに蝶子の顏を見やる、若い時には嘸と思はるゝ高い鼻、切目の長い眼、水々しい額際、皺の集まつた口元は何とも言へぬ尊さが表はれて居る。蝶子も其れを見やつて微笑した。世間の話や小說には姑ほど恐ろしいものはないとしてある、併し蝶子は姑ほど好いものはないと思つて居る。

二人が互に長閑な氣持で綿を入れて居ると軈て章が歸つて來た。

「御歸りなさいまし」

「蝶さん、先刻預けた金を出してくれ、叔父さんが待つて居るから」と章は帽子を脫いで額の汗を帽子で拭きながら言つた。

蝶子は立つて次の室へ行つた。

「それは僕の蒲團ですか」と章は母に言つた。

「爾や〳〵」とお民は自慢らしく蝶子の心掛を吹聽し始めた、處へ、蝶子は茫然と入つて來た。

「貴方！」

「金は？」

「ありませんわ」と蝶子の顏は蒼白である。

「無い？」

「用簞笥に入れて置いたんですけれども」

「思ひ違ひぢやないか」

「いゝえ、確かに」

二人は直ぐに座敷へ行つた。後に殘つたお民は雨手を膝に置いて暫時考へた。

「どうしたんだらう」

「どうしたんでせう」といふ二人の聲が聞える。
お民はやをら身體を起して二人の室へ行つた。
「おましたかえ」
「いゝえ」
章と蝶子は茫然立つたまゝ顏を見合した。お民は默つて再び室を出たが片手を柱に掛け片手で胸を抑へて首低れた。彼女の顏は急に衰へて眼は殆ど皺に隱れた。
「困つた事やなあ」
溜息と共に痩せた肩が動いた。と此時彼女は菊江が今外から歸つて來た姿を見た。
「只今！」と菊江は言つて「洋傘を持たなかつたから隨分暑かつたわ」
お民は靜かに顏を擧げて、二階へ上らうとする菊江を見やつた。
「菊江！」と彼女は靜かに言つた。
「なあに？」
「ちよつと其處へ御出でなはれ」

二

母に呼ばれた菊江は不精々々に足を返した。
「なあに？ 私汗を掻いたから早く着替へたいのよ」
「お前はな、腹を立てちや不可へんぜ、私が訊くのやさかい」
「何なのよ」と菊江はもの／＼しい母の前口上に或はと胸を轟かして言つた。
「今朝ほど章が蝶さんにお金を預けましたんや」
「あら爾？」
「用箪笥に入れるやうにつてな」
「はあん」
「これは蝶さんの間違ひやろとは思ふけれどもな、若しもお前の用箪笥に入つてやしまへんか」
「私の用箪笥に？」 菊江は太い聲を出した。
「いや／＼、腹を立てずとな、お前を疑ふのやないさかい、間違ひは誰にもある事や、章の箪笥に入つてないとすれば何處ぞに入つてある筈やらう、そこでお前の箪笥を一寸見ておくなはらんか」
「そんなもの私知らないわ、私を疑つてるんでせう、私が泥棒したといふんでせう」
「大きな聲を出しなはるなよ、蝶さんも章も何にも言つてやせん、私だけの考や、ほんに私だけやな」とお民ははら／＼して言ふ。
「其れぢや見て御覽なさいよ、私の箪笥を見て御覽なさいよ、若し無かつたら承知しないから」
「怒らんとゝ、なはれ」
「蝶子さんが御都合事を言つたんでせう、可いわ、さあ見て下さい」
菊江は狂人の如く居室へ入つた、續いてがら／＼と箪笥を倒す音がする、次でものゝ壞れる音！
お民は手を額に當てたまゝ其處に立つた。
「さあ見て下さい、私が盜んだか見て下さい、蝶子さん／＼」と菊江は叫んだ。
章も蝶子も此の物音に驚いて菊江の室へ行つた。本箱と言はず机と言はず、箪笥と言はず、疊の上は狼藉と散らかつて床の間の水插が横になつたまゝどく／＼と水を吐いて居る。
「どうしたんです」と章は宥める樣に言つた。
「私が泥棒したか什麼か調べて御覽なさい」
「貴方が泥棒したとは誰も言つて居ません」
「いゝえ／＼、御母さんに聞きました、他の事とは異ひます、私が泥棒を／＼／＼」
菊江は涙聲になつた。
「其れは違ひます、姉さん、五千圓の金が失くなつたからお母さんが若しも貴方か知つて居ないかと訊いたんでせう、貴方が泥棒だなんて誰も言やしません」と章は言つた。
「いゝえ、言ひました、言つた人を私が知つて居ます」と菊江は蝶子を尻目にかけて言つた。

「静かにして下さい、五千圓位の金で家の中をごた〳〵させる様な章でありません」

「それなら何故そんな事を言ふんです、私は私の潔白を立てます、皆な來ておくれ〳〵」と菊江は店の方に走つて叫んだ。

小僧丁稚番頭悉く集まつた。

「此の家に泥棒があるのよ、五千圓を盗つたものがあるのよ、其の疑が私に掛つて居ます、定七、お前が盗んだのかえ」

「私は〳〵」と定吉は鼻の下を矢鱈に擦つて眼をぱちくりさせた。

「それぢや忠七、お前だらう、お前はいつも買物の頭を刎ねるから」

「私ぢやおまへんえ、滅相な」と忠七は人々の背後に顔を隠しながら言つた。

「おや孝七、傳吉、庄吉、お前達の中だらう」

「可い〳〵、皆な店へ行け」と章が一同を叱つた時、義兵衛がのそ〳〵入つて來た。

「どうしたんだ」

「叔父さん」と菊江は義兵衛に縋り付き聲を立てゝ泣いた。

一三

店の者達は互に顔を見合してこそ〳〵と去つた。

「どうしたんだ」と義兵衛は宥める様に菊江の背中に手を掛けた。

「私を泥棒だと言ひます」

「誰が」

「皆なが爾言ひます、叔父さん、私は出戻りだと思つて皆なで馬鹿にするんです」

「誰もそんな事を言やせんのに姉さんが僻んでるのです」と章は言つた。

「まあ可い〳〵」と義兵衛は瞞する様に言つた。

「蝶さん、彼方へ行かう」と章は蝶子を伴れて座敷へ入つた。

蝶子の顔は大理石の如く白かつた、而して両眼に涙を充滿に湛めて居たが、室へ入るや否や疊に両手を突いて言つた。

「どうも相濟みません」

「仕方がないさ、氣に掛けない方が可いよ」と章は優しく言つた。「決して氣に掛けないでくれ、ねえ蝶さん、姉さんが什麼事を言つてもあれは病氣なんだからね……併し蝶さんも詰らない事で苦勞するなあ、日本の家庭は什麼して恁うなんだらうね」

「私は決して姉さんを恨みやしませんわ、私の粗忽からですもの、どんな事がありましても貴方がありますし第一にあんなに優しくして下さるお母様があるんですもの」と蝶子は涙に濡れた眼を向けて言つた。

「それで可い、お母さんが何も彼も知つてる」

恁う言つた時次の室で義兵衛の聲がした。

「章さん〳〵」

章は默つて立つた、而してもう一度「氣に掛けるなよ」と蝶子の肩に手を置いて言つた。

次の室にはお民も來て居た。義兵衛は床の間を背後に坐つて居た、其れと向き合つて母と菊江が居る。

「お呼びでしたか」と章は雙方の間に坐つた。

「うむ、私は此の事件を極めて重大な事だと思ふ」と義兵衛は言つた。つまらない事でも仰々しく言ふのは政治道楽の叔父の癖なので、章は心に留めなかつた。

「何がです」

「五千圓の金が紛失したといふぢやないか」

「爾です」

「其れをお前は何と思ふ」

「今の處では只困つてるだけです、警察へ頼むほどの事でもありますまい」

「なぜ警察に頼まんか」

「五千圓位のものですからな」

「五千圓は金でないといふのか、御先祖代々が汗水を流して貯めたものを何とも思はんのか」
「併し、其れは早計に失します、家の中を能く調べて見た上でなければ警察に頼むのは輕卒です、家名が大事ですからな」
「お前は家名を重んずるか」
「無論です」
「それなら家の中で姉を盜賊呼ばはりするのは家名に關はらないと言ふのか、いや、其れのみならず、金を預かつた者の罪を糺しもせずに姉に濡衣を着せるのは什麼いふ理由か」
「姉に濡衣は着せません、又金を預かつたのは蝶さんですけれども、蝶さんだつて好んで盜まれたのではないですから」
「それでは預かつた責任は？」
「責任ですか、責任は僕にあるのです、僕が預けたのが惡いのです、而も僕の家の中で僕の室で盜まれたのなら僕の責任です」
「お前のものだからお前が辛抱すれば其れで可いといふのだね、併し金を什麼する」
「仕方がありません」
「何故犯人を調べんか」
「犯人は解りません」
「其れで可いのか」
「叔父さん、なぜそんな事を言ふのです、僕の家に住んでるものは、凡て僕の家族です、僕は自分の家族中に盜賊があると思ひたくありません、僕は店の者を疑ひません、姉さんを疑ひません、蝶さんを疑ひません、女中共をも疑ひません、如何となれば僕の持つてる金は凡て家族のものです、若し家族中に僕のものを盜むものがあるとすれば其れは自分で自分のものを盜むのです、仕方のない事です、只盜まれた僕が責任を感ずるだけです」
「其れはお目出たいといふものだ」と義兵衛は屹と言つた。
「なぜです」
「お前は蝶子に鼻毛を讀まれてゐるんだ」
「爾よ〱」と菊江は肩を搖つた。

一四

「蝶子！」といふ聲を聞いて次の室に居た蝶子ははつと顏を擧げた、元より何等かの災難を豫期して居るものの、什麼なる事かと蝶子は胸を轟かした。
義兵衛は直ぐ續ける。
「責任はお前にあると言ふが、お前が蝶子に預けた以上は蝶子が當の責任者だ、店で起つた事でなし、庫藏にあつたものが無くなり、而も外から賊が入つた形跡がないとすれば、預かつたものの落度になるのは知れた事ぢやないか、其れを何故蝶子を咎めんで菊江を咎めるのだ」
「僕は何方をも咎めはしません」と章は言つた。「僕は姉を信ずると共に蝶子を信じます」
「何故蝶子を信ずるか」
「信ずる事に理由がありません」
「それだからお目出たいと言ふのだ、私は察するに蝶子は五千圓の金を兄の克巳の許へ送つたのだらうと思ふ」
「何を言ふんです」と章は昂然として言つた。
「いや、其れに違ひない、五千圓の大金を蝶子が使用する筈がない以上は兄の許に送つたに違ひない、元來克巳といふ男は是まで何れだけお前に損を掛けたか數へきれないのだ、其の上に妹が櫻井家の恩を顧みずに金を盜むとは以ての外の事だ、金は五千圓にしても家の中に盜賊を養ふのは藏に鼠を飼ふと同じだ、私はお前に能く考へて貰ひたいと思ふ」
「貴方は蝶子を盜賊だと言ふんですか」
「爾だ」
「何の證據があつて言ふのです」
「預けた金を失つたのは第一の證據だ」

「其れだけですか」
「まだ〳〵あるわ、いつでも私のものが失くなるんですもの、克巳さんが困つてるから家から運ぶのよ」
「姉さん、貴方は默つてて下さい」と章は菊江に言つて再び伯父の方を向いた。彼の顏には二筋三筋の青筋が現はれて眼は憤怒に輝き脣は顫へて居た。
「解りました」と彼は自分を抑へる樣に言つた。「僕は僕の周圍に而も僕の家庭に於て苟くも紳士の口にすべからざる樣な事を言ひ合ふのは實に辛いです、人を疑ひ人を罵り互に醜惡な顏をして爭ふ事は貴方方には珍らしくないでせうが、僕には迚も堪へきれない苦痛です、そこで僕は貴方方の判決を訊きませう、僕は什麼すれば可いのです」
「蝶子と離緣するが可いと思ふ」と義兵衞は鹿爪らしく言つた。
「解りました、貴方の結論は其れですね、併し僕が厭だと言つたら什麼します」
「手癖の惡い女を嫁にする事はお前だつて本意であるまい」
「手癖が惡くないと僕が信じたら」
「それは頑冥といふものだ、親戚會議で決めるまでの事だ」
「よろしい、親戚會議の決議に從はなかつたら」
「お前を禁治產にするだけだ」
「禁治產になりませう」と章は言ひ終つて呵々と笑つた。「面白い、禁治產になりませう、櫻井家百萬の富は貴方方には尊いだらうが僕には泥田も同樣です、曰く親類だ、曰く家法だ、曰く叔父だ、曰く血統だ、爾いふ名の下に櫻井章といふ一個の人間が何れだけ窮屈な思ひをしたか知れない。僕は自由になります」
「お前は櫻井家と蝶子とを引替にする積りか」
「無論です」と章は投げる樣に言つた。「僕の祖先は僕に卑劣漢になれと言遺しはしないです、僕に人道を反いても財產を獲れとは敎へないです、罪なき蝶子のために罪多き櫻井家を去るは僕の取るべき道なんです、此の場合僕は櫻井家の凡てのものよりも一人の蝶子を保護します」
「お前は血迷うてる」と義兵衞は笑つた。
章は一段高く笑つた。
「貴方方には解りません、貴方方は人間は祖先のために生れて來たのだと思つて居ますが人間は正しき人であるために生れて來るんです、貴方方には解りません、親戚會議が僕に蝶子を離緣しろといふなら僕には此の首が飛んでも出來ないと御答へする許りです、其れを貴方方は鼻垂らしと言ふでせう、お目出たいと言ふでせう、はツ〳〵〳〵、最も正しき人間は鼻垂らしなんだ、はツ〳〵〳〵、僕はこれで失禮します」
立上らうとするをお民は呼び止めた。
「章、待つておくれ、私にも私の考があるよつてな」
「あゝ爾でした、お母さんの御考を訊くのを忘れて居ました、僕は昂奮したもんですから」と章は再び膝を正した。
お民は兩手を膝に置いて少しく身體を屈めた。
「これは誰が惡いといふ事もおまへん、私が蝶さんと一緒に何處ぞへ隱居しませう」
「蝶さんと一緒に？」
「はい、蝶さんは私の嫁や、叔父さんの氣に入らいでも私の氣に入つてる、お金の事かて誰が盜つたにした處で其れを言うたら家の恥や、佛樣に伺つて見たら佛樣は私が用事あつて一寸借りたと言やはつたさかいに、佛樣の御用なら仕方がおまへんやないか、其れでも御厭なら私が六道錢に借りたと思つておくなはれ、其れもこれも私が行屆かん事やつた、菊江も

娘なら蝶さんも人さんの娘や、我が娘も人さんの娘も親の身になれば同じ事や、どつちが可愛うて何方が憎いといふ事がない、私は蝶さんと一緒に此の家を出て行きませう」

一五

蝶子を出すなら私も一緒にとお民の言ふ言葉を聞いて義兵衞は悸然として眼を睜つた。

「何もお母さんが出て行くに當らないわ」と菊江は言つた。

「爾だ〳〵」と義兵衞も言つた。「嫁は他人だ、而も家のものを盜んで兄の處へ運ぶ樣なものは追出してやるのは當然の事だ」

「解りました」と章は決然と言つた。

「お母さんが出るなら僕も出て行きます」

「何を言ひなはる」とお民は咎める樣に「お前は當家の主人やないか」

「僕は主人が厭になりました、僕は自由になりたいのです、一文二文の小商をしても先祖だの親類だの叔父だのといふ煩いもののない處へ行きたいのです」

「其れでは御先祖に濟まんやないか」

「いや僞ぢやありません」と章は頭を掉つて「僕は先祖よりも母が大事です、妻が大事です、自分が大事です、母と妻の居る處は僕の住む處ですから」

「それでは此の家を捨てようといふのか」と義兵衞は問ひ寄つた。

「捨てざるを得ないのです」

「私が家を出るさかいにお前も出ると言ひなはるのか」とお民は言つた。

「爾です」

「私が出ん事になりましたら？」

「其れでは蝶さんを什麼します」

「おう其れや」とお民は額に手を當てて眼を閉ぢた。

隣室の蝶子は兩袖を口に當て聲を忍んで泣いた。鬼千匹よりも恐ろしいは姑だと世間に言ふが菩薩よりも慈悲深いは我が姑である。

「勿體ない〳〵」と彼女は胸の中で繰返した。「私が可愛いばかりにお母樣も章さんも苦勞して被居る、私がなければ章さんは當家の主人でお母さんとも此儘に平和に暮らして行きなさるのだ、盜賊などと言はれるのは口惜しいが、良人のためお母樣のためには什麼事でも忍ばねばならぬ」

蝶子は凝と考へた。

「私が出て行かう」

矢の如き決心が閃いた。一層だ、私が出て行きさへすれば四方八方圓く納まるんだ」

蝶子の眼に涙がなかつた。彼女は此の場合に於ける最も正しき道は是であるといふ信念と共に何とも知れぬ歡喜が胸に溢れた。彼女は自分の家出に依つて章との縁が是れ限り絶たれてしまふだらうといふ懼れは少しもなかつた、如何なる時にか必ず夫婦になれるだらう、彼女は絶對に章を信じて疑はなかつた、縱令これ限りになるとしても其れは正義のためには止むを得ぬ事である。彼女は朦朧ながらも恁う考へた。

彼女は直ぐに帶を締め直した、人々に覺られぬ樣にと竊と裏口へ出た、一二間は夢の樣。不圖振返ると物干の上に自分が洗濯したお母さんの襦袢が見えた。

「私が綻びを縫つてあげる約束をしたのだつけ」

恁う思ふと同時に涙が止め度なく零れた。

「御免なさいお母樣」と彼女は口の中で言つた、彼女は章の事よりも姑の事ばかりで頭が充滿になつて居た。

三十分の後に彼女は阪堺電車に乘つた、聖天坂で降りた時には既に日が暮れた、優しい兄と親切な學生や萬龜子や睦子や其母などの間に

人となつた彼女は、十九とはいふものの未だほんの小娘心であつた、彼女の胸は可なり複雑に亂れては居るものの、根本は頗る單純であつた。「何しろ自分は一番正しい事をしたのだ」是だけは大人びた考であつた、が次に彼女は恁ういふ事を考へた。「當分兄さんや睦子姉さんと一緒に暮らせるから嬉しいわ、章さんも屹度ちよい〳〵遊びに來るだらうし、此の方が氣樂かも知れないけれども、只お母さんに逢へないだけが悲しいわ」

一六

姉の住所は知る由もないが、手紙に依れば森川さんは聖天山の坂の下で普請中の長屋の端れの家だといふ、森川さんに顔を會はせるのは困るが萬一したら姉さんが來て居るかも知れない。恁う思つた萬龜子は四千圓の紙幣束を帶に挾んで暗い路を辿り歩いた。山の上に五六人の學生が大きな聲で體操の號令を稽古して居た、草吹く風がさわ〳〵と音たてて、夏早く簾を釣つた家が朙らさまに見えるもある、新開地の事とて門燈のある家もあれば眞暗な家もある、紺碧の空は山に被さつて、太白星が特に光つて見ゆる、南の方は白い雲が一つ二つ動いて居た、而して其の間から微かに新月が覺束ない光を拋げて居た。山を少し上つて又細路を横に出るといかにも其處に普請場があつた、普請中の家の隣に小さな庭の前の一軒は其れらしい。萬龜子は戸口から中を覗いた。中は薄ぼんやりとして居る、奥の室の一つの電燈が入口の方に漸と屆くのであつた。

「御免なさい」と彼女は小聲で言つた。答がない。彼女は刷と頭を赧めた。若し克巳さんが出て來たら私は什麽しよう、恁う思ふと三年前の羞かしい處女心が蘇生つて來る。

「御免なさい」と再び言つた。

「誰か」と大きな聲が聞えた。確かに其人である。萬龜子ははつと思ふと同時に思はず逃げ出した。

恁ういふ時に姉さんが來てくれると可いと彼女は轟く胸を強ひて靜めながら思つた。家の中は又寂寞に復つた、併し彼女は再び中に入る勇氣はなかつた、で彼女は裏の方へ廻つた。其處に材木が立てかけてセメントを捏ね返した枠の様なものや切石や砂利などがあつた、其等の木材の間から狹い裏庭が見える、塀がないので庭も座敷も明らさまであつた。と見ると座敷の眞中に七輪を据ゑて鍋を掛け本を讀みながら澁團扇で煽いで居るのは克巳であつた。

「まあ御獨りで御不自由な事だらう」と萬龜子は思つた。と直ぐ女の草履の音が表の方に聞えた。

「睦さんか」と克巳は鳴怒つた。

「私よ、兄さん」といふ聲は蝶子である。

「あら蝶子さんだ」と萬龜子は思はず首を延ばした。粗いセルに羽織も着ず、赤いめりんすの帶を東京風にきちんと締めて、未だ肩揚は下さぬが廂髪は器用に膨らんで居る、もみあげの水々しさ、襟足の長さ、大人と子供の間と言つた様な幼々しさは三年前の面影が其儘に殘つて居る。

「あら厭だわ、兄さん」と蝶子は頓狂に言つて笑ひながら「御座敷へかい、い、かんてきなんか持ち出して」

「かんてきて何だ」

「七輪の事よ」

「爾か、お前は大阪つ子になつたね」

「手傳つてあげませうか」

「もう可いんだ、今豆腐が來るから」

「誰か買ひに行つたの？」

「睦子さんに行つて貰つた」

「酷いわ、兄さん、其れや酷いわ」

「何か酷い

「學校の先生ぢやないの？ 御豆腐を買ひにやるなんて」
「僕が羨みやしないのに當人が行つたのだから仕方がないさ」
「其れだけは御止しなさいよ、明日から私が行つてあげるから」
「明日から？」と克巳は鍋の蓋を取つて見て「お前は今夜宿るつもりか」
「えい」
「又喧嘩か、僕は知らないよ、お前と櫻井の小さな喧嘩の仲裁に入るのはもう厭だ」
「あら、爾ぢやないのよ」
「いや、兄さんは聞かん、そんな事、お前達は餘り仲が好過ぎるんだよ、それで以て詰らない事で喧嘩をして一寸した刺戟を樂んでゐるのだ、愛の刺戟か、歸つてくれ」
「爾ぢやないの、兄さん」
「いや、僕は眞平だ、僕に仲裁をさしてから後でお前は恁う言ふ、兄さんが惡いのだ、櫻井も恁う言ふ、克巳さんが惡いのだ、そこで僕は兩方から惡いものにされる、歸つてくれ、おい歸れ」
「兄さん」と蝶子は急に抑へる様に「私もう歸れないのよ」
「歸れない？」と克巳も急に改まつた。

一七

「なぜ歸れないのだ」
「私逃げて來たのよ」
「なぜだ」
「家にごた〳〵があつたのよ」
「菊江さんの事だらう」
「そればかりでないのよ、私今日蒲團の綿を人れたのよ」
「それが什麼した」
「御婚禮の時の蒲團なのよ」
「なあんだ、馬鹿々々しい」と克巳は笑ひかけた。
「まあ聞いて頂戴よ」と蝶子は膝を進めて兄の顏を凝と睇めたが急に涙をぼろ〳〵零して兩袖を顏に當てた。
「どうしたんだ」
「菊江さんがね、私が泥棒したと言ふの、叔父さんも爾いふの、五千圓のお金を私が盗んで兄さんへ貢いだんですつて」
此まで言つて彼はもう歔欷りあげた。
「お前が泥棒したつて？」と克巳は吼える様に言つた。「櫻井が其れを信じたのか、決して爾であるまい、どうだ」
「えい、草さんは私を信じてくれましたわ、だけれども菊江さんも叔父さんも親類の方も……兄さんが貧乏してるからつて……」
「蝶さん、泣いてばかり居ても仕方がない、能く事情を聞かしてくれ」
蝶子は漸と涙を收めて一伍一什を語つた。兄の顏を見ると張り詰めた氣も弛むと共に悲しさ口惜しさが一時に込み上げた。
物蔭に聞いて居た萬龜子は袖口を嚙みしめ嚙みしめ泣いた。
「口惜しいでせう、悲しいでせう、未だ揚も取れぬ年頃で、そんな辛い思ひをして居る貴方の心持は什麼でせう、姑小姑もなし何不自由のない身體でありながら卑しい良人のために泣いて暮らす私の樣なものもあれば、無人を良人に有ち佛の樣な姑を有ちながら小姑や親類のために窘められる貴方の樣な人もある、五千圓のお金には足らないが、四千圓なら此にあります、これを菊江さんの鼻先に叩き付けて御あげなさい」
口の中で恁う言ふものの萬龜子は什麼して此のお金を渡さうか、姉さんが早く來てくれゝば可いと外を見やりつ又家を覗きつ氣を揉んだ。

克巳は默つて鏡子の話を聞いて居たが、態て眼を閉ぢた、而して再びくわつと睜いた時に涙が滿滿に湛つて居た。

「鏡さん、お前は歸らなきやならん」

「どうして？」と鏡子は驚いて兄の顏を見上げた。

克巳は激し來る胸を靜むるものの如くぐつと下脣を噛んだ、と又重い調子で續ける。

「鏡さん、お前は櫻井を愛して居るか」

「えゝ」と鏡子は首背いた。

「爾だらう／＼、愛して居ればこそ夫婦にならうといふのだね、結婚の日取は來月に決まつたんだね」

「えゝ」

「ところがお鏡さん、櫻井はお前を愛して居るか」

「えゝ」

「本當に爾思ふか」

「えゝ、愛して下さいますわ」

「お前を愛し櫻井を愛し結婚の日取まで決まつたのに何故家を捨てゝ來たのだ」

「でも兄さん、私だつて離れたい事はありませんけれども離しなければならなかつたんですもの」

「どうして離しなければならない」

「御母さんも章さんも私のために家を出るといふんですもの、御二人が家を出なすつたら、櫻井の家は叔父さんや菊江さんに取られてしまふし、章さんは一生貧乏して暮らさなければならないぢやないの」

「其れではお前は良人を幸福にするため、良人の家を安穩にするために辛い思ひを堪へて犧牲になつたのだね」

「えゝ」と鏡子は懷かしさうに兄を見詰め、我が心を諒解してくれるのは流石に私の兄さんだと思つた。

「馬鹿ッ」と克巳は大喝した。

鏡子は案外に打たれて默つた。

「お前は馬鹿だ、虛僞だ、虛榮だ、僕はそんな女だとは思はなかつた」

恁う言つて克巳は大きな眼から涙をぼろ／＼零した。

一八

良人のため、櫻井一家のために犧牲となつて悲哀の涙を絞りつゝも兄の許へ歸つたといふ事に就ては鏡子自らも尊き犧牲と思ひ又兄さんも必ず褒めてくれるだらうと豫期して居た、辛い中にも鏡子の唯一の矜持は只これだけであつた、處が案に相違して頭から「馬鹿ッ」と一喝されたので鏡子は何も言ふ事が出來なかつた。克巳も默つて何も言はぬ、二人の沈默は續いた。鍋はふつ／＼煮え立つて湯氣を噴き出した。

「情ない奴だ、馬鹿ッ／＼／＼」と克巳は齒を喰ひしばつて言つた。

「兄さん、私のした事が惡いのですか」と鏡子は漸と言つた。

「無論だ／＼」と克巳は續けた。

物蔭に聞いて居た萬龜子は眼を泣き腫らした。まだ十八や十九で大人も及ばぬ立派な事をしたのに其れを頭から怒鳴りつけるなんて克巳さんも餘り解らなさ過ぎる、鏡子さんが章さんと別れたのは章さんを愛する餘りの犧牲なので、丁度私が姉さんを愛する餘りに私の戀を捨てたのと同じだ、男の心は知らないが女は戀を捨てるほど辛い事は又とあらうか、その辛さも愛する人への心中立てはあるまいか、女の心も知らずに克巳さんも氣が強過ぎる、どんな理窟があつても鏡子さんの優しい心掛に泣かずには居られまい。いつそ此處から飛び出して鏡子さんのために辯護をしてあげようか、いや、姉を介しては姉さんに濟まない。

「無理を言はずと鏡子さんを褒めてあげて下さ

い」と萬龜子は口の中で言つた。

「考へて見い」と克巳は怒りを靜めて而も猶ほ餘る激昂に顫へながら言つた。「お前は其れを犠牲だと言ふ、馬鹿な、犠牲といふのは什麼事か知つてるか、知るまい、自分の信ずる最善の道のために生命を捨てるのが犠牲なのだ、辛い思ひをして、厭々ながら涙を零しながら心の中で悔みながら人に褒められたいと思ひながら痩我慢をするのは犠牲でない、虚僞だ、眞の犠牲は歡喜があるのだ、自信があるのだ、率直に眞實に少しも自己を僞らないのが犠牲だ、お前は眞に櫻井を愛してるなら縱令如何なる迫害があつても櫻井と苦勞を共にし良人を助けて周圍の鐵壁を破るべく努力しなければならないのだ、櫻井が御前に望む處も屹度其れに違ひない、お前が櫻井に盡すのも其れでなければならん、お前は櫻井と別れたくはあるまい、爾だらう、其れを見ろ、別れたくたいのがお前の眞意だ、其れを今夜逃げて來たのは眞意を僞つてるのだ、若し櫻井がお前と夫婦になるために櫻井家を失ひ素寒貧となり乞食に劣る慘めな境遇になつても其れは時勢が惡いのだ、周圍が惡いのだ、櫻井が惡いのでない、お前が惡いのではない、寧ろ苦情の多い親戚の中に百萬長者となつて居るよりも裸一貫で愛するお前と共に夕顏棚の月を見る方が、櫻井の本意とする處だらう、男の心をお前は知らない、男子は意氣に感ずるのだ、橋本が能く吟ずる詩の通りだ、人生意氣に感ず成敗亦何かあらんだ、それが男だ、愛するものと共に不正な社會と戰つて倒れる、それが本當の男だ、櫻井の志だ、愛して居ながら利害のために犠牲になる、財産家にして置きたいために離別するといふのは虚僞だ、小さな道徳に媚びる月並の社會に褒められたい許りの自己本位だ、それをお前達は犠牲だと思つて居る、自分の良心を欺いて何の犠牲があるものか、姑や小姑のために濡衣を着たり、又財産や親戚のために心ならず妻を去らしたりする虚僞の道徳は芝居や小説や古い低級な人間には讃美されるが、僕は取らん、森川克巳は取らん、僕の取るのはそんな世間體や小道徳や、利害の樣な生温いものでない、もつともつと息の詰る樣な突き詰めた、愛と愛とが結び付いて彈丸となつて突き進んで行く眞實な心持だ、お前も僕の妹であり櫻井の妻となるべき女でありながら其れが解らんのは情ない、實に情ない」

恁う言つて克巳は暫く男泣に泣いた。と又泣きながら續ける。

「義に背く男は男でない、愛を僞る女は女でない、兄さんだつて欺された、愛する女に捨てられて此の通りなんだ、女といふものは自分を欺く事は苦痛に思はない、僕は自分の妹だけはそんな〱虚僞の女にはしたくないと思つて居たんだ」

「御免なさい」と蝶子はわい〱と泣伏した。

萬龜子はばたりと大地に倒れた、而して「御免なさい、御免なさい」と肚の中で繰返しながら泣いた。

一九

泣いた萬龜子の頭に稻妻の樣に閃いたものがあつた、其れは何であるかは解らない、只涙の底に薄膜を破らうとする半透明な光であつた。再び起き上つた時、彼女はもう家の中を覗きもしなかつた、姉が來るかと外に氣を配りもしなかつた、只棒の如く立つてぐつたりと柱に摑まつて居る。彼女は四千圓の金の事を忘れた、自分が何のために此處へ來たのかも忘れた、而して茫然と首垂れてる中に何かしらん非常の事件が起る前兆の樣な氣がした、其れは幸か不幸か喜ぶべき事か悲むべき事か解らない、縱令ば大

風が吹いて自分を何處かへ運んで行くだらうといふ様な思ひ、又數多の菩薩が自分を圍繞いて別な明るい國を指さして居る様な思ひ、俄かと思ふと足元の大地が二つに裂けて赤い焔と青い焔が裾に燃えつく様な思ひ、暗い心持がどつさりと錘の様にぶら下りながら輕やかな涼しい風が胸の何處かに隙間をすが／＼しく吹く思ひ。而して此の紛糾がつた渦卷の氣分に身を任せて居る事は今までに知らぬ樂しさであつた。彼女は去らうともせず又此儘に居ようともしなかつた、其の中途半分の氣持でありながら扨て何時まで恁うして居るのか自分で解らなかつた。

家の中では蝶子は笑顔を向けて兄に言つた。

「私歸りますわ」

「うむ、歸れ」

「睦子姉さんによろしくね」

「送つて行かうか」

「可いわ」

「だがね、本當に確乎やつてくれよ、櫻井が可哀さうだから」

「えい」

「お前が歸ると又種々な事を言はれるだらうけれどもな」

「兄さん、私本當に快い氣持になつたわ、私生れ變つた様よ」

「可し／＼、何事があつても自分の道徳を考へずに櫻井を本位にして考へるのだぞ、櫻井だつて何時もお前を本位に考へてるぞ」

「兄さんは能く草さんの心持を知つてるわね」

「男だからだよ、親友は時によりて愛妻よりも親しいのだ」

「仁丹の廣告の様だわね、では左様なら」

「送らなくても可いかい、やつぱり心配だから送つて行かう、待て／＼、鍋を下して行くから」

「だつて留守番が無いぢやないの」

「泥棒が入つても持つて行くものがない」

「でも兄さんと一緒に出ると大きな聲で詩吟をするから厭だわ」

「書生だから構はんよ」

「大阪には書生さんが少いから兄さんの様な人を氣狂だと思ふわ」

今までの低氣壓はがらりと晴れて水入らずの兄と妹が笑ひつ語りつ下駄と草履の音輕やかに表の戸から外へ出た。

萬龜子は裏庭から其の狀態を眺めて居たが、其れはまざ／＼と只夢の如く見えた許りであつた。二人の足音が段々遠くなる、聖天山を吹く風が颯と座敷を吹き返して七輪の火をぱつと煽つた。途端に萬龜子は夢から覺めた。

「あゝ私は……」

彼女は初めて自分が此處に在る事を知つた。で彼女は直ぐ足を返した。と向うの普請場の横から草履の音がする。萬龜子はひたと材木に寄り添うた。足音が次第に近づくとがたりと棒の倒れる音がした。

「おう恐い」

聲を聞くと等しく萬龜子は飛び出した。

「姉さん！」

睦子は悸乎として二三歩退つた。

「姉さん、私よ」

「あら、萬龜ちやん」

「姉さん

萬龜子はひたと姉の胸に額を埋めて泣き出した。

「どうしたの、萬龜ちやん

「姉さん、御免なさい、姉さん、私は悲しい、私は悲しい、私は悲しいわ」

「どうしたの？と睦子は再び訊ねた。

「姉さん／＼／＼」と萬龜子は狂氣の如く睦子の身體を搖り廻して何か言はうとしたが、涙が迫つて言へなかつた。途端に人々の聲が耳近く聞えた。

「何處や〳〵」
「此處だす」
「此處つて何處や、暗くて解らんがな」
爲三は爲三と茫然である。萬龜子は帶の間から紙幣束を取出し、ぎゆうと睦子の手に握らせたが何にも言はずに素早く身を隱した。其れと殆ど同時に二人は睦子を聞いた。
「お家はんだすか」と番頭は言つた。
「お萬龜か」と爲三は近付いた。
「貴方は何です」と睦子は屹と言つた。
「おう、貴方は」と爲三は睦子を月影に透し見た。「貴方はん〳〵貴女は生きて居やはるんか」

微明

一

辛との思ひで萬龜子は家へ歸ると、太郎はすやすやと眠つて居た。丸々と肥つた兩手を相撲人形の様に兩肩の上に突き出し、仰向けに電燈に照らされて居る顏を見て萬龜子は胸充滿になつた。
「坊や、今歸つたよ」
恁う言つた聲を聞いて傍に俯伏になつて尻を丸く立てて居た乳母は吃驚して眼を覺ました。
「お歸りやす」
「坊やは泣かなかつた事？」
「いゝえ、今まで能う遊んで居やはりました」
恁う言つた乳母は赤く太い片腕をにゆつと出し片手に其れを掻きながら、むにや〳〵と口を締めたが軈て思ひ出した様に、
「お家はん、旦那はんが先刻何やら探ねはりましたぜ」
「何を？」
「書簡やら荷やら皆な開けて見やはりましたんね」
「然う」と萬龜子は言つたが、大抵凡ての様子が察せられた。歸つて責折檻に逢はうが、但しは此儘追出されようが其れは覺悟の上である。恁う思つてる處へ爲三は急ぎ足で歸つて來た。
「あゝ歸つてだつか」と彼は萬龜子を見るや否や半ば安心した様な半ば腹立たしい様な聲で言つて鳥打帽を疊の上に捨てた。
「只今歸りましたのよ」と萬龜子は靜かに言つた。
「左様か、ふうん」爲三は恁う言つて室を一廻り廻り「お前はな、須磨の別莊へ行かはれ」
「何故ですの？」
「何故つて其れは聞かいでもいゝやないか、俺の都合や、俺の、都合や」
「行けと仰有るなら參りますわ」と萬龜子は素直に小指輪を押けて坐り直し「何時でございますの？」
「今夜や」
「今夜？」
「厭か」
「いゝえ、參りますけれども坊やが眠つて居ますから」
「坊々は此處へ置いて行くのや」
「置いて？」
「私はな、くどい事は嫌ひやさかいに、[illegible]してくれ、何にも言はずとな、お前に言ふ事があるやらう、ふうん、默つて行かはれ」
「でも貴方」と萬龜子は言ひ續けようとした。
「去ぬのが厭や言ふのか、私の命令に抵抗する氣か」と爲三は怒鳴つた。
「參ります」と萬龜子は涙を怺へて襖に手を突いた。
爲三はふいと室を出た。
言ふべき事が山々あるだらう、此方にも言ふべき事は山々ある、併し其れを言つた處で只家を騷がし奉公人に不安を與へるだけである、萬

萬龜子は恁う思ひ返して家を出た。家を出る時彼女は乳母を呼んで太郎の事を細々と頼んだ。乳母は眼に涙を一ぱいに溜めて萬龜子を見上げたが、軈て恁う言つた。

「早う何方かに決めなはらんと不可へんぜ」

萬龜子には意味が解らなかつた。

其夜は淋しく須磨の波音を聞いて明かした、翌日も亦。——と三日目になると店から忠七が使ひに來た。

「旦那はんが、直ぐ御出でなはれつて言やはります」

萬龜子は忠七と共に大阪へ歸つた。

「どや〳〵、淋しかつたらう、私もな、淋しうて淋しうてな、散財に行つてもお前の事を思ひ出すと逢ひたうなつてな」と爲三はにこ〳〵して例の脂肪ぎつた顔を近付け「偶にや別れるのも情が増して可いもんやて、其れとも何か、須磨にや富豪の別莊が多いよつて好い男でも目付けて些と許り浮氣でもしたんか」

三日前の權幕は何處へか失せてどろりとした眼で萬龜子を見やつた。

二

金の事も言はねば寶石の事も言はぬ、左りとてお茶屋へ散財にも行かぬ、一日一夜萬龜子の側を離れずに機嫌を取つたが、翌日になるとふいと家を飛出して直ぐ歸り、

「おい、お前は須磨へ去ね」

萬龜子は再び須磨へ行つた。と二三日經つと又もや迎へが來る、而して翌日になると又々須磨へ逐出す。

「旦那はんはお家はんを箪笥の抽出か何ぞの樣に思つて居なはる」と乳母は憤慨した、而して別れしなに又「早う何方かに決めなはらんと不可へんぜ」と言つた。

萬龜子には抵抗の力もなければ憤慨の餘裕もなかつた。どうせ一塊の肉を狼の口に任せた身體である、噛まうと呑まうと生血を吸はうと爲三の勝手次第だ、其の中に什麼にかなるだらう、責め拔かれて此儘死んでしまふか、但しは離縁されるか、何方にした處が太郎が無事に育つて姉さんか克巳さんと夫婦になれさへすれば其れで可いのだ。彼女は恁ういふ心持であつた。爲三は根氣能く萬龜子を抽出投にした、萬龜子は根氣能く抽出にされて居た。が只萬龜子に二つの樂と二つの苦みがあつた、爲三の側から離れて獨り須磨に行く事は嬉しい、が其の代りに太郎とも離れねばならぬ、大阪に來て太郎を見る事は嬉しいが、其の代りに爲三の玩具にならねばならぬ。

と更に悲しい事を萬龜子は發見した。須磨から歸る日は、萬龜子は少しも太郎を離さなかつた。一日一ぱい太郎を抱いたり歩かしたり玩具で遊ばしたり抱いて寢たりする、一度目二度目は何の異狀もなかつたが、須磨と大阪の往復が重なるに連れて太郎は段々母に馴染まなくなつた、顔の見えた當座は御土産の魔力に依つて狎れ〳〵しく遊ぶが、三十分と經たぬ中に乳母の許に遁げてゆく、強ひて抱いてやると泣き出す。萬龜子は愕然として驚いた。

「恁うしてる中に此の子は段々私を忘れるだらう」

或日萬龜子は什麼しても昔の愛情を取戻さうと考へた、而して種々な玩具や、壜に入れた五色の菓子や子供を魅する樣な手段を惜まずに自分の許へ引付けた。併し其れは凡て無效であつた、如何なる玩具も直ぐ倦きる、如何なる菓子も食ふだけ食へば後は珍らしくない、凡てのものよりも好きなのは只鼻の低い乳母の顔だけである。

「どうしてもね、どうしても今晩だけは私が抱いて寢るよ」と彼女は乳母に言つた。無理に

乘じて我が床に寢かし付け凝と顏を見て居ると其處ら中食ひ付きたい程可愛い、彼女は幾度も頭を撫でてやり手を吹いてやり、暑からうと思つては煽いでやつた。

「母さんですよ、母さんを御忘れでないよ」

太郎は不圖眼を薄目に開いた、而して凝と萬龜子の顏を見て泣き出した。搖ぶつても唄つても何の甲斐もない。萬龜子は泣きたい樣な氣分になつて乳母を呼んだ、而してふいと室を出た。家の中は寢靜まつて居る、店に寢て居る丁稚共の齒軋や寢言が聞える、天井を走る鼠の音が急に消魂しく起つたかと思ふと軈て壁の裏を降つて消えてしまつた。時計が二時を打つたのは先刻の事であつた。

珍らしく今夜は歸らないと、萬龜子は爾思つて表の方を見ると戶は嚴しく閉されてあつた。彼女は次に裏口の方を見た、と彼女は吃驚した。土藏の横に出る裏口が開いて外の月夜がほんのりと見ゆる。

「泥棒だ」

彼女は恁う思つて身體を低め透す樣にして見詰めると私やかに語る聲が眞近に聞えた。其れはほんの一間位の隔りであつた。

「待て〳〵」と一人が言つた。今一人は燐寸をぱつと摺つた。光は二人の顏を照らした、一人は良人の爲三であつた。燐寸は直ぐに燃え盡きた。と土藏の中から更に一人の男が出て來た。

「これでしまひや」と爲三は言つた。

「一二三四……」と一人は手探りで箱を數へて「十個」と言つた。

此時又燐寸がぱつと燃えた。

萬龜子は一目見て驚いた。箱は阿片である。

三

はつと思ふ間に燐寸は消えた。三人の蹲んだ頭の部分だけが朧に見える。萬龜子は恐ろしさに打たれて霎時動けなかつた、と膝頭と齒の根ががた〳〵顫へ出した。新聞で見る、道修町に阿片成金といふのがあつて、法網を潛つて莫大の利益を占めて居るといふ記事があつたが、其れが自分の良人であるとは夢にも思はなかつた。人の生命を縮める藥！　これがためには支那に大きな戰爭までが起つたと聞く、そんな恐ろしい藥を密輸出して金を儲けねばならぬとは何といふ淺間しい心だらう。恁う思つて萬龜子は身動きもせずに考へ込んだ。二人の男は起つて裏口から消え去つた、後に殘つた爲三は戶締を仕直し其れから提灯に灯を點けて土藏の中へ入つた。萬龜子は悄と我が室へ歸り其儘茫然と坐つて居ると軈て爲三が入つて來た。

「あゝお前未だ寢てゝやへんのか」と彼は驚いた樣に言つて萬龜子の顏をちらと覗いた。

「はい未だ」と萬龜子は冷やかに答へた。

「あゝ〳〵、敵はん、店の者が皆な道樂やよつて土藏の中は無茶や」

自分の辯解の樣な事をくど〳〵と獨りで言つて爲三は欠伸をしながら、

「もう寢んかな」

萬龜子は默つて床に入つた。彼女は終夜眠られぬながら、うと〳〵となつたかと思ふと最早爲三は起きて算盤を彈いて居た。萬龜子は洗面を濟ましてから髮を撫で付け、其れから整然と着替へ終つて爲三の前に坐つた。

「いよう、豪いやつしやな」と爲三は冗談らしく言つて「どうや、今日は三越へ行かうか」

萬龜子は答へなかつた。

「何處ぞ温泉へでも行かうか」

「……」

「寶塚はどうや」

「……」

「どうしたのや」と爲三が言つた時萬龜子は涙をほろ〳〵零した。

「何を泣いてんね」

「貴方、私は御暇をします」と萬龜子は漸と言つた。

「お暇て何や」

「貴方と御別れしたいのです」

「お別れ？」と爲三は算盤を膝から滑らして「什麼したのや、何か事情があるんやろ」

「私は迚も貴方と一緒に暮らす事が出來ませんもの」

「なぜか」

「今更其の理由を御訊ね下さいますな、私は其れを言ひたくありませんから」

爲三は眼をぱちくりして考へたが軈てさつと顏が紅くなつた。

「お前は森川の許へ行く積りやな」

「いゝえ、其那事はありません」

「いや、爾や、其れで私と別れよう言ふんだ、お前が隱したかて私は能う知つてるんや、お前はな、私に隱して指環や寶石を賣つたんやろ」

「はい、賣りました」と萬龜子は臆面もなく言つた。

「なんで賣つた」

「姉さんからの手紙を貴方が御覽になつたから御解りでせう」

「こゝ此奴は仕太い奴やな」と爲三は唇を顫はして怒鳴つた。「私といふ良人があるんに無斷で品物を賣つても可いと思ふか」

「御斷りしても無駄でしたから」

「許さん事を何故したんや」

「姉さんのためだからです、貴方にした處が姉さんの財産七十萬圓といふものを横領なすつたぢやありませんか、四千圓や五千圓は何でもありませんわ」

萬龜子は度胸を決めて恁う言つた。

「こゝゝゝ此奴は」と爲三は又吃つた。

四

二人は默つて顏を見合つた。萬龜子は急に悲しくなつた。

「御免なさい」と彼女は言つた。「私の言ひ過しでした、お別れしようといふに御互に厭な事を言ひ合ふのは心苦しい許りですから、何にも仰有らずに只私にお暇を戴かして下さい」

「出て行くといふのやね」

「はい」

「お前から去ぬると言ふのやね」

「はい」

「私が許さんと言うたら？」

「それでも出て參ります」と萬龜子は決然と言つた。

「それぢや什麼しても去ぬると言ふのやな」

「はい」

「私は許さん、去ぬるなら勝手に去ね」と爲三は怒鳴つた。

「では離縁狀をどうぞ」

「離縁狀、それは書けんわ」

「なぜでございますか」

「私は養子や」

「養子でも當人同士が承知なら……」

「私は書けやせん、去ぬるならお前一人で去ね」と爲三は再び言つた。

「解りました」と萬龜子は冷やかに笑つた。彼女の眼には一滴の涙もなくなつた、而して只輕蔑の念が一ぱいに頭に渦卷いた。「解りました、貴方は私に財産を分けるのが厭なのでございませう、私には財産が一文も要りません」

「一文も要らんと言ふんか」と爲三は吃驚して眼を瞬つたが軈て凝と考へて恁う言つた。「よろしい、離縁しよう」

「許して下さるのですか」

「だが私の言ふ事も聽いて貰はんと困る、離縁はするが表向は夫婦にして貰はう、でないと

世間體が惡いさかいにな」
「世間體！」と萬龜子は繰返した。
「養子が嫁を追出したと言はれると、私が迷惑や、私かてお前と別れるにした處で嫁を貰ふわけにも行きやへん、詰り離縁というてもお前も緣付かれず私も嫁無しで暮らさにやならん事になるのや、尤も私はまあ嫁か無うても御茶屋へ行けば不自由がないが、お前は女やよつて……それとも男妾でも置くならそれも勝手やが」
斯う言つて彼はにやりと笑つて、又續ける。
「そこでお前に須磨の別莊だけを與らう、月々の仕送りもするさかいにまあ樂々暮らすが可いわ、だがもう一つ此に太郎の事やてな、太郎はお前に渡す事はならんぜ」
「なぜですか」と萬龜子は胸を轟かして問ひ返した。
「あれは御祖父さんの財產が付いてるよつてな」
「そのためでございますか」と萬龜子は冷やかに笑つて「貴方は私を表面だけの妻になさるのも坊やを私に下さらないのも世間體と財產のためなんですね」
「まあ〳〵詰る處は其れや」
「でも坊やを育てますには」
「お前が無うても乳母に賴れたさかい」
「貴方は私を須磨へ遠ざけたのは乳母と坊やを狎らすためなのでしたね」
「そんな事は什麼でも可いやないか」
「承知しました」と萬龜子は決然と言つた。
「名義だけの夫婦でもか」
「はい」
「坊やは渡さんぞ」
「はい」
「それでも去ぬるか」
「私はどんな事よりも貴方の傍に居るのが一番厭ですから」

五

斯ういふ諍論をしつゝも萬龜子は直ぐ此那事は馬鹿々々しい事だと思つた、而して肚の底には既に二年前三年前から此の諍論が續けられて居るのだといふ氣がした。爲三は默つて例の通り拇指を舐つて居る、其れは諍論そのものよりも別な算盤上の事でも考へてゐるかの如く見えた。何人に限らず諍論といふものは成るべく刺戟の強い言葉を吐いて相手を厭がらせようとするものであるが、爾いふ感情は既に去つて只冷たい眼と眼が見交される許りであつた。

「どうでもお前の可い樣にしなはれ」と爲三は起つた、丁度其れは離縁もせず子供も與らず半殺の樣な狀態にしてやるが其れでも出て行くなら勝手にしろといふ樣な勝矜つた態度であつた。萬龜子は何も言はなかつた。
爲三は斯う言つたら何とか謝罪るだらうと待期するものの如く室の中を一二度廻り歩いたが軈て「勝手にせい」と言捨てて去つた。
萬龜子は吻と息を吐いた。
「私は自由になつた」
斯ういふ氣持は今までにない輕やかな爽々しいものであつた。丁度自分が三年間望みに望んで居たものが得られたのである、併し彼女は此の輕やかな氣持の中に何とも言へぬ不安な、而して淋しい氣持が含まつて居るのに氣が付いた。其れは良人の惡いのは無論の事だが自分にも惡い處があると思つたのであつた、併し其れは何であるかは解らない、彼女は第一に今良人に向つて言つた亂暴な言葉を思ひ出して顏を赧めた、其れから彼女は四邊を見廻して愈此の家を出るのだと意識した時に、自分は全く孤立の境に立つ賴りない慣れないものだと覺つた。そこで彼女は女中を呼んで自分の手廻のものだけを整理させようと思つたが、どうしても女中を

呼ぶ事が出來なかつた。彼女は家中の者が自分を冷たい眼で見る樣な氣がした、戸口を出る時奉公人達の後姿に見らるゝのが厭だと思つた、何となく肩身が狹い。

今私の境遇に對して誰かが同情してくれさうなもんだと暫時あつて彼女は考へた、其れから次に自分の行爲が果して善い事か惡い事かを判斷して貰ひたいと思つた。誰か賴いふ人が一人あつて自分を護つてくれなければ淋しくて淋しくて仕樣があるまいと自分を危んだ。そこで彼女は机の前に坐つて手紙を書かうとした。

「橋本さん」と彼女は書いた。今天下で自分の心を知つて居るのは橋本より他にない

「到頭私は離縁しました。私はこれからどうして可いのか解りません、私の取るべき道を教へて下さい、

恁う書いて暫時ペンを擱き、再び續けようとしたが突然何も彼も厭になつた。彼女は紙を裂いて捨てた、而して鏡臺の前に坐り直して白粉の壜やレートの罎や香水壜などを揃へてる中に急に又起つて傍境の扉を開けた。

「御父樣、御母さん、私はこれから什麼なるでせう」

恁う口の中で言つてる中に其れも馬鹿々々しくなつた。此時女中のお竹が入つて來た。

「お風呂が湧きました」

「私は入りません」と萬龜子は言つた。そしてお竹が變な顏をして去つた後で「知つてる癖に」と言つて口を歪めた。

凡てが自分を輕蔑してる樣に見える。「もう出て行から〳〵」

恁う思つた時太郎の泣聲が聞えた。萬龜子はびくりとして胸に手を當てた。が同時に彼女は俄然として明るい世界に抛り出された樣な氣がした。此の長い月日の苦しい間に自分を支へてくれたのは太郎であつた。憤恨、自棄、暗黒、苦憫、逃亡、自殺、其等の危い斷崖に立ちながらも踏み滑らなかつたのは太郎あるがためである。これからも爾うであらう、爾うでなければならぬ、太郎を成人させるのは唯一の目的だ。

「あの子を一目見て行から」と彼女は立上つた。

六

萬龜子は障子を開けた。太郎は次の室の縁に仰向けに寢轉んで足をばた〳〵させて居る。

「坊や、什麼したの？」と萬龜子は歩み寄つて扶け起した

「乳母、お室、おんば馬鹿」と太郎は廻らぬ舌で言つた、そして母を見ると更に聲を大きくして泣いた。

「竹の棒で障子を叩かりまんね」と乳母は笑ひながら言つた。

「そんな事をしちや不可せんよ」と萬龜子は頭を撫でてやり「さあお母さんと一緒に御出で」

「何處へ行かはりま」と乳母は淋しさうに萬龜子を見上げて「たうとう決まりましたんやな」

「須磨へ行くのよ」

「坊々は什麼しやはりまんね」

「連れて行く事は出來ないのよ」

「えつ？」と乳母は眼を瞠つて萬龜子の顏を見やつたが涙がほろ〳〵と流れた「ほんまだつか」

「あゝ」

「何といふ殺生な事やらうな」と乳母は獨語つ樣に言つて「坊々を置いて貴方も出て去なれまつか」

「仕方がないのよ」と萬龜子は兩手を顏に當てた。

乳母はしく〳〵泣き出した。

「乳母〳〵〳〵」と太郎は心配さうに乳母の顏を覗き其の乳房に縋つた。

「坊々、お母さんが去にはりますとなあ、坊々、

お顔を見て置きなはれ」
　太郎は母の方を見向きもせずに足をばた〳〵させながら、空な乳房を舐つて居る。
「お前が居るから坊やの事は心配しないけれどもね、よろしく賴むよ」と萬龜子は言つた。
「えい〳〵、其れは大丈夫だす、けれどもな、お家はん、ほんまだつか」
「夜泣をしたら毎もの藥を飮ましてね」
「えい」
「暑い時には外へ出さない樣にね」
「えい」
「汗疹の時には石鹼を使はない樣にね」
「えい」
「折り〳〵は隱れて坊やを見せに來ておくれ」
「えい」
「ではねえ、左樣なら」
「もう去なはりまつか」
「何時まで居ても同じ事だからね。左樣なら、坊や、左樣なら」
　係う言つて萬龜子は太郎を抱き上げた。太郎は足を動かして泣き出した。
「母さんだよ、母さんだよ」と萬龜子は猶も嚴しく抱きしめ「坊や、母さんを能く見てお置き」
　乳母は緣側に突伏して泣いた。
「私も連れておくなはれ」と彼女は言つた。
「其れは出來ないんだよ、乳母」
「出來ない事はおまへん、貴方は坊々の親やおまへんか、連れておくなはれ〳〵」
　此時爲三の聲が聞えた。
「坊々、何處や、玩具買うてやろ、さあ御父さんに背負しや」
　係う言つて爲三は障子から顏を出し冷やかに萬龜子を見やりながら、
「さあ背負しや、玩具を買うてな、金魚を買うてな、御饅頭を買うてな、其れから何や、えつ？何や、何でも好きなものを買うてやろ」
　太郎の身體を引攫むや否や高く抱き上げてさつさと去つてしまつた。
「お家はん」と乳母は萬龜子の膝に額を當てて
「私も去にます〳〵」
「そんな事を言はないで坊やを可愛がつておくれ」と萬龜子は靜かに乳母の背中に手を置いた。
　爲三の聲は段々遠くなる。
「玩具を買うてな、金魚を買うてな、おまんを買うてな」

七

海は輝いて居る。劃然と青い天の裾に白い雲の峰が種々な形をなして、靜かに、崩れては散り、散つては淡く流れて思ひも寄らぬ處に突兀と高い拳骨の樣な形を造る、沖に散らばる白帆は或ものは白雲に紛れて見えずなり又或ものは青天との境界線を快く〳〵辷りゆく、赫と照り付ける日は其等の舟や雲に映い光を添へて、幾つにも分れた潮の筋が硝子の樣に燦々したり又長く〳〵末廣がりに綠を曳いたりした。
「もう一遍入りませうか」
　睦子は純白の海水着に綠の廣い海水帽を被つて、海水着がしつとりと肌に着く腰から下を羞づる樣に膝を重ねて岩に腰を掛けながら萬龜子の顏を見やつた。
「もう少し話してね、今の事を」と萬龜子は嫣然して言つた。
　睦子も又嫣然して何か言はうとしたが、萬龜子の美しい姿が如何にも繪の樣だと思つたので再び嫣然した。薄い桃色の海水着の肱の處に綠色の緣を取つて居る、緣は其の豐かな柔かい肉に喰ひ込むかの樣に思はれる、首筋は側の二重になつた頤の邊から胸まで和かに流れて乳の邊がむつちりと高い。萬龜子は帽子の下から垂れる後れ毛を幾度も〳〵指先で拂つた。拂ふ時に小兒の樣な手付をして其の度毎に眼を

ぱつちり開いて鼻の下をちよい〳〵擦る、其れは幼さい時からの癖で、鼻の下を擦つては母に叱られたものであつた。睦子は今其等を憶ひ出した。

「貴方は若いわね」と彼女は言つた。

「厭よ、姉さん、貴方こそ」

「だつて子供がある様に見えない事よ」

「あら、子供の事なんか言ひつこなしよ」

恁う言つた萬龜子の目は少しく曇つた。

「悪かつた」と睦子は思つた。爲三に別れてから此の須磨の別莊に涙と共に暮らして居る淋しさを慰めるために一同と共に訪ねて來たのである。

「御免なさい」と睦子は言つた。

「あら厭よ、姉さん、氣にかけちや厭よ」と萬龜子は故意と輕躁いで「姉さんだつて隨分若いわ、私姉さんは先よりずつと容色が好くなつたと思ふわ」

「私奢らないよ、萬龜ちやん」と睦子は笑つた。

「あゝ〳〵」と萬龜子はつく〴〵と溜息を吐いて「私本當に早く姉さんと一緒になれば可かつたと思ふわ」

「これから一緒だから可いぢやないの？」

「爾いへば爾だけれども」と萬龜子は又もや後れ毛を拂つて「今の話は什麼？」

「あゝ〳〵橋本さんの話？其れや可笑しいのよ」と睦子は其の事を語る前に先づ腹を抱へて笑ひ出した。

萬龜子も貰ひ笑ひして、

「どうしたの？」

「信子さんを貸してくれ、御飯を焚いて貰つたりなんかしなければならないからと恁う言ふんでせう、だから克巳さんは貸してあげたのよ、するとね、信子さんが行つた日に恁う言ふんですとさ、僕は青年だから自分でも危險だと思ふから君になるべく接近しまいと思ふ、君も僕にものを言ふてくれるな、そこで此に一册の帳面がある、此の帳面をお互帳と命名する、僕が君に賴みたい用事があれば是に書く、君も僕に用があるなら是に書いてくれ給へと恁うなんですとよ、帳面といふのはね、職員錄の古いのなんですつて」

「ほゝゝゝ」と萬龜子も思はず噴飯して「それから什麼して？」

「一番先に書いたのは僕は酒を買つて來るから君はお菜を作つてくれ給へといふのですとさ」

「まあ可笑しな人だわねえ」

「其れからもつと可笑しい事があるのよ、其の晩にね、そろ〳〵寢る時刻になつたでせう、橋本さんには御自分の蒲團だけしきや無いのよ、それに氣が付いて吃驚なすつたのよ、さあ大變だといふので直ぐお互帳を引張り出して、蒲團は一枚しきやない、君は僕の蒲團に寢たまへ、僕は座蒲團に寢るからと書いたのよ、其れでは濟まないと思つて信子さんは、私は座蒲團でよろしうございますと書いたのよ、すると橋本さんは、いや君は蒲團だと書く、いゝえ私は座蒲團ですと信子さんが書く、蒲團といふ字と座蒲團といふ字で十頁ばかり押問答したんですつて」

「夏だから可いけれども冬だつたら困りますわね」と萬龜子も腹を抱へて笑ひ「それから什麼して？」

「雙方根氣が盡きて橋本さんは疊の上に其儘寢てしまつたもんだから信子さんも疊の上に寢たんですつて、溫和しい子だから私の處へ來て其れを訴へるのよ」

「橋本さんも頑固だけれども本當に優しい處がありますからね、それで？」

「其れから結婚の話になるまでの運びが大變なのよ」

恁う言つて睦子は又もや笑ひ出した。

八

太陽の丁度眞下に一團の白い雲があつた。其の銀色の縁が太陽を掠めると近い海面が暗くなり遠い沖の方が益光つて見ゆるが、雲を外れると又赫と二人の背中を投け出した膝から下を照り付ける。

「可笑しいわね〳〵」と萬龜子は聞かぬ先から笑み傾けて姉の脣の開くのを待ち遠しさうに顏を見詰める、其の態度は昔の幼な顏を憶ひ出させるので睦子も嬉しさが充滿になつた。

「一月も續いたでせう、お互帳に種々な事が書かれたのよ、其の中に隨分可笑しなのがあるのよ、僕は電車に乘るから九錢呉れ給へといふのもあれば、僕は嫌ひだが君は女だから芋を煮て食べても可いよといふのもあるのよ、二三日何にも書いてない處があるのよ、其れは默つて二階に引込んで居たんですとさ、するとね、一番お終ひの處は恁うなのよ、君！ 僕のワイフになつてくれないか、厭なら返事を書かんで可いから此の文句を讀み次第森川の處へ歸つてくれ給へ、若し幸にして承諾ならイエスと書いてくれ給へ、いゝ、きまりが惡いから僕は二階に引込んで居ると恁うなのよ」

「まあ」と萬龜子はもう堪らなくなつて涙を流して笑つた。

「それでどうしたの？」

「信子さんは彼いふ内氣な質だから本當に困つたらうと思ふわ、だけれどもね、信子さんは橋本さんを愛して居るのよ、いくら愛してるからつて帳面にイエスと書けないぢやないの？ そこでペンを取上げて溜息を吐いたり顏を赧くしたり四邊を見廻したりして居たのですとさ、一方橋本さんはお互帳に書いたものの扨て信子さんは默つて家を出るだらうか、但しはイエスと書くだらうかと思ふと氣が氣でないのよ、階子段の上に腹這になつて下の方を一生懸命に見て居たんですとさ」

「まあ什麼氣持だつたでせう」と萬龜子は笑を收めて同情の露を眼に宿しながらしみ〴〵と言つた。

「本當にね、橋本さんにして見れや、生涯の運の定め時ですものね」と睦子もしんみりとなつて「信子さんの身になると猶辛いわ、一遍家を出て私か克己さんに相談の上で私達の口から返事をして貰ひたいと思ふけれども家を出れば厭だから出て行つたのだと橋本さんに思はれるでせう、爾かと言つてイエスとは書けない、途方に暮れてペンを持つたまゝ泣いたんですと、偖すると橋本さんはもう待ちきれなくなつて階子段から轉がる樣に降りて「ゲームセット〳〵」と怒鳴つたんですつて」

「野球の樣だわね」と萬龜子は又しても笑ひたくなつた。

「怒鳴つたかと思へば直ぐ家を飛び出して森川さんの處へ驅けて來たのよ、丁度私が居たもんだから僕にワイフが出來たから媒人になつてくれと恁う言ふのよ」

「まあ什麼に嬉しかつたでせう」

「橋本さんは無論ですわね、信子さんも餘程嬉しいと見えて、其れから性質か全然違つてしまつたのよ、内氣で默つて居たのが急に陽氣になつて箸の轉けたのまで笑ふのよ、まあ御覽なさい、あの通りよ」

二人は岸の方を見やつた。大きな波が底唸りしてざら〳〵〳〵と疊み上げてざぶんと寄せると、引きしなに美しい砂地の肌を露はして雪の樣な泡を殘して、次には小さなちよろ〳〵波が冗談の樣に小石や小貝を舐つて去る、後はしつとりと濡れた砂にじり〳〵と日の光が浸み込む、と又大波が寄せて來る。大波と小波の打寄する岸を蝶子と信子は手を組み合つて往きつ戾

りつして居た。

「イッツロングウェーツウテッペラリー、イッツロングウェー、ツーゴー……」

並んだ四つの脚は長く眞直で、ふつくりした胸と乳房、互に絡んだ眞白な腕にも青春の光が漲つて居る。波が引く度に二人は唄ひながら波に從いて海に進み、次の波が返して來ると、わつと聲を擧げて岸へ逃げる、而して又引潮に乘じて進んで行く。

「何といふ美しいんでせう」と睦子は眼を細めて言つた。

「あの人達は幸福だわねえ」と萬龜子も其の方を見やつて言つた。

九

睦子と萬龜子が脚を投げ出して語り合つてるのを蝶子は遠くから見付けて聲を掛けた。

「睦子姉さん！」

「ほう」と睦子は兩手を喇叭の形にして口に當て「被來い」

萬龜子は手招ぎをした、蝶子と信子は何か笑つて囁いた様であつたが、軈て一二三と號令を掛けて走り出した、美しい眞白な脚が輝いて見える。走りながら二人はきやつ〳〵と笑つた。

二人は睦子の傍に並んで腰を下した、若やかな四人の姿が岩の上に並んだ。此時遠い波間から端艇が見えた。

「來たわ〳〵」と蝶子が言つた。

四人は同時に立つたが又同時に坐つた。

「先に居るのは誰？」と蝶子が言ふ。

「克巳さんよ」と睦子が言ふ。

「次は？」

「次は櫻井さん」と萬龜子が言ふ。

「次は？」

「あら厭だ、頰冠りなんかして」と信子は赧くなつて言つた。

「橋本さん？」

「えい」

「野球の時にも頰冠りするのよ」と睦子は笑つた。

「厭ですわねえ」と信子は我が良人となるべき人を貶すが如く言つた。

舟は今一番繁々する波の中に入つた、而して間もなく、青い水の筋を殘して段々近づいて來た。四人は手を擧げて「ほう」と言ふと向うから又「ほう」と答へた。

「どうだい、四人彼處に待つてるから、知らん振してずつと向うへ着けようぢやないか」と橋本は言つた。

「うむ、其れも可からう」と櫻井は言つた。

「可哀さうだから止せよ」と克巳は言つた。

三人は櫂を止めて暫時波のまゝに任せた。

「併し妙だな」と櫻井は岩の方を見やつて言つた。

「彼處に四人の女が居るね」

「何が」と橋本が訊く。

「それが實に妙ぢやないか」

「何も妙な事はないぢやないか」

「蝶さんと信さんと睦さんは結婚前だらう、言はゞ午前の人だ、萬龜さんだけが午後の人だ、見給へ、あゝならんで居る處を見ると午前の人は活々して見えるが、午後だけは何となく光が乏しい」

「爾して見ると女は結婚前の方が美しいといふ結論になるね」

「何だ」

「それなら僕はいつまでも信さんと結婚せずに居ようかな」と橋本は笑つて「併し森川君もう午後の男にならなきやならんぜ」

「うむ、僕は」と森川は澁ける様に言つた。

「何だよ〳〵」と章は片手を海に突込んで水を掻きながら「森川、どうするんだ、僕は一日さ

早く睦子さんと午後になることを望むね」
「僕も贊成だが、併し萬龜さんが恁うなつて見るとな」と言ひかけて橋本は森川の顏を見詰めた。
「僕はね」と克巳は嚴肅な顏をして「僕は解らなくなつたよ」
「何が」
「正直に言ふから判斷してくれたまへ、僕は睦さんを愛する樣になつた」
「無論だね、爾なるのは」と櫻井は眼を輝かして「僕の望む處だ」
「併し〱」と克巳は制する樣にして「同時に萬龜さんをも愛してるんだよ」
「君が？」と二人は驚いた。愛は單純でなければならないと絕對の愛を主張した克巳が二人を一時に愛するとは思ひもよらなかつた。
「だから、僕は實に自分に愛想が盡きた、僕はデカタンだらうか、享樂主義者だらうか、暴君の樣に妻妾嬖嬪を蓄へたいのだらうか、但しは僕の靈が濁つて居て僕の心を曖昧にするのだらうか、何れにしても僕は不健全で、慾張で自己本位で遊蕩的な男ぢやあるまいか」
「併し待てよ」と章は思案して「男には誰しも爾いふ心持が多少あるものだが、併し愛するといふ事は單位のものだからな」
「だから僕は自分を呪ふのだ、睦さんを愛して居る、が萬龜さんに對する昔の愛は忘れる事が出來ぬ」
「二人をワイフにする事も出來ず、左りとて一人に決める事も出來なければ、そこで什麼するんだ」と橋本は唸つた。
「二人とも斷念するのか」と章が心配さうに訊く。
「いや、斷念する事が出來ない」と克巳は苦しさうに言つて「二人の中何方か一人が死ぬとか或は僕が死ぬより他に道がない」

一〇

舟が岸に着いた時女連は喝采した。信子は一番先に橋本の傍へ走り寄つて頰冠りを脫る樣にと言つた。
「なぜ不可いのだ」と橋本が不平さうに言ふ、信子は含羞みながら小聲に「見つともないぢやないの？」と言つた時人々は喝采した。
其れから皆が背中を見せ合つたりした、一日の泳ぎに背中が赤銅色に焼けて皮が剝けかけて居る。橋本だけが何事もなかつた。
「皮が厚いのだ」と又しても一同が笑つた。其の度毎に信子は顏を赧らめた。
「此の日は何となく氣が浮立つて見るもの聞くもの毎に樂しかつた、而して此の上にもつと面白い事がありさうな氣がした、
別莊へ歸ると、章の母のお民が二階から一同を眺めて居た、而して何事か獨りで首肯して居た。
「お母さんは何を考へて被居るんでせう」と蝶子は章に言つた。
皆なは遠くから二階の母を見やつて其の考へてるものを當てるべく競爭した。
「若い女の癖に水泳ぎなんて昔にはない事だ、と考へてるのだよ」と章は言つた。
「いゝえ、今晚歸らうか宿らうかと思つて被居るのよ」と睦子が言つた。
「婚禮の日取を早く決めたければならないと思つてるのだ」と橋本が言つた。
「皆な當らないわ」と蝶子は笑ひ出して「お母様はね、彼處から見て被居つてね、自分の嫁が一番美人だと思つて喜んで被居るのよ」
「誰がお前を美人と思ふか」と克巳は言つた。
「でもお母様の目から見ると、私程の美人はないと見えるのよ」
「お前は幸福だなあ」と克巳は感謝する樣に章

の方を見やつて言つた。全く幸福を感じたものは蝶子一人でなかつた。四時頃の日は少し勢が弱つて海から來る風が涼しく背中を吹く。

「お母さん萬歳！」と一同は二階の下の處で手を擧げて叫んだ。お民は不意打を食つてまごまごしながらにこ／＼と笑つて居た。

風呂へ入つて潮氣を洗ひ落し、其れから夕飯に取掛つた、お膳は厭だといふので食卓や机などを並べ合せ其れに布を掛けて食卓とした。

「實に久し振だね」と橋本は感慨に堪へぬものの如く言つた。「われ／＼が早稲田に居た時に三年の後に斯うして關西の天地に會合しようとは夢にも思はなかつたね」

それから昔の物語が始まつた、話は重に睦子姉妹の母お浪の逸話で持切つた、若い學生に對して心の底からの同情を以て本當の母の様に盡してくれた數々の話の中に克巳も章も橋本も折り／＼回想の涙を浮べた。

「善いお人でやしたらうな」とお民も共に涙を零し／＼聞いて居た。

「死んだ東京のお母さんのために乾杯をしよう」と橋本は言つた。酒を飲まないので一同は飯椀を觸れ合つた。

食事が濟んでからも感興は更に盡きなかつた。月は海にも庭にも山にも滿ちて漁火の影が遠近に見え出した。簾を悉く捲上げると涼しい月光が疊の上に動く。電燈を消して一同は縁近く出た。

「此那嬉しい晩はないわ」と蝶子は子供の様に母の傍に寄添つて團扇で煽いでやりながら折り折り章の顔を見やつた。家に居ると菊江に妨げられて碌に母や戀人と語る事も出來ぬ、今夜は菊江は居らず好きな睦子や萬龜子が居る。彼女に取つては東京以來の樂天地である。

「參考のためですがね」と橋本は突然お民に向つて言つた。「お母さんの若い時の戀物語を聞かして下さらんか」

「そんな事」とお民は歯のない口元を窄める様にして笑つた。

「贊成々々」と章は言つた。「お母さんは其れを語るべき義務がありますよ」

「戀物語などといふものはおまへんが」

お民は霎時困つた様な顔をして「章の御父さんと夫婦になつた時の事をお話しませうか」

「ひや／＼」と蝶子は團扇をばた／＼させた。

二

お民は一寸眼を閉つて四十年前の事を回想するかの如く默つたが軈て靜かに言ひ出した。

「昔も今も變りはおまへんがな、夫婦の事は決して媒介口で決めたり、親々が無理往生に決めるものではありませんぜ、我が子が幸福になる様にと思つて親が決めても當人が氣に入らんかつたら生涯泣きの涙で暮らさにやなりまへんよつてな、何處の親でも自分が子よりも賢いさかいに、我が眼で決めたものは子に決めさせるよりも確かやと思ひなはる、其れが間違ひの源です、中にはな、水兒の時から許婚にして置きなはる家もありますが、其れは我が子を繩で縛つてお前は幸福やと言ふと同じものだす、私が章の御父さんと夫婦になりましたのはな、十八の時だす」

「お母さんにも十八がありましたかな」と章は笑つた。

「待つて頂戴」と蝶子は立つて岐阜提灯に灯を點けて「其れからお母さん」

お民は續ける。

「實を言ふとな、私は、今の叔父さんや、義兵衞はんの嫁になる處やつたのや」

「あら、あの叔父さんに？　まあ能く逃げられたわね」

「親同士が決めはつたのを私は些とも知りや

へなんだ、十七の春に其れを聞いた時私は死んでしまはうかと思ひましたんや」
「あゝあの駝鳥みたいな爺だね」と橋本は唸つた。「道理ですなあ」
「元と〳〵櫻井家と私の實家とは親類やよつてな、幼さい時から出入して居ます、御父さんとも義兵衛さんとも仲好うして居ましたけれどもな、私はどういふわけか義兵衛さんは蟲が好かん、女といふものはな、十一か十二になると既う私の婿はんは什麼人か知らんと思ふものだつす、十七の年にお前の婿はんはこれ〳〵やとお母さんに言はれた時までは、別に誰が好き、什麼家へ嫁きたいと思うた事もおまへんけれども、愈婿はんが決まつたと聞いて見ると、もうもう其れが悲しうて〳〵なりまへんかつた、而して其の時初めて私は義兵衛さんよりも章の御父さんを戀うて居るのやと氣が付きましたのや、其れからといふものは其れが戀しうて〳〵なりまへんかつたけれども、私は其れほどまでに思うて居たかて本人は什麼に思うてるか解りやへんよつてな、八卦見に見て貰うたらな、先方も思うて居ると言ひます、堅い人やよつて私に滅多にものを言ひなはらんし笑顔一つ向けてくれはつた事もない、ほんまに私を思うてくれやはるのか什麼か八卦ばかりも二十何人に見て貰ひましたんや、今時ならそんな阿呆な事をしてる女はおますまいが私の若い時には其那もんや、何で戀しいのか自分にも解らへん、義兵衛さんが嫌やばつかりにあの人が戀しいのか知らんと思うて見ても、其ればかりでもおまへん樣やで、私が大事に〳〵して居た人形に每日恁う言ひました、お前はあの人の心を知らんかな、聞いて來てや〳〵。或日土藏の前で人形を抱いて囈言つてると丁度土藏の戸の中で凝と私を見てる人がおまんね、其れは章の御父さんでな、私の御父さんと一緒に探しものをして居やはる處なんだす、私ははつと思ふと、もう氣がぽうツとして顏が火の樣に熱くなる、胸がだく〳〵して人形を抛り出して一生懸命に逃げました、ほんに夢の樣でな」
　老いたる母の顏が微かに活々として聲が段々に息づまつて來た。お民は其れを制するやうに霎時默つた。
「解つてよ〳〵、其時のお母さんの氣持は」と蝶子は熱心に言つた。
　女の凡てが首肯いて歎聲を漏らした。
「僕にも解る」と橋本が言つたので一同どつと笑つた。

一二

「其れからといふものは私は何を見ても悲しうなりましてな、思うた人の嫁さんになれず厭な人の嫁さんになるとは何といふ因縁やと每日泣いて居ましたんや、爾するとお母さんがな、其れと氣が付きはつてお前は何か心配事でもあるやろ、隱さんと皆な言うてみと言ひなはる、實はこれ〳〵だすと言ふと、お母さんは難い色を變へはつて、溜息をしやはつてな、困つた事になりました、義兵衛さんとは親同士の約束がある、その約束を反古にする事は出來まへんし、又反古にする事が出來るとしても、弟を嫌うて兄はんの嫁になつたら家の紛紜が絶える事はありますまい、義兵衛さんは斷つても兄さんに添はれなければお前の思ひが無駄になるよつて此の事ばかりは諦めんと不可へん、親子親類兄弟の仲を惡うしたら御先祖に對しても申譯がないやろ、何より辛いは義理といふ二字や、こればかりは堪へておくれ、恁う言はれた時私はもう什麼しよう思ひました」
　お民は再び眼を閉ぢて恰ら其時の苦しさを苦しむものの如く片手を胸に當てた。
　一座は默つて言葉がない。軒から覗く月影は

まざ／＼と人々の顔や肩を照らした。

「苦しかつたでせうね、本當に」と睦子は涙聲で言つた。

萬龜子は一髮の搖ぎもなく釘付になつた樣になつて居た。

「其れから？」と蝶子が又言ふ。

「何より辛いものは義理や」と母は再び續けた。

「私は幾度死なうと思うたか知れまへん、いろいろに考へたけれども段々分らん樣になるばかりで自分で氣が狂しくなるんやないかと思ふ樣になりました、或日私は南水上人いふ有難い坊さんに聞きました、義理といふ事は何れだけ大事なものだつしやろ、然う言ひますと坊さんは直ぐに然う言やはつた、義理などいふものは人間の作へたもんだ、佛の前には義理も糸瓜もない、自分の心を偽るのは義理を缺くよりも悪い事だ、心は如來で、如來を偽る事が出來るか。私は此の有難い御言葉を聞くと、もう頭から冷たい水を掛けられた様な氣がしました。ほんに爾や、義兵衛さんの爲になつた處で義理のために我が心を欺く事になる、假令何と言はれても譏られする事は出來ん、假令此の上は決めて私は直ぐに章つてきさんのきなさん――御祖父さんの前へ行きました、十八の年[illegible]で其の頃はそんな事をしようものなら、淫奔者やと言はれる時やけれどもな、其んな事には構つて居られまへん、私は義兵衛さんとの縁談は止めにしておくなはれと言ひよしたんや、何でやと言やはるさかいに、義兵衛さんは嫌だすと言ひました、其れではと御祖父はんは首を傾げはつて兄の方なら什麼やと言ひなはる、私は此處までは氣張りおましたけれどもな、兄の方はと言はれた時くわッと逆上してな、顏が熱うなる、胸がどき／＼して何と言うたか解りまへなんだ、と、御祖父はんは、宜し／＼解つた、大方術やろと思つた、と言やはつてな、其れ大きな聲ではッ／＼と笑ひやはつてな、[illegible]は其れを御父さんやお母さんに言うたかと聞きなはる、いゝえ何にもと言ふと、宜し／＼私の方から兄に振替へて貰ひませうと言やはつた時私は心の中で拜みました」

一座は初めて動搖めき渡つた。

「まあ可かつた」と蝶子は話に聞惚れて休めて居た團扇を急に動かした。

「戯だ／＼」と克巳は言つた。「眞實は鬼神を泣かしむるんだね

「でも能くそんな談判が出來ましたね」と章が言ふ。

「僕のお互帳よりも餘程白熱的だ」と橋本が言ふ。一同は笑つた

萬龜子は静かに座を起つた、而して次の室の暗がりに茫然と立つた。

三

夏の夜は更くるに早く、彼方此方の別莊から漏るゝ話聲や琴や笛の音が段々聞えなくなると波の音と松風が思ひ出した樣に耳に響く。一同が眠くなつたのは十二時過ぎであつた。二階には克巳と章と橋本の三人が寝る、下の座敷には大きな蚊帳を吊つて睦子萬龜子蝶子信子の四人が寝る事にした、お民は一人小座敷へ寝室した。

一つの蚊帳の中に四人の女が寝る、然ういふ事は蝶子や信子にも珍らしくまた何となく懐しみが加はる樣な氣を起した。

「私眠れないから姉さんが先に眠つちや厭よ」と蝶子は睦子の手を引いたり[illegible]を覗いたり鼻を抓んだりした、而して信子と學校の事やら早稻田の運動場の事やら野球[illegible]の事などを話して居るかと思ふと、直ぐ活動寫眞の話や三河屋[illegible]の事は[illegible]公安いといふ事など全然東京[illegible]ない[illegible]似じみた話をする、而して二人で

い、くす／＼笑つたり腕の太さを比べ合つたりしたが何時の間にか二人とも言葉がなくなつた。

「全く術だ」と萬龜子は考を續けた。一心は如來だ、心を欺くのは如來を欺くのだ、義理は人間の作つたもので、義理のために心を欺くのは義理を缺くよりも惡い事だと和尚さんが言つた。其れに違ひない。私は姉さんへの義理を立てるために厭な爲造の妻となつた、其の結果は此の通りだ、私が心を欺いたために克巳さんは未だに獨身で彼居る、姉さんとは結婚なさらない、私の犧牲は何の役にも立たなかつた、して見ると私は克巳さんと結婚すれば可かつたのだ、克巳さんを不幸に陷れ姉さんには何の幸福も與へず、而して自分も不幸に泣くといふのは只私が昔からの小さな道德の美名に醉うて眞實の告白をしなかつたからだ」

萬龜子には極めて明瞭と事の徑路が解つて來た。自分が犧牲になつたからと言つて克巳の自分に對する愛が冷めないとすれば、姉の目的が達せらるべき筈がないのだ、人間の心が輕々しく甲から乙に、乙から丙に移され得べきものでない、それに氣が付かなかつたのは何といふ輕卒な事だらう。無論自分とても嫁してしまへば諦めが付くだらう、いやな男でも辛抱が出來る樣になるだらう、縱令出來ないにしても父のため又は姉のために犧牲になつたといふ矜持から自らを慰むる事が出來るだらう、此の位に思つて居たのだが、餘りに卑しい良人を有つたためかも知らぬが、夢に現に忘れられぬは矢張克巳の事である、身體は人の妻でありながら心は克巳に傾いて居た、此の三年間は全然精神上の不義をして居たのだ、姉に讓つたと思うて居ながら而も決して姉には讓つて居なかつたのだ、虛僞だ、虛僞だ、凡てが虛僞だ、克巳を僞り姉を僞り爲造を僞つた、其の根本は自分を僞つたからである。

「輕卒！　道德の美名！　虛僞！」

今までの苦惱には三文の價値もなかつたと氣が付いて見ると痛恨矢の如く胸に迫つて來る。

「何故、なぜ、なぜ、私は……」と彼女は思はず聲を出して言つた。

「未だ眠らないの？」と睦子は團扇を脣に當てたまゝ蚊帳の天井を凝と見詰めて言つた。

「あら、姉さんも眠らなかつたの」

「えゝ」と睦子は答へて「直き眠るわ」

「私も眠るわ」と萬龜子も言つた。

二階に三人の話聲が聞えて居たが最早や靜かになつた。遙かの〳〵濱邊で船唄を唄ふ聲が波音の間に〳〵聞えた。

一四

眠らうとすればするほど萬龜子は眠れなかつた。青い被布を掛けた電燈が蚊帳の上から仄かに三人の顏を照らし美しい若い髮は亂れて枕を滑つて居る。萬龜子は信子と蝶子の方を見やつて恁う思つた。

一何といふ幸福な人達だらう、此の人達の前には光が輝いて居る、戀の勝利者！　特に惠まれたる幸運の人！　若き美しき力ある男の腕が此の人達を待つて居る、此の人達には暗い影や苦惱や煩悶や悲哀といふ文字は不要である、あ何といふ靜かな寢息だらう、何といふ安閑な寢顏だらう、此の人達は今どんな夢を見てるだらう、同じ室、同じ蚊帳の中に明るい人と暗い人が寢て居る、春の光を逐うて翼を擴けて大空に翔る者と、陰慘な谷底に淚を呑む者と全然異つた者が寢て居るのだ」

萬龜子は泣きたくなつた、併し淚が一滴も出なかつた、額が熱して胸が次第に硬ばつて來る。

「姉さん」と彼女は言つて見た。

「えゝ」と睦子が直ぐ答へた。

「庭へ出て見ない事？」

「いゝえ、私眠りますわ」
「姉さんは眠れて？」
「えい、何とかして眠りませう」
萬龜子は獨り蚊帳を出た。雨戸を繰ると西に傾いた月は斜めに庭を照らして居るので、右手の植込の松や樫や檜葉の影が長細く踊る樣に大地に映つて居た。彼女は草履を引掛けて花壇の方へ出た。花壇の夜露に濡れてダリヤも千日草も千鳥草も石竹も撫子も一樣に輝いて居る。露が繁いので彼女は築山の方へ足を戻した、而して泉水の橋の上に立つた。凝と月を見る中に彼女の頭が段々に低れた。何か大きな問題を考へるために此處まで來たのだとは思ひつゝも扨て其れが何であるかを忘れた樣な氣がした。
「私は幸たつたのだ、虚僞の嫻雅、道德に媚びた嫻雅……」
斯う漸く辿り付いた時彼女は背後に輕い足音を聞いた。彼女はぎよつとして月光に透して見た。白飛白の浴衣を着てのそり／＼芝生の上を往つたり來たりして居る姿は、確かに克巳であつた。彼女ははつと思つた、同時に呼ばうとする勇氣が失せてしまつた。
「私を見たか知らん、見なければ可いが……いや、見てくれゝば可い、そして何とか先方から言葉を掛けてくれゝば可い」
彼女は半ば恐ろしさと半ば懷かしさの混濁した心持で立つて居た。と克巳は突然足を停めて、
「睦さんですか」と聲を掛けた。
「いゝえ、私」と萬龜子は歩み寄つた。此時彼女は自分を呼ばずに姉さんを呼んだ事をほんの少しばかり不滿に思つた。
「あゝ萬龜子さんですか」と克巳は言つた、而して其の語尾は何となく拍子拔の樣な聲であつた。
「眠れないもんですから散歩して居ましたのです」と克巳は申譯がましく言つた。
「私も、月夜ですから」と萬龜子は頗る頓珍漢に言つた、而して自分ながら頓珍漢だと意識したので「夜露が降りましたから草履では氣持が惡いでせう」と言ひ足した、併し其れは却つて妙なものになつてしまつた、彼女は自分自らも草履を穿いて居たので。
「庭は廣いですな」と克巳は言つた。
「いゝえ、つまらない庭で……」
「少し歩きませうか」
「えい」
萬龜子は直ぐ家に入らうかと思つて居たのだが、克巳に言はれて、直ぐ同意した。同時に彼女は自分が其れを望んで居たのだといふ事が解つた。

一五

二人はダリヤの畠の方へ出た。其處は短い垣根で海を見下す樣になつて居る廣々とした處であつた。克巳は二言三言今日の端艇の事や此の海には鱶が居るから危險だといふ事などを語つた、其等の話は三年前の學生時代の懷かしい句調が交つて居た。克巳は折り／＼月の光に萬龜子の顏を見やつた。二人の眼と眼が衝突した、而して二人は默つた。
克巳は何か言はうと思つた、實際何か言はなければ二人が默つて居る間の空想が恐ろしいと思つた、だが何も言へなかつた、彼は萬龜子に對しては少しも未練が無いのだと自信して居た、其れは今朝兄や妹に勸められて此處へ來る時まで固く思つて居た、が彼は萬龜子の顏を見ると何とも言へぬ胸騷ぎを感じた、此の胸騷ぎは昔の追憶から出たものでもなく又未練から出たものでもない、只忘れて居たものが思ひ出せた位に過ぎないと思ひつゝも、共に濱邊を歩きつゝ共に海水浴をなし共に笑ひつ語りつする間に、

どうしても萬龜子は他人でない、左りとて妹でもない、他人でもなく、妹でもない一種異樣の親しみがある樣な氣がした。何故恁うなんだらうと彼は考へた、而して終りに恁ういふ事を發見した。

「萬龜さんは良人と別れた、獨身になつた、それがために俺が變な氣持になつたのだ」

恁う解つた時彼は獨り顏を赧めて「馬鹿ッ、馬鹿ッ」と自分を罵つた。一體ならば怒らねばならぬのだ、今までの不安を陳べ立てねばならぬのだ、其れを今けろりと忘れて居るといふのは何といふ意氣地なしだらう。

意氣地なしとは知りつゝも彼は萬龜子に對する恨みが既に消えてしまつた事を自覺した、自分を欺いて爲三の妻になつた事は憎むべしとするも、今獨身になつて淋しく暮らす樣になつたので自分の恨みが報いられた樣な氣がした、而して萬龜子は一旦不淨に陷つたが再び淨められて昔の萬龜子になつたのだと思つた。或は爾うでないかも知れない、併し克巳は爾思ひたかつた、三年間人の妻となつて居た女でなくて昔の儘の萬龜子が旅行から歸つて來たのだ。

彼は自ら種々に考へて解剖して見てる中に萬龜子の態度にも自分と同じ考を辿つて居るらしく見える點があつた。

「萬龜さんは此の三年の事を水に流して貰ひたいんだ、一切の過去を忘れて新らしく生れたいんだ、だが其れを忘れかねて居る、其のために苦んで居る、可哀さうに」

これが克巳の正直な心持である、「可哀さうに！」實際克巳は只萬龜子を可哀さうだと思つた、其れ以外の處までは進まなかつた、可哀さうだといふ同情は三年間の暗い影とは何の關係もないものであつた。彼は萬龜子の凡てを許した。出來るものなら幸福を與へてやりたいと思つた。で彼は何か光のある言葉で彼女の氣を引立ててやらうと努めたがどうしても好い言葉が考へ出せない、而して何か言はうとすると胸が響いて恰も良心に咎めらるゝ樣な氣がした。昔の樣に單純でなくなつたと彼は自ら爾思つた。

長い間沈默して居るのは苦しい事であつた。萬龜さんから何か恁うもつと打明けた話が出れば可いと彼は祈つた、だが萬龜子は何も言はなかつた、彼女も矢張り同じ事を考へて居たのであつた。

遠い波がきら〳〵光つて近い波は蒼く暗く、西へ傾いた月は淒い程靜かな光を放つて居る。

「最早家へ入りませう」と克巳は言はうとした時、萬龜子は何か言ひたさうに顏を上げたので、克巳は開きかけた口を閉ぢた、併し、萬龜子は再び顏を低れて何も言はなかつた。

一六

二人の浴衣はしつとりと夜露に濕つた。萬龜子は秋草に露玉を染めた浴衣を着て、伊達卷を胸が縊れる樣に深く卷いて居た。彼女は團扇を脣に當てたり又裾の方を拂つたりした、時々微かな聲を立てて蚊が耳元を過ぎた。

「此儘で家へ入つては何となく物足りない、言ひたい事が私にもあるし克巳さんにもあるだらう」と萬龜子は思つた。

此時克巳は漸と口を開いた。

「睦さんは能う眠りましたか」

恁う言つたが、彼は什麼して恁那事を言つたのか自分に解らなかつた

「えゝ、もう眠つたでせう」と萬龜子は答へて

「明日御歸りになりますの？」

「そのつもりです」

「もう二三日ね」と萬龜子は言つた、其れは如何にも無邪氣で丁度三年前のミルクホール時代の心持が急にパノラマの如く展がつた。

克巳はぎよつとして垣根の竹を掴んだ。と此時全然思ひも寄らぬ事が稲妻の様に突然頭に閃いた。

「睦さんに濟まない」

此の心持には何の理由もなかつた、只衛思つただけである、頃日漸く昔の痛手から恢復しかけて、睦子に對する愛が段々に湧きつゝある事を自覺し、又自分自ら此の愛の生長を樂しみつゝあるに拘らず、今此處で萬龜子と語つて居るのは不純な行爲であると感じたのである。然う思ひつゝも彼は足を返す事が出來なかつた。そして極めて淋しい心持で而も萬龜子には潔い同情を以て慰めようと思つた。

萬龜子は再び默つて海の方を眺めて居た。遠い／＼沖に漁火が一點二點見えた、而して水平線には黒い雲が此の漁舟を呑まうと待つて居るかの様に思はれた

「私ね、克巳さん」と萬龜子は恍惚と漁火に見惚れながら夢の様に言つた「あゝいふ舟を見ると心細くなるのよ、何處へ行くんでせう、あんな小さな灯を點して廣濶な海を越えて何處へ行くんでせう、ずつと／＼別な世界へでも行く様な氣がしますわね、あの灯は何といふ淋しいんでせう、泣いてる様な灯ですわね、泣きながら暗い雲の中へ入つて行く身になつたら什麼でせう」

「見るものには衛思へるが漁師なんてものは暢氣ですよ」と克巳は答へた。

「貴方ねえ」と萬龜子は懷かしげに克巳を見上げた。「私を許して下すつて？」

「何がです」と克巳は驚いて言つた。

「私、貴方に御詫びをしたい事が澤山ありますの、ですけれども口では言へないんですもの―

「そんな事を聞かなくたつて解つて居ます、貴方は失望なすつたんでせう

「えゝ

「黄金と言ふものは決して貴方の思つて居た程有難いものではなかつたでせう―

「いゝえ、それは衛ですけれども」

「貴方は自分の好きな事をなすつてしまつたのです、迷の覺めた時には貴方は昔の貴方ではなくなつた」

「でも私、昔を忘れた事はありませんわ」と萬龜子は泣きたさうな聲で言つた。

「忘れなくつても貴方は既に人の妻です、人の母です、貴方は昔の純潔な處女に立復る事が出來ますか」

「ですから私は……」

「僕は只貴方のために悲むのです、僕の事なんか什麼でも可いです。さあ家へ入りませう」

然う言つたが萬龜子は答へなかつた、而して何か言はうとするらしく見えた。

「何れ又話しませう」

克巳はすた／＼と歩き出した、雨戸の前で振返つて見ると、萬龜子は未だ月の下に立つて居た。

「あゝ俺は……」と克巳は縁に上らうともせずに額に手を當て口の中で言つた。「俺は何だつて怒つたんだらう、あんな事を言ふ積りぢやなかつたのに、いつの間にか心にもない事を言つた、なぜ、なぜ、なぜ、彼那事を言つたのだらう、俺の言つたのは單にイヤミに過ぎなかつた、俺は未だ萬龜さんに戀してゐるのだらうか」

彼は縁に上つて二階へ行くと、章と橋本は眼を覺して話をして居た。

「おい、貴様が蚊帳の裾を捲くつて行くもんだから蚊が入つて眠て居られんぞ」と橋本は蚊帳をばさ／＼と振ひながら言つた。

克巳は答へなかつた、而してころりと横に倒れて言つた。

「俺は色魔、おい、俺は色魔か」

「何を言つてるんだ」と橋本は笑つた。

「いや、敎へてくれ、俺は色魔か、俺は二人を戀してるんだ、爾いふ事があるか」

一七

夜が明けると間もなく萬龜子は靜かに雨戸を繰つた、其れから耳の遠い婆やに朝飯の支度を命じた。一睡もしなかつたが彼女の頭は冴え冴えとして居た。兎角の中に睦子も起きて來た。お民は夜の明けるのを待ち兼ねて居たのだが、人々に遠慮して室を出なかつたが、萬龜子や睦子の聲を聞いてにこ／＼して出て來た。蝶子と信子は日か高くなるまで起きなかつた。

萬龜子は昨夜一晩中考へた事、克巳と會つた事などから殆ど今までに思ひ知らない新たな問題に觸れた。「自分は輕卒であつた」此の考が第一に彼女を刺戟した、大變に立派な事をして居た積りであつたのが、俄かに逆轉して其れが大變に惡い事、虛僞であつたといふ事が解つた、此の新發見は彼女の凡てを新たにした。睦子が洗面場で顏を洗つてる中に彼女は下駄を穿いて裏へ出た、而して掘拔から音立てて落ちる筧の口に銅盥を置いて楊枝を使つた。井戸の端に鳳仙花が咲いて居た。田舍らしい紅い花が青い葉裏に鈴生に並んで居る、風が吹くと花が彈けてぽろ／＼と零れる。其處に萬龜子の手から齒磨の白い粉が散つた。

「本當に私が惡かつた、私は生れ變らなきやならない、今までの生活は惡い夢で、これから私の生活が始まるんだ」

冷々として朝風が首筋や八つ口の肌を吹く。朝日が雲もない東の天に上りかけると松も檜葉も欅も足元の八つ手も生き／＼とした濃色を十分に輝かして健全な日の光を吸ひ込むかの樣に見える、海の面は時々刻々に光を添へて、何時の間にか小舟の數が殖えた。

「私は良人がないから自由だ、私が何をしようと誰が何とも言やしまい、私だつてあの人達の樣に未だ若いんだもの」

恁う言つて彼女は銅盥に溢れ越す清水を手で掬ひあげて口を洗ひ、ざぶ／＼と氣持好く顏を洗つた、水の雫は鬢や前髮を濡らした。彼女は綺麗に其れを拭いてから、

「本當に未だ若いんだもの」ともう一度言つて見た、而して朝日の方を向いて胸を充滿に張つて呼吸をした。裏の藪に小鳥が啼いた。

そこで彼女は楊枝を洗つてから髮の後れ毛を搔上げた。其時彼女は何かしらんもう少し考へなければならないものがある樣な氣がした。

「だつて仕方がない」と彼女は言つた。「そんな事はもう思はない」

彼女は太郎の事を考へたのであつた、而して彼女は爾いふ暗い事は一切思はない事にしようと努めた。

「私は私で生きて行く」と彼女は何ものかに反抗する樣に言つたが、太郎の事を思うただけで心持が急に暗くなつた、彼女は何か明るい事を思ひ出して此の暗い氣持を紛らさうと努めた。此時二階で克巳の聲がした。

「克巳さんは什麼いふ氣で被居るだらう」

此の問題は彼女の胸をずつと引立てた。實を言ふと昨夜克巳に詰責された時、詰責されつゝも内心は嬉しかつたのであつた。貴方は既に人の妻ですと克巳に罵られたが、自分が人の妻になつた事を不快に思つて被居るのは即ち未だ昔の愛が幾分か殘つて居るのだと解釋される。恁う思ふと今までの淋しい生活に一道の光が射して、これから何かしらん明るいものが自分を待つてる樣な氣がする。

「今まで姉さんと結婚なさらなかつたのも矢張このためであらう」

此の考と共に彼女は陰に姉を退けて自分の手に克巳を奪ひ取らうとする野心が芽を出して

來たのであるまいかと自分を責めて見た。

「いゝえ、爾ぢやない、克巳さんと姉さんの結婚は自然に任せるより仕方がない、私には何の陰謀もないんだ」

恁う辯解して見た。

生命

一

賑やかな朝の食事が濟んだ。萬龜子は事毎に嬉しかつた。

「貴方は今日本當に顏色が好いわね」と睦子が言つた。

「爾でせう〳〵」と萬龜子は微笑して答へた。

「皆さんが遊びに來て下すつたから嬉しいのよ」

併し此の嬉しさは長く續かなかつた。克巳は留守を茂平に任して置いたので頃日買入れた牛が心配だから歸らねばならぬと言ひ出した。

「君が歸るなら僕も歸らう」と章が言つた。

「もう一日だけ宿つて被行い」と萬龜子は蝶子に懇願する樣に言つた。

「だつて章さんも歸るなら私も」と蝶子は言ひかけて幼々しく顏を染めた。

「では信子さんだけでもね」

「でも橋本さんが歸るんでせう」と信子はもぢもぢして言つた。

「姉さんは什麼？」

「私もね」と睦子は克巳の顏をちらと見やつて

「二三日中に又來ますわ」

「では皆な御歸りになるのね」と萬龜子は落膽して言つた。昨日來た時には飛立つ許りに嬉しかつたが、急に淋しくなると思へば萬龜子は泣きたい程に思つた。

歸り支度で一時ごた〳〵した。男の人々は既に表へ出た。

「私、停留所まで御見送りするわ」と萬龜子は女連と共に家を出た。

人々は昨日一日で日に燬けた顏を許し合つて笑つた。軈て一同は電車に乘つた。

「二三日中にね」と萬龜子は下から聲を掛けた。

「貴方も被來いね」と睦子は言つた。

三人の男と三人の若い女は向ひ合つて腰を掛けた、お民は只ほく〳〵微笑して男達の眞中に坐つた。電車が動き出した。

「左樣なら」

「左樣なら」

聲々の中に何か可笑しい事があつたか、わつと笑ふ聲がした。窓の横枠から蝶子が半分額を出しかけて「左樣なら」と娘らしい涼しい聲でもう一度言つた。萬龜子は電車が見えずなるまで見送つた。軌路はきら〳〵と日光に照らされて是から暑くなるべく砂地や小石がくわつといきれが立つて居る。萬龜子はとぼ〳〵と足を戻した、而して途中から又振返つた。

「一同が行つてしまつた」

恁う彼女は獨りで言つた。行つた人は語りつつ笑ひつゝ前途の幸福を夢みつゝ結婚の近づくのに胸を躍らしつゝ互に顏を見合ひつゝ行く、殘つた自分は只一人、此の砂利道を歩いてるのだ、と思ふと彼女は自分ながら自分の姿が悄然としてる樣な氣がした。

家へ歸ると今までの賑やかさに引替へて古寺の樣に淋しい、處々明けた窓から風が吹き込んで新聞がばさ〳〵鳴つて居る、今人が去つた許りの座蒲團が六七枚其儘形付けずにある。

「婆や〳〵」と彼女は五六度も呼んだので婆やが漸と出て來た。

「なぜ形付けて置かないの？」

「おや皆樣お去にはりましたか」と婆やは吃驚して箒を取りに又引込んだ。

萬龜子は自分で座蒲團を疊んで、其れから二

階へ上ると、其處にも脱ぎ棄てた浴衣が三枚ほど手欄に掛けてあつた、彼女は其れを一枚つつ擴げて掛け直した、男臭い匂が仄かに流れて來る。彼女は其の中の一枚、少しく夜露に濡れて濕つたらしく思はれるのは克巳が着たのだと思つた。

二階から降りると矢張淋しい。婆やは臺所で胡瓜を刻む音を立てて居る。

「婆や」と彼女は呼んだ。「私出て行くから留守を氣を付けてね」

「直ぐ歸らはりまつか」

「宿つて來るかも知れないわ」と萬龜子は一寸考へてから言つた。

「何處へ行かはりまんね」

「今歸つた人達の處へ」

三

克巳は睦子と共に歸るや否や勞働服に替へて牛小舍へ行つた。頃日買入れた二頭の牛は涎を垂れて日影に寢轉んで居る。

「爺や、今歸つたよ」と彼は聲を掛けた。

「お歸りなさいまし」と茂平は秣切場から顏を出して「海は什麼でした」

「昨日一日愉快だつたよ、爺や、其れから今日は少し草切をせんと不可ね」

「はい〳〵、爾思つて居ましたよ」

「鎌を取つて來ておくれ」

「はい〳〵」

爺はえんやらさと腰を起して草履を引掛けて鎌を取りに行く。腰が段々曲りかけて、兩手をぶら〳〵動かすのは足を運ぶために楫を取る樣に見える。

「年を老つたなあ、可し〳〵」と克巳は言つた。彼は茂平を自分の親の樣に思うて居る。金を儲けたらお前を硝子張の家へ入れてやると言つた時、硝子張は危くて不可いから佛壇を入れる處と寢る處とあれば可いから小さい家を一軒畠の眞中に建ててくれといふのが爺やの註文であつた。克巳は其れを思ひ出す度に「可しッ」といふ奮發心が出るのであつた。

軈て爺やが鎌を持つて歸つて來た。

「だがおえ坊ちやま」と彼は言つた。「とうから氣になつて居るだが何時御嫁さんを貰ひなさるだえ」

「嫁か、今に貰はあ」

「いんにや、其れや不可え、今に〳〵つて段々晩くなる、お前樣可哀さうだと思ひなさらねえか」

「何が」

「睦子樣だよ」

「まあ可いや」と克巳は逃げる樣に歩き出さうとした。

「いんにや、待つて下さい」と爺やは縋る樣にして「東京で病院に御入りなすつた時にあの人はどんなに苦勞したかを知つてるものは俺あだけだ、それから今日まで三年四年の間はお前さんの事ばかりで苦勞し通しだよ、惚れたはれたは別としても、お前さんは恩といふものを考へなきやならねえ、今の世の中の事は知らねえが俺の若え時にや一膳の飯を貰つても恩は恩だと教へられたもんだ、可哀さうに睦子さんは自分の口からは言へねえ、言へねえから俺が其れを察して、心配なさるなよ、坊ちやまだつてお前さんを思つて居ない事は無えから、今に爺やが日出度く纏めてあげますと言ふとな、顏を紅くして背後を向きなさるが、眼に充滿の涙を溜めてござらつしやるだ、なあ坊ちやん、涙ちふものはな、悲しい時に出るに決まつてる。睦子さまに悲しい思ひをさせるちふのは恩知らずであんめえか」

「解つたよ〳〵」と克巳は言つた。

「解つたら嫁にすべえか」

「もう少し待つてくれ、爺や」と克巳は苦しげに

言つた。
「返事だけは聞かして下せえ」
「さあ其れは少し考へがあるんだから」
「四年も考へて未だ決まらねえといふ法が無えだ」
「どうも猛烈だね」
「猛烈て何の事ですか」
「僕を困らせるといふ事だ」
「其れぢや坊ちやまの方が餘程猛烈だ」
「何故だ」
「俺を困らせたり睦子さまを困らせたり」
恁う言つて爺は向うを見やつて、
「そうら猛烈が來ただ」
紺地の浴衣を着て手桶に充滿の水を提げ、片袖を肩に荷つて白い腕を出したまゝ身體を片下りに歩いて來たのは睦子であつた。
「讀みましたよ、坊ちやま、讀みましたよ」
恁う言つて爺は秣場に去つた。
「あゝ重かつた」と睦子はどしんと手桶を前に置き克巳の顔を見上げて嫣然した。「汲み立てだから召上らない？」
「あゝ飲んでも可いな、杓がない」
「あゝ忘れた」と睦子は當惑したが軈て蕗の葉を一枚取つて杓の形に圓めた。「簡單な事よ」
「うむ」
克巳は蕗の葉を手桶に入れた。眞清水がきらきらと動くと水に映つた楓の青い影の中に睦子の微笑した顔が動いた。

三

克巳は蕗の葉杓で口を漱いで睦子に言つた。
「貴方も飲まない？」
「えい、飲みますわ」
睦子は後背向いて少しばかりを飲み、餘りを楓の若葉に注ぎ、
「水も可いけれども山の方が可いわね」
「爾だ、山の方が涼しい」
恁う言つて二人は蒼々とした緑の山野を眺めた。一度爲吉や萬兵衛の奸策に陷つて燒打をされてから一敗地に塗れた彼は睦子の苦心で漸く燒跡を收拾し僅かに膝を容るゝに足るばかりの小舎を建て牛の二頭も飼ふ事が出來た。躓いては起ち又躓いては起つ、人生は野球の如しと橋本が言ふのは道理だ、克巳は恁う思つて少しづつ整頓し行く牧場を見廻したが軈て突然恁う訊いた。
「睦さん、いつか貴方が持つて來てくれた四千圓の金は何處から借りたのです」
不意の質問に睦子は躊躇しながら、
「あれは橋本さんと二人で借りましたのよ、貴方の事業に非常に厚意を有つて居る方ですの、名前は言うてくれるな、貴方が成功なさるまでは、と恁う言ふんですの」
「爾ですかなあ、世の中には篤志家もあるものですな」
「どうして幾度もそんな事を聞きなさるの？」
「どうしてといふ事もありませんけれども」
元來四千圓の金の出所を言ふに就ては睦子は何れだけ苦心したか知れなかつた、で、翌日橋本に相談したのであつた。萬龜子から出たと言へば爲吉の金は一文たりとも借りる事は好まないと言ふに決まつて居る、左りとて其れがなければ何の事業も爲す事が出來ぬ、
「絶對の秘密だ」と橋本は言つた。で睦子も其れに從つた。併し今日となつて見れば睦子は既に爲吉の妻でない、秘密を打明けねば自分の心が苦しい、最早や何も彼も言つてしまふべき時機ではあるまいか、恁う思ひつゝも彼女は克巳の怒を恐れた。「何れにしても爲吉の金なら僕返す」と言はれたら什麼しよう。
睦子の言葉に克巳はけろりとして少しも疑ふ樣子がなかつた。彼は睦子と二人で苦心した此

の牧場を見渡して居ると全身が希望に充たされて、じり〳〵照りつける白日の下の生の幸福が漲るやうに感ずるのであつた。

「元の様になるには却々ですねえ」と睦子は言つた。

「なあに今一年もたつたら屹度恢復して見せます、達磨ですから起上るのが早いですよ」

「彼處に花畑を作つて頂戴ね」

「なるほど、女は事業よりも第一に花の方を考へますね」と克巳は笑つた。

「其れから池を掘つて金魚を飼つて睡蓮を植ゑて」

「なるほど」

「唐黍と豌豆と南瓜と御芋と其れから……」

「牛蒡、大根、人蔘、茄子、胡瓜、トマトウ」

「あら爾ぢやないわ、待つて頂戴」と睦子は眼を細くして考へ出さうと努める様にして「苺、さう〳〵、苺々」と踊り上つた。年は二十六でも處女の美しさは其の幼々しい極めて突飛な無邪氣な處に溢れて居る。

「苺々」と克巳も釣込まれて言つた。

「貴方はお好きでしたね」

「うむ」

「其れから……昆布ツ……あら、昆布は草でないわねえ、あら、何でしたらう、貴君のお好きなものは……カステーラに牡丹餅にアイスクリームに心太……」

睦子は最早や思ひ出せないので嫣然した。其の眼は美しいと克巳は思つて居た。頃日の睦子は殆ど別人の様に陽氣で活潑で、何事に對しても決斷が早く、其の顔は活氣に滿ちて來た、而も今までの様に陰氣で沈黙で遠慮勝な影は少しもなく、時として信子や蝶子よりも子供らしく見える事もあつた。

四

恁ういふ睦子の變化は何人の眼にも著しく見えた。睦子自身も其れに氣が付いた、何かしらん明るい光が胸の中に射し込んでる様な氣がする、中にも克巳と只二人で牧場に立つたり草刈の手傳をしたり水を汲んだり牛を洗つたりする時には抑へきれない様な喜びを感じて聲を高く擧げて唄つて見たくなるのであつた。彼女は何事にも恥かしくなくなつた、又恥かしいと思ふ様な事に出會さなかつた。

「此儘で可い〳〵」と彼女は獨りで言ふのであつた、彼女に取つては此儘が最大幸福なのである。

二人が快く話して居ると、麓の草路に白い洋傘が見えた。

「誰だらう」と克巳は言つた。

「蝶子さんでせう？　屹度」

話が終らぬ中に洋傘が仰向いた。

「あら、萬龜ちやんだわ」

「今別れて來た許りなのに什麽したんだらう」

「急に淋しくなつたからでせう」

恁う言ひさして、睦子は脱兎の如く驅け出した、而して萬龜子と二人で一つの洋傘に入つた。

「どうして來たの？」

「淋しくて仕様がないのよ」と萬龜子は抑える様に言つて「彼處に居るのは克巳さんぢやないの？」

「えゝ爾よ、今歸ると直ぐ仕事に掛つたのよ、私も水汲みよ」

「あら爾？」と萬龜子は氣の無い返事をして「好い土地だわね」

「空氣が好くて眺望が好くて靜かなのよ」

「貴方は此處から學校へ通ふの？」

「えゝ、併し私は此の夏休みが濟むと同時に學校を辭めようと思つてるのよ」

「どうして？」と言つた時二人は丘の上に上つた。克巳の姿が見えない。

「あら、何處へ行つたんでせう、克巳さん？」と睦子は呼んだ。聲がない。
「爺や、克巳さんは？」
秣場に居ると思つたのは爺やでなくて克巳であつた。
「あら」と睦子は袂を口に當てて笑つた。「酷いわ、克巳さん」
「今朝は失敬」と克巳は秣の中から首を出したが直ぐ引込めて秣を切り始めた。彼は萬龜子を見るや否や逃ぐる樣に此處に隱れたのである。
「出て被來いよ」と睦子は言つた。
「今直ぐ行きます」
然う言つたが彼は庖丁を放さなかつた。
「忙しいんでせう」と萬龜子は陰氣さうに言つて「彼方へ行きませう」
「えい、行きませう」
萬龜子は克巳の擧動が少しく變だと思つた。
彼女は淋しい須磨から遙々此の葛城山の麓まで來たのに昨日の樣に賑やかに陽氣に樂しく一日を過したいと思つたからであつた、二人が一齊に歡迎してくれるだらうと思つて居た。其れが今豫期に反して克巳はいかにも他所々々しい。彼女は失望した。
「どうしたんだらう」と彼女は考へた、併し此の考が纏まらぬ中に睦子は嬉しさうに笑つたり語つたりした、其れがいかにも快活に見えた。須磨へ來た昨日から、姉が餘程變つたとは思つたものの須磨よりも此の山では一層變り樣が激しいと思つた。
「ねえ萬龜ちやん、貴方のお蔭で此の農園が元のものになりましたわ」と睦子は言つた。
「あゝ爾？」と萬龜子は聞いて居なかつたので無意識に答へて「して貴方は什麼なさるの？」
「何が？」と睦子は突然の問にまご〳〵した、而して赤い牛の背中を撫でてやつた。
「貴方が學校を辭めてどうなさるの？」
「どうもしないわ、克巳さんの手傳ひをしますわ、却々人手が要るのよ」
「爾？　其れから？」
「仕事が澤山あるのよ、池を掘つて蓮を植ゑるのよ、それから苺を植ゑるのよ、其れからトマトウもね、克巳さんが自分の好きなものばかり植ゑようとなさるのよ、だから私は損だわねえ」
「私歸らうかしら」と萬龜子は突然言つた。

五

今來たばかりの萬龜子が急に歸ると聞いて睦子は吃驚した。
「どうして？」
「いゝえね、只歸りたくなつたのよ」
萬龜子は自分ながら其れは嫉妬のためだといふ事が解つた、同時に恁麼事を言ふのは姉さんに面當がましい不穩の事だと思つた、爾思ひながらも恁うなると最早や引返すわけにも行かない。
「又來ますわ」と彼女は歩き出した。
「あら、可いぢやないの？」と睦子は追驅ける樣にして「何か氣に障つた事があつて？」
「いゝえ、姉さん、私折り〳〵恁麼事があるのよ、氣に掛けないで頂戴ね、二三日中に又來るわ」
送つて行くといふ姉を強ひて斷つて萬龜子は再び元の路を歩いた。日がじり〳〵と照る、遠く森で蟬の諸聲が涼しく聞ゆる。萬龜子は途中で「濟まない」と思つた、が足を返す氣にもなれなかつた。今朝は波打つ須磨の濱邊で人々に捨てられた、今は綠の野邊で我から姉と遠ざからねばならなくなつた、何といふ淋しい生活だらうと彼女はしみ〳〵と思つた。
萬龜子が歸つた後で克巳は漸く秣場を出て來た。

「どうして歸つたのだらう」
「さあ、どうしてでせう」
「妙な人だなあ」と克巳は言つた、而して其れは自分が快く迎へなかつたためではなからうかと思ひ當つた時に急に狼狽へて「爾ぢやない、小屋が汚いから宿る處もないと思つて遠慮したのだらう」と自分で解釋して「爾だ、其れに違ひない」と決めてしまつた。併し彼自身は自分が林場に引込んで逃げて居たといふ事は餘りに卑怯であつたと思つた。
「なぜ隠れたんだらう、僕は何故萬龜さんを恐れるんだらう」と彼は獨りで言つた。
萬龜子は薄暗い心持で汽車に乗つた。彼女は何も彼も厭になつた、而して一刻も早く須磨へ歸つて獨りで考へて見たい、爾したら乾度好い考が纏まる樣な氣がした。だが須磨へ歸ると淋しさが一層激しくなつた。
「私は氣が狂ひやしないだらうか」と彼女は思つた、良人もなく子もなく友もなき本當の孤獨、何時までこれが續くであらうか、今まであの人達が來なかつた時には左程までに思はなかつたが一夜一日賑やかに暮らして見ると、もう堪へきれなく淋しさが骨身に沁み込む。
彼女は此の淋しさを紛らすために、三味線の師匠を呼んだり、茶の湯や活花や洋琴の稽古をした、而して他の事を考へる暇がないにしようと思つた。彼女は又一生懸命に着物弄りを始めた、娘時代の派手な長襦袢や帶を引出しては着て見た、頭を大ハイカラにして見たり島田にしたり丸髷にしたり、時には銀杏返しにしたりした、紅い襦袢や帶は何より嬉しかつた、其れを着て居る間は小娘の樣な氣になれた。幾つも幾つも人形を買つて來ては其の着物を縫うてやる、其那事で彼女は一日々々を送つた。睦子から幾度も手紙が來たけれども返事も出さなかつた。
と或日橋本から手紙が來た。
「來る八月一日夕方拙宅に於て結婚式を擧げるから御出で下さい」といふ簡單な文面であつた。
彼女は暫時考へて行かぬ事に決めた。
「行つたら乾度私の氣持が惡くなるだらう」と彼女は自分に向つて言つた。
其れから間もなく蝶子と章の結婚の通知も來た。これにも彼女は行かなかつた。
「みんなが幸福だ、不幸なのは私一人だ、私は何の惡い事をしたんだらう」と彼女は獨りで言つた。

六

善い事をしても善い報が來ない人がある、惡い事をしても惡い報が來ない人がある。原因があつても結果のない事がある。萬龜子は自ら何の罪をも犯さないと信じて居る、其れに什麼して自分が幸福になれないのだらうか、其れを思ふと悲しくなる、併し誰を恨み誰に訴へよう。彼女は章や橋本の結婚を聞く度に何とも言へぬ妬ましさを感じた、人々の幸福は自分にも嬉しいと思ひながら一方に自分ばかりを虐げる運命の神を呪うた。
或時爲三がひよつこりやつて來た。萬龜子は丁度洋琴の稽古をして居る處であつた
「豪う御無沙汰や、御變りがおまへんか」と彼は萬龜子の顏色を偸み見る樣に籐椅子に腰を掛け―私講和に來ましたんや」
「何を仰有るんです」と萬龜子は顫へる身體を漸と制へて、洋琴の方を向きながら言つた。
「何をつてお前、私一人で淋しうて堪らんのや、矢張お前の事が忘れられんのやさかいな、惚れた弱味や、握手しまよか」
「折角でございますけれども、御斷り申します」と萬龜子はぷり／＼して言つた。

「左様か、不可へんか、どうしても不可へんか、頭を下げても不可へんか、逆立して、御願しても不可へんか」

萬龜子は答へなかつた。

「ぢや去にまつさ、左様なら」

掛捨に來たのか謝罪に來たのか解らない、其儘爲三は歸つてしまつた。

其の翌日再びやつて來た。

「考へてくれはつたかな」と彼は先づ恁う言つた。「返事を聞きに來たんや」

「御返事は昨日申し上げたつもりです」

「左様か」と彼は又もや平氣な顏をして歸つてしまつた。

と一日隔いて夕方彼は五六名の藝妓を伴れてやつて來た。

「濟みまへんけどもな、涼みのお客様を伴れて來たさかいに御座敷を貸して下はれ」

萬龜子は居室に籠つて出なかつた、併し彼女は初めて藝妓といふものが客を相手に騒ぐ狀況を見もし聞きもした。大阪の店へ訪ねて來た時とは殆ど別人の様、酒は飲む、饒舌る、唄ふ、踊る、其の語る處は聞くに堪へない卑猥な言葉で、唄ふ唄には音樂らしい詩的な[illegible]味があるでなし、踊る踊は、手足を細かく動かすだけで心の底から踊らうといふ氣分があるでなし、凡てが卑しく凡てが騒々しく、恰ら電車と自動車の響の中に埃を浴びて酒を飲んでる様に見える。

「何が面白いのだらう」と萬龜子はつく〴〵と考へた。「あの藝妓達だつて皆な人間の娘だ、中には相當の資産もあり教育もある者もある、あの人達自身も此那事は詰らないと思つてるに違ひない、もつと〳〵本當に面白いものを望んで居るんだらう、併しあの人達は御客の氣に入らなければならない、商賣だ、お客は卑しい言葉下劣な擧動を喜ぶ、そこで藝妓も卑しくなり下劣になるのだ、して見ると藝妓を墮落させるのは爲三の様な無學で無智で物質的で肉慾的なお客の罪だ、藝妓ばかりではなく凡ての婦人を墮落させるのは、凡て恁ういふ男なのだ」

萬龜子は早く蚊帳の中に入り團扇を使ひながら恁那事を考へて居ると、座敷は益〻亂痴氣騒ぎになつた。どたんばたん踊る、轉ぶ、悲鳴を擧げる。

「テンツルテッテチ追手に帆上げてツツンチシャン」

「此の家には居られない」と萬龜子は思うた、而して深い呼吸を吐いた。

暑苦しいので一枚だけ雨戸を殘して置いた窓から外の暗が蚊帳に迫つて冷々とした風が來る度に、松の枝がまざ〳〵と動く、枝を外れて一つの星が光つて居た、假令ば針の穴ほどの小さな光で、其れが暗黒の地上に向つて何事か深い謎を語るかの如くに見えた。萬龜子は凝と其れを見詰めた、座敷は愈騒ぎ出す、星は益〻靜かに淋しい。萬龜子は泫然と涙を垂れた。

七

朝に眼が覺めると幸ひに爲三の姿が見えなかつた。萬龜子は慌てて顏を洗はぬ中に手紙を書いた。其れは左の簡單な文句である。

「貴方と私は夫婦でも何でもない積りです、其れに貴方が私の家を脅かしなさる、私は貴方に立退を請求します、其れが濟むまで私は此の家に歸りません」

恁う爲三に當てて書いて室を出た。廊下を通ると座敷の簾越しに蚊帳の中に寢て居る藝妓達の不體裁な姿が見える、其の眞中に素裸の儘膨れた腹を仰向けに鼾を掻いて居るのは爲三である、赤い毛絲の腹卷が特に卑しく見えた。萬龜子は自分が侮辱された様な氣がして急いで其處を通り抜けた、而して[illegible]を洗ふや否や[illegible]故

の着替や手廻の道具を風呂敷に包んで別莊を出た。電車に乘るまでは何處へ行くといふ當もなかつたが、彼女は矢張大阪の方へ氣が向いた、而して大阪へ着いた時には葛城の麓の姉や克巳の姿を思ひ浮べて居た。

「先達て私が行つた時に私は不當に惡かつた、私はどうして彼那に嫉妬が起つたのだらう、もう今度はどんな事があつても嫉妬なんかしやしない」

彼女は恁う思ひ定めた。

克巳の農場に着いた時には最早や正午頃であつた。克巳と睦子は食卓に向つた居た。

「あら萬龜ちやん」と睦子は吃驚した樣に喜んで「能く來てくれたわねえ」

「私當分歸らないつもりで着替持參の上でやつて來たのよ」と萬龜子は晴々しく言つて「曾日は失禮しましたわねえ」

「どうしたの、あの時は？」と睦子はにこ〳〵して居る。

「變な氣分になつたのよ、あら御飯なの？」

「えい、一緒に食べない？　何も無いわよ」

「無くたつて可いわ」

「鮭があるわ、貴方が好きだつたわね」と睦子は言つて克巳に向ひ「貴方、何をして被居るの？」

克巳は素裸に勞働服の半洋袴を穿いたまゝで飯を食つて居るので、萬龜子が來たので急に上衣を着ようかどうしようかとまご〳〵して居る處であつた。で睦子に言はれて「失敬！」と言つたまゝ茶碗にざぶ〳〵冷水を注ぎかけた、其の赤銅色の皮膚と隆々と發達した肉付とは如何にも健全で、今朝藝妓の中に雜魚寢をして居た蒼白い脂肪だらけの爲三の身體とは雲泥の差があると萬龜子は思つた。

食卓は賑はつた。克巳は生な胡瓜に生味噌を付けて美味さうにがり〳〵と噛るので二人は笑つた。眼を放せば綠の平野に白日の光が溢れて鷄の聲や牛の聲が聞える、埃と雜鬧と算盤と儲かりまつかといふ聲が渦卷く大阪の市街とは別天地の感がある。

「可いわね〳〵」と萬龜子は言續けた。

克巳は箸を捨てるや否や鍬を擔げて畠へ出た。彼は以前ほどは萬龜子を恐れなくなつた、而して極めて長閑な心持で西瓜畠へ出た。西瓜は廣い葉裏に圓々とした綠の尻を見せて居る、何れも〳〵豐かに實つて、水々として莖や葉が光つて居た。彼は西瓜の下に藁を敷き代へてやつてる中に不圖恁う呟いた。

「何しに來たんだらう」

其れから暫時、其の事を忘れて居た、と彼は畠を出る時また獨りで言つた。

「何しに來たんだらう」

顏を見ると昔を思ひ出す、見ずに居ると氣が安らかに自分の心の凡てが睦子に注がれて居る樣に思ふ。彼はこのために何れだけ苦んだか知れないのであつた、一人が二人に戀するのは享樂主義の色魔の心だと自らを罵つた、萬龜子の事を考へると今日の境遇から救ひ出して其の暗い生活に光を與へねばならぬと腹の蟲が叫ぶ。睦子の事を考へると我が身の犧牲となり苦勞の數を盡した女を捨つる事は出來ぬともう一つの肚の蟲が叫ぶ。其處で彼は恩や義理を別にして自分の愛情が何れにあるかと自問して見た。

「兩方にある」と自分が答へた。

八

打解け難いものが三人に一つづつあつた、併し三人は其れを言はなかつた、而して只面白い話をして樂しく無邪氣に暮らさうと思つた。爾う思ひながらも、何時か一度は破裂せずには濟まないといふ氣が三人の胸にあつた。

一日萬龜子は姉に手傳つて畠から豆を採つ

て居た。赫々と照る日の下で姉さん冠をして野良仕事をするのは興味深かつた。と暫時經つて睦子は籠を取りに行くと言つて家の方へ去つた。萬龜子は疲れて草の上に腰を下して待てど姉が歸つて來ない、三十分經つた、一時間も經つたが見えない。彼女は最早や根氣が盡きて歸つた。家へ入つたが姉が居ない。そこで彼女は茂平に訊ねた。

「お二人で豚小屋に居られるだ」と茂平は答へた。

「あら酷いわ」と萬龜子は何となく馬鹿にされた心持で言つた。で彼女は下駄を引掛けて豚小屋へ行つた。小屋の方から二人の笑聲が聞えた。萬龜子の胸が又波立つた。

「姉さん」と彼女を呼んだ。實を言ふと此儘足を戻したかつたのであつたが、彼女は自分ながら嫉妬深い事を警戒してるので、故意と平氣で二人の前へ出た。「私待つて居たのよ」

「あゝ爾？」と睦子は豚の方に夢中になつて、濟みませんとも何とも言はなかつた、而して自分の胸に小犬位の豚の兒を抱き上げて頬摺して居た。

「其れが睦さんのだね。僕のはこれだ」と克巳は薄茶色の仔豚を抱き上げて「こん方が可愛いよ」

「いゝえ、此の方が可愛いわ」と睦子が言つた。

「萬龜さんにも一頭呈げようか」と克巳は言つた。

「えい、何卒」と萬龜子は氣の無い聲で言つた。いかにも其れは詰らないと言つた風に聞えたので、萬龜子は自分で言ひ足した。「可愛いもんだわねえ」

恁ふ言つたが其れも何だか取つて粘付けた樣な挨拶になつた。

「爾して置くが可い、後で又」と克巳は不興氣に言つて其處を去つた。

「私、濟まなかつたねえ」と萬龜子は突然言つた。

「どうして？」と睦子は驚いた。

「私、御邪魔をしましたのね」

萬龜子は恁う言つたが、其れがいかにも厭味らしいので「御仕事の」と附加へた。

「いゝえ、何でもないわ」と睦子は不思議さうに言つたが暫時あつて刷と顔を染めた。

恁ういふ狀態が幾度もあつた。何かにつけて萬龜子は悲しかつた、悲しさが充滿になつて自分が此の世から捨てられた樣な氣がするかと思へば至極小さな動機から急に又嬉しくなつて唄を唄つて見たくなる。「ヒステリーよ」と睦子は言つた。

或日萬龜子は克巳に賴まれて家畜書の飜譯を淨書して居た。恁ういふ仕事を彼女が望んだのである、偶に二人が朝から晩まで離れずに居ようとすれば嫉妬も起り自分もいやな思ひをしなければならないから、自分だけお家に居る方が可いと思うたのである。家畜の書には牛の畫や解剖圖の樣なものが澤山あるので其れを透き寫しをするに中々骨が折れた。彼女は疲れて外を見やつた、眞紅な夕日が死の如く靜かに西の平野に沈んで行く、日は沈みきつても野は未だ明るかつた、靜かな〳〵夏の夕で暑くはあるが空氣が澄んで居る。萬龜子はペンを持つた手を右の頰に當てたまゝ茫然と見やつてる中に野の方から早稻田の校歌が聞える。

「都の西北、早稻田の森に……」

聲は克巳と睦子である。バスとアルトが程よく調をなして青々とした野の空から森の街に響かす。聲は段々に近づいて來る。

「私は一人ぽつちだ」と萬龜子は言つた、而して急に悲しくなつた。

と唄が止んで睦子の足音が聞えた。

「萬龜ちやん〳〵、一寸御覽なさい、まあの

實の綺麗な事」
恁う言つて睦子は縁先から萬龜子を促す樣に、
「どうしたの？　萬龜ちやん、又ヒステリー」
「何も言はないで頂戴、私、誰かに何か言はれるともう泣きたくなるから」と萬龜子は横を向いて言つた。

九

嫉妬！　何人にもあるものだが何人も亦此れがために好い結果を見る事が出來ないのは嫉妬である。萬龜子の嫉妬は日增しに強くなつた。彼女自ら其れを恐れ其れを抑へようと努むるに拘らず、假令ばどんな緻密な網でも魚を漏らす事がある樣に、殆ど無意識の際に嫉妬が咄嗟に迸り出るのであつた。

其れは單に姉に對するものばかりでもなかつた、彼女は凡てのものに對して嫉妬を起つた。

此の世の中に凡ての人が自分より幸福であるのに、私ばかりが何故恁那に不幸なのだらう、恁ういふ悲觀が根本で、其れから幾條かの枝が出た。未婚の女を見ればあの人は屹度理想の男と結婚するだらうと思ひ、中年の女を見ればあの人は良人と睦まじく暮らしてるだらうと思ひ、老年の女を見ればあの人は十分存分の幸福を味つて來たのだと思ふ、而して私ばかりが若いのに淋しく暗く暮らして行くのだ。

其れは最初の一歩が輕卒であつたといふ自分の罪だとは思つてゐるが、其れなら此處に全く全生涯を洗ひ落して生れ變つた心持で人並に新しい心持になり、若やかな戀も出來、伸びて行く前途も認め、輕やかな明るい心持になれさうなものだが、扨て其れが出來ない、比べて見ると、自分より姉さんの方が遙かに明るく若々しい。

「暴れて〳〵暴れ廻つて奔放な生活をして見たい、多くの若い男に戀はれて片端から飜弄して見たい。外國へ走らうか、女優にならうか」

恁ういふ自暴的な考が惡魔の眼の如く輝く事もある、が併し彼女は直ぐに其れに飛び付く程の勇氣もない。性根が舊道德に囚はれて表面ばかりの新らしい女は大阪にも幾らもある、女優の樣な裝をして詩人や畫家に交通をして強ひて大膽さうな言葉や擧動を弄して居る、又性根が新らしくて表面の古い女も幾らもある、何か自分の自由を得たい、奴隷的の羈絆から脫したいと思ひつゝも、妙な義理や外聞に怯ぢて屈服して居る。

「私は舊くも新らしくもない」と萬龜子は思つた。凡てが其時々々の氣紛れで生きて來たのだ、或時には道德的になつたり或時は反抗して見たくなつたりする。どつちでも可いから其れを一つにしたい――と彼女は悶えた。假令ば克巳に對する戀も、自分の戀は限界の過ぎた古い女の樣に何の役にも立たないと思つて居るが、一面に此の戀を捨てゝしまふ事も出來なかつた、若しそれを捨てたら彼女には生の必要がなくなるのである。考へると夢い、はかない水の泡沫の樣なものを唯一の望みとなし樂みとなし自分勝手に戀を作つて其れに縋つて笑つたり泣いたりして居るのだ。

恁ういふ事は彼女の頭に明晰と解つてゐるだけに彼女は苦しい、此の苦みの結果は何も陰氣な溜息や涙となつて姉や克巳に當るのであつた。

――恁那風では克巳さんに段々厭がられる許りだ――

彼女は幾度も恁う思うて氣を取直して快活に努むるものの、毎も失敗に終つた。實際克巳は萬龜子の陰氣な顏よりも睦子の陽氣な顏の方が好きになつた。其れが萬龜子にも解つた。解ればなるだけ彼女は狼狽して其れを恢復しようと思ふ、乃で何時の間にか彼女は姉の競爭

者となつた、
「私は今まで詰らなかつたのだから是から昔に返るのだ」
自己の生活のために什麼事でも踏破らなきやならない、姉に對しても義理立をする必要かない。
恁ういふ點まで彼女の心は進んだ、が時としてはもう何にも要らなくなつて此儘死んでしまひたいと思ふ。
厭な貌を見せるよりもいつそ須磨へ歸つてしまはうかと考へて見る、其れは一日に幾度だか數へきれない。
「でも克巳さんの胸を開くまでは……」
恁う思ふと歸られぬ、併し克巳の胸を聽くといふ事は自分の蓋を開くよりも恐ろしい事である。

一〇

今日は歸らう明日は歸らうと思ひつゝ萬龜子は歸る事が出來ない、而して克巳と睦子の間が次第々々に親しさが増してゆくのを見るにつけ孤獨の淋しさを感ずると共に猶別れる事が出來なかつた、
或時彼女は此の淋しさに疲れて野に出ようと思つた、彼女の心は急に暗くなつた。
姉さんは何處へ行つたらう、又しても克巳さんと二人限かしらん—
彼女は自分の眼の届く處に姉が居ると心安らかで何とも言へぬ靜かな氣分になるが、少しでも姉が見えないと直ぐ克巳を聯想するのである、而して自分ながら恥かしい程嫉妬の念が燃え立つ。そこで彼女は其れを見屆けるために室を出た。夏の四時頃の太陽は未だ衰へぬ餘力の光を一面に畑ものに浴びせて居る。彼女はいつも畠へ出る時に用ふる、經木眞田の大きな海水帽の樣なものを被つて紐を腮に結んだ、彼女の心は極めて亂れて居た。二人が一緒に居たら默つて歸つてやらう、と思ひ「いや、平氣で話をしよう」と思ひ「怒つた顔を見せようか、但しは笑つて居ようか」と惑うたりした。併し彼女は直ぐに此の亂れた心を恢復した。
木小屋の裏手—眼前に花畠と蔬菜畠が果てしなく開けて居る處に睦子は只一人根株に腰を掛けて籠から籠へ茄子を移して居た。紫色の生新な茄子の幾つかが美しい手の上に載せられ數へられて直ぐ次なる籠へ靜かに落される、紺飛白の單衣に水色の半襟を忍ばして赤い襷をした八つ口から眞白な肌と乳房の邊が手を伸ばす度に露はれる、草履を穿いた足は籠の方へ投げやつて見えぬが、赤い腰卷と膝から下の眞直な脚は如何にも若々しい。
「まあ娘の樣だ」と萬龜子は思つた。「此頃姉さんは急に若くなつた」
併し睦子の傍に克巳が居らぬといふ事は何より嬉しかつた、而して其れは當然の樣に思へた。
「何も克巳さんとばかり一緒に居なければならない筈はないのだ—
そこで萬龜子は至極愉快な氣持になつて竊と足を忍ばして背後から、わつと脅かした。
「あら、吃驚したわ」と睦子は誇張した樣に笑つて嫣然し「御仕事は濟んで?」
「えい、概略書いてしまつたのよ、まあ大きな胡瓜!」と萬龜子は籠を覗いて青々とした大きな胡瓜を取上げた。
「手傳つて頂戴ね」
「えい、數へて入れゝば可いんでせう?」
「えゝ、茄子と胡瓜と一緒にしちや厭よ」
「豈夫姉さん」
二人は笑つた。丁度眼の前は花畠で千日草の黄色な花と蟲取撫子の紫が重なり合ひ、金盞草や矢車草や千鳥草の幾つもの花が咲いてフロックスの様々な色彩が地を染めて居る、ダリ

ヤは二番花を待つて未だ咲かないが、早咲のコスモスやカンナや檀特や黄蜀葵が垣根の如く背景をなして居る。右は一面の茄子畠、胡瓜畠、麥を刈つた後に南瓜の花が縱横に這ひ出して居る。折り〳〵涼しい風が花畠や蔬菜の生々とした香を送る、是等一望の青々とした野の上を眞夏の淺黄天が輝いて包んで居る。

「あら、隨分大きいわれ、私吃驚したわ」と萬龜子は胡瓜を握りながら木小屋の方を見て言つた。

「なあに？」

「向日葵よ」

「あゝ隨分大きく咲きましたわ」

いかにも木小屋の屋根よりも高くなりさらに向日葵の一列がある、其の盆大の黄色な花は木小屋の板葺の屋根に相應しかつた、輪郭の黄の中央から黒い實がそろ〳〵色づいて居る。

「これは失戀の花だつて、爾？」と萬龜子は言つた。

「あゝ其那話があるのね、希臘の神話でせう」と睦子は答へた、そして「一イ二ウ三イ・・・」と茄子を數へた。

「一イ二ウ三イ」と萬龜子も胡瓜を數へた。

四本の美しい腕は籠から籠に出沒した。野は光つて居る。

二

二人は暫時茄子と胡瓜を數へた。其の間に茂平は二度ほど畠から胡瓜を滿載した籠を運んで二人の前に置いて去つた。

「未だあるの？」と睦子は吻と後れ毛を拂つて聲を掛けた。

「えい、まだ〳〵富士の山ほど」と茂平は言捨てて去つた。

「でもねえ、其れがどうしたの？ 向日葵の話は」と萬龜子は突然訊ねた。

「あゝ〳〵、神話？」と睦子は既に過ぎ去つた話題を又思ひ出して「能くは知らないけれども向日葵はアポロ――太陽だわね――アポロに戀をしたけれどもアポロは向日葵を何とも思はないので、果敢ない戀を抱いて向日葵は始終遠くからアポロの姿ばかりを見詰めて居るんですとさ、だから朝は東に向き夕方には西に向くでせう？」

「あゝ爾々、私も何かの本で見ましたわ」と萬龜子は言つて「可哀さうだわね」

「爾よ、可哀さうだわ」と睦子は茄子の籠を手元に寄せ直し「併し萬龜ちやん、其那事は本當に悲しい事でせうか、私わからないわ」

「どうして、姉さん」

「失戀の苦痛といふ事は、其れや何方かと言へば、望み通りになる方が可いに違ひないけれども、世間によくある樣に失戀の爲に一生を無駄にするのは馬鹿々々しいと思ふわ」

「あら！ どうして？」と萬龜子は手を休めて姉の顏を見戍つた。

「萬龜ちやんはどう思つて？」

「其れや私、失戀ほど辛いものはないと思ひますわ、姉さんはどうして其那事を言ふの？」

「だつて爾ぢやないの？ 戀といふものは、必ず自分の愛する人を自分のものにしようといふ目的ばかりでないと思ふわ」

「あら」と萬龜子は一寸驚いて「戀は絶對に其の人を自分の所有にすることを要求するものぢやなくつて？ 若し爾でなかつたら戀は遊戲だと思ひますわ、良人が妾を蓄へたり茶屋遊びをしたりしても平氣で居られる人が世間に多くありますが、其れは良人を愛しないからだと思ひますわ、自分の生命を捧げる代りに、男の生命も自分の所有にするのでなければ滿足が出來ません」

「其れは誰しも爾思ひます」と睦子は微笑して

「けれども萬龜ちやん、假令ば私が誰かに戀をすると假定ひますね、私としては其の人と結婚したいと思ひます、併し結婚は必ずしも雙方の幸福でない事があつたら什麼でせう、若しくは又結婚をすると自分だけは幸福だけれども、先方では不幸になる場合には什麼しませう」

「其れは姉さん、其の假定が間違つて居ます、雙方互に愛して居れば、其の結婚に不幸の影が射す筈がありませんわ、何と言つても人間は愛する同士の結婚ほど幸福な事はないんですからね、それさへあれば、貧乏をしても零落れても世間から何と言はれても少しも苦痛ではありませんわ、其れが出來ないために皆な苦むのぢやありませんか」

萬龜子の聲は段々顫へて來た。

「いゝえ〳〵」と睦子は矢張微笑を續けて言つた「私は違ひますわ、結婚の出來ないのは不幸でありません、一番不幸なのは戀の無い人だと思ひますわ、戀する人が一人あれば結婚はしてもしなくても同じぢやなくつて？」

「あら、益々難しいわ」と萬龜子は熱心に言つた。

二

二人の意見は全然異つて居る。萬龜子は戀の目的は結婚にある、人間の幸福は此の結婚以外には無いと主張する。之に對して睦子は戀は必ずしも結婚を要求しない、人間の幸福は結婚よりも戀にあるのだ、誰か一人に全生命を捧げて戀をして居れば其れで可いのだと言ふ。

「若し姉さん、其の戀が先方に通じなかつたら什麼して？」と萬龜子が言つた。

「通じても通じなくても同じぢやなくつて？」と睦子は輕く答へて「女として一番高い處に戀を置きさへすれば其れが幸福でせう、宗教信者が神樣に祈禱を捧げる時に一番美しい涙が出るだらうと思ひますわ、併しどんな信者でも神樣と結婚しようとは思ひますまい、戀は其れと同じだと思ひますわ」

「まあ姉さんは！」と萬龜子は驚異の眼を瞬つて「其れで滿足が出來て？」

「えい、滿足ですわ」

「失戀になつても？」

「私、失戀といふ意味が解らないわ、自分の戀人が幸福でありさへすれば自分は孤獨であつても構はないぢやないの？」

「私にはどうしても解らないわ、戀人の幸福と自分の幸福と同じものでなければならないと思ひますわ」

「其れでも萬龜ちやん、貴方は若し失戀したら什麼して？」

「私は死んでしまふわ」と萬龜子は直ぐに答へて「姉さん、貴方は？」

「私は死にやしないわ、毎晩に戀人を思うてるだけでも幸福ぢやなくつて？」

「解つたわ」と萬龜子は突然叫んだ、而して凝と姉の顏を見詰めたが、涙がほろ〳〵と零れて膝に落ちた。

「あら、どうしたの？」と睦子は言つた。

萬龜子は答へなかつた、而うして籠の前に立直つて、「私悲しいわ」と言つたきり兩袖を顏に捲うて歩き出した。

「あら、萬龜ちやん」と睦子は聲を掛けた

萬龜子は振返りもしなかつた。

睦子は立上つて襷を外して袂に入れ、妹の背後姿を見送つたが再び襷を出して片端を口に銜へた

小屋を圍續く樺の枝に蜩がかな〳〵〳〵と啼き出した、西へ傾く日の光は赤い。

萬龜子は一人西日に顏を照られてとぼ〳〵と鳳仙花の咲き並ぶ畝路を歩いた。彼女は克巳が帽子もなしに勞働服の儘水桶を擔つて眞直に來るのを見た。此の場合克巳に顏を見られるのが

厭なので路を避けようと思つたが、其の暇もなかつた。克巳は萬龜子と摺れちがひになつた。彼は一言も言はなかつた、而して二人は黙つたまゝ別れた。

「姉さんの處へ行くのだ」と萬龜子は思つた、果して背後で笑聲が起つた。

「私は是でおしまひだ」と萬龜子は獨りで言つた、而して直ぐ「私は負けた／＼」と繰返した。彼女は自分の戀の如何に不自然であり如何に暴力的であるかを知つた。今まで其れを思はぬではなかつたが今日ほど明瞭とした事はなかつた。自分の戀は克巳の肉と血と靈魂の凡てを握らうとして居た、然るに姉は克巳に對して何物も要求して居らぬ、自分は苛々して泣いたり悶えたりして居るのに、姉は暢氣に樂しさうに笑つて居る、自分は野心に燃え立つて居るが、姉は靜かに無慾である。縱令今自分が克巳と夫婦になるにしても自分の心は決して穩かでない、自分が既に疵ものである事、子供がある事、其れだけでも自分の弱味である、此の弱味を持つて克巳の愛を得ようとは餘りに蟲が好過ぎる、實際此の弱味は此の後永久に自分を苦めるであらう、僻み、邪推、嫉妬、不満、暗い影がこれから生ずる、其れにしても姉の様に自分だけの戀を唯一の幸福として暮らす事が出來るなら、いつまでも無事に過し得るだらうか、我が慾望の餘りに強きを考へると來るべき結果は今から想ひやれる。

一三

翌日は朝から赫々と暑かつた。萬龜子は今日こそは歸らうと思ひつゝも矢張ぐづ／＼と午前を費した。克巳は朝から顔を見せなかつた。偶に牛小屋の前でちらと姿を認める事があつても彼は直ぐ逃げる様に體を隱すのであつた。

「どうせ別れるなら何も彼も言つてしまつてからにしたい」と萬龜子は思つて居たのだが、是には什麽す事も出來なかつた。

と丁度晝飯の時三人が一緒になつた。そこへ一通の手紙が來た。

「櫻井からだ」と克巳は言ひながら封を切り箸を擱いて眼を通した。

「宮島へ行つて被居るのね」と睦子は封筒を拾ひ上げて言つた。

「あゝ爾らしい、是非此の手紙を見るや否や出發して來いといふのだ。睦さん、行くか？」と克巳は快げに睦子を見やつた。

「えい、行きたいわ」と睦子は嫣然して萬龜子に「萬龜ちやん、什麽？」

「僧れ、私は……」と萬龜子は言ひ澁つた時克巳は手紙の終りを讀み終つて卓子の上に置いた。

「讀んでも可くつて？」と睦子は言ひながら手紙を展げた、而して終りの處まで來ると眉を顰めて「まあ厭た」と言ひながら俯向いた。

「馬鹿な事を！」と克巳は半ば怒つた様な半ば喜ぶ様な聲で言つた。

睦子の持つた手紙は例の古韻をや横引のものでなく、宿屋の備付らしい巻紙であつて、其の一端は展がつて萬龜子の眼にも見えた。「新婚旅行の御つもりにて被來下さい」と書き添へてあるのは明かに蝶子の手蹟である。

睦子は黙つて萬龜子の顔をちらと見やつた。克巳は自分と二人だけが此の手紙を見て萬龜子に見せないのは何だか水臭いと思つたのであるが、終りの文句を見せるのは憂鬱だと躊躇したのであつた

「可笑しな手紙よ、萬龜ちやん」と睦子は封筒に入れようとして「御覧になつて？」

「いゝえ、可いわ」と萬龜子は概略を察して言つた。「貴方方行つて被來いね、私留守番をするわ」

「あら、萬龜ちやんも行かなければ厭だわ」と睦子が言つた。
「可いわ、私何處へ行くのも氣が進まないから―」
恁う言つて萬龜子は「時によると私須磨へ歸るかも知れない」と言はうとしたが、其れでは餘り氣が僻む樣に思はれはしまいかと其れを口には出さなかつた。
「行つて見ても可いね」と克巳は突然言つた。
「橋本夫婦を誘はうぢやないか」
「信子さんは宮島に一週行きたいと言つて居ましたわ……併し……」
「私の事なら氣になさらないで頂戴」と萬龜子は言つた。
「でもねえ、克巳さん」と睦子はほつと耳根を染めたまゝ「止しませう」
「ぢや、止さう」と克巳は言つた。
萬龜子は何にも言はなかつた。彼女は自分のために二人が旅行を中止したのだと思うた、而して其れを氣の毒に思ふと同時に、何に就けても恁ういふ風に互に遠慮し合ひ胸の中を探り合ひ氣兼をし合はねばならなくなつた事を淋しく思うた。
「どうしても私の居ない方が可い」と彼女は考へた。
三人三様の默想の中に食事がつまらなく濟んだ。而して克巳はふいと席を起つて裏へ出た。何も彼も言つてしまふのは此時だと萬龜子は決心した、彼女も直ぐ席を起つた、而して克巳の後を追うた。二人の樣子の餘りに慌しいのに睦子は吃驚して二人を見送つたが、其儘食器を片付け始めた、

一四

萬龜子が行つた時、克巳は唐臼小屋の背後を狂氣の如く行き、戻りつして居た。彼は萬龜子の姿を見たが其の狂はしき擧動を止めなかつた。
「克巳さん」と萬龜子は聲を掛けた。
克巳ははたと立停まつた。
「私貴方に御話したい事があるんです」と萬龜子は躊躇せず言つた。
「聞きませう」と克巳は言つた。
「では私から申しませうか、貴方の方からお先に？」
「何方でも可いです」と克巳は答へて「歩きませう」
萬龜子は克巳と竝んで歩き出した。五六間ほど默つて居たが軈て克巳が言ひ出した。
「早い話はですな、萬龜さん、貴方と僕の關係を決めて貰ひたいのです」
「關係と仰有ると？」と萬龜子は十分其の意味を知つて居ながら言葉の行掛上で爾言つてしまつた。
「貴方は僕の妻になり僕は貴方の良人になるべく口には誓はないが心に誓ひましたね、貴方は其れを否認なさりはしますまい」
「えい、誓ひましたわ、私も」
「ところが二人は夫婦になれなくなりました」
「私の違約からです」
「いや、違約とか背信とか善とか惡とかを以て此の問題を議する事は可くないです、我れ〳〵は現在と將來の御相談をしませう、過去は一切言はずに」
「えい、承知しました」
「處で二人は夫婦になれなくなつた、併し今日は再び貴方は自由になり夫婦になれる、そこで我れ〳〵は昔の契約を履行すべきでせうか、但しは……」
「克巳さん」と萬龜子は遮つて「私の御話したいの、其れなのです、若し貴方が昔のまゝで被居るなら……」

「昔のまゝとは？…昔のまゝの愛があるかと問ひなさるんですか」
「えい」
「若し僕に愛があるとすれば什麽なりますか」
「其れは解つてる事ですわ、私の心には變りがありませんもの」
「待つて下さい」と克巳は慌しく制めて「其れを言ふには早いです、僕は未だ確實に決心して居ないのですから」
「其れも解つて居ます」
克巳は眞直に胸を反らして限りなき綠の野を睇めながら歩く。其れに並んだ萬龜子は俯向き勝に袂に擦れる稗や粟の穂にさら／＼と音させながら、男の足に後れぬ樣に小刻みに歩く。二人とも最早や何の含羞む處もなければ遠慮する處もなかつた。日の光は赤熱の度を加へて凡ての畠物を炎の中に包むかの如く照りつける。克巳の被つた大きな海水帽は折り／＼萬龜子の肩に影を落した。萬龜子は額の汗を袂で拭き拭きした、併し興奮した彼女は暑さを感じなかつた。
「僕の心持がお解りですか」と克巳は山と積んだ豆殼の邊を迂回し乍ら言つた。
「えい、大抵」
「いや、恐らくは解りますまい、僕は貴方を愛して居ます、併し僕は睦さんと結婚したいのです」
萬龜子は默つた、豫て期したる事ながら恁う何の前置なしに短刀直入の宣告を受けようとは思はなかつたのである。
「其れも大抵想像して居ましたわ」と萬龜子は極めて小さな聲で言つた。
「いや／＼」と克巳は打消す樣にして「僕はお二人の中一人を決め兼ねて居るのです、出來る事なら二人と結婚したい」
「二人と」
「爾です、二人とです」
恁う言つて克巳は急に足を停めて長い息をした。

一五

姉と妹、二人を妻にしたいといふのは何といふ破倫な事だらう、而も其の一人に向つて公言するに至つては侮辱是より大なるはない、併し克巳は最早や其等の事に遠慮する事は出來なくなつた、彼の胸は轟き彼の血は漲り、假令ば蟲歯を疾む人が痛さに堪へかねて猶も噛みしめる樣に、どうともなれといふ自暴の氣分も伴つて居た。
二人は眞直に歩き續けた、河南の平野は廣い、何處まで行くか解らない。日は益きら／＼と輝く。
「併し其れは出來ない事ぢやありませんの？」と萬龜子も溜息と共に言つた。
「爾です、出來ないから苦しいのです」
「では什麽なるんでせう」
「解らない」
「併しねえ克巳さん、貴方は何方かに決めなければならないわ、此の場合私は姉さんのために犧牲となれば屹度圓滿に纏まるだらうと思ひます、私は又犧牲になる方法を知つて居ますわ、だけれども爾いふ輕薄な事はしたくない、其那事で濟む樣な愛なら私だつて苦みやしませんわ、ですから此の上は只貴方の決心一つで決めるより他に道はありません、まこと貴方が私よりも姉さんを愛して被居るなら私は其れで以て諦めが付きます、其の他の理由では私も決して諦めません」
「能く言つてくれた」と克巳は直ぐに言つた。
「僕も幾度僕自身に問うたか知れません、睦さんか、萬龜さんか…」
「お決め下さい」と萬龜子は叫ぶ樣に烈しく言

つた。

「程度とでも言ふのか知らんが、僕は睦さんをより多く愛して居ます」

萬龜子はほつと立停まつた、而して直ぐ勇氣を呼起すものの如く歩き出した。

「其れで決まりましたわね」

「いや、決まりません」

「どうして」

「僕には愛の負債がある、爾だ、愛の負債、僕は最も適當な言葉を發見しました、曾て貴方を愛し貴方の良人にならうと決心したのは即ち僕が僕の心に對する愛の負債です、貴方に對する負債でなく、僕自身が僕に對する負債です、昔の愛が今だに生きて居ます、其の根が僕の胸一ぱいに深く〳〵根ざして居ます、其れを僕が刈り込む事が出來ないのです、其れは什麼いふ理由でせう」

「私が人の妻になつたのが惡かつたのですね」と萬龜子は突然言つた。

「貴方が人の妻になつても僕の愛に變りはありません」

「私に子供が出來たのが惡いのですか」

「僕は決して不快に思ひません」

「私の凡ての過去を許して下すつても姉さんの愛の方が強いのですね」

「古い愛には根があります、新らしい愛には芽があります、根は重く深く苦く刻みますが擴がりません、芽は日に〳〵ずん〳〵伸びて行きます、其れだけの差異であらうと思ひます、僕は根を捨てる事も出來なければ芽を摘む事も出來ないのです」

「では什麼すれば可いんでせう」

「三人が離れ〴〵になるか、でなければ……」

「一寸待つて下さい」と萬龜子は遮つた、而して片手で胸を凝と抑へ「克巳さん、此の話はこれきりにして下さらなくつて、私よつく考へて見ますわ」

「何をです」

「いゝえ、私今急に大變に可い事に思へる樣な考がひよいと浮んだのよ、私は油谷家へ歸りたくなりましたわ、愛だの戀だのつて詰らない樣に思つたのですのよ、貴方の昔の愛を生命の綱に捕まへて居た處で全く賴りない事なんですものね、今此で夫婦になつた處で貴方の胸に姉さんといふものが芽を吹き出せば名ばかりが夫婦でも貴方は全然私の所有でなくなるんですものね」

「爾です、僕が睦さんと夫婦になつて、貴方の昔の根が殘れば矢張僕は睦さんの所有でなくなります」

「どうして此那になつたのでせう」

「解らない」と克巳は言つた。

二人は立停まつて向うを見た。夏雲が平野の果に變幻怪奇な姿となつてむら〳〵と立ち、崩れては起り、動いては流れ行く。

一六

夕立が一降り來さうに南頭に眞黑な雲が陣取つた、而して折り〳〵雷鳴が聞えた。

「これで何も彼も決まりました、さあ歸りませう」と萬龜子は足を返した。

克巳は少し言ひ過ぎたかも知らぬと思つたので其の事を今一度思ひ返す樣に躊躇して同じく足を返した。

「今日私須磨へ歸りますわ」と萬龜子は言つた。

「爾ですか、其れが可いかも知れませんが、併し……」

恁う言ひ淀んで克巳は萬龜子の苦痛を察したので「何方でも」と附加へた。

萬龜子は默つた。無言の儘で十間餘りも歩いた。雨を含んだ風がさあ〳〵と稗畠を吹いて來た。

た。金剛山の頂は早や雲に蔽はれて西空から雲の上越しに明るい光線が箭の如く黒雲の中を瀧と彩つた。

「淋しいわね」と萬龜子は言つた。

「妙な事になつたものですな、お互に恁那事にならうとは思はなかつたですね」と克巳も涙ぐんで言つた。二人は又黙つた。

「諦められないと思つて居たのだが、恁うなつて見ると僕は矢張諦めて居たのだ」と克巳は思つた。「縦令睦さんが無いにしても僕は既に萬龜さんに對しては昔の心持でなかつたのだ、其れを氣付かずに居た」

克巳が恁う思うた時に萬龜子も同じ様な事を考へた。

「月日ほど殘酷なものはない、心の色が段々に薄くなつて行く」

雨がぽちり〳〵と降つて來た、山裾は眞暗になつて滿天悉く鼠色に變じた。二人が漸く納屋へ着いた時盆を覆す様に大雨が降り注いだ。其れは丁度睦子が傘を持つて迎ひに出ようとする處であつた。

「まあ可かつた〳〵」と睦子は幾度も言つた、而して先になつて家へ入り横にしぶく雨脚を防ぐために雨戸を繰り出した。

「姉さんには黙つてて頂戴ね」と萬龜子は小聲で克巳に言つた。

「あゝ爾しませう」と克巳は言つた。

此時雷は屋根の眞上を轉がり過ぎた、而して遠くで破裂の音がした。雨はぴたと止んだ、西空は青々として矢の如き雲が目の前を飛んで行く、畠物はしつとりと濡れて日光にきらきりと輝いた、屋根から落ちる雨水は非常な勢で緣先の地を掘つた、而して流れゆく儘に美しい小石や砂の肌を露はして幾つもの小流れを作つた。克巳は跣足で緣を下り棒の先で水の刷け路を付けた。雨後の畠を吹過ぎる風は冷々と心地好い。萬龜子は次第に朗らかになり行く西の青空を茫然眺めて居たが、軈て自分の持道具を小風呂敷に包み始めた。櫛を入れては手を休め白粉を入れては後れ毛を掻き上げる、凡てを入れてしまつてから風呂敷の二隅を結んだ、いくら結んでも其れが氣に入らぬので彼女は幾度も幾度もやり直した。兎角する中にぽとり〳〵と涙が落ちた、彼女は袂の先で涙の痕を拭いた。睦子の足音がしたからである。

「私歸るわ」と彼女は睦子に言はれぬ前に言つた。

「どうして?」

「私、坊やを見たくなつたのよ」

「あら、大阪へ行くの?」

「さあ、須磨へ來て貰ふか、大阪へ行くか解らないわ、姉さん、宮島へ行つたら歸途に須磨へ寄つて頂戴ね」

「あゝ行くわ、御馳走してね」

「あゝ御馳走するわ、今日宮島へ被行つて?」

「萬龜ちやんも行くと可いけれども」

「ではねえ、姉さん、恁うしませう、私後で直ぐ行くから宮島で待つてて頂戴ね」

「宮島へ來る?」

「あゝ行くわ、屹度行きますわ」

「では今晩一緒だつて好いぢやないの」

「でも私、永い間留守にして置いたから種々用事があるんですもの、ぐづ〳〵してゐると櫻井さん達が歸つてしまふでせう、被行るなら今晩が可いわ」

「ぢや屹度ね」

恁う言つて睦子は嫣然して「克巳さん、行きませうよ」と庭の克巳に聲を掛けた。

「あゝ行から」と克巳は言つた。

一七

三人は一緒に農園を出た。克巳と萬龜子は默

ひて平氣に――今までよりも遙かに親しげに話した、併し左の胸の中では最早や何も彼も終局を告げたと思つて居た。

汽車の中は極めて平凡であつた、睦子一人が心から嬉しさうに今度生れた豚の仔が來年になると其れ〴〵仔を生むから三十頭殖えるとか大阪には甘藍がないから盛に作らうと思ふとか、其那未來のある事を語つて居た　萬龜子は一々其れに挨拶するのが苦痛だつた、而して早く二人に別れたいと思つた。

大阪へ着いてから電車に乗つた。夕方なので會社員や勞働者が充滿であつた、夕立の後とて草履を穿いたものもあれば高下駄を穿いたものもある、邪魔さうに傘を持つてるもの懷に夏羽織を畳んで入れてるもの、千樣萬態であつた。此の混雜の中で三人は語る事も出來なかつた。

「あら不可ないわ」と睦子は慌てゝ叫んだ。

「さあ降りませう、萬龜ちやん、櫻井さんの家へ寄らなくてゝ」

「いゝえ、私は」と萬龜子は人知を喘じて答へた。

「では左樣なら、明日乾度ね」

「今晩何時の汽車なの？」

「今夜十時の汽車でせう、ねえ克巳さん」

「あゝ僕かな」と克巳は氣の無ささうな返辭をした。

「左樣なら」と睦子は電車から降りて窓の下から聲を掛けた。

「左樣なら」と萬龜子は日除を下さうとして手を掛けたが、極か堅くて下りなかつたので隣の窓へ顔を突き出して言つた。

「明日乾度ね」

「えゝ」

睦子は嫣然した。萬龜子も自分で意識しなかつたが嫣然したと思つた。

電車が動き出した、克巳の麥藁帽を被つた姿が横に窓を過ぎた、

「降りよう」と萬龜子は思つた、が既に晩かつた。

「降りれば可かつた」と彼女は呟いた、何といふ事はなけれども克巳にもう一遍言ひたい事がある樣な氣がした。そこで彼女は高麗橋で降りた。降りる時には殆ど重大な事件でもあるかの樣に極めて慌しかつた、電車の乘降に人を押し分けるなどいふ事は彼女には未だ無い事であつた。

併し降りて見ると彼女は何のために此所に慌てたのか解らなくなつた、そしてぽかんと立つたまゝ、洋傘の尖で草履の爪先を突つ突いて居た。

「何も用がないのだ」

嘲られる樣な心持で彼女は四邊を見廻した、其の中に彼女は克巳と睦子は今時分櫻井の家に入つてお母さんと話してるだらうと思つた、同時に彼女は自分獨りだけが本當の除外者にされたといふ氣がした。

そこで彼女は再び電車に乘らうとした、來る電車も、來る電車も滿員であつた、彼女は諦めて歩き出した。日は西の方に沈んだのに天は明るかつた、先刻程の落雷のために電氣に故障が出來たのだと町の人々は言ひ合つて居た。外は明るいが家の中は暗い。店々の人々は皆な軒下に出て團扇を使ひながら涼んで居る。

「敵ひまへんな」

「どないしたんだっしやろ」

人々の聲を空に聞き流して萬龜子は歩いて居た。不圖氣が付くと篤三の店の前である。

「あら、什麼したんだらう」

彼女は恁う言つたが別に驚きもしなかつた、其れは心の底の又底の方に微かに太郎の顔を見たいと言ふ氣があつたのである。

突然矢の如き熱情が胸を衝いて上つた、其れは今までの放心に對する反動とでも言ふ樣に、例へば嬰兒が乳房を見て狂的に抱き付く樣な狀態であつた。

「太郎を見たい」

凡ての失望や怨恨や耐へきれぬ打擊から自分を救ふものは只太郎だけである、此の上は太郎を生命の綱と賴む許りだ。恁う思ふと彼女は今まで太郎を忘れて居た事を大變に濟まないと思つた。彼女は殆ど狂的に家へ飛び込んだ。小僧が二人店先で水を撒いて居たが、不思議さうな顏をして萬龜子の後姿を見送つた。萬龜子が直ぐ勝手元で草履を脫ぎ茶の間へ上りかけた時、女中は薄暗から透し見て「あゝ」と聲を掛けたが直ぐ狎れ〳〵しく寄つて小聲に「御機嫌さんで」と言つた。

「お駒、お前も變りがないかえ」と萬龜子は言つた。

「はい、御家はんが須磨に御行きやしてからはな、家の中が大分に變りましたんや」

「どんな風に？」

恁う言つた時爲三と女と笑ふ聲が奧の室に聞こえた。

「御客樣？」

「はい、櫻井のハイカラさんだつせ」

其那事は什麼でも可いといふ風に萬龜子は聞き流して「坊やは？」

「中の室だつしやろ」

萬龜子は直ぐに中の室へ入つた。電燈が點らぬので庭に向いた緣の方から空明りが微かに室内を覗いて居た。其處に小さな蒲團の上に寢て居るのは紛れもない太郎である。二三箇月見ぬ中に餘程大きくなつたと萬龜子は思つた。圓々と肥つた手を兩方に擧げて、丁度人形の相撲の樣な恰好に寢ながら、兩足を蒲團から脫して搔卷は橫に除けられてある。萬龜子は竊と傍に坐つた。五分刈にした頭、眞白な額、太い眉毛、而して餘念なく眠つた眼、昔ながらに變らぬが、長い間打捨て置いた萬龜子の胸には何とも見へぬ懷かしさが充滿になつて、まあ能く達者で居てくれたと口の中で言つた。彼女は靜かに額に唇を接けた、太郎が其れを避ける樣に橫を向いた時圓い尻が冷不知の腹卷から露はれた。萬龜子は搔卷を掛けてやり、吻と息を吐いて又しみ〴〵と顏を見詰めた。此時灯の光がぱつと射して燭臺を提げた乳母の姿が現はれた。乳母は吃驚して萬龜子を見やつた。萬龜子は手眞似で以て乳母を制した。

「よく來て御くれやした」と乳母はもう淚を拭きかけた。

「御蔭で坊やも風邪も引かずにね、本當に乳母有難うよ」

恁う言つて萬龜子も泣きたくなつた。而して彼女は手燭を太郎の顏の方に差し寄せた。光が射したので太郎はぱつと眼を開いた。

「おう起きしたのかえ、母樣ですよ、坊や、母樣ですよ」と萬龜子は抱かうとした。

太郎は萬龜子の顏を見たが見る〳〵泣き出しさうな顏をした。

「お母樣に抱こして御覽」

太郎は犇と乳母の胸に縋り付いた。

「お母ちやんを御忘れやしたか」と乳母は萎びた乳房を握らせながら言つた。

太郎は恰ら恐いものを見る樣に萬龜子の顏をちろ〳〵橫目で見やつた。

「彼方へ行かう、乳母、彼方へ」

「もう少しね、坊や、一寸此方へ來てね」と萬龜子は手を取らうとした。

太郎はわつと泣き出した。

此時電燈が一時に點り出した。店の方で「わ

つ」と喝采する聲が起つた。
「子供に忘れられた」と萬龜子は不圖獨語の樣に言つた。

一九

太郎さへあれば凡ての苦みも忘るゝ事が出來る、こればかりを最後の望みとして來た萬龜子は今、太郎が全然自分を忘れてしまつたのを見て淋しさが脊骨を傳うて慄然と湧いた。
「矢張駄目だ」
乳母は小聲に一別以來の事を語つた。菊江が毎日の樣に來る事、舞妓と菊江が鞘當をやつた事、其れから店の番頭の久兵衛が逃げ出した事、同時に巡査やら刑事やらが來て家宅搜索をした事、阿片の密輸出で幾度も警察に召喚された事、菊江は萬龜子の指環や寶石類を人に見せびらかして、萬龜子が情人に見繼ぐために賣つたのを買ひ取つてやつたのだと言ひ廻る事などを飛び／＼に語つたが、萬龜子はそれを聞いて居なかつた。彼女は天下の凡てに捨てられた樣な氣がした。
「私歸らう」と彼女は言つた。
「お歸りやすか」と乳母は驚愕の眼を睜つて溜息を吐いた。
「歸るわ、乳母、坊やの事は賴みますよ」
乳母は太郎を抱きしめて、間斷なしに眼を拭いた。
「ではねえ、乳母」
「はい」
「何れ又ね」
「はい」
萬龜子は此時佛壇に氣が付いた。
「御父樣とお母樣に御灯だけでも進げよう」
蠟燭に灯を點して合掌してる中に、今まで思ひ設けぬ涙がぽろ／＼零れた。で彼女は立上つた。泣き伏す乳母やを置いて窃と室を出ると、
「あらッ」
聲を掛けたのは菊江であつた。
「おう」
外出と見えて帽子を被つた爲三も叫んだ。
「どうして來た」
「ちよいと坊やを見に」
「能う來てくれた、積る話があるのや」と爲三は「へゝゝ」と笑つた。
「私お先に行つて待つててよ」と菊江はぶりぶりして言つた。
「そないに悋氣しなはんなよ、へゝゝ」と爲三は又笑つた。
萬龜子は何にも言はずに二人の間を拔けて逃げる樣に外へ出た。彼女は殆ど罪人の樣な氣持で足を急いだ、何處を什麼歩いたか知らぬ、不圖氣が付くと其處は北濱であつた。
「まあ什麼したんだらう」
恁う思ひながら歩みを續けた。自分より五六歩前を二人の男女が歩いて居る。
「貴方、御止しなさいよ」と女が言ふ。
「構ふもんか、往來で林檎を食うて歩いたつて笑ふものが馬鹿だ」
「だつて私體裁が惡いわ」
「體裁が惡けりや五六歩後から來い、苟くも俺の嚊たるものが其れ位の事を氣にしちや天下の豪傑とは言へんぞ」
「私、豪傑でなくても可いわ」
白木綿の飛白に黒めりんすの帶を結び玉を作つて締めて洋杖を突いてのそ／＼行く男に添うて、女は矢張木綿の紺飛白にめりんすの帶、揃ひも揃うた木綿づくめで、親しさうに語つて行く。と女は不圖後ろを見た。
「あら」と彼女は言つた。「萬龜子さん」
「まあ」
二人の男女は橋本夫婦であつた。
「何處へ？」

「とれから宮島へ行くんです、克巳君と睦子さんも前田で待合せる積りになつて居ます、貴方は行きませんか」と橋本は言つた。

「いゝえ、私は急用が出來て須磨へ参りますから」

「左様ですか、残念ですな、では左様なら」

橋本夫婦に別れて萬龜子は半町ばかり歩いたが、其盡身體が動けなくなつた。

「私は孤獨だ、私だけが孤獨だ」

二〇

非常な疲勞を感じて萬龜子は須磨へ歸つた。

其れは九時過ぎであつた。留守番の婆さんは既に戸締をして寢て居た、耳が遠いので叩き起すに可なり骨が折れた。

「おや、御歸りやす」と婆さんは別に驚いた顔もせずに門を開けた。

萬龜子は默つて家に入つた。外は涼しい風が吹くが中はむし／＼蒸す様に暑い、四方の雨戸を閉めてあるのでどの室も／＼電燈ばかりが赤色を帶びた淋しい光を投げて居るだけで人の氣配がない。

萬龜子は電車の中で、家へ歸つたら直ぐ手足を伸ばして寢たいと思つて居た、そこで婆やに命令けて凡ての雨戸を開け放さした。海からの涼風が颯と吹き拔けて簾や窓帷を天井にまで吹き上げ吹き下した。萬龜子は二階座敷の眞中に坐つてぐつたりと兩手を垂れたまゝ海の方を見やつた。海は暗かつた、星は幾千となく光つて居た、最も光る星と最も光る星は互に瞬いて神秘な合圖を語るかの樣、而して天の暗い裾は微かに水平線の薄色を隔てて、其處に何とも言へぬ悲しさうな赤い色をして、漁火が一點二點見えた、時々海の面に薄明るくなつた、而して又元の暗に復る。

萬龜子はいつまでも默つて居た。二階から漏るゝ電燈の明りは庭の植込の梢を滑つて末廣がりに抹されて居る。海の音と松風の音が絶えず斷續する。今まで葛城の山下に住んだ習慣から彼女は最初は騒々しく感じたが、次第に其れが氣に掛らなくなつた。四方の闇に閉繞かれて自分だけが赫と明るい室に坐つて居るのは何だか恁う四方から見透されてる様、其れも氣にならなくなつた。

絶頂の孤獨！　父母は死に、良人と別れ、戀人と別れ姉と別れ我が子と別れた。自分はもう世の中のあらゆる人とは無關係になつてしまつた。

「克巳さんと姉さんとは宮島へ行く、橋本さん夫婦も行く、皆なお嬉しい思ひを懷いて一緒に笑ひつ語りつするのだ」

又しても人々が羨ましくなる。彼女はもう其那事は思ふまいと覺悟して居たのだが、凝としてる間に人々の嬉しさうな顔がちらり／＼眼先にちらつく。

身體が疲れてる割合に頭腦は極めて明晰して居た、恐らくは彼女の一生を通して此夜ほど明晰した事はあるまい、今まで彼女は自分の運命を考へる毎に、凝と考へて居る中に何とかして早く解決を着けようといふ氣があつた、此の焦り氣味のために彼女は十分徹底せぬ中に考へを纏めてしまつて其れで吻と息を吐いたのであつた。儚い場合には其日の氣分に依つて解決が極つて居た。彼女は自分の運命を呪うた、而して父、良人、社會——特に大阪人——を呪うた、自分の此の不幸は凡て此等のためであると思ひ定めて、自分を最も正しい者の位置に置いた、又或時には凡ての不幸は自分の罪であつたから誰をも恨むべきでないといふ絶望の解決を下した。處が、今夜は恁ういふ解決を片端から捨てた。社會が惡からうが自分が惡からうが其那事は問題でない、要するにこれから什麽し

ようといふ問題であつた。彼女は此の問題を突破しようと試みた。

「私は幸福を望んで居た。人間は必ず幸福になれるものだと思つて居た。其れが間違ひかも知らん、世の中には決して幸福といふものがないのだらう」

彼女の考は又しても昔に溯つた。

「いや、幸福はある、私にだけはないのだ、幸福といふものは一生涯に一遍、ほんの廻り合せの時ぐつと捉まへれば其れが生涯の幸福となるのだ、一番大切の時に捉まへ損ねると、もういくら悶いても捉まへられないのだ、私の幸福は早稲田に居た時」

「呼ばはりましたか」と婆やがのそ〳〵と入つて來た。

「いゝえ」と言つたが萬龜子は自分が何時の間にか呼鈴をめちや〳〵に押してる事に氣が付いた。「婆や、寝んでも可いよ、雨戸は私が閉めるから」

「はい〳〵」と婆やは何か聞きちがへたらしく獨り合點して去つた。

二〇

「其れだのに私は什麼して恁那身分になつたらう」と萬龜子は婆やの去つた後で一旦腰を折られた考を呼戻した。「克巳さんも私を愛して居たのに、今では爾ではなくなつた、其れは何故だらう、無論私だつて今更昔の戀を恢復しようといふのは無理かも知れないが、其れが出來なければ、私は生きてる甲斐がないんだもの」

彼女は暗い海の方を眺めた。先刻見たよりももつと小さくなつて漁火が雲の奥へ〳〵と紛れて行く。

「諦めるといふ事の出來る人なら其れでも可い、私は諦められない、姉さんの様に戀をしてる間は幸福だとは思へない、何も彼も私の所有にしてしまはなければ滿足が出來ない、其れだのに克巳さんは私を愛して居ながら姉さんと結婚しようと思つて居るんだもの、克巳さんが死んでしまへば私も諦める、恁うなつて見ると私は克巳さんに寧そ死んで貰ひたい」

恁う思つて彼女は悸然とした、而して其れを打消す様に脣を指先で二三度拭いた。

「私の戀が段々強くなつて行く、私は克巳さんを捉まへて放すまいとする、それだけに克巳さんは私から逃れようとする、而して姉さんの方に心が傾いて行く、實際私はどうして恁う嫉妬深いのか自分でも解らない、いや、私は嫉妬深いのではない、私は淋しいのだ、不安心なのだ。私は處女でない事が私の一番苦しい弱味なのだから……あゝ大變に篝火が出て來たこと」

砂濱に何時の間にか篝火が燃え出した。五六人の人ががや〳〵騒いで居る。

「何だらう、漁船を待つて居るのだらう……そこで私は克巳さんと夫婦になれない、坊やも私のものでない、恁うなつて見ると、何も彼も私から離れてしまつた、其れで以て私は生きて居なければならないのだらうか」

不圖彼女の眼から涙がほろ〳〵と落ちた、其れは殆ど無意識の涙であつたが、彼女は自分の涙を見ると共にもう聲を擧げて泣きたくなつた。

「私は私に同情しなきやならない、他人は一人として私に同情してくれないんだから」

散々泣き崩れて、額を兩手の上に載せて、卓に俯伏して居ると、婆やが再びのそりと上つて來た。

「火がないよつて晩うなりました」

茶瓶と土瓶と湯呑を載せて前に置く。

萬龜子は起直つて「有難う」と微かに言つた。

「お寢みよ」
「情死がおましたんや」と婆やは濱邊の篝火を指さして「今助けはりましたんね」
「どんな人？」と萬龜子は訊ねた。
「見やしまへんけんどもな、男は二十五六で、女は十八九やさうだす」
「助かつたのかえ」
「はあ、二人とも助かりましたんね」
「死ぬ方が可いかも知れないわ」
「お寢みやす」と婆やは出て行つた。
「死ぬ方が可いかも知れないわ」と萬龜子は再び獨りで言つた。其の聲が餘りに明晰として居たので、彼女は慄然とした、が彼女の頭は霎時情死者の上を離れなかつた。
「どうせ長く生きてると屹度何方かが厭になる、月日は二人の間を怠屈さして到頭別れ話になるんだ、屹度爾なる、屹度——」
何故恁那事を言つたのか自分に解らない。彼女はもう泣けなくなつた。
「爾だ、これだけで私も終局なのだ、私は生きてる必要はないのだ、私は世の中の餘計者だ」
彼女は凝と瞳を据ゑて海を見た。篝火は既に消えて海は益暗い。

二

「死！」
これが最後の解決であつた。彼女は恁う思ひついた時其の全身が慄へ出した、抑へようとしても抑へられない。そこで彼女は霎時其の儘に委した。雲の渦卷の間に一寸の青い空が見えた様な心持で、彼女は此の解決を極めて靜かに又極めて樂しく味つた。戰慄が止まつた。
「どうして死ならうか」と彼女は考へた、併し其れは重要な問題でない様な氣がした。
「私が死ぬとする、そこで後は什麼なるだらう」
皆なが幸福になる、と彼女は自分に答へた。其れは其れで可い、併し人が私を何と言ふだらう、私の死は馬鹿々々しい事だらうか。
「世間が何と言つても構はない」と彼女は又答へた。併し私は何故死ぬのだらう。
彼女は自ら頭腦が澄み渡る様に感じた、何も彼も透き通る様に明晰した、今まで朧ろであつた凡てのものが鮮かに頭に浮んで來る。と彼女は突然爲三の顏が眼に見えた、其の脂肪肥りの白い圓い顏が堪らなく卑しい、儲かりまつかといふ聲も聞える。彼女は肩を窄めて眉を顰めた、同時に「憎惡」の念が一ぱいになつた。恁那に憎らしいものは世の中にない、其れ〳〵と彼女は命令的に言つた。爲三の顏が消えた、と其の反對に克巳や櫻井や橋本の顏が見えた、何でも三人がユニフォームを着てバットを持つて野球のチームウォークを相談してるらしく見えた。三人とも緊張つた顏をして、眼は燃ゆる様、而も微笑した脣の邊に必勝の色が漾うて居る。若くて無邪氣で兄弟の様な親しみの氣分は、萬龜子が一番好きであつたのだ。彼女は霎時恍惚とした。と其れが又夢の如く消えて不圖我に復る。
俄かに彼女は今までの自分が眼に見えた、銘仙飛白に濃茶の袴を裾長に穿いて、銀側の時計に付けたリボンを紐に卷き付け、片手にインキ壺と風呂敷包を持ち片手に洋傘を持つて居る。今學校から歸つた心持である。彼女はゆつくりと其れを眺めた。
「貴方は美しい人だ」と何處かで言ふ聲がする、其れは正當の言葉だと彼女は思つた。兎角する中に、其れも段々に消えてしまつた。併し彼女の耳には「美しい人だ」と言つた聲が殘つて居た。
「私は美しい、爾とも、私は美しい」と彼女は

繰返した。「私は生れてから今日まで卑しい事をしなかつた。私の戀は純であつた。私は神樣の前に出ても私の靈は立派なものであると言へるのだ、僞だ、私は私に讃美したい」

彼女は靜かに微笑した。と今度は、什麼して死なうかといふ問題に立復つた、今まで其れを考へなかつたのだが彼女の肚の中では既に準備が出來て居たのだと此時初めて氣が付いた、其れは違ひ棚の中にあるモルヒネに當りを付けて居たのであつた。爲三が密輸出をして鉅萬の富を作つた此のモルヒネを飲んで死ぬといふ事は極めて皮肉で面白いといふ氣もした。

彼女は手燭に灯を點した、而して電燈を消した、其れは餘りに明る過ぎるので氣怯れがすると思つたからであつた。違ひ棚から幾つも幾つもの箱を出し、赤い壜の中から取り上げて凝と其れを見詰めた。蠟燭の灯は眞直に燃えて其の黄色な光が赤い壜を照らし、萬龜子の胸と喉と柔かな腮を照らした。

栓を除ると眞白な粉が覗かれた。

萬龜子は其れを搖つて見た。粉はぱつと煙が立つた、而して膝の上に微かに零れた、淸く美しく純白な而も人を毒する粉！　赤い壜の口からも粉が溢れて居た。彼女は其れを指先で拂つた、而して再び蠟燭を見詰めた。

三

室内は眞暗で、只海に向いた縁側の方から波明りが微かに軒を覗いて居る。手元の蠟燭は眞直に燃えて、暗からの風に瞬く毎にぢいと蠟が煮える音がする。一つ二つ蚊の聲が耳元を過ぎて蠟燭の煙の上を迷ひ又暗に消えて行つた。

「此の白い粉が喉を通ると其れで終局だ」と彼女は思つた、泣きたい樣な笑ひたい樣な感じが胸でもや〱とした、が彼女は平氣であつた、彼女はもう死といふ事を考へなかつた、例令ば是から何處か遠い處へ行くのだといふ心持であつた、子供の時に母に連れられて餘所へ行く、母には目的があつたのだらうが自分は何處へ行くのか解らない、而して母の歩く通りに歩いて行つた、今丁度其の心持である。何ものかに連れて行かれるやう、爾しなければならないから爾するのだと言つた樣、そこで彼女は壜から掌に藥を零した、白い粉が一度にざらりと出たので彼女は吃驚した。粉は冷たく輕くさらさらとして居た。

「多過ぎる樣だ」と彼女は思うた、而して其の半分を壜に入れ返し、殘る半分を口に當てた。

「待てッ」といふ叫びが心の底から起つた樣な氣がしたが、彼女は既に舌の上に載せてしまつた、而して湯呑の水をぐつと飲んだ。掌の粉は半ば散つて膝に零れた、口の中の粉が水と共に喉を通つた、其の幾分かは顎の裏に粘つた、二度目の水で其れも洗ひ込んで喉へやつた。彼女は自分で自分の手がぶる〱顫へて居たのに氣が付いた、而して蠟燭の灯で顫へる手を眺めた。突然として彼女は悲しくなつた

「私は死ぬんだ、其れに私の傍に誰も居ない」

彼女は急に歔欷りあげた

「私は何の惡い事をしたらう、私は輕率だつたかも知れないけれども、姉さんのために犧牲になつたのだ、其れだのにもう私は生きてる事が出來ない樣な破目になつてしまつた、餘り慘酷だ、私は惡い事はない」

彼女は霎時泣き伏した。と又起上つて死態の醜くない樣にと思つて戸棚から枕を出した、而して室の眞中に枕を置いて坐らうとした時胸が微かにむか〱とした。

「吐いては不可い」と彼女は思つた。此時心臟の鼓動が非常に激しかつた、一二度逆吐をしたが吐き氣が直ぐ制まつた、手足が漸く溫くなつて、何とも言へぬ快さが胸の上から甘く輕や

かに傳つて來る。彼女は丁度柔かな蒲團に埋まつてふは〳〵と天へ擶り上げられる樣な氣がした。

「これだ、これが死といふものだ」と彼女は思うた。と彼女の眼が次第に弛んで來た。彼女は强ひて眼を開いて蠟燭を見詰めた、蠟燭の光は眞紅に見えて、ぼうつと擴がつた暈だけが黃色だつた。

「私は死ぬ、左樣なら」と彼女は言つた。

此時階下の柱時計が鳴つた樣な氣がした。と彼女の頭の中に種々な罔兩が浮んで來た、父、母、太郎、睦子、克巳、其他の人々の顏が明るく見えたり暗く見えたりする、彼女は[illegible]を掛けようとしたが聲が出なかつた。此時彼女は又もや時計の音を聞いた樣な氣がした、時計ががん〳〵〳〵と果てしもなく打つて居る。不圖彼女は十一時に汽車が此處を通る事を想ひ出した。海の音と松風がざあ〳〵と聞える、其の中に遙かの〳〵遠くから遠雷の樣に地を搖りながら來るのは汽車であつた。

「あれだ、あの汽車に克巳さんも姉さんも乘つてるのだ」

彼女は跳ね上る樣に外を見やつた、片手を枕に突いて片手を胸に當てて凝と見詰めた、が何物も見えない、暗の中の影が螺旋の如く渦卷いて濃くなり又薄くなると、轟然たる響と共に一條の赤い灯が走つて來た。

「汽車だ」と彼女は思うた。

長い黑いものが動く、黑い中に灯の光が顫へて火繩の如く一條に見える。

「左樣なら」と彼女は口の中で言つた。

あの中に姉さんが居る、克巳さんが居る。

「樂しく暮らして下さい、どうぞ〳〵」

汽車の音が段々遠くなつた。

萬龜子は何時までも〳〵耳を澄ました、海の音と松風は汽車の音を消して室は元の寂寞に復つた、蠟燭はぶち〳〵と音して消えた。

「左樣なら」

恁う言つて彼女は枕を手探りに探して其の端を摑んだが其儘がくりと額を枕に着けた。

萬龜子は死んだ。

二三

讀者諸君！　私は既に物語るべき大要を語つた、此の上に語るべき必要がない、若し此の上に語らうとすれば又更に稿を起さねばならぬ。私は只主要なる人々の消息を傳へるに止めよう。

萬龜子が死んだ翌日の夕刊新聞は何れも筆を揃へて此の記事を揭げた、而して其れは萬龜子が良人以外の男に戀をして成らず、自ら悶えて死んだといふ事に一致した、某新聞の如きは「淫奔の果て」として、萬龜子の無節操を非難した。此の事に就いて橋本辯護士は自ら名を署して長文の辯難を新聞社に送つた。併し多くの讀者は萬龜子の死が餘りに唐突であるためと、身分に不足のないものが自殺したに就いては色情の原因があると推察したために、橋本の辯解を信じなかつた。

彼女の葬式は克巳、章、橋本三人の手に依つて營まれた。其れは朝晴れの日であつた、三人の男と、睦子と蝶子と信子とお民の四人の女、凡て七人の人は靜かに須磨の寺に集まつた、而して死の理由に就いては一言も言はなかつた。三人の男は泣いた、四人の女は聲を擧げて泣いた。

克巳と睦子の結婚は此のために一年延期された。

菊江は萬龜子の自殺に依つて爲三の側へ寄らなくなつた、母のお民は萬龜子の佛事を濟ましてから菊江を伴れて旅から旅へ出發した。

「あの子の根性が癒るまでは私は旅をする」と

彼女は言つた。

爲吉は益富み榮えた、彼の財産は二千萬圓と算せられた、だが段々痩せて來た、彼は毎晩萬龜子の夢を見た、萬龜子のみならず其の父や母をも見た。

「金を返せ」と養父が言ふ。

「娘を返せ」と養母が言ふ。

萬龜子だけは毎も默つて居る。

爲吉は夜を恐れた、夢を恐れた、而して其のために毎夜お茶屋で寢ずに騒いで夜が明けてからうと／＼と眠るのであつた。

併し彼は其ればかりでも濟まなかつた。彼は或日太郎を見た。其れは夜も暮れてゆく眞晝の靜かな庭であつた、突然太郎の姿が見る／＼大きくなつた、而してぐつと彼を睨んだ。

「金を返せ」

「何言うてんのや、私の財産だがな」と彼は言つた。

「金を返せ」と太郎は再び言つた。

「私が溜めた金だんがな」と彼は再び言つた。

「本當に爾か」

「ほんまに違えないわい」

「はゝゝ」と太郎は笑つた。

爲吉は戦慄して倒れた。其れから彼は太郎を恐れた。

「此奴は俺の財産を奪るだらう、今にお祖父さんや母の仇を取りに來るだらう」

到頭彼は太郎と乳母とを別居さした、併し恐怖は日毎夜毎に加はる、彼は益痩せた、白豚の樣に肥えた彼は骨と皮ばかりになつた、其の代りに財産は益殖えて行く、關西實業家としての油谷爲吉の名は全國に知れ渡つた。

一年經ち二年經つた。多くの人は萬龜子の名を忘れた、偶に想ひ出すのは別莊の近所の人や爲吉の店の者だけであつた。恁うして萬龜子といふ一人の女は次第に世間の記憶から失せて行く、而も其れを記憶するものがあつても、不貞な女として殘つて居るだけであつた。自己を偽る事が出來ないために、其の性質が餘りに美しかつたために、あらゆる苦みと闘ひ、悶え、疲れて、而も遂に己れの正義を枉げる事が出來ずに死んだ彼女の志を知るものは、只七人だけであらう。

鴨

高部と私が新宿の停車場を出で、代々木新町の馬車場に着いた時は既に日がどつぷりと暮れて居た。

高部は愛宕艦乘組の機關手で、私とは同年で今年三十二歳、十餘年の昔神田の下宿屋で知合つてから肉親も及ばぬ程の親しい仲となつたので、其後私は學校を止めて多摩川の片田舍に引込み、女房と子、親戚、小作人、いろ／＼の煩瑣に燻ぼつて了つたが、丁度七年前高部は海軍に身を投じ今では機關手となつて、文信の中にも昔に變らぬ壯快な文字ばかりを並べてよこす、私は其れを見る度にいつまでも彼の若いのに驚く。

プラットホームで其の岩疊な肩幅を見た時、私は只嬉しさに堪へなかつた、旅順決死隊の一員にも加はつて生命懸けの辛苦を嘗めに來た彼が、自分の郷里なる羽後に歸らうともせで、第一に私の宅に戰後の疲れを休め、七年振の積る話をしようと來て呉れたかと思ふと。

新聞で知り抜いた戰爭談でも、親友の口から聞いたら如何に新らしき興味を感ずるであらう、私は只一刻も早く宅へ着いて父の前で緩くりと友の話を聞き父友の名譽を誇らうと、最早氣が氣でない。

諸君は代々木新町から舊甲州街道を往復する馬車を見た事があるだらう、其れは東京で馬車鐵道が出來ぬ時からの頗る舊式な型で、砲車のやうな岩疊な四輪の車の上に、荒削りの柱に組立てた臺を載せ、臺は下が狹く窄まつて兩方の柱が末廣がりに開いて居る、定員十人といふけれども大方其れは子供を一人と見立てた勘定か、左もなくば十人の中に人の好い婆樣や、他の犧牲になつて肩身を斜めに透す慈善家や、身體が半分外に食み出しても構はぬといふ辛抱強い者を計算の中に入れたのであらう、實際の處八人が關の山だ。

雨がしよぼ／＼降り出してるので、馭者は雨除の被幕を以て車の左右前後を犇々と包んだ、被幕と言つても是れも石油箱を包んで西洋から渡つて來たといふ莫迦に厚い帆木綿で、是れに包まれると雨は無論の事風さへも這入る氣遣がない、其代りに中は陰氣で私共が入口の臺に首を突込んだ時は、黒漠々たる暗中で片側の編柱を手探りに漸く馭者臺の右の端に腰を下した、高部は私と差向ひて左の方を探つた樣であつたが、突然

「あゝ失禮しました」と叫んだ、同時に

「どう致しまして」と女の聲が丁度私の正面に聞える、高部は件の女と並んで、私の筋向に坐つたらしい。聲で想像して見ると女は三十前後、どつかに世馴れた處があつて、能くある事だが、あの人は男は樣にはきく／＼してると言はれる方の人らしい、私は是れ丈け思うた時に手に持つた鴨がくゝくゝと鳴き出した。

「臺の下に入れ給へ」と高部が聲を掛ける。

言ふ事を忘れたが、私は高部を出迎の途中で一羽の鴨を買つたので、其れを料理して高部を馳走する積なのであつた、雨足を縄で縛つて、全身を風呂敷に包み、結目の處から首丈けを出して置いたのは呼吸を塞らせまい爲めである

鴨を臺の下に入れると、此時早や犇々と乘客が詰めかけた、どんな身装で、どんな顏で、どんな人かといふ事は暗がりで毫も解らない。

「どうぞ御詰めを願ひます、十人乘ですから今少々、前の御方」と前になつた馭者がいふと、後ろの踏臺に立つた馭者は

「御膝を御組合せを願ひます、御膝を」と聲掛ける。

此土地で名高い松葉繋ぎといふので、向ひ合つた同士が膝を割つて片足違ひに膝を挾み合ふ事で、晝の時には若い娘が折り〳〵顏を赧らめる事があるのだ。

松葉繋ぎが定まると、車中が急に賑やかになつた、暗さに馴れた眼は僅かに女の坐つた丈の高さを朧に認め得る丈けで、隣り合つた高部は顏も頭も何にも見えない、大方色が黒い爲めであらうと心中私かに可笑しかつた、けれども、高部の元氣は熾なもので、頻りに話しかける、心地快ささうに笑ひ出す、其中車が動き出したので、石原道の凹凸は一上一下今にも倒れさうになる時などは喝采して子供のやうに喜んで居る、車中の人も顏こそ見えね、袖すり合うた緣で、早や心安立の無駄話、田舍者は正直丈けに洒落氣もないので、語るもの〻返事をするものも頗る素氣ない、けれども馬車にまれ汽車にまれ腰を落着けて了へば當座の間は、もう既に先方の目的地に着いたやうな氣がして、急に活氣が出て來るもので、其れが時間を經るに從つて、目的地が次第に遠くなる、待ち遠しいといふ氣が起るのである。

車中の賑ひは程なく止まつた、三本松の立場を過ぐる頃は既に七時頃、御茶を飲まずに眠つて居たのが多かつた、馬車は是等の重たさうな客を曳きずつて只管に急ぎ行く。

雨は土砂降りになつて、何處からとなく空氣が冷え渡ると、暗さは益々暗くなつたやうに思はれる、被幕の外は風、雨の音、恰ら巨浪の響の如く只ごう〳〵と耳に轟く、折り〳〵は馭者が眠氣ざましにひゆう〳〵と鞭をしごいて馬に加へる音も聞える、乘客は皆な眠つて了つた。

單調は疲れ易いものであると私は恁う思つた、疲るれば眠くなる、して見れば單調は眠いものであると、三段論法に當て嵌めて見た、實際私はもう可成に疲れて居た、今夫れ黑暗々たる奈落の底を行く鬼の車のやうなものに乘つて、いくら瞬いても何物も見えず、耳に聞くものは風雨の音ばかりで、而も坐つたきり身動も出來ず、針を飲んだ魚のやうに尾を掉る事まで出來ぬやうでは恐らく此んな單調は又と無からう、高部は思ひ出したやうに廣瀨中佐の軍歌を小聲に唸つて居たが之れも直ぐと止んで大きな欠伸をして、何やらごそ〳〵と身體を動かしたやうであつた、後ろの柱に凭れて眠りかけたのであらう、私は從來物を見れば眼が疲れるものだと許り思つて居たが、眼が何物も見ず視覺の働をなさぬ時は、より以上に疲れるものだと此時初めて氣が付いた、私も眠るべく力めて見た、兩手を胸の處に組み合せて靜かに角柱に頭を推しつけた、併し板の底からしみ込む寒さは踵の邊りを刺す樣に襲ひ來る。

此時不圖眼に着いたものがある、馭者臺の方の被幕を透して僅かに一點螢よりも小さい、線香の火先のやうな灯が差向ひの女の膝の邊りにぽつかりと落ちて其れが車の動く度に彼方此方と移り歩く。

暗に疲れた眼は斯の如く小さい灯を見ても僅かに興味を覺えて怔と上を見上げると、柱の外に縛りつけたかんてらの灯が釘の穴を徹して洩れるのであつた。

併し其位の事が到底永く此の單調を破る事は出來ない、私は再び眠らうと思つた、併しもう眼が冴えて眠られない、車中が皆な快く眠つてる、高部ももう眠つたらう、入口の方の老人と覺しき鼾が傍若無人に響きわたる、眠る

事の出來ないのは自分ばかりと思へば益々忌々しい、と思つた時私は自分の膝を割つて居る此の女が先刻から眠つてるのかどうかといふ考へが不圖浮び出した、此の考が浮び出た時に私は女の膝の下ふくら脛の邊りが柔かい溫みを帶びて自分の脛と溫みを交はして居た事に氣が付いた、無論最初から氣が付いて居たには相違ない、けれども私は四邊の人が悉く寢靜まつて了つて何の考へる種もなくなれば處爲もなくなつた時に凡ての感じが何故か此の女に注がれたのである。

何歲だらう？　三十前後、何物だらう？　人の妻？　いや爾でない、言葉つきから見ると獨身者だ、寡婦かも知らん、色は白からうか黑からうか、宅の妻よりは幾分か柔り肉で肉の柔かい處を以て見ると確かに色が白い。

と思ふ中に彼女の膝か、私の膝か、二つの膝が幽かに顫動を帶びて私の顏は俄かに上氣を催した。

「おや眠つてるのではないのか知らん」と私は殊更に居ずまひを直さうと膝の邊りの外套を引き寄せた、途端に膝の上堅く彼女の手を握つた、女は別に拒みさうにもなかつた。

高部はと其方を見ると、彼は依然として言葉もない、さりとて鼾もない、車中永世の如くに靜かである。

私が彼の女を疑ふ如く彼の女も亦私を何物だらうと疑つたに相違ない、疑ひは疑ひである、けれども、互の手は一時間餘り離れては合ひ、合うては握りかはして居た、正直に言へば私は此の馬車願はくば鈍く遲くいつまでも調布へは着かざれと念じて居た、瀧坂を下りると金子原、雨の音は幅廣になつて平坦な道を走る車の音が只他事の如く逆上せた耳に聞える許りである。

此時私は高部が本當に眠つてるのかどうかといふ其れが頗る懸念で堪らなくなつた、すると以前からの入口の大きな鼾がはたと止んで、むにやむにやと何やら呟いた樣であつたが、びしつと燐寸を磨る音、同時にぱつと火光一閃、私は殆んど本能的に握り合つた手を引いたが、女は一方ならず慌てて飛上る拍子に高部の顏が女の顏近く動いたのがちらと見えた。

是れがほんの一瞬間で、入口の爺の煙管の雁首の火が、もや〳〵と立つ烟の中に豆の如く小さくなる頃には、彼の被蓋を漏る火の光が女の袖に止まつて居る丈けで、再び元の暗さに復つた。

急に燐寸の光を見て、再び暗くなつた。で、車の中が以前よりも暗くなつた、ちらりと見た女の顏は細面で色が白い、只其丈けで何も見えなかつた、一體此の女は何物であらうかとの疑問は再びむら〳〵と起る、二人の手は以前に增して堅く握りかはされて居ながら、

單に手を握り合ふ、一時間餘りの單調に私も稍々根氣が盡きた、根氣が盡きても本能性の慾が盡きぬ、私は突然膝を進めて手を舉げて女の顏を撫で下した、顏の造作を檢査する爲めではない、只手が顏に觸れて見たくなつたからで。

女は一寸驚いた風であつたが、默つて其の襟元の邊りに手を置いて懷の中を改る樣子、其れも一刹那で私の手は女の頭の邊りを滑り落ちて滿身の力を籠めて懷の中に插し込んだ。同時に全身水を浴びせられた如く棒立になつて後ろに腰を下した、女の懷の中に男の手が潛んで居たのである。

私が後ろに腰を下すと、女は身體を小さくして片隅に寄つた、私は挾み合つた膝を外に外らして默つて了つた、高部はまじ〳〵と身體を動かして是れも何の音もない。

私は言ふに言はれぬ不愉快を覺えて、怔と

被幕洩る灯影に目を辿らせ、馬車の音を聞くともなく聞いて居る、外は雨霽れて調布も此に間近くなつたらしい。

調布は終點の立場である。高部と私は馬車を下りた、女はどうしたか無論振返つても見ない、私は默つて鴨を提げたまゝ歩き出すと、高部も默つて後を跟いて來る、雨上りの二月の空、春とはいへど冬めく雲が海鼠の樣に處々に氷り付いて居る、庚申樣を左に畠中の渡場路を森の中へ拔けて、暗がり坂をふと出ると、豁然と開けた川千町口、水田に映る星が豆の如く冷たさうに光つて居る、私は依然默つて居る、高部も依然默つて居る、水田を吹く風は外套の袖を音たてて過ぐると、突然と私の手に提げた鴨が、繩が解けたか風呂敷の中でばたばたと羽ばたきをして聲高く水田に向つて鳴き出した。

「やあ鴨が」と初めて私が聲を出すと、

「やあ鴨が」と高部も初めて聲を出す、二人が同時に鴨の方に向いたが此時互に初めて顏を見合せた。

（明治三十九年十月）

あん火

奥州は津軽の城下に、名高い七夕の佞武多祭が済んで門に火を焚く盆の頃になると、林檎が其れ〴〵に美しい色を染め出す。地福村といふのは弘前の町から半町となき西南の小さな村で、遠く館野の方から見ると只一帯の林檎畠に、特に朝の静かな眺めは格別なもので、薄く白い霧の中に包まれた一郭は滑かな葉を濁る紅、黄、紫などの林檎の色に、恰ら朧の中の五色の綸を見るやうな気がする。其の朧の片端れから更に色濃き朧の煙が、もや〳〵と心ありげに立騰る。其れが此地福村三十戸の竈から吐き出す朝の息である。と聴て竹螺の聲が西の丘から聞ゆる。

竹螺を吹くのは此の畠主の佐吾十爺で、彼が此村を起してから二十年餘り、朝と正午と夕方と一日も休んだ事がない。此音が聞えると畠の中は荷車の音、牛の吼える聲、梯子の上で林檎を捫ぐ鼻唄、草抜の女共が和解なしに笑ふ聲など、急に賑かになつて、朝日の活々とした力が木となく葉となく、土となく流れ渡る。

いつも佐吾十爺は真黒な色の大きな布の袴を少し曲つた腰の後ろに當てがひ、左手に竹螺を持つて家を出ると、両側の疏水の溝が張つてある道宜に廣い畠中の路の眞中に、大きな林檎の古木が、此畑の王様ともいふ様に枝を張つて居る。古木の太さが一抱許りで、六尺程上から二股に裂けて畑の上に枝を伸はし、幹の皺は二十年間風雨と戦つた跡へを示して、纏に餓ゑだやうになつて居るが、四方に開き擴がつた梢は未だ生々として、なに小僧共に負けるものかと言つたやうに青い葉の間から美人の頬のやうな若い色の實を夥しく列ねて居る。佐吾十爺の往復ともに、此の古木の下で一休息をするのが例になつてるので、石油箱二つに板を渡した腰掛に花茣蓙が敷かれてある。

機嫌の好い時には、此處に若い者を集めて爺さんは餘り上手もない聲で、

―骨が粉になりや粉が骨になる汗は重たい金になる―

と唄ふのであるが、近頃油断をすると、其れから直ぐに身の上話を始められるので、慣れたものは唄が済むと、

―あんと巧えもんでごすな―と賞め捨てて匆々と逃げて了ふのだが、気の利かないものは大抵爺さんに白羽の矢を立てられる。

―汝等あはあ、此唄の譯は知んめえが、あんでもはあ働かんにや婆婆の飯あ食へねえだ。俺あ見ろよ、此年ではあ四十二の厄年から―と丁寧に指を折つて、

―今年で六十五だもんで、二十三年の間でこれ丈の仕上を爲るにや骨よ粉にしただ、其粉がはあ骨になつただ―

といふを冒頭に長々しい自慢話に取掛るので、若者の中には爺さんの話の前提から大尾まで一句も漏らさず諳記して居るものもあるので、

―其りやもう此間も聞いて知つてるだよ―

と言ふものがあると、爺さん急に不興顔になつて、

―其んねえに知つてるだあら、あんで怠けくさるだ、はあ今の若え者あ年寄べいだ思つてどんどに聞かねえだから竈の殖えへい理窟あ無えだ―と再び話題に綱を戻すので、近頃は相成るべくは此の大林檎の下を避ける様にして居る。

此大林檎といふのは爺さん[illegible]の記念樹で、爺が人の馬を曳いて歩いて居た時、弘前の町で西洋人が食ひ捨てて行つた林檎を拾つて其種子を植ゑて見たのが抑々の濫觴、其時に西洋林檎といふものが殆んど絶無であつたので、實植ゑから接木、其れから其れと瞬く間に殖えて、今では津輕の名產になつた、其名產の本とも言ふべき木は此れなので、彼は此木に自分の[illegible]福といふ名を付けた。

實際佐吾十が此福の下に腰を下した時は、老勇士が其の古戰場を[illegible]て昔の戰を[illegible]れと同じ樣な氣持で、當時の苦しかつた事悲しかつた事を想ひ出す度に、今の自分がいつの間にか昔の自分となり、其の昔の自分が最後に今の自分に復る一[illegible]に[illegible]を感ずる、其れが又[illegible]手となつて[illegible]の矢面に立つて呉れた時には[illegible]ひ出し得ぬ微細い事まで自づと口から[illegible]出るのだが、今日は一人も相手がないので[illegible]處に休んで、[illegible]松原の上を一尺許り離れて、[illegible]息に歸る靜かな光[illegible]眼に[illegible]掛けて居る、此れ[illegible]其の[illegible]に掛かる一望の畠を緩くりと見渡し、[illegible]手入[illegible]を[illegible]して、[illegible]たきはたきと[illegible]み續けると[illegible]を背後に真直に立つて[illegible]吹出した、と[illegible]畠の隅々、木々の蔭から三々五々、人影が現はれて、[illegible]を肩にするもの、[illegible]梯子を擔ぐもの、[illegible]などを運ぶもの、其等が一同に牛小屋に近い井戸の邊りに集まつて、手ん[illegible]に[illegible]を洗ひ、農具を片付けなどするので、鷄や犬までが[illegible]に[illegible]しさうに[illegible]の中を跳ね廻る、[illegible]の有樣を[illegible]と見下して佐吾十は丁度[illegible]に、其の深く[illegible]から[illegible]とした眼を[illegible]しい光に[illegible]まして[illegible]を下りた。

「おう黒牛よ、あんではあ[illegible]えるだよ」

と佐吾十が[illegible]、牛小屋の前で秣を[illegible]作[illegible]手[illegible]て、

「あん[illegible]物う食はねえでがすと、[illegible]見て[illegible]べいや」

「[illegible]よ、[illegible]」と

「[illegible]」

「[illegible]いと、[illegible]なかんべいなあ黒」

と佐吾十は[illegible]の方を向いて、

「おうい[illegible]公やあい」

と叫ぶ、[illegible]

「おうい」と[illegible]出て來たのは年頃三十前後の色の白い、額丈け薄く日に焦けた、何處かに[illegible]の利いた處のある[illegible]者で、[illegible]白い[illegible]に[illegible]兵兒帶を後ろに結んで、半股引の下から[illegible]くつきりとした[illegible]つて見える、[illegible]分別の[illegible]に[illegible]陀に被つた麥藁帽を取つて一寸挨拶すると鍔には、

「主あ草臥れたべいがな、黒牛があんだか[illegible]が惡いので、一遍床あ洗つてやつて見て呉れろよ」と言ひ捨てて此處を出ると、今しも[illegible]きから[illegible]つた[illegible]の[illegible]が[illegible]いである、佐吾十は又是れに聲をかける、

「おう[illegible]よ、[illegible]たべえや、おう[illegible]よ、[illegible]よ、[illegible]よ、皆な[illegible]だなあ」

といふて[illegible]の中に入ると、[illegible]檑桙が、靜かに[illegible]に[illegible]を[illegible]して居るので、[illegible]は是れにも聲をかける、

「皆な早く大きくなれやなう、實い生るやうになつたら[illegible]」

と一々[illegible]なので。

[illegible]て[illegible]騒々しさが、ひたと止んで、四邊が

急に靜かになると、畠中の林檎の香が夕暮の乾いた空氣を搖かして、ほつと暖かいやうな氣持に流れ渡る。此間を佐吾十は横顏の皺々を夕日に照られて、後ろ手を組みながら、のこり〳〵と歩いて來たが、呼止めるものがあるので、振返つて見ると其れは牛番の與茂爺であつた。與茂爺は佐吾十と同じ年配であるが、佐吾十に比べると五つ六つ程多い樣に見える。

「床あ洗つただかな」と佐吾十の方から聲をかけると、一寸腰を屈めて、

「洗つただ、洗つただがな、黑の野郎あんともはあ、癒らねえだ」

「其んねえに早癒るもんでねえだよ」

「其うだんべいかな」と横の方を向いて、

「其んで旦那、ちよつこら相談のうあるだで」と佐吾十の歩き出す背後に從いて行く。

「はあ何んだ」

「他事でも無えだが、又一軒殖やさんにやならねえだ」と黑い顏から白い齒を露出して笑つた。

「はあ誰だ」と佐吾十も笑ふ。

「新太の奴だがの、何んでも今の若い者あ敏捷えもんだ、かよ子と何時ん間に出來たかな、もう五月だあによ、俺あ打魂消だよ」

「彼奴あ仕事う働くでの、兎だら樣に跳廻るだから、俺あ愛がつてやつただが、もう女娘の尻窺つただかね、其んだら早く家拵へさつせい」といふ中に、例の地福の下に來たので、花茣蓙に腰を下した。一體佐吾十は氣が短い代りに又よく人に情を懸けるので、自分の姓を名づけた地福村といふのは、佐吾十の畠に働く若い男と若い女と好いた同士には直ぐに世帶を持たす、家を建ててやる、長年の中には馬の一匹や田の一枚も與れてやる、其れが今では二十組餘りも出來て、新らしい組が見付かり次第に與茂作が一切の世話係り、佐吾十に申込むといふ事になつて居るので、佐吾十は其戸數の殖えるのを喜んで居る。

「俺あ死んだら出雲の神樣に褒められるだんべい」と何かにつけて言うたもので。

　與茂作が去つて了ふと爺は續けざまに煙草を吹いて居たが、急に思ひ出した樣に、

「お福よ、お福やあい」と呼んだ。

　爺は朝から晩まで寸時も落着いて居ない、眼の覺めて居る間は用事の有る無しに拘はらず人を呼んで居るので、其れが十五六年前に、女房に死なれてから一層烈しくなつて、其中に最も多く呼ばれるのはお福である。

　お福の素性は誰も知つてるものがない、死んだ女房が何處からか貰つて來たといふが、捨つたのだらうと言ふものもある、丁度お福が二歳の時で、其れから間もなく婆さんが死んだので、子もなく孫もない佐吾十は男手一つに育て上げた、這へば立て立てば歩めと段々生長くなればなる程爺さんの可愛がり樣は一通りでなく、明けても暮れてもお福をば自分の側から離した事がない、彼は甚麽に腹を立てて居る時でも、お福の顏を見ると直ぐ額の皺が弛んで了ふので。

　加之佐吾十はお福の乳吞の時から十七歳になる今まで、今だにお福を抱いて寢てるので、村の者が、

「旦那、お福さあも既うい〻女娘盛りになつただに」といふものがあると、彼はいつも機嫌よく笑つて、

「こりや俺がの行火だでなう、えらあ足が煖まるだ」といふ、是れが原因になつて村中ではお福に「あんくわ」と綽名を付けた。

「お福やなう」

と爺は林檎の木間から此方へ來る姿を見付けて呼んだ。

　桃色の襟を取つた白い袖無しから、肉付の宜いむづ〳〵とした白い腕を出して、脇口からふ

つくりと膨らんだ乳が仄かに見える、腰から下は赤い腰卷一つで紙緒の草履を埃の中に曳きながら出て來たのはお福である。

「何んだし」と爺の前に立つ、同時に口の頬邊がぶうと鳴る。

「何んで草履穿いてるだよ、下駄あるだに」

と爺は笑ひたさうに目と口元の皺を寄せて、

「若え女娘だらいふもの、其んだ埃だらけになるで無えよ」

と顏を見詰める。

「其んでも、下駄穿いたら惡くなりしによ」

と夕燒の雲に其の美味さうな頬を薄紅く照らされて、頬ぶぶうと酸漿を吹く。

「惡くなつたら買つてやるべいに、足よ怪我したら奈何しる積だ」

「下駄あたら欲しく無えによ」

「何にお欲しいだ」

「何んでも」

「何にだよ」

「笑ふたもの」

「笑はねえによ」

「そんだら」

「そんだら何んだ」

「あのう何に

「あのう何に」

「はゝゝ」とお福は大きく口を開いて轉げる様に笑ひ出した。

「同じ事言ふだによ爺さん」

爺も同じく笑ひ出して、

「はあれ、汝から笑つたで無えかの、そんでは家さ這入つてから聞くべいやなう」

と、爺が先になつて家近く來たが、又考へ出して、

「お福よう」

「あんだし」

「あのう、黒牛が鹽梅惡いでの、忘れた事しただ、鹽う食はせりや癒るだあに、汝ちよつくら行つて鹽やつて來いよ」

「牛小屋しけえ」とお福は言捨てて其方へ足を向けた。

「お福よう」

と何か又思ひ出して言つた時、お福の影が、向うの百合畠の中に隱れて了つた。

「早え足だなら」

と爺はにや／＼笑つて家の方を向いた。

日は全く沈んだけれども、西の空の夕燒は凡ての林檎の上を彩つて、後光のやうに薄雲を抹すと、柿の木の梢高く突出た[illegible]が、恰ら畫の中に浮き出た様で、渾然とした奥州の眠れる如き天は底の方から靜かに薄紫、赭、水色に變り行く中に、軈て末廣がりに綿を千截つたやうな小さな白い雲が、龍の鱗の如く青地の上に撒かれた。

「鰯が取れるだんべいよ」

と言つて見たが、家の中は何の音もなく、緣側に鷄が二三羽、遠慮會釋もなく上り込んで居る、灯ともすに早い奥の間を淋しさうに覗いて、爺は、對手が欲しいといつた風に四邊を見廻した、遙かに黒牛の吼える聲がする。

で、爺は緣側から腰を放すと、手籠を持つて木間を歩きがてら、薄明りに見える目の力を便りに、落ちた林檎を拾ひ溜めた。

籠が張りきれる程に積込んだ頃、爺は何時の間にか畠の南端、雜木林近い秣小屋に近く來た事に氣が付いた。其處には溝を引いた水門があつて、其れが垣根の外に音たてて落つる。伐り倒した許りの材木や、冬構に使ふ杉皮の束や、跛になつた唐箕や、古ぼけた水車や摺臼など、秩序もなく置いてある其奥から、晝の日光に蒸された秣が乾いた明るい香を迸り出すと、未だ暮殘る[illegible]から／＼と鳴いて居る。

不圖、小屋の中で人[illegible]がするので爺ははつと

足を停めた、別に足音を忍ばすといふではないが、斯る時に偶然の物音を聞く時には誰しも自分を隱して見たいやうな氣がするもので。爺は窩と小屋の雨除に圍んだ黍殼の間から中を覗いて見た、途端に其の兩肩を搾めて棒の如く立悚んだ。

行火のお福と乳搾りの鶴公が、秣の中に半分づつ身體を埋めて互に抱合つて小聲に話して居たので。

一旦足を戻して、再び覗いた時には佐吾十は獵犬が手強き獲物を嗅ぎ當てた樣に、總身の慄ひを强ひて抑へて立つて居たが、軈て急ぎ足ですた／＼と引返した。

佐吾十は茫然として家に入つた。

いつもならば、黑光りの廣い板緣に、舶來の燈籠と名を付けた岐阜提灯を吊して、行火の御酌で五勺ばかりの酒に胸まで赤くし、骨が粉になるを二三度唄ふと、直ぐ横になる、同時に鼾が聞える、と其れをお福が俵を扱ふやうに轉がして寢床の上に乘せると決まつて居るのだが。此夜はざつと飯を濟ました限り、何思つたか毎もの寢間の次の納戸へ、別に寢具を敷かした。

早過ぎる程早く寢たので、佐吾十は中々眠られない、臺所の爐邊ではお福初め奴共——年期抱の奉公人——五六人が、笑ひさゞめきに話してる其聲が耳を喫かす樣に聞えるので、聞くまいとすればする程、自分を嘲るかの如く耳に從く。爺は一寸舌打をして、

「お福よう」と呼掛けた、此れが聞えたかして話聲が急にひたと止むと、奥齒で殺してる樣な笑聲が、いかにも堪へきれぬといつた樣に互に目胸してる光景が眼に浮ぶ。

「お福よう」と再び呼んで見た。

「あい」と言つて次の間に來た足音の方を向いて、

「あんではあ騷がしいだ、皆なに寢てしまへと言へよ、汝もはあ寢て了へよ、ぐちや／＼面白くもねえ事饒舌くるで、其んで朝寢しるだあに」

「そんでも爺さん未だ八時だあよ」と襖越に言ふ。

「何に？　八時だあ？　八時が七時でも用も無えだに油あ點してる事無えだよ」

「そんだら寢りいすよ」

と何かぶつ／＼言つて行つた樣子、爺も同じく何やら呟いて、枕を引寄して夜具を着けた。

臺所では、

「あゝ寢べいかよ」

「二日分寢て置くだ」

「殿樣御機嫌が惡いでの」

「寢る程の程が無えだ」

など手ん手に當付がましく言つて、氣の拔けた欠伸が交る／＼に聞えると、夜具を取り出す音がこそ／＼と、軈て晝の疲れの眠るに早く、急に靜かになつて了つた、其靜かさに引込まれて爺も何時の間にかうと／＼となつた。

不圖目が覺めて四邊を見廻した。いつもならば自分の左傍にお福がぐつたりと柔かい胸を出して眞白い腕を自分の胸の邊りにかけ、生體なく眠つて居るので、爺は其手を握つて見たり口に當てたりしてる中にゆつくりとした樂しい思ひに再び眠に入るのだが、今急にお福を隣室に追ひやつた事に氣が付くと其れが俄かに擽つたいやうな淋しさを覺える。月は恰も窓の方へ廻つて居る、格子の影ながら鮮かに投げ込む光は、其處に積んである絲枠や、繭外しの器械などの影をも冷たく枕元の疊に落す。と、暗い壁の方から蚊の聲が一つぶうんと聞える

「うるせえ奴だ」と呟いて怯と考へて居ると、蚊

の聲が次第に耳元に近くなる、ぴしやりと掌で打つと手應がない、默つて居ると又來る、又打つ、又反れる、忌々しいといつたやうに翁は起上つて枕元の手燭に灯を點ける、で、其れを如何しようといふでもなく其儘其處に置いて扨て再び横になつたが、既う眠らうといつても中々眠られない、只顏がかつ／＼と逆上せて來る。

何を考へるともなく翁は半時餘り、天井に瞳を据ゑて居たが、隣の室に枕を更ふるやうな音がしたので、暗がりで何かに逢つたやうにはツと驚いて其方を見向いた。

「お福よう」と聲掛けると、

「あいよ」と直ぐに返事をする。

「汝あ未だ眠ねいで居るだか、早く眠つて了はつしやい」と腹立たしく言ふ。

「眠よう思つても眠れねいだもの」

「眠よう思つたら眠れねい事あねいだ、何にをうぢや／＼と身體べえ悶えてるだ」

「爺さんもあんで眠ねえだし」

「何んでつて其んだら阿呆こくもので無え、眠て了はつしやい」と詮なしに怒つて、ジリ／＼と燃え盡きた蠟燭をふつと吹き出すやうに消して了つた、何處かで盆踊の音が遠く聞ゆる、はアほいといふ聲、手を拍つ足踏みをする、其等が自分を嘲るやうに枕に響くので、

「腹あ減らしめが」と獨りで言つて眠らう／＼と力めて見たが、只不思議に胸が焦けつく、自分が眠られずに居ると同じくお福も目が覺めて居た、其れが恰も自分の意氣地なく悶えて居る始終の樣子を悉皆知られた樣な氣がするので益々劫が煮えて來る。

すると、先刻の一つの蚊が又ぶうんとやつて來る、目をぱつちりと開いて見ると、蚊帳を釣つてない事に今更氣が付く、窓の月明りにがらりと廣々とした室の眞中に自分が一人丈け寢て居る其の姿が自分ながら何となく淋しく眺められた。

「お福よう」と再び聲を懸けたが返事がない。

「お福よ、汝あ淋しく無えかよ」といつても答へがない。

「此處さ來ねえかの、爺さんとこさ寢ねえかの」

仍且默つて居る。

「眠つただかな」と手燭を點けて立上つて障子を明けた、と、お福はふつくりと二重にくびれた頤を仰向けて枕からせり出した頭は、一體に圓みを帶びて、小さな鼻、濃い眉毛、ふさ／＼と柔かい産毛のやうな毛の生際に殘つて居る額、其れが何となくあどけない趣を持つて小横を乳の上まで掛け、頭上に兩手を載せて居る。すると其の枕元に坐つて佐吉は瞬もせずに寢顏を見詰めて居たが、堪へきれぬといつたやうに、ぐつたりとしたお福の手を取つて、自分の頬につけて見て、ほろ／＼と涙をこぼした。

霎時其儘に身動もせずにあつたが、急に起上つて縁側の雨戸を繰りあけた。ほの／＼と明けにかゝつた林檎畠は、木並の奥から白い薄明りを送つて、細雨まじりの霧が一面に深く立籠る、中に、草に落ちる林檎の音がほたり／＼と重さうに聞える。翁は草履を引掛けて外へ出た、じみじみと肌に染み込むやうな霧が眉に雫と落ちて頬に流れるのも拭はうとも思はず、一夜眠らずに勞れた老の身は、頭に耳鳴りがする程逆上せて居るので、恰ら虚空を進む抜殻のやうに、畠中の路小路を當て度もなく辿つた。

牛小屋の前へ來ると黒牛が苦しさうに泡を吹いて居たが、主人を見て、もう／＼と二聲ばかり鳴いた、いつもならば、何とか聲を掛ける處だが翁は默つて此處を過ぎ、西の丘へ登ると、暮るゝにも急な此土地は明くるにも急で早や全く夜が明け放れたが、薄氣味の惡い霧は雨になりさうな空色を濁して木といふ木は今で死んだや

うにそよと動く葉もない。此處に暫くの間物思ひに沈んだ爺は、例の竹蝶を吹いて地藏の下に來た頃は自分ながら疲れ切つて居るのに氣が付いたので力なく花茣蓙の上に腰を下したが直ぐごろりと横になつた。

眼の覺めたのは彼是十一時近くであつた、日がじり／＼と顔を照らして頭の上では蟬が油を煮る樣に啼き出して居る。

「ほう／＼」と氣短かに二三度續けて怒鳴つても逃げない、起上つて石を拾ふと蟬は賢くも飛んで行つたので其の寢覺めの不機嫌な顔を一層六つかしくして後ろを見ると與茂爺が何か言ひ度さうに腰を屈め佐吾十の顔色を伺ふ樣に立つて居る。

「旦那眼え覺ましたけえの、あの黑牛が大變でごすよ」

「如何しただ」

「眼ら閉めて舌出しますだ」

「牛が舌出す？　其れが不思議けえ」

「はあ平常と違ひますだて」

「汝あ牛の係りだんべいに、舌出すも尻尾出すも俺が知つた事けえ」と遠くの蟬に、

「何んていふ八釜しいだ」と苦りきつて居る、いかさまにも只ならぬ機嫌と與茂爺は幾度も頭を下げて默つて立去つたが、霎時すると又戻つて首を縮めながら、

「旦那さあ」

「何んだよ、汝も何年ちふもの牛飼つてるだよ」

「いんにや其話ぢやごつせんて、あの……」

「何んだか知んねえが、今時分其んだ話面倒臭えだよ」

「ちよつくらで宜いだが」

「早く言へよ」

「新太とおかよの事だあに、家建てべいに木柄見て呉れせいよ」

「新太とおかよ？」と佐吾十は何か考へて、

「其んだ事聞きたく無えだ」とぷつと唾吐いて、鶏の羽を繫いだ鳥除の繩をぐつと引張ると、鳴板がから／＼と奧の方で響く。傍を見ると與茂作がもう居なくなつて居るので、何だか張合が無くなり向うを見ると、與茂作が大きな土瓶を提げてほく／＼行く姿が見える。霎時其の後影を見詰めて居たが、突然に大きな聲で、

「與茂作やあい」と呼んだ、呼ばれた與茂作は土瓶を木の根に置いて、神妙に再び其の頭と腰と足との調子を取つて前屈みにやつて來る。

「旦那呼ばれだけえの」と頭を突出して主人の顔色を窺ふと、佐吾十は俄かに慌てて、

「うむ呼んだがな、用いつても別に用でも無えだが、爾だ、あのう鶴公何にしてるだ」と横を向く。

「今の先刻まで秣あ切つて居たが、何處さ行つたか今見えねいだ」と與茂作が答へると、霎時默つて、

「汝あお福知んねえかな」

「いんにや、今朝つから、から見ねえやうだ、探ねて來べいか」と與茂作が言つても答がない、どんよりとした眼で地面の或一點を見詰めて居る其の顔色を、ちらりと見て與茂作は足音のせぬやうに此處を立去つた。

日が眩い程に照つて來る、蜩が次第に喧しくなる、與茂作は倉皇と逃げて行つて了ふ、滅多に晝寢をした事のない自分が、午前丈けを眠つて了つたので、其間何だか恁う馬鹿にされて居たやうな氣持がして、見るもの聞くもの悉くに當り散らしたいといつた風に腹の底から小焦躁つたくなつて、煙管を吸ふと火が消えて居る、が、直ぐに燧石を打たうともせず、其儘に煙管を銜へ直した。奧の方では元氣のいゝ女の聲で、

「姐子居たかと窓から見れば」と一人が唄ふと、

「親父あ横座で繩綯てるよう」

と一人が獨言する、白い手拭で頰冠りした後姿が、ぱくり〳〵と林檎を捥ぐ旅に搖れる木葉の隙から見ゆる

—沒意らねえ—

と舌打して爺は、其方を尻目に懸けて、反對の方を向くと、追駈ける樣に續いて唄ひ始める。

—色の黑い奴甘夫に持てばあ—といふと、

—鶏見るたび思ひ出すよう—といふ、彼是三十分許りも此鄙唄を聞くともなしに爺は何か沈思へて居ると突然横合の木間から、

「お福樣居ねえだよ—

と與茂作が聲を出した。

「あんだ?」と向直ると、

「お福樣目つからねえだ、不亂に尋ねだが」

と與茂作は小さくなつて居る

「誰が尋ねろと言つただ」といふ聲が稍張つて居る

—お福樣知んねえがつて聞かしやつたけえに—

—聞いただに聞いた、尋ねろと言つたで無えだ—

—はあ、わりいことしたかな—と與茂作は謝罪る、佐吾十は益々苦い顔して、

—聞つ無えと何んで尋ねるだ—

—はあ、思違えしただ、はあ宜く無え事しただ—と頻りに謝罪して居る中に佐吾十は何時の間にか默つて別な思ひに走つたので、雙方顔ばかり見合つて居たが、

—與茂作よ—といつた佐吾十の聲は劃然と優しくなつた。

—汝許に女娘あるだあな—

「あるだ」と與茂作は急激の變化に驚きながらも直ぐに答へた。

—ありや何處かさ嫁にやつたかなら」といふ調子は平素と違はぬ。

—いんにや、やられえ、が、其事だてなら、旦那、あの通りの御多福だで、若え男あ構つて異れせんし、本當によ、旦那、嫁の口一つ懸つた事無えだ、あゝいふ面に生れたのあ、わが身も沒意らねしな、親の身から見ても無情くてなんねえだ」と佐吾十の顔の雲行を見い〳〵、吻と息をついて、

—如何な處でも若え中に結緣けべえ思つてるだに、好きだ男引張つて來る手腕も無えだし—と零時言淀む。

—好きだ男つて、汝あ其んだに男持たせ度えかや—と、佐吾十の聲は餘程穩やかである。

—考えて見さつせい、若え時にや、男の欲しいもつたあ女娘で、女娘の欲しがるものあ若え衆だによ、男はそんでも辛抱するだかの、女子は爾は行かねえだ、婿ら欲い〳〵思つてでも、そら、口にや言へ無えだし、盛りが過ぎると氣が重くなつて、身體が大儀になるだ、女子に男持たせるのは車の心棒に油あ塗ると同一事たて、誰だか知んねえが能く言うたもんでな」

—其れも其んだが、汝あ只た一人の女娘を外さ與れてやつたら、汝あ淋しかんべいよ—

—どうで淋しいだ、年老れば段々淋しくなるだ、擧句にや墓さ入るだからの、墓は一番淋しい處で無えかの、其んで物あ諦め樣だで、淋しいものだと決めて了つて、其代りにや子供に寸時も早く面白え思させりや、死んでも後生が善いだ—

—其うだなう—と佐吾十は何か考へて居る。

「其れを御前樣、自分あ淋しいからつて色氣付いた女娘を無理に引張つて置いた日にや、女娘の方で男作えて親置いてとつ走るだ、其れよか早く男當てがつてやりや、こら程大丈夫な事あ無えだてなう、汝にした處が、汝の御蔭で、此村にや親不孝が一人も出た例が無えだ、あんでもはあ蠶の業だ樣に、くつ着いたら夫婦にして了ふと、そらいゝ子が出來て種が取れるだよ—

—發明な事言うたなあ—と佐吾十は初めて笑つ

た、與茂は猶饒舌り續ける。

「汝あもう忘れたんべいよ、が、俺あがでは、女房があるでの、こんでも二人で昔の話などする時あるで、若え時の事忘れねえだ、あんではあ其時の事考えると、今女娘の事を何んだ彼だと吐言べい言はれねえ樣だ氣がするで、ハヽヽ」と笑つたが、對手が再び曇つた顏になつたのを見て、

「どうら、黑牛もう一遍見て來るべい」と逃げる樣に小足に急いで去つた。殘された佐吾十は再び口を尖らして伏目になつたが、不圖眼を舉げると、丁度一間許り前の木の下にお福が默つて立つて居たのを見て、自分に薄暗い事でもあるかの如く非常な驚き樣で、つと立上り、

「汝あ何んで人の話を立聞してるだ」と腹立たしく言つた。

四五日の間、佐吾十は此那風に日を暮らした。近頃は滅多に彼の傍に近寄るものもない、畠のものは皆な黑牛が死んだから機嫌が惡いのだというて居る、で、其の弔詞を言ふものがあると、爺は苦りきつた顏で、

「生物だあにや死ぬ時もあるべいや」と素氣なく言ふ。

或日爺は氣分が惡いというて一日朝から室に引籠つて居た、此んな時にはいつもお福を呼び通しに呼ぶのだが、此日はお福をも室の中へ入れぬ事にして、食事の時だけ、茫然と出ては飯を白湯で掻き込み、其れが濟むと直ぐに引込んで物思ひに沈んで居た。

夕飯時になると、爺は何となく氣持よさそうに庭を逍遙して居たが聽て與茂爺を居間に呼んで長い間しんめりと話をした。

其翌日此村中で肝を潰す樣な話が與茂爺の口から他の口々へと傳へられた、其れは行火のお福と鶴吉の祝言の事で、與茂爺は飛んで廻つて村中の人を集め、早朝から家普請に取掛つた、一軒は新太とおかよの家で、一軒は鶴吉夫婦の家。

地均しをする、石を据ゑる、材木を組む、壁を塗る、百姓は大工の業にも慣れたもので二三日の間に家が出來上つた、壁が未だ乾かないといふに性急の佐吾十は、其れまで待つて居られぬといふので、急に建具、疊や大騷ぎをやつて漸くの事に此に引移るまでになつた。

庭の柿の木の下に荷車が二輛、積に酒樽の臺をした一輛は、戸棚、手桶、大盥小盥、臺所道具を積んで、今出る許りにして居る、一同は丁度四五人で、ごや〳〵言ひながら、裏側から持ち出す黑塗の箪笥、同じ色の長持、其れを積まうとし騷ぎ喋いで居る、背後から、指圖がましく聲掛けて居るのもある。

「ほら出たぞ〳〵」

「あんてい重ていだ、どつさり這入つてるべい」

「どつさり這入つてるべい、そらどつこい、こらだ」

「うんにや、もう寸尺左さ推せやい」

「右さ引けやい」

「上が明いてるだ」

「行燈を乘つけるべいよ」と一人がいへば、

「針箱がある筈だ」と一人がうろ〳〵して居る。

「もう些と乘つけでもいゝによ」と梶へ廻つた男が、一寸上げて見て言ふ。

「もう何んにも無えだ」

「行火あ乘つけるべいかよ」と誰やらがいふと、

「はゝゝ、違えねえだ」と一同が笑ひ出して柿の木の方を見ると、佐吾十が其處に莞爾ともせずに立つて居たので、申合した樣に顏を見合せて口を噤んで了つた。

「旦那、御目出度うごす」と大勢の中から與茂爺が鉢卷を脫つて前へ出ると、

「皆な御苦労だの」と佐吾十は人に顔を見られるのが蒼蠅いといつたやうに顔を反向ける。

「あんでもはあ、急なこんだで、旦那、村の者もにあ、吃驚しましただ、旦那、淋しかんべいに、よくはあ大事の行火手放したつての、皆なで言つてますではあ」と佐吾十の傍に進み寄る。

「村の者あ稱言つてだかな」

「へえ、皆なで喜んでな、恁那目出度え事あ無えだに」

「鶴公何んと言つてだよ」と佐吾十は妙に言葉尻を力なく言ふと、與茂は足の先で石を掻き寄せながら、

「何んて言うてるつて御前様、御前様だあ様に有難えて言つてるだあよ」

「稱かよ」と、ふいと畠の方へ行つて了ふ。——

途端に鶴吉とお福の二人が高笑しながら来るのに端と出逢つたので、爺は一方ならず慌てて立止まつた。

二人とも引越しの埃によごれて、鶴吉は襯衣一枚に半股引、お福はかちんの上の襞を着て眞白な手拭で髪を包んで居るが、色の白い丈けに耳際から襟元まで今更のやうに美しく見える。

「汝あはあ行くだあかな」と自分の前に御辭儀をする二人を、熟々と見下して爺は言つた。

「はあいろ／＼御世話様になりましたで、あんともはあ」と鶴吉は眼をうるませながら畏まると、

「爺さん、そんでは御暇するだよ」とお福は未だに抑える様な調子で、一寸會釋した。爺は態とらしく快活に笑つて、

「そんだら仲よく暮らせよう鶴公、お福可愛がつてやつてくれろよ」と些時默つて、

「お福、汝あ嬉しかんべいなう」と言つて、俯向きながら互に顔を見合せては恥かしさうに笑つて居る二人の上から直ぐ眼を反らし、

「うむ、嬉しかんべい」と再び繰返して、

「そんだらはあ行けよ」と瞳も動かさず何かに見惚れてるやうな目をしながら惘乎といふ。

「そんだら旦那」

「爺さん……」と二人は辭儀をして庭の方へ廻つた、返事もせずに爺は其後影を惘と見送つて居たが急に、

「お福よう」と呼止めた。

「あいよ」と氣輕に答へて振向くと、爺は何やら口を動かし度さうにして、俄かに思ひ返したといふ風に、

「いゝよ、もう行けよう」と手で推しやる様にして直ぐと後ろ向いて了つた。

が、直ぐと又、足を返して二人の出た方へ来て見ると、庭に影もない、無恰好によき／＼と立つて居る楢の大木二三本、其下の土に日當りが悪いので薄い苔を見るやうにじみ／＼と濕つて居る、其土に落葉やら、石ころやら、木屑やら藁きれ、菰きれ、其那ものが他愛なく散らかつて、今までの賑やかさに引きかへて大風の後の様にがらりと淋しく、夕暮近い、何處かの隅で、思ひ出したやうに鳴き合はす蟲の聲々が際立つて聞ゆる。

爺は茫然と薄闇の空を見詰めながら、がつかりと縁に腰を落し、今まで二人の箪笥や小道具を置いてあつた[illegible]を見廻して又茫然と、「嬉しかんべいの」といつて獨り淋しさうに口を結んだ。

其翌日から佐吾十爺の姿が畠に見えない、朝夕の竹箒も聞えない、[illegible]林檎にものいふ人もなく、地福の下でのべつに人を呼んでる[illegible]もなくなつた。其代りに畠の隅々で[illegible]に唄つたり笑つたりする[illegible]が陽気に起つた、が、其れが底に力のないといつた

様な爽やかさで、畠の中は丁度秋の空の晴れ晴れとした中に心細い氣の冷えが含んでゐる様に、一體に張合の抜けたやうな淋しさが籠つて來た。

一日二日三日、四五日といふもの、佐吾十は一寸時も居間の外へ出た事がない。すると七日目の夜の事である。

牛番の與茂作が一廻り畠を見廻つて家に入つたのは彼是十二時頃、空は一點の曇もなく胸の底に冷たく滲入るやうな星月夜で、其れがそよと木の葉を動かす風もなき恐ろしい沈默の此の林檎園を謎のやうに濕つぽく照らして居る。

「あんと云ふ靜かな晩だべいよ」と與茂作は獨りで言つて戸を閉めた。

不意の物音に眼をさました與茂作は、寝床を跳起きると、外は何時の間にか洪水の様な風の音。

「やあ大風が來たな」と窓から空を窺いて見ると只一面の灰色、朧の中に萬樹の推し合ひ揉み合ふ影が、丁度七月の眞晝に動く夕立の雲の如く眞黒に上下に猛り狂ふ。

物に慣れた爺は直ぐと腰に鉈、六尺棒を取つて外に出た。

「火の用心〳〵、大風が出るだに用心さつしやい」と皺嗄れた聲で村中を呼はつて、眞直に畠の方へ駈け出した。

山が少く高い處といつては遠くに起伏する一帶の丘陵ばかりで、西は日本海、東は八甲田の麓まで十何里といふ間は、見る限りなき平原を、死の色といつた様な灰色の雲が瞬く間に一切れの隙もなく頭を壓へ付ける様に天を塞いで了ふと、ぶうと底に力のない様に生暖かい風が吹き出す。

「やあ風が變つたぞ、そうら變つたぞ」と與茂作は狂氣の如く叫んで、倒れまいと腰を屈めた。

「誰だあよ、與茂作爺けえ」と息を弾ませながら薄暗から聲をかけるものがある。

「おう鶴公けえ、酷あ事になつたぞ」と立止まる、鶴公は漸と追着いたが二人は何も言はずに向方を見た。

夜明には間がない。風は今出盛りである。ごうつといふ聲と共に何處やらで木の裂ける音、棚の落ちる音がすると、ひた推しに一方に推し伏せられた見る限りの林檎樹が黄色い斑を帶びた百千の猛獸の如く其の枝葉の鬣を振ち上げられて、反對の方に逆さに振ち戻さるゝ、途端に村の方で、竹螺の音、男女の叫びが起つた。

「爺さんは如何しただかな」と鶴吉が思ひ出した様にいふと、

「今に來るべいか、はあ、あんて逃え事た」と與茂作は刻一刻に揉まれ行く畠物の光景を手の付けやうもないといつた様に眺めたが、物に刺された様に飛び上つた。今迄向ふの野中の大沼がどぶり〳〵と波打つて居たが、其れがどしいんと云ふ堤の切れ出した様な音がすると、奥の地福林檎の邊りで何かばり〳〵と壞れたので。

二人は一生懸命に駈け出した。

夜が明けた、天地は只明るい、物淒く明るい、絶望の色の下に戰つて居る生物の奮闘の光景が眼前に見られる。其れは此土地で悪魔よりも恐ろしいといつて居る南の生暖かい風で、之れに吹かれると口も喉も埃に乾くやう、顔が燃えるやうに逆上せる、畠物は堪つたものでない、其れが又、枝摺れ葉摺れの爲めに熱氣を起して葉と云ふ葉は焼かれた様に爛れて赤黒く錆びて了ふ。恁ういふ日に限つて一滴の雨も持たないので。

二人が家の裏口まで來た時に、お福も駈けつけた、家の奴共は無論起きて居た、村の者は手ん手に、棒、熊手、梯子、などを持つて走せ集まつた。

風は益々吹きつのる、木葉、木屑、板片、家根の柾がばら〳〵と勢よく飛び散る。

「家根さ上れやい、家根さ」と與茂が叫ぶと、氣の利いた若者四五人はた〳〵と家根に上つて吹き落されまいと匍匐ひながら何かへ犇と攫つた。

「梯子を立てろ」と再び與茂が叫んだ。

庭の大きな柿の木二本、其れに二本の梯子を立てて、風の向きに枝を支へて犇々と繩で縛つた、其れが吹き寄する度毎に梯子の足がじりつじりつと土を噛んで竹の如く撓へられる、一同は只ならぬ顏色に其れを見て居る。

と、家の中から、

「爺さま居ねえだ、爺さまが」とお福が叫ぶ聲がする。何といふ事なしに與茂作と鶴吉は納戸から駈け上つた　佐吾十の居間へ入つて見ると縁側の雨戸が一枚明けてあるので、其處から吹き入る風は蚊帳の裾を天井まで高く吹き上げて、主人のなき蒲團と枕とを冷やかに見せる。

「旦那やあい」

「爺さまやあい」と叫んだが、其聲が直ぐと風の爲めに室の中へ吹き返されて、其れが主人の胸に只事でないといつたやうな或る恐怖を與へた。

思ひついた事があるので、三人は地福林檎の下へ駈け付けた。二十餘年の風雨と戰つて今にも其の若々しい色を誇つて居た大林檎は無殘にも其の眞中の幹の岐れ目から眞直に根元まで裂けて、美しい木肌を露はし、巨浪の如く疊まつた枝葉を兩方に抛け出したまゝ、例令ば獅子の屍の大寂寞を以て猛り吼ゆる嵐の吹き荒るままに任せて居る、其の一方の枝に腰掛けて、佐吾十は殆んど魅入られたかの如く、裂目の木地を見詰めて居た。

「旦那樣よ」と與茂作が言つても答がない。

「爺さま」とお福と鶴吉が代り〴〵に呼んでも身動もせぬ。

二十日許り前の佐吾十とは打つて變つて、頰が痞けて口元淋しく、がつかりと肉の落ちた横顏の額際の一段と稜立つて見える處に鬢からかけて疎らに搦んだ白髮は、又となき衰弱を現はして居る。

「爺さま」と再びお福は呼びかけて、其の膝の上に手を置き、覗くやうにして下から顏を見上げた、と、佐吾十は突然其手を確乎と握つて一瞬きもせずお福の顏を見下し、

「お福か」と夢の樣に小さな聲で言つたが、はつと氣が付いた樣に、

「お福か」と再び大きな聲に呼び直し、ずつとお福の身體を膝の上に抱き寄せて、

「お福よう、汝あもう歸る事ならねえぞ、爺さまはな、爺さまはな」と言つて再び石の如く默つて了つた。

（明治三十九年九月）

著作年表

俳句ノ部

滑稽俳句集	單行	明治三十四年八月六日
俳句小史	同	明治三十五年三月十日
俳句新註	同	明治三十五年六月十日
俳句修辭法	同	明治三十五年九月八日
芭蕉論稿	同	明治三十六年六月二十五日
俳諧紅緑子	同	明治三十七年三月一日
蕪村俳句評釋	同	明治三十七年三月九日
俳句作法	同	明治三十八年十二月十八日
古句新註	同	明治三十九年三月二十九日
紅緑日記	同	明治四十一年二月二十五日

短篇小說ノ部

行火	中央公論	明治三十九年九月
鴨	同	明治三十九年十月
榾（あん火、地藏子、犬と人、鴨、夢、人死、謎、）	單行	明治四十一年四月二十一日
十七の頃	中央公論	明治四十二年
大	文章世界	明治四十三年三月
紀念碑	太陽	明治四十三年五月
死神	同	明治四十四年九月
美男重衛	講談倶樂部	昭和四年十月
流水の如く	單行	昭和四年
國士物語	キング	同
殺人鬼の公判	講談倶樂部	昭和五年十月

長篇小說ノ部

谷底	時事新報（單行）	明治四十五年
嵐	同（同）	大正二年
礎	關西日報（同）	同
光の巷	讀賣新聞（同）	同
鳩の家	同（同）	大正三年
虎公	同（同）	大正四年
母と子	大阪朝日（同）	同
裾野	大阪朝日（同）	大正五年
日の出る國	讀賣新聞（同）	大正六年
櫻の家	時事新報（同）	同
孔雀草	大阪朝日（同）	同
黄金	同（同）	大正八年
乳房	報知新聞（同）	同
微笑	大阪時事（同）	大正九年
結婚前後	同（同）	同
何處まで	東京每夕（同）	大正十年
路二つ	時事新報（同）	同
美しき人々	大阪時事（同）	同
ワン〳〵物語	單行	同
裸の人	報知新聞（單行）	大正十一年
太甚大悲	同（同）	同
荊の冠	讀賣新聞（同）	同
大盜傳	東京每夕（同）	同
鈴が鳴る	福岡日日	同
輝く雲		同
旅役者の手記		同
美人傳	東京每夕	大正十三年

樹々の春　讀賣新聞　大正十三年
春を追ふて　淑女畫報（『明治大正文學全集』第十九卷）　同
禁斷の果　東京毎夕　同
樂園の扉　講談倶樂部（單行）　大正十四年
幸福物語　婦人倶樂部（同）　同
第一歩　キング（同）　大正十五年
勘八物語　面白倶樂部　同
東西南北の人　講談倶樂部　同
愛の巡禮　婦人倶樂部（『現代長篇全集』第十二卷）　同
町の人々　キング（單行）　昭和二年
あゝ玉杯に花うけて　少年倶樂部（同）　同
半人半獸　讀賣新聞（『現代長篇全集』第十二卷）　同
源平辻講釋　現代　昭和三年
紅顔美談　少年倶樂部（單行）　同
毬の行方　少女倶樂部（同）　同
富士に題す　講談倶樂部（同）　同
麗人　大阪毎日 東京日日（同）　昭和四年
朝の雲雀　少女倶樂部（同）　同
少年讃歌　少年倶樂部（同）　同
花の十字路　婦人世界（同）　昭和五年
一直線　少年倶樂部（單行）　同
夾竹桃の花咲けば　少女倶樂部（同）　同
野に叫ぶもの　大阪毎日 東京日日（同）　昭和六年

脚本ノ部

俠艶録　本郷座上演　明治三十九年十一月
新ハムレット　同　明治四十年
花の夢　同　同
雲の響　同　同
東風物語　東京座上演　明治四十一年一月
春の歌　同　明治四十一年二月
潮　同　明治四十一年十月
癡馬　中央公論（單行『紅緑脚本集』）　明治四十二年
陽炎　本郷座上演
人の親　同
妻　同
姉と妹　帝國劇場上演（單行『紅緑[illegible]』）　明治四十二年十二月
雪の夜　同　明治四十[illegible]年一月
日の出　同（單行『紅緑[illegible]』）　明治四十[illegible]年二月
あきらめ　同
母　同
光の巷　本郷座上演（單行）　大正三年
十番地
小説家
御五様　帝國劇場上演
女嫌　同
虎公　日本座上演　大正五年四月
母と子　同　大正五年五月
櫻野　同　大正四年十月
孔雀草　同　大正六年十月
娘五人　帝國劇場上演　大正六年
良人　同　同
落日　新富座上演　同
故郷の人　大正九年
煤煙　帝國劇場上演　大正十年
キリスト　本郷座上演（單行）　昭和三年

感想隨筆ノ部

從軍記者、決死隊　單行　明治三十四年
東西婦人觀　婦人倶樂部（單行）　昭和二年

昭和六年七月十三日印刷
昭和六年七月十八日發行

現代日本文學全集　第五十五篇



編纂者　山本三生

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番
一一二二番
一一一三番
一一一四番

株式會社秀英舍印刷

改造社